

一般国道116号
和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

大武遺跡Ⅱ

(古代～縄文時代編)

2014

新潟県教育委員会
財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道116号

和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

だい ぶ
大 武 遺 跡 Ⅱ

(古代～縄文時代編)

2 0 1 4

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

新潟県教育委員会は、道路建設などの道路事業に伴う発掘調査を行っており、その成果を発掘調査報告書として公表してまいりました。

本書は国道116号和島バイパス建設に伴い実施した、長岡市（旧和島村）大武遺跡の発掘調査報告書です。

国道116号は柏崎市を起点とし、新潟市に至る中・下越地域の幹線道路で、社会・経済の発展に大きな役割を果たすとともに、沿線市町村の生活道路として重要な役割を果たしています。しかし、国道116号のうち長岡市島崎地区では、道路幅員が狭く人家連担部を通過するため、交通事故や渋滞・騒音等の交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていました。和島バイパスはこのような問題を解決し、地域の幹線道路としての役割を強化するとともに、現道を地域の生活道路としての機能を回復させるために計画された事業で、現在は全線が開通し、その効果を上げています。

大武遺跡では、縄文時代から安土桃山時代まで断続的に営まれた遺跡で、谷の中から土器・石器・木製品が多数発見され、往時の人々の暮らしぶりを知るうえで貴重な資料が多く発見されました。

今回の報告書が、地域の歴史を解明する資料として広く活用されるとともに、県民の方々の埋蔵文化財に対する理解と知識を深める契機となれば幸いです。

最後に、この調査に当たっては旧和島村教育委員会より多大なるご協力とご援助をいただきました。また、北陸地方整備局長岡国道事務所には、発掘調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

2014年3月

新潟県教育委員会

教育長 高井盛雄

例 言

- 1 本報告書は、新潟県長岡市(旧和島村)島崎字大武1910番地ほかに所在する大武遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道116号和島バイパスの建設に伴い、国土交通省から新潟県教育委員会(以下、県教委)が受託したもので、発掘調査は県教委が調査主体となり、財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団(以下、埋文事業団)に調査を依頼し、1994～1997年度に実施した。
- 3 埋文事業団は、1995～1997年度の掘削作業などを、株式会社吉田建設に委託し、発掘調査を行った。
- 4 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、県教委が埋文事業団に委託し、主に2011・2012年度に実施した。
- 5 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料は、一括して県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。
- 6 遺物の注記は、「大ブ」とし、調査年度・出土地点・層位などを続けて記したものと、遺物台帳の番号を記したものがあある。
- 7 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 8 遺物番号は遺物の種類ごとに通し番号とした。本文及び挿図・観察表・図面図版・写真図版の番号はすべて一致している。
- 9 本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者および発行年(西暦)を文中に[]で示し、巻末に一括して掲載した。ただし、第VI章については各分折の文末に掲載した。
- 10 各種図版作成・編集は、有限会社不二出版に委託した。
- 11 自然科学分野に関わる各種分析は以下の個人・機関に委託した。
樹種同定…株式会社古環境研究所、赤色顔料の材質分析…株式会社バレオ・ラボ(竹原弘顕)、漆組および藍胎漆器の塗膜分析…株式会社バレオ・ラボ(藤根久・米田恭子)、漆組の構造・材質…水嶋正春(前国立歴史民俗博物館)、漆組の年代測定…今村肇雄(国立歴史民俗博物館(2000年当時))・坂本 稔(国立歴史民俗博物館)、琥珀原石の産地同定分析…植田直見(財団法人元興寺文化財研究所)
- 12 「第VI章 自然科学分析」を除く本書の執筆は、春日真実(埋文事業団 課長代理)・坂上有紀(同 嘱託員)・加藤学(同 班長)・渡邊裕之(現 新潟県教育庁文化行政課)がこれにあたり、編集は春日・坂上が担当した。執筆分組は以下のとおりである。
第1章～第4章、第5章1・2A～C・E～G、第Ⅷ章1・4…春日、第5章3B～E・4、第Ⅷ章2・3…坂上、第5章3A…加藤、第5章2D・E、4(372)…渡邊
- 13 縄文時代前期の土器の年代などについて小熊博史(長岡市立科学博物館)、斎藤 準(株式会社帆苺組)、寺崎裕助(新潟県弥生の丘展示館)、谷藤保彦(公益財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団)、弥生時代中期の土器の年代などについて笹澤正史(株式会社吉田建設見附支店)、阿部泰之(阿賀町教育委員会)に御指導を得て報告書に反映させた。縄文時代前期土器の施文原体については斎藤 準の同定結果を記載した。また、XV層を除く石器については、高橋保雄(調査課課長代理(当時))、弥生時代後期～古墳時代前期土器の年代などについては滝澤規朗(文化庁埋蔵文化財係 専門調査員)の指導を受けた。ただし、聞き間違いや記載ミス・誤認などによる間違いも考えられ、その責は春日・坂上にある。
- 14 調査成果の一部は現地説明会資料[1995・1997]、埋蔵文化財事業団 年報平成6～9年[1995～1998]、埋文にいがた第18・19・76・80号[1997・2011・2012]、遺跡発掘調査報告書'98[1998]、第25回新潟県考古学会研究発表会「2013」などで公表しているが、本報告をもって正式な報告とする。
- 15 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くの御教示・御協力を受けた。ここに記して厚く御礼申し上げる。(敬称略 五十音順)
出雲崎町教育委員会 小林巖夫 駒形敬朗 高濱信行 田中 靖 新潟県立歴史博物館 山田昌久
寺泊町教育委員会・与板町教育委員会(現長岡市教育委員会)

目 次

第I章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	2
A 試掘確認調査	2
B 本発掘調査範囲と工法変更の経緯	2
C 本発掘調査の経過	4
D 整理作業	6
第II章 遺跡の位置と環境	7
1 地理的環境	7
2 周辺の遺跡	7
3 遺跡周辺の土地更正図	12
第III章 調査の概要	13
1 グリッドの設定	13
2 地区名	14
3 基本層序	14
第IV章 遺 構	17
1 概 要	17
2 古代（平安時代）	17
3 弥生時代後期から古墳時代	17
4 縄文時代	19
第V章 遺 物	20
1 概 要	20
2 土器・土製品	20
A 土器の概要	20
B 縄文時代前期	20
C 縄文時代中期～後期初頭	26
D 縄文時代後期中葉～晩期中葉	27
E 弥生時代中期	31
F 弥生時代後期～古墳時代	35
G 古 代	41
H 追加土器	41
I 土 製 品	41

3	石器・石製品	42
A	XV層	42
B	XIV層	50
C	XIII～XI層	51
D	IX層より上層	58
E	玉作関連	65
4	木製品・漆製品	71
第VI章 自然科学分析		81
1	樹種同定	81
2	赤色顔料の材質分析	93
3	漆紐および藍胎漆器の塗膜分析	96
4	漆紐について	99
5	漆紐の実年代について	100
6	琥珀原石の産地同定分析	102
第VII章 ま と め		105
1	土器・陶磁器	105
A	層序と出土土器・陶磁器	105
B	主要土器群と既存の編年案の対応関係	117
2	石器・石製品	121
3	木製品・漆製品	124
4	遺跡の動向	126
〈要 約〉		130
〈引用・参考文献〉		131
〈観 察 表〉		136
	土器・陶磁器	136
	石器・石製品	159
	木製品・漆製品	168

挿 図 目 次

第 1 図	和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡	1	第 3 図	工法変更後の法線図	4
第 2 図	試掘確認調査・予備調査のトレンチと 本発掘調査必要範囲の変遷	3	第 4 図	各年度の調査範囲	4
			第 5 図	遺跡の位置 (1)	8
			第 6 図	遺跡の位置 (2)	9

第 7 図	周辺の遺跡	11	第 35 図	EPMA 分析スペクトル	95
第 8 図	明治 26 年の土地更正図と大武遺跡の調査区	12	第 36 図	X 線回折分析結果	95
			第 37 図	赤色顔料の材質分析	96
第 9 図	グリッドの設定	13	第 38 図	漆塗試料と塗膜構造と反射電子像、 塗膜の赤外吸収スペクトル図	98
第 10 図	地区の名称	13	第 39 図	漆紐の構造	100
第 11 図	縄文時代前期前葉の土器分類	21	第 40 図	暦年較正年代グラフ	101
第 12 図	41・72 の文様	23	第 41 図	琥珀分析試料	102
第 13 図	縄文時代後期～晩期の土器分類	28	第 42 図	赤外吸収スペクトル	103
第 14 図	弥生時代中期中葉の土器分類	32	第 43 図	出土琥珀および標準琥珀の TGA 曲線	103
第 15 図	弥生時代後期～古墳時代の土器分類	36	第 44 図	出土琥珀および標準琥珀の DTA 曲線	103
第 16 図	古墳時代の土器分類	37	第 45 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (1)	106
第 17 図	XV 層石器組成	43	第 46 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (2)	107
第 18 図	磨石類の分類	48	第 47 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (3)	108
第 19 図	床状耳飾編年模式図	49	第 48 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (4)	110
第 20 図	XIII～XI 層石器組成	51	第 49 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (5)	111
第 21 図	石鏃の分類	53	第 50 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (6)	112
第 22 図	石鏃未成品の分類	53	第 51 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (7)	114
第 23 図	石鏃の分類	54	第 52 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (8)	115
第 24 図	石核の分類	55	第 53 図	大武遺跡出土土器・陶磁器 (9)	116
第 25 図	磨製石斧の分類	56	第 54 図	大武遺跡 XV 層出土土器の諸属性	118
第 26 図	磨製石斧未成品の分類	56	第 55 図	管玉完成品のサイズ	121
第 27 図	IX 層より上層の石器組成	59	第 56 図	管玉工程品のサイズ	122
第 28 図	石器実測図	61	第 57 図	「一木造り多方向穿孔型」の把を装着した 鉄剣	124
第 29 図	大武遺跡出土管玉の製作工程	66	第 58 図	大武遺跡出土木製品	125
第 30 図	大武遺跡出土勾玉の製作工程	69	第 59 図	A～G 区の変遷 (1)	128
第 31 図	時代・時期における樹種構成	88	第 60 図	A～G 区の変遷 (2)	129
第 32 図	木製品の顕微鏡写真 (1)	91			
第 33 図	木製品の顕微鏡写真 (2)	92			
第 34 図	木製品の顕微鏡写真 (3)	93			

表 目 次

第 1 表	和島バイパス建設に伴い調査された主な遺跡	1	第 13 表	23 層石器・石製品集計	61
第 2 表	周辺の主な遺跡	10	第 14 表	緑色凝灰岩製管玉製作資料 工程別集計	65
第 3 表	縄文時代前期前葉の土器分類	20	第 15 表	工程別のサイズ・施溝分割の比率	67
第 4 表	縄文時代後期中葉～晩期中葉の土器分類	27	第 16 表	ヒスイ勾玉製作資料 工程別集計	68
第 5 表	弥生土器の分類	32	第 17 表	時代・時期における樹種構成	88
第 6 表	F 層・灰色粘土層出土土器の器種構成比率	33	第 18 表	器種別の選材傾向	90
第 7 表	弥生時代後期～古墳時代の土器分類	37	第 19 表	赤色顔料の材質分析試料	94
第 8 表	XV 層石器・石製品集計	44	第 20 表	簡易定量分析結果	94
第 9 表	XV 層磨石類の分類・石材別集計	47	第 21 表	塗膜分析試料	96
第 10 表	XIII～XI 層・XIIIe 層石器・石製品集計	52	第 22 表	生漆の赤外吸収位置とその強度	97
第 11 表	不定形石器の分類	54	第 23 表	各試料の X 線分析結果	98
第 12 表	IX 層より上層の石器・石製品集計	60	第 24 表	大武遺跡 XV 層出土土器の諸属性	119
			第 25 表	編年対応表	120
			第 26 表	管玉完成品のサイズ比較	121
			第 27 表	大武遺跡の動向	127

図版目次

【図面図版】

- 図版 1 Vb 層上面全体図
 図版 2 A～G 区 Vb 層上面平面図
 図版 3 SD50 木製品等出土状況図
 図版 4 SD46・47・51・83 木製品等出土状況図
 図版 5 A～G 区 X・XIIIa 層上面コンタ図
 図版 6 G 区灰色粘土層 土器出土状況図
 図版 7 XIV 層上面全体図
 図版 8 XVI 層上面全体図
 図版 9 A～G 区 XVI 層上面平面図
 図版 10 断面図(1)
 図版 11 断面図(2)
 図版 12 古代・弥生時代後期～古墳時代の遺構(1)
 図版 13 弥生時代後期～古墳時代の遺構(2)
 図版 14 弥生時代後期～古墳時代の遺構(3)
 図版 15 弥生時代後期～古墳時代の遺構(4)
 図版 16 弥生時代後期～古墳時代の遺構(5)
 図版 17 弥生時代後期～古墳時代の遺構(6)・
 縄文時代の遺構
 図版 18 土器(1) XV 層(1)
 図版 19 土器(2) XV 層(2)
 図版 20 土器(3) XV 層(3)
 図版 21 土器(4) XV 層(4)
 図版 22 土器(5) XV 層(5)
 図版 23 土器(6) XV 層(6)
 図版 24 土器(7) XV 層(7)
 図版 25 土器(8) XV 層(8)
 図版 26 土器(9) XV 層(9)
 図版 27 土器(10) XV 層(10)
 図版 28 土器(11) XV 層(11)
 図版 29 土器(12) XV 層(12)
 図版 30 土器(13) XV 層(13)
 図版 31 土器(14) XV 層(14)
 図版 32 土器(15) XV 層(15)
 図版 33 土器(16) XV 層(16)
 図版 34 土器(17) XV 層(17)
 図版 35 土器(18) XV 層(18)
 図版 36 土器(19) XV 層(19)
 図版 37 土器(20) XV 層(20)
 図版 38 土器(21) XIIIe 層
 図版 39 土器(22) XIIIb 層、XIIIa 層(1)
 図版 40 土器(23) XIIIa 層(2)、XIIIb 層(1)
 図版 41 土器(24) XIIb 層(2)
 図版 42 土器(25) XIIb 層(3)
 図版 43 土器(26) XIIa 層、その他の縄文時代後期
 ～晩期の土器
 図版 44 土器(27) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(1)

- 土器(28) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(2)
 図版 46 土器(29) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(3)
 図版 47 土器(30) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(4)
 図版 48 土器(31) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(5)
 図版 49 土器(32) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(6)
 図版 50 土器(33) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(7)
 図版 51 土器(34) D 区 F 層・G 区灰色粘土層(8)
 図版 52 土器(35) その他の弥生時代中期の土器
 図版 53 土器(36) SD50・51・83-3 層(1)
 図版 54 土器(37) SD50・51・83-3 層(2)
 図版 55 土器(38) SD50・51・83-3 層(3)
 図版 56 土器(39) SD50・51・83-3 層(4)
 図版 57 土器(40) SD50・51・83-3 層(5)、23 層(1)
 図版 58 土器(41) 23 層(2)
 図版 59 土器(42) 23 層(3)
 図版 60 土器(43) 23 層(4)
 図版 61 土器(44) 23 層(5)、SD50・51・83-1 層(1)
 図版 62 土器(45) SD50・51・83-1 層(2)、SD47
 図版 63 土器(46) SD46、SK70、SK85
 図版 64 土器(47) SD33、SK40、SK55
 図版 65 土器(48) SK95、21 層、20 層、VIc 層
 図版 66 土器(49) SX88
 図版 67 土器(50) その他の土坑、⑥層、VIIa・b 層、
 VIb 層・B 層(1)
 図版 68 土器(51) VIb 層・B 層(2)、その他の弥生
 時代後期～古墳時代の土器、古代の土器
 図版 69 土器(52) 追加土器(1)
 図版 70 土器(53) 追加土器(2)
 図版 71 土器(54) 追加土器(3)
 図版 72 石器・石製品(1) XV 層(1)
 図版 73 石器・石製品(2) XV 層(2)
 図版 74 石器・石製品(3) XV 層(3)
 図版 75 石器・石製品(4) XV 層(4)
 図版 76 石器・石製品(5) XV 層(5)
 図版 77 石器・石製品(6) XV 層(6)
 図版 78 石器・石製品(7) XV 層(7)
 図版 79 石器・石製品(8) XV 層(8)
 図版 80 石器・石製品(9) XV 層(9)
 図版 81 石器・石製品(10) XV 層(10)
 図版 82 石器・石製品(11) XV 層(11)
 図版 83 石器・石製品(12) XV 層(12)
 図版 84 石器・石製品(13) XV 層(13)
 図版 85 石器・石製品(14) XV 層(14)
 図版 86 石器・石製品(15) XV 層(15)
 図版 87 石器・石製品(16) XV 層(16)・XVa 層
 図版 88 石器・石製品(17) XIV 層
 図版 89 石器・石製品(18) XIII～XI 層(1)

図版 90 石器・石製品(19) XIII～XI層(2)
図版 91 石器・石製品(20) XIII～XI層(3)
図版 92 石器・石製品(21) XIII～XI層(4)・
IX層より上層(1)
図版 93 石器・石製品(22) IX層より上層(2)
図版 94 石器・石製品(23) IX層より上層(3)
図版 95 石器・石製品(24) IX層より上層(4)
図版 96 石器・石製品(25) IX層より上層(5)
図版 97 石器・石製品(26) IX層より上層(6)
図版 98 石器・石製品(27) IX層より上層(7)
図版 99 石器・石製品(28) IX層より上層(8)
図版 100 石器・石製品(29) IX層より上層(9)
図版 101 石器・石製品(30) IX層より上層(10)
図版 102 石器・石製品(31) IX層より上層(11)
図版 103 石器・石製品(32) IX層より上層(12)
図版 104 石器・石製品(33) 玉作関連(1)
図版 105 石器・石製品(34) 玉作関連(2)
図版 106 石器・石製品(35) 玉作関連(3)
図版 107 石器・石製品(36) 玉作関連(4)
図版 108 石器・石製品(37) 玉作関連(5)
図版 109 石器・石製品(38) 玉作関連(6)・玉類
図版 110 木製品(1) SK96・SE89・SK49・SK55・
SD33
図版 111 木製品(2) SD33・SD46
図版 112 木製品(3) SD46・SD47
図版 113 木製品(4) SD47
図版 114 木製品(5) SD47
図版 115 木製品(6) SD47
図版 116 木製品(7) SD47・SD48・SD50
図版 117 木製品(8) SD50
図版 118 木製品(9) SD50
図版 119 木製品(10) SD50
図版 120 木製品(11) SD50
図版 121 木製品(12) SD50
図版 122 木製品(13) SD50・SD51
図版 123 木製品(14) SD51・SD83
図版 124 木製品(15) SD83
図版 125 木製品(16) SD83・SK95
図版 126 木製品(17) SK95・SX87・SX88
図版 127 木製品(18) SX88
図版 128 木製品(19) SX88、XV～XII層
図版 129 木製品(20) XII～XI層
図版 130 木製品(21) IX層・灰色粘土層
図版 131 木製品(22) F層・D層・31層・27層・23層
図版 132 木製品(23) 23層・21層・20層・VII層・VII層
図版 133 木製品(24) VII層
図版 134 木製品(25) VII層
図版 135 木製品(26) VII層・VI層
図版 136 木製品(27) VI層・V層

図版 137 木製品(28) V層・青灰砂層
図版 138 木製品(29) 青灰砂層
図版 139 木製品(30) 青灰砂層
図版 140 木製品(31) 青灰砂層・D区A、B、C層
図版 141 木製品(32) D区A、B、C層・D層・不明など
図版 142 木製品(33) 不明など
漆製品 XV層
図版 143 土製品

【写真図版】

図版 144 遺跡遠景・完掘
図版 145 遺物出土状況
図版 146 遺跡の層序
図版 147 縄文時代前期・弥生時代中期・古墳時代の土器
図版 148 木製品・漆製品
図版 149 管玉・勾玉製作工程資料
図版 150 石器・石製品
図版 151 漆製品分析試料
図版 152 A・B区の調査状況
図版 153 E・F区の調査状況
図版 154 D・G・H・I区の調査状況
図版 155 遺跡の層序・古代の遺構・遺物出土状況
図版 156 古墳時代後期の遺構・遺物出土状況
図版 157 古墳時代後期の遺物出土状況
図版 158 SD33・水田跡
図版 159 SD50・33・水田跡
図版 160 SD50・51・SX84
図版 161 SD50・83遺物出土状況
図版 162 SD50遺物出土状況
図版 163 SD50遺物出土状況
図版 164 弥生時代後期～古墳時代の土坑(SK85・59)
図版 165 弥生時代後期～古墳時代の遺構
(SK6・40・43・70)
図版 166 弥生時代後期～古墳時代の遺構
(SK55・SE89)
図版 167 弥生時代後期～古墳時代の遺構
(SK49・72・73・74・95)
図版 168 23層土器出土状況・G区灰色粘土層
土器出土状況(1)
図版 169 G区灰色粘土層土器出土状況(2)
図版 170 G区灰色粘土層土器出土状況(3)・
D区F層土器出土状況
図版 171 XII・XIIb～XIIIa層土器出土状況
図版 172 XIIIb～XIIIe層遺物出土状況・樹木根検出
状況、SK97
図版 173 SK90・93・94、XVc層土器出土状況
図版 174 XVc・XVd層土器出土状況
図版 175 XVc層遺物出土状況
図版 176 作業風景

- 図版 177 土器(1) 縄文時代前期(1)
- 図版 178 土器(2) 縄文時代前期(2)
- 図版 179 土器(3) 縄文時代前期(3)
- 図版 180 土器(4) 縄文時代前期(4)
- 図版 181 土器(5) 縄文時代前期(5)
- 図版 182 土器(6) 縄文時代前期(6)
- 図版 183 土器(7) 縄文時代前期(7)
- 図版 184 土器(8) 縄文時代前期(8)
- 図版 185 土器(9) 縄文時代前期(9)
- 図版 186 土器(10) 縄文時代前期(10)
- 図版 187 土器(11) 縄文時代前期(11)
- 図版 188 土器(12) 縄文時代前期(12)
- 図版 189 土器(13) 縄文時代前期(13)
- 図版 190 土器(14) 縄文時代前期(14)
- 図版 191 土器(15) 縄文時代前期(15)
- 図版 192 土器(16) 縄文時代前期(16)
- 図版 193 土器(17) XV・XVa層出土の縄文時代中期
～晩期・XIIIe層
- 図版 194 土器(18) XIIIe・XIIIb・XIIIa層
- 図版 195 土器(19) XIIIa・XIIb層
- 図版 196 土器(20) XIIb・XIIa層
- 図版 197 土器(21) XIIa層・その他の縄文時代後期～晩期
D区F層・G区灰色粘土層(1)
- 図版 198 土器(22) D区F層・G区灰色粘土層(2)
- 図版 199 土器(23) D区F層・G区灰色粘土層(3)
- 図版 200 土器(24) D区F層・G区灰色粘土層(4)
- 図版 201 土器(25) D区F層・G区灰色粘土層(5)
- 図版 202 土器(26) D区F層・G区灰色粘土層(6)
- 図版 203 土器(27) D区F層・G区灰色粘土層(7)
- 図版 204 土器(28) D区F層・G区灰色粘土層(8)、
その他の弥生時代中期(1)
- 図版 205 土器(29) その他の弥生時代中期(2)、
SD50・51・83-3層(1)
- 図版 206 土器(30) SD50・51・83-3層(2)
- 図版 207 土器(31) SD50・51・83-3層(3)
- 図版 208 土器(32) SD50・51・83-3層(4)、23層(1)
- 図版 209 土器(33) 23層(2)
- 図版 210 土器(34) 23層(3)
- 図版 211 土器(35) 23層(4)、SD50・51・83-1層(1)
- 図版 212 土器(36) SD50・51・83-1層(2)・その他、
SD46・47
- 図版 213 土器(37) SK85・70・55、SD33
- 図版 214 土器(38) SD33、SK40・95、21層、20層、
VIc層
- 図版 215 土器(39) SX88、SK49
- 図版 216 土器(40) SK6、⑩層、VIIa-b層、VIb層相当、
その他の弥生時代後期～古墳時代(1)
- 図版 217 土器(41) その他の弥生時代後期～古墳時代(2)、
古代、追加土器(1)
- 図版 218 土器(42) 追加土器(2)
- 図版 219 土器(43) 追加土器(3)・土製品
- 図版 220 石器・石製品(1) XV層(1)
- 図版 221 石器・石製品(2) XV層(2)
- 図版 222 石器・石製品(3) XV層(3)
- 図版 223 石器・石製品(4) XV層(4)
- 図版 224 石器・石製品(5) XV層(5)
- 図版 225 石器・石製品(6) XV層(6)
- 図版 226 石器・石製品(7) XV層(7)
- 図版 227 石器・石製品(8) XV層(8)
- 図版 228 石器・石製品(9) XV層(9)
- 図版 229 石器・石製品(10) XV層(10)・XVa層
- 図版 230 石器・石製品(11) XIV層・XIII～XI層(1)
- 図版 231 石器・石製品(12) XIII～XI層(2)
- 図版 232 石器・石製品(13) XIII～XI層(3)・
IX層より上層(1)
- 図版 233 石器・石製品(14) IX層より上層(2)
- 図版 234 石器・石製品(15) IX層より上層(3)
- 図版 235 石器・石製品(16) IX層より上層(4)
- 図版 236 石器・石製品(17) IX層より上層(5)
- 図版 237 石器・石製品(18) IX層より上層(6)・
玉作関連(1)
- 図版 238 石器・石製品(19) 玉作関連(2)
- 図版 239 石器・石製品(20) 玉作関連(3)
- 図版 240 石器・石製品(21) 玉作関連(4)・玉類
- 図版 241 木製品(1) SK96、SE89、SK49・55、
SD33
- 図版 242 木製品(2) SD33・46・47
- 図版 243 木製品(3) SD47
- 図版 244 木製品(4) SD47・48・50
- 図版 245 木製品(5) SD50
- 図版 246 木製品(6) SD50
- 図版 247 木製品(7) SD50
- 図版 248 木製品(8) SD50
- 図版 249 木製品(9) SD50・83
- 図版 250 木製品(10) SD83・SK95
- 図版 251 木製品(11) SK95、SX87・88
- 図版 252 木製品(12) SX88、XV～XII層
- 図版 253 木製品(13) XIII層・XI層・IX層・灰色粘
土層・F層・D層・31層
- 図版 254 木製品(14) 27層・23層・21層・20層・
VII層・VII層
- 図版 255 木製品(15) VII層
- 図版 256 木製品(16) VII層・VI層
- 図版 257 木製品(17) V・VIa層、V層、青灰砂層
- 図版 258 木製品(18) 青灰砂層
- 図版 259 木製品(19) 青灰砂層、D区A・B・C層、
D層、出土地点不明など
- 図版 260 木製品(20) 出土地点不明など・漆製品

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

大武遺跡は、一般国道116号和島バイパス建設に伴い発掘調査が行われた。一般国道116号は、新潟県柏崎市を起点とし、刈羽村・出雲崎町・長岡市・燕市を經過し新潟市に至る総延長77.6kmの路線である。

当路線は一般国道8号および北陸自動車道の代替路線として、また中越地区の幹線道路として、社会・経済の発展に大きな役割を果たすとともに、沿線4市1町1村の通勤・通学・買い物などの生活道路として重要な役割を果たしている。しかし、一般国道116号のうち長岡市島崎地区（旧三島郡和島村島崎）では道路幅員が狭く、人家連担部を通過するために、交通渋滞・交通事故・降雪時の交通傷害・騒音などの交通環境の悪化が深刻な社会問題となっていた。和島バイパスはこのような問題を解決し現道を地域の活動道路としての機能を回復させるほか、地域の幹線道路としての役割を果たすために「一般国道116号改築事業」の一部として計画された長岡市両高から碓田に至る延長6,260mの事業であり、1984年度に事業化された。



第1図 和島バイパス建設に伴い調査された主な道路 和島村 平成5年作製「和島村地図」1:5,000縮図

道路名/調査年度	S63	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H10	H11	報告書	備考(調査者)
1 八幡林宮前道路			■			■							[田中2005]	和島村教委
2 山田郷内道路													[丸山2007]	和島村教委
3 立野大谷製鉄道路											■		[渡邊2010]	理文事業団
4 妙満寺道路													[丸山2003]	和島村教委
5 碓ヶ入南道路								■					[渡邊2010]	理文事業団
6 碓ヶ入製鉄道路									■				[渡邊2010]	理文事業団
7 奈良崎道路		■	■										[春日2002]	理文事業団
8 大武遺跡							■	■	■	■	■		[春日2000]・本書	理文事業団
9 門前道路						■							[田中2005]	和島村教委

凡例 ■ 工事立会い ■ 試掘確認調査 ■ 本発掘調査

第1表 和島バイパス建設に伴い調査された主な道路

[春日2002]に加工

これを受け、新潟県教育委員会（以下県教委）と建設省（現国土交通省）の間で、計画用地内における埋蔵文化財の分布調査・試掘確認調査等に関する協議が本格化した。県教委は建設省の依頼を受け1986・1987年に和島バイパス法線内の分布調査を行い、この区間に8遺跡以上の埋蔵文化財包蔵地があることを確認し、このことを建設省に通知している。また、県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下事業団）に試掘・確認調査を依頼し、事業団は1993年2月1・2日の2日間、大武遺跡の試掘確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代から中世の遺物が出土し、大武遺跡は縄文時代から中世までの遺跡であるとして、6,200m²の本発掘調査が必要であると、県教委に報告した。その後、建設省・県教委・事業団の三者は協議を重ね、遺跡の性格・調査面積や和島バイパスの工事工程・事業団の調査体制を考慮した結果、1994年度4月から本発掘調査を行うこととした。

2 調査と整理作業

A 試掘確認調査

試掘確認調査は1993年2月1・2日の2日間実施した。対象面積は17,000m²、調査面積は260m²であり、比率は1.5%である。調査方法は対象地域に、トレンチを任意に設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層の堆積状況、遺構・遺物の検出状況、トレンチ位置などを図面・写真に記録するものである。調査の結果、24・25・30トレンチから縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世の遺物と中世の遺構・遺物を検出し、6,200m²（1,600×4層）の本発掘調査が必要と判断した。

B 本発掘調査範囲と工法変更の経緯

1994年度：現地を踏査し地形などを検討した結果、当初設定された本発掘調査範囲外に遺跡が広がる可能性が推定できた。そこで事業団・県教委・建設省は協議を行い、本発掘調査範囲周辺に事業団が「予備調査」を行うこととした。調査期間は4月13～15日、5月9・10日である。調査方法は試掘確認調査と同様であり、対象地域に任意にトレンチを設定し、掘削用重機および人力で掘削・精査を行い、土層の堆積状況、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果37・38・40・42・43・45・46・51トレンチから弥生時代・古墳時代・中世の遺構・遺物が検出された。しかし、縄文時代の遺物は検出されず、今後の課題となった。調査面積は6,400m²（1,600×4層）から12,600m²（4,200×3層）+ α へ拡大したが（第2図2）、本発掘調査の進展に伴い、この範囲の外側にも遺跡が広がるとともに、さらに下位にも遺物包含層が存在する可能性が考えられた。そこで弥生時代の遺物包含層の掘削が終了した地点において2月14・15日の2日間、上下位の遺物包含層の有無を確認した。調査の結果、縄文時代前期の遺物包含層が確認できた。

これを受け、建設省・県教委・事業団は協議を行い、1995年度に大武遺跡の範囲確定のための確認調査を再度行うこととなった。また縄文時代前期の遺物包含層については、1995・1996年度に調査を行い、1995年度のうちに縄文時代前期の遺物包含層下位の遺物包含層の有無を確認することとした。

1995年度：5月8～17日・9月11～24・27・28日に本発掘調査と並行して、確認調査を行った。調査の方法は1992・1994年度の試掘確認調査・予備調査と同様であるが、1994年度の本発掘調査で中世と古墳時代前期の水田跡が検出されたことから、主要な土層はプラント・オパール分析用の土壌サンプルを採取し、民間の分析機関に分析を依頼した。調査面積は500m²で、調査対象面積12,800m²に対

する比率は約4%である。調査の結果 1a・1b・1c・2a・4d・6・9・10 トレンチから古墳時代・中世の遺物が出土し、7～12 トレンチでは耕作の結果と考える土層の堆積状況を確認した。また、広範囲にわたって稲のプラント・オパールを検出した。この結果、対象範囲全域が本調査必要範囲となった。また、新たに本発掘調査必要範囲となった地点については、下位に縄文時代の遺物包含層が存在する可能性があるため、弥生時代までの調査がある程度進展したのち、より下位の試掘・確認調査を行う必要があるとした(第2図③)。12月4・5日に縄文時代の遺物包含層(XV層)の下位の遺物包含層の有無を確認する調査を行い、XV層の下位には遺物包含層が無いことを確認した。

工法変更：1995年までの調査結果を踏まえ建設省・県教委・事業団は協議を重ね、今後の調査面積や埋文事業団の調査体制、現国道116号の交通環境を考慮し、道路建設の工法が変更された。工法変更の

① 1992年度の試掘・確認調査と本発掘調査必要範囲



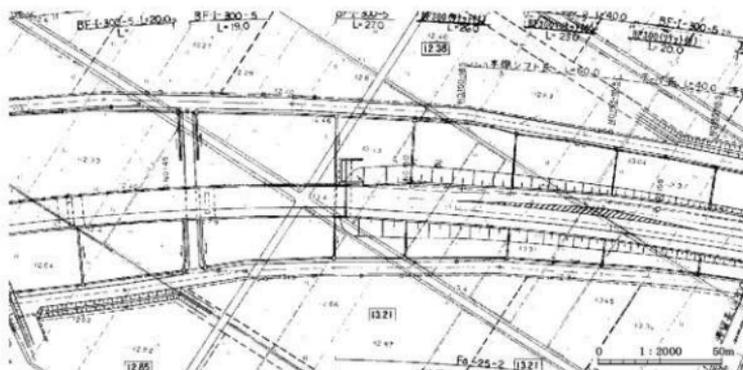
② 1994年度の予備調査と本発掘調査必要範囲



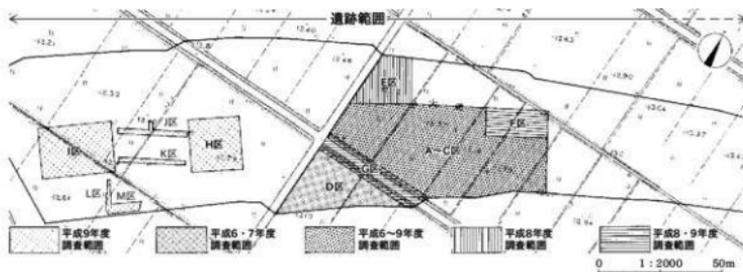
③ 1995年度の試掘・確認調査と本発掘調査必要範囲



第2図 試掘確認調査・予備調査のトレンチと本発掘調査必要範囲の変遷
(建設省北陸地方建設局 長岡国道事務所作成 昭和51年 1:1000)



第3図 工法変更後の法線図



第4図 各年度の調査範囲

(建設省北陸地方建設局 長岡国道事務所作成 昭和51年 1:1000)

内容は、センター杭No.149以西を高架、これより東側を低盛土とし、地盤改良範囲も最小限にとどめるとするものである。本発掘調査範囲は、とりあえず1期線のみとし、地盤改良部分については全面調査を行うが、高架部分は橋脚および橋台部分のみを調査、低盛土部分は1期線を暫定的に開通させ、2期線の拡幅が近づいた段階でバイパスを切り直し、1・2期線分を交互に調査するというものである。

C 本発掘調査の経過

1994年度 4月13日から予備調査を開始し、5月11日よりA～D区の本発掘調査を開始した。A～C区は中世の遺物包含層(Ⅶ層)・遺構の調査を終了し、Ⅶ層上面で、古墳時代初頭の水田・水路などを検出し、調査を終了した。D区は古墳時代(B～D層)・弥生時代中期(F層)の調査を終了し、F層の下位から縄文時代前期を中心とする遺物包含層を検出し、12月16日に撤収した。

1995年度 4月10日からA～D区の本発掘調査を開始した。A～C区は昨年度検出した古墳時代初頭の水田・水路などの調査を行い、6月27日に航空写真撮影、7月9日に現地説明会を実施した。調査の進展に伴い、弥生時代中期の遺物包含層相当層(Da～c層)の下位に厚いと約1mの間層(X層)

を挟んで縄文時代後期～晩期の遺物包含層（Ⅻ・ⅩⅢ層）があり、その下位には厚いところで約120cmの間層（ⅩⅤ層）と縄文時代前期の遺物包含層（ⅩⅤ層）があることがわかり、D区との層序の対応が概ね明らかになった。また、掘削深度が深くなるのに従い、10月中頃から調査区内の湧水と地山の崩落が著しくなり、11月5日にはA区とD区の間農道が一部崩落した。応急措置として崩落部分に山砂を置き、長さ6m・Ⅲ型の矢板を打設した。ⅩⅤ層の掘削は11月10日から開始した。11月19日に2回目の現地説明会を行った。D区は調査を終了し、A～C区はⅩⅤ層より下位に遺物包含層が無いことを確認し、12月8日に撤収した。

1996年度 4月15日より本発掘調査を開始した。調査範囲は、1995年の工法変更を受け、橋台の一部となる地点（E区）、従来の調査区以外で地盤改良が及ぶ地点（F区）、1995年に一部が崩落した農道部分（G区）である。Ⅺ層の掘削終了後、湧水と地山の崩落が著しくなったため、9月26日～10月11日の間、A～G区に、長さ8m・Ⅲ型の矢板を打設した。11月24日に現地説明会を行った。E区は調査終了、A～C・F・G区はⅩⅤ層の一部を残し、11月26日に撤収した。

1997年度 4月14日より本発掘調査を開始した。A～C・F・G区のⅩⅤ層の調査を行い、6月24日に航空写真撮影、6月28日に現地説明会を行った。8月5日には、新潟県立歴史博物館の建設を進めている新潟県企画調整部企画課が費用を負担し、F区で検出されたクルミ種子が詰まったピット（SK97）を移築し、A～C・F・G区の調査を終了した。遺跡西側の橋脚部分（H・I区）の調査は、橋脚の位置が決定した7月2日から調査を開始した。掘削深度が深くなったI地区は10月10日に矢板を打設し、11月28日にすべての現地調査を終了し撤収した。

調査の体制は以下のとおりである。

【試掘確認調査】

調査期間	1993（平成5）年2月1日・2日
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	藍原 直木（事務局長）
管理	渡辺 耕吉（総務課長）
庶務	藤田 守彦（総務課 主事）
調査指導	茂田井信彦（調査課長）
調査担当	藤巻 正信（調査課 第二係長）
調査職員	遠藤慎之介（研修生）

調査職員	永井 学（調査課 主任調査員）
	中江 茂雄（調査課 主任調査員）
	阿部 雄生（調査課 文化財調査員）
	滝沢 規明（調査課 文化財調査員）
	木村 孝一（調査課 嘱託員）
	大杉 真実（調査課 嘱託員）
	内山 良典（調査課 嘱託員）
	山下 健（調査課 嘱託員）

1995（平成7）年度

【本発掘調査】

1994（平成6）年度

調査期間	4月13日～12月16日（本発掘調査） 12月17日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 本間栄三郎）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	藍原 直木（事務局長）
管理	渡辺 耕吉（総務課長）
庶務	泉田 誠（総務課 主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（調査課 第二係長）
調査担当	塩路 真澄（調査課 文化財調査員）

調査期間	4月10日～12月8日（本発掘調査） 12月9日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 平野清明）
調査	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	藍原 直木（事務局長）
管理	山上 利雄（総務課長）
庶務	泉田 誠（総務課 主事）
調査総括	茂田井信彦（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（調査課 第二係長）
調査担当	永井 学（調査課 主任調査員）
調査職員	春日 真実（調査課 文化財調査員） 木村 孝一（調査課 嘱託員）

1996（平成8）年度

調査期間	4月15日～11月26日（本発掘調査） 11月27日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 平野清明） 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	監原 直木（事務局長）
管理	山上 利雄（総務課長）
庶務	泉田 誠（総務課 主事）
調査総括	亀井 功（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（調査課 第二係長）
調査担当	春日 真実（調査課 文化財調査員） 高橋 洋一（調査課 主任調査員）
調査職員	木村 孝一（調査課 嘱託員）
支援	株式会社 吉田建設

1997（平成9）年度

調査期間	4月14日～11月28日（本発掘調査） 11月29日～3月31日（整理作業）
調査主体	新潟県教育委員会（教育長 平野清明） 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	須田 益輝（事務局長）
管理	若槻 勝則（総務課長）
庶務	泉田 誠（総務課 主事）
調査総括	亀井 功（調査課長）
調査指導	寺崎 裕助（調査課 第二係長）
調査担当	春日 真実（調査課 文化財調査員） 渡邊 尚紀（調査課 主任調査員）
調査職員	白井 利夫（調査課 嘱託員）
支援	株式会社 吉田建設

D 整理作業

1994～1997年は、現地作業と並行して水洗・注記等の作業を行った。1998・1999年度は『大武遺跡（中世編）』の報告書作成作業を行うとともに、古墳時代の土器の接合・復元を一部行った。本報告書作成にかかる本格的な作業は2008年・2011・2012年度にかけて実施した。2008年度は木製品実測・写真撮影と水洗した土壌内容物の抽出、2011・2012年度は接合・復元・実測・写真撮影・図版作成・原稿執筆・編集など、2013年度に印刷・刊行した。

整理作業の体制

2008（平成20）年度

整理期間	4月1日～3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	倉藤 栄（総務課長）
庶務	長谷川 靖（総務課 班長）
整理総括	藤巻 正信（調査課長）
整理担当	高橋 保（調査課 課長代理）
整理	間 栄子・小林智美・田口和子・ 東條シゲ子・渡辺和子・渡辺知子 （調査課 嘱託員）

2012（平成24）年度

整理期間	4月1日～3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 高井敏雄）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	熊倉 宏二（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課 班長）
整理総括	北村 亮（調査課長）
整理担当	春日 真実（調査課 課長代理）
整理職員	坂上 有紀（調査課 嘱託員）
整理	小倉睦子・小林智恵子・小林智美・ 田口和子・鶴田須美子（調査課 嘱託員）

2011（平成23）年度

整理期間	4月1日～3月31日
整理主体	新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）
整理実施機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
総括	木村 正昭（事務局長）
管理	今井 亘（総務課長）
庶務	伊藤 忍（総務課 班長）
整理総括	北村 亮（調査課長）
整理担当	春日 真実（調査課 課長代理）
整理職員	坂上 有紀（調査課 嘱託員）
整理	小倉睦子・小林智恵子・小林智美・ 田口和子・鶴田須美子（調査課 嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

遺跡の位置 (第5図)：大武遺跡は長岡市(旧和島村)島崎字大武1910他に所在し、丘陵裾付近の沖積地に立地する。遺跡が道路法線となる以前の旧状は水田であった。新潟県のほぼ中央、中越地方の海岸寄りに位置しており、北緯37度35分36秒、東経138度46分21秒、標高は12～13mである。

地形概観 (第5図)：遺跡が所在する長岡市西北部は、長野県との県境付近から信濃川の左岸に沿って、南南西-北北東に伸びる東頸城丘陵の北東端付近にあたり、その先端は弥彦山・角田山に連なる。東頸城丘陵が示す南南西-北北東の方向性は、新潟県の中・下越地方の丘陵・平野に特徴的であることから「新潟方向」と呼ばれるが、これは第三紀から第四紀前期にかけて堆積した地層の褶曲軸の方向が原因である。

東山丘陵は、出雲崎町沢田付近で東西二つの丘陵に分岐する。大武遺跡の周辺では幅約2kmの平坦な沖積低地を挟んで2つの丘陵が対峙する。沖積低地では現在、島崎川・郷本川・新島崎川の3本の川が流れ、それぞれ日本海に注いでいる。しかし明治から1922(大正11)年に通水した大河津分水路開削以前は、一本の河川：旧島崎川となり、信濃川の流れである西川と合流していた。

遺跡に隣接する郷本川は1774(安永3)年に工事が開始され、1873(明治6)年に完成、大河津分水路完成に伴い改修され、ほぼ現在の形となった人工的な放水路である。

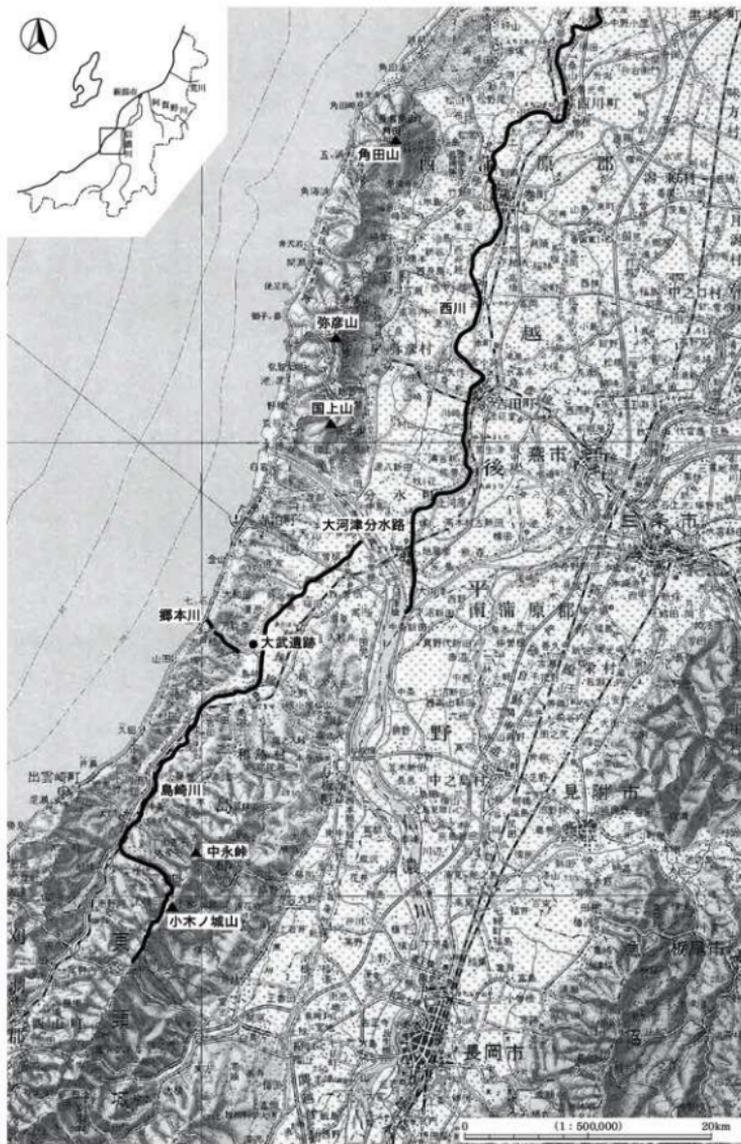
地層：遺跡周辺の地層の分布を見ると島崎川の流れる沖積地を挟んで、対照的な配置が見られる。外側から西山層・灰爪層・魚沼層がそれぞれ分布しており、これらの地層が丘陵を構成している。各地層は地層中に含まれる貝化石・珪藻化石・火山灰などから、地層の堆積した年代と環境が明らかになってきており、西山層は第三紀鮮新世の海中、灰爪層は第四紀更新世前期頃の浅海、魚沼層は第四紀更新世前期から中期にかけて浅海から内湾そして潟へと変化していく過程で堆積した土層とされる[藤田・長谷川1996]。大武遺跡の基盤となる土層は、魚沼層と考えられる。

気象：遺跡周辺は海岸に近く、三方を丘陵に囲まれるために、年間を通じての気候変化がそれほど激しくない。新潟県内では恵まれた地域といえる。夏は日中海風が入りやすく、比較的涼しい日が多い。冬は比較的温暖で、降雪量も少なく、北部の平野部で積雪が30cmを超えることは近年ではほとんどない。冬期に比較的温暖なのは上記の理由のほかに対馬海流の影響も大きい。積雪も県内では少ない地域で、30cmを超える日は稀である。

2 周辺の遺跡

旧島崎川(島崎川・郷本川・新島崎川)流域の遺跡について概観する。当地域は弥生時代から古代の遺跡が多く確認でき、新潟県内でも有数の遺跡密集地帯となっている(第7図・第2表)。

縄文時代：大武遺跡で最も多く遺物が出土している縄文時代前期の遺跡は少ない。有馬崎遺跡(1)・五分一城跡(16)、奈良崎遺跡(22)からは縄文時代前期の土器が出土している。また七瀬遺跡(10)も採集された石器の形態から考え、縄文時代前期の遺跡である可能性が高い。ただし、いずれの遺跡も遺物の



第5図 遺跡の位置 (1)

【渡邊as>2010】より転載・改変 (国土地理院【長岡】1:200,000 原図)

出土量は少ない。北野丸山遺跡(35)からは縄文時代中期前葉を中心とする時期の土器・石器が多く出土している。

中期以前の遺跡は少ないが、後期以降遺跡は増加する。十二遺跡(42)は後期前葉を中心とする土器・石器が多数出土した。幕島遺跡(3)は丘陵裾付近に位置する遺跡で、縄文時代後期～晩期の土器が層位的に出土したほか動植物遺体も出土している。下桐松葉遺跡(14)は縄文時代晩期を中心とする土器・土製品・石器・玉類などが出土している。姥ヶ入製鉄遺跡(24)は丘陵にはさまれた谷から縄文時代後期～



第6図 遺跡の位置(2)
(和島村 平成5年作成「和島村地図」)

晩期の土器が出土した。寺前遺跡(48)も丘陵にはさまれた谷部に立地する遺跡で、縄文時代後期～晩期の土器が出土し、木組み遺構が検出された。乙茂遺跡(47)は寺前遺跡の居住域と推測されている。

弥生時代：弥生時代前期の遺跡は現在のところ未確認で、中期の遺跡も少ない。土手上遺跡(13)からは、1点だけだが中期前葉頃の土器が出土している。諏訪田遺跡(6)は中期中葉から後葉頃の土器・玉作関連遺物が出土し、土壇墓が検出された。松ノ脇遺跡(33)は台地上に位置する遺跡で、北陸系の中期中葉の土器と東北系の後期前半の土器が出土した。

弥生時代後期は遺跡数が増加する。奈良崎遺跡(22)、上桐城跡(31)、赤坂遺跡(32)、北野大平遺跡(34)などは平地との比高差が15m以上の台地・丘陵上に位置する遺跡で、高地性集落と考える。このうち奈良崎遺跡からは弥生時代後期の竪穴建物が2基(以上)検出されている。大慶寺御経塚(45)からは後期前半の周溝付竪穴建物を1基検出した。

屋敷塚1・2号墳(18・19)は当期の台状墓であり、このうち屋敷塚1号墳は発掘調査が行われ、10.5×8.7mの方形周溝墓が検出された。長4.1m、幅1.9m、深1.0mの巨大な墓坑の形状から丹後や出雲との関連が指摘されている[八重樫2004]。奈良崎遺跡(22)ではL字状の溝を2条伴う一辺約12mの特異な形態の方形周溝墓を検出した。

古墳時代：古墳時代早期から前期の古墳として下小島谷古墳群(41、前方後方形2基・方形1基)、大久

番号	遺跡名	種類	市町	所在地名	時代	文献
1	北島遺跡	遺物包蔵地	高市	国上平岡	縄文・平安	分本野2004
2	国上遺跡	遺物包蔵地	高市	国上中野下	平安	分本野2004
3	藤島遺跡	遺物包蔵地	高市/ 長門	藤原寺島はか	縄文	分本野2004
4	国田ノ内遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊竹森寺田	古代	寺沼岡1991
5	原田内遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊竹森寺田	古代	寺沼岡1991
6	藤田遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊竹森寺田	弥生～古墳 古代	寺沼岡1991
7	藤田山成寺跡	包蔵地・寺 院跡	長門市	寺泊竹森寺田	縄文～古代	寺沼岡1991
8	茨原古墳	古墳	長門市	寺泊竹森寺田	古墳～古代	寺沼岡1991
9	藤田山成白塚古墳	古墳	長門市	寺泊竹森寺田	古墳～古代	寺沼岡1991
10	国田遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊竹森寺田	縄文	寺沼岡1991
11	宝塚遺跡	遺物包蔵地	高市/ 長門	藤原寺島はか	縄文・古代	寺沼岡1991
12	奈良崎白鳥遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊山字奈良崎	弥生	寺沼岡1991
13	土手上遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊土手	弥生・古墳	寺沼岡1991
14	下瀬松葉遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊下瀬松葉	縄文	寺沼岡1991
15	五ヶ分一組遺跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊五ヶ分一組	縄文～古墳 古代	寺沼岡1991
16	五ヶ分一組跡	遺物包蔵地	長門市	寺泊五ヶ分一組	縄文・室町 戦国	寺沼岡1991
17	大久保古墳群	古墳・墳墓	長門市	寺泊大久保	古墳	寺沼岡1991
18	屋敷塚1号墳	墳墓	長門市	寺泊屋敷塚	弥生	八重樫2004
19	屋敷塚2号墳	墳墓	長門市	寺泊屋敷塚	弥生	八重樫2004
20	夏戸城跡	城跡跡	長門市	寺泊夏戸城跡	中世	寺沼岡1991
21	大武遺跡	遺物包蔵地	長門市	島崎大武	縄文～中世	本森
22	奈良崎城跡	城跡跡	長門市	島崎奈良崎	南北朝～戦 国	寺沼岡2002
23	奈良崎遺跡	遺物包蔵地	長門市	島崎奈良崎	弥生～中世	寺沼岡2002
24	越々入取遺跡	城跡跡・墳 墓	長門市	島崎越々入	縄文・中世	高橋2010
25	越々入遺跡	包蔵地・墳 墓	長門市	島崎越々入	弥生・古代	高橋2010

番号	遺跡名	種類	市町	所在地名	時代	文献
26	妙満寺跡	寺院跡	長門市	島崎寺立野	古代～近世	丸山2003
27	北野大平築造遺跡	築造跡	長門市	島崎大平	中世	渡邊2010
28	山田内遺跡	築造跡	長門市	山田内	古墳～中世	丸山2007
29	八幡城跡	包蔵地・宮 跡	長門市	島崎	巨石群～中 世	田中2005
30	門前遺跡	築造跡	長門市	上瀬門前	古墳～代	伊藤2006
31	上桐城跡	城跡跡	長門市	上桐城跡	弥生・中世	相島村1996
32	赤坂遺跡	遺物包蔵地	長門市	上桐赤坂	弥生	相島村1996
33	松ノ脇遺跡	遺物包蔵地	長門市	瀬ノ子字松ノ脇	弥生～古代	丸山1998
34	北野大平遺跡	遺物包蔵地	長門市	北野大平	弥生・古代	相島村1996
35	北野丸山遺跡	遺物包蔵地	長門市	北野寺上川・丸山	縄文～古代	伊藤2003
36	川東遺跡	遺物包蔵地	長門市	島崎寺田	弥生～中世	山内2012
37	藤田山成遺跡	遺物包蔵地	長門市	島崎	古代	丸山2013
38	藤田山成西遺跡	遺物包蔵地	長門市	島崎	古代	
39	下ノ西遺跡	包蔵地・宮 跡	長門市	小島谷下ノ西	縄文～中世	相島村1996
40	北野寺上河遺跡	遺物包蔵地	長門市	小島谷	古代	相島村1996
41	下小島谷古墳群	古墳・墳墓	長門市	下小島谷	古墳	相島村1996
42	下ノ西跡	遺物包蔵地	長門市	小島谷下ノ西	縄文	相島村1996
44	坂の丘遺跡	遺物包蔵地	長門市	赤木城の丘	平安	相島村1996
43	村岡城跡	城跡跡	長門市	赤木城の丘	中世	相島村1996
45	大慶寺御経塚	塚・包蔵地	長門市	大平寺田	弥生～古代 江戸	小島谷2009
46	越々入城跡	城跡跡・包蔵地	長門市	乙茂寺田	古代	春日2001
47	乙茂遺跡	遺物包蔵地	長門市	乙茂寺田	弥生	高橋2008
48	寺泊遺跡	包蔵地・墓 跡	長門市	乙茂寺田	縄文～中世	高橋2008
49	赤ノ脇城跡	城跡跡	長門市	寺泊赤ノ脇	中世	与野村1999

第2表 周辺の主な遺跡



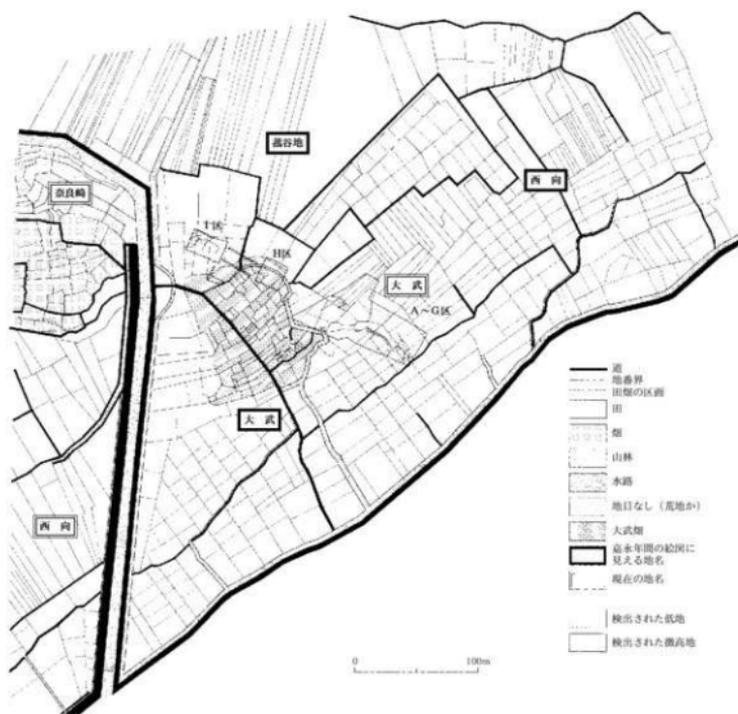
(国土地理院 1:50,000 平成19年9月1日「出雲崎」、平成20年4月1日「三衆」)

保古墳群（17、前方後方形2基・方形3基）、姥ヶ入南遺跡（25、円形1基）、奈良崎遺跡（22、円形2基、方形1基）などがある。いずれも小規模だが、比較的多くの古墳が確認できる。中期の古墳は未確認だが、後期から7世紀頃の古墳として、夷塚古墳（8）、横滝山舞台塚古墳（9）が確認できる。

集落遺跡は、前期から中期の土器が出土し、中期の水田跡が検出された門新遺跡（30）、早期～前期・後期の土器が出土し竪穴建物・土坑などを検出した奈良崎遺跡（22）、前期の土器が出土した山田郷内遺跡（28）、中期の上師器・須恵器が出土した五分一稲葉遺跡（15）、後期の土器が出土した土手上遺跡（13）などがある。

3 遺跡周辺の土地更生図

第8図に調査区周辺の明治26年の土地更生図を示した。調査区南側に「大武畑」と呼ばれる微高地（埋没した丘陵の一部？）があることがわかる。



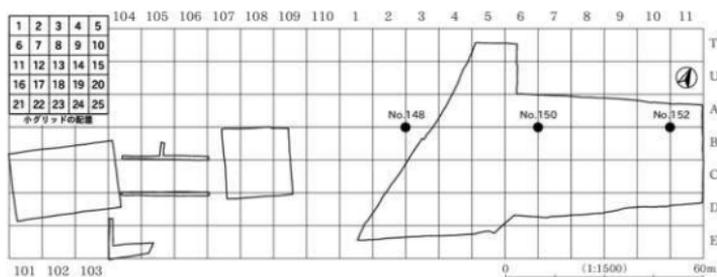
第8図 明治26年の土地更正図と大武遺跡の調査区（渡邊2000）より転載

第三章 調査の概要

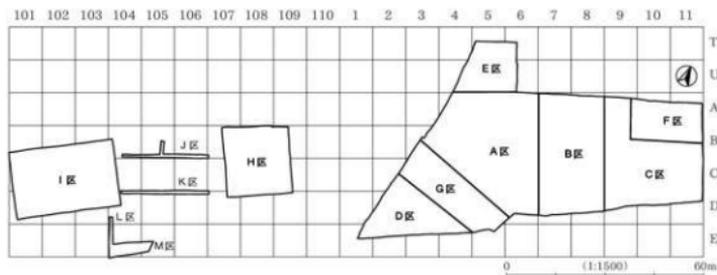
1 グリッドの設定

大武遺跡が位置する和島バイパスの線形は曲線(R=1000m)のため、和島バイパスのセンター杭 No.148 (旧測地系 X:176482.452, Y:24295.422 (3B))と No.152 (旧測地系 X:176513.452, Y:24368.172 (11B))を結んだラインを主軸(東西軸)とした。これに直行する方向は No.150 (旧測地系 X:176497.952, Y:24332.297 (7B))の位置を基準とし、南北軸を設定した。南北軸は真北から23.5度東偏している。

グリッドは大小2種あり、大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは西から東に向かって1・2・3・4……、北から南に向かってA・B・C・D・E・Fとしたが、平成8・9年度に調査した調査区は、1より西側、Aより北側の場所を含むため、1以西については100～110、A以北についてはT・Uグリッドを追加した。小グリッドは1～25の算用数字で示し、北西隅が1、北東隅が5、南西隅が21、南東隅が25に配置した。グリッド名は3B15のように呼称した(第9図)。



第9図 グリッドの設定



第10図 地区の名称

2 地区名

大武遺跡は平成6～9年にかけて4年間本発掘調査を行い、その間調査範囲や工事内容が変更され、複雑な調査行程を経た。現地では調査行程や調査地点を考慮し、A～M区の12地区に区分した。以下の記述では位置を表記する場合に、グリッド名の他に第10図に示した地区名を使用する場合がある。

3 基本層序

調査地点は埋没谷・埋没丘陵が存在し、層序は地点によって大きく異なる。A～G区、H区、I区の3地点の基本層序を中心に記述する。

A～G区 (図版7～11)

調査区を南西から北東に向かって谷が存在する(図版9)。谷底部の標高は、調査区内の最も低いところで約5.6mである。なお、調査区周辺の標高は12.5～13mであった。

谷底付近の土層堆積状況は、16層に大別できる。ビート層と青灰色シルト・砂層の互層であるが、これらの中に褐色や灰色の炭化物を含む土壌化した土層が介在する(図版10・11)。

I～IIIb層は現代から中世末までの土層である。IVa層は青灰色粘土層で炭化物をあまり含まない土層である。出土遺物も少ない。中世までの土層と考えるが、詳細は不明。

IVb層は灰色の粘土層で、炭化物を定量含む。A～G区に広く確認でき、14～15世紀の土器・陶磁器や木製品が比較的多く出土した。中位付近に砂層が存在する地点もある。他に14～15世紀の遺物を含む土層として、4・5Cグリッド(以下、「グリッド」省略)に部分的に存在する黒色土①～⑤などがある。

V層・VIa層は黒色ないしは黒褐色のビート層であり、谷部を中心に広く分布する。色調はV層に比べVIa層がやや明るい。9世紀の土師器・須恵器が少量、木製品が定量出土した。

VIb層・VIc層は古墳時代後期の土師器・須恵器が定量出土する。VIb層は灰色の粘土層で炭化物を定量含む。谷部を中心に広く分布する。VIc層は黄褐色のシルト層で、9・10Cを中心に分布する。

VII層は黒色のビート層である。古墳時代早期～前期の土器が出土する量が少ない。21層・23層はVII層の下位に位置する灰色の粘土層で炭化物を多く含む。弥生時代後期と古墳時代早・前期の土器が多量に出土した。21層は4B、5・6C、23層は8～11Cを中心に分布する。本来は古墳時代早期～前期の土層で、弥生時代後期の土器は下位の⑥層からの混入や、⑥層と21・23層の誤認によるものと考えている。

VIII層は2層に細分した。VIIIa層は暗青灰色粘土で炭化物を少量含む。VIIIb層上面で検出された水田跡の畦畔や床土となる土層で弥生時代後期から古墳時代前期の土器が少量出土する。21・23層と近似した時期の土層と考える。VIIIb層は青灰色シルトで古墳時代早・前期の土器が出土したが量は少ない。

IX層は3層、X・XI層は2層に細分した。IXa・IXc・XIa・XIb層は黒色ビート層、IXb・Xa・Xb層は青灰色シルト層である。いずれも谷部に広く分布する土層であり、遺物の出土量は少ない。Xa層からは海水域に生息する珪藻が検出されており[古環境研究所2000]、形成要因が興味深い土層である。

D区・G区では、21層の下位・Xa層の上位でF層・灰色粘土層を検出した。ともに弥生時代中期の土器・石器を多量に含む。

XI層は3層に細分した。XIa・XIc層は黒色ないしは黒褐色のビート層、XIb層は青灰色シルト

層である。A～C・E・F区で確認できる。遺物の出土は少なく、縄文時代晩期中葉の土器が少量出土した。

XII層は4層に細分した。XIIa層は灰色粘土層で炭化物を少量含む。縄文時代晩期中葉（大淵C1式など）の土器・石器が少量出土した。XIIb層も灰色の粘土層であるがXIIa層よりもやや暗く、炭化物を多く含む。XIIa層同様縄文時代晩期前葉（大淵C1式など）の土器・石器が出土した。XIIc層・XIIb層はE区・G区周辺で確認できる土層である。XIIc層は灰色の粘土層で炭化物を定量含む。XIIb層に比べると色調はやや明るく炭化物は少ない。XIIb層と同様に縄文時代晩期中葉の土器・石器が出土した。

XIIc・XIIb層はG区で部分的に確認される土層で、XIIc層は黒褐色のビート層、XIIb層は青灰色の粘土層で、炭化物をほとんど含まず土器・石器の出土量も少ない。

XIII層は4層に細分した。XIIIa層は黒色のビート層で、谷部に広く確認できる。下部が黒味が強くXIIIa'層・XIIIa2層という層名で取り上げた遺物もある。縄文時代晩期前葉（大淵B・BC式など）の土器・石器が出土した。XIIIb層は褐色の粘土層で谷部に広く分布する。縄文時代後期後葉（榑付土器など）の土器・石器が定量出土した。XIIIc層・XIIIb層は6AB、7・8Aなど谷底付近に部分的に確認できた土層である。XIIIc層は青灰色粘土、XIIIb層は黒色ビート層で2層とも炭化物をあまり含まず、遺物は少ない。XIIIc層は褐色の粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代後期中葉（加曾利B式など）の土器・石器が出土した。

XIV層は青灰色シルト層である。下部に青灰色の砂礫層を含む地点もあり、上部のシルト層から出土した遺物をXIVa層、下部の砂礫層から出土した遺物をXIVb層として取り上げたものもある。縄文時代前期前葉（布目式・新谷式など）の土器・石器が定量出土したが、これは本来XVc層に含まれていた遺物で、XIV層そのものは縄文時代中期末～後期中葉の間の比較的短い期間に堆積した土層と考えている。

XV層は8層に細分した。XVc層以外は、谷底付近に部分的に確認できる土層である。XVa層は黒色のビート層で縄文時代中期後葉（大木9a・9b式など）の土器・石器が出土した。XVb層は褐色の砂礫層で縄文時代前期前葉の土器・石器が出土したが、これは本来XVc層に含まれていた遺物で、XVb層そのものは縄文時代前期前葉以降～中期の間の比較的短い期間に堆積した土層と考えている。XVc層は褐色の粘土層で炭化物を多く含む。縄文時代前期前葉の土器（布目式・新谷式など）・石器が多量に出土した。1996年9月の矢板打設後に調査区が拡張し、より深い地点の調査が可能となった後にXVa層・XVb層の認識したため、XVc層の遺物の多くは「XV層」として取り上げた。XVd層は黒褐色の粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代前期前葉の土器（布目式・新谷式など）・石器が定量に出土した。XVe～XVh層はXVd層の下位に位置する土層で遺物は出土していない。

XVI層は遺跡の基盤となる土層（いわゆる地山）で、黄褐色の粘土と砂礫の互層である。東側の丘陵に位置する奈良崎遺跡の地山と同一の土層で、魚沼層群の新相に対応できるものとする。

H区（図版7）

調査区の地形は南から北に向かって緩やかに傾斜し、北端付近で急激に50～60cm落ち込む。最も低い地点の標高は11.2mであり、A～G区・I区に比べかなり高い。調査区周辺の標高は12.79mである。A～G区との土層の対比は難しいが、3～5層は4・5Cに部分的に存在する黒色土①～⑤・灰色土①～③などに対応する可能性が高いと考えている。

H区では、A～G区 Va層～XVh層に対応する土層は確認できなかった。XVI層(6)はA～G区同様、遺跡の基盤となる土層（いわゆる地山）である。黄褐色の粘土と砂礫の互層で、魚沼層群の新相に対応できるものとする。

I 区 (図版 8)

調査区の地形は南東から北西に向かって緩やかに傾斜し、最も低い地点の標高は 7.3m、調査区周辺の現地表面は 12.3～12.6m である。基本層序は粘土層とビート層の互層である。A～G 区と異なる。

IIIb 層は黄褐色のビート層で、近世の土層と考える。IVa 層は青灰色粘土であり、中世の土層と考えるが、遺物の出土が少ないため詳細は不明。IVb 層は黄灰色粘土層で炭化物を少量含む。中世の遺物が散発的に出土する。土質や色調、出土遺物から I 区の IVb 層は A～G 区の IVb 層と一連の土層の可能性が高い。中位付近に灰白色のシルト層が薄く堆積しており、これを境に IVb1 層と IVb2 層に細分した。IVb1 層と IVb2 層の色調・土質・混入物の状況はほぼ同じである。

Va 層～VI 層はビート層で、Va 層から下位の層ほど色調が明るく、粘土質に近くなる。遺物の出土は少ない。VII 層は調査区南東コーナー付近では炭化物を定量含む褐色の粘土であるが、北西側に行くに従って土質が変化しビート層となる。古墳時代早期～前期の土器が一定量出土した。土質や色調、出土遺物から I 区の VII 層は A～G 区の VII～VIII 層と一連の土層と考える。

IXa 層～Xb 層からは遺物がほとんど出土していない。IXa 層・IXb 層はビート層、Xa 層・Xb 層は青灰色粘土層である。

XI 層はビート層で、下位ほど色調が明るく、粘土質に近くなる。縄文時代晩期中葉 (大洞 C1 式など) が出土した。縄文時代晩期中葉の土器は、A～G 区では XIIb 層を中心に出土しており、I 区で XI 層とした土層の一部は A～G 区の XIIb 層に対応する可能性がある。

XII 層は淡褐色粘土層、XIII 層は黒褐色ビート層、XIVa 層は青灰色シルト層、XIVb 層は青灰色砂礫層である。XII 層～XIV 層の遺物の出土量は僅かだが、土質や色調、下位の土層の出土遺物から I 区の XIVa 層・XIVb 層は A～G 区の XIV 層と一連の土層と考える。

XVa 層は黒色ビート層、XVb 層は青灰色シルト層である。XVa 層からは縄文時代中期前葉 (新崎式) を中心とする土器が出土した。A～G 区の XVa 層では縄文時代中期後葉 (大木 9a・9b 式など) を中心とする土器が出土しており、I 区と A～G 区では、主体的に出土する土器に時期差があるが、ともに縄文時代中期中には取まっている。I 区 XVa 層は A～G 区 XVa 層と一連の土層の可能性が高い。

XVc 層は褐色粘土層で炭化物を定量含む。縄文時代前期前葉 (布目式・新谷式) の土器が少量と前期後葉 (諸磯 a 式・b 式) の土器が定量出土している。A～G 区の XVc 層では縄文時代前期前葉 (布目式・新谷式) の土器が多量、前期後葉 (諸磯 b 式・c 式) の土器が少量出土している。

主体的に出土する土器の時期差はあるが、I 区 XVc 層と A～G 区 XVc 層は一連の土層の可能性が高い。また、XVa 層と XVc 層にはさまれて存在する、I 区 XVb 層と A～G 区 XIV～XVb 層も一連の土層の可能性が高い。

XVI 層は A～G 区、H 区同様、遺跡の基盤となる土層 (いわゆる地山) である。黄褐色の粘土と砂礫の互層で、魚沼層群の新相に対応できるものと考えられる。

第四章 遺 構

1 概 要

縄文時代前期、縄文時代中期、古墳時代早期・前期、古墳時代後期の遺構がある。土坑・溝・水田跡などの遺構があるが、数は少ない。古墳時代前期の井戸は確認できるが建物跡は未確認である。縄文時代前期、弥生時代中期、古墳時代早・前期は大量の土器が出土しているのに対して、建物跡が未確認なのは、後世の削平の結果で、かつて大武畑と呼ばれていた5～8D以南の高所に集落が存在した可能性が高いと考えている。以下、時代ごとに遺構の記述をする。

2 古 代 (平安時代)

SX87 (図版12・155) 11B22・23、11C2・3に位置する木製品集中地点。掘り込みは確認できなかった。V層～VIa層掘削途中に検出した。木製品にまじり須恵器無台杯(図版68・766)が出土した。また、V層～VIa層からは9世紀を中心とする時期の土器が出土している。9世紀の遺構と考える。

3 弥生時代後期から古墳時代

SK85 (図版1・2・14・164) 8B16・17・21・22に位置する長さ2.19m、幅2.11m、深さ0.78m、平面が略円形、断面が皿状の土坑。覆土はレンズ状堆積で3層に区分した。4本の大型部材が土坑中から出土し、内1本は杭で固定されていた。SD50掘削後XVI層・VIIb層上面で検出したが、SD50との前後関係は不明。覆土3層(最下層)から古墳時代早期～前期の土器が出土しており(図版63・651～654)、この時期の遺構と考える。

SE89 (図版1・2・14・166) 10B21・10A1に位置する長さ1.45m、幅1.23m、深さ1.16m、平面が略円形、断面が台形状の井戸。23層掘削後XVI層上面で検出した。内部に丸太割り抜きの井戸側(図版110・5)がある。底面付近から土師器壺(図版71・851)が出土した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK70 (図版1・2・13・165) 3D10・14・15に位置する長さ1.64m、幅1.23m、深さ1.16mの楕円形の土坑。D層もしくはF層掘削後にXVI層上面で検出した。古墳時代早期・前期の土器と弥生時代中期の土器が出土した(図版63・655～660)。長さ・幅に比べ深さがあり、井戸の可能性もある。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

P61 (図版1・2・13) 8B21に位置する長さ0.78m、幅0.50m、深さ0.15m、平面は楕円形、断面が皿状の土坑。覆土はレンズ状堆積で2層に区分した。23層除去後にXVI層上面で検出した。土器片が定量出土したが図化した土器は無い。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK76 (図版1・2・13) 11C23に位置する長さ1.32m、幅1.24m、深さ0.32m、平面形は多角形、断面が箱状の土坑。中世の溝の覆土を除去後、XVI層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で7層に区分した。土器片が定量出土したが、図化した土器は無い。古墳時代早期～後期の遺構と考えるが、これ以降

の遺構の可能性もある。

SK72・73・74 (図版1・2・13・167) 5ABに位置する土坑。SK73とSK74・72の切り合い関係は不明。SK72はこの3基の中では最も大きな土坑で、長さ2.05m、幅1.68m、深さ0.74m、平面は略円形、断面は台形状である。覆土はレンズ状堆積で5層に区分した。

SK73は長さ1.08m、幅1.04m、深さ0.38m、平面形が台形で、断面も台形、SK74は長さ0.88m、幅0.64m、深さ0.32m、平面形が楕円形、断面が皿状である。3基とも21層除去後XVI層上面で検出した。いずれも土器片が出土しているが図化した土器は無い。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SK301・302・303 (図版1・2・13) 3C7・8・13に位置する土坑。SK303がSK301・302を切る。3基ともIVb層除去後XVI層上面で検出した。土器片が定量出土したが、図化した遺物は無い。古墳時代早期～前期の遺構と考える。SK301は長さ1.79m、幅1.52m、深さ0.51m、平面は円形、断面は階段状、覆土はレンズ状態で2層に分けた。SK302は長さ1.57m、幅1.38m、深さ0.57m、平面は円形、断面は階段状、覆土はレンズ状堆積で4層に区分する。SK303は長さ1.02m、幅0.87m、深さ0.51m、平面は隅丸方形、断面は「U」字状である。覆土はレンズ状堆積で覆土は2層に分けた。

SK95 (図版1・2・13・167) 5C25・5D5に位置する長さ1.46m、幅1.38m、深さ0.54m、平面形が略円形、断面が箱状の土坑。21層除去後XVI層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で4層に区分した。古墳時代中期の土器(図版65 672～675)、木製品(図版125・126 310～328)が出土した。古墳時代中期の遺構と考える。平成6年度の調査でSK49とした土坑と同一の遺構の可能性が高い。SK49からは図版67 717が出土している。

SK6 (図版1・2・12・165) 5A22に位置する長さ1.52m、幅1.08m、深さ0.62m、平面形が楕円形、断面が台形状の土坑。覆土は水平堆積で3層に区分した。21層の除去後XVI層上面で検出した。弥生時代後期の釜(図版67 718)が出土している。弥生時代後期の遺構と考える。

SK59 (図版1・2・12・164) 4A5・5A1に位置する長さ1.94m、幅1.12m、深さ0.38m、平面形が楕円形、断面が皿状の土坑。覆土は23層の除去後XVI層上面で検出した。土器片が出土したが、図化した土器はない。

SK40 (図版1・2・12・165) 6B25・7C5に位置する長さ1.61m、幅0.98m、深さ0.42m、平面形が円形、断面が台形状の土坑。覆土はレンズ状堆積で4層に区分した。23層もしくは⑥層の除去後XVI層上面で検出した。弥生時代後期から古墳時代前期の釜(図版64 670・671)が出土している。弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と考える。

SK55 (図版1・2・12・166) 6C7に位置する長さ1.58m、幅1.66m、深さ1.02m、平面形が円形、断面が半円状の土坑。覆土はレンズ状堆積で4層に区分した。23層の除去後XVI層上面で検出した。古墳時代早期～前期の釜・壺・鉢(図版64 661～665)が出土している。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD50・51・83 (図版1～4・17) 5～11BCに位置する溝。6～11Cは直線的にのびるが5C付近で北側に屈曲する。SD52との合流点以西をSD51、SD52の合流点から、SD33との合流点をSD50、SD33との合流点以东をSD83とした。調査時・整理作業時に遺構番号を誤認し、「SD84」として取り上げた遺物もある。VII層を除去し、VIII層もしくはVIIb層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で2～3層に区分した。1層・3層から多くの遺物が出土した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。多量の土器・木製品が出土した。

SX84 (図版 16) SD83 北側で、SD83 に沿って検出した本列と杭列。2 列の本列があり、南側の本列の南側、北側の本列の北側に杭列が確認できた。水田跡に関係する遺構と考える。SD83 に直行するように検出された本列が人為的なものか、自然の堆積によるものかは不明。

SD33 (図版 1・2) 7・8B に位置する溝。7B で SD50 から分岐し、8B で SD50 に合流する。北岸に畦畔状の高まりと水口状の高まりの切れ目がある。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。直線的にのびるが 5C 付近で北側に屈曲する。VII 層を除去し、VIIa 層もしくは VIIb 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD52 (図版 2) 6B に位置する溝。6B24 付近で SD50 に合流する。VII 層を除去し、VIIa 層もしくは VIIb 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。古墳時代早期～前期の遺構と考える。

SD46・47 (図版 1・2・4) 4U から 6B に位置する溝。6B24 で SD50 に合流する。VII 層を除去し、VIIa 層もしくは VIIb 層上面で検出した。SD47 が SD46 を切る。覆土はレンズ状堆積で SD46 は 3 層、SD47 は 5 層に区分した。弥生時代後期から古墳時代早期～前期の土器が出土しており (図版 62 645・646、図版 63 647～649) このころの遺構と考える。木製品も多く出土した (図版 112～116 45～125)。

SX88 (図版 1・2・4・16・17) 10・11AB に位置する溝もしくは旧河道。SD83 (50) を切る。VIIb 層を除去し、VIIb 層上面で検出した。遺構名を記入せずグリッド名と青灰砂、あるいは「旧河道」の名称で取り上げた遺物も少なくない (図版 66 693～716、図版 137～140 536～590)。11A17・18、11B1・6 周辺に杭列がある (図版 16・17)。

4 縄文時代

SK90 (図版 8・11・17・173) 6B20 に位置する長さ 1.54m、幅 0.61m、深さ 0.21m、平面が楕円形、断面が皿状の土坑である。XVc 層除去後に XVI 層上面で検出した。覆土はレンズ状堆積で 3 層に区分した。覆土中から縄文時代前期前葉の土器片が定量出土した。前期前葉の遺構と考える。

SK93 (図版 8・11・17・173) 7B22・7C2 に位置する長さ 1.28m、幅 1.13m、深さ 0.28m、平面が隅丸方形、断面が皿状の土坑である。XVc 層除去後に XVI 層上面で検出した。覆土は茶褐色粘土の単層で、縄文時代前期前葉の土器片が少量、クルミ種子が定量出土した。クルミ種子はほぼ同一のレベルで、底面からやや浮いた状態で出土している。縄文時代前期前葉の遺構と考える。

SK94 (図版 8・11・17・173) 7A12・17 に位置する長さ 0.81m、幅 0.69m、深さ 0.86m、略円形の袋状土坑。XVa 層掘削中に XVa 層中で検出した。覆土は水平堆積で 3 層に区分した。覆土中からクルミ種子、縄文時代前期前葉の土器片が出土した。XVa 層からは縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代中期の遺構と考える。

SK97 (図版 8・11・17・172) 11A12・17 に位置する長さ 0.40m、幅 0.32m、深さ 0.28m、平面が略円形、断面が「U」字状の小土坑である。XVa 層掘削中に XVa 層中で検出した。覆土はクルミ種子が密に詰まっていた。XVa 層からは縄文時代中期の土器が出土しており、縄文時代中期の遺構と考える。

SD96 5B・C に位置する不整形の溝。XIV 層上面で検出した。覆土は灰色粘土の単層。遺構ではなく地割れや樹木の根の跡の可能性が高いと判断し、図示しなかった。

第V章 遺 物

1 概 要

大武遺跡から出土した遺物には①土器・土製品、②石器・石製品、③木製品・漆製品などがある。遺物の報告番号は、種別ごとに連番とした。以下では、土器・土製品、石器・石製品、木製品・漆製品の順に概要を述べる。

2 土器・土製品

A 土器の概要

時代は縄文時代前期前葉、縄文時代前期後葉、縄文時代中期、縄文時代後期中葉～晩期中葉、弥生時代中期前葉、弥生時代中期中葉、弥生時代後期、古墳時代早期～前期、古墳時代中期、古墳時代後期、古代(8～9世紀)、中世(14世紀前後)の土器・陶磁器が出土した。中世の土器・陶磁器については既に報告済[春日ほか2000]であり、ここでは触れない。縄文時代前期前葉、弥生時代中期、古墳時代早期～前期の土器が多く、縄文時代後期中葉の土器も定量出土したが、他の時期は少ない。時期別に概要を述べる。個々の土器の特徴については観察表参照。

B 縄文時代前期

概 要 前期前葉の土器は器形などにより第3表・第11図のように分類する。縄文時代前期前葉(布目式)のものが大半を占めるが、前期後葉のものも少量ある。土器のほとんどは包含層(XVc層・XVd層、大半はXV層として取り上げ、第三章3基本層序15頁参照)からの出土である。遺存状況が良好な土器が比較的多く、まとまって出土した地点もある。

6B17・18出土土器(図版18・19 1～13) 6B17・18のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的

まとまって出土した。1は深鉢Ⅱ2D類で、口縁部には矢羽状の多段の爪形列と凸帯による蕨手状文がある。地文は結束羽状縄文(片翼状)である。2は深鉢Ⅰ2D類で、口縁部の上下端に矢羽状の爪形列があり、その間に半截竹管による平行沈線の波状文がある。地文は非結束羽状縄文である。12は深鉢Ⅱ2E類で文様帯の上下端に多段の同一方向爪形列があり、その間に半截竹管による平行沈線と爪

口縁形態

I	平口縁
II	波状口縁(4単位が基本)
III	段切り状の口縁
IV	瘤状の突起を持つもの
V	双頭状の突起を持つもの

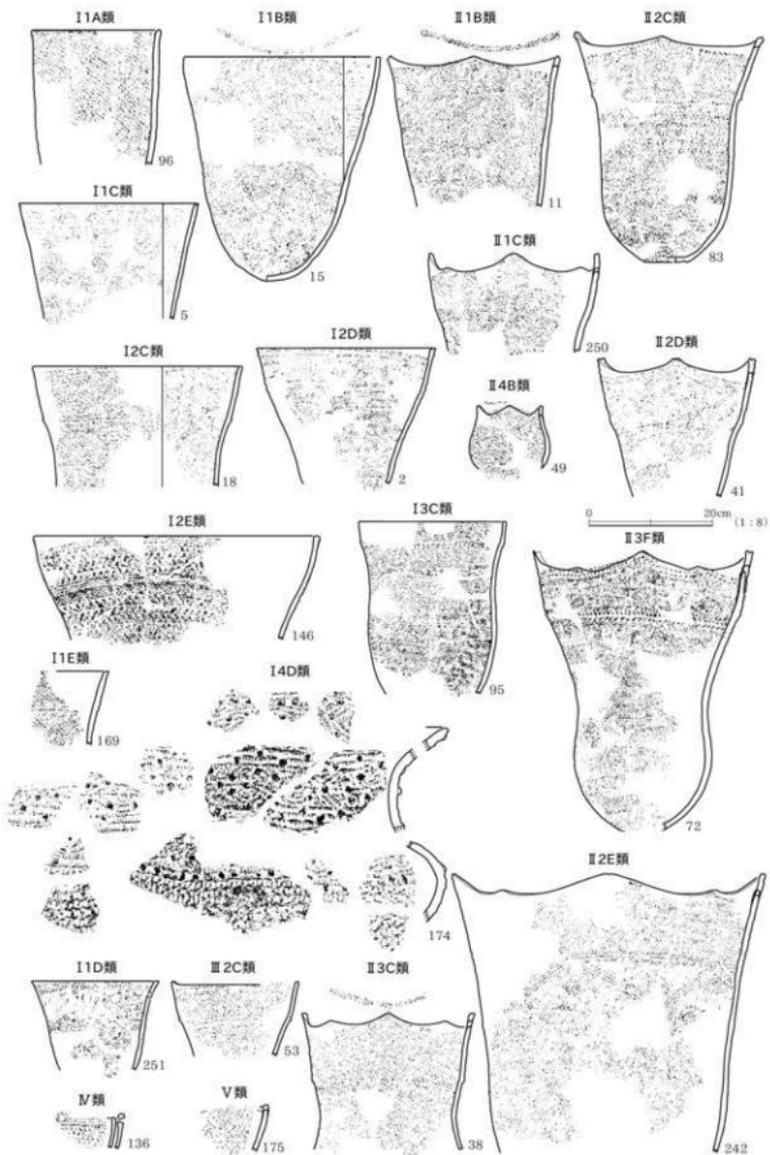
胴部形態

1	寸胴のもの
2	口縁部が鉛曲し、胴部に張りがないもの
3	口縁部が鉛曲し、胴部が張るもの
4	その他のもの

文様

A	地文のみの
B	口縁端部(付近)にのみ地文以外の文様がある
C	口縁端部(付近)と口縁部下端(付近)に地文以外の文様がある
D	口縁部に文様帯があり、文様帯上下端(付近)に地文以外の文様がある。
E	胴部上位に文様帯があり、口縁端部(付近)と文様帯上下端(付近)に文様がある。
F	口縁部と胴部上位に文様帯があり、口縁端部(付近)と文様帯上下端(付近)に文様がある。

第3表 縄文時代前期前葉の土器分類



第11図 縄文時代前期前葉の土器分類 (S=1:10 (5), S=1:8 (その他))

形を組み合わせた「S」字状文がある。

6B14・19 出土土器 (図版 19・20 14~22) 6B14・19 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的多く出土した。15 は深鉢ⅠB 類で底部は尖底、地文は結節回転文であるが、底部から胴下端付近は螺旋状の爪形列があり、口唇部から口縁上端にかけて矢羽状爪形列がある。17 は深鉢Ⅰ2D 類で口縁部に狭い無文帯があり、その下には矢羽状爪形列がある。18 は深鉢Ⅰ2C 類で、地文は結節回転文であるが、他の多くと異なり下段の結節回転の列が上段の結節回転の列を切る。20 は深鉢Ⅰ2E 類で文様帯には半載竹管の平行沈線による鋸歯状文と円形竹管文がある。口縁部と文様帯の上下端には同一・矢羽状爪形列がある。21 は口縁部には撻状工具による刺突列が2段、半載竹管による並行沈線のコンパス文がある。

6B5・10・15 出土土器 (図版 20・21 23~29) 6B5・10・15 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的多く出土した。24・25 は小型の深鉢である。24 の底部は尖底で外面全面に矢羽状爪形列がある。25 の底部は平底で、口縁部から胴上部は無文、胴下部から底部外縁には矢羽状爪形列がある。29 はⅠB 類で口縁部には2段の同一方向爪形列がある。

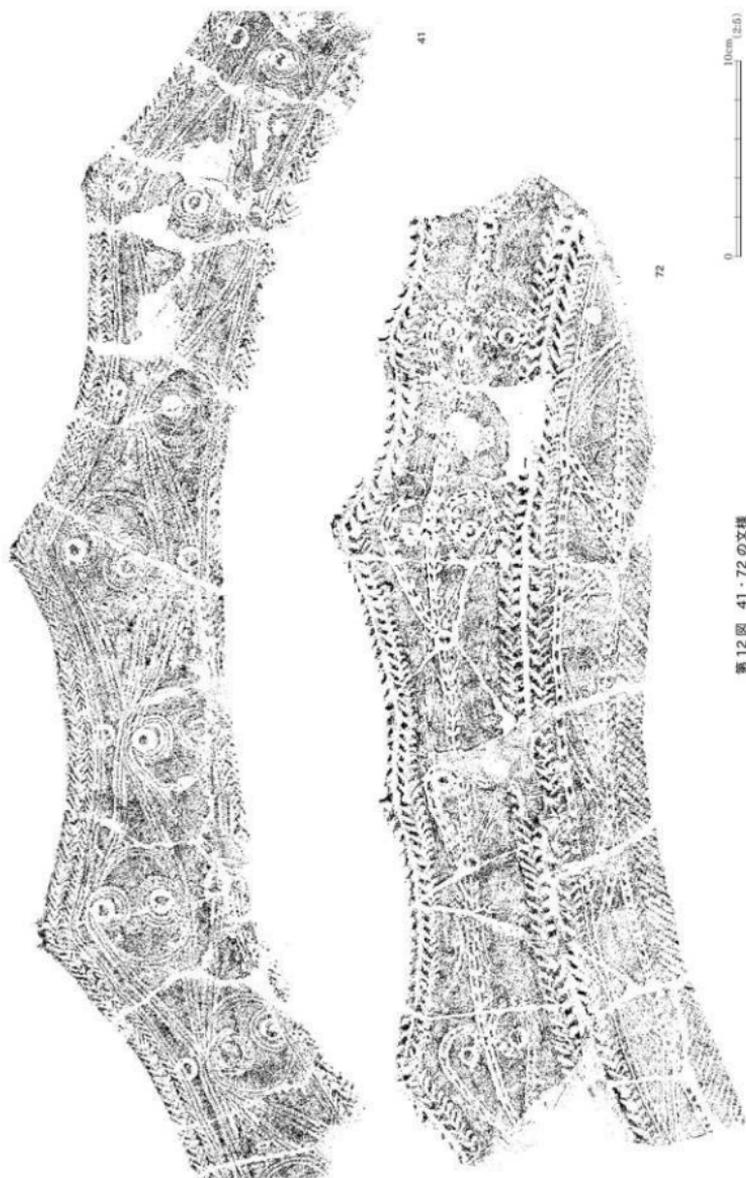
6B5 出土土器 (図版 21 30~35) 6B5 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的多く出土した。33 は撻状工具による刻みの付いた凸帯と燃糸側面圧痕がある。地文は非結束羽状縄文である。34 は半載竹管の平行沈線による歪な鋸歯状文と「S」字状文がある。35 は深鉢Ⅰ2E 類で文様帯には半載竹管による平行沈線の格子目文、文様帯上端には逆「C」字状の爪形列を施した粘土組貼付けによる隆帯がある。

6B9 出土土器 (図版 21・22 36~38) 6B9 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的多く出土した。36 は他に比べ口縁部から体部の開きが大きい。37 はⅠA 類で地文は結節回転文で他のものに比べて長い。38 はⅡ3C 類で口縁部と胴部に矢羽状爪形列がある。地文は結節回転文である。

6B13・14 出土土器 (図版 22 39・40) 6B13・14 のXVc 層から遺存状態が良好な土器が比較的多く出土した。39 は深鉢ⅠA 類で上半が半載竹管を使った縦位の平行沈線、下半にRL縄文がある。40 は深鉢ⅠB 類で地文は「乙」字状になる特異な結節回転文である。

その他の6A・B 出土土器 (図版 22~24 41~71) 41 は深鉢Ⅰ2D 類で、口縁端部に矢羽状爪形列、口縁部の文様帯に蕨手状の燃糸側面圧痕がみられる。地文は非結束羽状縄文である。他に蕨手状の燃糸側面圧痕があるものに43~45があり、このうち43・45には刺切文がある。42 は表裏にRL縄文がある。46 は細い半載竹管を用いた平行沈線による斜格子文がある。47 にも半載竹管による並行沈線がある。48 は胴部径が10cmに満たない小型土器である。胴部に文様がみられるがモチーフは不明。地文は矢羽状爪形列である。49 は深鉢Ⅰ4B 類で地文には結節回転文と網目燃糸文を交互に配置する。51 は4単位の波状の最底部にも突起がみられる。53 は口縁部に段差がある深鉢Ⅲ類である。55 は口縁部に棒状工具による円形の押圧列が巡る。57 は半載竹管による並行沈線と矢羽状爪形列・円形竹管による蕨手状文がある。62 はコンパス文が2列ある。地文は非結束羽状縄文である。66 は口縁端部に同一方向爪形列がある。口縁部の文様帯にも横位の爪形列がある。口縁端部の爪形と文様帯の横位の爪形列は異なった施文具と考える。67 は地文が組紐で、上部には66の口縁端部とよく似た爪形列がある。同一個体の可能性が高い。

7A XVd 層出土土器 (図版 24 72~82) XVd 層は埋没谷の谷底付近でのみ確認できた土層である。7A18・21・22 などから比較的多く出土した。72 は深鉢Ⅱ3F 類で、胴部文様帯上半に半載竹管の並行沈線、爪形列、円形竹管などにより蕨手状文、文様帯下半に半載竹管の平行沈線による鋸



第12図 41・72の文様

歯状文がある。口縁部と文様部の境には矢羽状爪形列が巡る。76は深鉢1C類でコンパス文、半載竹管による平行沈線、同一方向爪形列などが確認できる。地文は非結節羽状縄文である。77はコンパス文、円形竹管・2列の同一方向爪形列による「S」字状文がある。79は地文が付加条縄文である。80には半載竹管による格子目文がある。

7B1・2出土土器 (図版25 83～93) 7B1・2のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。83は深鉢II2C類で、底部は平底となる。口縁部と胴部の段には矢羽状爪形列がある。地文は結節回転文で胴部下端付近は爪形列が螺旋状に巡る。87は深鉢II類で地文は二重の網目状燃糸文である。88は半載竹管による横方向の平行沈線、89は半載竹管を用いた平行沈線による格子目文がある。90はEもしくはF類で半載竹管による平行沈線と爪形による鋸歯状文があり、鋸歯状文の上下端には矢羽状爪形列が巡る。93は地文(結束羽状縄文(結束部強調))の上に粘土紐を貼り付けた隆帯で文様を表す。

7A・B出土土器 (図版26 94～118) 95は13C類で地文は結束羽状縄文(片貫状)である。100は深鉢I1B類で、地文は組紐である。101は口縁部に燃糸側面圧痕による蕨手状文などがある。102は結束羽状縄文の上に隆帯を貼付ける。103は細い半載竹管の平行沈線と爪形列により蕨手状文を表す。地文は矢羽状爪形列で蕨手文を表す爪形とは異なる形状である。104・106・107は連続刺突・半載竹管・円形竹管などにより鋸子状・菱形などの幾何学状の文様を表す。105は半載竹管・円形竹管・同一方向爪形列で蕨手状文・鋸歯状文を表す。109は半載竹管による平行沈線・波状文、同一方向爪形列などがある。110は地文が網目状燃糸文、111は文様帯に網目状燃糸紋を用いる。112は平行沈線とRL縄文がある。115・116は縦位の矢羽状爪形列がある。117は底径約3cmの小型の土器で、底部外面には渦巻き状の沈線がある。

8A・B出土土器 (図版27 119～132) 120は深鉢II2D類で、口縁部の文様帯には矢羽状爪形列、円形竹管文による蕨手状文がある。口縁部や胴部の段には蕨手状文と同一の工具を用いた矢羽状爪形列がある。121・122・124は棒状工具による連続刺突で文様を表す。121の意匠は不明、122は蕨手状文、124は幾何学文である。123・125は爪形列で文様を表す。123は鋸歯状文と連結文、125は上段が鋸歯状文と連結文で下段が「S」字状文である。128～132は底部で128は尖底、129～132は平底である。130は渦巻き状に爪形が巡る。129・131は中央付近が横位、外縁付近が渦巻き状に爪形を施す。129～131は底部と胴部は同じ爪形を使用している。132は底部外縁に爪形が巡る。胴部と底部外縁とは異なった工具である。

9A15出土土器 (図版28 133～136) 9B15のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。133はI2C類で、地文は結束羽状縄文(片貫状)である。134はE類かF類で地文は結節回転文である。連続円形竹管による「S」字状文がある。135はI1b類で、条痕・LR縄文痕がある。

9B5・10出土土器 (図版28 137～140) 9B5・10のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した。137はII2C類で、底部は尖底である。地文は結節回転文であるが、底部から体部下にかけて螺旋状に爪形列が巡る。139はII D×F類で、口縁部の文様帯に断面方形の棒状工具の連続刺突がある。140はI2D類で口縁部に無文帯がある。

9A・B出土土器 (図版29 141～156) 146はI2E類で口縁部部に半載竹管による平行沈線、胴部に半載竹管に平行沈線と波状文がある。地文は非結束羽状縄文である。147はII類で口縁部に3列の同一方向爪形列がある。地文は組紐である。149はII D×F類で、半載竹管による平行沈線と爪形列で鋸歯状文などを表す。150は地文が円形竹管の連続刺突で、上半と下半で刺突の方向が異なる。151・152は

Ⅱ類で地文が矢羽状爪形である。151は口縁部、152は胴部に無文帯がある。153はⅡ1D類で口縁部の文様帯に撚糸側面疔痕がある。154は、地文の非結束羽状縄文のなかに半載竹管による平行沈線と爪形列による蕨手状文がある。155はⅠD×F類で、口縁部の文様帯に半載竹管による平行沈線で幾何学文を表す。156はⅠ1B類で、外面は条痕で口縁上端には爪形列が巡る。

10A・B出土土器(図版30～34 157～241) 10B14・15・20のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した(157～171)。157・158はⅠ1B類で、地文は157が結節回転文、158は斜縄文である。159～161はⅡ2D類もしくは、Ⅱ2D×F類で、159口縁部の文様帯には棒状工具の連続刺突による鋸歯状文がある。160は口縁部に無文帯がある。161は矢羽状連続刺突の下に無文帯があり部分的に赤彩を行う。162～164・169は、胴部に半載竹管による波状文・コンパス文がある。169の地文は組紐である。162はⅡ類で口縁部には同一方向爪形列がある。163は口唇部に棒状工具による連続刺突がある。165・167はⅠD×F類で同一方向爪形列による「S」字状文などがある。165の爪形の方向は逆「C」字型である。168は地文が付加条縄文である。170はⅠ1B類で地文が組紐である。171はⅡ類で口縁部には半載竹管による平行沈線と同一方向爪形列がある。地文は口縁部付近に非結束羽状縄文が3列あるが、これより下はループ文である。

10A17・18のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した(174～185)。174は口縁部が外反し胴部が張る特異な器形で口縁部の文様帯には刻みのある貼付けの凸帯、瘤状の突起、円形竹管などにより幾何学文・蕨手状文などを表す。175はV類で口縁部付近に半載竹管による平行沈線と同一方向爪形列による連結文がある。地文は非結束羽状縄文である。176はⅡD×F類で、口縁部と胴部に棒状工具による連続刺突がある。177はⅠ2C類で口縁部は棒状工具による連続刺突、胴部は矢羽状円形列がある。178はⅠ1A類で、底部は丸底となる。地文は結節回転文である。179・180はⅠ1B類で地文はループ文である。181はⅡD×F類で口縁部は矢羽状爪形列、口縁部の文様帯は同一方向爪形列による文様がある。182は尖底の底部で、底部から胴部にかけて爪形が螺旋状に巡る。183はⅠ1B類で地文は結節回転文である。185はⅠ1C類で、胴部に半載竹管による平行沈線がある。地文は蹄状工具による連続刺突である。

10A17・18・22・23 XVc層から土器が比較的まとまって出土した(186～189)。186は口縁部に同一方向の爪形列が2列あり、地文は太い原体を用いた非結束羽状縄文である。188はⅡ1E類で半載竹管による平行沈線、爪形の同一方向爪形列、円形竹管による鋸歯状文や扇状文がある。189は2類で胴部には矢羽状爪形列がある。地文は組紐である。

10B1・2のXVc層から遺存状態が良好な土器が比較的まとまって出土した(190～201)。190・192はⅠ2C類で、190の胴部は同一方向爪形列があり地文は結節回転文、192は矢羽状爪形列で地文は結束羽状縄文(結束部強調)である。191はⅠ1B類で地文は結節回転文である。193はⅠ2E類で胴部の文様帯は無文である。地文は結束羽状縄文(結束部強調)である。194はⅠ1B類で口縁部には棒状工具による連続刺突が巡る。195はⅠD×F類、196はⅡF類で同一方向爪形列、円形竹管による「S」字状文がある。197は半載竹管の平行沈線による格子目文がある。198は半載竹管の平行沈線による格子目文がある。199はⅠ類で、口縁部には半載竹管による平行沈線があり、地文は組紐である。200はⅠ類で、地文は同一方向爪形列である。201はⅡ1B類で地文は条痕文である。口縁部は爪形列がある。

202は文様帯に撚糸側面疔痕がある。文様帯の下端には同一方向爪形列がある。203・204は棒状工具による刺突による文様がある。205～207は爪形による文様があるもので、このうち205・206は

爪形列による幾何学文がある。207 は矢羽状爪形列・円形竹管文による蕨手状文がある。211～214・218～220・221 はコンパス文・波状文がある。このうち 211・212・218・219 は半載竹管による平行沈線と同一方向爪形列がある。地文は 211 が斜縄文、212・218・219 が結束羽状縄文（結束部強調）、220 が組紐である。213・214 は半載竹管文による平行沈線があるが爪形列はない。213 の地文は非結束羽状縄文である。221 は篋状工具による刺突があり、地文は非結束羽状縄文である。224 はⅡ類で地文は結条体、225 は小波状の口縁で外面は条痕文である。226 は口唇部に棒状工具による連続刺突がある。地文は半載竹管の平行沈線による格子目文である。227 は円形竹管の連続刺突がある。228 は陸帯の文様がある。229～331 は地文が爪形のもので、229 は矢羽状爪形列、230・231 は同一方向爪形列である。232～241 は底部破片で、232 は外面に爪形文があり、尖底となる。爪形は底部から胴部に向かって放射状に施文される。233～235 は径 3cm 以下の小型の底部、236～241 は底径 4.5cm 以上の平底の底部。236・237・239・240 は爪形を渦巻き状に施文する。238 は同一方向爪形列、円形竹管による「S」字状文がある。241 は底部外縁に同一方向爪形列がある。

11A・B 出土土器（図版 35 242～249）242 はⅡ1E 類。胴部文様帯には半載竹管による平行沈線、同一方向爪形列、円形竹管による鋸歯状文・連結文がある。文様帯上下端には矢羽状爪形列がある。地文は非結束羽状縄文である。243 はⅠ1c 類で、口縁端部には同一方向爪形列、胴部には口縁部とは異なる爪形列が巡る。地文は結束羽状縄文（結束部強調）である。244 は小形の土器で他のものに比べ体部の外傾度大きい。地文は矢羽状爪形列である。245・247 はⅡ類で口縁端部に棒状工具による刺突が巡る。246 は文様帯に半載竹管による平行沈線の鋸歯状文、文様帯上端には矢羽状爪形列がある。地文は非結束羽状縄文である。

4C・D、5B・C・D 出土土器（図版 35・36 250～261）250 はⅡ1C 類で、胴部には同一方向爪形列がある。地文は結節回転文である。251 はⅠ1D 類である。口縁部文様帯は無文である。地文は横位の爪形列である。255 は矢羽状爪形列による幾何学文がある。257 は半載竹管による平行沈線と爪形列の文様がある。258 はⅡ1B 類で地文は横位爪形列である。260 は口縁部に円形竹管の連続刺突による幾何学文、口縁端部と下端に矢羽状爪形列がある。

I 区（102・103C）出土土器（図版 36 262～266）262 は口縁端部に矢羽状爪形列があり、地文は結束羽状縄文（片翼状）である。

263・265 は細い半載竹管による平行沈線と半載竹管による文様がある。266 は口縁部が小波状となり、胴部は斜縄文である。3 点とも諸磯 b 式平行の土器と考える。264 は大木 5 式の深鉢である。

その他（図版 36 267～275）267～269 は十三菩提式の深鉢で、同一個体である。270 は諸磯 c 式平行の深鉢である。271～275 は XV 層以外の土層（層序が不明なものも含む）から出土したものや出土地点が不明な前期前葉の土器である。271 はⅠ類で口縁部から胴部に同一方向爪形列・コンパス文による文様がある。272 は小型土器Ⅰ2C 類で、地文は矢羽状爪形列である。274 は凸帯による蕨手状文がある。275 は尖底となる底部で文様は底部から体部に向かって放射状に施文される。

C 縄文時代中期～後期初頭

縄文時代中期から後期初頭の土器（276～286・288）は XV a 層を中心に出土した。276～280 は縄文時代中期初頭から前葉の土器で 278・280 を除き I 区（103C・D）からの出土である。281～286 は中期後葉の土器で A・B・F 区からの出土である。

D 縄文時代後期中葉～晩期中葉

分類

縄文時代後期中葉～晩期中葉までの土器を帰属時期および系統・器種により、次のとおり分類する。

第I群(後期中葉) 関東地方の加曽利B式に併行する一群で、XIIIe層からまとも出土している。器種には深鉢・浅鉢・壺がある(第13図)。深鉢は第4表のように細分した。深鉢Aは加曽利B1式期に比定すると考えるが、一部は加曽利B2式期に下るかも知れない。深鉢B類は、加曽利B3式期に位置づけられる可能性が高い。

第II群(後期後葉) 東北地方(新潟県下越地方を含む、以下同じ。)のいわゆる瘤付土器に併行する一群である。出土量は少ないが、XIIIb層にややまとまりが認められる。器種には深鉢・壺が確認できる。

第III群(晩期前葉) 東北地方の大洞B式～BC式に併行する一群で、XIIIa層からまとも出土している。器種には深鉢・浅鉢・台付鉢・壺・注口土器がある。深鉢は第4表のように細分した。

第IV群(晩期中葉) 東北地方の大洞C1式に併行する一群で、XIIb層からまとも出土している。器種には深鉢・浅鉢・壺がある(第13図)。浅鉢は第4表のように細分した。いずれも磨消縄文手法による雲形文が器面全体に展開する。

第V群(北陸系土器) 北陸地方西部(富山県・石川県方面、以下同じ。)に系譜を持つ土器を一括する。後期後葉～晩期前葉が認められ、搬入品の可能性がある。

第VI群(粗製土器) 粗製の深鉢を一括する。器形や法量に大小の違いがあるが、ここでは器面調整及び地文の施文方法の違いから第4表のように細分した(第13図)。A類は信濃川上・中流域に主な分布域があり、地域色の濃い器種である。第IV群に組成する可能性が高い。

XV・XVb層(図版37 287・289～293)

第I群(287・289) 287は深鉢A2類である。柳状工具による擦痕が特徴的である。289は深鉢A1類である。外面はLR縄文の上から不連続な3条の沈線が施され、内面には外面よりも太い沈線が2条めぐる。内面施文は加曽利B1式に特徴的であるが、外面の粗雑な沈線は一般的ではないらしい。

第II群(290・292) 290は壺または注口土器の胴部で、刺突列で裝飾帯の区画および弧線文を表出する。瘤付土器第II段階に位置づけられようか。292は大波状口縁の深鉢で、比較的幅広い口頸部裝飾帯にLR縄文を充填した曲線的なモチーフが描かれる。磨り消された無文部に比べて縄文充填範囲が比較的広いこと、頸部で括れる器形から瘤付土器第I段階(西ノ浜式)

I群土器(加曽利B式平行)

深鉢A	口縁部に平行沈線帯を持つもので、平行沈線を縦に区切る単位文がしばしば伴う	1	口縁部が「く」字に内屈する
		2	口縁部が屈折しない
深鉢B	口縁部から胴部上半にかけて、磨消縄文手法による曲線的なモチーフを描くもの		

II群土器(大洞B～C平行)

深鉢A	口縁部から胴部上半を広く裝飾帯とするもので、胴部中ほどに括れを持ち、口縁部にかけて外反する。		
深鉢B	口縁部の比較的狭い範囲を裝飾帯とするもの	1	口縁部が「く」字に屈折する
		2	口縁部が屈折せず外反または内湾する

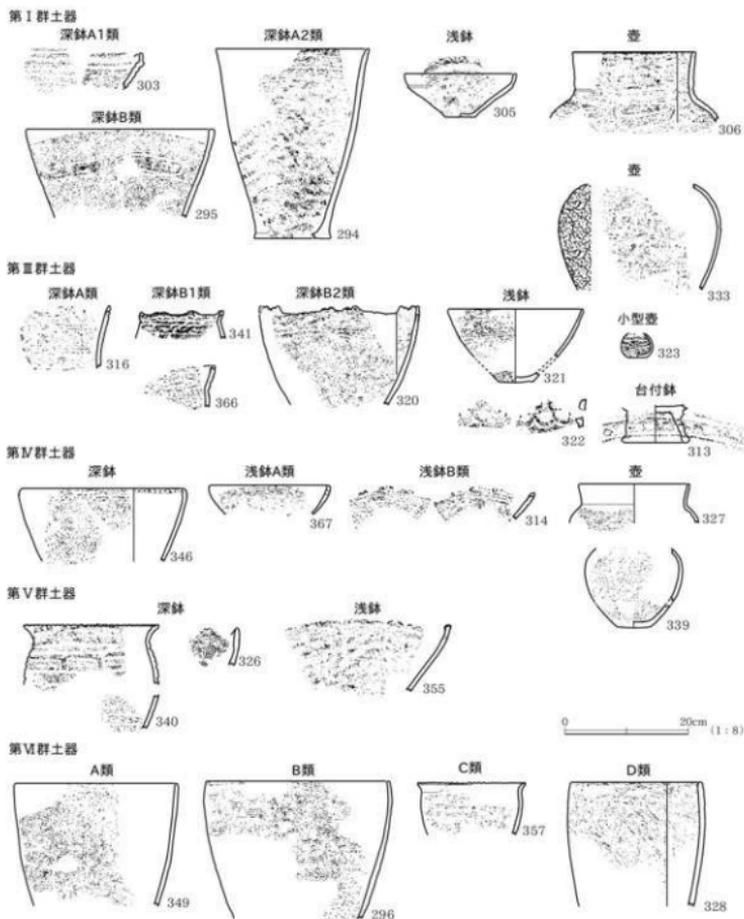
III群土器

浅鉢A	底部から強く内傾しながら立ち上がるボール形のもの
浅鉢B	広い底部から口縁部にかけて直線的に外反する台形のもの

VI群土器(粗製土器)

A類	口縁部を丁寧にナデ調整して無文帯を作り出し、以下に縄文・然糸文・刷目状然糸文などの各種地文を施文するもの。原体を縦位方向に移動し、無文帯直下に結節回転文を施すものが多い。
B類	口縁部無文帯を作り出さないもの
C類	口縁部が「く」字に短く外反するもの
D類	器面を粗いナデ又はケズリ調整した無文土器。

第4表 縄文時代後期中葉～晩期中葉の土器分類



第13図 縄文時代後期～晩期の土器分類 (S=1:8)

と判断したが、当該期に特徴的な口縁部の肥厚が認められないことから第I群(加曾利B3式)に遡る可能性もある。

第Ⅲ群(291・293) 291は浅鉢B類で、口縁内面には装飾的な粘土紐が貼付される。293は浅鉢A類で、外面には炭化物が厚く付着している。

XIIIe層 (図版38 294～305)

第Ⅰ群(294・295・297～303・305) 303は深鉢A1類、294・298～300は深鉢A2類である。303は、多条の平行沈線を左右逆に開口する弧線で区切るもので、LR縄文を地文として施されている。内面の平

行沈線が右端でやや上がることから振幅の小さな波状口縁と推測される。299は、加曽利B1式の指標である「の」字文が施文されたもので、最上段の「の」字文の上端には円形の刺突が加えられる。また、上下の「の」字文では巻き方が左右異なる。294・298・300は平行沈線を縦の短沈線で区切るもので、前2者が平行沈線内にLR縄文を充填するのに対して、300では縄文施文が欠落する。294の口縁内面では、図面では上手く表現できていないが段が形成されている。なお、300と同様の連続する刻みが294・298の口端部でも認められる。301は細い平行沈線が粗雑に施されただけの小型品であるが、内面には漆膜が厚く付着しており、漆容器として利用されたことが良く分かる。

295・297は深鉢B型である。295は胴部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり、口縁部で内湾する器形で、全面にLR縄文を施文した後、研磨により「D」字状の無文部を表出している。口端部が肥厚する点が特徴的である。297は胴部に括れを持つ器形で、胴部には逆三角形のモチーフが磨消縄文手法によって表出されている。地文はLR縄文で、加曽利B3式期に特徴的な羽状縄文にはならない。胴部下位のやや幅広い無文帯は、上端を2条の刺突列で、下端は沈線のみで区画する。305は、口縁部下端に段を作り出し、その下にLR縄文による縄文帯を形成する浅鉢である。口端部を面取りし、器面をよく研磨するのが特徴的である。

第II群 (304) 304は大波状口縁深鉢で、波頂部とその直下に2個1対の刺突を充填した瘤を貼付している。口端には「ハ」字状沈線。波頂部下の三角形区画内には円形・楕円形のモチーフを充填するものは、柏崎周辺の海岸部や信濃川上流域など、新潟県中・上越地方に特徴的に認められ、地域型式として設定できる可能性がある。東北地方の瘤付土器第II～III段階に併行すると推測されるが、詳細な対応関係は不詳である。

第VI群 (296) 296は口縁部から胴部にかけて横走るRL縄文で充填されたB型である。口縁端部を面取りして、比較的薄く仕上げた特徴は第III群に組成する粗製土器にしばしば認められる。

XIII b 層 (図版 39 306～314)

第I群 (306) 306は大型壺で、筒形の口頸部はよく研磨されて光沢を持つ。胴部では粗いLR縄文を地文として楕円形の区画文が磨消縄文手法で表出されている。一方、内面ではハケ目状の工具痕が明瞭に認められる。

第II群 (307～311) 307・310は大波状口縁深鉢である。307は波頂部とその直下に刻みある円形の瘤が貼付され、波頂部下は無文とする。一方、310は台形の大幅振りの波頂部を持ち、口端には「ハ」字状の刻みを連続して加える。波頂部下は、RL縄文を地文としてレンズ形の区画や弧線・刺突などを充填して加飾が著しく、XIIIe層の304と特徴を共有する。なお、口縁部下は無文帯が貫入し、縄文の帯で文様が描かれるらしい。309は口縁部装飾帯と頸部無文帯の重畳が明瞭なもので、頸部には補修孔が穿たれている。口縁部には突起が付き、頂部には2個1対の刻みを加えた瘤が貼付される。全体の文様構成が不詳だが、突起直下に三叉文が認められることから、後期末・瘤付土器第IV段階の可能性もある。また、頸部は無文とする波状口縁深鉢は富山県方面に特徴的であり、本例は北陸地方西部に由来する第V群に位置づけるべきかも知れない。308の2点は同一個体と思われる。胴部中ほどに弱くびれを持つ深鉢の胴部上半と推測され、LR縄文を充填した右下がりの入組文が施文される。311は胴部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がる平口縁深鉢で、口端には外面に肥厚したヒレ状の突起を持つ。胴部上半には308左に似たレンズ形の入組文が描かれるが、入組文及び胴下半にはハケ目状工具による条線文が充填される。

第Ⅲ群 (312・313) 312 は外面を赤彩した壺で、LR 縄文を地文として三叉文やクランク状の沈線が施文される。313 は台付鉢の脚部で、円形・鼓形の透かしを持つ。特筆されるのは脚部の内面にアスファルトと推測されるタール状の黒色物が厚く付着していることで、反転のうえ容器として再利用されたことが良く分かる。全て大洞 B 式に位置づけられる。

第Ⅳ群 (314) 314 は第Ⅳ群の浅鉢 B 類である。粘土紐を貼り付けた内面装飾や雲形文を描く沈線は粗雑で、大洞 C1 式を模倣したものと推測できる。

XIII a 層 (図版 39・40 315～330)

第Ⅰ群 (315) 315 はモチーフの全形が不明であるが、295 に類似した「D」字状の無文部が展開すると推測する。加曽利 B3 式並行期に位置づけられるだろう。

第Ⅱ群 (316) 316 は胴部上半で括れる小波状口縁深鉢で、複数の装飾帯が重畳する。三叉状の陰刻が装飾帯の区画と接続し、いわゆる三叉文としての独立性が未発達であることから、後期末・痛付土器第Ⅳ段階に併行するものと考えられる。

第Ⅲ群 (317～324) 317 は口頸部を無文とする広口壺で、頸部と肩部の境界に段を持つのが特徴的である。肩部以下は LR 縄文が施される。318 は内外面を赤漆塗布したもので、壺の頸部と推測される。器壁が薄く、胎土はシルト質で精良である。319・321・322 は浅鉢、320 は深鉢 B2 類である。いずれも対向する三叉文が結合した入組三叉文が定型化しており、大洞 B2 式期に比定することができる。壺の 323 も同時期のミニチュア品である。322 は浅鉢の大型突起で、本来は円形の透かしが 3 個並んだものであるが、中央を除いた左右の透かし部が欠損している。324 は注口土器の胴下半で、注口基部に施文された玉抱き三叉文が認められる。器面調整が粗く、成形時の粘土の凹凸が明瞭に残っている。322・324 は大洞 B1 式に位置づけられる。

第Ⅴ群 (326) 326 は北陸地方西部の八日市新保式で、器面は黒色研磨されて鈍い光沢を持つ。搬入品の可能性が高い。

第Ⅵ群 (325・327～330) 327 は広口壺である。口頸部は黒色研磨され、焼成も良好で堅緻な胎土を持つ。肩部以下は LR 縄文を地文として結節回転が複数段にわたり施される。328 は D 類で、ヘラ工具による粗いナデ調整の痕跡が明瞭に残る。329 は B 類で、器面調整が粗いため器面の凹凸が激しいが、LR を原体として糸が横走する。330 は胴部に LR 縄文を施した粗製深鉢の底部付近であるが、内外面及び破断面に厚くアスファルトが付着している点の特徴的である。

XIII b 層 (図版 40～42 331～354)

第Ⅲ群 (331～334・341) 332 は壺の胴部破片である。磨消縄文手法により曲線的なモチーフが描かれ、節の細かい LR 縄文が充填される。無文部のミガキが顕著であり大洞 B1 式と推測した。331・333 も壺である。331 は細頸壺で、胴部上半には入組三叉文を祖形とするモチーフが描かれ、大洞 BC1 式に比定することができる。333 は外面には赤漆、内面には黒漆が塗布された大型壺で大洞 B2 式に位置づけられる。胎土は非常に軟質で、パッチ状の剥落が認められる。334 は「く」字に外反する深鉢 B1 類である。口縁部装飾帯には定型化以前の羊歯状文が認められ、大洞 BC1 式に位置づけられる。341 は第Ⅲ群深鉢 B1 類で大洞 B2 式に比定できる。装飾帯の上段では単位文化した入組三叉文が 2 個見えるが、その右側では玉抱き三叉文の残存がよく認められ、大洞 B2 式のなかでも古相を示す可能性がある。

第Ⅳ群 (335～339・342・343・344・345・346) 335・337・338・342 は浅鉢 B 類である。335・337 では口縁部の内外面に二溝間の截痕が配される。特に 335 の内面では、羊歯状文の特徴がより残存

しており、古相を示す可能性がある。一方、338・342の口縁部は平行沈線帯のみとなる。336・343～346は深鉢である。いずれも口縁部の裝飾帯が幅狭く、346では裝飾帯の狭小化のため羊歯状文が斜行する隆線に形散化している。また内面には凹形の押圧が連続して施される。口縁部の裝飾帯は、343では平行する沈線、344は平行沈線間に不連続な沈線が充填されている。なお、両者共に胴部は縦位の燃糸文が施され、343では口縁直下に結節回転が認められる。

第V群 (340) 340は北陸地方西部の中屋式土器である。胴部の裝飾帯は2段に分かれ、上段では「日」字状のモチーフが磨消縄文手法で表出され、下段では入組文が沈線のみで描かれる。RL縄文を地文とする。

第VI群 (347～354) 347～349・352はA類である。347と349は網目状燃糸文またはLR縄文を縦位回転施文し、348はLR縄文を横位回転施文している。いずれも口縁部を無文帯として、348・349では結節回転文が口縁部と胴部を区画している。352は解けたような粗い網目状燃糸文が回転施文されたもので、口縁部直下に見える連続する縦方向の陰刻は、燃糸文を結わえた原体の痕跡と推測され、長さ35～40mm程度を測る。350はC類で、「く」字状に外反する口縁部には中央を刻んでB形にした突起が貼付されている。351はRL縄文を数段にわたり横位回転施文したもので、底部直上をミガキ調整して無文帯を作り出している。353は網目状燃糸文を施文したもので、後者の底部直上ではナデ調整により無文帯としている。354の底部には十字に重ねたササの圧痕が確認できる。

XII a 層 (図版 43 355～360)

第V群 (355) 355は北陸地方西部の中屋式土器の浅鉢である。口端部の1か所に「ハ」字状の粘土紐を貼付し、その周辺のみ縄文施文する。また口縁外面では一定の幅を縄文帯とし、それ以下をミガキ調整で無文とする。

第VI群 (356・357・359) 356は口縁部を無文帯とするA類で、横位回転施文された網目状燃糸文が胴部全面に展開する。357は無文のC類で、口頸部が短く外反し、口端部は連続する小波状となる。

その他 (358・360) 358は大型壺の口頸部である。第III群に組成する可能性がある。360は節の粗いLR縄文が施された台付深鉢又は鉢の台部である。

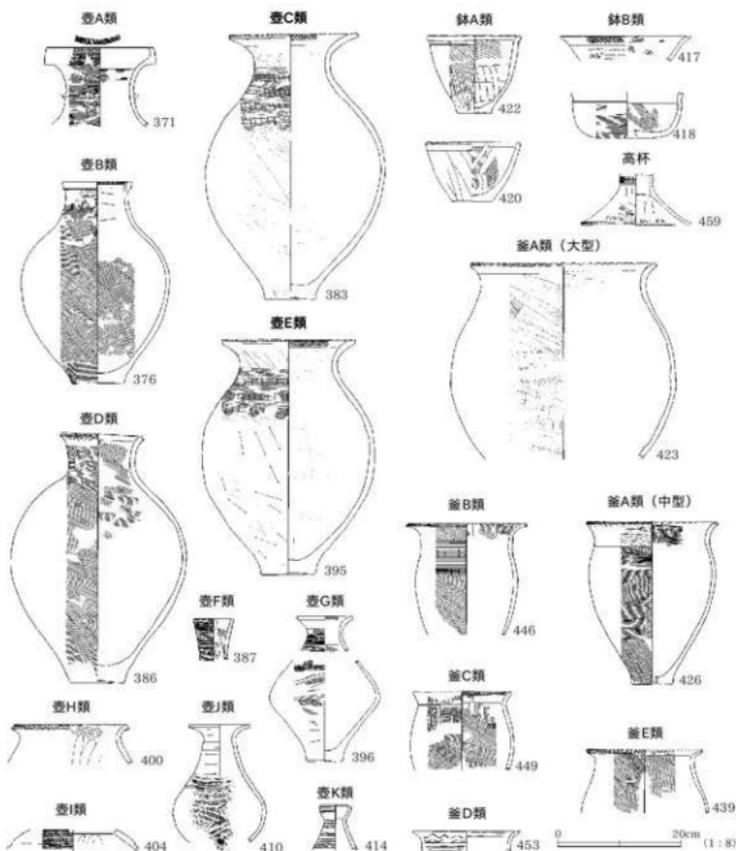
その他の縄文時代後期～晩期の土器 (図版 43 361～368)

361は第III群の深鉢B2類、366は深鉢B1類、362は壺である。羊歯状文の存在から大洞BC2式に位置づけられるが、裝飾帯の幅に差異があり、366が361よりも古相を示している可能性が高い。367は碗形の浅鉢で、口縁部には羊歯状文を祖形とする二溝間の截痕、胴部には磨消縄文手法による雲形文が展開している。二溝間の截痕は一部で羊歯状文の様相が残存しており、第IV群のなかでも古相を示す可能性がある。363は燃糸文を縦位回転した第VI群B類、368はケズリ調整した第VI群D類である。

E 弥生時代中期

概要 弥生時代中期の土器は弥生時代中期前半に位置づけられるものと中期後半に位置づけられるものがある。中期前半の土器は5A～CのSD47・51や20層などと9Bの23層やSD50などから出土している。これらは古墳時代前期を中心とする時期の遺構・土層と考えており、当期の水田造営などに伴う掘削の結果、これらの遺構・土層に混入したものと考えられる。

中期後半の土器はD区(主に3・4D)F層、G区(4・5D)灰色粘土層から出土している。G区の調査はD区の調査終了後に着手したため、D区F層とG区灰色粘土層を同時に見比べることはできなかったが、土層の特徴や出土遺物から同一の層序と考えている。第5表・第14図のように分類した。



第14図 弥生時代中期中葉の土器分類 (1:8)

壺	A類	口縁部が受口状となる壺	鉢	A類	身の深い鉢を一括した
	B類	口縁部が比厚する壺		B類	身の浅い鉢を一括した
	C類	やや細い頸部に大きく外反する口縁部がつく壺		A類	頸部・胴部に文様がない釜
	D類	細くやや外反する口頸部をもつ壺		B類	頸部・胴部に文様のある釜
	E類	太く短い頸部に外反する口縁部がつく壺		C類	信州系の釜を一括した
	F類	非常に細い直立気味の口頸部をもつ壺(細頸壺)		D類	東北系の釜を一括した
	G類	算盤玉型の体部に外反する口頸部がつく壺		E類	受口状口縁の釜
	H類	口頸部が短く屈曲する壺			
	I類	無頸壺			
	J類	信州系の壺を一括した			
	K類	東北系の壺を一括した			

第5表 弥生土器の分類

D区F層・G区灰色粘土層（図版44～51 369～453）

壺（図版44～47 369～414）369～373は受口状口縁を持つ壺A類である。体部の形態は不明。369・370は頸部に凸帯が2条ある。371は凸帯が1条で、頸部には轡による擬流水文が巡る。372は頸部に幅広の凸帯が巡る。凸帯には口縁部同様矢羽状櫛目文が巡る。頸部下には廉状文と波状文がある。374は口縁部がない凸帯が2条巡ることからA類の可能性が高い。

375～377・379・388は口縁部が比厚する壺B類。375は口縁端部に刺突が巡る。376は全形がわかる資料で安定した平底にやや長い体部が付く。頸部・体部は無文である。388は口縁端部に櫛目文、口縁部外面にLR縄文、頸部に直線文と廉状文がある。

378・380～383・389は体部がやや長く、頸部が細く口頸部が外反する壺C類。377は口縁端部に櫛目文、口縁部内面が矢羽状の連続刺突を行う。380は口縁部が小波状となり、口縁部内面に斜行短線文がある。381は口縁部が小波状となるほかは無文、382は口縁端部に格子状櫛目文があるほかは無文である。383・389は口縁部が小波状となり外面には直線文・廉状文がある。内面は383が矢羽状櫛目文、389は櫛目文・廉状文・懸垂文がある。

384～386は体部がやや長く頸部が細く、口縁部があまり外反しない壺D類。3点とも頸部・体部は無文である。384・386は口縁部が小波状となる。

387は細く直線的に伸びる口頸部を持つ壺F類。口頸部外面には直線文・廉状文・波状文がある。1点のみの出土で、全形のわかる資料はない。

390～395・397・398は体部が丸く、頸部がやや太く、口縁部が外反する壺E類。390の口縁端部は櫛目文、口縁部内面は矢羽状櫛目文、外面は擬流水文・廉状文がある。391の口縁端部は櫛目文、体部外面は直線文・廉状文・コンパス風波状文・扇形文、口縁部内面は凹凸のある凸帯がある。392・394・399は無文である。このうち392は口縁部が小波状となる。393は口縁端部に櫛目文、395は頸部から体部外面に直線文・廉状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。397は口縁部が小波状となり頸部から体部外面に直線文・廉状文がある。

396は算盤玉形の体部に外反する細く短い口縁部がつく壺G類。体部外面には直線文・廉状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。出土例は少なく1点のみ図化できた。

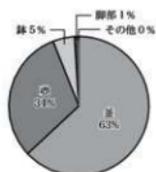
400・401は頸部がやや太く短く外反する口縁部をもつ壺H類。3点とも口縁部は小波状となる。釜の可能性もあるが、他の釜に比べ器壁が厚いことから壺とした。

399は口縁部が外反し、端部に広い面を持ち、上下端を篋状工具で刻む。405は内面に円形竹管文が密にある。2つとも壺C・E・G類などの可能性があるが、頸部以下が無いため詳細は不明。

402～404は無頸壺（壺I類）。402・404は口縁部に矢羽状櫛目文があり、このうち404は体部に直線文がある。403は無文である。

406～413は信州系の壺で多様な形態を含むが、一括して壺J類とした。406～408は新諏訪町Ⅲ式～栗林Ⅰ式の古段階のものとする。409～413はLR縄文の後に棒状工具で直線文・鋸歯状文・多重菱形文などを描く。412・413は三角形の連続刺突がある。体部下半は、412はLR縄文である

器種/項目	破片数	口縁部・頸部 残存率/36	比率 [残存率]
壺	2727	2139.0	62.9%
壺	2747	1045.5	38.7%
釜か壺	82	10.0	0.3%
鉢	61	168.5	5.0%
頸部	21	40.0	1.2%
把手	1	0.0	0.0%
頸部・底部	12708	0.0	0.0%
合計	18347	3403.0	100.0%



第6表 F層・灰色粘土層出土土器の器種構成比率

が、413 はハケメである。

414 は東北系の壺 K 類である。2 本 1 単位の平行沈線がある。縄文は確認できない。

鉢 (図版 47・48 415～422) 深身の 415・416・420～422 は鉢 A 類、浅身の 417・418・419 は鉢 B 類とする。415 は口縁部が小波状となる。416 は口縁部付近に小孔が 2 か所ある。417 は口縁部に格子目状櫛目文、体部に円形竹管の連続刺突がある。418・419・422 は無文、420・421 は口縁端部に櫛目文がある。

釜 (図版 48～51 423～453) 423～438 は頸部から体部外面に文様のない釜 A 類。423 は体部最大径が 33cm 以上となる大型の釜で、口縁部は小波状となる。424～434・437・438 は体部最大径 17～27cm の中型の釜。424～431 は口縁部が小波状となる。423・424・426 などは押圧により、口縁を小波状にするが、425・427 などは櫛の刺突 (櫛目文) により小波状とする。432～434・437・438 は平縁である。432 は口縁端部に櫛目文がある。430 は口縁部内面に矢羽状櫛目文がある。435・436 は体部最大径が 15cm 前後の小型の釜。2 点とも小波状口縁で、口縁部内面に櫛目文がある。

439 は口縁が受口状となる釜 E 類。口縁端部を櫛状工具で刺突する。近江地方と関連すると考える。

440～447 は頸部・体部外面に直線文・廉状文・波状文などの櫛描文がある釜 B 類。441 は体部最大径約 35cm の大型の釜で、小波状口縁となる。頸部から体部外面には擬流水文・廉状文がある。440・442～445 は体部最大径 19～27cm の中型の釜。440・442 は小波状口縁で、440 は体部外面に直線文・廉状文、442 は体部外面に直線文・廉状文・波状文、口縁部内面には矢羽状櫛目文がある。443～445 の口縁部は平縁で、443 は頸部外面に直線文、口縁部内面に矢羽状櫛目文がある。444 は口縁端部に櫛目文、頸部から体部に直線文・波状文がある。445 は口縁端部に格子目状櫛目文、頸部から体部外面に直線文・廉状文、口縁部内面に懸垂文がある。446・447 は体部最大径が 15cm 前後の小型の釜。2 点とも小波状口縁で、頸部から体部外面に直線文・廉状文があり、このうち 446 は、口縁部内面に懸垂文がある。

448～452 は信州系の釜で、多様な形態を含むが一括して釜 C 類とした。448 は小波状口縁で体部は横位のハケメの後、縦位のハケメを行う。449 は小波状口縁で、体部外面は蛇行懸垂文→(横位の)直線文→懸垂文の順で施文している。口縁部内面には三角形の刺突が巡る。450 は平口縁の釜で口縁端部に櫛目文がある。体部外面は(横位の)波状文→懸垂文→廉状文の順で施文している。451 は平口縁の釜で口縁端部には櫛目文がある。体部外面は(横位の)直線文・扇形文→懸垂文→(横位の)直線文の順で施文している。452 は小波状口縁で頸部に三角形の連続刺突がめぐる。

453 は東北(南部)系の釜で D 類とする。2 本 1 単位の平行沈線で鋸歯状文や直線文を表す。

その他の弥生時代中期の土器 (図版 52 454～482)

弥生時代中期後半の土器 (図版 52 458～467) 弥生時代後期の遺物包含層である⑥層、およびこれより上位と考える土層から出土した土器である。454 は壺 C 類で口縁端部に櫛目文、頸部外面に格子目状櫛目文のある幅広の凸帯が付く。口縁部内面には円形浮文と矢羽状櫛目文がある。455 は壺 A 類で、口縁端部には櫛目文、頸部外面には擬流水文がある。

456～458 は釜で、456・457 は文様が無く釜 A 類である。458 は体部外面に櫛描文による文様がある釜 B 類である。口縁端部に櫛目文、体部外面に直線文・廉状文・斜行短線文、口縁部内面に矢羽状櫛目文・円形浮文がある。

459・460 は高杯。脚下端部には篋状工具による刻みがあり、459 の脚上部には幅広の凸帯、460 は篋状工具による 2 本一対の縦位の沈線がある。

461 は鉢 B 類で口縁部外面に LR 縄文がある。462 は鉢 B 類で 3 段 2 列の円形浮文が、6 ないしは 8 単位あるものと考えられる。

463 は釜 C 類（信州系の釜）、464～466 は壺 K 類（東北南部系の壺）で、464 は内面に波状文風の沈線、466 は RL 縄文がある。467 は台付鉢の脚部である。地文は LR 縄文、3 本 1 単位の沈線が 3 単位ある。

弥生時代中期前半の土器（図版 52 468～482）468 は在在系の深鉢である。外面は工具の異なる 3 つの施文帯で構成され、口縁部：LR 縄文帯→胴部上半：波状文帯→胴部下半：条痕文帯となる。波状文は 3 条の櫛歯状工具により施文される。また胴部下半の条痕文は針葉樹の板を工具とした「細密条痕」である。波状文施文の粗製土器は本県の弥生前期～中期初頭に類例が認められており、本例も当該期に位置づけることができるだろう。一方、口縁部、胴部上半・下半で施文工具を変える粗製土器は、本道跡の縄文土器第 IV 群（図版 43 347～349 など）に系譜が求められ、縄文晩期以来の伝統的な器種と思われる。

469～472 は信州系の土器群である。469 は壺の肩部片で、沈線による工字文風のモチーフに LR 縄文による充填が伴う。上下を列点で区画した縄文帯の存在が特徴的である。470 は鉢の胴部で、コの字状の区画が施文される。沈線は太く、LR 縄文を充填する。471・472 の 2 点は、壺の肩部および胴部下半と推測される同一個体片である。LR 縄文を地文としてやや太めの沈線で文様を描く。矩形のモチーフを主体として、曲線や連続する短沈線が付加されるのが特徴的である。

473～482 は、東北地方に由来する土器群である。474・476～480・482 は福島県の西麻生～今和泉式に位置づけられる。磨消縄文手法の発達が顕著で、弥生前期の変形工字文が三角形や菱形を基調としたモチーフに変化している点が特徴的である。476 はやや丁寧なミガキが認められるが、全般的に無文部の研磨が欠落する。抽出できた当該系統の土器はすべて深鉢で、地文は LR 縄文で統一されている。

473 は福島県の南御山 2 式の深鉢である。磨消縄文手法によって三角形のモチーフが描かれるが、鋭く細い沈線と無文部の丁寧なミガキが特徴的である。475 もまた無文部の研磨が著しい深鉢であるが、473 に比べて沈線が太い点が異なる。南御山 2 式あるいはそれより古くなるかも知れない。

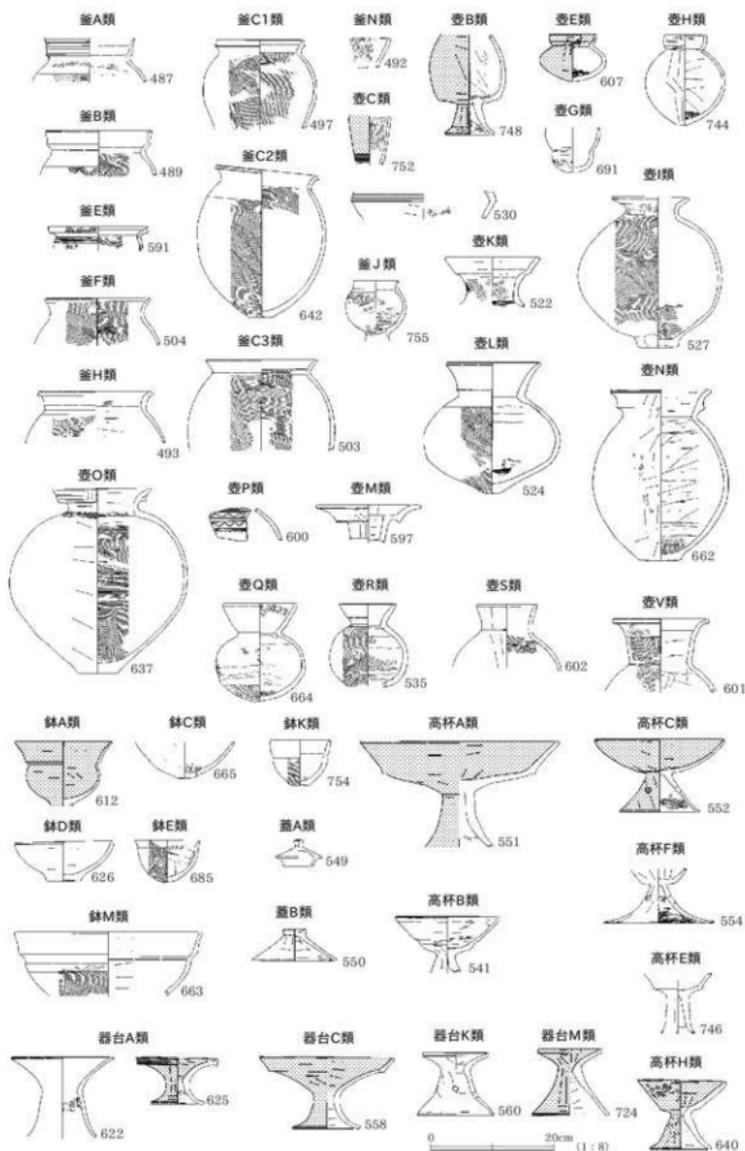
481 は高杯の杯部と推測される。楕円形の区画に沈線が付加される構図が特徴的で、区画内に LR 縄文が充填され無文部はやや弱いミガキが認められる。文様全体の構図が不明であるため詳細な検討はできないが、東北地方の「山王皿形式」かも知れない。

F 弥生時代後期～古墳時代

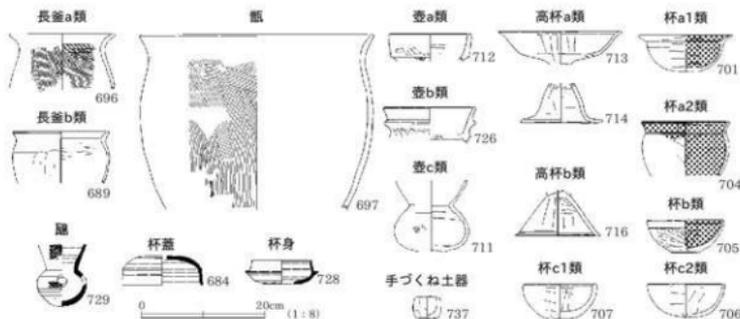
弥生時代後期～古墳時代の土器は、弥生時代後期前半、古墳時代早期～前期、古墳時代中期、古墳時代後期のものがある。量的には古墳時代早期～前期のものが多く、他の時期は少ない。弥生時代後期～古墳時代前期の土器分類は滝沢規朗の分類〔滝沢 2005〕、古墳時代後期の土器食器具は相田泰臣の分類〔相田 2004〕を参考にした（第 7 表、第 15・16 図）。

SD50・51・83-3 層出土土器（図版 53～57 483～561）SD50・51・83 は調査区中央付近を流れる一連の溝で、3 層は溝の最下層にある砂層である。

483～488・490 は有段口縁で口縁部に擬門線が巡る釜で 484～488・490 は A 類、483 は C1 類に分類される。口縁部が短い 483、口縁部が長い 485～488、段が明瞭でない 490 などがある。内面に指頭瓦痕があるものはない。体部内面はヘラケズリを行うものが多い。489・491 は有段口縁で口縁部が無文の釜 B 類。体部内面の調整は 489 がハケメ、491 はハケメ後ヘラケズリである。492 は天王山式の釜の口縁部破片で、釜 N 類である。493 は体部外面にタキ痕が残る釜 H 類。内面にヘラケズリを行う。



第15図 弥生時代後期～古墳時代の土器分類



第16図 古墳時代の土器分類

弥生時代後期～古墳時代

壺	高杯	器台	手づくね土器
A類	A類	A類	737
B類	B類	A類	
C類	C類	C類	
D類	D類	K類	
E類	E類	M類	
F類	F類		
G類	G類		
H類	H類		
I類	I類		
J類	J類		
K類	K類		
L類	L類		
M類	M類		
N類	N類		
O類	O類		
P類	P類		
Q類	Q類		
R類	R類		
S類	S類		
V類	V類		
A類	a類		
B類	b類		
C類	c類		
D類	d類		
E類	e類		
F類	f類		
G類	g類		
H類	h類		
I類	i類		
J類	j類		
K類	k類		
L類	l類		
M類	m類		
N類	n類		
O類	o類		
P類	p類		
Q類	q類		
R類	r類		
S類	s類		
T類	t類		
U類	u類		
V類	v類		
W類	w類		
X類	x類		
Y類	y類		
Z類	z類		

第7表 弥生時代後期～古墳時代の土器分類

口縁端部は面を持つ。

494～497は「く」字口縁で口縁端部が付帯状となる釜C1類。496は口縁端部に篋状工具による刻みが細かいピッチで巡る。498～502・505・506は「く」字口縁で口縁端部に面を持つ釜C2類。内面の調整はハケメ・ナデ・ヘラナデなどでヘラケズリを行うものは、図化した中にはない。503・507～514は「く」字口縁で口縁端部が丸くなる釜C3類。508・509は体部内面にヘラケズリを行うが、他のものはハケメ・ヘラナデなどを行う。514は外面に粘土の縮れがある。

515・516・520～539は壺。515・516は小型の壺である。515は比較的大きな平底に算盤玉形の体部を持つ。有段口縁を持つ小型の壺E類となる可能性が高い。516は畿内系の小型壺の系譜を引くものと考え壺G類とした。

520～525は壺I類である。520・521は口縁部に擬凹線が巡るが、他は無文である。526・527・528・538は「く」字口縁の壺I類である。このうち526は口縁端部と頸部・胴部に円形竹管文を連続刺突がある。529は渦巻き様の大きな円形浮文がある壺M類。530は算盤玉形の体部に擬凹線がある凸帯を持つ壺C類である。535～537は細い頸部から直線的に広がる比較的最長い口縁部を持つ壺R類、539は壺N類で、口縁部内外面に擬凹線が巡る。

517～519・540は鉢。517口縁端部付近がわずかに屈曲する。E類に含めて考えた。518・519は口縁部が内彎し、底部が平底の鉢D類である。540は有段口縁となる鉢A類である。

541～548・551～557は高杯。541・542・547は口縁部が外反し杯部下半が内彎する高杯B類。このうち541・542は外反する脚部を持つ。547の口縁下部には擬凹線が巡る。543・545・546・548・551は高杯A類。このうち546・548・551は脚部が「ハ」字状に開く。544は裾部が有段になるものである。552・553は口縁部が内彎する大型の杯部を持つ高杯C類。556は脚部が内彎することからC類の脚部と考える。554・555・557は小型の杯部に大きく広がる脚を持つ高杯F類。557は外面に櫛描文による文様がある。

549・550は蓋。549は内面に返りを持つ蓋A類である。摘みはボタン状である。550は返りが無く山笠状になる蓋B類。摘みは環状である。

558～561は器台。558・559は器高に比べ短い口縁部が外傾する器台C類である。560・561は小型で受部がわずかに外反する器台K類である。560には脚中位に円形の透かしが4個あるが、561には透かしがない。

23層出土土器(図版57～61 562～628) 23層はSD50・83の南側の丘陵斜面に堆積する褐色ないしは灰色で、炭化物を多量に含む土層である。層的にはSD50・83-3層の上位に位置する土層であるが、SD50・83-3層と接合する土器も多い。

562～592は釜。562は有段口縁の口縁部に擬凹線がある釜A類である。口縁部内面に指頭圧痕はなく、体部内面はヘラケズリである。563・564は有段口縁で口縁部外面に擬凹線が無い釜B類である。566～568・591・592は口縁部が受口状となる釜E類である。566は口縁部外面に擬凹線、体部外面には櫛描波状文や直線文がある。591・592は口縁端部外面に櫛目文がある。

565・569～572・582～584は「く」字口縁で、端部が付帯状口縁となる釜C1類。565は口縁端部に擬凹線がある。569は肩部に連続刺突が巡る。573～576・581・585は「く」字口縁で口縁端部に面を持つ釜C2類。577～580・587～590は口縁端部が丸い釜C3類である。C類の体部内面の調整は、ヘラケズリを行うもの(569・585)もあるが、ハケメ・ナデ・ヘラナデが大半を占める。586は

口縁部下端に刻みがあり、体部外面に撫糸文がある釜N類である。

593～608は壺。593～596・606は短い頸部に有段口縁が付く壺L類である。606は器高が20cmに満たない小型のものである。593～596はこれより大型になる。593は口縁部外面に擬凹線が巡る。

597～599は壺M類。597は口縁部下端に刻みがある。598は口縁部下端付近に凹形浮文がある。

600は体部に直線文や鋸歯状文、凹形刺突などがある。東海地方のバレス壺を模した壺P類である。601・602は比較的に長い口頸部を持つもので601は壺V類、602は壺S類とした。601は口縁部をつまむ。603は算盤玉型の体部に凸帯が巡る壺C類、604・605は「く」字口縁の壺I類である。609～613は鉢A類で、611は口縁部下端付近に擬凹線が巡る。618は体部が内彎するもので、蓋B類である。

614～617・619～621は高杯。614～616は高杯A類で、614は口縁部外面に暗文風の鋸歯状文がある。617は内彎する小型の杯部に大きく外反する脚が付く高杯F類、619～621は高杯C類である。

622～625は器台。622・625は受け部・脚部が無段で受け部・脚部・裾部の境界が不明瞭な器台A類である。623は622と似た器形になるものと考えが、脚部に段がある。624は上部を欠き受け部の形態が不明だが脚部は無段である。626～628は鉢。口縁部から底部にかけて内彎する鉢D類である。

SD50・51・83-1層出土土器(図版61・62 629～641) 23層の上位に位置する黒色のビート層である。釜C2類(631)・釜C3類(630・632・633・636)、鉢E類(634・635)、壺L類(638)、壺O類(637)、高杯C類(639)、高杯F類(641)、高杯H類(640)、長釜a類(629)などが出土している。636は口径20cmを超える大型の釜で内外面ともヘラミガキを行っており、壺として分類すべきかもしれない。体部外面下部には、接合痕が明瞭に残る。638の口縁部内面は屈曲が無く直線的である。639は大型だが外面にハケメが残る。640はヘラミガキ・赤彩を行う。

SD50・83(その他)出土土器(図版62 642～644) 釜C2類(642)、器台C類(643)、高杯F類(644)がある。643は口縁部が急激に立ち上がる。644は内彎気味に広がり、外面に櫛状直線文・刺突文がある。

SD47出土土器(図版62 645・646) SD47はSD50に連なる溝でSD46を切る遺構である。釜C1類(646)と釜C2類(645)がある。645は口縁部面に面を持つが胴部に張りがない。弥生時代中期の釜の可能性もある。646は口縁部外面には擬凹線が巡る。2点とも覆土5層からの出土である。

SD46出土土器(図版63 647～650) SD50に連なる溝でSD47に切られる遺構である。釜C1類(647)・釜C2類(648・649)・壺(650)などが出土している。647は内面にヘラケズリを行う。648・649は同一個体と考える。口径25cmを超える大型の釜で口縁部内面はヘラミガキを行う。650は口縁上半を欠く。

SK85出土土器(図版63 651～654) 釜C2類(651)・釜C3類(652・653)・壺M類(654)がある。覆土3層からの出土である。651はSD50-3層からも破片が出土している。

SK70出土土器(図版63 655～660) 高杯F類(655)、鉢D類(656)、壺L類(657)、壺G類(658・659)がある。657の有段部の屈曲はあまり明瞭でない。659の口縁部は内彎する。660は弥生時代中期の壺C×E類と考える。

SK55出土土器(図版64 661～665) 釜C3類(661)・壺N類(662)・鉢M類(663)・鉢C類(665)・壺Q類(664)がある。662は体部内面ヘラケズリを行う。663は内面ヘラミガキを行うが外面はハケメが残る。664の調整はハケメ・ナデなどでヘラミガキは行わない。

SD33出土土器(図版64 666～669) SD50-51と分岐し、8B付近で再びSD50に合流する溝である。釜C3類(666)・釜C1類(667・668)・器台(669)がある。667・668は同一個体と考える。667は口縁部外面に擬凹線がある。

SK40 出土土器 (図版 64 670・671) 釜 C3 類 (670)、釜 C2 類 (671) が出土している。671 は体外面に連続刺突が 2 列巡る。

SK95 出土土器 (図版 65 672～675) SK95 は 1997 年度の調査で確認した遺構で、1994 年度に部分的に検出した SK49 と同一の遺構である可能性が高い。釜 (672)・高杯 (673～675) が出土している。SK49 からは釜 (図版 68 717) が出土している。

21 層出土土器 (図版 65 676～683) 21 層はⅦ層・20 層より下位でⅨ層より上位の土層である。Ⅶa 層・Ⅶb 層・23 層との上下関係は不明。釜 A 類 (678)・釜 B 類 (679)・釜 C3 類 (676・677)・鉢 E 類 (680)・高杯 F 類 (681)・壺 I 類 (682) などがある。678 の体部内面はヘラケズリである。676・677 は頸部の括れが弱く体部が張る。681 の外面は櫛描波状文がある。682 の頸部には円形の刺突列が密に巡る凸帯がある。

20 層出土土器 (図版 65 684～687) 20 層はⅦ層の下位で 21 層の上位に位置する土層である。須恵器杯蓋 (684)・鉢 E 類 (685)・鉢 D 類 (686・687) などがある。684 は天井部に回転ケズリを行う。

Ⅶc 層出土土器 (図版 65 688～692) Ⅶc 層はⅦ層の上位、Ⅶb 層の下位に位置する土層である。釜 C2 類 (688)、長釜 b 類 (689)、壺 N 類 (690)、壺 G 類 (692)、手づくね土器 (691) などが確認できる。

SX88 出土土器 (図版 66 693～716) 長釜 a 類 (693～696)・甌 (697)・杯 a1 類 (698～703)・杯 a2 類 (704)・杯 b 類 (705)・杯 c 類 (706～708)・鉢 (709)・壺 c 類 (710・711)・壺 a 類 (712)・高杯 a・b 類 (713～716) がある。長釜は体部に張りが無く長胴になる。693・694 は体部外面にヘラケズリを行う。杯は a 類に内面黒色処理を行うものが多く、c 類には少ない。高杯は古墳時代中期以来の伝統的な形式が確認できる。

その他の土坑出土土器 (図版 67 717・718) 717 は SK49 出土の釜。SK49 は 1994 年度に検出した遺構で、1997 年度に検出した SK95 と同一の遺構である可能性が高い。SK95 からは図版 65 672～675 が出土している。718 は SK6 出土の釜。頸部の括れが弱く、体部はあまり張らず、口縁端部は丸い。

⑥層出土土器 (図版 67 719～721) 釜 C1 類 (719)・釜 C2 類 (720)・小型の壺 (721) などが出土している。719 は口縁端部外面に擬凹線が巡る。720 は体外面上部に刺突列が 2 列巡る。他に⑥層から出土した土器として 459・460・468 がある。

Ⅶa・Ⅶb 層、D 区 D 層出土土器 (図版 67 722～724) 鉢 E1 類 (722)・蓋 B 類 (723)・器台 M 類 (724) が確認できる。

Ⅶb 層・B 層出土土器 (図版 67・68 725～745) 須恵器杯蓋 (727)・須恵器杯身 (728)・須恵器甕 (729)・高杯 b 類 (725)・壺 b 類 (726)・小型の壺 (730)・手づくね土器 (731～739)・釜 C3 類 (740)・釜 C1 類 (741)・釜 B 類 (742)・壺 V 類 (743)・壺 H 類 (744)・蓋 A 類 (745) などが出土している。727 は天井部、728 は底部に回転ケズリを行う。729 は口縁部に櫛描波状文、体部に節目文がある。741 は口縁部下端と体外面上部に刺突列がある。

その他 (図版 68 746～756) 高杯 E 類 (746)・鉢 C 類 (747)・壺 B 類 (748)・壺 M 類 (749)・壺 O 類 (750)・壺 I 類 (751)・壺 C 類 (752)・鉢 K 類 (754)・釜 J 類 (755) などが確認できる。

G 古 代

主にⅤ層・Ⅵa 層から出土した。須恵器は杯蓋 (757～759)・有台杯 (760・761)・無台杯 (762～767)・長頸甌 (768～770)・甕 (771) がある。胎土は 757・758・760・762・767・770・771 を除

きB類である。土師器には無台碗(772・773)・長釜(775～777)・小釜(774)・鍋(778)が確認できる。年代は757・760・771が8世紀代に遡る可能性が高いが、他は9世紀前半から末頃のものとする。

H 追加土器

縄文時代前期の土器(図版69 779～797) 779は双頭の突起を持つ土器で、地文はループ文、口縁部と胴部に矢羽状の爪形列が巡る。780・781は内外面に縄文が確認できる土器である。782は口径11.4cmの小型の土器、783は内面に爪形が確認できる。784・785は地文が網目状燃糸文である。786は外面に糸痕状の縦位の沈線がある。787は非結束羽状のループ文である。788は棒状工具の連続刺突による蕨手状文がある。789は口縁部が小波状となり、地文はループ文である。790は口縁部に凸帯がある。791は口縁部に同一方向の2列の爪形列とコンパス文が巡る。地文は組紐である。792は口縁部に無文帯が巡る。795は口縁部に四線様の多条の沈線が巡る。796は内面に漆の焼き付けがみられる。797は大型の平底で、外面に渦巻き状の爪形列がある。

その他の縄文土器(図版69 798～800) 798はXVa層から出土した土器で、時期は中期後葉の可能性が高い。799は外面に赤色漆を塗る。800は口縁部付近に結節回転文がある。

弥生時代中期の土器(図版69・70 801～831) 釜D類(801)、壺J類(803・804)、壺A類(806・807)、壺B類(808)、壺C類(810)、壺E類(811・812・814)、壺D類(813)、鉢B類(816～819)、鉢A類(820)、把手(821)、脚部(823～828)、釜C類(829)、釜B類(830)、釜A類(831)などがある。815は断面形が楕円となる特異な形態の土器である。804の口頸部は短く直立し、下端付近には凸帯がある。830は肩部付近に円形浮文、細い棒状工具による直線文・やや長めの斜行短線文がある。

弥生時代後期～古墳時代の土器(図版71 832～850) 832は口径約30cmの大型の釜C類である。835は壺Q類もしくはR類で、胴部中位付近に焼成後の穴がある。836・838は口縁部に幅広い面を持ち、836は擬凹線が巡る。843は結合器台の受部、848は段を持つ高杯の脚部である。849は須恵器杯蓋で天井部はヘラケズリを行う。850は、胴部中位付近に円孔を持つことから甕と考える。

I 土製品(図版143 1～39)

土製品には、土鈴(1)・土偶(4)・土器片鍾(5～15)・土鍾(16～19)・紡錘車(20)・転用紡錘車(22～31)・土器片円盤(32～37)・支脚(38)・土製勾玉(39)がある。1はXVb層からの出土で、X線透過写真では内部に5個の土塊があり、振るとわずかな音がする。4は縄文時代後期～晩期の土層と考えているD-2層からの出土である。土器片鍾は多く出土している。XVc層から出土するものがほとんどで、素材も縄文時代前期前葉の土器片を使用している。

土鍾の出土例は少ないが、21層や23層など古墳時代早～前期の土層から出土するものがほとんどである。

転用紡錘車は弥生時代中期の土器片を素材としているものが多いが、21層や23層、SD50など古墳時代の遺構や遺物包含層から出土しているものも多い。30・31は中央の円孔が貫通しておらず、未成品の可能性もある。

3 石器・石製品

本遺跡からは、石器・石製品が浅箱で243箱出土した。総計17,940点におよぶ（ヒスイ以外の砕片は含まない）。

縄文前期前葉・後期～晩期・弥生時代の石器・石製品と古墳時代の石製品がある。

XV層では「松原型」と呼ばれる石匙が特徴的である。石匙を含め剥片石器の石材は珪質頁岩が多く用いられるが、これは東北地方から成品として搬入されたものである。また、糸魚川産の蛇紋岩を使用して磨製石斧の生産も行われていた。XIII～XI層では、柳葉型の片面加工に近い石鎌と、琥珀原石が特筆される。IX層より上層では、緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉の生産が特徴的である。ヒスイの総重量は21.9kgで、これまで全国で最も多いと言われた上越市吹上遺跡の2.4倍という驚異の量である。ほかに、磨製石斧では搬入品の大型蛤刃石斧と扁平片刃石斧、柱状片刃石斧が揃って出土したことも特徴として挙げられる。

A XV層

XV層から出土した石器群は、前期前葉の資料としては北陸地方有数の質と量を誇る。剥片石器の石材は阿賀北地域の利用状況とよく似ており、東北地方で製作されたと考えられる松原型石匙の存在を考えれば、東北方面からの影響を受けた石器群と考えられる。一方、磨製石斧・滑石製装身具の素材は糸魚川地域から搬入されたと考えられる。このように、XV層出土石器群は、東北方面と北陸方面、双方からの影響を受けながら形成されたと考えられる。

1) 帰属時期

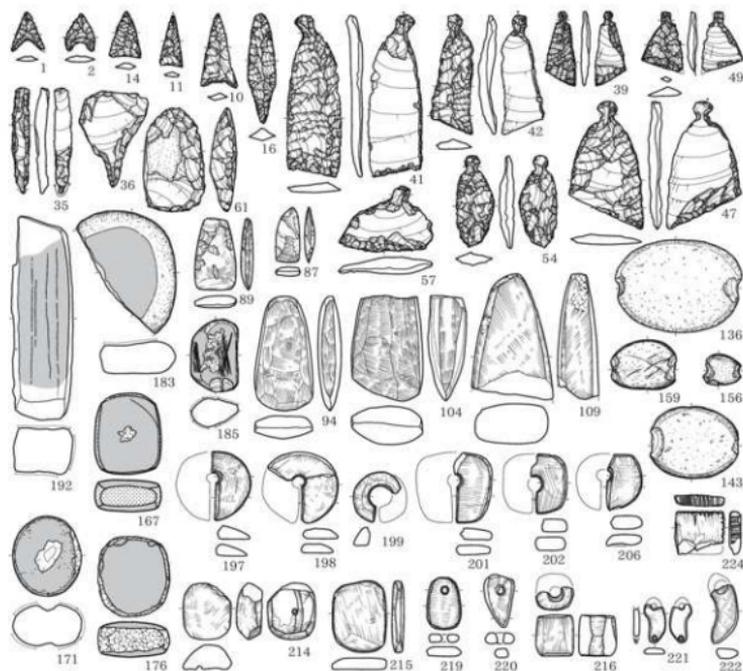
XV層は、縄文時代前期前葉の土器が大半を占めることから、当該期の石器組成を極めて良く示すと考えられる。なお、層位不明のものも若干あったが、技術・形態・石材からXV層に比定できると考えられた資料も、ここにあわせて報告する。

2) 石器組成

石鎌20点、石鎌未成品68点、尖頭器1点、石錘8点、石匙34点、石鏡6点、石鋸2点、楔形石器134点、不定形石器164点、石核3点、異形石器2点、磨製石斧80点、磨製石斧未成品121点、剥片2477点、磨石類447点、石皿・台石36点、砥石606点、石錘468点、礫器3点、玦状耳飾19点、玉類8点、赤色顔料716点、原石5点からなる。

薄手で精緻な二次加工が施された珪質頁岩製の石鎌や松原型石匙〔秦1977・1991〕が定量認められる。特に松原型石匙の数量は県内でも有数であり、東北地方との強い結びつきがうかがえる。蛇紋岩製磨製石斧の製作が盛んに行われており、素材から製品に至る一連の過程を示す資料と、工具である敲石・砥石が出土している。蛇紋岩は糸魚川から海路で搬入された可能性が高い。石錘が多いことも特筆されるが、これは当該期の特徴と言える。玦状耳飾等の石製品が充実することも特筆される。特に玦状耳飾の多さは県内2位であり、原産地（糸魚川）から離れた地で、これだけの数量を保有した背景については検討を要する。

また、剥片の数量に比して、石核が2点と異常に少ない。すなわち、遺跡内で剥片剥離が盛んに行わ



第17図 XV層石器組成

れたとは考えにくく、素材剥片や成品・未成品として石器が搬入されたと考えられる。この状況から、遺跡周辺に原産地がある可能性は低く、比較的離れた地点で素材や成品に加工して搬入されたものと考えられる。

3) 石材組成

点数で見ると、鉄石英が最も多い。ここには剥片石器も含まれるが、その多くは赤色顔料と考えられる原石である。XV層と同時期に位置づけられる胎内市二軒茶屋遺跡においても多量の赤色顔料が出土している。当該期に赤色顔料が多用された実態を垣間見ることができる。赤色顔料の母材である鉄石英は、五十嵐川流域で採取できる。ちなみに五十嵐川沿いに立地する後期旧石器時代の荒沢遺跡では、国内最古の赤色顔料が出土している [小熊 2003]。出土した重量を考えれば、ことさら遠くから運搬されたとは考えにくく、比較的近距离を流れる五十嵐川流域からもたらされた可能性がある。

剥片石器では、凝灰岩・頁岩・珩質頁岩・流紋岩が多い。これらの石材組成は、阿賀野川流域以北または五十嵐川流域で採取可能な石材である。一方、遺跡から出土する剥片石器の石材構成という観点から見ると、下越地方における縄文時代の遺跡の状況に良く似る。また、良質な珩質頁岩で製作された「松原型石匙」という洗練された形態が、成品として搬入されている状況からは、東北地方や新潟県北部地域との

3 石器・石製品

XV期	磨石類 3120点 97.44%										計			
	石鏝	石鏝未成品	石鏝	石砵	空磨器	石磨	石磨	磨製石斧	不定形石斧	石斧		磨製石斧	磨製石斧未成品	剥片
渡辺町	4	3,395	8	54,78	2	44,50	1	35,00	17	174,12	25	762,87	272	2,908,62
船山町	1	1,205	9	47,34	2	24,50	3	80,50	26	303,07	30	849,23	1	1,300,02
真田	1	0,30	33	335,40	1	5,82	2	34,00	48	862,76	59	1,544,46	639	8,024,38
伊賀川町	10	11,30	8	58,45	2	23,20	23	244,34	1	33,00	18	186,61	25	462,54
下郷	2	1,50	6	42,23	1	20,41	1	3,60	12	139,93	19	400,83	1	95,50
メノウ				1	8,00									2
ナモート														7
赤石				2	35,90	2	14,00	2	22,20	1	31,00	7	34,10	9
磨石	1	0,50											1	2,00
ガラス質安山岩	1	0,50	1	3,50									5	12,42
磨製石斧														1
磨製石斧未成品														1
剥片														294
不明														8
計	50	18,65	68	586,20	8	88,02	34	369,38	1	27,00	6,209,50	2,935,00	134	1874,36
占数比 (%)	0.80%	3.05%	0.36%	1.53%	0.04%	0.27%	0.89%	6.02%	7.37%	0.09%	5.39%	5.43%		

XV期	磨石類 1560点 28.72%										石鏝 27点 0.50%		その他 725点 13.34%		計	
	石鏝	磨石類	石鏝・白石	砥石	磨器・磨石類	砕状石類	石鏝	磨石・赤色磨料	不明	不明	不明	不明	不明			
渡辺町	8	2065,98	16	8,239,36		3	272,00	1	295,15					350	1,485,70	
船山町	32	4812,55	9	3114,07	2	1005,00	92	12112,84	1	372,50				903	3,092,90	
真田	3	681,80	2	398,02		1	100,00							789	3,201,70	
伊賀川町														286	2913,70	
下郷														210	2637,90	
メノウ														3	10,09	
ナモート														9	645,69	
赤石														1	10,00	
磨石														716	16,305,12	
ガラス質安山岩														2	26,50	
磨製石斧														13	154,30	
磨製石斧未成品														2	35,00	
剥片														4	178,00	
不明														2	267,70	
計	48	10,488,236	447	150,157,50	36	117,40,48	606	912,59,36	3	970,60	19	176,00	8	49,50	721	1,651,412
占数比 (%)	21.01%	30.07%	1.62%	1.62%	0.14%	0.85%	0.36%									100.00%

※ 各数値の左列は、点数(点)、右列は重量(g)を示した。
 点数は、二次加工が施されている石鏝・剥片・砥石・磨石・不明を除いた2227点を母数として算出した。

第8表 XV期石器・石製品集計 ※XVa層を除く

関係がうかがえる。

蛇紋岩製の磨製石斧の製作工程品の出土も特筆される。蛇紋岩は、剥片石器とは正反対の糸川川地域から海路で運搬されたと考えられ、海岸線に沿って磨製石斧の製作遺跡が点在する【鈴木1998】。出土した未成品の数量から考えれば、当遺跡はその拠点のひとつと見られる。

黒曜石は、原産地分析を行っていないものの、外見は県内で類例のあまり見られない特徴的なものばかりである(66・76・79・81)。原産地推定を行えば興味深い結果を得られるかもしれない。

なお、当遺跡周辺の丘陵地を構成する礫層には、信濃川に由来すると考えられる石材が産出する。しかし、遺跡から剥片石器の原石や石核が少数しか出土していない状況を鑑みれば、それを利用した可能性は低い。ただし、重量がかさむ礫器の石材は、ことさらに遠方から運搬したとは考えにくく、これを利用していた可能性もある。

4) 各 説 (図版 72 ~ 87)

石 鏃 (1 ~ 34・58) 石鏃の基本的な形態は、凹基無茎鏃である。両側縁が直線的で、やや縦に長い三角形をなす。基部の挟りは比較的小さく平坦に近いものが多いが、1 ~ 6のように明らかに挟りを作出しているものもある。剥離は緻密で、内側にまで達するように施されることも特徴的である。高い技術を持つ集団が製作したことがうかがえる。このような状況は、当該期の特徴のひとつといえる。16・17は有茎鏃である。16は良質な珪質頁岩を用いていること、剥離が緻密であることを鑑みてXV層に帰属する可能性が高いと判断した。17は、当該期にあまり見られない形態であり、混入である可能性も否定できない。

石 鏃は、成品として搬入品されたものがあるほかに、未成品 (19 ~ 34) も存在することから遺跡内でも製作されていることが明らかである。素材剥片は石刃のような細長い縦長剥片ではなく、横長または寸詰まりなものが多い。未成品の中には、石鏃製作の初期段階を示すもの (33・34 など) から、全面が二次加工により覆われているもの (20・21・25・26・29・30 など) まで認められる。石核がほとんど出土していない状況を鑑みれば、剥片の状態で搬入され、二次加工が施され石鏃が製作されたと考えられる。なお、不定形石器に分類した 78・80 も、石鏃の未成品である可能性が考えられる。

石 錐 (35 ~ 38) 石錐は、大きく2種類に分類できる。棒状の 35 と、素材剥片の一端に錐部を作出する 36 ~ 38 がある。素材剥片も両者では異なり、35は縦長剥片、36 ~ 37は長幅比が1に近い寸詰まりな剥片である。前者は、両側縁を丹念に加工して棒状にした上で錐部を作出する。錐部には使用痕と考えられる光沢も認められる。後者は両側縁に加工が見られるものの、素材剥片の形状を著しく修正するようなものではない。錐部の作出に重点が置かれた二次加工が施される。

石 匙 (39 ~ 57) 石匙は、縦形の石匙 (39 ~ 56) が主体であり、横形は1点 (57) 認められるのみである。縦形の多くは、いわゆる「松原型」[秦 1977・1991] である。その定義については、あいまいな面もあるが、秦昭繁氏が最も重視した表面加工の打面を準備する過程 (裏面加工) に置くとすれば、39 ~ 49・51・53が相当する。ただし、39 ~ 49 と 51・53 では、押圧剥離の深度が異なる。背面に残された素材剥片の剥離面が、前者ではより狭く、後者ではより広い。すなわち、前者の押圧剥離は深度が深く、二次加工によって素材剥離面が除去されている。両者では石材も異なる。前者が良質な珪質頁岩であるのに対し、後者は流紋岩である。前者ほど良質な珪質頁岩の剥片・砕片はほとんどなく、成品として搬入された可能性が極めて高い。一方、後者は素材剥片等が多量に出土している流紋岩であり、遺跡内で製作された可能性もある。石材の相違が、技術の相違に反映された可能性もあるが、このような状況を鑑みれば、そもそも製作者の技量の相違を反映したと考えるべきかもしれない。

平面形態においては、小刀の刃部のような明瞭な「角」が形成されるものと、「角」が形成されず木葉形をなすものがある。前者は、松原型の大半と 50 が相当する。50は裏面加工がないため、松原型に含めなかったものの、形態的には松原型とよく似ており、石材も良質な珪質頁岩である。「角」が形成される点は、松原型の特徴の一つといえよう。一方、後者は松原型の 46・53 と、松原型に含まれない 52・54・55 がある。木葉形をなすものは完全な左右線対称でなく、一方がより膨らみ、もう一方がやや直線的であり、半月形石器のような体部といえる。58は尖頭器とも捉え得る形態であるが、後者の体部と形態が似ることから、石匙の未成品と考えた。なお、縦形の石匙の大半は縦長剥片を素材とするが、後者に該当する 53・55は横長剥片を素材とする。また、56は縦長剥片を素材とし、挟入部のみを作出し

たものである。

石 篋 (61～65) 61～65は石篋としたが、典型的なものではない。石材は比較的緻密なものを using しており、石篋の石材選択に共通する。二次加工の状態は、両面調整のもの (62・64)、半両面調整のもの (63)、片面調整のもの (60・65) とバラエティーに富むが、いずれも片刃を意識して成形している。

楔形石器 (67～76) 両極技法を経た形態の総称であるため、バラエティーに富む。両極技法を利用する目的の一つとして、厚さを減じることがある。楔形石器が最終形態ではなく、何らかの石器を製作する一過程と捉えたほうが適切である。法量的に考えると、石織製作との関係を想定することが、最も妥当であろう。

尖頭器 (60) 尖頭器に分類したが、半損品であり全容が不明である。尖頭器であれば、幅の広い木葉形をなすと考えられる。

異形石器 (59・81) 59は上半を欠損しているが、石材も鮮やかな朱色の鉄石英であり、ひときわ目立つ存在である。左右対称形に仕上げられているがモチーフは不明である。81の下半部は左右対称形に仕上げられているが、上半部は非対称である。白濁した特徴的な黒曜石を素材とする。これもまたモチーフは不明であるが、下半部の作出方法には共通性も見出せる。

石 鏃 (84・85) 擦切具である石鏃である。いずれも砂岩製で、剥片の鋭利な端部に明瞭な使用痕(砥面)が認められる。石鏃は、縄文時代中期前葉以降の蛇紋岩製磨製石斧の製作、弥生時代の玉作における分割等に使用される。XV層段階(縄文前期前葉)では、磨製石斧の製作で擦切は用いられず、これに対応する製作の痕跡は認められない。滑石製装身具(珉状耳飾の切目作出時等)や遺跡に残らなかった骨角製品の製作時に利用された可能性がある。また、223は蛇紋岩製の石製品であるが、この製作には擦切技術が用いられている。対象物は明らかでないが、石鏃の存在は前期前葉に擦切技術が存在したことを示している。

磨製石斧 (86～135) 磨製石斧は、遺跡内で製作を行っており、原石から成品に至る一連の工程品が認められる。磨製石斧は、小型・中型・大型の3種類に分類できる。破損品が大多数のため、原石産出地で磨製石斧を集約的に生産している糸魚川市大角地遺跡の分類を参考にする。報告書[加藤^{ほか}・2006]では、大型品が長さ10～15cm・幅5～10cmほど、中型品が長さ5～12cm・幅4～7cmほど、小型品が長さ4～5cm・幅2.5～4cmほどとされている。数値的には若干、相違も認められるが、大きく3種類に分類できることは当遺跡においても言うことができる。

小型品(86～93)は、いずれも片刃であり、鏃として利用されたものであろう。86以外はすべて蛇紋岩製であり、中型品・大型品に比べて蛇紋岩への依存度が高い。硬く鋭い刃部を必要とすることから、蛇紋岩の利用に固執した可能性がある。また、92の表裏面に残された剥離面の構成から、剥片素材であったことがうかがえる。大型品が破損し、再利用する際に副次的に生じた剥片を素材とした可能性もあろう。原石産出地から離れた土地における、石材の効率的利用を反映しているのであろう。なお、86はガラス質安山岩の扁平礫を素材とし、刃部と両側面のみを研磨して成形したものである。使用石材が異質であるほか、全面を研磨しない点において、他とは全く異なる。破損品が多い中、中型と大型とを区別することは難しいが、おおむね94～103が中型、104・105・107～111が大型品といえよう。中型・大型にも蛇紋岩が多用されるが、ほかにも安山岩・閃緑岩・硬砂岩も用いられる。この点は、蛇紋岩の利用に固執した小型品と決定的に異なる。

当遺跡では蛇紋岩製磨製石斧の製作が盛んに行われている。原石またはそれに近い状態で搬入されたことが125～135の資料から理解できる。その後、剥離(117・118・121～129)、敲打(119・120)、研磨(115・

116)を経て成品に至る一連の過程を示す資料がそろそろ。また、工具は砥石(189～194)が存在する。砥石は、磨石類の一部が充てられたことが想定されるほか、磨製石斧の未成品とした125の側面の敲打痕は砥石としての使用痕かもしれない。硬質な蛇紋岩の敲打整形には、それなりの硬度の石材が必要であり、蛇紋岩は磨製石斧の素材であると同時に、砥石としても搬入された可能性がある。

石 錘(136～162) 扁平な円礫の長軸上両端を剥離し、抉りを作成することを基本形とする。157のように短軸上両端を剥離する場合、158のように長軸上・短軸上の4極2対を剥離する場合もあるが、イレギュラーなものである。159～162には線状痕が認められる。断面形がV字をなすことから、鋭利な対象物との接触によって形成された使用痕と考えられる。しかし、これに対応する石器・石製品は存在せず、遺跡に残らなかった骨角器・木製品がその有力な候補となる。石材は、軟質な凝灰岩と頁岩であり、石器など硬質な対象物の研磨には効率的でない。このような石材選択の様子からも、骨角器・木製品といった対象物を想定することができる。また、161のように、破損面周辺を研磨している事例もあることから、この種の石材は石錘と研磨具双方の用途に用いられたと考えられる。

なお、出土点数はXV層(XVa層を除く)だけで468点にのぼる。北陸地方における早期末葉～前期前葉の遺跡においては石錘が多数出土する傾向にあり、当遺跡もこの傾向に一致する。他の層位からも多数の石錘が出土しているが、これも本来的にはXV層に含まれるものである可能性がある。これらも含めると、当遺跡から出土した石錘の総計は784点となり、北陸地方で最も多く石錘が出土した遺跡の一つとなる。この点数は、石川県甲・小寺遺跡の700点以上という数量と肩を並べる。

磨 石 類(163～180) 磨石類については、全ての層において共通の分類基準で分類した(第18回)。分類にあたっては、野地遺跡[加藤2009c]を参考に行った。本遺跡でも、野地遺跡で「磨り潰し痕」とされた「磨面とは異なるやや荒れた平坦面」が数多く確認でき、磨痕・凹痕・敲打痕との組合せで分類した。

A類:磨痕・磨り潰し痕のみで構成されるもの。さらに、1類:磨痕のみ、2類:磨痕+磨り潰し痕、A'類:磨り潰し痕のみ、に細分した。

B類:凹痕が観察されるもの。さらに、1類:凹痕のみ、2類:凹痕+磨痕、3類:凹痕+磨痕+磨り潰し痕、4類:凹痕+磨り潰し痕、の4類に細分した。

C類:敲打痕が観察されるもの。さらに、1類:敲打痕のみ、2類:敲打痕+磨痕、3類:敲打痕+磨痕+凹痕、4類:敲打痕+磨り潰し痕、5類:敲打痕+凹痕、6類:敲打痕+磨痕+磨り潰し痕、7類:敲打痕+磨痕+凹痕+磨り潰し痕、8類:片端が敲打痕でもう一端が磨り潰し痕のもの、に細分した。

D類:柱状礫の稜の部分に細長い磨痕が認められるもの。いわゆる特殊磨石。さらに、1類:磨り潰し痕のみ認められるもの、2類:敲打痕+磨り潰し痕が認められるもの、の2つに細分した。

E類:磨製石斧を転用したもの。

XV層からは447点出土した。分類別の点数は第9表のとおりである。特定の分類が突出することはなく、各類とも偏りなく出土しているが、その中ではA2類、A'類、B2類、B3類、C1～C3類、C8類がやや多い。また、D類はいわ

	安山岩	硬砂岩	花崗岩	頁岩	石英岩	流紋岩	蛇紋岩	小石(シメス)	計
A1	12		2	1				15	
A2	18	5	1	2		3		29	
A'	7	17	1			2		28	
B1	2	3		2				9	
B2	14	2	2					18	
B3	17		1	3	1	1		23	
B4		1		1				2	
C1	2	15	2	1	1	2		23	
C2	12		2	2				16	
C3	10	2	1	3		3		19	
C4		7	1			1	1	10	
C5	2	4				1	1	7	
C6	10	1	1					12	
C7	1	2						3	
C8	13	1	3	5	1		1	24	
D1	4	3	1			1		9	
D2	1	2						3	
×	130	25	11	26	1	1	1	197	
計	255	87	24	50	9	2	2	447	

第9表 XV層磨石類の分類・石材別集計



第 18 図 磨石類の分類 (S=1:6)

ゆる特殊磨石で縄文時代早期に特徴的なものであるが、XV層から12点出土している。石材は、安山岩が57%を占め、次いで硬砂岩20%、花崗岩11%、砂岩5%となる。安山岩が約半数を占め、硬砂岩・花崗岩・砂岩がやや多いという状況は上層も同様である。

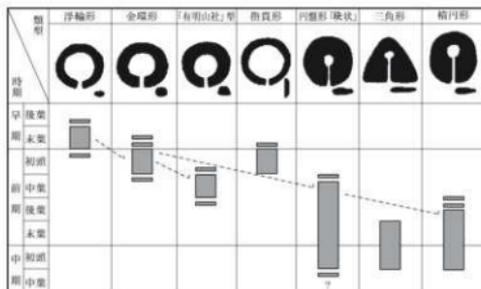
石皿・台石(181~184) 36点出土した。完全な形をとどめたものはなく、すべて破損している。また、磨滅が著しい個体が多い。そのため、残存率の良いものは器種を特定できたが、それ以外のは石皿・台石として一括した。石皿・台石と砥石の区別は、野地遺跡[加藤2009c]に従い、ほぼ平坦面を持つものを石皿、単位をもちながら湾曲し筋状の使用痕が認められるものを砥石とした。区別が困難な砂岩製のものについては台石が多く、石皿はわずかであった。石材は、砂岩が25%を占めるが、安山岩が最

も多く約64%で、これに花崗岩・凝灰岩・硬砂岩が少数加わる。

磁石 (185～194) 595点出土した。中でも砂岩製のは非常に脆く割れやすくなっている個体が多いため、この数字は現在数えられる破片等を数えた点数であり、当時の状態を反映したものではないことを予め断っておく。ただし重量をみても約50kgあることから、かなり多量であると言える。このうち、砂岩製が約79%を占める。砂岩は磨製石斧の研磨によく使用される石材であるといわれ、本遺跡から磨製石斧未成品が多く出土していることは、このことを裏付けるものと推測できる。

類石棒 (195・196) 195は破片であるが、ほぼ全面に敲打痕が認められ、頭部を丸く作出していることから、断定はできないが、類石棒の製作途中のものとの可能性がある。石材は安山岩である。196は断面形が略六角形を呈し、下部は欠損している。石材は流紋岩である。

块状耳飾 (197～215) 块状耳飾は、縄文時代前期を代表する石製品である。その多くは加工が容易な滑石製であるが、当遺跡における块状耳飾もすべて滑石製である。当遺跡からは19点出土しているが、この点数は県内で第2位（第1位は糸魚川市大角地遺跡の57点）の多さである〔加藤2010〕。原石産出地から離れた地において、



第19図 块状耳飾編年模式図

これだけの点数が出土したことに加え、製作途中の資料も出土しており、その意義について検討する必要がある。また、破損後に紐等で結束するために穿たれた二次穿孔〔加藤2009a・b〕の多さも特筆できる。また、211・212のように破損部分を研磨して、変形させる事例もある。これらは、原石を容易に入手できない環境においてしばしば見られる事象であり、成品を有効活用した結果といえる。

当遺跡より若干先行すると見られる糸魚川市大角地遺跡と比べると、形態的なバラエティーに富み、相違点が多く認められる。最大の相違点は、外径に比して内径が小さいことである。大角地遺跡では浮輪形・金環形〔川崎2004〕が圧倒的に多いのに対し、当遺跡では中央の孔が外形に比して小さい円盤形が主体をなす。加えて断面がD字をなす有明山社型〔藤田1971〕が特徴的に加わる。大角地遺跡とは異質な形態組成といえる。従前の変遷観〔藤田1983a・1983b、川崎2004、加藤2010〕と比べると、前期前葉の資料としては外形に比して内径が著しく小さい。このような形態は、前期中葉ころから出現する形態と考えていた〔加藤2010〕が、当遺跡に伴う土器の様相を勘案すれば、前期前葉までさかのぼることは確実であろう。

当遺跡においても少数ではあるが製作途中の資料が認められる。225～227は研磨によって板状の素材を作出する過程、213・215は円盤状素材を作出する過程、214は中央部の穿孔と切目を作る過程〔加藤2009a・b〕を示す資料である。213・214は扁平な円盤状素材であるのに対し、214は断面D字形をなすものである。前者は円盤形、後者は有明山社型の素材と考えられる。なお、214には中央の穿孔と切目作出の中途段階の資料である。近年、切目作出において糸鋸を用いたとする説が提唱されているが、もし、そのような過程を経た場合には214のような溝は形成されないと考えられる。

管 玉 (216～218) いずれも半損しているため、穿孔部分をよく観察できる。両者とも、上下両端から回転穿孔していることが分かり、217においては穿孔後、回転方向と直交する方向の擦痕が認められる。すなわち、回転穿孔したのち、棒状の研磨具で孔を仕上げたと考えられる。石材はいずれも滑石だが、216は黒色不透明、217は黄褐色半透明である。早期末葉以降の管玉には黒色の滑石があてられる傾向にあり、色を選択していた可能性がある。218は角柱状を呈した管玉の素材と考えられる。色調は、黒色不透明で管玉に特徴的に用いられる石材である。

垂 玉 (219～222) 219の垂玉は、楕円形の板状に仕上げた素材の一端に穿孔したものである。黒色の滑石を素材とする。大角地遺跡・富山県極楽寺遺跡の出土品に酷似するものがある。220は黒色の滑石を素材とした三角形の垂玉である。221は弧状の素材の両端部に穿孔が見られる。薄手で丁寧に仕上げられており、瑠璃耳飾の破損品からの転用とは考えにくい。「瑠璃頸飾」[谷藤 2004]である可能性もある。222は勾玉形の垂飾である。大角地遺跡においては、犬歯をモチーフにしたと見られる勾玉が存在し、それと関連付けて考えることができよう。同様の形態は富山県極楽寺遺跡にも存在する。北陸地方における前期前葉には、勾玉形の垂飾が存在したことを裏付ける補足資料といえる。

その他の石製品 (223～227) 223は擦切技法によって素材が切り出された蛇紋岩製の石製品である。磨製石斧の基部である可能性も考えたが、XV層段階にこのような細身・小型の磨製石斧は知られていない。したがって、不明石製品としたが、磨製石斧の可能性も否定できない。224は四角形の板状に仕上げた素材の縁辺部に、刻みを入れている。225～227は滑石の原石である。225・226は求心的な剥離を行い、平面円形に整えたのちに研磨している。

XVa 層出土石器 (228～239)

XVa層から出土した石器の組み合わせは、基本的にXV層に共通する。縄文時代中期に比定される層準であるが、基本的な組成は前期前葉との変化は認められない。

石鏃 (228) は、凹基無茎鏃で内側まで深く剥離面が進入しており、精緻な作りである。石匙は、松原型 (229・230) と横形 (231) とがある。石篋 (234) は、基本的に片面加工で断面形が「D」字形をなす。良質な珪質頁岩製であり、成品として搬入品されたと考えられる。232は寸詰まりな剥片の両側縁に裏面から表面への二次加工が施された不定形石器である。スクレイパーと呼んでも良い形態である。礫器 (233) は、垂角礫を素材とし、長軸上端部の表裏面に二次加工を施したものである。両刃礫器ではあるが、側面図を見てもわかるとおり片刃に近い形態である。礫面には線状痕が認められる。砥石にしばしば利用される凝灰岩製であることを勘案すれば、何らかの研磨に利用したものと考えられよう。砥石は1点図化した。明瞭な砥面はないが、砥石にしばしば用いられる石英粒を含む黄褐色の砂岩製である。石錐 (236～239) は、扁平礫の長軸上両端部に抉りを作成したものである。大きさのバラエティーもXV層出土石器に近似する。また、403の表裏両面には鋭利な対象物との接触によって形成された線状痕が認められる。線状痕が認められる石材は、いずれも凝灰岩であり、きめが細かく軟質な石材である。何らかの道具の研磨具としても利用されたのであろう。

B XIV 層

XIV層、XIVb層は青灰色の砂礫層で、縄文時代前期前葉の土器が多く混入しており、石器もXV層に比定されるものと推測できる。

石器は251点出土した。剥片石器が193点で66.9%を占め、そのうち約90%は剥片である。

石錘244は、横長形態のA2類であるが、表面左側のみ抉りが認められる。245は表裏面に凹みが見られ、磨石類から転用されたことがうかがえる。砥石248は正面と右側面に平坦面を持ち、鋭い線状痕が多く残っている。249は明瞭な磨痕は認められないが、平坦面が広く残り、石皿と判断した。

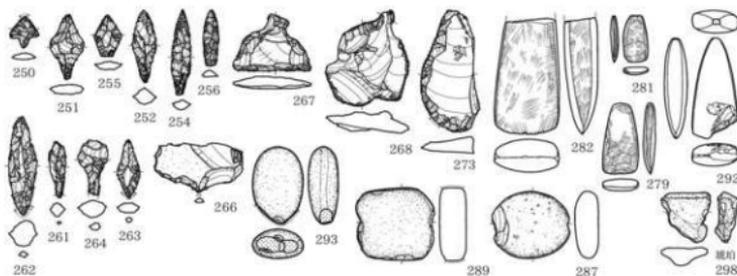
C XIII ~ XI 層

1) 帰属時期

XIII層は縄文時代後期中葉(加曾利B式)に比定される。XIIIb層は彌付土器段階(後期末)、XIIIa層は大洞B・BC式、XIIa・b層は大洞C1式を主体とする。XI層までは縄文時代晩期の遺物が出土していることから、XIII~XI層を縄文時代後期~晩期としてまとめて記述する。ただしXIIIe層については、石器・石材組成のみ単独で示す(第10表)。

2) 石器組成

石器は1487点出土した。このうち、剥片石器が1152点で77.6%を占める。石鎌(未成品含む)99点、石錘22点、石匙12点、楔形石器97点、不定形石器51点、石核27点、剥片774点、磨製石斧(未成品含む)72点、磨石類138点、石皿・台石18点、砥石54点、石錘122点、琥珀原石1点からなる。剥片を除くと、磨石類・石錘の多さが特徴的である。狩猟・漁撈具221点>調理具168点>採取・加工具94点で狩猟・漁撈具が多い。県内における石器組成の分析[鈴木1999]の傾向とも一致している。



第20図 XIII~XI層石器組成

3) 石材組成

第10表のとおりである。剥片石器については、前期と同様に珪質頁岩が最も多いが、成品を搬入するのではなく素材として使用している点では前期と異なる。珪質頁岩に次いで頁岩、凝灰岩、流紋岩と続き、多用される石材はXV層と同じである。礫石器でも前期同様、安山岩や砂岩、硬砂岩が多用されるが、花崗岩も一定量認められる。また、磨製石斧では前期に引き続き、蛇紋岩が多くみられ、糸川川からの搬入品と考えられる。

XIII 層	石壁		山壁		横目石壁		1137.2点		77.27点		石塊		磨製石斧		磨製石斧		磨製石斧		石壁		332点		272.39点		石壁・石石		石壁		計													
	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁	面積	石壁												
1	8.57	17	322.80	4	43.38	2	30.51	2	383.69	9	193.73	3	37.61	96	1038.36	1	47.07	89	2692.86	0	2052.86	0	1178.00	20	3097.00									310	3432.64							
2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
3	0	2.78	9	81.08	7	177.48	1	3.77	16	173.76	20	666.60	6	877.53	183	2732.26	2	18.31	1	188.05	2	224.15	1	188.05	20	3097.00																
4	1.14	18	164.14	4	23.26	3	35.23	23	197.59	15	193.90	6	153.37	212	1906.31																											
5	1	0.46	6	39.28	4	66.43			8	60.72	2	9.10	1	22.59	25	203.36																										
6	1	0.33	1	3.01	0	0	1	2.02	0	0	2	127.60	2	34.21																												
7	1	0.64	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
8	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
9	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
10	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
11	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
12	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
13	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
14	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
15	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
16	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
17	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
18	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
19	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
20	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
21	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
22	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
23	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
24	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
25	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
26	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
27	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
28	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
29	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
30	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
31	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
32	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
33	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
34	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
35	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
36	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
37	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
38	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
39	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
40	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
41	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
42	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
43	1	0.94	1	2.06	0	0	1	2.06	0	0	2	392.28	2	678.39																												
44	1	0.94	1	2.06	0	0	1																																			

4) 分類

磨石類については、すべての層において共通の分類とし、使用痕を重視した。その他の石器については、XV層と、XIV層より上層(XIV層, XIIIe~XI層, IX層より上層)とで異なる分類としたため、本項で説明を行う。分類にあたっては、剥片石器は形態を、礫石器は使用痕を重視した。破損などにより分類不能なものは、観察表の分類欄に「×」と記載した。

石 鏃

分類は、基部の形状により行った〔赤堀 1929・佐原 1964〕。

A類：茎があるもの(有茎鏃)。さらに、凹基のものを1類、平基を2類、凸基を3類とした。

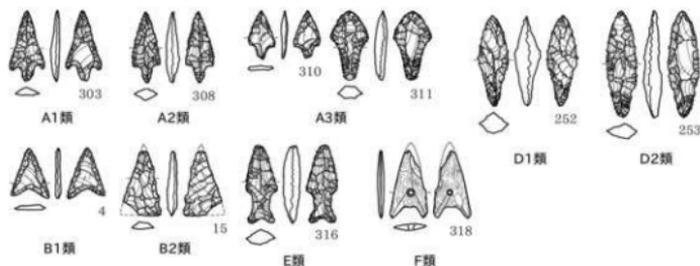
B類：茎がないもの(無茎鏃)。さらに、基部に抉りがあるもの(凹基無茎鏃)を1類、基部が平らなもの(平基無茎鏃)を2類とした。

C類：基部が丸みを帯びるもの(円基鏃)

D類：基部が尖っているもの(尖基鏃)。側縁が直線的なものを1類、外彎するものを2類とした。

E類：異形のもの

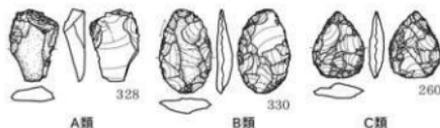
F類：磨製石鏃



第 21 図 石鏃の分類 (S=1:2)

石鏃未成品

分類は、野地遺跡〔加藤 2009c〕、元屋敷遺跡〔高橋_{ほか} 2002〕、北野遺跡〔高橋_{ほか} 2005〕を参考に行った。ただし、A～Cは連続的であり、厳密に区別はできない。



第 22 図 石鏃未成品の分類 (S=1:3)

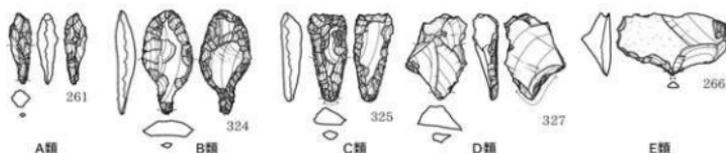
A類：素材の側縁または二側縁に部分的な二次加工が施された段階

B類：素材のほぼ全周に粗い二次加工が施された段階

C類：B類の二次加工の上に、細かな二次加工を重複させた段階

石 鏃

〔鈴木 1996〕等で「不定形石器 D 類」とされた、鋭利な先端部を持ち、刺突穿孔の機能(先端部からの種状刺維が見られるもの)を有すると考えられるものもこれに含めた。



第23図 石錐の分類 (S=1:2)

錐部とつまみ部（頭部）の形状から分類した。

A類：全体の形状が棒状で、二次加工はほぼ全面に及ぶもの。両面・両側縁加工を基本とする。

B類：つまみ状の頭部を有し、錐部とつまみ部の境が明瞭なもの。錐部はやや長く、両側縁加工が多い。

C類：錐部が次第に広がり、錐部とつまみ部の境が不明瞭なもの。二次加工の少ないものもある。不定形石器D類の一部がここに含まれる。

D類：明瞭なつまみ状の頭部を有するが、錐部が著しく短いもの。素材の形状を生かし、二次加工の少ないものが多い。不定形石器D類の多くがここに含まれる。

E類：石織を転用したもの。

楔形石器

分類は、両極剥離痕の状態から二分した。

A類：上下二極一対の剥離痕を持つもの。その中で、素材の長さと同剥離痕の関係から細分し、縦長のものを1類、横長ものを2類とした。

B類：上下および左右の四極二対の剥離痕を持つもの。

素材は礫素材のものと同剥片素材のものがあり、楔としての石器、両極技法で得られた剥片・破片、石織などの厚みを減ずるための二次加工の一部として用いられたものなどが含まれているものと考えられる。

なお、明らかに両極技法による石核は、石核として分類した。

不定形石器

二次加工或使用痕がある石器で、定型的でない石器を不定形石器とした。分類は、清水上遺跡〔鈴木1996〕、五丁歩遺跡〔高橋1992〕に従った。この中で、D類は石錐に、K類は石織未成品・石織

分類	方形形状	方形ライン	素材	二次加工部位
A類	スクレイパー	—	縦長	側縁と端部
	中型・急角度・連続割離	—	横長	片側縁と底縁
B類	スクレイパー	外楔状	縦長	片側縁と端部
	中型・急角度・連続割離	—	横長	底・縁
C類	縦面縁石器	直線状	縦長・厚手	片側縁
	大型・中型・急角度・縦面縁割離	内楔状	縦長・厚手	片側縁
		—	縦長・厚手	底・縁
		—	縦長・厚手	底・縁
		—	縦長・厚手	片側縁
—	外楔状	縦長・厚手	片側縁	
—	—	厚手	—	
D類	鋭利な尖頭部をもつ石核	直線状	厚手	片側縁（一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する）
		内楔状	厚手	—
		直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
		—	厚手	片側縁（D1類と同じ）
	大型・急角度割離	内楔状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
		—	厚手	片側縁（D1類と同じ）
		—	厚手	片側縁（D1類と同じ）
	小型割離	直線状	厚手	片側縁（D1類と同じ）
		内楔状	—	—
		直線状	薄手	両側縁
鋭入石核（ノック）	大型・中型・急角度割離	内楔状	縦長・厚手	側縁
		—	縦長・厚手	底縁
	中型・急角度割離	内楔状	縦長	側縁
		—	縦長	側縁・底縁
		—	縦長	側縁・底縁
小型割離	—	縦長	側縁・底縁	
	—	縦長	側縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続割離	端部に丸味	縦長	側縁と端部
		—	横長	側縁・底縁と側縁
G類	大型・中型・浅角度割離	直線状	縦長	側縁
		外楔状	縦長	側縁
H類	無加工（使用痕的連続割離・使用痕） 小型・浅角度割離	外楔状	青磁は自然産	底縁
		—	縦長	側縁
I類	端部に丸味・連続割離	端部に丸味	縦長・厚手	端部
		—	縦長・厚手	—
J類	無加工（使用痕的連続割離・使用痕）	—	縦長	側縁
		—	縦長	側縁・底縁
K類	両面加工（調整）石器 （片側部は折片状、断面はジグザグ状）	外楔状	厚手	—

※ゴシック以外の明瞭体は、一般的傾向を表したものが多く

第11表 不定形石器の分類（〔鈴木1996〕より転載）

未成品として器種認定し、不定形石器から分離した。

石 核

分類は、北野遺跡 [高橋_{ほか}2005]・五丁歩遺跡 [高橋 1992] を参考に行った。

A類：一つの打面から一つの剥離作業面に、同方向の剥離が施されるもの(打面1面、剥離作業面1面)

B類：一つの剥離作業面に複数の打面(約90°・180°ずれる)から剥離が施されるもの(打面2面以上、剥離作業面1面)

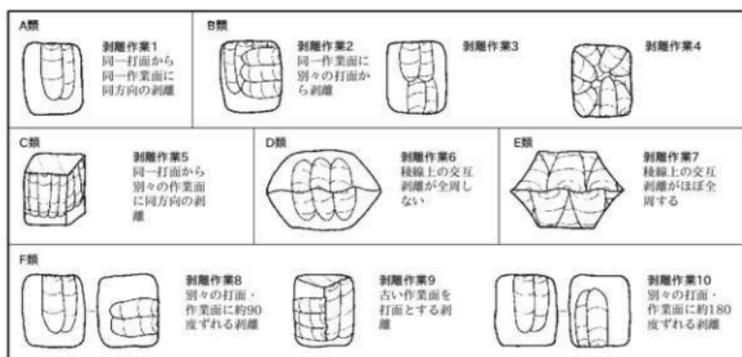
C類：一つの打面から複数の剥離作業面に、同方向の剥離が施されるもの(打面1面、剥離作業面2面以上)

D類：石核の稜線上からの交互剥離による剥離が施されるもの。稜線上の片面を剥離した後、その剥離面を打面として残りの片面に剥離を行い、剥離作業は全周しない。

E類：D類同様、石核の稜線上からの交互剥離による剥離が施されるもので、剥離作業が全周するもの。

F類：複数の打面と複数の剥離作業面で剥離が施されるもの(打面2面、剥離作業面2面)。

G類：両極技法による剥離が行われるもの。



第24図 石核の分類 [高橋_{ほか}2005] より転載)

磨製石斧

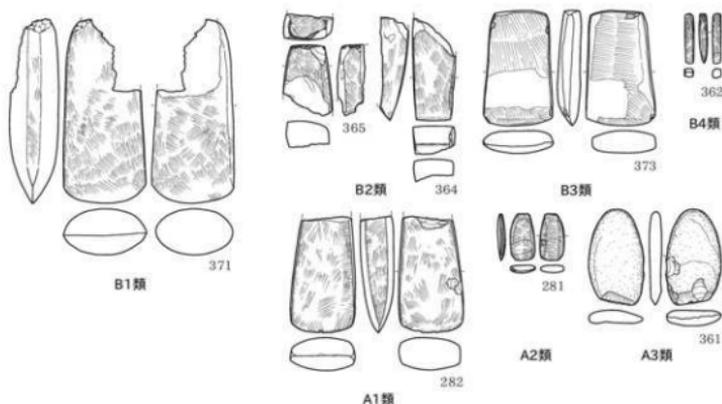
縄文時代からの系統をひくものと大陸系の磨製石斧に系統をひくものの二つに大分できる。よって、基本的にXIV～XI層のものはA類のみとなる。破片資料は分類不能とした。

A類：縄文時代からの系統のもの。刃部幅に対し、基部幅が狭い。3つに細分した。

1類：定角式磨製石斧。両側縁及び基部が研磨され、横断面は長方形または隅丸長方形、刃部は両刃となる。2類：小型磨製石斧。1類と比較して小型のもの。おおむね長さ60mm、幅35mm以下であり、両側縁及び基部が研磨される。3類：定角式でないもの。横断面形は楕円形を呈し、刃部のみ研磨されるもの。

B類：大陸系磨製石斧の系統のもの。4つに細分した。

1類：太型蛤刃石斧。側縁が平行で基部に厚みを持ち、断面形は楕円形または扁平長円形を呈する。側面観は影れた蛤のような形状で、両刃となる。2類：柱状片刃石斧。丁寧に研磨され、正裏面と側面に鋭い稜を有する。抉りを持つものと持たないものが存在する。3類：扁平片刃石斧。幅広く、厚みはない。



第25図 磨製石斧の分類 (S=1:4)

4類：小型方柱状石斧。柱状片刃石斧を小型にした形態のもの。壘形石器ともいう。本遺跡では、片刃のものと同刃のものがある。

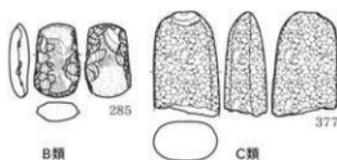
磨製石斧未成品

XV層とは異なり小規模ではあるが、製作している。素材はいずれも扁平礫である。製作過程を、剥離成形→敲打整形→研磨と想定し、制作過程の進捗状況から分類した。なお、A～Cは連続的であり、必ずしも明確に分類できるものではないことを断っておきたい。

A類：外周の1～3割程度しか調整剥離が進行しておらず、素材の礫面が5割以上残るもの（成形段階）。

B類：おおむね外周の5割以上に粗い調整剥離が施されるもの（成形段階）。側面には敲打により平坦面が形成されるものもある。

C類：成形段階の粗い剥離面の上に、細かい剥離面や敲打が著しく重複する。ほぼ磨製石斧の外形が整えられているもの（整形段階）。



第26図 磨製石斧未製品の分類 (S=1:6)

石 鏟

分類は、大角地遺跡〔加藤ほか2006〕を参考に行った。

A類：扁平礫の一方の軸に剥離によって糸掛けを作り出すもの。糸掛けが作出される軸の長さによりさらに細分し、1類：長軸に糸掛けを作出するもの、2類：短軸に糸掛けを作出するもの、3類：長幅比が同じで長軸・短軸の区別ができないもの、とした。

B類：扁平礫の二方の軸に剥離によって糸掛けを作り出すもの。

C類：敲打によって糸掛けを作り出すもの。

5) 各 説 (図版 89 ~ 92)

石 鏃 (250 ~ 260) 42 点出土した。分類別の出土点数は、A2 類 1 点、A3 類 2 点、B1 類 19 点、B2 類 6 点、D1 類 3 点、D2 類 3 点である (分類不能としたものは、数を記さない。以下の器種も同様である。) 平基のものが多く、その中でも持ちを持つ B1 類が多数を占めるが、そのうち数点は形態や石材、技術から縄文時代前期に帰属する可能性がある。250 は長幅比が 0.9 で寸詰まりな印象である。256 は流麗な柳葉形を呈する。最大径が中間にあり、くびれがない形態であまり類例のないものである。断面形は D 字状で裏面は平坦、先端のみ加工しているが、片面加工に近い。基部は衝撃剥離痕が認められる。全体の 1/3 ほどまでアスファルトが付着している。なお、42 点中 11 点の基部にアスファルトの付着が認められる。石材は珪質頁岩が 30%、頁岩が 19% を占め、流紋岩が約 17% と続く。257 ~ 260 は未成品である。全体では 57 点出土した。分類別の出土点数は、A 類 23 点、B 類 18 点、C 類 9 点である。B 類の段階までは素材剥離面が観察できるが、横長剥片の長軸を石鏃の長軸として、打面を側面側に置き二次加工を行うものが多く認められる。石材は成品同様、珪質頁岩が 30% で最も多いが、流紋岩もほぼ同率である。

石 鏃 (261 ~ 266) 22 点出土した。分類別では、A 類 3 点、B 類 2 点、C 類 6 点、D 類 11 点である。266 のように、二次加工の少ない簡素な形態のものが多い。石材別では多寡なく出土しているが、頁岩が 31.8% で最多である。

石 匙 (267・268) 12 点出土した。数が少ないため細分類は行わない。大型のもの (268) や横長のもの (267) が認められる。石材別ではそれぞれ 1 ~ 3 点と偏りなく出土し、石材は 8 種類にのぼる。

楔形石器 (269 ~ 271) 98 点出土した。分類別では A1 類が 51 点、A2 類 18 点、B 類 27 点で、縦長の A1 類が半数を占める。石材別では珪質頁岩と凝灰岩が最も多く、流紋岩、頁岩と続く。

不定形石器 (272 ~ 276・278) 51 点出土した。分類別では A 類・B 類が各 2 点、C 類 9 点、E 類・G 類各 4 点、F 類 12 点、I 類 1 点、J 類 10 点である。石材別では頁岩・珪質頁岩で 7 割近くを占め、流紋岩、凝灰岩、メノウなどが少数ずつ存在する。273 は A 類で、縄文前期のエンドスクレイパーに近似しており、東北地方の印象が色濃い。石材も同地方の珪質頁岩である。東北との結びつきがうかがえる資料である。

横長剥片を素材とするもの (272・274・275) は、90°前後方向を変えて石鏃未成品にする例がある [鈴木 1992] ことから、石鏃未成品の可能性があることを指摘しておきたい。

石 核 (277) 27 点出土した。分類別の点数は A 類・C 類各 1 点、B 類・G 類が各 3 点、D 類 7 点、E 類 2 点である。分類不能が最も多く、打面や剥離作業が定型的でないことがうかがえる。

磨製石斧 (279 ~ 285) 36 点出土した。当該期の定型である A1 類が、当然ながら圧倒的に多く 29 点、A2 類が 6 点である。石材は蛇紋岩が 64% を占め、安山岩、硬砂岩が数点ずつという状況である。284・285 は未成品である。全体では 34 点出土した。分類別の出土点数は A 類 10 点、B 類 13 点、C 類 2 点である。石材別では成品と同じ傾向がうかがえる。

石 鏢 (286 ~ 289) 137 点出土した。分類別では A1 類が 104 点で圧倒的に多く、A2 類 8 点、B 類 4 点、C 類 5 点である。石材別では安山岩が 55% でその後凝灰岩が 9.5%、砂岩と硬砂岩がそれぞれ 8% と続く。石材組成は縄文前期とほとんど変化がない。286 は幅 43.5mm で小型であるが、この 1 点のみ出土である。289 は磨石類を転用したもので、上下面に磨り潰し痕、左右側面に敲打痕が観察できる。正面の磨痕は不明瞭である。

磨石類 (290 ~ 297) 136 点出土した。分類別では A 類 22 点 (A1 類 9 点、A2 類 11 点、A' 類 2 点) B

類 20 点 (B1 類 3 点, B2 類 11 点, B3 類 4 点, B4 類 2 点), C 類 42 点 (C1 類 19 点, C2 類 8 点, C3 類 9 点, C4 類・C5 類各 1 点, C6 類 2 点, C8 類 2 点), E 類 5 点である。破片が多いことから分類不能の点数が多くなっている。石材別では安山岩が 50% で半数を占める。そのほか硬砂岩・砂岩・花崗岩・流紋岩・礫岩・凝灰岩・頁岩・蛇紋岩・ホルンフェルスがあり、様々な石材を使用している。292 は定角式磨製石斧 (A1 類) の転用品で、磨製石斧では刃部に比して基部幅が狭い形態である。上部 (基部) と下端 (刃部)、正面に敲打痕が見られる。293 は先端を尖らせるように V 字状となっている。A' 類では下面を平坦にする形態が多く、このような形態は珍しい。296 は上面が敲打、下面が磨り潰しである。下面周縁には使用の際にできた剥離痕が並ぶ。297 は C8 類である。表裏面には磨痕と凹痕、上下左右の端面には敲打痕、側面には磨り潰し痕が見られる。

琥珀原石 (298) 琥珀原石が 1 点出土した。ほとんどが礫面または風化面に覆われていたが、内側は赤色・透明であることを確認、水に浮いたことから琥珀と判断した。出土層位から後期末に位置づけられると考えられる。これまでの県内における琥珀の出土例は、和泉 A 遺跡 (上越市・前期前葉)、大久保遺跡 (上越市・前期前葉)、馬高遺跡 (長岡市・中期後葉)、青田遺跡 (新発田市・晩期終末)、野地遺跡 (胎内市・後期末～晩期前葉前半及び後期中葉～後葉) がある。和泉 A・大久保が丸玉、馬高が大珠、青田が破片、野地が原石であり、いずれもややくすんだ赤色で透明な原石を用いている [加藤 2003]。これらすべてを植田直見氏 (元興寺文化財研究所) が赤外吸収スペクトル分析を行っており、鏡子産原石とよく似た波長を示すという結果が得られてきた。しかし、当遺跡出土資料の分析においては、岐阜県瑞浪産の可能性が出てきた。そこで、これまでのデータを見直したところ、野地遺跡・青田遺跡の資料も瑞浪産である可能性があるとされた。当遺跡及び野地遺跡・青田遺跡の資料は、いずれも縄文時代後期・晩期の資料であり、この時期に鏡子以外に瑞浪の原産地も開拓された可能性がある。

石 皿 (299) 18 点出土しているが、すべて破片資料である。

類 石 棒 (300) 1 点のみ出土した。石材は粘板岩で、薄く剥がれるように剥落している。断面は台形に近い。下部は剥離によって斜めに整形している。第 28 図 4 (61p) は、安山岩製で頭部を丸く作出し、上部にわずかながら抉りが認められることから石棒の可能性が高いと考える。表面は風化が進んでいる。数か所あるキズはガジリ痕と判断される。

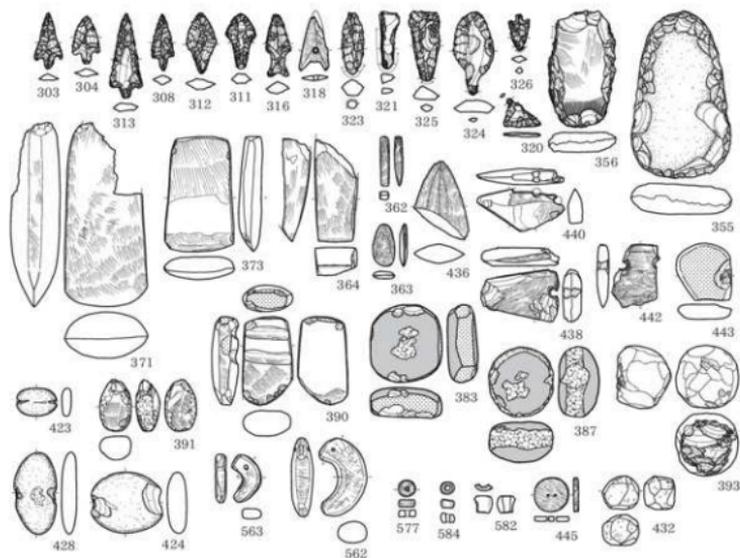
D IX 層より上層

1) 帰 属 時 期

IX 層・灰色粘土層・F 層については、出土土器から弥生時代中期中葉に比定される。IX 層・灰色粘土層のみでの出土量は多くないが、技術・形態・石材から IX 層と同時期に比定できると考えられた資料が、IX 層より上層の VI 層や 23 層などからも多く出土していることから、「IX 層より上層」と呼ぶこととし、一括して述べる。なお、23 層については弥生時代後期 (法弘式古段階) に比定されることから、単独で石器・石材組成を示すが、文章・図版での記載については一括して行う。

2) 石 器 組 成

石器は 10,770 点出土した。このうち剥片石器が 7342 点 (68.2%)、礫石器が 834 点 (7.7%)、玉作関連遺物が 2521 点 (23.4%) である。玉作関連遺物については次項で述べる。内訳は石鏃 (未成品含む) 698 点、石錐 175 点、石匙 5 点、楔形石器 259 点、不定形石器 274 点、石核 151 点、剥片 5642 点、打製石斧



第27図 K層より上層の石器組成

9点、磨製石斧(未成品含む)129点、磨石類164点、石皿・台石19点、多面体礫石1点、砥石480点、石錘170点、石製品46点、玉類27点である。剥片を除くと、石鏃・石鏃未成品の多さが目立ち、石鏃の製作が活発であったことがうかがえる。また、磨製石斧については、搬入品の太型蛤刃・柱状片刃・扁平片刃石斧の出土が特筆される。太型蛤刃・扁平片刃石斧については北信地方で製作されたものの可能性が高い。

3) 石材組成

第12表のとおりであるが、縄文時代とは明らかに異なる。流紋岩が42.9%で最も多く、緑色凝灰岩(15.3%)、頁岩(10.2%)、ヒスイ(6.4%)、凝灰岩(6.1%)と続く。このうち緑色凝灰岩とヒスイはそのほとんどが玉作関連遺物であることから、一般の石器組成としては、流紋岩が過半数を占めることになる。流紋岩は、磨製石斧を除く剥片石器において、すべての器種において最多となっている。流紋岩や凝灰岩は前述したように、比較的近距离で採取可能な石材であり、身近な石材を主体として使用したことがうかがえる。

4) 各 説 (図版92～103 301～452)

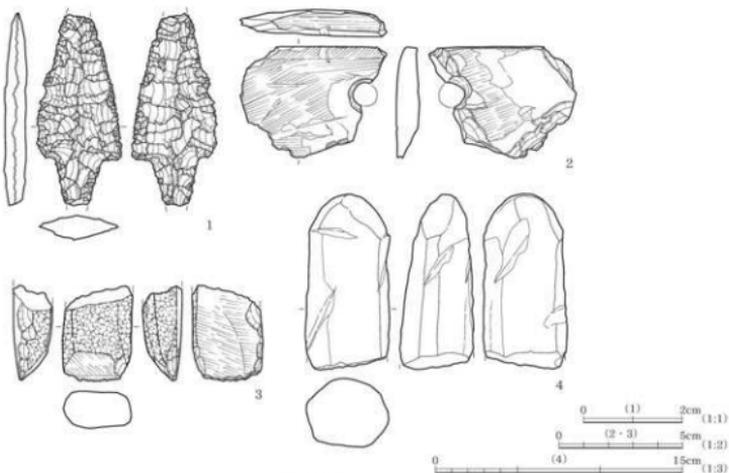
石 鏃(301～319・328～334) 295点出土した。分類別では、A類218点(A1類94点、A2類57点、A3類42点、A類25点)、B1類2点、D1類6点、D2類8点、E類1点、F類2点である。A類が74%を占め、このうちA1類が最多である。316は有茎・凹基である。茎部が短ければアメリカ式石

23群	23層石器 794点 73.38%										計				
	石鏃	石鏃半成品	石鏃	標形石鏃	不定形石鏃	石鏃	石鏃	磨製石鏃	磨製石鏃半成品						
奥羽群	5	9.40	44	423.97	3	46.42	26	260.73	29	523.37	16	2983.43	273	2653.88	
越前群	2	1.90	3	55.14	1	6.00			2	195.58	5	85	1385.28		
真石			1	3.00			6	907.06	8	143.34	5	975.93	122	1480.01	
伴石群	2	3.60	2	7.40			5	85.63	2	53.13		38	393.85		
下群							2	13.15				5	31.93		
メノウ					1	1.13				4	169.27	3	27.85		
鏡石系		1	2.43						1	58.19	34	442.72	4		
磨石		1	1.90			1	2.83	1	2.91			1	15.82		
ガラス質安山岩		2	13.80			1	13.12		1	55.27	10	113.40			
緑色凝灰岩												1	51.10		
粘板岩											1	0.92			
花崗岩							1	43.44			3	18.87	1	38.00	
燧石												5	452.12		
砂岩												3	119.45		
砂岩											1	6.80	8	2061.21	
砂岩											4	37.91	7	621.89	
砂岩											1	24.59	2	334.10	
砂岩											1	49.94			
石系	9	13.90	54	507.66	5	53.55	42	926.47	42	918.53	33	3838.68	580	6945.23	
点数比%	1.94%	11.64%	1.08%	1.08%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	22	3224.32	
														2	334.10
															0.43%

23群	磨石器 123点 11.37%				石製品・玉物 7点 0.65%		玉物産物 158点 14.60%		計							
	磨石器	磁石	石鏃	石製品	玉物	玉物産物	玉物石製品									
奥羽群	1	182.69	1	2	480.80		4	42.76	403	7626.63						
越前群	1	560.20	12	1026.70	4	813.20	1	30.50	7	85.57	123	4159.89				
真石	2	317.80	3	363.64							147	3291.28				
伴石群											49	412.61				
下群											2	45.08				
メノウ											8	138.25				
鏡石系											36	501.34				
磨石											4	23.16				
ガラス質安山岩											14	195.60				
緑色凝灰岩											107	1046.72				
粘板岩					1	16.83		106	995.63		1	118.83				
花崗岩					2	83.53					3	84.45				
砂岩					1	83.70					1	83.70				
安山岩	15	6755.21		12	2155.90						32	9011.42				
燧石	1	58.20		1	179.80						2	696.12				
砂岩	2	440.40	61	1521.95	1	78.30			1	40.88	69	3260.98				
花崗岩	1	470.40			1	112.80					2	583.20				
砂岩											9	2068.01				
ホルンフェルス					2	483.87					2	463.87				
砂岩											13	993.90				
石英										40	1910.23	40	1910.23			
石英											2	73.63				
磨石					2	6.28					1	6.28				
ガラス							1	0.06			1	0.06				
計	23	8794.90	70	16802.29	24	4368.37	6	137.14	1	0.06	146	2965.86	12	176.21	1082	40071.72
点数比%	4.96%	16.38%	5.17%	1.59%	0.22%	0.22%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%	

※ 各器物の在列は、点数（点）、右列は重量（g）を示した。点数比は、二次加工が施されない石鏃・石製品を除いた464点を母数として算出した。

第13表 23層石器・石製品集計



第28図 石器実測図(1: S=1/1, 2: 3: S=1/2, 4: S=1/3)

が8割近くを占める。次いで頁岩7%、珪質頁岩4%となっている。第28図1は大型の石鐮で、本遺跡から出土した石鐮のうち最大のものである。長さ48.9mmを測るが、上下とも欠損していることから完形では55mm以上になると推測できる。黒曜石製で、緻密な剥離が施される。技術的には縄文前期の様相を呈するが、形態は該期には見られないものである。中世の溝から出土しており、所属時期は不明である。

石 匙 (320) 5点出土した。少数のため分類は行っていない。320は長さ・幅とも2cmに満たず、重量は0.5gという極小型のものである。ほかに、大型で横長のもの(平根品)、小型で縦長のものがある。

石 鏃 (321～327) 175点出土した。分類別ではA類53点、B類26点、C類29点、D類24点、E類28点である。A類が多いほかは各類ともほぼ同率である。321は側縁のみに二次加工が施される。左側縁では上半まで回転痕が認められ、正面下半は磨滅しており、使用痕が顕著である。323も下端で回転痕が顕著である。E類(326)は縄文時代には見られなかったものであるが、当期では28点(16.0%)出土している。石材は流紋岩が約71%、頁岩が約14%である。

楔形石器 (335～339) 259点出土した。分類別ではA類172点(A1類120点、A2類52点)、B類87点でA1類が最も多い。335のように礫素材のものも少数ある。石材はやはり流紋岩が多数を占め63%、頁岩が約14%、珪質頁岩が約10%となる。

不定形石器 (340～348) 276点出土した。分類別の点数は、A類9点、B類12点、C類26点、E類26点、F類31点、G類25点、I類14点、J類22点である。比較的偏りなく出土している。石材は流紋岩が67%を占め、頁岩17%、凝灰岩6%、珪質頁岩4%である。

石 核 (349～352) 151点出土した。分類別では、A類3点、B類7点、C類5点、D類18点、E類24点、F類4点、G類27点で、分類不能としたものが最多である。分類不能としたものの多くはA類からF類の組み合わせであることから、剥離面や剥離の方向性が定型的でないことがうかがえる。石材はやはり流紋岩が多く50%、頁岩26%、凝灰岩8%と続くが、それに次いでメノウが7%を占めることが特徴的である。

打製石斧 (354～356) 9点出土した。354正裏面の二次加工は刃部のみで、それ以外は側面のみ加工によって仕上げられている。左右非対称の撚形を呈する。刃部に光沢が認められ、裏面に残る線状痕は左側縁のラインと平行している。355は凝灰岩製で、非常に重量感がある。礫素材を加工し左右はほぼ対称形に仕上げている。356は自然面を残す横長剥片を使用しており、石材は頁岩である。裏面下部には広い範囲に線状痕と光沢が認められる。線状痕は刃部にほぼ直交する。光沢は正面の上部・下部にも見られるが、それを切る新しい剥離があることから、刃部再生を行った可能性が高い。

磨製石斧 (357～377) 成品104点、未成品25点が出土した。成品の分類別ではA類50点、B類34点であり、分類できない破片資料が多い。A類の中ではA1類とA2類の数が拮抗しており、小型品が多い。A類の石材は蛇紋岩が36点、安山岩・硬砂岩が各10点、砂岩3点、凝灰岩1点である。B類は太型蛤刃石斧(B1類)が多いが、完形品は皆無である。

370は刃部が欠損しており、371は上部の大半が欠損している。371の基部には敲打痕が認められる。敲石へ転用したものかもしれない。石材はすべて閃緑岩で、長野市榎田遺跡などが位置する北信からの搬入品と考える。柱状片刃石斧(B2類)は9点出土したがすべて破片資料であり全体形をうかがうことはできない。いずれの資料も精緻なつくりで、丁寧に磨き上げられている。石材は9点とも緑色凝灰岩であるが、在地の石材とは異なり暗青灰色を呈する。搬入品と判断されるが、産地は不明である。366・367は抉りを有する。厚さは両者とも43mmである。B3類は扁平片刃石斧を一括したが、369・373

のような幅50～60mm前後のものとは374・375のような幅30～40mmのものがある。4点出土したが、石材は閃緑岩2点、硬砂岩1点、蛇紋岩1点である。371は、研磨されていない部分が帯状にめぐっている。第28図3は小型の扁平片刃石斧である。裏面と刃部以外は敲打痕が残りに、側面には剥離も見られることから、欠損した扁平片刃石斧を小型品に再生したものと判断される。石材は閃緑岩である。

376・377は未成品C類である。未成品は25点出土し、分類別ではA類7点、B類8点、C類2点である。石材は蛇紋岩64%、安山岩20%、流紋岩8%、硬砂岩と閃緑岩がそれぞれ4%である。A類成品と未成品で蛇紋岩が多く見られるが、形態や技術からも縄文時代の石斧との区別は困難であり、堆積状況からも前期遺物が混入している可能性も否定できない。

磨石類 (378～392) 164点出土した。分類別ではA類27点(A1類9点、A2類14点、A'類4点)、B類21点(B1類4点、B2類12点、B3類4点、B4類1点)、C類54点(C1類12点、C2類19点、C3類15点、C5類3点、C6類4点、C8類1点)、E類18点である。A類からC類の多寡については縄文時代と変わらないが、E類が18点(11%)と多くなっている。石材では安山岩が53%で過半数を占め、硬砂岩12%、砂岩8%、花崗岩7%と続く。ほかに8種類の石材が出土しており、多様な石材を使用する点は縄文時代と同様である。

形態もほとんど変わらない。円形・楕円形・隅丸方形・棒状などがある。ただしE類については、弥生時代では磨製石斧の形態にバラエティが出てくるため、縄文時代とは当然ながら異なってくる。390は太型蛤刃石斧の転用であるが、挟りが2か所見られ、磨製石斧としても希少なものであったと考えられる。下半を折損したため磨石類として使用したものと推測できる。上下面と左側面に磨り潰し痕が認められる。392は390同様、下半を折損した太型蛤刃石斧の転用であろう。上面に磨り潰し痕、側面と正面、下端に敲打痕が認められる。391は小型品の転用だが、転用以前を考えると、成品にしては厚すぎることから、未成品を転用したものかもしれない。

E類以外で見ると、388の凹痕は大きく深いものであるが、本遺跡ではこの形状は1点のみの出土である。左右の一部を除いて側面全面敲打痕が認められる。389は非常に重量感がある。石材は流紋岩である。

多面体敲石 (393) 1点のみ出土した。下面は全面剥離が施されるが、下面以外は全面敲打されている。石材は流紋岩で、重量感がある。

石皿・台石 (394～397) 19点出土した。そのほとんどは破片資料である。安山岩が半数を占める。394・395は石皿で、396・397は台石である。396は花崗岩製で、重量は6.9kgもある。下面中央に敲打痕が認められるが、表裏面の痕跡は不明瞭である。397は中央に凹痕があり、その周りに粗い磨痕が認められる。

砥石 (398～421) 480点出土した。砂岩が圧倒的に多く84%を占め、凝灰岩が13%である。ただし、点数については、XV層でも記述したように、砂岩製のは非常に脆く割れやすく、破片資料がほとんどであるため、現在の点数のみで多寡を判断することはできない。さらに、砥石は弥生時代以降にも使用され続けるものであることから、Ⅶ層より上層から出土したものの中には、古墳時代以降のものも含まれている可能性がある。特に、凝灰岩製で四角柱状の415や417などは、その形態から鉄製品研磨に使用されたものと考えられる。

管玉・勾玉の製作資料の出土量に比較して、筋砥石など玉作に関連する砥石の数は非常に少なく、筋の見える砥石は、報告遺物を含めても17点ほどしか出土していない。401は表裏面中央に、敲打痕が溝

状に認められる。408 は長さ約 30cm の置砥石であるが、上面に筋が集中している。面によって使い分けていたのであろうか。414 は凝灰岩製で、砥面は非常に滑らかであることから、玉砥石の可能性もある。420 は軽石製である。鋭い線状痕を有する。

石 鐘 (422～430) 170 点出土した。分類では A1 類 81%、A2 類 5%、B 類 2%、C 類 3% で、A1 類が圧倒的に多い。

422・423 は幅 4～5cm、長さ 3～4cm の小型品であるが、出土したのはこの 2 点のみである。糸掛けの作出は剥離によるものがほとんどであるが、425 のように鋭い線状痕によるものや、敲打によるもの(429)がある。両端に敲打痕が認められる。430 は形態が異なる。

石 製 品 (431～451) 431～433 は軽石製で多面体を有するものである。裏山遺跡 [小池^{ほか}2000] に倣い、軽石製研磨具とした。本遺跡からは 15 点出土したが、このような痕跡を持たない軽石も多く出土している。434 は磨製石製品で蛇紋岩製である。中央部分は表裏面とも稜を有し、凹みが認められる。裏面は平坦だが表面はやや盛り上がる。左右側面には幅 1mm の面を有する。用途不明である。

435～442 の石材は黒色頁岩と粘板岩で、本遺跡の中では異色の一群である。435 は偏四角形を呈し、外側四方に稜を有するが、種類は不明である。436 は磨製石剣の可能性が高い。断面形は菱形を呈し筋を有する形態で、希少なものである。刃部先端のみの破片資料であるが、幅は断面位置で 44mm あり、大型品に属する。切先には微細な剥離が見られるが、これは刃こぼれ痕と考えられ、銅剣と同様、祭祀で使用されたものと推測する。437 も磨製石剣の可能性は否定できない。438 は穿孔されていることから石包丁の可能性があったと考えたが、石包丁にしては厚みがあることから器種を特定できない。ただし、上越市吹上遺跡からは、厚さ 16mm を超える石包丁が数点出土している。440 も、見た目は石包丁に近似しているが、孔が上端に接するほど近く、さらに上面に刃部を作り出していることから、不明石製品とした。実測図の天地も異なる可能性がある。439 は磨製石製品を転用したものであろうか。周縁には二次加工が施される。442 は石包丁の可能性が高い。刃部先端がわずかに残存している。第 28 図 2 も、石包丁の可能性が高いもので、石材は粘板岩である。442 (図版 103) と近似している。443 は表裏面とも非常に平滑にされており、石材は蛇紋岩である。西郷遺跡 [土橋^{ほか}2009]などで出土している「ミガキ具」の可能性が高い。

444～447 は石製模造品である。周縁を丸く仕上げるもの(444・445)と多角形にするもの(446・447)がある。すべて滑石製である。448 は緩やかな抉りを作り出し表面は平らに仕上げているが、裏面と右半分を欠損しているため全体形は不明で、器種も特定できない。449 は凝灰岩の自然罅に孔が 3 か所穿たれ、下面は削られている。下面には線状痕が明瞭に残る。450・451 は凝灰岩製である。450 は上下面中央に溝を切り、直交方向にも端部のみ切込みを入れる。上下対になるかたちで、側面も面取りをするなど丁寧に仕上げているが、用途は不明である。451 は円柱状に整形しており、全面に横方向の擦痕が認められる。

玉 類 (562～586) ここでは、玉作製作資料以外のものを一括した。白玉については古墳時代の帰属であるが、ほかの玉については時期の特定は困難である。562～567 は勾玉である。562・567 はいわゆる定型の C 字状、564・565 は半珠状、563 は二者の間のような形態である。563 は滑石製であるが白色を呈し、やや硬質な感じである。563～565 も滑石製である。566 は三角形状で、長さ・幅 5mm、厚さは 2mm、孔径はわずか 0.3～0.8mm という、非常に小さい垂玉である。石材はヒスイで、透明感のある綺麗な緑色を呈する。569・570 も同類とできるものである。569 は穿孔途中の未成品で、

両側穿孔であることがわかる。570 は白玉で、一端が欠損している。571・572 は形態や滑石の質感から縄文時代前期に帰属する可能性が高い。573 は不思議な形状である。上から見ると2孔穿孔された痕跡があり、いずれも破損したように見えるが、(実測図における)表面は破損後研磨されている。一方裏面は破損したままであるが、裏面の破損は表面の穿孔・研磨面よりも新しい。このことから、最初の穿孔に失敗した後、破損面を研磨し再加工しようとして再び穿孔したが、再失敗したという過程が、可能性のひとつとして想像できる。574～581 は滑石製の白玉である。68 点出土した。直径は3.5mm～5.4mmの範囲に多く分布し、平均は4.7mmである。厚さは1.8mm～3.4mmの範囲におさまるものが多く、平均は2.6mmである。582～586 はガラス製である。582・585 は群青色、583・584・586 は青緑色を呈する。孔の両端は研磨により平坦面が作出されている。

E 玉作 関連

本遺跡からは、弥生中期の緑色凝灰岩製の管玉・ヒスイ製勾玉の製作工程を示す遺物が多量に出土した。管玉製作資料が1612点(約10.1kg)、勾玉製作資料が672点(約18.8kg)、玉作関連の石製品が238点(約6.1kg)である。管玉製作資料については、1cm四方未満の剥片・砕片は点数に含めておらず、それらを含めば数万点に及ぶことは必至である。管玉は緑色凝灰岩のみで、鉄石英製は出土していない。ヒスイは糸魚川産である可能性が高いと考え、海路から搬入されたと想定できる。近くはない距離でありながら、なぜこれほど大量に運ばれてきたのであろうか。敲石も含めた総量は21.9kgにもおよび、上越市吹上遺跡を上回り、北陸地方で最多、つまり全国でも最多の遺跡となる。

玉作工具としての石製品では、石針・擦切具・弾車・砥石が出土している。砥石については前項で一括して述べた通りである。石針の石材は安山岩製のみで、メノウなどほかの石材は出土していない。

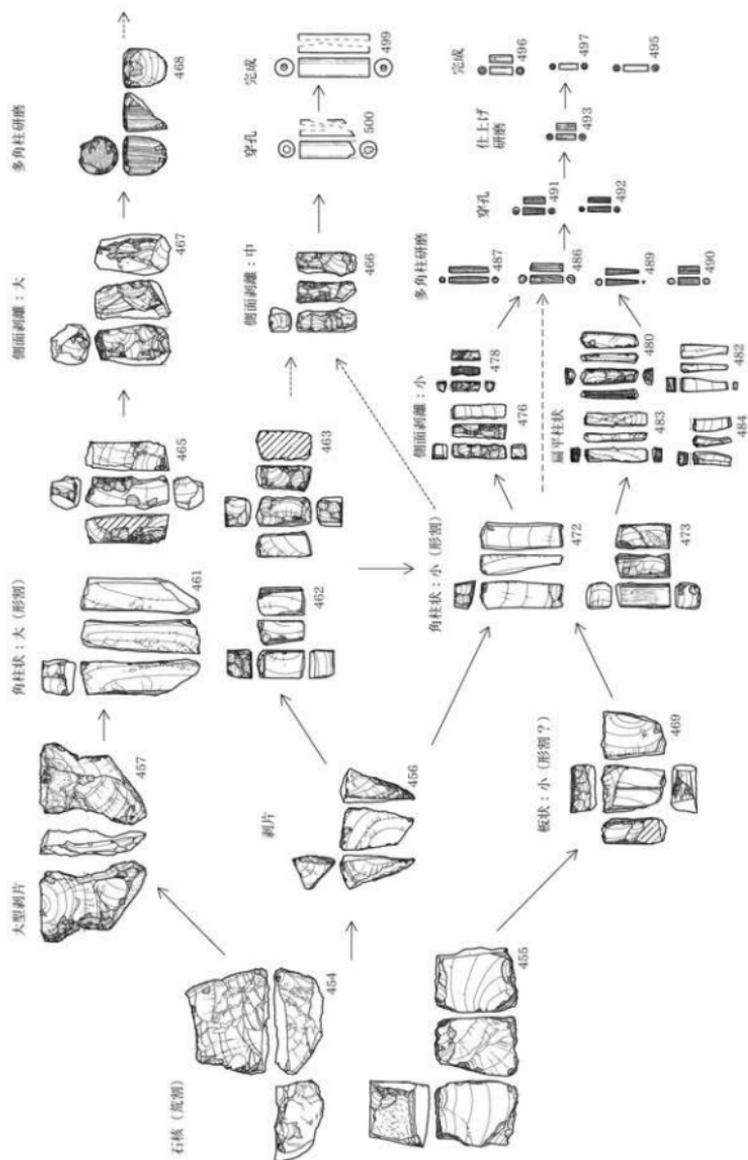
1) 緑色凝灰岩製管玉製作資料(図版104～106 452～500)

緑色凝灰岩製管玉の製作工程については、先学の様々な研究成果があり、技法や地域差などが解明されつつある。しかし、地域差があることも要因のひとつであろうが、工程についての呼称などは統一されておらず、その定義については、筆者の理解不足もあろうが曖昧なところもあるように思える。本遺跡では、「角柱状」「扁平柱状」など形態そのもので呼び表すこととし、これに対応すると考える「荒削」「形削」といった用語を平行して表記する。なお、緑色凝灰岩製の楔形石器も工程品として数量に含めた。

本遺跡における管玉製作工程の流れを第29図に示す。基本的な流れは下谷地遺跡〔齋藤1979〕、平田遺跡〔田海2000〕と同じであるが、本遺跡では分類に当てはまらないものが多く存在する。角柱状剥片を作出し、分割を行って目的のサイズまで小さくした後、研磨、穿孔、仕上げ磨きという流れは確かに存在するが、角柱状剥片を作出するまでの工程は一律ではなかったと考えられる。つまり、定型的な順序があるわけではなく、最終形態を意識して作業が行われていたと推測する。石核から板状の剥片を採取できれば、それを分割して角柱状剥片を作り出す。あるいは剥片が適当なサイズであれば、剥片から角柱状剥片を作出することもありと想定できる。角柱状剥片は幅広いサイズがあり、便宜的に大小の2種類に区分した。厳密に区分

分類	点数	重量(g)
原石・分割塊	5	465.25
石核	33	2003.61
大型剥片	9	503.06
楔形石	4	32.47
角柱状：大	62	889.43
側面割離：大	5	69.67
工程不明：大	1	0.93
多角形破片：大	1	8.33
側面割離：中	1	2.92
穿孔：中	1	1.06
完成品：中	1	3.10
板状：小	40	614.90
角柱状：小	75	335.42
側面割離：小	14	8.10
扁平柱状：小	63	34.70
多角形破片：小	16	2.52
穿孔：小	4	0.75
仕上げ磨き：小	3	0.43
完成品：小	55	3.05
剥片	1319	5155.70
計	1612	10135.40

第14表 緑色凝灰岩製管玉製作資料 工程別集計



第 29 図 大武雄跡出土管玉の製作工程 (S-1/2)

できるものではないが、大きいもの（以下、角柱状：大とする）は平均長さ29.7mm、幅20.3mm、厚さ17.5mmで、小さいもの（以下、角柱状：小とする）は平均長さ23.5mm、幅11.8mm、厚さ9.8mmである。角柱状：小の幅は角柱状：大のほぼ1/2サイズであることから、角柱状：大は太型管玉の工程品であるだけでなく、細型管玉の工程品にもなり得るのではないだろうか。

扁平柱状剥片は、全体的に幅：厚さが2：1程度のを分類したが、485のように上面から下部端まで同じ厚さを保つ個体は少なく、上部に厚みを持つ剥片状のものが多い。上部では幅と厚さにそれほど差はなくとも、全体的に扁平なものはここに分類した。

それでは報告番号の順に個々の石器について述べる。452～455は石核（荒形段階）である。454は横長の剥片を作出した残りである。でべそ状に打点が残っている。石材としては、気泡が多く入り適当な素材とは言えないものである。455は直方体を呈し、典型的な石核である。擦切溝が上面と側面に認められるが、側面の溝は2か所とも斜方向に入っている。

456～458は剥片である。大型のもの(457)や小型のもの(456)があるが、両者の区分は明瞭ではなく、457は両者の中間サイズとも言える。456は断面三角形状で、正面と右側面上端に擦切溝が残る。

459～465は角柱状：大（形別段階）としたものである。459は現状では板状に近いが、裏面は節理面で割れていることから、本来はもっと厚みがあったと思われ、ここに分類した。右側面は擦切溝に対して剥離方向が逆であるが、これは施溝分割の際、上からの衝撃よりも下からの衝撃のほうが強かったことを示している。硬い物体の上で分割を行ったのであろうか。460・462は上面が盛り上がっていたためか、集中して剥離を行っている。461の擦切溝は長軸1か所であるが、きれいな直方体に分割できている。細かい調整剥離は上面のみである。464は長軸方向の擦切溝が3か所あるもので、本遺跡では大変珍しい。左側面中央の細かい剥離が集中している部分は潜在的な割れであり、剥離ではない。右側面と裏面には側面剥離が施される。

467は極太型管玉〔河村2010〕（以下、極太型とする）の側面剥離工程品（以下、側面剥離：大とする）である。468は極太型の多角形研磨段階である。直径は20mm 近くあり、467のサイズとほぼ一致する。上面には連続した剥離がめぐり、稜を作出している。

469・470は板状剥片である。469は、幅が厚さの約2倍で、典型的な板状剥片である。正面中央に擦切溝が残るが、溝はごく浅く、施溝を始めたばかりの段階であったことがわかる。上面縁辺の微細剥離は一辺全体に及ぶ。

471～475は角柱状：小（形別段階）である。473は上下面を除く面に磨痕が認められる。擦切溝を4か所有するものはこの1点のみであるが、施溝分割面した面を新たな打面として使用し、90°ずつ転位している。474は本遺跡では珍しい、上面に直交する擦切溝が入るものである。側面の擦切溝がそれらより新しい。

476～478は側面剥離：小としたものである。476は上面に、直交する擦切溝を持つが、施溝分割面には剥離が認められない。477は全面に剥離が施されるが、振れた状態は解消していない。

479～485は扁平柱状剥片である。477正面は全体的に磨痕が見られるが、磨面は稜を有し平坦では

分類	計測 点数	法量平均 (mm)			擦切溝 あり	擦切溝			
		長さ	幅	厚さ		1	2	3	4
石核	26	41.6	42.8	30.9	7.7%	2	0	0	0
板状	32	29.3	30.2	14.0	43.8%	5	8	1	0
角柱状：大	54	29.5	20.2	17.5	68.5%	15	21	1	0
側面剥離：大	3	42.1	18.5	17.5	—				
側面剥離：中	1	24.3	9.8	9.0	—				
角柱状：小	65	23.2	11.5	9.4	69.2%	19	24	1	1
側面剥離：小	14	14.8	5.3	4.6	—				
扁平柱状	56	16.0	6.9	4.3	57.1%	16	15	1	0

第15表 工程別のサイズ・施溝分割の比率

ない。480は左側面と縁辺部が研磨されており、稜を取ろうとしているようである。482～484はいずれも上面に擦切溝が入るものである。479については、下部が扁平であるためここに分類したが、角柱状：小との区分が微妙なところである。481も形状からここに分類したが、擦切溝が正面中央に入る。とすると、工程としてはもう一段階存在することになる。この1点のみの出土のため断定はできないが、扁平柱状からさらに極小の角柱状剥片を作出する工程が存在する可能性も想定しておきたい。

486～490は多角柱状に研磨する工程である。489は下部が細くなっており、下端の最小径はわずか1.2mmである。下端に合わせて細く仕上げようとしたのか、あるいは別の用途に使用するためのものであろうか。491・492は多角柱状に穿孔されたものである。492は両側穿孔であることがわかる資料であるが、貫通孔の径は針の先ほどしかなく（0.2mm程度）、穿孔途中のものかもしれない。外面はやや研磨が進み全体的に丸みを帯びている。493・494はかすかに稜線が残り、493は完成品と比較して光沢が不足していることから、仕上げ研磨の段階と判断した。495～497は細型の完成品である。54点出土した。そのうち完形品は41点であり、長さ平均6.6mm(4.2～10.6mm)、直径平均2.4mm(1.8～3.2mm)、孔径平均1.4mm(1.2～1.7mm)である。全体的に短いものが多く、10mmを超えるものは1点のみである。ただし、研磨の段階では486・487・489・494のように15mm前後のものも見られることから、長いタイプのものも製作していたと思われる。499・500は太型で、499は完成品、500は穿孔途中に失敗したものである。両面穿孔されているが、貫通しないまま外面まで到達し破損している。2点とも直径は7mm台で、サイズとしては側面剥離工程466からの流れを想定できる。ただし、石材は緑色凝灰岩ではあるが淡色で質感が異なるため、搬入品である可能性、あるいは新しい時期に帰属する可能性も考えられる。

2) ヒスイ製勾玉製作資料(図版106・107 501～532)

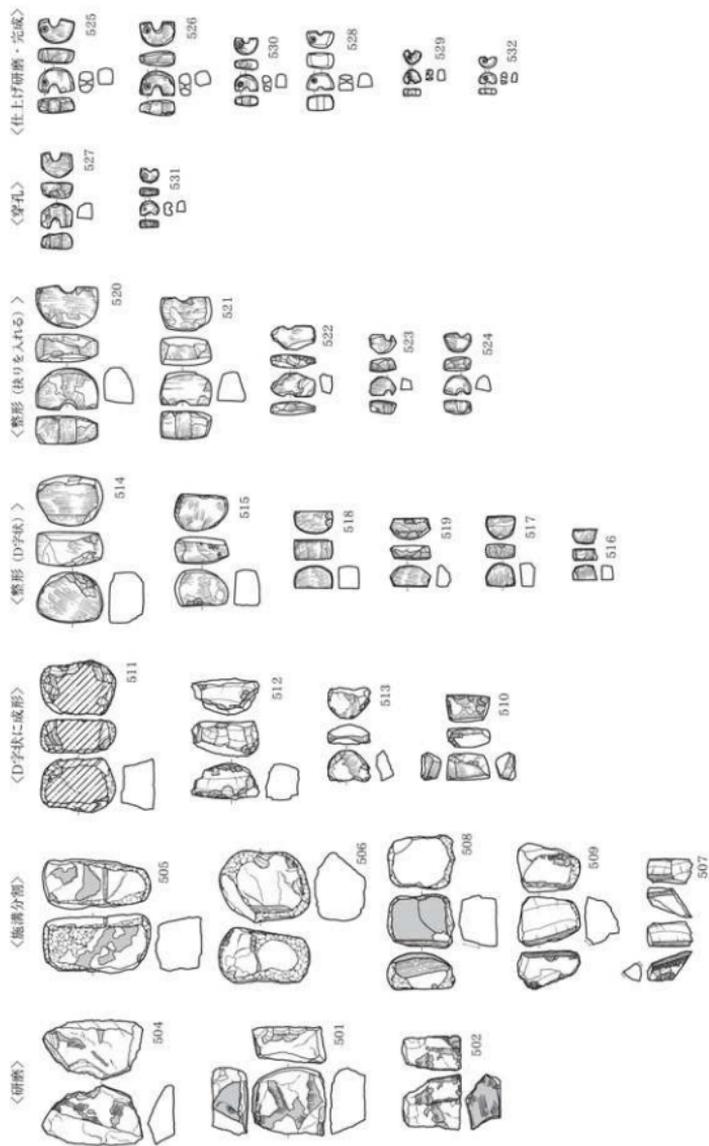
ヒスイ勾玉の製作工程資料についても、工程品の呼称は管玉同様、形態そのものあるいは「～段階」で呼ぶこととした。原石・分割段階のもの、剥片、D字状に近い段階から完成に至るまでの製作工程品に分類した。原石と分割段階は区別が難しく一括した。剥片は、長さに対して厚みのないもの、周縁部が薄くなるものとした。出土したヒスイのうち、原石・分割段階と剥片が9割近くを占め、整形段階のものが少ないことから、D字状に成形するまでの工程は不明瞭である。分割を繰り返しD字状に整形した後は研磨を行い、抉りを出し穿孔するという工程となる。ただし、分割段階でも研磨痕を有するものが15点あり、検討を要する。

施溝分割の痕跡が認められるものはわずか7点である。被熱した原石や剥片は少なからず存在するため、熱を利用して分割する場合は多かったのかもしれない。原石・分割・剥片は勾玉以外の工程品の可能性もあるが、本項目で一括して述べる。

それでは報告番号の順に個々の石器について述べる。501・502・504は磨痕の認められる分割礫である。16点出土した。磨痕は部分的なものであるが、石器の表面に凹凸があることで、研磨すると凸の部分のみ磨痕が残るためこのような状態になっている。502はかなり研磨が進んでおり表面は平滑である。左側面の割れ口は磨痕よりも新しい。意図の有無は不明であるが、研磨の後分割されている。499

分類	点数	重量(g)
研磨痕あり	16	1522.46
穿孔痕あり	1	12.24
擦切溝あり	7	405.73
成形(D字状にする段階)	7	161.67
成形(D字状にする段階か)	3	45.41
整形(D字状)	16	210.45
抉りあり	5	22.96
穿孔途中	2	1.57
仕上げ研磨・完成品	6	4.94
原石・分割	161	13667.28
剥片	448	2734.25
計	672	18778.96
原石(その他)	14	2457.40
原石(端部のみ磨行)	5	628.00
計	19	3115.40
合計	691	21894.36

第16表 ヒスイ勾玉製作資料
工程別集計



第30図 大武庫跡出土勾玉の製作工程 (S=1/2)

左側面も同様である。

503 は剥片で、正面に穿孔痕が認められる。穿孔痕の直径は2.5mmである。

505～509 は擦切溝の確認できるものである。7点出土した。505・506などは一見すると燧石である。505は、短軸方向に浅い溝が見られるが、分割までは至っていない。507は、他の個体よりも工程としては進んだ段階のものであろうが、1点のみの出土であり工程として位置づけが困難であったためここに含めた。擦切溝は2か所、長軸方向に入る。508は擦切溝の深さが10mmにも達する。509の擦切溝に接する剥離は溝よりも新しく、施溝分割する際に生じた剥離の可能性はある。

510～513はD字状に整形している段階のものである。10点出土した。510は擦切溝を有するが、形状からここに分類した。研磨が進んでいる。513はD字状にかなり近いが、表表面の凹凸が残る。

514～519はD字状に整形されたものである。16点出土した。これより先の工程品については出土した全点を掲載した。サイズは長さ9.6～26.8mm、幅6.0～20.5mmのものがある。518のように比較的上下対称形のもの、515のように下部が若干細くなるものが認められる。

520～524は、C字状にするために中央に抉りを入れた段階のものである。5点出土した。サイズは前段階同様、長さ10～25mmほどの幅がある。523・524は背面に稜が残っている状態である。

527・529～531は穿孔段階、528・530は完成品である。525・526は穿孔されているものの稜が残り、当初は仕上げ研磨段階と考えたが、完成品でも稜の残るものが多い〔廣瀬2006〕とのことから、完成品の可能性が高い。525は穿孔された痕跡が認められるが、片面のみで、ごく浅い段階にとどまっている。529は両面から穿孔されているが、未貫通である。穿孔方法は、532以外は両面穿孔であり、両面穿孔が基本であったことがうかがえる。525・528はかなりの研磨が進んでおり、完成品と呼んでもよいかもしれない。ヒスイのほか石英・蛇紋岩製のものもわずかに存在するが、これらは石材名が異なるだけで同じ岩石の中に存在し得るもので、当時の人々が意図して使用していたわけではないと想像されることから、一括した。

3) 関連石製品

ここでは玉作工具と考えられている石針・擦切具・弾車と、ヒスイ製燧石について述べる。

石 針 (533～543) 26点出土した。このうち工程品は5点、完成品は22点である。531～535は工程品、536～543は完成品である。多角形を呈するものでも下面に使用痕が確認できるものが多いことから、多角柱状のものも完成品としてカウントした。完成品のサイズは長さ9.9～23.8mmで平均14.0mm(12点)、直径は1.6～2.6mmで平均2.3mm(22点)である。細型管玉の孔径が1.2～1.7mmであることから、矛盾が生じている。

533・534は角柱状で上面に擦切溝が確認できる。533左右側面には研磨痕が確認できる。本遺跡では、角柱状剥片は4点のみの出土である。わずかではあるが、施溝分割はすべて縦取りである。535は剥片で、1点のみの出土である。

536は表裏面を削り扁平に作出している。537は上面を尖らせている。使用痕は下面縁辺のみに認められ、中央まで及んでいない。538は片面が欠損しているが、537と同じ形態の可能性があり、その場合実測図の天地は逆転する。539～543の下面にはすべてへそ状の使用痕が見られ、542・543では側面にも回転痕が認められる。542は上下が欠損していることから、実際どのくらいの深さまで穿孔したのかは不明であるが、残存長の1/2から3/4程まで回転痕が及んでいる。

石材はすべて安山岩で、佐渡の玉作遺跡で出土するものなどと同質のものである。風化して灰色を呈するものと、黒色で緻密なものがある。

擦切具 (544～551) 175点出土した。石材は流紋岩119点、凝灰岩55点、珪化木1点である。点数としては流紋岩が多いが、重量ではそれほど差がない。擦切具に使用される流紋岩は流理構造を持ち、薄く剥落しやすいことから、本来の個体数よりも多くなっている可能性が高い。

545は珪化木製で、この1点のみである。木目に沿う方向で刃部が作出されている。544・546・547は流紋岩製である。やはり流理構造の方向に沿って刃部が作り出されるが、547のように異なる方向を刃部とするものもわずかに存在する。548～551は凝灰岩製である。548は本遺跡で最も大きいものであるが、そのサイズは他と比較して極めて大きく、異質な印象も受ける。形態からここに分類したが、石包丁に近いものである可能性も否定できない。549は表裏面とも全面研磨されている。刃部との境界に入る稜は確認できない。

551は、石器の表面に凹凸があることから凸の部分のみ研磨されたと考えられ、表面が平滑であれば549同様、全面研磨されたものと考えられる。

弾車 (552～556) 11点出土したが、破片資料が多い。単純なかたちであるが断面形をみると、それぞれ異なっている。両端が細くなる形がほとんどであるが、552のように断面四角形のものも2点ある。直径はすべて10～11cmにおさまる。石材は砂岩が5点、硬砂岩が4点、凝灰岩が1点である。

ヒスイ製敲石 (557～561) 18点(3.080g)出土した。勾玉工工程品の中には敲打痕の見られるものがあり、これらも玉作工工程品の可能性がある。原石や分割礫を素材として、面的に敲打痕が見られるもの(557・558・560)が12点、端部や稜線など尖っているところのみ敲打するもの(561など)が5点ある。いずれの個体も磨痕が部分的に見られるが、玉作工工程品の項で述べたように、全面を研磨した結果、磨痕が部分的に残っているものと考えられる。

4 木製品・漆製品

本遺跡では、縄文時代前期前葉から中世までの木製品が多量に出土した。今回報告する縄文時代から古代における出土量は、小型木製品が段箱(内法54×34×10cm)200箱、大型木製品は150×90×60cmの水槽3つ分(浅箱換算で112箱)にのぼる。

縄文時代前期前葉の層(XV層)からは漆製品(漆紐)が出土した。全国的にも古い貴重な資料であり、非常に高い技術がうかがえる資料として特筆される。また、縄文時代後・晩期の層(XIII層～XI層)からは、斧柄・脚付盤・籃胎漆器・漆塗腕輪が出土している。その中でも斧柄はほぼ完形で、当時の使用状況がわかる貴重なものである。本遺跡で最も出土量が多いのは古墳時代早期～前期の水田に伴う水路跡である。その大半が棒状や板状の材で用途不明ではあるが、農具(鋤・鎌・田下駄)のほか、高杯・槽などの容器、刀剣把・盾といった武器も確認でき、高い階層性がうかがえる。

分類・呼称

器種が明らかなもの、推測できるものについては『木の考古学 出土木製品用材データベース』[伊東・山田編2012]・『木器集成図録 近畿原始篇』『木器集成図録 近畿古代篇』[奈良国立文化財研究所(以下、奈文研とする)1993・1985]に従ったが、特定できたものは少ないため、『木の考古学』における木製品分類のような器種の細分は行っていない。それ以外の用途不明のものについては、形状・断面形から、便

的に以下のように分類した。これは記述する際の便宜なものでも厳密な分類ではない。棒状(円)：断面形が円形の棒状のもの。ただし断面が多角形でも、円形を志向したと思われるものは、ここに分類した。棒状(角)：断面形が多角形で、幅と厚さの比率が概ね2:1未満の棒状のもの。棒状(平)：断面形が多角形あるいは楕円形で、幅と厚さの比率が概ね2:1程度の扁平なもの。板状：幅と厚さの比率が概ね3:1程度以上のもの。短冊状：板状のもののうち、厚さ5~7mm程度・長さ30mm未満の薄く短いもの。加工材：棒状にも板状にも該当しない不定形なもの。

器種の特定できないものに加えて、遺物の天地の判断も困難なものが多い。天地が不明なものについては、レイアウト上、長軸方向を縦方向とした。上下とも欠損している棒状や板状のものについては、図化あるいは写真撮影での設置の容易さから決定している場合があり、本来の天地とは異なる可能性があることを予め述べておく。

A 各 説

1) 遺 構

a 縄文時代前期

SK96 (1~4) すべて杭状のものである。1は直径2.5cmの細い木枝を利用している。2~4は先端を加工して尖らせてはいるが簡素であり、杭として機能したかどうか疑問であることから杭状とした(以下、「杭状」としたのも同様である)。

b 古墳時代前期

SE89 (5・6) 5は直径60cmの井戸杵である。丸木を削り抜いて作出している。内面下部には加工痕が認められるが、上部は乾燥による収縮のため確認できない。樹種はクリである。6は丸木の先端を片面のみ斜めに削っている。

SK55 (10~15) 10・11は杭であるが、10は二方向から、11は一方向からのみの加工である。12・13は右側面に「く」字状の抉りが見え、やや厚みを持つが形代の可能性もあるかもしれない。14は下部にいくにしたがい、幅はそのまま厚みを減している。それとは逆に、15は厚さそのまま左右を削り、尖らせている。

SD33 (16~38) 16~18は3点とも、長方形の杵を持つ田下駄の棧の可能性が高い。幅や柄の形状がほぼ一致する。このような、長方形の杵を持つ田下駄は大足とも呼ばれるが、本稿では[伊東・山田編2012]に倣い、「角杵型田下駄」と呼称する。19は武具のうち盾の破片と推測される。直径1mmの孔が、縦は8mm間隔、横は5mm間隔で穿たれている。漆は塗られていない。樹種はモミ属で、当該期においては県内ではあまり出土していない樹種で、近畿地方などの出土品などと一致する。23~26は板状の部材で、25は柄、ほかは楕円形の孔があげられている。このうち25・26は長さ1m前後に及び、建築材と考えられる。25は両端にコの字状の深い抉りが入る。26は裏面に削り痕が見られ段差を有する。32は劣化が著しく加工痕は不明瞭である。30・33~38は棒状の材であるが、いずれも片端あるいは両端が欠損しているため、全長は不明である。

SD46 (39~68) 39は杓子形である。柄と身の境界には表面・側面ともわずかな段を持つ。40は断

面円形に削り出した棒状の製品である。上端を釘頭状に作り出し、下端を細める。41も下端を尖らせるが上端は欠損しており、形状は不明である。42・43は下部の片面のみ削り、薄くするものである。45の上部は把手状にも見えるが直下に「く」字状の抉りを入れる。46は両端を斜めに削る。木釘が残り、左右は欠損していることから、底板の可能性もある。47は上部に向かって幅をわずかに細めるため、上部の孔は側縁に接するほど近い。孔ではなく抉りの可能性もある。表面の削り痕が明瞭である。49はY字状の自然木を利用したもので、下端を尖らせる。50は丁寧なつくりの製品である。半円状と「く」字状の抉りを入れ、上下（左右の可能性もある）対称をなす。断面形はほぼ正方形に整えられる。51は片端に逆台形状の切込みが入るが、左右非対称で均一ではない。55はやや厚みをもつ板状のクリ材で、明瞭な二次加工の痕跡は認められない。製品の素材あるいは礎盤かもしれない。一部炭化している。52・53は短冊状、56～68は棒状の材である。59・63・64は先端を尖らせ、58・65は斜めに削る。その他は上下とも欠損のため不明であるが、66・68などは比較的かたが整えられている。

SD47 (69～125) 69は直柄平鍔のうち、身幅の狭い鉄鍔である。刃先が装着される部分は一部欠損している。着柄角度は65°で、孔径から鍔柄の直径は4cm程度と想定できる。70は一木鍔の平鍔である。柄部分から水平に肩がのび、肩幅が刃部最大幅となる形態である。身の前面がやや膨らみ、後面は平坦となる。

71～73は片側が欠損しているが角棒型田下駄の棧である可能性が高い。74は角棒型田下駄の棒である。棧の柄部を差し込む孔には、棧の柄部分が5か所残存しているが、固定のための楔もはめ込まれている。両端から1孔目と2孔目の間には、手綱を緊縛するために緩やかな抉りあるいは凹みが見られる。柄孔は長幅1.5cm前後の方形あるいは長方形を呈し、約3.5cm間隔で11か所穿たれる。

75は形態は横槌状であるが、側縁に切込みを配列する。柄部分はひと回り細く作出される。長さは異なるが大坂府瓜生堂遺跡で類似品が出土しており〔奈文研1993〕、棍棒の可能性もある。76は破片資料であるが、湾曲の具合から此の可能性もある。

77・78は形状と樹種から弓の弰部分と判断した。樹種はイヌガヤである。弰は、77は柄状に作り出しているが、78は切込みを入れるのみである。78は弓腹を平坦にする。77も片側を平坦にすることから、平坦な側が弓腹と想定される。79は鉄剣の把と考えられる。把頭が扇形に広がる形で、把間の中心付近に孔が1個認められる。裏面は把頭のみ残存する。茎挿入孔は把の下端まで貫通しており、把頭における孔の大きさは幅1.4cm、長さ（＝剣の入る厚さ）0.7cmを測る。ただし、この遺物は自然乾燥させてしまったために、収縮している可能性があることを付け加えておきたい。樹種はカヤである。

80は剝物の桶である。底部から緩やかに内湾して立ち上がるかたちで、口縁部には2個突起が付されている。縦木取りで、樹種はスギである。81は周縁部に外形と平行する浅い段を有し、実測図の下部中心に向かって緩く湾曲している。実測図の下端は欠損しているが、破断面に沿って孔が4個見られる。また、中心部分に長方形の孔があり、それと直交するようなかたちで紐状の凹みが認められる。盤のような形状であるが、不明である。82も緩く湾曲する形状で、実測図右側の周縁部にはわずかに稜が見られる。盤のような形になる可能性もある。

83は刀形である。刃部は山形をなし、把部は片側のみ削り作り出している。84は上端近くに両側から切込みを入れ、下部は左右から削る。85の左側面は湾曲する一方、右側面は直線的で、孔が3個不規則に穿たれる。両端は細くなる。86の孔はいずれも斜めに穿たれているのが特徴的である。87は縦に4孔並ぶが、間隔は一定ではなく、徐々に広がっている。88の先端は杭状に尖らせる。上端は欠損してい

るが、貫孔のような長方形の孔が存在したと推測できる。89は浮子の可能性が高い。

90・91は両端をやや尖らせるように加工している。90は側面に挟りを入れるが、用途不明である。94は形状から直柄斧柄の可能性が指摘できるが、握り手部分の断面形が整っていないなど、未成品の要素が多い。95は片端を膨らませ丸作りだす。何らかの柄である可能性が高い。101～115は棒状の材である。104・105は右側面を、112～114は表裏面を削る。74と垂直な状態で出土している(図版163)ことから、115は、柄部分が欠損した田下駄棧の可能性が高い。116は丁寧な加工で表面は丸みを帯びる。117～125は板状または短冊状のものである。121・123の表面は削り痕が認められる。

SD48(126～129) 126は片面のみを削る杭状である。129は中央付近に欠込があり、それより上部に方形の凹みが見られるが、不明瞭であり仕口とは判断できない。

SD50(130～263) 130は曲柄の斧柄である。柄は枝を利用している。欠損と劣化のため、柄の直径は本来の状態よりも細くなっている。131は直柄平楯の身であろう。破片資料のため詳細は不明である。132は高杯である。口径は43.6cmを測り、外面は段を有する。下半にはわずかながら口縁部と直交するラインが見られ、下面から見て放射状の文様になる可能性がある。内面には稜線が入り、挽物のような雰囲気もあるが、挽物か別物か判断できない。133は把手付容器と考えられるが、破片資料のため器種は不明である。口縁部が直線を呈することから、方形または長方形の容器の可能性が高い。132・133とも横木取りである。

134・135は錘の可能性もある。134は上下とも欠損しているが、中央に挟りが入る。135は上部を釘頭状に作り出す。頭部の直下には紐をかけたような圧痕が残る。136は片面(樹心側)を平坦に作ることで幅厚から弓の可能性を指摘できる。137は炭化のため下半を欠損している。持ち手は丁寧に加工され、叩板と推測される。139・140は櫓である。138は破片資料であるが、身の長さ・形状から櫓の可能性もある。141は梯子である。段差の間隔は約40cm、段の奥行は8cm弱である。樹心に近い板目材を使用している。下端は山形に削り込んでおり、二又状に仕上げている。裏面には線状痕が多数認められる。142・143は棒状の製品で丁寧に加工されているが、用途不明である。144～147は自然木の上下端を削るのみで、材はすべて広葉樹である。製品の素材であろうか。148は上辺の両隅に穿孔され、下部は二又状に作出される。311のような又楯に装着する泥除けと考えられる。

152・153・158は指物である。153は木釘孔の深さが2.5～3cmにも達する。149～151・154～157・159～170・172・173・176は部材である。150・151は目釘孔のほか、1～2cm程度の孔も混在する。154は木釘孔が一列に配され、そのうち1個は木釘が残る。やや離れたところにも1孔あり、その孔には樺皮がわずかに残存している。157は孔が3個見られるが、1個のみ斜めに穿孔されている。159は中央付近に孔が2個見られるが、裏面ではその2孔間に圧痕が確認できる。組掛け痕であろうか。165は木釘孔のほか、樺皮綴じ孔が3か所確認できる。166～168は扁平な棒状の部材で、孔が中央に配列されるものであろう。175は薄い板材で、左右に挟りが交互に配される。176は細い棒状で、先端に向かって細く薄く仕上げている。先端近くには欠込が認められる。178～189・192～196は杭であり、そのうち183は板杭である。184～191・193・196は、SD50で杭が集中して検出されたSK85付近(図版10・11)から出土した杭である。木取りは芯持ち丸木のものと同様のものが見られる。

197・198・202は加工材である。202は表面に削りと線状痕が認められる。199は棒状の材で片面のみ削り出す。201の平面形は刀子状に近似しているが、断面形が整っていない。200・201・203～213は板状あるいは短冊状である。208は逆L字状を呈する。213は薄い板材で、側縁は皿状のように

やや内湾する。

214 は刳物や挽物によく見られる広葉樹材である。製品の素材の可能性も考えられる。216～242・246～263 は棒状の材である。225～227 は比較的整った円形ないしは楕円形に仕上げる。233～237 は比較的幅広のもの、238～250 は細いものである。後者は239・240・244・247～250 など先端を尖らせるものが多い。251～263 は両端を削るなど加工が認められるものである。

SD51 (264～272) 264 は直柄平鎌の身である。劣化が進んでおり、外形もやや崩れている。孔径は直径4cmである。265 は栓であろうか。上端は中心部に向かって削り小さな突起状を作出している。半分に割れている。266～268 は部材である。267 は孔のある先端部分をやや細く作りだす。269 は下端を丸く仕上げ右側は段を作り出している。上端は欠損している。270 は上端の加工痕は不明瞭である。重量感のある材で、礎盤や製品の素材の可能性が想定できる。271・272 は断面円形の棒状材である。いずれも先端をやや尖らせる。272 は先端を扁平に仕上げている。

SD83 (273～309) 273 は堅料と考えられる。両端の径が最大で、握部に近づくにしたがって細くなり、握き部と握部の境が不明瞭な形態である。木取りは芯持丸木ではなく削り出している。274 は盤である。口縁部は欠損しているが、長辺よりも短辺を厚く仕上げていることがわかる。脚は4つ付くものと判断できる。裏面から短辺側縁にかけて炭化している。275 は刳物桶の一部である。276 は端部を丸く作出し括れを有するが、下部は欠損し裏面にかけて劣化していることから、全形は不明である。277 は折曲げ式の堅櫛である。竹ひご状のものを並べて中央で結束し、それをアーチ形に曲げて作り出したものである。頭部のみ残存している。全面黒漆塗りであるが、漆塗で固めるのは主に頭部のみであるという[奈文研1993]が、歯は確認できていない。本遺跡ではもう1点、ほぼ同じサイズのもので出土している(312)。

278 は扁平な棒状の一端に三角形の突起を作出している。280 は円形板と推測される。木釘痕は確認できない。281～288 は部材である。283 は両端を山形状に加工し、両端及び中央部分に帯状の凹みを作出する。加工は丁寧である。284 の上部は断面円形で、切込みを境として下部は断面半円形に作る。143 と形態がやや似ているが用途は不明である。285～288 は長さ60cmを超え、建築材の可能性もある。

289・290 は自然木の両端を加工するのみである。劣化が進み加工痕は不明瞭である。291～293 は杭である。292 は分枝した枝を切り落として杭として利用している。294・296 は板状の材、295・297～309 は棒状の材である。298・300・301・305・306 は丁寧なつくりであり、柄などの製品である可能性が考えられる。

c 古墳時代中期

SK49 (7～9) 7 は筥状を呈するが、劣化が進んでいるため外形も崩れている。8 は上部の片側のみ扶りを入れる。9 は一端に大きく扶りを入れ、一見指物のように思われるが、木釘孔は確認できない。

SK95 (310～328) 310 は形状から鎌または鋤の未成品と推測される。311 は直柄又鎌である。着柄角度は69°～74°である。柄孔周囲の隆起は明瞭な段を有し、隆起に近接して左右1対の方形孔が確認できる。これは泥除けを装着するための孔である。しかし、泥除けを装着するのは本来平鎌であり、さらに、311 の形態も又部分を除けば平鎌そのものであることから、非常に珍しいものと考えられる。312 は277同様、折曲げ式の堅櫛である。277よりも残存状態が良く、歯の数は32本と推測できる。頭部と歯部の境には断面円形の材を巻いているようであるが、残存部分が少なく、詳細は不明である。

313 は杓子形である。314 は枝の一端に火鑽孔が1か所ある。孔の直径は1cmほどである。315 は部材、

316・317 は不明木製品である。316 のように、上部に切込みや抉りを入れて頭部を作り出し、下端は尖らせるという形態は本遺跡で数点が見られるが、すべて少しずつ異なり、全く同じ製品は確認できない。319 は杭である。318・320～328 は棒状の材である。320～322・324 は丁寧なつくりで、何らかの製品の一部である可能性もある。

d 古墳時代後期

SX88 (330～357) 330 は板田下駄の一部である可能性もある。332 は樹皮製で、周縁にほぼ等間隔で穿孔する。中心部分に見られるのは孔ではなく欠損である。容器蓋の可能性が指摘できる。333 は、刃が作出されておらず、弓または綱杵の輪である可能性が考えられる。上端は尖らせ、下端は篋状にする。下部のみ細かい削りが認められるが、上部よりも下部のほうが径は大きいことから、径を減じるためと考えられる。335 は部材で、上下に差込孔が見られるが、その形状は上部が円形、下部が長方形と異なる。337 は内面下部に突帯がないことから井戸杵の側板と推測される。内面下部は厚みを減じるためか削り痕が多数認められる。一部は炭化している。

340～345 は杭で、いずれも芯持丸木を使用し先端のみ加工している。341 や 343 のように多少曲がっている材も用いられる。344 は裏面半分を欠損している。346～349 は棒状の材である。350・351 は両端を加工するが劣化が進み、加工痕が不明瞭である。表面にも若干加工痕が見える。352～357 は棒状の材である。355 は両端、356 は片端を尖らせる。

e 古 代

SX87 (329) 上部に 1 孔認められる部材である。上部は断面板状であるが、下部は断面三角形となる。

2) 包 含 層

基本的には時代の古い順に記載しているが、各層の所属時期については第 III 章を参照されたい。また、各個体の詳細な層位についても観察表に記載した。

XV 層・XV d 層 (359～362) 359～361 は杭状である。361 は上部にも加工痕が見られる。362 は扁平な棒状材であるが、劣化が進み加工痕は不明瞭である。

XIV 層・XIV b 層 (363～365) 363 は棒状の材で樹皮が残るが、中央付近に削り痕も認められる。365 は半円形に整えている。樹種はサワグルミである。

XIII a 層～XIII d 層 (358・369～371) 358 は割物で、四脚を削り出しており、片端に肘掛状のものがついている。形状から脚付盤としたが、肘掛状のものがつく例は確認できず、別の器種の可能性もある。

369 は自然木の両端を加工したもので、樹皮が残っている。370 は手斧の柄で、斧台の一部を柄と一体に仕上げている。本体と添え木 3 点で石斧を挟み込み固定する。固定しやすいように斧と直交する切込みを 3 段入れる。添え木 3 点のうち 1 点は裏面中心に突帯を持つが、本体も同じ構造になっており一対をなす。復元図のように添え木を組み合わせたと推測でき、3 点を組み合わせる位置は決まっていたと言える。実際に添え木を組み合わせてみると、石斧の入る幅は想像よりも小さく、幅・厚さとも 2.4cm であったが、紐等で緊縛して使用することから、これよりも大きい石斧も使用可能であろう。樹種は本体と添え木 1 点 (370a) がモチノキ属、添え木 2 点 (370b・c) がヤブツバキである。対で組み合わせるものが同じ樹種となる。371 は樹皮付きの板材で、片端を連続的に加工しているが、用途不明である。

XII層・XII d層・XII 砂層 (366～368) 366は藍胎漆器である。破片資料のため全形は不明であるが、頸部と胴部の境にはわずかに稜を有し、広口壺と推測される。残存している破片の下部には孔が1個認められ、器壁に垂直に穿たれている。補修孔と考えられる。胎である編み物は消失して、塗膜と粗形材のみが残存している。粗形材に残された編物圧痕から、編み方はごご目編みと推測する。ごご目編みは、1本超え1本潜り1本送りで構成される技法で、タテ材の間隔に比してヨコ材の間隔が狭い。367は先端が炭化した棒状材、368は大きく斜めに加工された材である。

XI c層 (372～374) 372は全面が赤色塗彩された木胎漆器である。直径は約8cmと推測され、1/3ほどが遺存する。外面に認められるハケメ状の擦痕は漆を塗布した際の工具痕と思われる。なお、外面中央の首孔は破損によってできた陥没である。

外面の文様は、中央の陽刻部を境にして、上下二段の横線化したモチーフで構成される。上段のモチーフは、主軸線から上部に棘状の陰刻が伸び、それらが連結して矩形的陽刻部を表出させる。主軸線の末端は三又に分かれ、縄文時代晩期初頭の土器に特徴的な「玉抱三又文」を連想させる。一方、下段では主軸線の両端が開いて、1字を横にしたようなモチーフとなる。

上下のモチーフは共に「三又文」に比定することが可能で、縄文時代晩期前葉に位置づけることができる。本遺跡ではXIII a層から同時期の遺物がややまとまって出土していることを考慮すれば、XI c層から出土した本資料は紛れ込みの可能性が高い。なお、本資料のような主軸線の伸長化が著しい三又文は、宮城県北半の大洞 B2 式～BC1 式土器の特徴とされ〔小林 2008a〕、新潟県内の土器文様としては一般的ではない。本資料が腕輪であることに注意が必要であるが、文様の地域性・系統を考えると興味深い。

373は半割材の木表側を下端に向かって徐々に薄く加工している。374は杭状である。両端に加工されるが、劣化が著しく裂け目が数か所見られる。

IX層・IX c層 (375～388) 375は円形になるとと思われる板である。劣化が進む。376は節周辺の部分を加工したものである。孔は自然に抜けたものと推測するが断定はできない。377は紡錘車である。長さ7.0cm、幅7.5cmを測り、楕円形を呈する。中心部には直径4～5mmの孔が見られる。378は握部に最大径があり、握部の上下を2段階削り込んで弓幹との境界とし、弓幹を細く作り出す。木取りは芯持丸木ではなく削出である。

379は挟りを入れて頭部を丸く作出する部材である。380は井戸枠側板と考えられる。内面は削り痕が見られ、上部に向かって厚みを減している。381は杭、383は上下とも欠損のため加工痕は認められないが、形態とサイズから柱根の可能性はある。

灰色粘土 (389～391)・**F層** (392～393) 389～390は短冊状の材で、389は表面下部に円形の浅い凹みが認められる。391はおそらく円形を呈すると思われる。側面は加工単位が明瞭に見えるが、角を残し丸く仕上げられていない。392～393は短冊状である。392は上部に浅い挟りが見られ、393は両端の片側が刀状を呈しているが劣化が著しく、加工痕は不明瞭である。

D層 (394・395・600) いずれも部材である。394は両面に線状痕を有する。端部に1個木釘孔が見られる。395は実測図右半が欠損しており、本来は円形を呈すると考えられる。中央に細長い孔が穿たれており、木釘孔が3個認められる。容器蓋の可能性もある。

31層 (396～398) 396は上部に切込みを入れ、直下を細く削る。両端とも欠損しているため全形は不明である。表面は比較的丁寧に作られている。397は扁平な棒状の部材で、上端中央に孔が見られる。398は削出により作り出された杭であるが、やや扁平である。表面中央には節が見られる。

27層 (399～401) いずれも棒状材である。399は断面台形状の材を片側のみ鋭く切り落としている。400の上端は刀状を呈し、下端には山形の挟りが入る。

23層 (402～408) 402・403は部材である。402は板材の片端を丸く仕上げ、端部1cm前後を残して大きく孔を穿つ。403は板状の材に方形孔を3個、不規則に配する。下の2孔には裨皮を二重に巻きつけ、結び目をつくる。丁寧なつくりである。404は刳物桶であろう。劣化が進み変形しているが、内面下部の突帯が認められる。上端は欠損している。407は片側に挟りが2か所あり、挟りの間には半円状の浅い凹みが見られる。上端は欠損しているが、孔の痕跡が認められる。下部は緩やかに厚みを減じている。408は底面を平らに加工し、柱根と考えられる。劣化が著しく樹心部分は消失している。

21層 (409・410)・20層 (411・412) 409～411は棒状の材である。409は徐々に径を減じ、上部は扁平に削る。412は破片資料である。先端を尖らせており、形代の可能性も考えられる。

Ⅴa層・Ⅴb層 (413～426) 416・419は部材、418・425は短冊状、そのほかは棒状の材である。419は片側に方形孔が3個、ほぼ等間隔で配される。表面中央部分に線状痕が認められる。415は直径1.7cmほどの細い棒であるが、丁寧な加工であり何らかの製品の一部と考えられる。413・424は先端を薄く作り出し、420は短く切り落とす。422は上端に欠込を有する。

Ⅴ層・Ⅴa層・Ⅴb層 (427～486・492・493) 427は直柄平鍔の柄孔周囲の隆起部分が剥落したものと推測される。隆起部分は上部が丸く、下部は尖頭状に長くのびる形態である。428は表裏面の両端に挟りを入れる浮子である。

429は上端が欠損しているが、ほぼ完成品の弓である。全面に細かい削りが認められ、節は落として平坦にしている。430は杓子形であるが、身の部分に孔が見られる。431は上端に切込みを入れてわずかに段を作り出し、下端を尖らせる。栓の可能性もある。432は曲物底板で、木釘孔が6か所認められる。433は長さ推定103cmを測る大型の槽である。長辺と口縁部は欠損している。底面は非常に薄いのに対して短辺は厚く、内外面に削り痕が残る。

434は端部から3cmほどに段を作り出している。つくりは丁寧に、刀剣把の可能性も考えられる。裏面は欠損している。435は端部を尖らせ、細い削り痕が認められる。節のある材で、弓の一部かもしれない。437は鋤または曲柄平鍔の身、もしくは未成品と推測される。幅に比して厚みがあり、前面は盛り上がる。側面はゆるく湾曲している。438は刀形と判断したもので、精緻なつくりである。材は酷似している。438aは下部を緩やかに挟る。438bは下端近くに切込みが見られ、把を表現しているものと思われる。441は66cmを測る剣形と考えられる。剣部分が非常に長く、わずかな挟りで把部を表現する。

439・440・442は棒状の材で、何らかの製品またはその一部と考えられる。447～450・455は部材である。447は板状で左右交互に挟りを入れ、2孔1対の孔を上下に配する。449は中央から下部に向かって、2孔1対の方形孔を3か所に穿つ。中央の孔には別の材が残る。先端は炭化している。450は2孔1対の孔と大小の孔がほぼ等間隔で配されるが、一直線上ではなく、規則性は不明である。左右側縁の挟れている部分も孔の可能性がある。

451～453は板状、454は短冊状、456～458は棒状の材である。453は厚みのある板材で、表面に削り痕と線状痕がわずかに認められる。459は杭状だが先端が平坦にされている。461は板杭と思われる。461は櫃のような形状であるが、劣化が著しく上下とも欠損しているため全形は不明である。462～478・482～486・493は棒状の材である。470～475は片端、476～478は両端を尖らせるもので、端部が炭化しているものが多い。

479は両端加工の自然木、480は杭である。481は上端と右側面を加工する板材である。492は裏面下半を削り、下端を粗く切り落としている。

V・Mb層・Mc層 (487～491・494～500) 487・488は箸であろう。490は角枠型田下駄の棧である可能性が高い。491・493・499・500は棒状の材である。499・500は端部を尖らせる。494は上面に長方形の差込孔、下部には円形の孔が穿たれる。495は円形板と推測される。496は表面のみ線状痕が認められる。497は先端を2方向からの加工で尖らせており、柱根とした。498は扁平な材の先端を尖らせている。

V・Ma層 (501～504) 501・502は指物である。501は表面と側面に木釘が見られる。502は左側両端をL字状に削るが、対称形ではない。右側縁に木釘孔を配する。504は差歯下駄の歯であろう。線状痕が見られる。

V層 (505～535) 505は曲物側板の一部である。内面にはケビキ痕が認められる。506は上端に小さいつまみを作り出す。札(ふだ)などの可能性も考えられる。507は頭部左右から挟りを入れる。506と近似しているが、形代の可能性もある。508・509は円形板であろう。木釘孔は確認できない。510は表裏面とも削り痕が確認できるが、裏面中央は炭化のため不明である。511は丁寧なつくりで、中央付近で切込みを入れ段を作出する。512は削りが細かい。木目に沿って3片に分かれていたものが接合した。514・515は下部を細く仕上げる。516～519は棒状材である。

521・529は丁寧なつくりで、側面に切込みを多数入れるが不規則であり用途不明である。521は128cm以上を測る大型品で、一方、529は60cmを測る。528の浮子は428とほぼ同一サイズである。522・527は部材、523・531は板状、525～527・532・534は棒状である。532は上端を四方から削り、尖らせる。533は円形板と考えられるが、周縁部は厚みを減ずる。加工によるものか摩擦によるものか、劣化が進んでおり判断できない。535は箸である。断面方形を呈する。

青灰砂層 (536～590) 536は上部を丸く作り出し、人形と推測される。537は別物で楕円形槽である。長径は46～48cm程度と推定できる。器高は9.7cmである。538は曲柄平鎌の身である。前面と推測される面の中心線にはわずかに稜が確認できる。上下と右半が欠損しており全形は不明である。539は鋤・鍬あるいは櫛と考えられるが破片資料のため特定できない。541・543・545は指物であろう。541は中央よりやや下部が欠込状になっており、別の板材と組み合わせたと推測される。それより下部はやや厚みを減じる。側面から裏面へは木釘が打たれるが、1か所では失敗して木釘がはみ出している。543は上下が対称形をなし、片側に4個の方形孔を穿つ。中央には543の厚さほどの幅で切込を入れている。545は上端に木釘が残る。表面にも孔が1個認められる。右側面下半は欠損しているが、上半には弧状の挟りがあり、その上下にも切込みが認められる。540・542・544・546は部材である。542は上部を削り細め、端部に挟りを入れる。中心線上には孔を2個穿っている。547は側面が緩い弧を描く。弧の内面上部には鋭く深い線状痕が認められる。549は左右交互に挟りがあり、何らかの建築材である可能性がある。550～553は加工材で用途不明である。554は厚みのある板材で、表面には線状痕が残り作業台と推測される。555・556は杭である。断面形では555は三角形、556は半円形であるが、欠損しており、本来は芯持丸木であったと判断される。557～564・571は板状および短冊状、565～590は棒状である。棒状材のうち576は斧柄、580・581の断面は整った円形を呈し、何らかの柄の可能性も考えられる。587～590は1.5mを超えるもので、いずれも先端を細くする。588の裏面先端は欠損している。

D区A層・B層・C層 (591～598) 591は中央付近に段を作出し一段細くする。握部であろうか。上

下とも欠損し全形は明らかではない。592 下端には細い切込みを入れる。表面とも線状痕が認められる。594～596 は部材である。594 の上部は穿孔されるが、端部は欠損している。下端は柄状に作り出す。596 は中央部分や下部に欠込が見られる。上部の加工痕は不明瞭であるため、欠損かもしれない。597・598 は棒状の材で、597 は両端を細め、598 は徐々に幅を広げる。下端は欠損している。

不明 (599・601～625) 599 は板田下駄である。緒孔は3孔で、孔の配置を見ると、上の孔が若干右に寄っており、左足用であった可能性も考えられる。上部の孔付近から上端に向かってわずかに凹んでいるが、削り痕は認められない。601 は指物で、2 辺の側縁に孔が配される。602・603 は箸である。604～607 は板状を呈するが用途不明の製品である。604 は孔が不規則に3個穿たれる。605 は表面を削る際に残された擦痕が明瞭である。606・607 は角を斜めに加工している。608～610 は部材である。608 は上部を柄状に削る。左側は欠損である。609 は上下両端を削り、一端を目違継状とする。中央には木釘孔が見られるが、孔の方向は直交する。611 の下部は欠損しているため、目違継を作出しているわけではない。614 は丁寧なつくりである。対称形をなしており、端部に大きい円形孔、やや中央より小さい方形孔を穿つ。616 は上部に欠込を有するが鋭い。下端を細めている。617 は下半を削ってやや扁平にするが、それほど厚みを減じていない。618 は下部周縁が刃部のように尖り、鋸または鋸の可能性もある。619・620 は棒状、622・623 は加工材、624・625 は杭である。625 は176cmを測る大型品であるが、削出によって作出される。下部は緩やかに削られ嘴状を呈する。

漆紐 (626・627) 2点ともXVc 層から出土した。626 は深鉢 (図版 69-796)、石匙 (図版 73-46) とともに出土した。幾重にも重なっており、太さ2mm前後、長さは数mm～40mm程度と幅がある。紐は中空の状態で、斜方向あるいは直交方向の裂痕が認められ、本来は長い紐状であったと想定できる。

科学分析の結果、太さ1.5mm前後の紐あるいは糸を2本、Z方向にゆるく撚り合わせたものを芯とし、これを胎としてその表面にベンガラ漆を塗布していることが判明した。中空となっているのは、漆が中心部までは浸透せず腐朽消失したためである。紐の素材はカラムシ(苧麻)あるいはこれに近似する草本性の繊維を使用している可能性が高い。また、用途は装身具で首飾りである可能性があると考えられる。

放射性炭素14年代測定を行った結果、今から概ね6600年前(5760±40¹⁴CBP、暦年較正INTCAL98)の製品であることが判明した(詳細は第VI章5参照)。

627 も分析は行っていないものの、同様の構造と推測される。

第VI章 自然科学分析

1 樹種同定

はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

大武遺跡は、新潟県のほぼ中央部海岸より、長岡市島崎字大武に所在する。島崎川左岸の西山丘陵の支陵裾付近に立地し、標高は約 13m、現況は水田である。当遺跡は大きく縄文時代前期・晩期、弥生時代中期、古墳時代早期～前期・後期、中世の複合遺跡であり、遺物では縄文時代前期前葉から中世にいたる土器・石器・木製品が出土している。

本報告では、大武遺跡から出土した木製品について、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行い、当時の木材利用および森林植生について検討する。

試料と方法

試料は、大武遺跡から出土した杭、板杭、浮子、指物、形代、杓子形、槽、底板、円形板、曲物側板、高杯、柱根、箸、梯子、部材、刀形、削物桶、弓、井戸枠側板、斧柄、櫂、鎌、鋤、田下駄、竪杵、竪櫓、部材などの木製品 233 点である。時期別には縄文時代前期の木製品 3 点、縄文時代後期の木製品 1 点、縄文時代晩期の木製品 2 点、弥生時代中期の木製品 10 点、弥生時代後期の木製品 5 点、古墳時代早～前期の木製品 140 点、古墳時代中期の木製品 11 点、古墳時代後期の木製品 9 点、古代の木製品 34 点、時期不明の木製品 15 点である。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（年目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40～1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

結 果

観察表および第 31 図、第 17・18 表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1 カヤ *Torreya nucifera* Sieb. et Zucc. イチイ科 (第 32 図 1)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 4 個存在するものが多い。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在し 2 本対になる傾向を示す。放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には 2 本対になる傾向を示すらせん肥厚が存在するが不鮮明である。

以上の形質よりカヤに同定される。カヤは、宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ 25m、径 90cm に達する。材は均質緻密で硬であり、弾性が強く水湿にも耐え、

1 樹種同定

保存性が高い。弓などに用いられる。

2 イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* K. Koch イヌガヤ科 (第32図2)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射柔細胞の分野壁孔は、トウヒ型で1分野に1~2個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が散在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~10細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の形質よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ10~15m、径20~30cmである。材はやや堅硬で、木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

3 モミ属 *Abies* マツ科 (第32図3)

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1~4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁を有する。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は、日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

4 スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 (第32図4~7)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは、本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

5 ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 (第32図8)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は極めて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは、福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

6 アスナロ *Thuopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 (第32図9)

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が存在する。放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型からややヒノキ型を示し、1分野に2~4個存在する。また放射柔細胞内に内容物が多い。放射組織は単列で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりアスナロに同定される。アスナロは、常緑高木で、本州、四国、九州に分布し、関東北部や木曽に比較的多い。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性が高く、建築など広く用いられる。特殊用途には漆器木地があり、輪島塗(石川県)で利用されている。

7 ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔はやや小型であるが型は不明瞭であり、1分野には1～3個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりヒノキ科に同定される。ヒノキ科には、ヒノキ、サワラ、アスナロ、ネズコなどがある。

8 ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科 (第32図10)

小型で丸い、やや放射方向にのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状に密に分布する。放射組織は同性である。放射組織は、単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりハコヤナギ属に同定される。ハコヤナギ属には、ハコヤナギ、ドロノキなどがあり、落葉の高木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。材は軽軟で、耐朽性、保存性は低く、建築、器具などに用いられる。

9 ハノキ属 *Alnus* sect. *Gymnothyrsus* カバノキ科 (第32図11)

小型で丸い道管が、放射方向に連なる傾向をみせて散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～30本ぐらいである。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる。放射組織は、同性放射組織型で単列のものと大型の集合状のものからなる。

以上の形質よりハノキ属 *Alnus* 節に同定される。ハノキ属 *Alnus* 節は、落葉の低木から高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

10 アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 (第32図12)

小型で丸い道管が、単独あるいは2～5個放射方向に複合してややまばらに散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、ほとんどが平伏細胞であるが上下の縁辺部には方形細胞が見れる。放射組織は、上下の縁辺部が方形細胞からなる異性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりアサダに同定される。アサダは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、土木、船舶、車両などに用いられる。

11 サワグルミ *Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc. クルミ科 (第33図13)

大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合し、全体としてやや放射方向に配列する傾向を示して、まばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が接線状に1列配列し、波状を示す。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、1～2細胞幅で細い。

以上の形質よりサワグルミに同定される。サワグルミは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性は低いが、下駄、マッチの軸、器具、家具などに用いられる。

12 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 (第33図14)

年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクりに同定される。ク리는、北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20m、径 40cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 30m、径 2m に達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

13 ブナ属 *Fagus* ブナ科 (第 33 図 15)

小型でやや角張った道管が、単独あるいは 2～3 個複合して密に散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔および階段穿孔である。放射組織はほとんど平伏細胞からなるが、ときに上下端のみ方形細胞が見られる。放射組織はまれに上下端のみ方形細胞が見られるがほとんどが同性放射組織型で、単列のもの、2～数列のもの、大型の広放射組織のものがある。

以上の形質よりブナ属に同定される。ブナ属には、ブナ、イヌブナがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ 20～25m、径 60～70cm ぐらいであるが、大きいものは高さ 35m、径 1.5m 以上に達する。材は硬くて緻密、韌性があるが、保存性は低い。容器などに用いられる。

14 コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 (第 33 図 16)

年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節には、カシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15m、径 60cm 程に達する。材は強靱で弾性に富み、建築材などに用いられる。

15 コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 (第 33 図 17)

年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独でおおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クスギ節に同定される。コナラ属クスギ節には、クスギ、アヘマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ 15m、径 60cm に達する。材は強靱で弾性に富み、器具、農具などに用いられる。

16 コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 (第 33 図 18)

中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属には、アカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ 30m、径 1.5m 以上に達する。材は硬くて強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

17 ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 (第 33 図 19)

年輪のはじめに大型の道管が 1～2 列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射

組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の緑辺部のものは方形細胞でしばしば大きくふくらむものがある。放射組織は異性放射組織型で、上下の緑辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

18 ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 (第33図20)

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは2～3個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径はやや急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の緑辺部の1～3細胞ぐらゐは直立細胞である。放射組織は上下の緑辺部が直立細胞からなる異性放射組織型で、1～5細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりヤマグワに同定される。ヤマグワは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ10～15m、径30～40cmである。材は硬くて靱性に富み、建築などに用いられる。

19 モクレン属 *Magnolia* モクレン科 (第33図21)

小型の道管が、単独あるいは放射方向に2～4個複合して多数散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、導管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は上下端のみときに直立細胞からなる異性である。放射組織は異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりモクレン属に同定される。モクレン属には、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の高木ないし低木である。

20 カマツカ属 *Pourthiaea* バラ科 (第33図22)

小型の道管が、ほぼ単独で、散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に配列する。道管の穿孔は、単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。放射組織は、異性放射組織型で、中ほどは平伏細胞であるが、上下の緑辺部に方形細胞、直立細胞が存在する。幅は1～4細胞幅である。道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカマツカ属に同定される。カマツカ属には、カマツカ、ワタゲカマツカがあり、落葉の低木から小高木である。カマツカは本州、四国、九州に分布し、ワタゲカマツカは北海道、本州、四国、九州に分布する。木材は粘り強く、器具(柄、杖、牛の鼻輪、櫛)などに用いられる。

21 カエデ属 *Acer* カエデ科 (第33図23)

小型で丸い道管が、単独あるいは2～4個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、内壁には微細ならせん肥厚が存在する。放射組織は、平伏細胞からなる同性である。放射組織は、同性放射組織型で1～6細胞幅である。道管の内壁には微細ならせん肥厚が存在する。

以上の形質よりカエデ属に同定される。カエデ属には、イタヤカエデ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、テツカエデ、ウリカエデ、チドリノキなどがあるが、放射組織の形質からウリカエデ、チドリノキ以外のいずれかである。北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または小高木で、大きいものは高さ20m、径1mに達する。材は耐朽性および保存性は中庸で、建築、家具、器具、楽器、合板、彫刻、薪炭など広く用いられる。

22 トチノキ *Aesculus turbinata* Blume トチノキ科 (第33図24)

小型でやや角張った道管が、単独ないし放射方向に2～数个複合して密に散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はすべて平伏細胞からなり、高さが揃っており同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。放射組織は単列の同性放射組織型で、層状に規則正しく配列する。

以上の形質よりトチノキに同定される。トチノキは、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性・保存性がなく、容器などに用いられる。

23 キハダ属 *Phellodendron* ミカン科 (第34図25)

年輪のはじめに大型でやや厚壁の丸い道管が、単独あるいは2個複合して2～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は1～3細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりキハダ属に同定される。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。

24 ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 (第34図26)

小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本程度である。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には、大きく膨れているものが存在する。放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は強靱で、耐朽性が強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

25 トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 (第34図27)

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまると厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属には、ヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

26 エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 (第34図28)

年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、主に2～4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数个放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけて緩やかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。放射組織は、異性放射組織型で1～3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

27 タケ亜科 Bambusoideae イネ科 (第34図29)

基本組織である柔細胞の中に並立維管束が不規則に分布する。並立維管束は木部と節部からなり、その周囲に維管束鞘が存在する。柔細胞及び維管束、維管束鞘が径軸方向に配列している。

以上の形質よりタケ亜科に同定される。タケ亜科には、マダケ属、メダケ属、ササ属などがある。

28 環孔材 ring-porous wood

部分的ではあるが、年輪のはじめに大型の道管が配列する。放射組織が存在する。

以上の形質より環孔材に同定される。本試料は保存状態が悪く、広範囲の観察が困難であることから、環孔材の同定にとどめる。

29 散孔材 diffuse-porous wood

小型の道管が、単独あるいは2～3個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は階段状である。放射組織は上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性である。放射組織は異性放射組織型で、1～4細胞幅である。

以上の形質よりモクレン属などに類似するが、不明瞭な点が多く、同定には至らなかったため散孔材の同定にとどめる。

30 不明 unknown

試料は漆器であり、カミソリによる切片採取を試みたが、木地(木材)の部分が残っており、同定は困難である。

考 察

同定の結果、大武遺跡の木製品233点は、多い樹種から順に、スギ142点、クリ16点、トネリコ属12点、コナラ属アカガシ亜属12点、イヌガヤ5点、コナラ属コナラ節4点、モミ属4点、ヒノキ4点、アサダ4点、ヤブツバキ3点、コナラ属クスギ節2点、ケヤキ2点、ヤマグワ2点、カエデ属2点、タケ亜科2点、カヤ1点、アスナロ1点、ヒノキ科1点、ハコヤナギ属1点、サワグルミ1点、ハンノキ属ハンノキ節1点、ブナ属1点、モクレン属1点、カマツカ属1点、トチノキ1点、キハダ属1点、エゴノキ属1点、環孔材3点、散孔材1点、不明1点であった。

以上のように、大武遺跡の木製品の樹種はスギが極めて多いという特徴を有する。本地域はスギ林が主要な森林であり、スギが多用されたと考えられる。他の樹種も温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する樹種ばかりであり、当時遺跡周辺に分布していたか、近隣地域より流通によってもたらされたと考えられる。

時代別の選材傾向 (第17表)

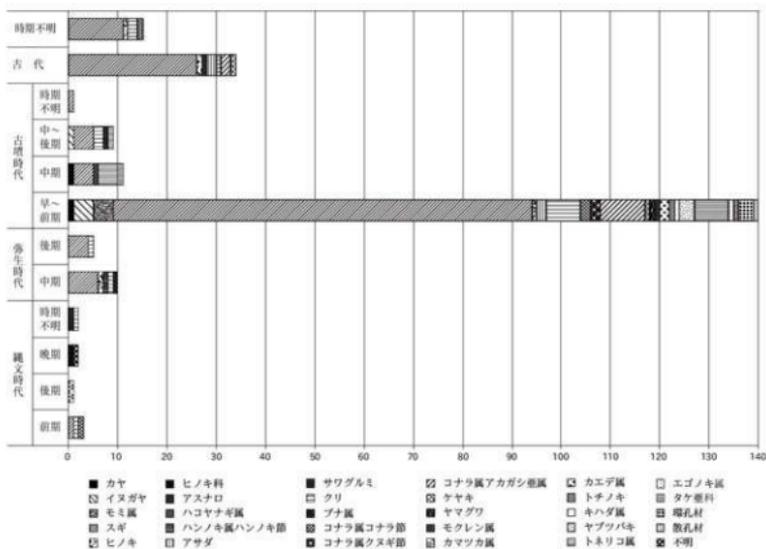
時期別に見ると、縄文時代前期の木製品2点はスギであり、杭状・棒状の木製品に使用されている。縄文時代後期の木製品1点はカマツカ属であり、加工材に使用されている。縄文時代晩期の木製品2点は、棒状の木製品に使用されている。

弥生時代中期の木製品10点のうち、スギは紡錘車・部材・短冊状などの木製品、ヒノキは短冊状の木製品、ハンノキ属ハンノキ節は加工材、クリは井戸枠側板に使用されている。弥生時代後期の木製品5点のうち、スギは割物種・部材、クリは柱根に使用されている。

1 樹種同定

分類群	縄文時代				発生時代		古墳時代				古代	時期不明	計
	前期	後期	晩期	時期不明	中期	後期	早～前期	中期	中～後期	時期不明			
カヤ							1	1					2
イヌガヤ							4		1				5
モミ属							4						4
スギ	1				6	4	85	4	4	1	26	11	142
ヒノキ					1		1				1	1	4
ヒノキ科			1										1
アサナロ											1		1
ハコヤナギ属								1					1
ハンノキ属ハンノキ節					1								1
アサダ											2		4
サワグルミ				1			2						1
クリ	1			1	1	1	7		2		1	2	16
ブナ属					1								1
コナラ属コナラ節	1						2					1	4
コナラ属クスギ節							2						2
コナラ属アカガシ亜属							9				2		11
ケヤキ							1				1		2
ヤマグワ							1		1				2
モクレン属							1						1
カマツカ属		1											1
カエデ属							2						2
トチノキ							1						1
キハダ属							1						1
ヤブツバキ							3						3
トネリコ属							7	4	1				12
エゴノキ属							1						1
タケ亜科							1	1					2
環孔材							3						3
散孔材			1				1						1
不明													1
計	3	1	2	2	10	5	140	11	9	1	34	15	233

第 17 表 時代・時期における樹種構成



古墳時代早～前期の木製品 140 点のうち、スギは田下駄・杓子形・指物・形代・櫛・槽・叩き板・把手付容器・曲物底板・板状・棒状・箸状・部材・建築材などに、トネリコ属は栓・杭・部材に、イヌガヤは弓に、クリは杭などの木製品に、コナラ属アカガシ亜属は櫛・鋸・鎌身・杭に使用され、カエデ属は棒状の木製品に、コナラ属コナラ節は斧柄・鎌身に、コナラ属クスギ節は鎌に、ケヤキは刀形に、モクレン属は梯子に、トチノキは高杯に、ヤブツバキは杭・加工材にそれぞれ使用されている。

古墳時代中期の木製品 11 点のうち、スギは杓子形・部材などに、コナラ属アカガシ亜属は鎌に、トネリコ属は杭、棒状木製品に使用され、コナラ属アカガシ亜属は鎌身に、タケ亜科は堅櫛に使用されている。古墳時代後期の木製品 9 点のうち、スギは井戸枠側板、円形板に、イヌガヤは弓に、クリは田下駄・部材に使用されている。

古代の木製品 34 点のうち、スギは、指物・槽・下駄の歯・円形板・部材などに、アサダは、櫛または鋸・鎌と考えられる木製品に、コナラ属アカガシ亜属は鎌に、ヒノキは曲物側板に、アスナロは棒状の木製品に、クリは斧柄と考えられる木製品に、ケヤキは円形板に使用されている。

以上、縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期は数量が少なく、用材の傾向は示されないが、古墳時代早～前期、古代は、いずれも同じ傾向を示し、スギが極めて多く、クリ・トネリコ属・コナラ属アカガシ亜属がやや多く、他は極めて少ない。

器種別の選材傾向（第 18 表）

縄文時代前期・後期・晩期、弥生時代中期・後期は数量が少なく傾向が示されないが、古墳時代早～前期、古代とも、各製品・板状・棒状の木製品や部材などはスギが多く、極めて多様に用いられている。農耕具には、鋸・鋸・竪杵などがあるが、コナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ節・コナラ属クスギ節を中心に、アサダ・トネリコ属の広葉樹の重硬な樹種が用いられている。礎板の可能性がある木製品にもコナラ属アカガシ亜属・トネリコ属・アサダ・ハンノキ属ハンノキ節の広葉樹の比較的厚な樹種が用いられている。古墳時代早～前期では、弓 2 点にはイヌガヤ、剣把にはカヤが特徴的に用いられている。盾と考えられる木製品はモミ属で、これも特徴的な選材である。なお、堅櫛はタケ亜科であり、畿内からの搬入品の可能性もある。

参考文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
 佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。
 島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296。
 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第 1 号、植生史研究会、p.242。

1 樹種同定

縄文時代

	スギ	ヒノキ	クナラ	コナラ	サワラ	カマツカ	合	計
容器							1	1
			1	1				2
その他の加工品	1	1	1					3
				1	1			2
合計	1	1	2	1	1	1	1	8

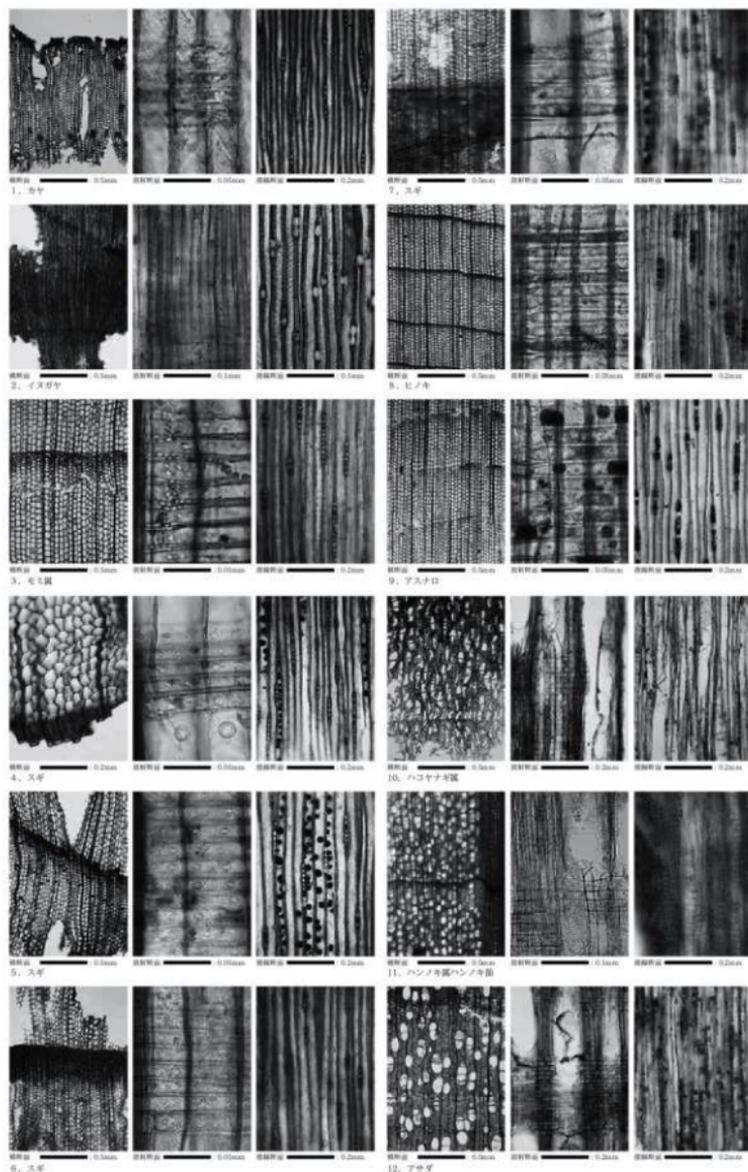
弥生時代

	スギ	ヒノキ	クナラ	ハナノキ	ブナ	合	計
容器			1				1
紡績具							1
建築材				1			1
				1			1
			1				1
その他の加工品					1		1
			3				3
			2				2
		1	1				2
				1			1
合計	10	1	2	1	1	1	15

古墳時代

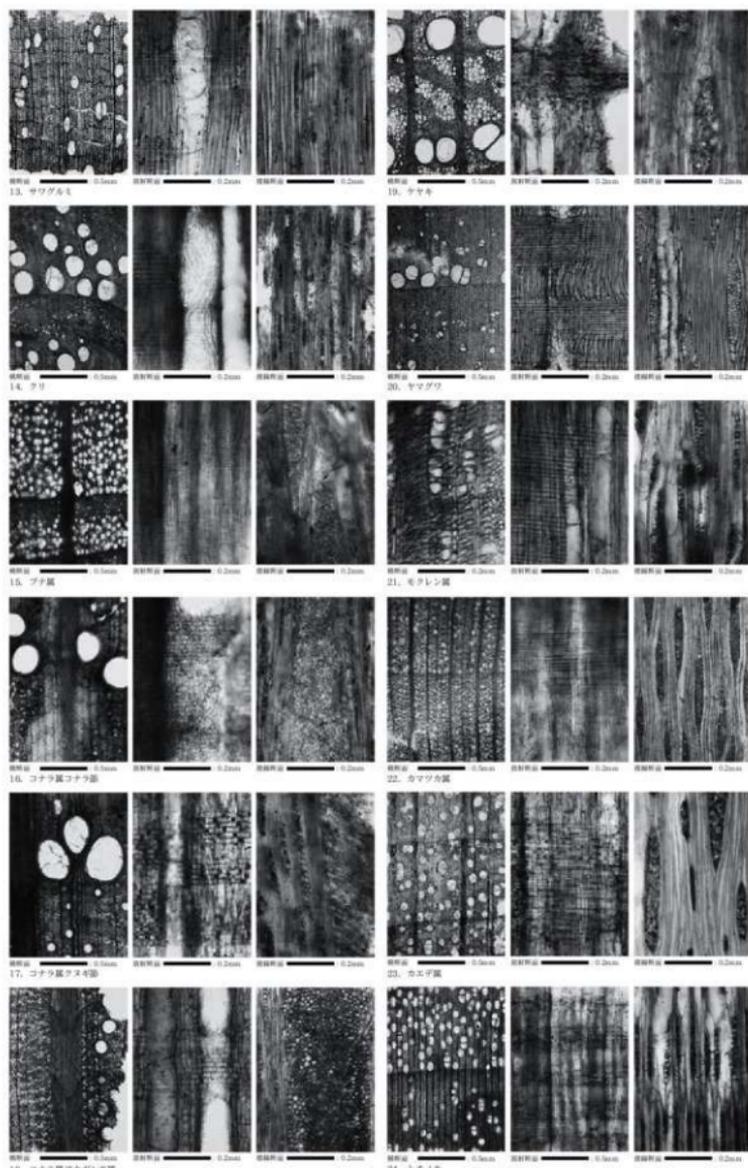
	カヤ	イヌガヤ	モミ	スギ	ヒノキ	ハコヤギ	アサダ	クナラ	コナラ	クササギ	アカサギ	ケヤキ	ヤマグワ	モクレン	キハダ	トチノキ	カエデ	エノキ	トネリコ	桐	桜	タケ	合
容器				1																			1
				4																			4
				1																			4
				2																			2
				1							1												1
調理加工具				4																			4
				1				1	2	3													7
農具				6																1			2
																							1
																							7
										1													1
工具									1														1
																							1
漁具				2																			2
																							1
武器・武具		4		1																			4
																							1
																							1
軍用具		1																					1
用具				1							1												2
				2																			3
祭祀具				1								1											2
				2																			1
埋葬具																							2
																							2
建築材				1				1							1								2
																							1
				2																			2
その他の加工品				1				1			1							1					1
				5			1				1								1				8
				2																			2
				1	3			1	2		1								1	3	1		14
			1	1	22		1	1	2		1			1			2	1	1	3	1		32
				2																			2
			1	29	1			2															37
				1											1								2
								1									2						7
合計	1	5	4	94	1	1	2	9	2	2	11	1	2	1	1	1	2	3	1	12	3	1	162

第18表 器種別の選材傾向

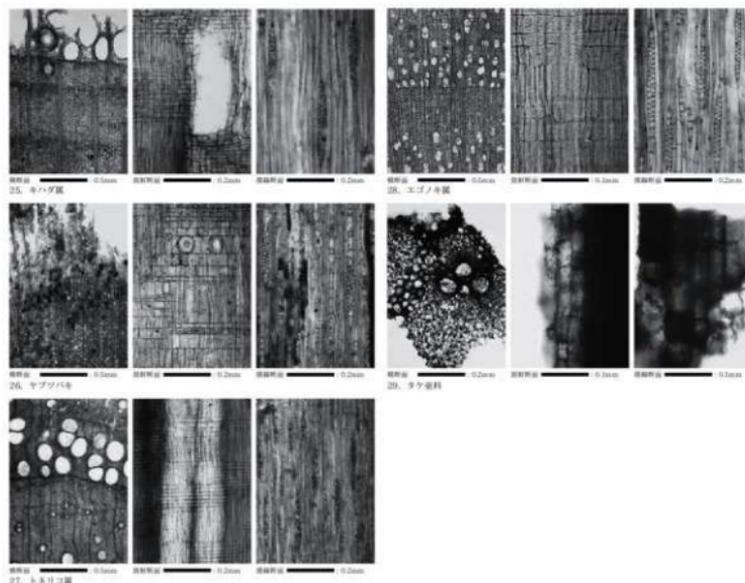


第32図 木製品の顕微鏡写真(1)

1 樹種 同定



第 33 図 木製品の顕微鏡写真 (2)



第 34 図 木製品の顕微鏡写真 (3)

2 赤色顔料の材質分析

はじめに

大武遺跡の埋没谷から出土した赤色顔料について、EPMA 分析と X 線回折分析を行い、材質を検討した。

試料と方法

分析対象は、縄文時代前期前葉（布目式～新谷式期）の漆紐（試料 No.1、以下 1）、および晩期前葉（大洞 B 式期）の監胎漆器（2）に使用されている赤色顔料である。また、漆製品と同一層序より出土した鉄石英と呼ばれる赤色の岩塊（3・4）や、赤色ペースト状塊（5）、黄色ペースト状塊（6）も同時に分析した（第 19 表、第 37 図 1～5）。なお、漆製品については、FT-IR 分析および塗膜分析も実施しており、詳細は別項を参照されたい。

分析は、少量採取した赤色部分について、EPMA 分析および X 線回折分析を実施した。

EPMA 分析は、分析装置は日本電子（株）製走査型電子顕微鏡（JSM-5900LV）に付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）を使用した。装置の仕様は、加速電圧が最大 30kV で、X 線検出器は Si(Li) 検出器である。また同装置は、試料室を低真空とすることで、絶縁体試料の観察、分析も可能である。反射電子像による観察の後、分析を低真空下（約 20Pa）で行った。測定条件は、加速電圧 20kV、測定時間 300s に設定した。定量分析は、 $\phi(\rho z)$ 法による定量補正をした簡易定量分析を行った。定量値の解釈

2 赤色顔料の材質分析

試料 No.	報告 No.	種類	グリッド	解位	時代	共伴土器型式	備考
1	626	漆組	6B14・15	XV	縄文時代前期前期	布日式～新谷式	小片, FT-IR, 蛍光分析も実施
2	366	藍胎漆器	4C19	XII d	縄文時代晩前期	大洞 B 式	小片, FT-IR, 蛍光分析も実施
3	—	鉄石英	6B20	XV	縄文時代前期前期	布日式～新谷式	
4	—	鉄石英	4D14	XII d	縄文時代晩前期	大洞 B 式	
5	—	赤色ペースト状塊	6B14	XV	縄文時代前期前期	布日式～新谷式	
6	—	黄色ペースト状塊	6B14・15	XV	縄文時代前期前期	布日式～新谷式	

第 19 表 赤色顔料の材質分析試料

については、大まかな参考値程度にとどめておくべきである。

X 線回折分析は、1・3～6 については、試料をメノウ乳鉢で磨砕した後、無反射試料板に充填して測定試料とした。2 は、膜状物質のため、有姿のまま無反射試料板に固定し、測定試料とした。分析装置は、(株)リガク製 X 線回折装置 MultiFlex を使用した。装置の仕様は、X 線管が銅ターゲット、検出器がシンチレーションカウンターで、モノクロメーターに湾曲グラファイト結晶を使用している。測定条件は、40kV、40mA、走査速度 $2^\circ/\text{min}$ 、ステップ幅 0.02° 、走査範囲 $3 \sim 65^\circ$ に設定した。

結 果

走査型電子顕微鏡観察により得られた反射電子像を第 37 図に、第 37 図の画像範囲の EPMA 分析により得られたスペクトルを第 35 図に、簡易定量値を第 20 表に示す。ケイ素 (SiO_2) と鉄 (Fe_2O_3) が主に検出された。ほかに、アルミニウム (Al_2O_3)、硫黄 (SO_2)、カリウム (K_2O) が試料によっては検出された。また、1 からは、パイプ状粒子が観察された (第 37 図 12)。

X 線回折分析により得られた回折パターンを第 36 図に示す。1～5 からは、石英 (Quartz, SiO_2)、赤鉄鉱 (Hematite, Fe_2O_3) とよく一致するピークが検出された。特に、3・4 は石英のピークが極めて高い。6 からは、石英は検出されたが赤鉄鉱は検出されなかった。

考 察

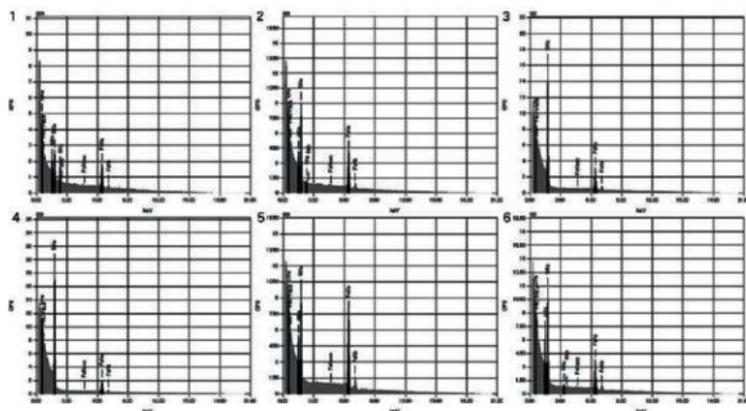
漆製品 2 点 (1・2) からは、EPMA 分析で鉄が多く検出されるとともに、X 線回折分析で赤鉄鉱が検出された。したがって、これらの赤色顔料にはベンガラが使用されているといえる。また、1 からはパイプ状粒子が観察されており、いわゆるパイプ状ベンガラであった。パイプ状ベンガラは、鉄バクテリアを起源とする [岡田 1997]。なお、2 は塗膜表面の観察ではパイプ状ベンガラが確認できなかったが、塗膜断面の観察において少量ではあるがパイプ状ベンガラが確認された (第 VI 章 3)。

一方、赤色の岩塊 (3・4) の分析結果をみると、X 線回折分析では赤鉄鉱も検出されたが、石英のピークが極めて高く検出されており、EPMA 分析においてもケイ素の含有量が多い。両者は、鉄石英とも呼ばれる、不純物 (鉄) をかなり多く含んだ石英、すなわち碧玉の一種と考えられる。石英がかなり特徴的に検出されており、漆製品に使用されているベンガラとは素材が異なると考えられる。

ペースト状塊 (5・6) の分析結果をみると、黄色ペースト状塊 (6) は、X 線回折分析では赤鉄鉱が検出されなかったため、漆製品に使用されているベンガラとは鉱物組成が異なると考えられる。赤色ペースト塊 (5) は、鉱物組成、化学組成ともに 2 に比較的近いが、パイプ状粒子は検出されなかったため、やはり由来が異なると考えられる。

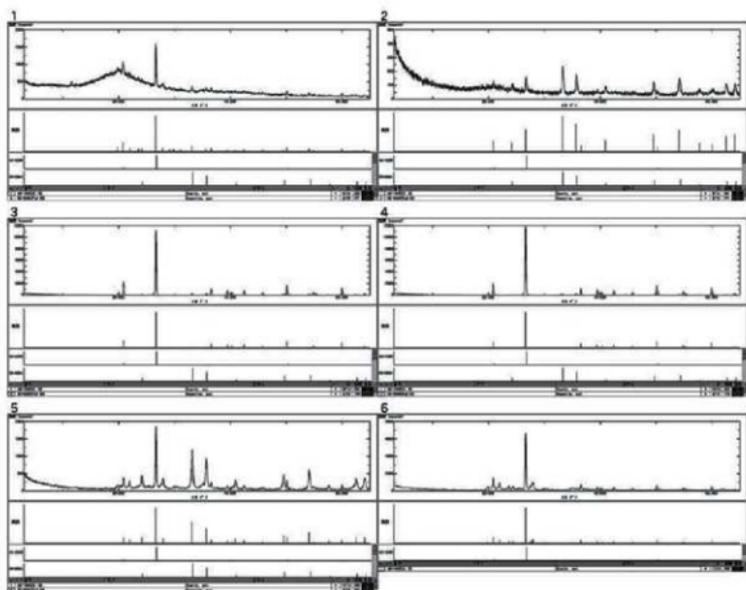
試料 No.	Al_2O_3	SiO_2	SO_2	K_2O	Fe_2O_3
1	12.58	21.87	19.28	—	46.27
2	10.39	38.89	2.74	—	47.97
3	—	64.67	—	—	35.33
4	—	76.54	—	—	23.46
5	11.41	30.24	—	—	58.35
6	18.55	43.93	—	1.11	36.41

第 20 表 簡易定量分析結果 (mass%)



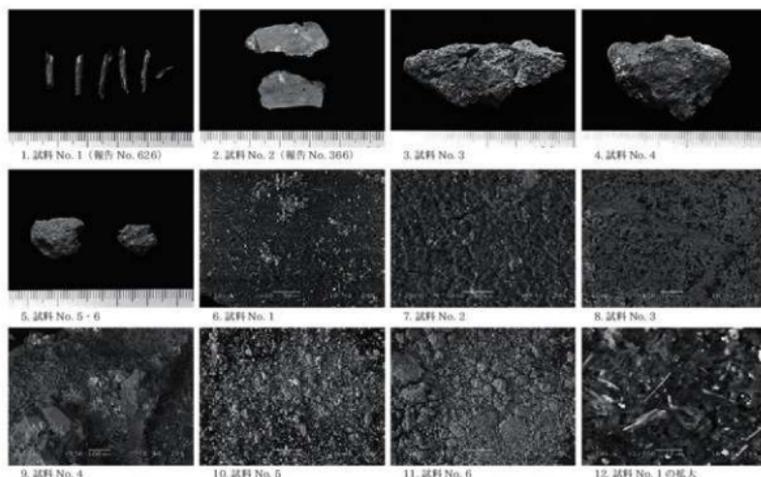
※ 左上のNo. は試料番号に対応する。

第35図 EPMA分析スペクトル



※ 左上のNo. は試料番号に対応する。

第36図 X線回折分析結果



第37図 赤色顔料の材質分析 (1～5. 試料写真, 6～12. 反射電子像)

おわりに

大武遺跡より出土した漆製品について、EPMA分析およびX線回折分析を行った。その結果、1の漆組、2の籃胎漆器ではパイプ状ベンガラの使用が確認された。他の試料(3～6)からはパイプ状粒子は検出されておらず、漆製品の赤色顔料は、これらとは由来が異なると思われる。

引用文献

岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

3 漆組および籃胎漆器の塗膜分析

はじめに

長岡市(旧三島郡和島村)に所在する大武遺跡の調査では、縄文時代前期前葉の漆組と晩期前葉の籃胎漆器が出土した。

ここでは、これらの漆組と籃胎漆器について、塗膜薄片を作製し、肉眼観察、表面部試料の赤外分光分析、光学顕微鏡による塗膜構造、走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察およびX線分析を行い、塗膜構造と材料について検討した。なお、同一試料について、赤色顔料分析を行っている(第Ⅶ章2)。

試料と方法

分析試料は、縄文時代前期前葉の漆組と縄文時代晩期前葉の籃胎漆器の2点である(第21表)。

はじめに、表面の漆成分を調べるために採取した塗膜片の赤外分光分析を行った。その後、高透明工

試料 No.	報告 No.	種類	グリッド	層位	時代	片作土器形式
1	626	漆組	6014・15	XV	縄文時代前期前葉	布目式～新谷式
2	366	籃胎漆器	4C19	XII d	縄文時代晩期前葉	大淵B式

第21表 塗膜分析試料

ボキシ樹脂を使用して包理した後、薄片作製機および精密研磨フィルム（#1000, #2000, #4000）を用いて厚さ約 50 μm 前後に仕上げた。各塗膜薄片は、表面蒸着を施した後、おもに赤色塗膜層を対象として X 線分析を行った。X 線分析を行った塗膜薄片は、再度精密研磨フィルム（#1000, #2000, #4000）を用いて厚さ約 10 μm 前後に調整した後、偏光顕微鏡を用いて塗膜構造の観察を行った。

なお、赤外分光分析では、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ 1mm 程度に裁断した臭化カリウム (KBr) 結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約 7 トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光 (株) 製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

また、X 線分析では、エネルギー分散型 X 線分析装置を付属した走査型電子顕微鏡を用いて無機成分を調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製 JSM-5900LV）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型 X 線分析装置（同 JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。分析では、炭素 (C) を合わせて計算した。

結果および考察

以下に、各試料の表面部試料の赤外分光分析、光学顕微鏡による塗膜構造、走査型電子顕微鏡による反射電子像の観察および X 線分析の各結果について述べる。

なお、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図（第 38 図 3）では、縦軸が透過率 (% T)、横軸が波数 (Wavenumber (cm^{-1}); カイザー) を示す。各スペクトル図はノーマライズしており、吸収スペクトルに示した数字は生漆の赤外吸収位置を示す（第 22 表）。

吸収 No.	生 漆		
	位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.534	
2	2854.13	36.217	
3	1710.55	42.035	
4	1633.41	48.833	
5	1454.06	47.195	
6	1351.86	50.803	ウルシオール
7	1270.86	46.334	ウルシオール
8	1218.79	47.536	ウルシオール
9	1087.66	53.843	
10	727.03	76.389	

第 22 表 生漆の赤外吸収位置とその強度

【試料 No.1 (漆組)】

この漆組は、淡赤褐色塗りのらせん状に切れ目のある中空の円筒の組である（図版 151・1a, 1b）。

表面塗膜層では、赤外分光分析によりウルシオールの吸収 (No.6~8) と一致した (第 38 図 3)。塗膜構造は、繊維集合 a 層、塗膜 c1 層および c2 層で構成される (第 38 図 1c・1d)。塗膜 c1 層は繊維の抜け痕をわずかに含む透明の褐色層である。C2 層は不透明の黒色層で、反射電子像の観察によると輝度の高い細粒の粒子やパイプ状粒子が散在する。繊維の層では、繊維は残存していないが、断面形状が長方形や集合した繊維痕が観察される。繊維痕の短径は約 30 μm 前後である。塗膜 c1 層の X 線分析では酸化鉄 (Fe_2O_3) が最大 92.46% 検出され (第 23 表)、酸化鉄による赤色であった。パイプ状を示す粒子はパイプ状ベンガラである [岡田 1997]。

この組は、繊維集合 a 層において、繊維間に透明の漆と思われる淡褐色物が充填されていることから、繊維の外側は漆により固定され、中心部の繊維は消失したと考えられる。

【試料 No.2 (藍胎漆器)】

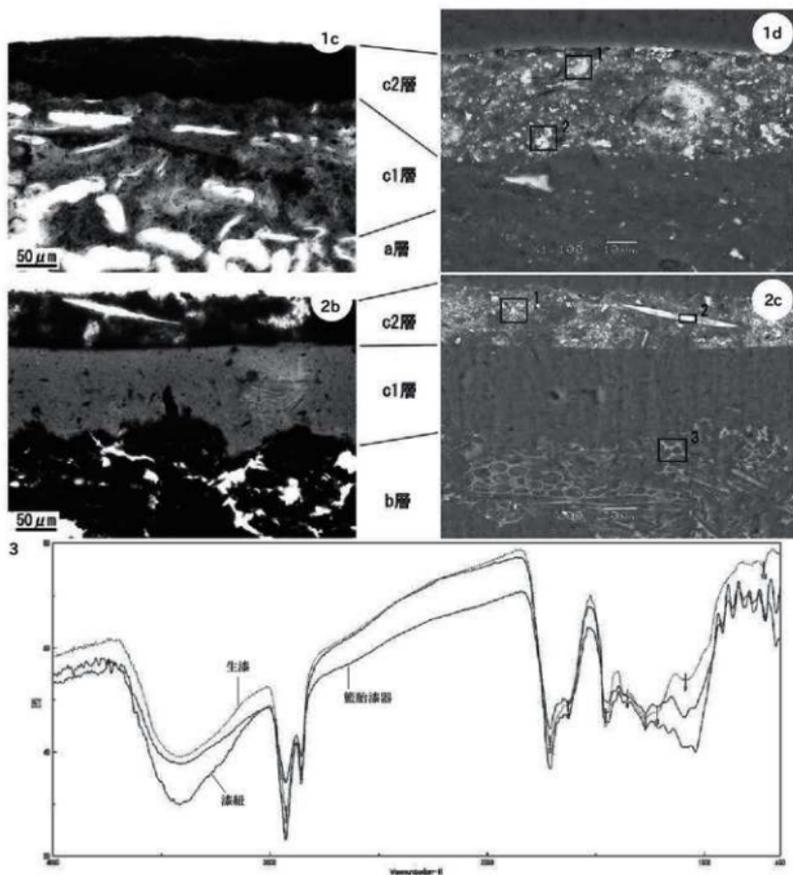
この藍胎漆器は、淡赤褐色塗り藍胎漆器で、下地黒色層で容易に剥離する (図版 151・2a)。

表面塗膜層では、赤外分光分析によりウルシオールの吸収 (No.6~8) と一致した (第 38 図 3)。塗膜構造は、炭粉からなる下地 b 層、塗膜 c1 層および c2 層からなる (第 38 図 2b・2c)。下地 b 層は、10 μm 以下の細粒の炭粉と黒色の植物組織からなる。塗膜 c1 層は透明の褐色層である。塗膜 c2 層は、不透明の黒色層で、反射電子像の観察によると輝度の高い細粒の粒子と少量のパイプ状構造の粒子が散在し、針

3 漆組および髹胎漆器の塗膜分析

試料 No.	種類	点 No.	塗膜	C	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	Total
1	漆組 (626)	1	c1層	—	0.00	0.00	0.16	2.02	4.28	0.31	0.69	0.07	92.46	99.99
		2	c1層	—	0.00	0.22	0.43	7.28	6.67	0.31	0.37	0.10	84.61	99.99
2	髹胎漆器 (366)	1	c2層	—	1.55	0.67	0.17	6.18	2.22	0.00	0.90	0.05	88.27	100.01
		2	c2層	—	0.40	0.00	28.34	56.03	0.00	2.84	0.55	0.38	11.46	100.00
		3	b層	72.85	0.11	0.21	1.02	1.07	2.85	0.72	0.47	0.17	20.53	100.00

第 23 表 各試料の X 線分析結果 (単位: %)



1a ~ 1d, 漆組 (試料 No.1) の塗膜試料 2a ~ 2c, 髹胎漆器 (試料 No.2) の塗膜試料

3. 各塗膜表面のスペクトル図

(縦軸: 透過率, 横軸: 波数, 数字: 生漆の赤外吸収位置)

第 38 図 漆塗試料と塗膜構造と反射電子像、塗膜の赤外吸収スペクトル図

状物も見られた(第38図2c)。塗膜c2層のX線分析では酸化鉄(Fe_2O_3)が88.27%検出され(第23表)、酸化鉄による赤色であった。一部のパイプ状を示す粒子はパイプ状ベンガラである[岡田1997]。塗膜c2層中の針状物のX線分析では酸化ケイ素(SiO_2)が56.03%、酸化アルミニウム(Al_2O_3)が28.34%など検出され、海綿骨針であった。なお、下地b層中の植物組織は、炭素(C)が72.85%であった(第23表)。

おわりに

縄文時代前期前葉の漆紐と晩期前葉の藍胎漆器について、表面塗膜層の赤外分光分析、塗膜薄片の観察を行った。その結果、縄文時代前期前葉の漆紐は、繊維集合a層、塗膜c1層およびc2層からなり、塗膜c2層中ベンガラを混ぜた赤色漆塗り紐であった。なお、繊維の外側は漆により固定され、中心部の繊維は消失したと考えられる。

一方、晩期前葉の藍胎漆器は、炭粉または炭化植物遺体からなる下地b層、塗膜c1層およびc2層からなり、塗膜c2層中ベンガラを混ぜた赤色漆塗り容器であった。

引用文献

岡田文男(1997)パイプ状ベンガラ粒子の復元. 日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, 38-39.

4 漆紐について

調査の内容と目的

上記の資料について、以下のような調査を行った。

1. 細部についての肉眼観察、並びに顕微鏡観察

今までの漆資料調査の経緯を踏まえ、細部についての製作技法的、漆工技術の特徴を抽出した。

2. X線透過検査

土ごと取り上げた塊のままX線透過撮影を行い、製作技術的得量を抽出した。

3. 蛍光X線分析

上記製品の一部を対象として非破壊的な蛍光X線分析を行い、赤色顔料を特定した。

4. 層断面観察

上記製品の一部をポリエステル樹脂に埋包固定した上で、光学顕微鏡観察用の層断面薄片資料を調製し、塗装工程分析などの漆工技術的調査を行った。

調査結果

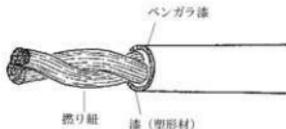
上記の調査結果は、概ね次のようにまとめられる。

A 外観並びに層断面(図版151)の観察によっても、漆製品であることは間違いない。

本漆製品は、太さ1.5mm前後の紐あるいは糸をZ方向に2本撚り合わせたものを芯とし、そこに漆を塗りつけることで紐の各ブロック状を合わせ目とに発生する凹みを埋め、円筒状の形に整えている。これを胎とし、その表面にベンガラ漆を塗布することで、赤色漆塗り製品を作り出したものである。

B 紐の横断面と縦断面(図版151)とを観察することで、次のようなことがわかる。

1 2本の紐は合わせ目で見れば、交互に鏡面対象をなす蒲鉾形の断面を構成している。これは以後の漆作業を経ることによって断面が真円の製品を製作する場合、大変有利な状況である。



第39図 漆紐の構造

2 この2本の紐は漆で固められているが、漆は紐の中心部までは浸透しておらず、したがって紐の中心部は腐朽消失している。消失した面積は紐の断面積の半分近くに達しているが、紐の表層部分には漆がよく浸透しており、繊維の1本1本を非常によく接着固定している。当然ではあるが、2本の紐の合わせ目にも漆の層が認められており、紐同士がよく接着されている様子が確認できる。

3 紐の素材は確定できない。しかしながら下記に挙げた特徴を有するものとして、カラムシ（苧麻）あるいはこれに近似する草本性の繊維を使用している可能性が高い。

- ・ 繊維断面は概ね長円形を呈しており、長径はおおよそ20～40ミクロン（0.02～0.04mm）、短径はおおよそ10～20ミクロンである。
- ・ 繊維は1本1本にまで非常によく分離しており、しかも漆によく馴染む性質を有している。

4 紐へ塗りつけた漆、胎として整えるために使用した漆には、積極的な混ぜ物が認められない。すなわち、鉱物質の粉末を混入した漆（例えば、錆漆）ではなく、また植物質の混和物を混ぜた漆（木犀漆）でもない。おそらくゴミ等の汚れはあるものの、混ぜ物のない漆（生漆である可能性が高い）を使用したものと考えられる。

5 表面のベンガラ漆は1層であり、発色の良好な良質のベンガラ（赤色酸化鉄）を使用している。ベンガラ粒子は不定形で、その直径は大きなものでも数ミクロンに過ぎず、むしろ1ミクロン（千分の一ミリ）に達しないような微粒子のものが目立っている。

6 表面のワレは、2本の紐の撚り合わせた状態を反映したものであるが、反対側に達するほどに割れが進行していたとは考えられない。すなわち当初の状況としては、管玉風に寸断したものが連結していたとは考えられず、むしろ漆の浸透していない紐の中央部の存在とその自由度により、一連の長い状態のまま製品として機能していたと考えられるべきであろう。

C 製品の用途であるが、装身具であることについての異論は生じないものと考えられる。なかでも、首飾りである可能性は十分存在するものと思われる。 （平成12年3月31日校了）

5 漆紐の実年代について

年代測定調査の概要

漆製品の一部を用いて炭素14法による年代測定を行った。漆資料薄片6.3mgを超音波洗浄後年代測定用に採取した。漆は3次元的に化学結合した樹脂であり、物理的にも科学的にも強固なために、腐食やカビから資料を守ると同時に、中に含まれるベンガラや植物繊維を分離することは困難である。しかしながら、鉄化合物（ Fe_2O_3 ）であるベンガラは炭酸塩をつくることはなく、量的にも少ないので年代測定に影響を与えないと考えられ、また漆と植物繊維は同時代のものと考えられるので、この漆片試料全体の炭素は本製品が製作された時代の植物の炭素同位体をもっているものとみなし得る。

そこで、この試料全体を民間機関である米国 Beta Analytic 社に送り、炭素14測定を依頼した。

試料は、標準的な汚染除去処理として、酸・アルカリ・酸処理を行い、これを酸化して炭酸ガスに転換し、さらにグラファイト炭素の形に変えて、加速質量分析(AMS)で炭素14測定を行った。Beta Analytic社は、世界の有力AMS施設(大学・研究所)と契約を結び、AMSによる高精度 ^{14}C 測定を代行している。

年代測定結果と試料の実年代

^{13}C による同位体効果($\delta^{13}\text{C} = -30.1\text{permil}$)を補正して得られた炭素14年代(モデル年代)は次のとおりである。

炭素14年代: 5760 ± 40 ^{14}CBP (Beta-138261)

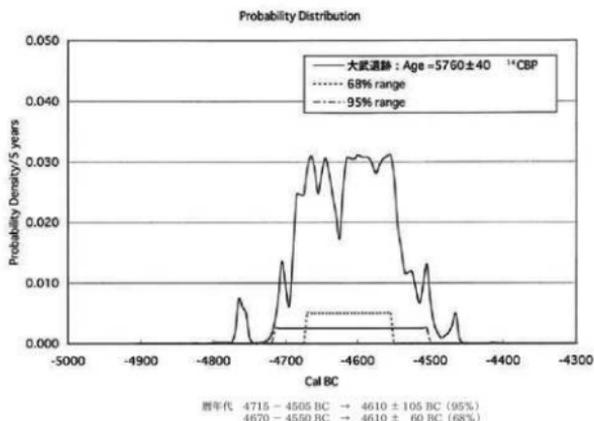
なお、 ^{14}CBP という表示は、西暦1950年を基点にして計算した炭素14年代(モデル年代)であることを示す。炭素14年代の数字は、縄文時代前期初頭で見ると、実年代と比べ800～900年の開きがある。

年輪年代と炭素14年代との対応関係を示す暦年較正曲線:INTCAL98をデータベースとして用いて解析した結果を第40図に示す。この図では、年代を確率分布で示してあり、全体の確率が1になるよう規格化してある。暦年較正曲線自体は、過去の大気中の ^{14}C の変動に加えて ^{14}C の測定誤差も重なり複雑であるため、確率分布曲線はやや複雑な形になっている。この解析をもとに具体的な数字で年代の範囲を推定すると、

実年代: 4610 ± 60 calBC (68% range)

4610 ± 105 calBC (95% range)

ここでcalBCという表示は、暦年較正を行った年代(この場合紀元前)であることを示す。このように、この漆試料の実年代は、概ね現在より6600年前となる。(平成12年3月31日校了)



第40図 暦年較正年代グラフ

6 琥珀原石の産地同定分析

はじめに

琥珀と思われる樹脂様試料は第 41 図に示したように、表面は殻をかぶったような状態の原石であるが、内部は比較的劣化が進行していない状態の良いものであると観察できた。この遺物が琥珀であるかどうかの確認をフーリエ変換赤外分光（以下 ATR-FTIR）により行った。琥珀であることがわかれば琥珀の主な産出地から採取した地質学的標準試料（標準琥珀）の分析結果と比較することによって産地推定を行うことが可能となる。そこで今回、ATR-FTIR、熱分析（以下 DTA・TGA）によりこれら 2 点の試料の科学分析を行ったのでその結果を報告する。

分析試料

今回の分析に使用した試料は第 41 図の破片の中で最も健全であると見られる部分から選んだ（黒丸印で囲った部分）。

同時に標準試料として、久慈市、いわき市、銚子市、瑞浪市から産出した試料を同様の方法・条件で分析し比較した。



第 41 図 琥珀分析試料

分析方法および条件

分析装置は全反射フーリエ変換赤外分光光度計（ATR-FTIR）（SENSIR TECHNOLOGIES 製 TravelIR）と熱分析装置（DTA・TGA）（鶴島津製作所製 DTG-60）を使用した。

ATR-FTIR による分析では、試料に赤外線を照射することにより得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を同定することができる。主に有機物の構造を解析する手段として用いられることが多く、琥珀を形成する樹脂の種類すなわち植物の種類によって分子構造が異なると考えられる。そのため、産地によってスペクトルに差が生じ、それを利用して産地推定に応用されてきた [室賀 1976] [植田 2002・2004]。

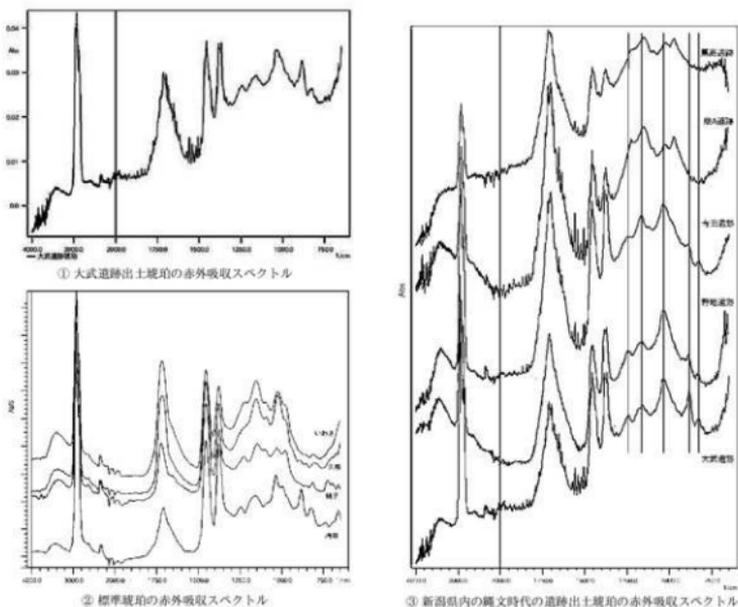
DTA・TGA は試料に熱を加え、得られる質量変化から気化温度、また熱分解などの化学変化を知ることができる熱重量測定（TGA）と、試料の融解などの状態の変化や化学反応の温度を知ることができる示差熱分析（DTA）があり、これらから試料の熱に対する挙動を調べることができる。

測定は ATR-FTIR は極微量（約 0.5mg）の試料をそのまま測定部に置き検出器に TGS を用い、分解能 4cm^{-1} で測定した。また、DTA・TGA は試料の破片（約 1mg）をアルミニウムセルに入れ、200ml/分の流量の窒素ガスを流しながら $10^\circ\text{C}/\text{分}$ で昇温させ、その時の重量変化と熱量変化を測定した。

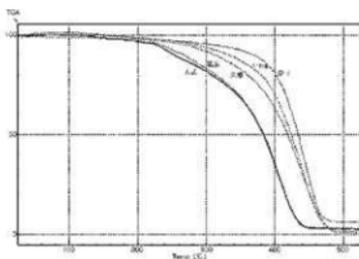
結果および考察

ATR-FTIR と DTA・TGA は有機化合物の分子構造を反映するため、劣化によりその構造が変化すると、本来のスペクトルや挙動とは異なる結果となる場合もある。特に劣化が激しいと、ATR-FTIR では全体的に吸収はブロードとなり特徴的な吸収が消失し、新たに異なった位置にピークが表れることがある。また、DTA・TGA は低温度から重量減少が始まり、分解温度も低温化する。そのため琥珀であるかどうかの判断および産地推定は、できるだけ健全な部分を選んで分析を行うことが必要である。

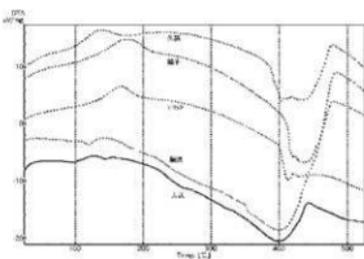
ATR-FTIR ではスペクトルの $3500 \sim 2800\text{cm}^{-1}$ 、 1710cm^{-1} 、 $1500 \sim 800\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置より琥珀であることが確認できた (第42図①)。さらに 3500cm^{-1} および 1710cm^{-1} 付近の吸収強度から劣化の程度は比較的低く、健全な状態であることも確認できた。次に指紋領域と呼ばれる有機化合物を同定する際の目安となる $1300 \sim 750\text{cm}^{-1}$ 付近のスペクトルの吸収位置および強度と、産地の判明している標準琥珀から得られたスペクトルと比較し、産地推定を試みた (第42図①・②)。国内の主産地である久慈市、いわき市、銚子市、瑞浪市産のスペクトルと比較した結果、今回の試料は $1250 \sim 850\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収位置と強度が瑞浪市に非常に近いスペクトルであることがわかった。以上の結果と、これまで発表された文献を参考に外国産、および国内産の分析結果も合わせて検討したが〔室賀前掲〕、瑞浪市産以外のスベ



第42図 赤外吸収スペクトル



第43図 出土琥珀および標準琥珀のTGA曲線



第44図 出土琥珀および標準琥珀のDTA曲線

クトルと一致する結果は確認できなかった。また、分析が実施されていない産地および現在では消滅し確認できない産地の可能性は否定できないが、現時点では瑞浪産の可能性が非常に高い結果となった。

さらに、熱分析で出土琥珀を標準琥珀と比較した結果、ATR-FTIRと同様に瑞浪市産琥珀と非常に良く似た挙動を示すことがわかった(第43・44図)。

以上より、今回分析した出土琥珀の産地はATR-FTIR、DTA・TGAではいずれも瑞浪市産であることを示唆したことより、現時点では瑞浪市産と推定した。

また、瑞浪市産琥珀は新生代第四紀の地層から産出するもので、年代的にはかなり新しい。また、この琥珀は有機溶媒(アセトン、エタノールなど)にほぼ溶解し、高分子化が進んでいない半化石樹脂(コーバル樹脂)とよく似た性質を持つ。しかし、国内では琥珀と認識されており、出土品では古墳時代の琥珀製品が瑞浪産であるとの分析結果も報告されている[室賀1988]。

加えてこれまで新潟県における縄文時代の遺跡では青田遺跡、野地遺跡、大久保遺跡、馬高遺跡、和泉A遺跡などから琥珀の出土例が報告されている。青田遺跡は非常に小さい破片であったため形状が不明で、野地遺跡は原石であり、その他は全て製品であった。これらのATR-FTIRの結果を比較すると青田遺跡および野地遺跡は今回の大武遺跡と非常に良く似た結果となり、一方他の3遺跡は前記の結果とは異なるがこれら3遺跡についてはほぼ同じスペクトルが得られた(第42図③)。なお、大久保遺跡については完形品であったため今回と同一条件での分析ができず、以前の結果を参考にした。今回の試料が原石であり、同様の原石である野地遺跡および破片の青田遺跡出土琥珀が縄文時代後期から晩期頃、それ以外の加工された琥珀が中期頃と時代・形状・分析結果を含め、大きく2グループに分けることができた[加藤2003]。

さいごに

出土琥珀は劣化状態が様々で、それによってATR-FTIRやDTA・TGAの結果が変わることが多い。しかし、今回は劣化の進行はあまり見られず、その影響をほとんど受けていなかったため、いずれの分析でも瑞浪産であることが確認でき、かなり信頼性の高い結果を導くことができた。なお、高分子化の度合いが低い琥珀については劣化の進行は早いと考えるのが妥当であり、そういう意味では今回の出土資料が比較的健全な状態で発掘されたことは興味深い。

琥珀の産地は国内でも、少量の産出地も含めると10か所以上もある。また国外でも各地で産出する。その中で、主産地の標準琥珀については様々な分析方法による多くの基礎データが揃っており、比較検討できる環境は整っている。一方、少量産地は科学分析がほとんど行われていないことも多く、今回の試料もそういった地域やまだ発見されていない琥珀産地である可能性は否定できない。今後、分析が実施されていない産地の琥珀についても今回のように分析を行い、基礎データを収集することでより精度の高い産地推定が可能になると考える。

参考文献

- 1) 室賀照子(1976) 赤外吸収スペクトルによる琥珀の産地分析。考古学と自然科学, 第9号, 59
- 2) 植田直見(2002) 鏡子産琥珀の赤外分光分析。こはく, 第4号, 15
- 3) 植田直見(2004) いわき地方産琥珀の科学分析。こはく, 第5号, 13
- 4) 室賀照子(1988) 奈良県曾我遺跡および御坊山古墳出土琥珀の産地同定(第1報)。研究紀要, 由良大和古代文化研究協会, 第1集, 111
- 5) 加藤 学(2003) 縄文時代の琥珀玉, 新潟考古学談話会会報, 第27号, 1

第七章 ま と め

1 土器・陶磁器

A 層序と出土土器・陶磁器

1) 中世～古代

大武遺跡 A～G 区では縄文時代前期以前に開析された埋没谷が検出され、埋没谷の中からは土器・陶磁器、石器、木製品などが出土し、層序を 15 層に大別した。ここでは、遺跡の層序と既存の土器・陶磁器の編年(案)が矛盾しないことと層序の年代・遺跡の存続期間について確認するため、主要遺構・各層から出土した土器・陶磁器について『大武遺跡 I (中世編)』[春日^{ほか} 2000]で報告した中世の土器・陶磁器もあわせて検討する(第 45～53 図)。

IIIb 層は A～G 区に広く確認できる黄褐色のビート層で、遺物の出土量は少ない。大窯期の灰軸小皿(17・18)や天目碗(15)が出土している。灰軸小皿(17・18)は高台の形態などから考え藤澤編年[藤澤 2002]の大窯 II 期(16 世紀前半)と考える。IIIb 層は 16 世紀を中心とする時期の土層と考える(第 45 図)。

黒色土①～③層は炭化物を大量に含む土層で、G 区に部分的に確認でき、IVb 層の上位に堆積する。IVb 層は A～G 区に広く確認できる灰色の粘土層である。これらの土層からは水滲分類[水滲 2005] T1 類の土師器皿(36・69)、大宰府分類[山本 2000] VI×VII 類の白磁皿(35)、IIb・IIc 類の青磁碗(34・71)、古瀬戸中期様式の瀬戸焼・美濃焼折縁深皿(10)、珠洲 II～IV 期の珠洲焼(4・37・39・51)が出土している。土師器皿は口径が小さく深身のもの、口径が大きく浅身のものがある。また珠洲焼は図示したもののほかに V 期のもも出土している。黒色土①～③・IVb 層は 13～15 世紀の土層と考える(第 45 図)。

SX87 は VIa 層中で確認された木製品集中地点で、須恵器無台杯(764)が出土した。年代は筆者の編年[春日 1999・2005]の古代 V 期(9 世紀前半)のものである。VIa 層は A～G 区に広く確認できる黒褐色のビート層で他に土器・陶磁器の出土例は少なく、9 世紀頃の土層と考えた。なお古代の土器は V 層・VIb 層・VIc 層・23 層などからも出土している。V 層からは中世の土器・陶磁器はほとんど出土しておらず、古代の土層の可能性が高い。一方、VIb 層・VIc 層・23 層は古墳時代(以前)の土器が圧倒的多く出土しており、これらは古墳時代の土層と考えている。古代の須恵器・土師器が出土している要因については、土器取り上げ時の土層誤認などのヒューマンエラーが主な原因と考える。古代の土師器・須恵器は古代 V 期(9 世紀前半)のもものが中心であるが、古代 VI 期(9 世紀後半から末)まで下るもの(773)、古代 III～IV 期(8 世紀前半から後半)頃のもの(760・762)もあり、時期幅がある(第 45 図)。

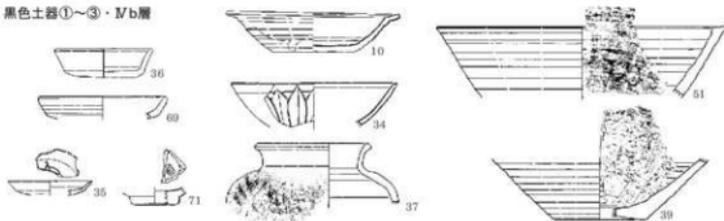
2) 古墳時代後期～弥生時代後期

SX88 は 10・11AB (F 区)の VII 層上面で検出した旧河道で古墳時代後期の土師器・黒色土器がまとまって出土した。古墳時代後期の土器はこのほか VIb 層・VIc 層からも出土している。須恵器は 684 が 20 層、729 が VIb 層からの出土で、684 は陶邑編年[田辺 1981]の TK47～MT15 型式、729 は MT15～

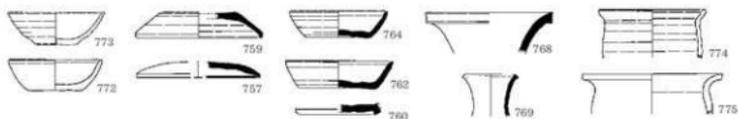
Ⅱb層



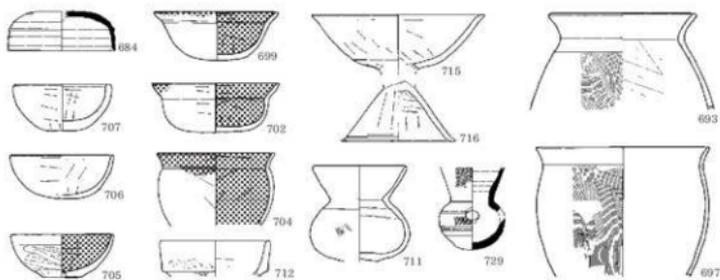
黒色土器①~③・Ⅱb層



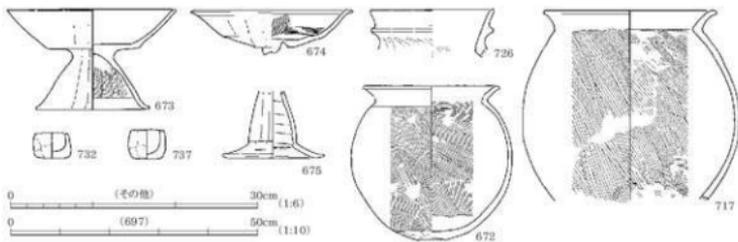
SX87・Ⅴ・Ⅱa層ほか



SX88ほか

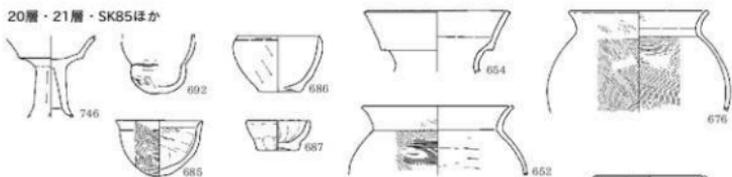


SK49・95ほか

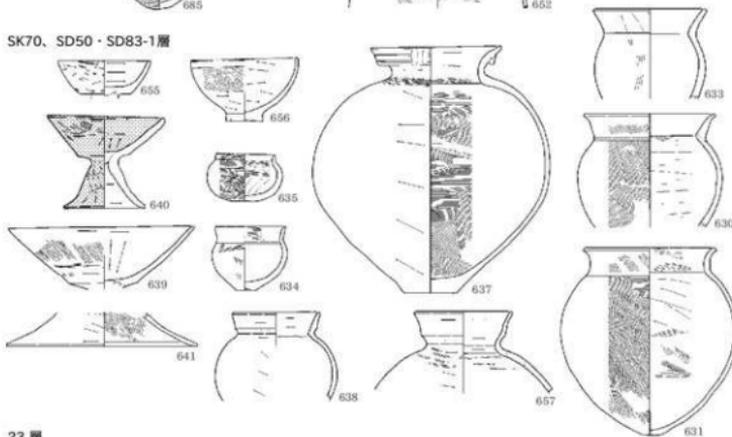


第45図 大武遺跡出土土器・陶磁器(1)

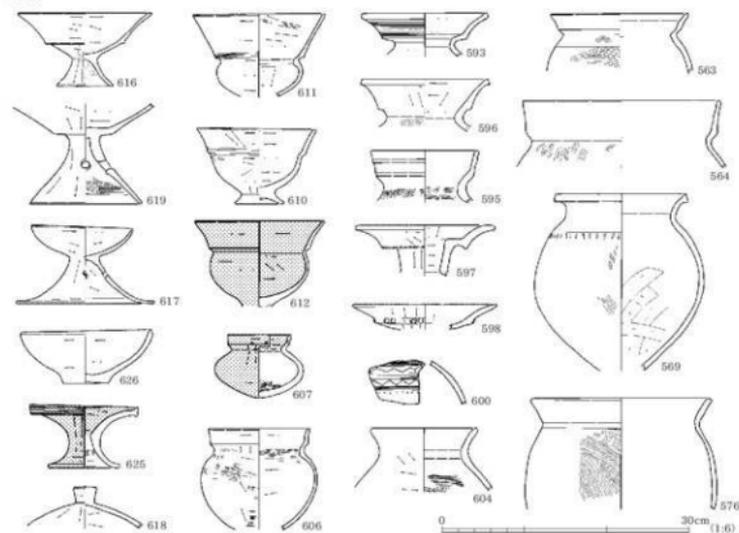
20層・21層・SK85ほか



SK70、SD50・SD83-1層

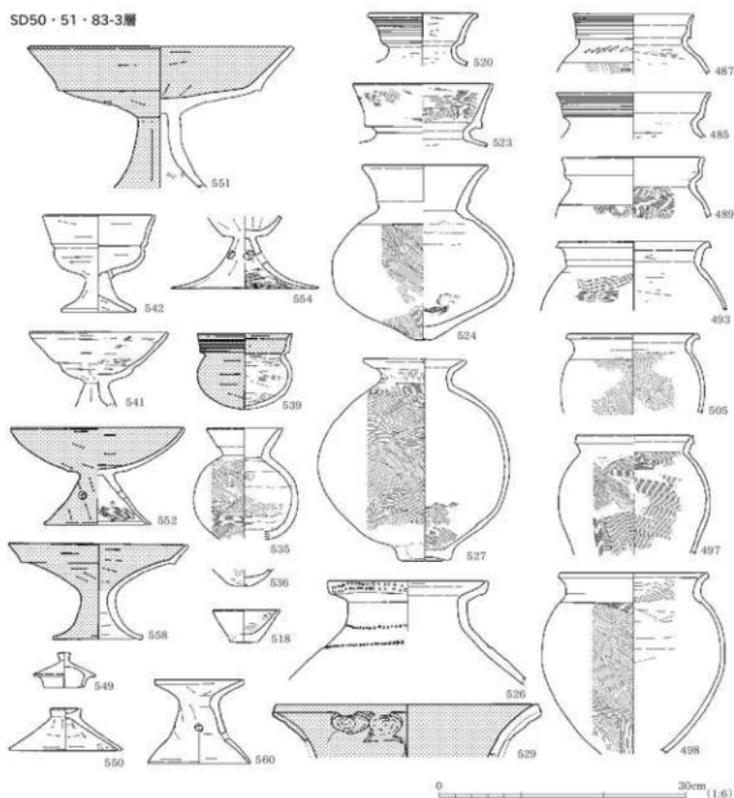


23層



第46図 大武遺跡出土土器・陶磁器(2)

SD50・51・83-3層



第47図 大武遺跡出土土器・陶磁器(3)

TK10 型式のもので、ほかの土師器・黒色土器の年代と近いと考える(第45図)。

SK49・95はXVI層上面で検出した土坑(もしくは井戸)で同一の遺構の可能性が高い。古墳時代中期の土器がまぎれあって出土した。726・732・737はVb層から出土したもので、古墳時代中期に通用の壺(726)と手づくね土器(732・737)である。SK49・95の直上を覆っていた土層は明確ではないが、IVb～VIa層の可能性が高い。Vb層・VIc層は古墳時代中期から後期の土層である可能性が高い(第45図)。

20層・21層はA～C区・G区の丘陵斜面に部分的に確認できる土層で、Vb層の下位に位置しVII層の上位に位置する土層であるが、VII層・23層との上下関係は不明である。SK85はXVI層上面で検出したSD50と重複する土坑である。これらの土層・遺構からは古墳時代前期後半の土器が出土している。20・21層からは釜C3類(676)・鉢D類(686・687)・鉢E類(685)、SK85からは釜C3類(652)、頸部が太く口縁部があまり外傾しない壺M類(654)が出土している。746・692は当期に通用の高杯E類

と壺G類で、746は31層、692はⅤc層からの出土である(第46図)。

SK70、SD50・83-1層からは20層・21層・SK85出土土器にやや先行する土器群が出土している。SK70からは高杯F類(655)、鉢D類(656)、壺L類(657)などが出土している。またSD50・83-1層からは高杯C類(639)・F類(641)・H類(640)、鉢E類(634・635)、壺L類(638)・O類(637)、釜C2類(631)・C3類(630・633)が確認できる。鉢はD・E類が主体を占め、高杯は東海系のC・F・H類が主体を占め、壺は弥生時代後期以来の在地の系譜を引くL類と東海系のO類が混在し、釜はC3類が無くC2類の他にC3類が加わる様相は、20層・21層・SK85出土土器と、後述する23層、SD50・51・83-3層出土土器と中間的な土器様相である(第46図)。

23層、SD50・51・83-3層からは、古墳時代早期～前期初頭の土器群が出土している。23層はSD50・51・83-3層出土土器との上下関係は不明で、SD50・51・83-3層の上位に位置する土層の可能性が高いが、接合する土器も多くあり、近接した時期の土器群と考える。SD50・51・83-3層からは高杯A類(551)・B類(542・541)・C類(552)・F類(554)、器台C類(558)・K類(560)、壺I類(527・526)・L類(520・523・524)・M類(529)、釜A類(485・487)・B類(489)・C1類(497)・C2類(498・505)・H類(493)などが確認でき、23層出土土器もこれに似た組成である(第46・47図)。

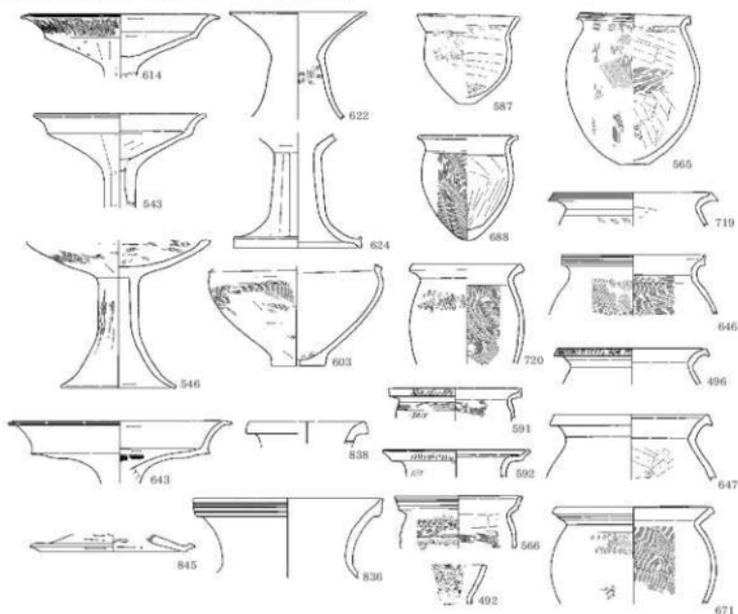
⑥層は9B周辺に部分的に確認できる土層で、23層の下位、ⅩⅥ層上位にあり、ⅩⅦ・ⅩⅧ層との上下関係は不明である。遺物の出土量は少ないが、口縁端部に擬凹線が走る釜C1類(719)、胴部が細身で肩部に連続刺突がある釜C2類(720)がある。これらは弥生時代後期前半頃に位置づけできる土器である。これに近い時期の土器は23層、SD50・51・83-3層から散発的に出土しており、高杯A類・器台C類のうち、口縁部が短く立ち上がり急なもの(543・614・643)、器台A類のうち大型のもの(622)、壺C・S・V類の一部(529・601～603)、釜C1類のうち口縁端部に擬凹線や櫛目文が走るもの(496・565・646)、釜E・N類の一部などは719・720に近い時期の遺物の可能性が高い(第48図)。古墳時代早期～前期の土層と考える23層やSD50・51・83-3層から弥生時代後期前半の土器が出土する主な理由は、古墳時代早期～前期に水田や水路の造営にともない掘削が行われたためであろう。なお⑥層からは弥生時代中期前半(第50図下段468)、弥生時代中期後半(第48図下段459)も出土している。⑥層は弥生時代後期前半に限定できる土層ではなく、弥生時代中期前半から後期前半の土層の可能性もある。

3) 弥生時代中期

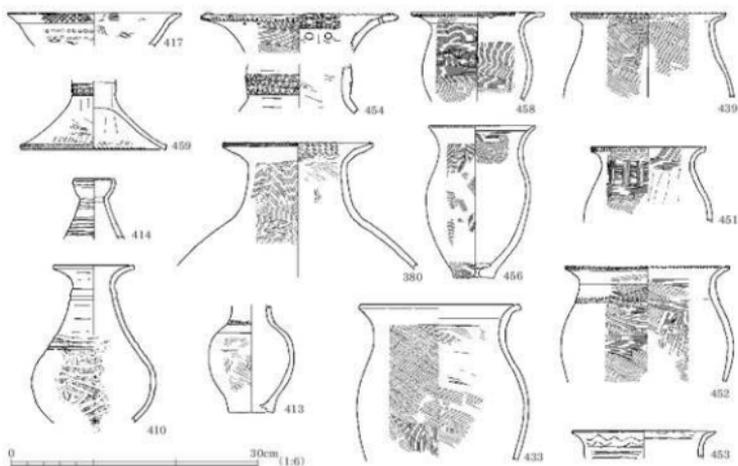
D区F層、G区灰色粘土層は同一の土層と考えており、21・23層の下位でX層の上位に位置する。弥生時代中期後半の土器が大量に出土した。ⅩⅦ～ⅩⅧ層との上下関係は不明だが、ⅩⅦ層から古墳時代早期～前期の土器が出土しておりⅩⅧ層に対応する土層と考えている。このほか弥生時代中期後半の土器はSD50・51、⑥層、23層などからも散発的に出土している。弥生時代中期後半の土器は新相と古相に細分できる。新相と考えた土器は斜格子文に竹管文や円形浮文を施す鉢や壺(417・454)、斜行短線文がみられる壺や釜(330・458)、脚部上端付近に格子目文のある凸帯が付く高杯(459)、口縁部のヨコナデの範囲が広い釜A類(433・456)、釜E類(439)、壺J類・釜C類のうち栗林Ⅱ式のもの(410・413・451・452)、壺K類・釜D類のうち川原町口式のもの(414・453)などであり、量的には少ない(第48図下段)。

D区F層、G区灰色粘土層から出土した土器の大半は古相のものと考えている(第49・50図)。壺は多様な形態があり、受口状口縁となる壺A類は、口縁部に櫛もしくは篋状の工具で矢羽状の文様を施し頸部には凸帯を2条巡らすものがある(369・370)。壺C・E・G類は頸部から肩部にかけて太い櫛状工具

弥生時代後期 (⑥層・23層・SD50・51・83-3層ほか)



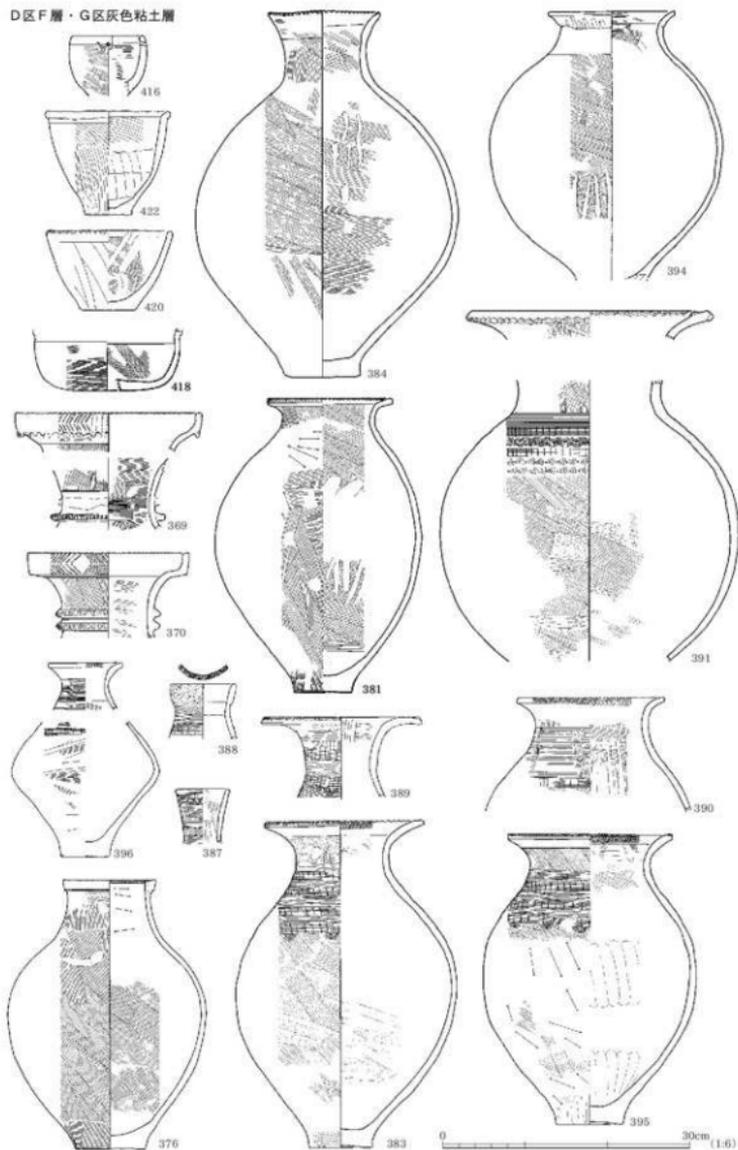
弥生時代中期後半 (D区D層、SD50・51、23層、G区F層ほか)



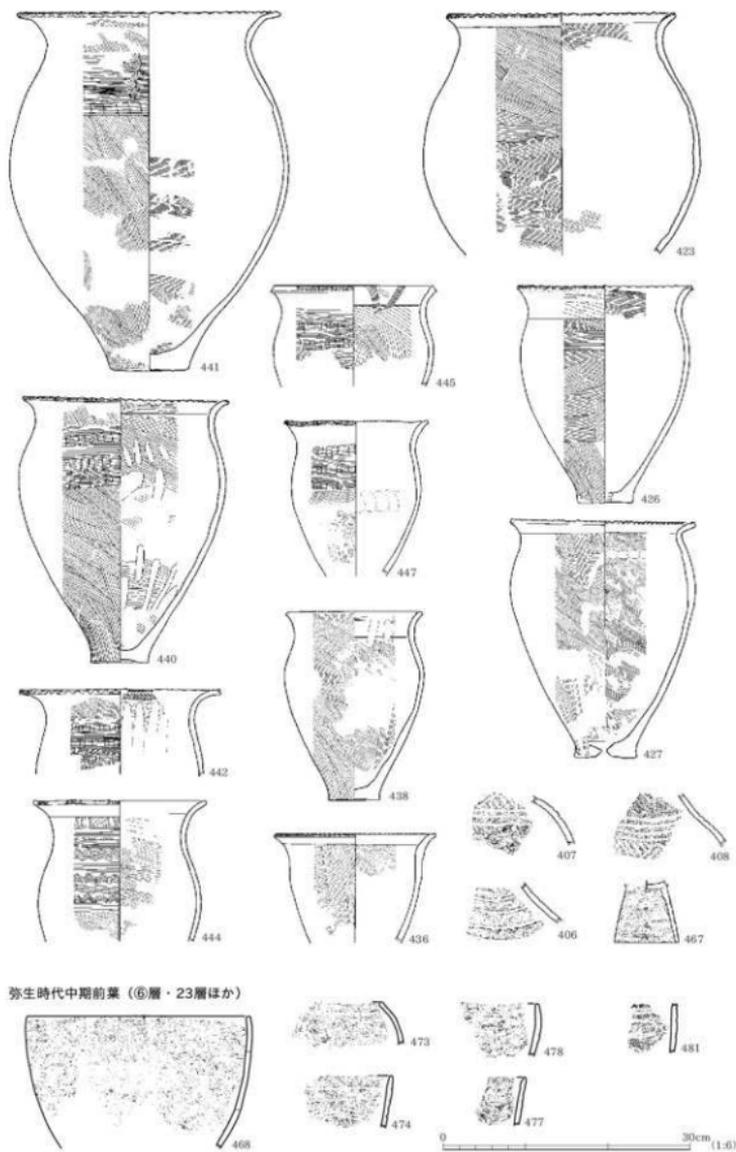
0 30cm (1/6)

第48図 大武遺跡出土土器・陶磁器(4)

D区F層・G区灰色粘土層



第49図 大武遺跡出土土器・陶磁器(5)



第50図 大武遺跡出土土器・陶磁器 (6)

で直線文や廉状文・扇状文を施すものが多く(383・389・395・396)、コンパス文風の波状文(391)や擬流水文(390)がある壺E類、口縁部を直線文・波状文・廉状文などで飾る壺F類(387)も確認できる。信州系の土器には新諏訪町Ⅲ式と考える壺(406～408)があり、段を持つ口縁部に斜縄文がある388も新諏訪町Ⅲ式の影響を受けた土器の可能性もある。

これらの土器群に若干先行する土器が5BグリッドSD50-3層、9Bグリッド23層、⑥層などから散発的に出土している(第50図下段)。468は在地の縄文時代晩期の深鉢に系譜が求められるもので、櫛目による波状文・LR縄文・条痕文が確認できる。473～481は「広義の磨消縄文」を行う東北系の土器で、474～480は西麻生～今和泉式、473は南御山Ⅱ式の筒形土器である。これらの土器は縄文時代中期前葉に位置づけられる土器群と考える。

4) 縄文時代晩期～中期

Ixa～c層の直下に位置するX層は青灰色シルト層、その下位のXIa・XIb層は黒褐色ビート層で、出土遺物は少量である。XIb層からXIIIe層にかけて縄文時代晩期から後期の土器が出土している(図版38～42)。XIb層は灰黄褐色の粘土層で縄文時代晩期中葉(主に大河C1式)、XIIIa層は黒色のビート層で縄文時代晩期前葉(主に大河B～BC式)、XIIIb層は褐色粘土層で縄文時代後期後葉(主に瘤付土器)、XIIIe層は褐色粘土層で縄文時代後期中葉(加曾利B式土器)が出土しており、既存の土器編年と土層の堆積状況は調和的である。

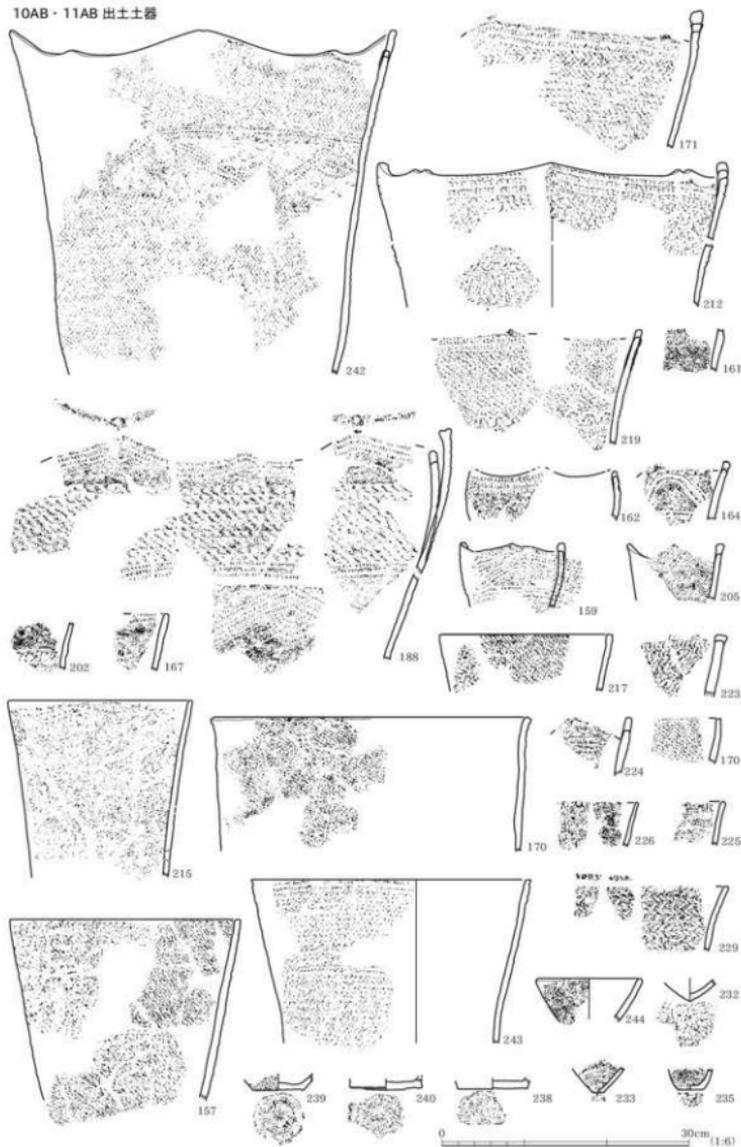
XIIIe層の下位に位置するXIV層は青灰色のシルト・砂礫層で、下位を中心に縄文時代前期前葉の土器が相当量出土した。ただし、これは本来XVc層に含まれていた土器で、XIV層堆積時に混入したものとする。XVa層は谷中央付近や10・11AB周辺で部分的に検出できた土層で縄文時代中期後葉(大木9a式、図版37・281～286)の土器が比較的まとまって出土した。11A13・18でXVa層掘削中に検出したSK97の年代を示している。なお、縄文時代中期前葉の土器(図版37・276～280)もI区を中心にXVa層～XVc層から散発的に出土している。

5) 縄文時代前期

XVc(XV)層は炭化物を多量に含む褐色粘土層で縄文時代前期前葉の土器が大量に出土した。XVc層出土土器は出土地点により時期差があるものと考えている。最も新しい土器群は10・11ABのXVc層ほかから出土した土器で(第51図)、胴部に稜・凸帯を持たず、口脣部は方形、口縁端部や胴部を巡る爪形文は半載竹管を用いるものが多く、口脣部に爪形文を施すものは少ない。口縁端部や胴部に複数条の爪形列をめぐらす場合、爪形の方向は同一の方向を向くものが半数近くを占める。文様帯の文様は半載竹管や円形竹管を用い顔歯状文や連結文、コンパス文を行うものが確認できる。地文が斜縄文や非結束羽状縄文のものは、太い原体が用いられることが多い。

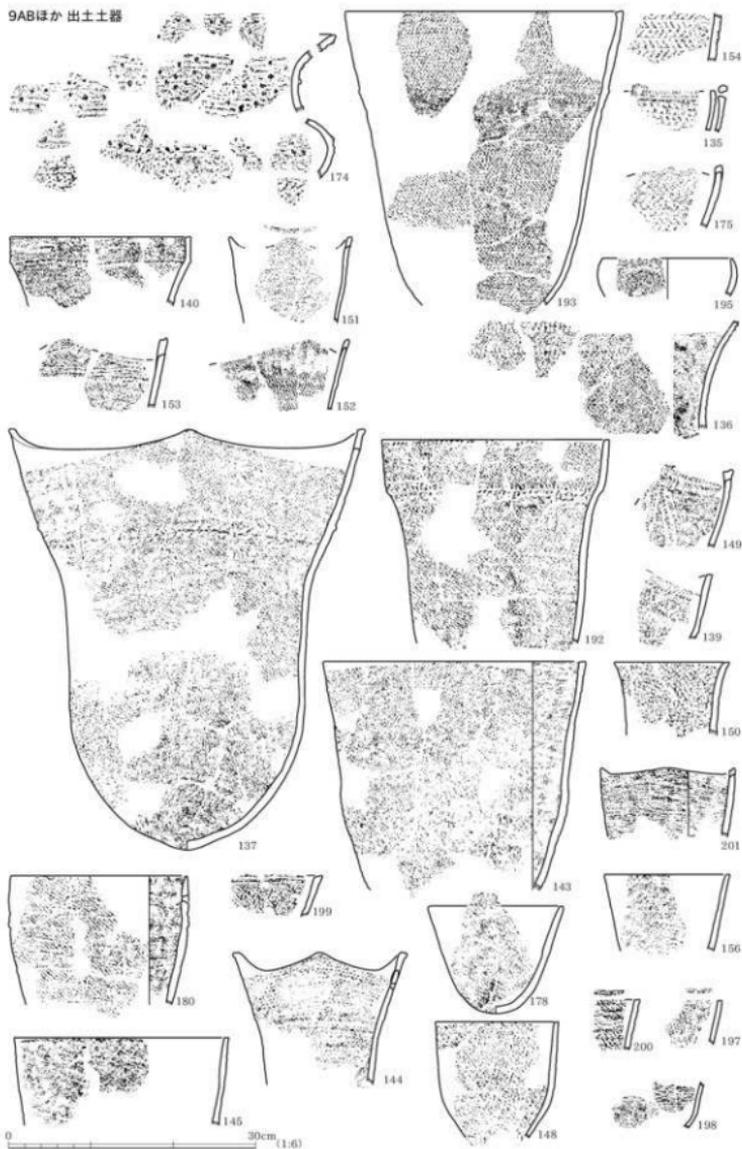
9ABのXVc層ほか出土土器は(第52図)、これに先行する土器群と考える。胴部に稜・凸帯を持ち、口脣部は内反りとなるものが一定量確認できる。口脣部・口縁端部や胴部を巡る爪形文に半載竹管を用いるものは少なく、複数条の爪形列をめぐらす場合、爪形の方向は矢羽状となるものが多数を占めるが、同一の方向を向くものも一定量見られる。文様帯の文様は半載竹管や円形竹管を用いた「S」字状文やコンパス文を行うもの、無文のままとするものほか、小瘤状の粘土塊の貼付けと細かな刻みを持つ小隆帯で顔歯状文・蕨手状文を組み合わせた複雑な文様を施すもの(174)が確認できる。

10AB・11AB 出土土器



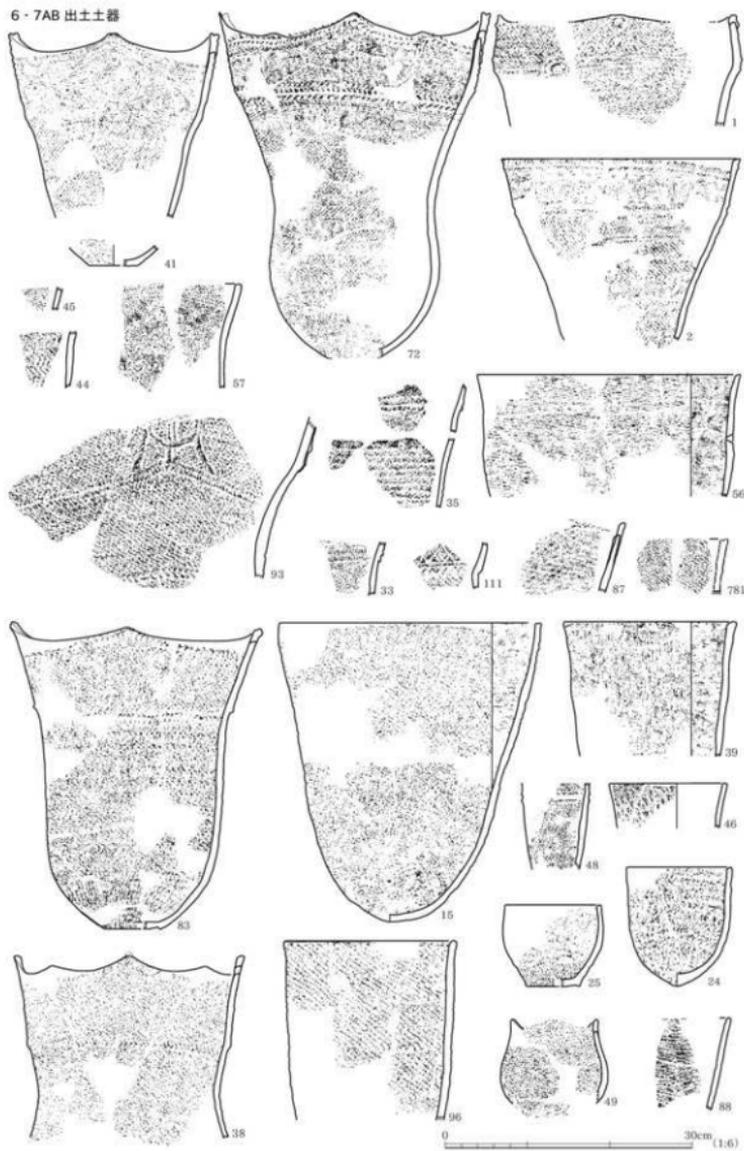
第51図 大武遺跡出土土器・陶磁器(7)

9ABほか出土土器



第 52 図 大武遺跡出土土器・陶磁器 (8)

6・7AB 出土土器



第53图 大武渡跡出土土器・陶磁器(9)

6・7ABのXVc層ほかから出土した土器は(第53図)、大武遺跡から出土した土器のなかで最も古い土器群と考える。胴部に稜・凸帯を持ち、口唇部は内反りとなる深鉢のほか、体部の開きが少ない筒状の深鉢、底部が尖底となる砲弾系の深鉢なども確認できる。口唇部から口縁端部、胴部の稜・凸帯に2～3条の爪形文が巡るものが多く、爪形の方向は矢羽状となるものが多数を占める。爪形の原体は半載竹管を用いるものはほとんどない。文様帯の文様は燃系側面・爪形・陰帯などを用いた獣手状文が確認できるほか、半載竹管を用いた波状文も確認できる。

なお、A～G区のXVc層からは、量は少ないが十三菩提式頃の土器群(図版36 267～270)、I区のXVc層からは諸磯B式頃の土器群(図版36 263～266)が出土している。縄文時代前期後葉から縄文時代中期後葉にかけて大武遺跡とその周辺は断続的に利用されていた可能性が高い。

B 主要土器群と既存の編年案の対応関係

SX88出土土器(第45図4段目)は黒色土器杯の形態や遺跡から出土している須臾器(684・729)の形態から考えて田嶋編年[1996]の4様式Ⅱ期を中心とする時期と考える。

SK49・95出土土器(第45図最下段)は「ハ」字状に広がる脚を持つ土師器高杯、中膨らみで屈折脚の土師器高杯(673・675)が確認できるが、土師器杯は未確認である。こうした特徴は田嶋編年[1996]の3様式Ⅰ期の特徴である。

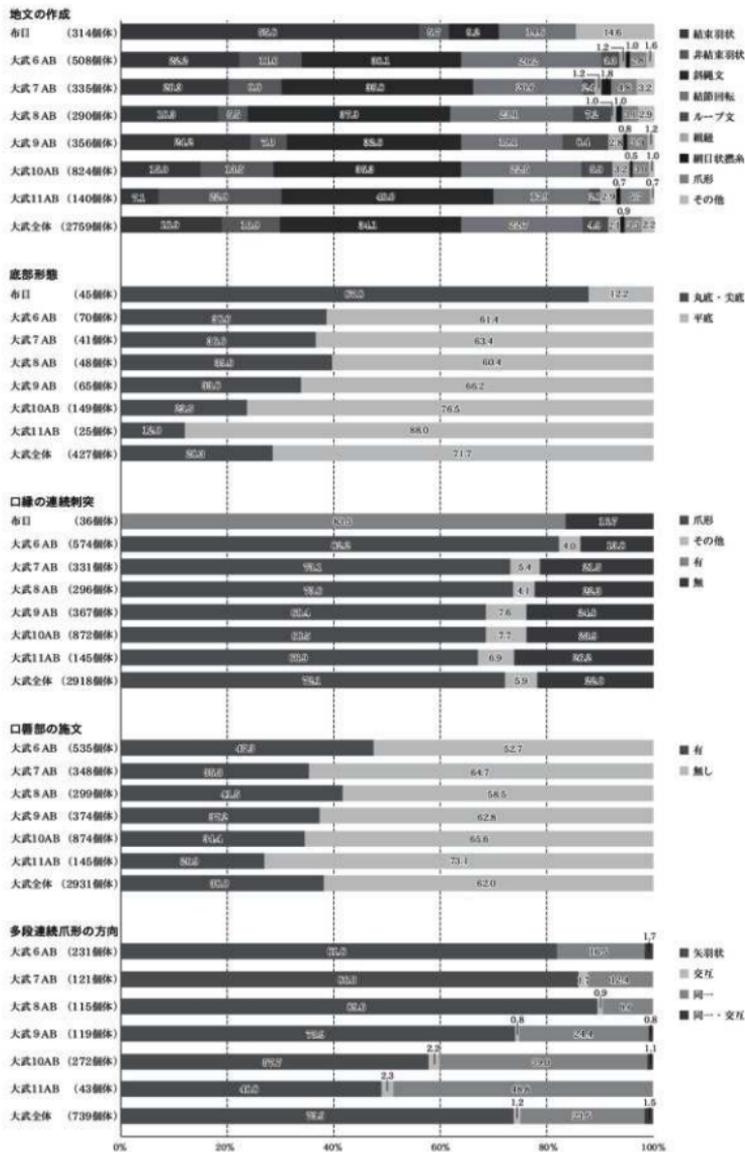
20層・21層・SK85出土土器(第46図上段)は釜C3類(652・676)が釜の主体を占めることから滝沢編年[2005]の9・10期を中心とする時期の土器群と考える。共存した壺M類(654)、鉢D・E類(685・686・687)もこの時期のものとして問題ない。

SK70出土土器、SD50・83-1層出土土器(第46図中段)のうち、631は口縁端部に幅の狭い面を持つ釜C2類であるが、面の幅は狭く胴部も球形に近い。滝沢編年[2005]の8期を中心とする時期と考える。東海系と在地系の折衷と考える高杯H類(640)、東海系の壺が在地化した壺O類(637)、有段部の屈曲が緩い壺L類(657)も当期のものとして問題ない。

23層、SD50・51・83-3層出土土器(第46図下段・47図)の釜はC2類(498・505)が主体を占め、C1類(569・497)・A類(485・487)・B類(564・489)・H類(495)も確認できる。大型の器台C類(558)、有段部が明瞭な高杯B類(541)、口縁部に擬凹線が巡る壺L類(593・520)のほか、東海系の高杯C類(552・619)、高杯F類(617)、壺P類(600)、やや小型化した器台A類(625)、口縁部に擬凹線が巡る小型の有段口縁壺L類(539)などがある。弥生時代後期以来の伝統的器種と新来の器種が混在する様相は滝沢編年[2005]の5・6期を中心とする時期と考える。

第48図上段土器は釜はC1類が主体を占め(565・646・647・719)、C2類(671・720)、近江系のE類(566・591・592)がこれに加わる。胴部はやや細身で倒卵形のものも多く、肩部に列点が巡るものもある(671・720)。高杯はA類が主体を占め、口縁部の立ち上がりが急である(614)。器台は大型のA類(622・624)、口縁部の立ち上がりが急なC類(643)が確認できる。滝沢編年[2005]の1期新から2期古を中心とする時期と考える。

D区F層・G区灰色粘土層の主体的土器群(第49・50図)は、文様に斜行短線文がほとんどみられず、直線文・波状文・塵状文・扇状文のほか擬流水文がみられること、櫛目が太いこと、新諏訪町Ⅲ式から栗林Ⅰ式の古段階の土器が出土していることから考え田中・丸山編年[1999]の1期に先行する可能性が高い。包含層出土資料であり、ある程度の時間幅はあると考えるが、笹澤編年[2012]との対応関係で



第54図 大武遺跡XV層出土土器の諸属性

場名/ブライド	6AB XV層出土土器		7AB XV層出土土器		8AB XV層出土土器		9AB XV層出土土器		10AB XV層出土土器		11A XV層出土土器		その他 XV層出土土器		XV層合計		
	個体数	比率 (%)	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率	個体数	比率 (%)	
計数状況	58	11.4	33	6.9	13	2.5	47	13.2	58	7.0	6	0.4	40	13.1	355	9.2	
組束形別縄文・縄束形別縄文	113	43.1	68	29.3	53	20.3	87	31.4	87	31.4	10	4.1	2.9	68	27.2	8.6	33.2
縄束形別縄文	59	21.0	6	1.8	1	0.3	8	2.2	18	2.2	0	0.0	1	0.3	44	1.6	
縄束形別縄文	159	11.6	33	9.9	16	5.3	25	7.0	111	13.5	32	22.9	25	8.2	301	10.9	
縄束形別縄文	153	30.1	120	35.8	110	37.9	116	32.6	291	35.3	56	40.0	96	31.4	942	34.1	
縄束形別縄文	133	26.2	69	20.6	67	23.1	68	19.1	185	22.5	25	17.9	80	26.1	627	22.7	
縄束形別縄文	6	1.2	4	1.2	3	1.0	2	0.6	26	3.2	4	2.9	5	1.6	58	2.1	
縄束形別縄文	17	3.3	8	2.4	21	7.2	30	8.4	49	5.9	3	2.1	8	2.6	136	4.9	
縄束形別縄文	2	0.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.1	0	0.0	0	0.0	3	0.1	
縄束形別縄文	5	1.0	6	1.8	3	1.0	3	0.8	4	0.5	1	0.7	2	0.7	24	0.9	
縄束形別縄文	5	1.0	6	1.8	3	1.0	3	0.8	4	0.5	1	0.7	2	0.7	24	0.9	
縄束形別縄文	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	2	0.0	
縄束形別縄文	0	0.0	2	0.6	0	0.0	0	0.0	1	0.1	1	0.7	2	0.7	6	0.2	
縄束形別縄文	1	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	
縄束形別縄文	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	
縄束形別縄文	1	0.2	0	0.0	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	
縄束形別縄文	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	
縄束形別縄文	1	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.0	
縄束形別縄文	14	2.8	16	4.8	9	3.1	14	3.9	25	3.0	8	5.7	6	2.0	92	3.3	
縄束形別縄文	2	0.4	3	0.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	1.0	
縄束形別縄文	1	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	0.1	0	0.0	0	0.0	2	0.1	
縄束形別縄文	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	5	1.6	6	0.2	
縄束形別縄文	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	0.4	0	0.0	1	0.3	4	0.1	
縄束形別縄文	0	0.0	1	0.3	1	0.3	1	0.3	1	0.3	0	0.0	0	0.0	3	0.1	
縄束形別縄文	0	0.0	4	1.2	7	2.4	1	0.3	1	0.1	0	0.0	3	1.0	16	0.6	
縄束形別縄文	508	100	305	100	290	100	356	100	824	100	140	100	306	100	2759	100	
縄束形別縄文	27	38.6	15	36.6	19	39.6	22	33.8	35	23.5	3	12.0	0	0	121	38.3	
縄束形別縄文	43	61.4	26	63.4	29	60.4	43	66.2	114	76.5	22	88.0	29	100	306	71.7	
縄束形別縄文	70	100	41	100	48	100	65	100	149	100	25	100	29	100	427	100	
縄束形別縄文	251	47.3	123	33.3	124	41.6	130	37.2	301	34.4	30	26.9	135	37.9	1114	38.0	
縄束形別縄文	282	52.7	225	64.7	175	58.5	235	62.8	573	65.6	106	73.1	221	62.1	1817	62.0	
縄束形別縄文	535	100	348	100	299	100	374	100	874	100	145	100	356	100	2931	100	
縄束形別縄文	472	82.2	242	73.1	218	73.6	251	68.4	597	68.5	97	66.9	227	68.2	2104	72.1	
縄束形別縄文	23	4.0	18	5.4	12	4.1	28	7.6	67	7.7	10	6.9	15	4.5	173	5.9	
縄束形別縄文	79	13.8	71	21.5	66	22.3	88	24.0	208	23.9	38	26.2	91	27.3	641	22.0	
縄束形別縄文	574	100	331	100	296	100	367	100	872	100	145	100	333	100	2918	100	
縄束形別縄文	189	81.8	104	86.0	103	89.6	88	73.9	157	57.7	21	48.8	98	78.4	753	73.9	
縄束形別縄文	0	0.0	2	1.7	1	0.9	1	0.8	6	2.2	1	2.3	1	0.8	12	1.2	
縄束形別縄文	28	16.5	15	12.4	11	9.6	29	24.4	106	39.0	21	48.8	19	15.2	239	23.5	
縄束形別縄文	4	1.7	0	0.0	0	0.0	1	0.8	3	1.1	0	0.0	7	5.6	15	1.5	
縄束形別縄文	231	100	121	100	115	100	119	100	272	100	43	100	125	100	1019	100	

第24表 大武遺跡XV層出土土器の属性性

は1期に平行する資料が一定量存在するものと考えている。

10・11A・B XVc 層出土土器(第51図)は円形竹管・半截竹管・爪形による「S」字状文や鋸歯状文・連結文があり、地文に幅の広い原体を用いた斜縄文・羽状縄文を施す土器がある(188・242)。また口縁部の断面形は方形、口唇部に爪形を施すものは少なく、口縁部や胴部に複数段の爪形列がある場合は爪形の方向が同一のものが多い(171・219・162・205・243など)。底部は平底のものが大半で、外面は中央部まで文様を充填する(238・239・240)。こうした特徴は小熊編年[2008]の新段階1期に對比できるもので、胎内市二軒茶屋遺跡出土の主体的な土器群とほぼ同一の時期の資料と考える。

6・7A・B 出土土器(第53図)には燃糸側面圧痕や爪形・円形竹管による蕨手状文がある土器(1・41・57・72など)が確認でき、小熊編年[2008]の古段階に平行する土器群である。小熊氏が古段階1期の資料とした新潟市西蒲区(旧巻町)布目遺跡出土土器と類似した土器群と考える。ただし、布目遺跡に比べ、丸底・尖底の土器が少ないこと、布目遺跡出土土器の地文は、結束羽状縄文が大半を占めるが、6・7A・B 出土土器は、結束羽状縄文は10%程度であることなどを考えると、布目遺跡出土土器に若干後続する資料の可能性が高い。

9A・B ほか XVc 層出土土器は、6・7A・B XVc 層土器と10・11A・B XVc 層出土土器の中間的な土器様相である。小熊編年[2008]の古段階2期と新段階1期に位置づけられるものと考えている。粘土塊貼り付けによる瘤状の小突起を多く持つ土器(174)が確認できる点もこのことを補強する。

時期	土器編年	大式遺跡主要土器		
前期	布目式・新谷式	占1 占2 新1 新2	6・7A・B XVc 層 9A・B ほか XVc 層 10・11A・B XVc 層	
	後葉	1	I区 XVc 層 A～G区 XVc 層(一部)	
		2		
		3		
		4		
	中期	前葉	1	I区 XVa～XVc 層 ↓
			2	
			3	
			4	
			5	
6				
中葉		1	A～G区 XVa 層	
		2		
後葉		1	A～G区 XVa 層	
		2		
後期	前葉	1	A～G区 XVe 層	
		2		
		3		
	中葉	1	A～G区 XVe 層	
		2		
	後葉	1	A～G区 XVe 層	
		2		
	縄文時代	前葉	1	A～G区 XVe 層
			2	
			3	
4				
中葉		1	A～G区 XVe 層	
		2		
後葉		1	A～G区 XVe 層	
		2		
弥生時代		前半	1	第51 図下段土器群 ↓ D区 F層・G区 灰色粘土土器 ↓ D区 F層・G区 灰色粘土土器(一部) ほか
			2	
	後半	1	第48 図上段土器群	
		2		
	古墳時代	3 様式	1	↑ SD50・51・84-3 層 23 層 ↓ SD50・84-1 層・SK40 20 層・21 層・SK85 ほか ↓ SK89・SK49(一部) ↑ SK88 ↓
			2	
			3	
			4	
			5	
			6	
7				
8				
9				
古墳時代	前期	1	↑ SK89・SK49(一部) ↑ SK88 ↓	
		2		
	中期	1	↑ SK89・SK49(一部) ↑ SK88 ↓	
		2		
	後期	1	↑ SK89・SK49(一部) ↑ SK88 ↓	
		2		
	古墳時代	4 様式	1	↑ SK89・SK49(一部) ↑ SK88 ↓
			2	
			3	
			4	
5				
6				
7				
8				

第25表 編年対応表

2 石器・石製品

弥生時代中期の管玉工程品

本遺跡から出土した完成品のうち、細型のもは52点（破損品を含む）で、長さ4.2～10.6mm・直径1.7～3.2mm、平均値は長さ6.7mm・直径2.4mmである。第26表は近隣の代表的な玉作遺跡と比較したものであるが、本遺跡例は長さが短いことがうかがえる。本遺跡では長さ10.6mmのものが最長であるが、4～8mmが分布の中心である（第55図右上）。特に平田遺跡との比較では、単純な平均値比較はできないにしても、その差は2倍近くになると推測できる。しかし、そのような短い個体でも両面穿孔のものが少なからず認められる。

また、細型に加えて太型・極太型のもがわずかながら出土している。太型は2点あり、直径7.1mm（500）と7.7mm（499）である。極太型は多角柱研磨段階のもの（468）1点のみの出土であるが、直径は19.7mmを測る。現在のところ最大とされているのは、石川県八日市地方遺跡〔宮田2003〕から出土した直径20mm、長さ43mmのものである。本遺跡468は完成品でないことから、現在の直径よりも一回り小さくなると判断できる。極太型は県内では初例と考えられる。完成品は近畿・東海に分布し、製作工程品は滋賀～石川県・奈良県で出土している〔河村2010〕。

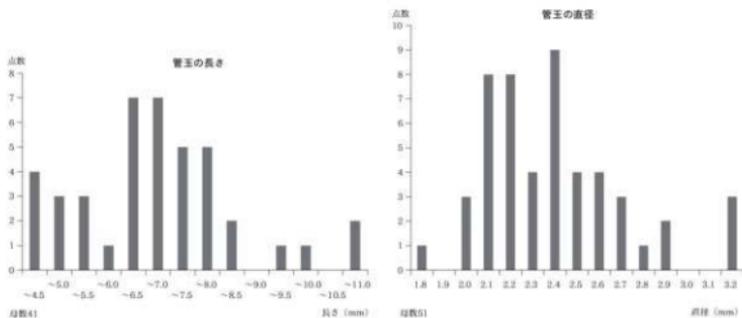
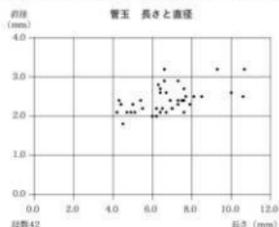
角柱状剥片については、幅が約4～29mmと幅広い。肉眼観察により便宜的に大と小の2つに分類したが、分布図を作成してみると厳密な区分は難しい（第56図1）。図では幅12mmと22mm付近にわずかな空白が認められ、3つのサイズに分類できる可能性も否定できない。また、側面剥離のものは、数が

遺跡名	長さ	直径	孔径	点数
大 武	6.8 (4.2～10.6)	2.4 (1.7～3.2)	1.4*	41
吹 上	8.1 (3.5～20.2)	2.6 (1.8～3.4)	1.2	77
平 田	(9.0～14.7)	(2.1～3.0)		5
八日市地方	8.4	3.0	1.5	111

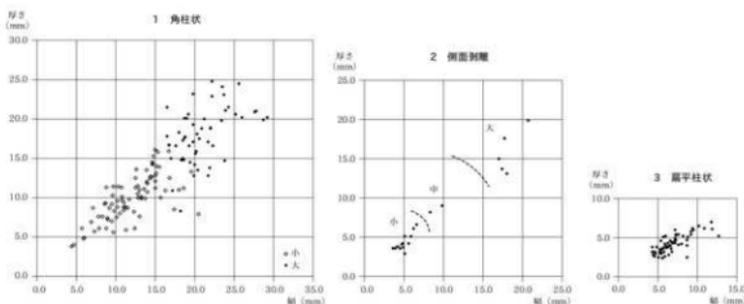
* 吹上遺跡は遺物観察表より作成。長さは最大長と書かれているため、完成品ではない可能性もある。

大武遺跡の孔径は報告遺物完成品・仕上げ研磨段階6点の平均である。

第26表 管玉完成品のサイズ比較



第55図 管玉完成品のサイズ



第56図 管玉工程品のサイズ

少ないため断定はできないが、3つ(幅5mm前後・8～10mm¹⁾・17～21mm)に区分できる可能性が高い(第56図2)。完成品の直径は、前述したように3つに分類できることから、これに対応する可能性が高い。

打面転位については、2辺以上の施溝分割痕が認められるものを観察したところ、宮田[2003]の分類に従うと板状・角柱状ではIa1類がやや多く、扁平柱状ではIa1類とIa2類が同程度見られる。しかし、この分類に当てはまらないものも少なからず存在する。工程が決まったものではなく、多様であることがここからもうかがえる。まだ観察・分析の余地があり、角柱状切片の分類や打面転位については今後の課題としたい。

弥生時代中期の勾玉工程品

本遺跡から出土したヒスイ勾玉のうち、穿孔段階のものから完成品は8点で、長さは7.1～14.5mmと幅広いが、長幅分布では数が少ないこともあり、明確に区分できない。挟りを入れる段階とD字状の段階では長さ18～27mmの大型品が認められ、大型品も製作していたことは明白である。形態はすべて半環状である²⁾。

本遺跡における製作工程は、施溝分割痕を有するものがわずかに7点のみであることから、直接打撃により分割されたと判断できる。施溝分割は緑色部分を獲得するためのことであり[富山1988]、本遺跡でも507や516のように、D字状に整形する前から緑色部分を多く残そうとする意識が認められるものもある。しかし大多数は白色を呈する個体である。吹上遺跡でも、本遺跡同様に半環状勾玉の大半が白色部分を多く含むものであり、笹沢氏はその理由として、東日本の消費遺跡で出土する勾玉も白色部分を多く含むものが一般的である[廣瀬2006]ことから、「需要に対して緑色部分に大きくこだわる必要がなかったため、施溝分割が積極的に使用されなかった」と指摘されている。また、施溝分割を多用しないことについて「北陸でも東よりの地域に共通した現象であるかもしれない」とも述べられているが[笹澤2006]、緑色凝灰岩製管玉についてもヒスイ同様、東にいくほど施溝分割の比率が低くなることは、原産地との距離といった理由以外に何か関連があるのかもしれない。

- 1) 大型の完成品は石材の質感から搬入品または時期の異なるものの可能性もあり、3つのサイズを本遺跡で製作していたとは断定できない部分もある。
- 2) ヒスイの定型勾玉も1点出土している(567)が、濃緑色を呈し質感が全く異なることから、半環状勾玉と同時期に本遺跡で製作されたものではないと判断し、ここには含めていない。

縄文時代～弥生時代中期における石器石材の変遷

本遺跡では縄文時代前期前葉・縄文時代後晩期・弥生時代中期、大きく区分して3時期の石器がそれぞれ多量に出土しており、石材組成の変遷を考える上で良好な資料である。

まず剥片石器（玉作遺物を除く）からみると、縄文時代前期前葉では凝灰岩・頁岩・珪質頁岩・流紋岩が多く、石材構成は下越地方の遺跡と近似する。良質な珪質頁岩製の「松原型石匙」が成品で搬入されていること、黒曜石はわずかながらも県内で類例の少ない特徴的な外見のものであることなどから、東北地方や新潟県北部地域との関係が色濃く、石材あるいは石器を比較的遠距離から調達していたことがわかる。縄文時代後晩期では、珪質頁岩・頁岩・流紋岩・凝灰岩が多く、前期と比較的近似した様相を示すが、搬入品はほとんど認められない。弥生時代では、様相が一変し流紋岩が過半数を占め、すべての器種で最多となる。2番目に多い石材は、流紋岩とは大差があるものの頁岩となることもすべての器種で共通しており、縄文時代との違いがうかがえる。このことから石材は近隣で採取可能な石材を使用していたことがわかる。

磨製石斧については、縄文時代前期前葉では製作拠点のひとつとして盛んに製作されるが、石材は蛇紋岩で、糸魚川地域から搬入している。蛇紋岩は弥生時代まで引き続き利用される。縄文時代後晩期では、蛇紋岩のほかに砂岩製の定角式のものも一定量認められる。弥生時代では、いわゆる大陸型磨製石斧の搬入品が特徴的で、閃緑岩製の太型蛤刃石斧・扁平片刃石斧と緑色凝灰岩製の柱状片刃石斧が挙げられる。閃緑岩は北信地方の可能性が高い。緑色凝灰岩は、ほかの石器や玉作工程で認められるものとは色調や質感が異なり、原産地は現在のところ特定できていない。

礫石器については、器種ごとに述べる。磨石類では、3時期とも安山岩が過半数を占め、次いで硬砂岩・花崗岩の順となる。比率は縄文前期前葉で花崗岩が少し高い程度で、ほぼ同じ様相と言える。石錘で安山岩が約半数を占める点では3時期とも共通するが、縄文時代では砂岩・凝灰岩、弥生時代では凝灰岩・硬砂岩・砂岩と若干の差が表れる。砥石は砂岩が主体で凝灰岩が一定の比率を占め、3時期とも同様である。縄文時代後晩期においては、砂岩と凝灰岩の2種類しか認められない。

最後に石製品についてであるが、石製品は、特に時代時期によって異なるものであることから、ここではそれぞれの石製品の石材について述べるにとどめる。

縄文時代前期前葉においては、塊状耳飾や玉類がある。石材は糸魚川地域の滑石であるが、石核が非常に少ないことから素材剥片や成品・未成品として搬入されたと考えられる。縄文後晩期では石製品の出土は非常に少ない。琥珀の原石が1点出土したが、岐阜県瑞浪産の可能性が高いとの分析結果が出ている。弥生時代中期においては緑色凝灰岩管玉とヒスイ勾玉の生産拠点となる。緑色凝灰岩は佐渡、ヒスイは糸魚川地域からの搬入であろう。当該期には本遺跡のほか、吹上遺跡や下谷地遺跡といった大規模な玉作遺跡の存在が知られているが、原産地から離れた地域へこれだけの数量が運搬され玉類の製作が行われていたことには、どのような背景があったのか興味深いところである。また、石剣・石包丁・不明石製品の石材である黒色頁岩・粘板岩については、搬入品と考えられるが原産地の特定には至っていない。特に石剣は、希少な遺物である上に鎬を有する優品であることから、西日本からの流れも想像できるが、推測にとどまる。今後の課題としたい。

3 木製品・漆製品

縄文時代～古代の器種による用材傾向・樹種選択

掲載遺物625点のうち、スギまたはスギと推測されるものは364点にのぼり、58%という高率を占める。本州日本海側は、弥生時代から古代にかけて、最も優先する樹種がスギということであり〔鈴木2012〕、多用されるのは当然のことと言える。スギは刳物桶や槽、田下駄をはじめ形代・箸・指物・部材など様々な器種に使用されている。

その他の樹種は比較的器種が限定されるものも多い。まず、農耕土木具のうち鎌・鋤・整杆についてはコナラ属（アカガシ亜属、コナラ節、クスギ節）にほぼ限定される。武器・武具では、弓はイヌガヤ、盾はモミ属、剣把はカヤである。弓以外については、県内はもとより近県でも出土例は少ないことから、近畿地方などの傾向を見ると、盾＝モミ属とはほぼ限定されるほど樹種が限られているようである。容器の中では、高杯がトチノキ、刳物桶と槽、指物はスギである。トチノキは、中部日本海側では古墳時代までは定量を占める樹種で、特に弥生時代後期から古墳時代においてはスギに次いで2番目に多い樹種であるという〔久田2012〕。いずれの器種も、定型化した樹種選択から逸脱するものはないと言えよう。

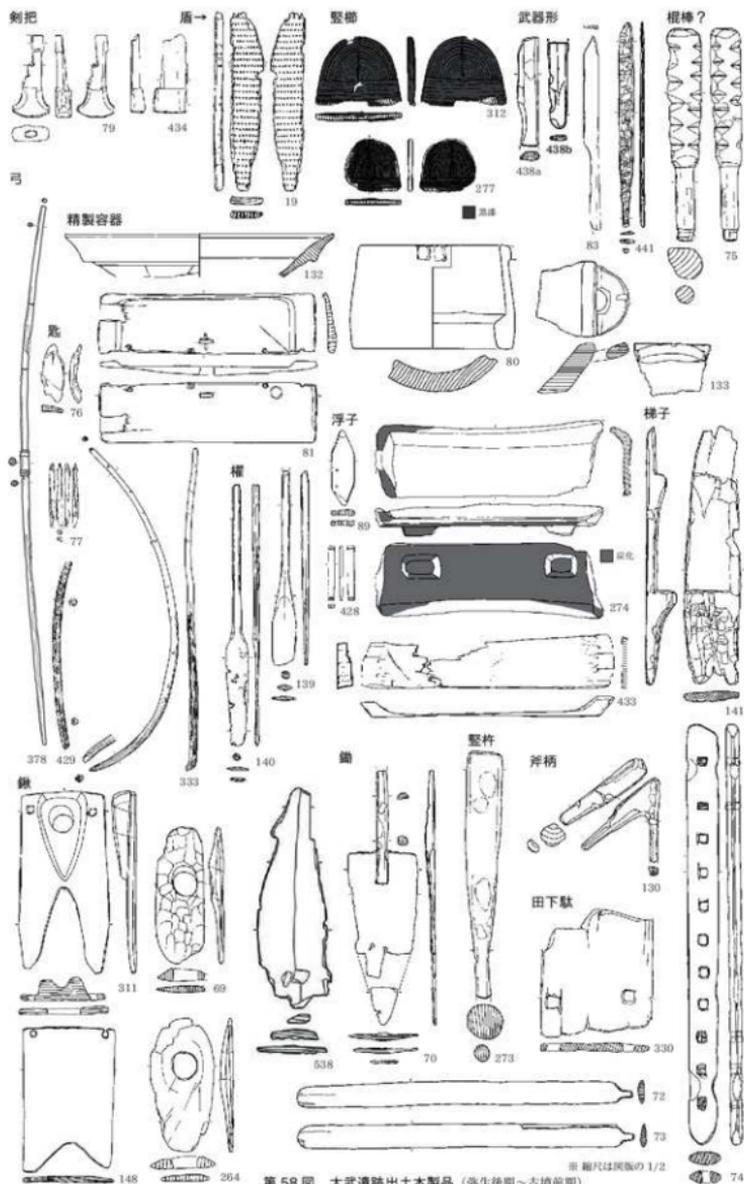
古墳時代早期～前期の剣把について

本遺跡からは希少な木製品が出土しているが、中でも剣把は特筆されるものである。弥生時代から古墳時代にかけての鉄製刀剣については、豊島直博氏の論考がある。これまでの研究は、鉄剣本体のみ、あるいは剣把の材質ごとに行われてきたが、それら全体を見通した分類と編年を構築している〔豊島2005〕。「二枚合わせ式」、「鹿角Y字式」、「一本造り式」、「四枚合わせ式」の4つに分類し、各型式の年代や分布について考察されているが、本遺跡79が分類される「一本造り式」は、把縁の端面から茎挿入穴をあける「把縁穿孔型」と、端面以外に把頭や把間の側面からも茎挿入穴をあける「多方向穿孔型」に細分されており、79は把縁が欠損しているものの把間の側面に孔が認められることから、「一本造り多方向穿孔型」となる。類例としては、広島県国司池の内遺跡、兵庫県養久山1号墳、福岡県那珂遺跡、福岡県朝倉高見遺跡が挙げられる（第57図）。本遺跡と全く同じ形態のものは見られない。前三者は墓からの出土で、養久山1号墳については、櫛形の前方部を有する初期古墳である。また、那珂遺跡の南方150mにも同形態の初期古墳（那珂八幡古墳）が存在する。那珂遺跡自体も国内最古の弥生時代環濠集落が検出され、巴形銅器の鋳型が出土するなど、弥生時代から古墳時代にかけて福岡平野の拠点集落のひとつである〔長家・榎本1999〕〔久住2012〕ほか。

「一本造り多方向穿孔型」剣把の時期は、



第57図 「一本造り多方向穿孔型」の把を装着した鉄剣
〔豊島2005〕より転載・改変



第 58 図 大武遺跡出土木製品 (弥生後期～古墳前期)

弥生時代終末から古墳時代前期に位置づけられており、分布は、弥生時代では北部九州から瀬戸内地域と千葉県のみで数も少ないが、古墳時代前期になると北部九州から会津地域まで分布が広がるといえる。79が出土したSD47は古墳時代早・前期の遺構であり、所属時期・分布とも合致する。

弥生時代後期～古墳時代前期における木製品の組成について

弥生時代後期から古墳時代前期に属する主な木製品を第58図に示す¹⁾。県内で現在のところ類例の少ない、あるいは存在しないものとしては、〈武器・武具〉剣把・盾、〈服飾具〉笠、〈祭祀具〉武器形、〈食事具〉匙、〈容器〉高杯・蓋?・把手付容器・脚付盤、〈建築部材〉梯子などがある。一般的なものは〈工具〉斧柄、〈農耕土木具〉鎌・泥除け・鋤・竪杵・田下駄、〈運搬具〉櫓、〈漁撈具〉浮子、〈武器〉弓のほか、用途不明の部材が多数出土している。前者の希少な木製品の出土から、本遺跡の階層性はある程度高いものと推測できるが、このような出土遺物から集落の階層性を分類した論考がある〔樋上2004・2012〕。

樋上氏は弥生時代から古墳時代早期の集落を3つの階層に分類され、第58図の「まつりの道具(上位)・「首長の所有物(上位)」と「遠隔地の生産物」を有する遺跡(集落A)、「まつりの道具(下位)」・「首長の所有物(下位)」と「近隣の生産物」を有する遺跡(集落B)、日常生活の道具と在地の生産物のみを有する遺跡(集落C)としている。

本遺跡では、骨角製品・銅製品・鉄製品は出土していないが、それ以外の遺物では、日常生活の道具に加えて「上位」の遺物が出土している。また、本遺跡と一連の関係性を有する奈良崎遺跡では、弥生時代後期に属する大型の円溝墓3基と古墳時代前期の円墳2基が検出され、円墳からは、小型仿製鏡(擬文鏡)が出土している。仿製鏡は前期後半に比定されることから、本遺跡の出土遺物と時期が若干異なる可能性はあるが、本遺跡が樋上氏の「集落A」に分類できることを後押しする要素と言える。本遺跡から約2kmの距離に国史跡の八幡林官衙遺跡があり、古代において要衝の地であった和島地域が、前代においても同様に重要な地域であったことがうかがえる。

4 遺跡の動向

大武遺跡の土層の特徴や遺構、出土遺物、プラントオパール分析・珪藻分析・花粉分析などから推測できる大武遺跡周辺の環境〔古環境研究所2000〕、奈良崎遺跡の調査成果〔春日¹⁾2002、丸山2001・2002〕をまとめると第27表となる。

I期(縄文時代前期前葉)・II期(弥生時代中期)の遺物は、A～G区で検出された埋没谷から大量に出土しており、調査区の近隣に地域の中核となるような大規模集落が存在した可能性が高い。調査区南西に所在する「大武畑」と呼称された地点が、その有力な候補地と考える。

IVa期(滝沢1～4期)以降は、大武遺跡と奈良崎遺跡が相互に関連しながら変化していったことが推測できる。当期以降の両遺跡の盛衰はおおむね一致するが、IVa期・IVb期(滝沢編年5期～11期)・VIb期(14世紀後半～16世紀)のように、大武遺跡と奈良崎遺跡の丘陵上の様相が補完的(一方が拡大し、もう一方が縮小する)時期も確認できる。

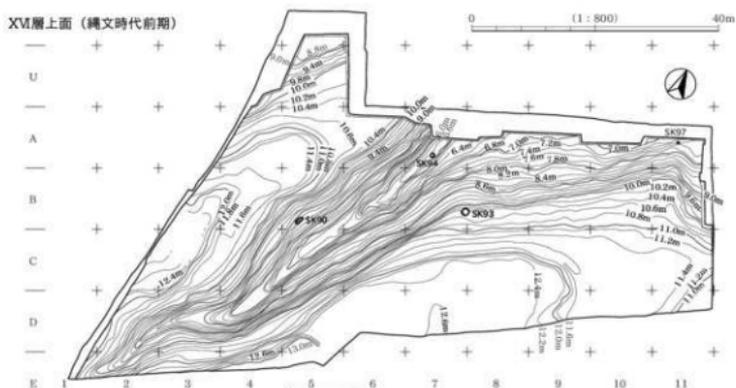
1) 第58図のうち、311・312は古墳時代中期の土坑(SK95)、330は後期の遺構(SX88)から出土したものである。

時期 区分	時代	順位	遺構・土層の特徴など	土壌	自然科学的分析の評価 (註1)	人工遺物の地層など	遺構・遺物の イメージ	遺構・遺物の イメージ	古墳の 趣向
Vb 期	後 中 世	Ⅰa層	遺構なし	Ⅰa層(遺構なし)	Ⅰa層(遺構なし)	Ⅰa層(遺構なし)	●	●	南北部の風瓦を初層として表層(遺構)に山成が 集められる。丘腹西側は土壌草・草が作られる。
		Ⅰb層	遺構なし	Ⅰb層(遺構なし)	Ⅰb層(遺構なし)	Ⅰb層(遺構なし)	●	●	丘腹東側を中心に遺構が作られる。
Va 期	新 中 世	Ⅱa層	遺構なし	Ⅱa層(遺構なし)	Ⅱa層(遺構なし)	Ⅱa層(遺構なし)	●	●	壱六層(古式V期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅱb層	遺構なし	Ⅱb層(遺構なし)	Ⅱb層(遺構なし)	Ⅱb層(遺構なし)	●	●	壱七層(古式V期)が作られる。小塚遺構 集積。
IV 期	古 代	Ⅲa層	遺構なし	Ⅲa層(遺構なし)	Ⅲa層(遺構なし)	Ⅲa層(遺構なし)	●	●	壱八層(古式IV期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅲb層	遺構なし	Ⅲb層(遺構なし)	Ⅲb層(遺構なし)	Ⅲb層(遺構なし)	●	●	壱九層(古式IV期)が作られる。小塚遺構 集積。
III 期	中 古 代	Ⅳa層	遺構なし	Ⅳa層(遺構なし)	Ⅳa層(遺構なし)	Ⅳa層(遺構なし)	●	●	壱十層(古式III期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅳb層	遺構なし	Ⅳb層(遺構なし)	Ⅳb層(遺構なし)	Ⅳb層(遺構なし)	●	●	壱十一層(古式III期)が作られる。小塚遺構 集積。
II 期	古 代	Ⅴa層	遺構なし	Ⅴa層(遺構なし)	Ⅴa層(遺構なし)	Ⅴa層(遺構なし)	●	●	壱十二層(古式II期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅴb層	遺構なし	Ⅴb層(遺構なし)	Ⅴb層(遺構なし)	Ⅴb層(遺構なし)	●	●	壱十三層(古式II期)が作られる。小塚遺構 集積。
I 期	新 中 古 代	Ⅵa層	遺構なし	Ⅵa層(遺構なし)	Ⅵa層(遺構なし)	Ⅵa層(遺構なし)	●	●	壱十四層(古式I期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅵb層	遺構なし	Ⅵb層(遺構なし)	Ⅵb層(遺構なし)	Ⅵb層(遺構なし)	●	●	壱十五層(古式I期)が作られる。小塚遺構 集積。
0 期	古 代	Ⅶa層	遺構なし	Ⅶa層(遺構なし)	Ⅶa層(遺構なし)	Ⅶa層(遺構なし)	●	●	壱十六層(古式0期)が作られる。小塚遺構 集積。
		Ⅶb層	遺構なし	Ⅶb層(遺構なし)	Ⅶb層(遺構なし)	Ⅶb層(遺構なし)	●	●	壱十七層(古式0期)が作られる。小塚遺構 集積。

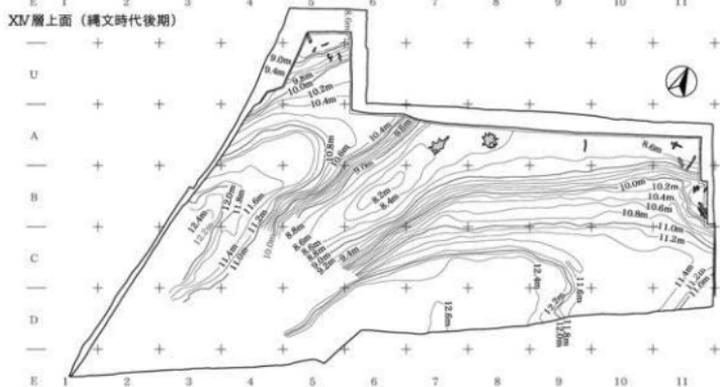
第27表 大武遺跡の動向

4 遺跡の動向

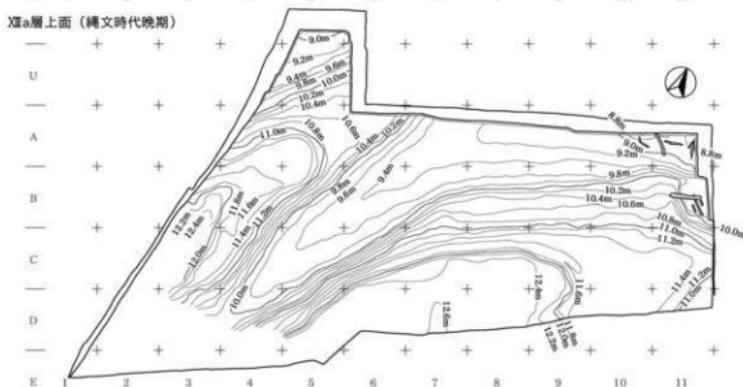
XV層上面 (縄文時代前期)



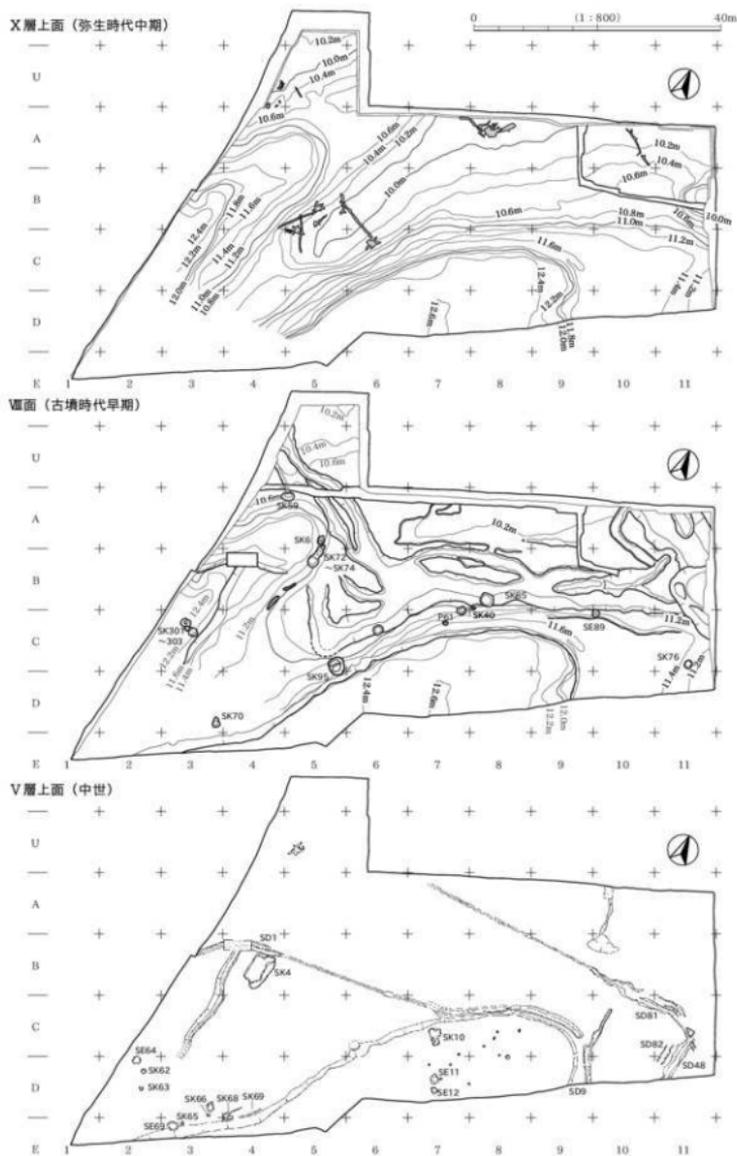
XV層上面 (縄文時代後期)



XVa層上面 (縄文時代晩期)



第59図 A～G区の変遷(1)



第 60 図 A～G 区の変遷 (2)

要 約

- 1 大武遺跡は、国道116号和島バイパスの建設に伴い、1994年度から1997年度（平成6年～平成9年度）の4年間発掘調査を実施した。
- 2 大武遺跡は長岡市島崎字大武1910ほかに所在する。遺跡は丘陵裾付近の沖積地に所在し、旧状は水田であった。
- 3 調査の結果、縄文時代前期以前に開析された埋没谷が検出され、縄文時代前期前葉から中世の遺物が層別的に出土した。本報告書はこのうち縄文時代前期前葉から古代の遺構・遺物を報告した。中世の遺構・遺物については2000年に報告している。
- 4 遺物は縄文時代前期前葉、縄文時代前期後葉～後期初頭、縄文時代後期中葉～晩期中葉、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代後期、古代（8・9世紀）、中世（13世紀～16世紀）の遺物が出土した。このうち縄文時代前期前葉、弥生時代中期、古墳時代早期～前期の遺物が特に多く出土した。
- 5 遺構は、縄文時代前期の土坑2基、縄文時代中期の土坑2基、弥生時代後期～古墳時代後期の井戸1基・土坑12基・水田跡・溝・河道、古代の木製品集地点1箇所を検出した。
- 6 縄文時代前期前葉の土器については、既存の編年を参考に、出土地点を基に3時期の変遷案を示した。
- 7 弥生時代中期～古墳時代後期の主要土器群について編年的位置を検討した。
- 8 石器・石製品の出土点数は17,000点以上におよぶ。縄文時代前期前葉では「松原型」石匙が特徴的であり、成品として東北地方から搬入されたものであることから、東北地方と強い結びつきがうかがえる。また糸魚川産の蛇紋岩を使用して磨製石斧の生産も行われていた。
- 9 弥生時代中期では緑色凝灰岩製管玉とヒスイ製勾玉の生産が盛んであったことがうかがえる。特にヒスイの出土総重量は17kg超であり、全国でも最多と考えられる。
- 10 木製品も多数出土したが、希少なものが各時代で認められる。縄文時代後～晩期では、添え木式固定の石斧柄・脚付盤、古墳時代前期では高杯や劍把・盾が挙げられる。
- 11 縄文時代後期中葉の琥珀原石については、理化学的分析の結果岐阜県瑞浪産であることが明らかとなった。
- 12 漆製品では縄文時代前期前葉の層から漆紐が出土した。約6,600年前という全国的にも古い貴重なものであり、非常に高い技術がうかがえる資料として特筆される。そのほか、縄文時代後～晩期の層から藍胎漆器・漆塗腕輪が1点ずつ出土している。
- 13 建物跡は検出されなかったが、調査区南西に位置する大武畑に、各時代の居住域が存在した可能性が高い。

引用・参考文献

- 相田泰臣 2004 「越後における古墳時代後期を中心とした土器の様相 - 頸城・魚沼地域の土師器を中心として-」『新潟考古』第15号 新潟県考古学会
- 赤堀 仁 2008 「十三菩提土器」『総覧 縄文土器』小林建雄編 アム・プロモーション
- 赤堀英三 1929 「石器研究の一方法 - 石織に関する二、三の試み-」『人類学雑誌』第44巻3号 東京人類学会
- 秋田かな子 2008 「加曽利B式土器」『総覧 縄文土器』小林建雄編 アム・プロモーション
- 浅野良治 2003 「日本海沿岸における翡翠製勾玉の生産と流通」『磐城楼』六一書房
- 石原正敏・寺崎裕助 1999 「第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第3項 前期」『新潟県の考古学』高志書院
- 出雲崎町 1988 『出雲崎町史』資料編1 原始・古代・中世・近世
- 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学 - 出土木製品用材データベース』海青社
- 小熊博史 1994 「布日遺跡」『巻町史』資料編1 考古 巻町
- 小熊博史 2003 「新潟県荒沢遺跡出土の赤色顔料とその利用形態」『旧石器考古学』64 旧石器文化談話会
- 小熊博史 2008 「布日式・新谷式」『総覧 縄文土器』小林建雄編 アム・プロモーション
- 小田由美子 2006 『越巻4号塚 谷地製鉄跡 大慶寺御経塚』新潟県埋蔵文化財調査報告書第158集 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小都 隆 1976 「広島県国司池の内遺跡出土の鉄剣」『考古学雑誌』第62巻3号 日本考古学会
- 小野 昭・小熊博史 1987 「巻町布日遺跡の調査」『巻町史研究』巻町
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』16 新潟県考古学会
- 春日真実²⁰⁰⁶ 2000 『大武遺跡I(中世編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実²⁰⁰⁷ 2001 『梯子谷遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実²⁰⁰⁸ 2002 『奈良崎遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2003 「縄文時代の琥珀玉 - 製作過程と原産地推定の問題-」『新潟考古学談話会会報』第27号 新潟考古学談話会
- 加藤 学²⁰⁰⁴ 2006 『大角地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第173集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2009a 「北陸地方における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾 - 新潟県糸魚川市大角地遺跡の分析から-」『日々の考古学2』東海大学文学部考古学研究室編 六一書房
- 加藤 学 2009b 「新潟県大角地遺跡における縄文時代早期末葉～前期前葉の玦状耳飾 - 製作過程の復原を中心に-」『玦状耳飾(玦飾)の製作技術からみた玉文化交流』日本玉文化研究会長野大会実行委員会
- 加藤 学 2009c 「第V章2 石器・石製品」『野地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第196集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2010 「新潟県における玦状耳飾」『玉文化』第7号 日本玉文化研究会
- 川崎 保 2004 「玦状耳飾」『季刊考古学』第89号 雄山閣
- 河村好充 2010 『倭の玉器 - 玉つくりと倭国の時代-』青木書店
- 北野博司 1988 「重ね焼の観察」『辰口西部遺跡群1』石川県立埋蔵文化財センター
- 久住猛雄 2012 『那珂60 - 那珂遺跡群第125次の調査-』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1155集 福岡市教育委員会

- 小池義人²²⁾ 2000 『真山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第96集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林圭一 2008a 『大洞 BC 式に固有の「入組三叉文高坏」について』『研究紀要』第5号 山形県埋蔵文化財センター
- 小林圭一 2008b 『磨付土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 古環境研究所 2000 「2 大武遺跡におけるプラントオーバー分析」 「3 大武遺跡における珪藻分析」 「4 大武遺跡における花粉分析」 「大武遺跡Ⅰ (中世編)」新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 齋藤基生 1979 「第5章 遺物 3 石製品」 「第6章 総括 3 玉作の工具 / 4 玉作の手順」 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 笹澤正史 2006 「第Ⅵ章 4 節 土器・石器・特殊遺物について」 『吹上遺跡』新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会
- 笹澤正史 2012 「下谷内遺跡の集落構造について」 『新潟考古』第23号 新潟県考古学会
- 笹沢 浩 1996 『新撰訪町式』・『栗林式土器』 『日本土器辞典』大川 清・鈴木公雄・工業書通編 雄山閣出版株式会社
- 佐原 真 1964 「第四章 石器・土製品・骨角貝製品・鉄製品 第1節 石器」 『雲出』 詫間町文化財保護委員会
- 縄文セミナーの会 1994 『早期終末・前期初頭の諸問題』
- 縄文セミナーの会 2006 『前期前葉の再検討』
- 鈴木俊成 1992 「縄文時代の石鏝について」 『新潟考古』第3号 新潟県考古学会
- 鈴木俊成 1996 「第Ⅳ章 2C 石器」 『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成 1998 「新潟県の蛇紋岩製磨製石斧について 一 縄文時代前半期の生産遺跡と消費遺跡を中心に」 『研究紀要』第2号 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴木俊成 1999 「第2章 縄文時代 第5節 2項 早期から晩期の石器組成」 『新潟県の考古学』高志書院
- 鈴木三男 2012 「Ⅲ 日本列島の森林植生と木材利用 8章 出土木製品利用樹種の時代的変遷」 『木の考古学 一 出土木製品データベース』海育社
- 関根慎二 2008 「諸磯式土器」 『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 高橋 保²³⁾ 1979 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19集 新潟県教育委員会
- 高橋 保²⁴⁾ 2008 『寺前遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第189集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 1992 「第Ⅳ章 4B 石器類 / 6C 石器について」 『五丁歩遺跡・十二木遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 高橋保雄²⁵⁾ 2002 「第Ⅴ章 5 石器・石製品」 『元屋敷遺跡Ⅱ (上段)』奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書XIV 新潟県朝日村教育委員会・新潟県
- 高橋保雄²⁶⁾ 2005 『北野遺跡Ⅱ (上層)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第141集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2005 「土器の分類と年代」 『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』第1分冊 (発表要旨・紙上発表) 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2011 「阿賀北における古墳時代前期の土器について (上) 一 器種分類と基準資料の提示」 『三面川流域の考古学』第9号 奥三面を考える会
- 滝沢規朗 2012 「阿賀北における古墳時代前期の土器について (下) 一 細別器種分毎の変遷について」 『三面川流域の考古学』第10号 奥三面を考える会
- 田嶋明人 1996 「北陸の6世紀～7世紀初頭の土器 (第4様式)」 『日本土器辞典』大川 清・鈴木公雄・工業書通編 雄山閣
- 田辺昭三 1981 『須志器大成』角川書店

- 谷藤保彦 1988 『ニツ木式土器』『群馬県の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 谷藤保彦 2004 『中国の瓚と列島の装身具』『環日本海の玉文化の始源と展開』敬和学園大学人文科学研究科
- 田中 和之 2008 『羽状縄文系土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 田中 靖 1995 『門新遺跡』和島村文化財調査報告書第4集 和島村教育委員会
- 田中 靖 2003 『北野丸山遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第15集 和島村教育委員会
- 田中 靖 2005 『八幡林遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 和島村教育委員会
- 田中 靖・丸山一昭 1999 『第3章 第2節 土器 第2項 弥生中期後半』『新潟県の考古学』高志書院
- 寺崎裕助 1999 『新潟県における縄文時代前期の土器 - その標識資料と編年 -』『縄文土器論集』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助・高橋 保 1999 『第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第4項2 編年と地域性』『新潟県の考古学』高志書院
- 寺泊町 1991 『寺泊町史』資料編1 原始・古代・中世
- 寺村光晴¹³⁾ 1999 『土手上遺跡』寺泊町教育委員会
- 田海義正 2000 『第V章 2 石器』『平田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第98集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 土橋由理子¹³⁾ 2009 『西郷遺跡・大蔵遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第200集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 富山正明 1988 『下屋敷遺跡 堀江十楽遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告書第14集 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 長家 伸・榎本義綱¹³⁾ 1999 『那珂22 - 那珂遺跡群第62・63次調査報告 -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第597集 福岡市教育委員会
- 豊島直博 2005 『弥生時代の鉄製刀剣』2002年度～2004年度科学研究費補助金(若手B)研究成果報告書『弥生・古墳時代における鉄製武器の生産と流通に関する研究』(課題番号14710287) 独立行政法人奈良文化財研究所
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27冊
- 奈良国立文化財研究所 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所 史料第36冊
- 樋上 昇 2004 『集落・居館・都市的遺跡と生活用具 一中部』『考古資料大観』10 小学館
- 樋上 昇 2012 『VI 木工技術と木材・製品の流通 31章 木製品の流通と社会階層』『木の考古学 - 出土木製品データベース』海青社
- 秦 昭繁 1977 『松原』置賜考古学会
- 秦 昭繁 1991 『特殊な刺繍技法をもつ東日本の石造 - 松原型石造の分布と製作時期』『考古学雑誌』第76巻第4号 日本考古学会
- 馬場伸一郎 2006 『第VI章第1節 吹上遺跡の玉作りについて』『吹上遺跡』新潟県上越地域振興局・上越市教育委員会
- 久田正弘 2012 『V 遺跡出土木製品の種類と地域性 17章 中部日本海側』『木の考古学 - 出土木製品データベース』海青社
- 廣瀬時習 2006 『弥生時代玉類の地域性』『季刊考古学』第94号 雄山閣
- 福高貴子 2003 『第VI章 第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討』『八日市地方遺跡I』石川県小松市教育委員会
- 藤沢良祐 2002 『瀬戸・美濃大室編年の再検討』『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要』
- 藤田 綱・長谷川 正 1996 『和島村の地質』『和島村史』資料編I 自然・原始古代・中世・文化財
- 藤田富士夫 1971 『耳栓の起源について』『信濃』23-4 信濃史学会
- 藤田富士夫 1983a 『块状耳飾』『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣
- 藤田富士夫 1983b 『块状耳飾の変遷に関する一試論 - 特に北陸及びその周辺地域を中心として -』『北陸の考古学』石川県考古学研究会誌 第26号 石川県考古学会

- 分水町 2004 『分水町史』資料編Ⅰ 考古・古代・中世
- 前山精明 1994 『新谷遺跡』『巻町史』資料編Ⅰ 考古 巻町
- 松尾 宏¹³⁶⁾ 1998 『頼田高見遺跡Ⅲ 栗山遺跡Ⅳ』甘木市文化財調査報告書第44集 福岡県甘木市教育委員会
- 水澤幸一 2005 『越後の中世土器』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一¹³⁶⁾ 2003 『二軒茶屋遺跡』中条町文化財調査報告書第27集 中条町教育委員会
- 丸山一昭 1998 『松ノ脇遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第6集 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2001 『奈良崎遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第10集 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2002 『奈良崎遺跡Ⅱ』和島村埋蔵文化財調査報告書第11集 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2003 『妙満寺遺跡』和島村埋蔵文化財調査報告書第13集 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2005 『門新遺跡 谷内地区Ⅱ』和島村埋蔵文化財調査報告書第17集 和島村教育委員会
- 丸山一昭 2013 『浦反甫東遺跡の調査』『新潟県考古学会第25回大会 研究発表会発表要旨』新潟県考古学会
- 丸山一昭¹³⁶⁾ 2007 『山田郷内遺跡』長岡市教育委員会
- 宮田 明 2003 『第Ⅳ章第2節 八日市地方遺跡における菅玉製作の技法的特徴』『八日市地方遺跡Ⅰ』（第1分冊 本文・写真図版編）石川県小松市教育委員会
- 宮田 明 2003 『第Ⅲ章 石器 / 第Ⅳ章 石製品 / 第Ⅵ章 玉類』『八日市地方遺跡Ⅰ』（第2分冊 遺物報告編）石川県小松市教育委員会
- 森 幸彦 2008 『大木9・10式土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 八重樫由美子 2004 『新潟県寺泊町屋敷塚遺跡発掘調査報告書』寺泊町教育委員会
- 山内幹夫 2008 『織維土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 アム・プロモーション
- 山賀和也 2012 『川東遺跡』長岡市教育委員会
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類編一』太宰府市の文化財第49集 福岡県太宰府市教育委員会
- 与板町 1999 『与板町史』通史編 上巻 自然・原始古代・中世・近世
- 和島村 1996 『和島村史』資料編Ⅰ 自然・原始古代・中世・文化財
- 和島村 1997 『和島村史』通史編
- 渡邊尚紀 2000 『大武遺跡周辺の開発』『大武遺跡Ⅰ（中世編）』新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 渡邊明和 1999 『第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第6項 晩期 前葉・中葉』『新潟県の考古学』高志書院
- 渡邊裕之 1999a 『第2章 縄文時代 第2節 縄文土器 第5項 後期 中葉・後葉』『新潟県の考古学』高志書院
- 渡邊裕之 1999b 『第3章 弥生時代・古墳時代 第2節 土器 第1項 弥生前期・中期前葉』『新潟県の考古学』高志書院
- 渡邊裕之・坂上有紀¹³⁶⁾ 2010 『立野大谷製鉄遺跡 姥ヶ入製鉄遺跡 姥ヶ入南遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第208集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

土器観察表 凡例

縄文時代前期土器観察表

分類：第11図の分類に一致する。

口縁端部：内反り・方形・丸の3種に便宜的に区分した。

ただし、区分が困難なものも少量存在する。

地文-種類：羽状縄文（結束部強調）・同（片翼状）は小野・小瀬1987の分類に一致する。

口縁施文-口唇：口唇部に文様があるものを○、無いものを×とした。

口縁施文-方向：複数列の爪形があるものについて、矢羽・「丁」字状・同一・交互の4種に分けて記入した。ただし、矢羽と「丁」字状の区別が難しいものが一定量存在する。また、爪形列が1列であっても横位の爪形列を行うものは「横位」と記入した。

胴部区画-方向：口縁施文-方向に同じ。

内面：内面の調整時期（素地の乾燥具合）を知る上で重要と考え、擦痕・平滑・ミガキの3種に区分した。平滑とミガキは区分が難しいものがある。遺存状態の悪い土器のミガキを平滑と記載したものも一定量存在する可能性が高い。

胎土：混入物を主に記載した。織・繊維・英：石英、長石、雲、雲母、白：白色小粒、黒：黒色小粒、灰：灰色小粒、赤：赤色小粒、褐：褐色小粒を略したものである。黒・灰はチャートもしくは硬質の砂岩、赤は赤色のチャートが大半を占めると考えている。褐には焼土粒を一定量含む可能性がある。白は風化した軟質のものが大半であるが、長石・石英が風化したものが相当量存在すると推測している。

色調：農林水産省農林水産化学会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版 標準土色帳』に拠り、煤や黒斑の無い所の色調を記載した。

縄文時代中期土器観察表

胎土・色調：縄文時代前期土器観察表に同じ。

縄文時代後期～晩期土器観察表

分類：第13図の分類に一致する。

内面・胎土・色調：縄文時代前期土器観察表に同じ。

弥生時代中期土器観察表

器形-器種：第14図の分類に一致する。

大きさ（mm）-最大：体部の最大径を記載した。

調整：内面・外面の主要な調整を記載した。口：口縁部、体：体部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。

文様-施文具：文様を施す工具を記載した。櫛：櫛(衝)状工具、篋：篋状工具、棒：棒状工具をそれぞれ略したもの。篋は棒に比べ幅が狭いものを指す。

文様-外面：口縁端部の施文は外面に含めた。

色調・胎土：縄文時代前期土器観察表に同じ。

弥生時代後期～古墳時代土器観察表

器種：第15・16図の分類に一致する。

大きさ（mm）-最大径：体部の最大径を記載した。

調整：内面・外面の主要な調整を記載した。口縁：口縁部、体：体部、杯：杯部、受：受部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。体部は縄文土器の胴部と同義。

色調・胎土：縄文時代前期土器観察表に同じ。

古代土器観察表

調整：内面・外面の主要な調整を記載した。口：口縁部、体：体部、底：底部、外：外面、内：内面、上：上部、下：下部をそれぞれ略したものである。文様がある場合もここに記入した。

胎土：土器の胎土は縄文土器観察表に同じ。須恵器の胎土は以下のとおり。

A 群：石英・長石・雲母など花崗岩起源の大型の鉱物を多く含む粗い胎土。阿賀北地域の須恵器窯の主體的な胎土。

B 群：軟質の白色小粒子を少量含む胎土。きめ細かいB1と、砂質の強いB2の2種がある。後述の有台杯Ⅲ3・無台杯にはB1、その他の器種にはB2が主に用いられる。佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡など佐渡市南西部の須恵器窯の胎土。

C1 群：小型の石英・長石を少量含む比較的精良で粘土質の強い胎土。

C2 群：上越地域では高田平野東側の末野・日向窯跡群で主體的な胎土。他地域では新潟市東部の新津（丘陵）窯跡群、長岡市東部の東山（丘陵）窯跡群でも主體的な態度である。阿賀北の須恵器窯の一部にも見られる胎土。

C3 群：長岡市西部の旧和島村から三島郡部出雲崎町にかけて分布する西古志窯跡群や浪海川流域に点在する須恵器窯に主體的にみられる。

D 群：その他

色調：縄文土器観察表に同じ。

備考：杯蓋の重ね焼きの分類は北野1988に一致。

観察表

縄文時代の前期土器観察表 (1)

報告番号	分類	ブツID	群位	口縁形状	直径 (mm)	文様		胎土	口縁高文		胴高文		内面	底面	底文	土色	備考	
						白土	黒土		文様	文様	口縁	方向						口縁
1	深鉢1 21B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	286	-	文様状高文 幾字文	丸丸 丸丸	高文1列	×	凸帯	高文3列	矢羽	3方弁	-	褐、 灰、 白	10YR7/2 に 近い 黄褐色	
2	深鉢1 21B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	290	-	幾何状高文 平直竹筒	丸丸 丸丸	高文1列	×	凸帯	高文3列	矢羽	平直	-	褐、 灰、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	
3	深鉢1 21B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	70	-	-	丸丸 丸丸	不明	-	不明	-	平直	平直	赤、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	0度多量	
4	深鉢1 1C類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	278	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	無し	-	磨光	-	褐、 灰、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	磨り孔	
5	深鉢1 1C類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	262	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	平帯	高文3列	磨光	磨光	褐、 灰、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色		
6	深鉢1 2C類	6B13-14 6B14-17 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	268	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	凸帯	高文1列	磨光	磨光	褐、 灰、 白	10YR7/3 に 近い 黄褐色		
7	深鉢1 2C類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	210	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	矢羽	凸帯	高文3列	矢羽	平直	褐、 灰、 白	10YR7/2 に 近い 黄褐色	
8	深鉢1 21B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	42	-	-	丸丸 丸丸	不明	-	不明	-	平直	平直	赤、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色		
9	深鉢1 11B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	248	-	-	丸丸 丸丸	不明	-	不明	-	平直	丸	褐、 灰、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色		
10	深鉢1 11B類	6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	272	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	矢羽	無し	-	磨光	赤、 白	10YR5/2 に 近い 黄褐色	磨り孔	
11	深鉢1 21B類	6B14-11 6B14-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	373	-	丸字文 平直竹筒	丸丸 丸丸	高文2列	×	凸帯	高文3列	同	平直	-	褐、 灰、 白	7.5YR5/2 黄褐色	
12	深鉢1 2C類	6B13-18 18A類	XV 内取 分	内取	301	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	矢羽	凸帯	高文3列	同	平直	褐、 灰、 白	7.5YR5/3 に 近い 黄褐色	
13	深鉢1 2C類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	360	-	-	丸丸 丸丸	高文3列	○	矢羽	凸帯	高文3列	矢羽	平直	褐、 灰、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色	磨り孔
14	深鉢1 11B類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	317	306	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	同	無し	-	磨光	赤、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色	
15	深鉢1 21B類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	244	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	同	凸帯	高文1列	磨光	赤、 白	10YR7/1 黄褐色		
16	深鉢1 21B類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	244	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	凸帯	高文2列	同	平直	-	褐、 灰、 白	10YR4/1 黄褐色	磨り孔
17	深鉢1 2C類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	334	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	凸帯	高文2列	同	磨光	赤、 白	10YR5/0 に 近い 黄褐色	口唇付近の 孔痕は 高文列に 内面	
18	深鉢1 2C類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	330	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	×	同	高文4列	同	磨光	赤、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色		
19	深鉢1 2C類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	444	-	丸字文 平直竹筒	丸丸 丸丸	高文4列	○	矢羽	凸帯	高文3列	同	3方弁	褐、 灰、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色	
20	深鉢1 11B類	6B14-19 18A類	XV 内取 分	内取	324	-	コンパス文 平直竹筒	丸丸 丸丸	高文2列	×	同	-	平直	-	褐、 灰、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色		
21	深鉢1 21B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	230	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	不明	-	不明	平直	赤、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色		
22	深鉢1 11B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	127	146	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	同	無し	-	磨光	赤、 白	10YR7/3 に 近い 黄褐色	
23	深鉢1 11B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	115	130	64	-	丸丸 丸丸	高文1列	×	無し	-	平直	平直	赤、 白	10YR7/2 に 近い 黄褐色	
24	深鉢1 11B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	216	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	○	無し	-	磨光	-	褐、 灰、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	下部磨に 比べ上部 磨削し	
25	深鉢1 2C類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	304	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	矢羽	凸帯	高文3列	同	磨光	赤、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	
26	深鉢1 2C類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	284	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	○	矢羽	凸帯	高文1列	磨光	赤、 白	10YR5/2 に 近い 黄褐色		
27	深鉢1 11B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	300	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	×	同	無し	-	平直	赤、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色		
28	深鉢1 2C類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	232	-	-	丸丸 丸丸	高文4列	○	矢羽	凸帯	高文1列	同	3方弁	褐、 灰、 白	10YR5/2 黄褐色	
29	深鉢1 2C類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	268	415	-	-	丸丸 丸丸	高文3列	○	矢羽	凸帯	高文1列	磨光	赤、 白	10YR5/4 に 近い 黄褐色	
30	深鉢1 2C類	6A25- 6B5-10 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	352	-	-	丸丸 丸丸	高文1列	○	凸帯	高文1列	同	磨光	赤、 白	10YR7/4 に 近い 黄褐色		
31	深鉢1 6B5	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	-	-	不明	丸丸 丸丸	不明	-	凸帯	高文1列	同	-	赤、 白	10YR5/3 に 近い 黄褐色		
32	深鉢1 6B5	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	-	-	不明	丸丸 丸丸	不明	-	不明	-	平直	-	赤、 白	10YR4/2 黄褐色		
33	深鉢1 21B類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	376	-	-	丸丸 丸丸	不明	-	不明	-	磨光	-	赤、 白	10YR5/2 黄褐色		
34	深鉢1 1A類	6B5-10 6B5-15 6B5-14 6B17-18 18A類	XV 内取 分	内取	358	-	-	丸丸 丸丸	高文2列	×	凸帯	高文3列	矢羽	平直	-	褐、 灰、 白	10YR5/2 に 近い 黄褐色	

縄文時代の前期土器観察表 (2)

発掘番号	分類	グロッド	群位	口縁形状	直径 (mm)	文様	文様	施文具	施文	胎体	口縁	方向	形状	文様	方向	内面	底面形状	底面	土色	備考			
38	深埋1 1A型	群1-8群	XV	内反り	280	-	-	-	縦筋状施文	L	凡形3列	○	凡形	凡形3列	又短	横紋	-	横	白	10YR7/4 Cに似て黄褐色			
39	深埋1 1A型	群13-14群	XV	内反り	210	-	-	-	波状 斜線文	平直竹管 管	無し	X	-	無し	-	横紋	-	横	白	7.5YR5/2 灰褐色			
40	深埋1 1B型	群13-14群	XV	方形	168	-	-	-	縦筋状施文	L	凡形2列	○	同	-	-	横紋	-	横	白	10YR6/2 灰褐色	縮孔あり		
41	深埋1 1D型	群18-23群	XV	内反り	254	縦字状文	横本筋面(H)	-	非経束状施文	H=L Lは白(非束状)	凡形・凡形3列	○	凡形	凡形2列	又短	平直	平直	横筋(横筋状)	横	白	10YR7/4 Cに似て黄褐色	0段多量	
42	深埋1 1D型	群10群	XV	方形	-	-	-	-	斜線文(黄赤)	H=L Lは白(非束状)	凡形1列	X	-	不明	-	横紋	-	横	白	10YR3/1 黒褐色			
43	深埋1 1D型	群15群	XV	丸形	-	-	-	-	縦筋状施文(凹)	横本筋面(H)	-	-	-	-	-	横紋	-	横	白	10YR3/3 黒褐色			
44	深埋1 1D型	群5群	XVb	-	-	-	-	-	縦字状文	横本筋面(H)	-	-	-	-	-	横紋	-	横	白	10YR5/3 Cに似て黄褐色			
45	深埋1 1A型	群13群	XV	丸形	-	-	-	-	縦字状文	横本筋面(H)	-	-	-	-	-	横紋	-	横	白	10YR5/2 灰褐色			
46	深埋1 1A型	群21群	XV	丸形	138	-	-	-	格子目	平直竹管	無し	X	-	無し	-	横紋	-	横	白	2.5Y5/2 黒褐色			
47	深埋1 1A型	群19群	XV	-	-	-	-	-	波状	平直竹管	不明	-	-	-	-	平直	丸底	横筋文	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
48	小型土器 1D型	群9群	XV	-	-	-	-	-	縦筋状文	凡形(交互)	-	-	-	-	-	凡形2列	平直	-	横	白	10YR4/2 灰褐色		
49	深埋1 1D型	群10群	XV	方形	103	-	-	-	斜字状施文	L	凡形3列	○	又短	無し	-	横紋	-	横	白	10YR5/2 灰褐色			
50	深埋1 1D型	群10群	XV	-	60	-	-	-	凡形(横紋)	L	平直	-	-	無し	-	-	平直	丸底	横筋	横	白	10YR7/2 Cに似て黄褐色	
51	深埋1 1C型	群21-8群	XV	内反り	480	-	-	-	波状施文(結果部施文)	H=L Lは白	凡形3列	○	又短	凡形	凡形3列	又短	平直	凡形(平直)	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
52	深埋1 1C型	群22-8群	XV	内反り	480	-	-	-	波状施文(片黄赤)	H=L Lは白	凡形2列	X	又短	凡形	凡形3列	又短	平直	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
53	深埋1 1C型	群19-8群	XV	内反り	204	-	-	-	縦筋状施文	L	凡形2列	X	凡形	凡形3列	又短	横筋	-	横	白	10YR6/2 灰褐色			
54	深埋1 1A型	群13群	XV	内反り	222	-	-	-	斜線文	L	凡形1列	X	-	無し	-	横紋	-	横	白	10YR7/4 Cに似て黄褐色			
55	深埋1 1C型	群12群	XV	内反り	232	-	-	-	波状施文(結果部施文)	H=L Lは白	凡形1列	X	-	凡形	凡形3列	又短	横筋	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
56	深埋1 1A型	群24-25群	XV	内反り	320	-	-	-	斜字状施文(一葉)	横筋	L	X	-	無し	-	横紋	-	横	白	10YR5/3 Cに似て黄褐色	縮孔あり		
57	深埋1 1D型	群16群	XV	内反り	-	-	-	-	縦字状文	平直竹管・ 波状(交互)	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
58	深埋1 1D型	群18群	XV	内反り	-	-	-	-	縦字状文	平直竹管・ 凡形3列	X	同	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/3 Cに似て黄褐色		
59	深埋1 1D型	群9群	XV	方形	160	-	-	-	横字状文	平直竹管・ 凡形(同)	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/1 黒褐色		
60	深埋1 1D型	群9-21群	XV	丸形	-	-	-	-	横筋面	非経束状施文	H=L Lは白	○	同	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/2 灰褐色		
61	深埋1 1D型	群21群	XV	方形	-	-	-	-	不明	内筋竹管・ 凡形(同)	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/1 黒褐色		
62	深埋1 1D型	群12-17群	XVb	内反り	-	-	-	-	コシハス文	平直竹管	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	2.5Y5/4 Cに似て黄褐色	0段多量	
63	深埋1 1D型	群6-10群	XV	-	-	-	-	-	波状文	平直竹管	不明	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
64	深埋1 1D型	群18群	XV	-	-	-	-	-	-	凡筋状形	凡形	不明	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
65	深埋1 1A型	群13群	XVb	内反り	-	-	-	-	-	凡筋状形	凡形1列	○	-	凡形	凡形3列	又短	平直	-	横	白	10YR6/3 Cに似て黄褐色		
66	深埋1 1D型	群18群	XVb	内反り	-	-	-	-	凡筋	凡形	不明	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/1 7段と同一個体あり		
67	深埋1 1D型	群18群	XV	-	-	-	-	-	凡筋(横紋)	L	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/3 Cに似て黄褐色		
68	深埋1 1D型	群14-18群	XVb	方形	139	-	-	-	縦筋	L	-	-	-	-	-	-	-	-	横	白	7.5YR5/2 Cに似て黄褐色		
69	深埋1 1D型	群17群	XVb	-	-	-	-	-	-	縦筋状形	凡形	不明	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/3 Cに似て黄褐色		
70	深埋1 1D型	群21-8群	XV	-	65	凡筋(非輪 螺状文)	凡筋	-	凡筋状形	凡形	不明	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR7/3 Cに似て黄褐色		
71	深埋1 1D型	群10群	XV	-	60	-	-	-	非経束状施文	H=L Lは白	不明	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR6/2 灰褐色		
72	深埋1 1D型	群22群	XVd	内反り	328	縦字状文	横筋面(H)	-	非経束状施文	H=L Lは白	凡形3列	X	交互	-	-	-	-	-	横	白	10YR7/2 Cに似て黄褐色	0段多量	
73	深埋1 1C型	群21-8群	XVd	丸形	-	-	-	-	波状施文(結果部施文)	H=L Lは白	凡形1列	○	-	凡形	凡形2列	又短	平直	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色		
74	深埋1 1A型	群21-8群	XVd	内反り	158	-	-	-	縦筋状施文	L	無し	X	-	無し	-	横紋	-	横	白	10YR6/4 Cに似て黄褐色			
75	深埋1 1A型	群22群	XVd	方形	150	-	-	-	凡筋状形	凡形	無し	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR3/1 黒褐色		
76	深埋1 1D型	群17群	XVd	-	-	-	-	-	非経束状施文	H=L Lは白	不明	-	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR4/3 Cに似て黄褐色	0段多量	
77	深埋1 1D型	群5群	XV	左反り	-	凡字状文	平直竹管・ 凡筋	-	凡筋	凡形2列	X	同	-	-	-	-	-	-	横	白	10YR3/1 黒褐色		

観察表

縄文時代の前期土器観察表 (3)

発掘番号	分類	グロッド	群位	口縁形状	直径 (mm)		文様		胎文		口縁胎文		胴部胎文		内面	底面形状	底面文様	土色	備考
					口縁	底面	文様	胎文	種類	胎文	種類	文様	方向	形状					
78	深鉢Ⅰ	7A21	XV d	方形														白	7.0335/2 灰黄緑
79	深鉢Ⅰ	7A18	XV d	方形														白	10.934/2 灰黄緑
80	深鉢Ⅰ	7A21	XV d	丸形														白	10.933/3 磁鉄
81	深鉢Ⅰ	7A21-1組	XV d	方形														白	10.935/2 灰黄緑
82	深鉢Ⅰ	7A21	XV d	-	40													白	10.934/2 灰黄緑
83	深鉢Ⅰ	7B1	XVb ~ XV	内径分	302	370												白	7.0336/4 C.04-1磁
84	深鉢Ⅰ	6B10, 7B1-2	XV	内径分	232													白	10.936/3 C.04-1磁
85	深鉢Ⅰ	7B1-2	XV	内径分	265													白	7.0337/4 C.04-1磁
86	深鉢Ⅰ	7B1-2	XV	丸形														白	10.936/3 C.04-1磁
87	深鉢Ⅰ	7B1-2	XV	内径分														白	10.936/3 C.04-1磁
88	深鉢Ⅰ	7B1-2	XV	方形														白	10.936/2 灰黄緑
89	深鉢Ⅰ	7A22- 7B1-2	XV	-														白	7.0338/4 磁鉄
90	深鉢Ⅰ	7A22- 7B1	XVb ~ XV	-														白	10.934/2 灰黄緑
91	深鉢Ⅰ	7B1-2	XV	丸形														白	10.937/2 C.04-1磁
92	深鉢Ⅰ	6B6, 7B1 2-2, 7B1, 7B6	XV	-														白	10.937/3 C.04-1磁
93	深鉢Ⅰ	7A13, 7B1-2	XV	-														白	10.936/4 C.04-1磁
94	深鉢Ⅰ	7B6-1組	XV	内径分	250													白	10.937/3 C.04-1磁
95	深鉢Ⅰ	7A19-1組	XVb	方形														白	10.937/3 C.04-1磁
96	深鉢Ⅰ	7A13	XV	内径分	208													白	7.0337/3 C.04-1磁
97	深鉢Ⅰ	7B6- 8A1	XV	方形	270													白	10.937/3 C.04-1磁
98	深鉢Ⅰ	7A23- 8, 7B7	XV	方形	150													白	10.937/2 C.04-1磁
99	深鉢Ⅰ	7A21	XVb	方形	120													白	10.937/2 C.04-1磁
100	深鉢Ⅰ	7A22	XVb ~ XV	方形	160													白	10.937/1 灰白
101	深鉢Ⅰ	7A23	XV	内径分														白	10.934/2 灰黄緑
102	深鉢Ⅰ	7A13, 7B6	XV	方形														白	10.937/2 C.04-1磁
103	深鉢Ⅰ	7A22	XVb	-														白	10.936/2 灰黄緑
104	深鉢Ⅰ	7B1	XV	方形														白	10.934/2 灰黄緑
105	深鉢Ⅰ	7A15	XVb	方形														白	10.936/2 灰黄緑
106	深鉢Ⅰ	7A22- 7B1-2	XVb ~ XV	方形														白	10.937/2 C.04-1磁
107	深鉢Ⅰ	7A20-1組	XV	方形														白	10.935/2 灰黄緑
108	深鉢Ⅰ	7B1	XVb ~ XV	-														白	10.934/2 灰黄緑
109	深鉢Ⅰ	7A23	XVb	-														白	10.933/1 磁鉄
110	深鉢Ⅰ	7A14	XV	方形														白	10.934/1 磁鉄
111	深鉢Ⅰ	7A20	XVb	-														白	10.934/3 C.04-1磁
112	深鉢Ⅰ	7B2	XVb	方形														白	10.937/3 C.04-1磁
113	深鉢Ⅰ	7A22	XVb	方形														白	7.0334/1 磁鉄
114	深鉢Ⅰ	7B19	XV	内径分														白	10.936/3 C.04-1磁
115	深鉢Ⅰ	7A17	XVb	方形														白	10.937/3 C.04-1磁
116	深鉢Ⅰ	7B1	XV	丸形														白	10.936/3 C.04-1磁
117	深鉢Ⅰ	7A23	XVb	-	20													白	10.937/2 C.04-1磁

縄文時代の前期土器観察表 (4)

発掘番号	分類	グロッド	群位	口縁形状	直径 (mm)		文様		胎文		口縁胎文		胴部胎文		内面	底面	底面文様	出土	色	備考				
					口内	口外	文様	胎文	種類	形状	文様	口内	口外	形状							方向	内容		
118	深埋1	TA15	XV	-		66	-	-	-	矢筒状胎形	胎形	不明	-	-	-	平滑	平底	縄文、片貝、羽目竹管文	縄、瓦、白	10YR6/4 C-65(黄緑)				
119	深埋1	RA16	XV	内径分	218		-	-	-	斜縄文	胎形	胎形2列	○矢筒	凸帯	胎形2列	矢筒	一段筋	-	縄、瓦、白	10YR7/4 C-65(黄緑)				
120	深埋1	BB12	XV	内径分			-	-	-	胎形(矢筒状・内筒付竹管)	胎形	胎形2列	×矢筒	凸帯	胎形3列	矢筒	一段筋	-	縄、瓦、白	10YR7/3 C-65(黄緑)				
121	深埋1	BA25	XV	内径分			不明	横(断面付)	-	-	縄文2列	×	-	平滑	縄文1列以上	-	1字弁	-	縄、瓦、白	10YR6/2 黄灰陶				
122	深埋1	BA16	XV	方形			胎形文字・横(断面付)内筒付竹管	-	-	-	縄文3列	×	-	不明	-	磨孔	-	-	縄、瓦、白	10YR7/3 C-65(黄緑)				
123	深埋1	BA10	XV	方形			胎形文字・横(断面付)内筒付竹管	-	-	半筒竹管・胎形(筒-)	-	半筒竹管・胎形4列	×	平滑	半筒竹管・胎形1列以上	-	磨孔	-	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)				
124	深埋1	BA22	XV	-			胎形文字・横(断面付)内筒付竹管	胎形文字	胎形	胎形	胎形	胎形	-	-	-	不明	-	-	縄、瓦、白	10YR6/2 黄灰陶				
125	深埋1	TA10、RA19-24	XVb、XV	-			胎形文字・胎形(筒-)	胎形文字	胎形	胎形	胎形	胎形	-	-	凸帯	胎形3列	矢筒	平滑	-	縄、瓦、白	10YR7/2 C-65(黄緑)			
126	深埋1	BB13	XV	方形			胎形文字・半筒竹管・胎形(筒-)	-	-	-	胎形2列	○矢筒	-	-	-	-	-	-	縄、瓦、白	10YR6/2 黄灰陶				
127	深埋1	BA25	XV	-			-	-	-	6-7字文	胎形	胎形	-	-	凸帯	縄文(溝)断面付1列	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR7/4 C-65(黄緑)			
128	深埋1	BB8	XV	-			-	-	-	斜縄文・横(断面付)胎形	胎形	胎形	-	-	-	-	-	磨孔	矢筒	胎形(横)胎形、胎形、胎形	縄、瓦、白	2.5Y7/2 黄灰陶		
129	深埋1	BB10	XV	-		90	-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	平滑	胎形(横)胎形、胎形	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)		
130	深埋1	BB5-10、15	XV	-			-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	平滑	胎形(横)胎形、胎形	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)		
131	深埋1	BA17	XV	-		52	-	-	-	矢筒状胎形	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	平滑	胎形(横)胎形、胎形	縄、瓦、白	7.5YR6/6 黄灰陶		
132	深埋1	BA20、BB5	XV	-		60	-	-	-	矢筒状胎形	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	平滑	胎形(横)胎形、胎形	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
133	深埋1	BA15	XV	方	296		-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形2列	○矢筒	凸帯	胎形1列	横位	磨孔	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
134	深埋1	BB17-18、BA13、BA13a	XV	-			[S]字文	半筒竹管・胎形	胎形	胎形	胎形	胎形	-	-	平滑	胎形2列	筒-	磨孔	-	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)			
135	深埋1	BA15	XV	方形			-	-	-	斜縄文・横(断面付)胎形	胎形	胎形1列	○	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR8/1 灰白	磨孔孔	
136	深埋1	BA15、BA11	XV	方形			-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形2列	×	筒-	-	-	-	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)	0段多量	
137	深埋1	BB5-10、BB5-9、10、15	XV	方形	434	520	-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形1列	○	凸帯	胎形2列	筒-	1字弁	矢筒	胎形(横)胎形	胎形、胎形	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
138	深埋1	BB5-10、BA13	XV	内径分	180		-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形1列	×	凸帯	胎形2列	矢筒	1字弁	-	平滑	-	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)		
139	深埋1	BB5-10	XV	方形			胎形文字・横(断面付)	胎形文字	胎形	胎形	胎形1列	-	凸帯	胎形2列	矢筒	1字弁	-	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
140	深埋1	BB5-10、BA13	XV	内径分	214		胎形文字	-	-	矢筒状胎形	胎形	胎形2列	×	矢筒	凸帯	胎形3列	矢筒	1字弁	-	平滑	-	縄、瓦、白	7.5YR7/4 C-65(黄緑)	
141	深埋1	BB4	XV	内径分	265		-	-	-	斜縄文・胎形(筒-)	胎形	胎形2列	×	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/4 C-65(黄緑)	磨孔孔	
142	深埋1	BB8	XV	内径分	250		-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形2列	○矢筒	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/3 C-65(黄緑)		
143	深埋1	BB6	XV	方形	382		-	-	-	斜縄文・胎形(筒-)	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR8/1 灰白		
144	深埋1	BA23-25、BB6-8	XV	内径分	212		-	-	-	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	胎形2列	×	矢筒	凸帯	胎形2列	矢筒	1字弁	-	平滑	-	縄、瓦、白	7.5YR6/2 黄灰陶	
145	深埋1	BB7	XV	左部	260		-	-	-	横位胎形文字(7-8)	胎形	胎形1列	○	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
146	深埋1	BA20、BA22-8	XV	左部	428		横位文	半筒竹管	胎形	胎形文字・胎形(筒-)	胎形	半筒竹管・胎形3列	×	平滑	半筒竹管・胎形3列	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/3 C-65(黄緑)	0段多量	
147	深埋1	BA24	XV	内径分	254.0		-	-	-	斜縄文	胎形	胎形3列	×	筒-	-	-	-	-	平滑	(1字弁)方弁	縄、瓦、白	10YR6/2 黄灰陶		
148	深埋1	BA25	XV	方形	145		-	-	-	斜縄文・胎形(筒-)	胎形	胎形1列	○	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/2 C-65(黄緑)		
149	深埋1	BA25	XV	方形			胎形文字	半筒竹管・胎形	胎形	胎形	胎形2列	○矢筒	不明	-	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/2 C-65(黄緑)		
150	深埋1	BA20-21、24、10P2	XV	内径分	128		胎形文字?	内筒付竹管	内筒付竹管	胎形	胎形2列	○矢筒	無し?	-	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
151	深埋1	BB12	XV	内径分	145		胎形文字	-	-	矢筒状胎形	胎形	胎形2列	○	矢筒	凸帯	胎形2列	矢筒	一段筋	-	平滑	-	縄、瓦、白	7.5YR6/3 C-65(黄緑)	
152	深埋1	BA25、BB4	XV	内径分			胎形文字	-	-	胎形(交互)	胎形	胎形2列	×	矢筒	凸帯	胎形2列	矢筒	平滑	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/2 黄灰陶	
153	深埋1	BB2	XV	内径分			胎形文字	-	-	斜縄文・胎形(筒-)	胎形	横位胎形2列	2	矢筒	半筒竹管・胎形3列	-	磨孔	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/4 C-65(黄緑)		
154	深埋1	BA20	XV	方			胎形文字	半筒竹管・胎形	胎形	胎形	胎形	胎形	-	-	-	-	-	-	平滑	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)	0段多量	
155	深埋1	BA25	XV	方形			胎形文字	半筒竹管	胎形	胎形	胎形	胎形	×	-	不明	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR6/3 C-65(黄緑)		
156	深埋1	BA21、10A16-17	XV	方形	151		-	-	-	斜文	胎形	胎形1列	×	無し	-	-	-	-	磨孔	-	縄、瓦、白	10YR7/3 C-65(黄緑)		

観察表

縄文時代の前期土器観察表 (5)

報告番号	分類	ブツコード	群位	口縁形状	直径 (mm)	文様	文様種類	胎文	胎文種類	口縁高文	口縁高文種類	口縁高文方向	内面	底面形状	底面高文	底面高文種類	底面高文方向	土色	備考		
157	深溝1 18系集	10A14- 15-20	XV	方形	278	-	-	斜線文	胎文	丸形1列	X	無し	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅黄			
158	深溝1 18系集	10A14- 15-20	XV	方形	300	-	-	斜線文	胎文	丸形1列	O	無し	-	厚底	-	-	丸, 赤	7.0Y88/3 浅黄			
159	深溝1 21分集	10A15- 14-20	XV	方形	128	縦線文	手織竹管・ 神・(厚底)	斜線文?	不明	丸形3列	X	凸形・ 斜線3列	-	-	-	-	丸, 赤	7.0Y87/3 に似る浅黄			
160	深溝1 21分集	10A14- 15-20	XV	方形	-	無文	-	-	-	丸形2列	O	無し	-	平薄	-	-	丸, 赤	7.0Y86/2 灰白			
161	深溝1 21分集	10A20- 18系集	XV	-	-	無文	-	-	-	不明	-	-	凸形	丸形3列	丸, 赤	厚底	-	丸, 赤	7.0Y83/3 に似る浅		
162	深溝1 21分集	10A20	XV	方形	176	コンバス文	手織竹管	斜線文?	胎文	丸形3列	X	不明	-	厚底	-	-	丸, 赤	7.0Y87/3 に似る浅			
163	深溝1 21分集	10A20	XV	方形	-	コンバス文	手織竹管	-	-	斜線3列	O	不明	-	平薄	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅			
164	深溝1 21分集	10A20	XV	内面	-	縦線文	手織竹管	-	-	斜線3列	X	不明	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y88/3 浅黄			
165	深溝1 21分集	10A20	XV	方形	121	[S] 字紋文	手織竹管	-	-	丸形2列	X	不明	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y86/2 に似る浅			
166	深溝1 21分集	10A20	XV	-	-	縦線文・ 斜線文	手織竹管	-	-	不明	-	不明	-	厚底	-	-	丸, 赤	7.0Y85/4 に似る浅			
167	深溝1 21分集	10A20	XV	方形	-	[S] 字紋文 ・内面竹管	手織竹管 ・内面竹管	-	-	丸形2列	X	不明	丸形2列	同	平薄	-	-	丸, 赤	10Y84/3 に似る浅		
168	深溝1 21分集	10A20	XV	方形	-	-	-	付加条線文	丸	無し	X	-	-	平薄	-	-	丸, 赤	10Y84/2 灰白			
169	深溝1 18系集	10A20	XV	内面	-	縦線文	手織竹管	斜線	丸	丸形1列	X	不明	丸形竹管 之(背)	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y87/2 に似る浅		
170	深溝1 18系集	10A20	XV	方形	280	-	-	斜線	丸	丸形1列	O	無し	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y88/3 浅黄			
171	深溝1 18系集	10A19- 20	XV	方形	-	-	-	非斜線条線 文	丸	丸形3列	X	無し	-	平薄	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅	0段多		
172	深溝1 18系集	10A21- 22-18	XV	内面	334	無文	-	非斜線条線 文	丸	丸形2列	X	不明	丸形2列	同	平薄	-	-	丸, 赤	7.0Y87/4 に似る浅	0段多	
173	深溝1 18系集	10A21- 22	XV	方形	-	コンバス文	手織竹管	斜線文	丸	丸形2列	X	不明	丸形2列	同	平薄	-	-	丸, 赤	7.0Y85/3 に似る浅		
174	深溝1 19分集	10A18- 18系集	XV	-	-	縦手織文・ 滑石文・ 内面竹管文	手織竹管 ・滑石文 ・内面竹管	斜線文	丸	丸形1列	X	不明	丸形竹管 之	-	厚底	-	-	丸, 赤	7.0Y85/4 に似る浅		
175	深溝1 19分集	10A18	XV	方形	-	縦線文	手織竹管	非斜線条線 文	丸	無し	X	-	丸形 脚線	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅	0段多	
176	深溝1 21分集	10A18	XV	方形	-	無文	-	-	-	斜線5列	X	不明	丸形竹管 ・斜線2 列	-	平薄	-	-	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅		
177	深溝1 21分集	10A18	XV	方形	-	-	-	斜線文	丸	斜線1列	X	凸形	斜線2列	丸, 赤	-	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅		
178	深溝1 18系集	10A18	XV	丸形	160	132	-	斜線文	胎文	丸	X	無し	-	丸底	-	-	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅			
179	深溝1 18系集	10A17- 18-18	XV	方形	238	-	-	ループ文	丸	丸形1列	O	無し	-	平薄	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅			
180	深溝1 18系集	10A18	XV	丸形	212	-	-	ループ文	丸	縄押目1 列	O	無し	-	厚底	-	-	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅	縦線孔		
181	深溝1 21分集	10A18	XV	方形	-	横手織文?	丸形(同 方向)	-	-	丸形2列	X	丸形	不明	-	-	-	-	丸, 赤	10Y87/2 に似る浅		
182	深溝1 18系集	10A17- 18	XV	-	-	-	-	斜線文	丸	丸形1条	O	無し	-	厚底	-	-	-	丸, 赤	10Y88/3 浅黄		
183	深溝1 18系集	10A17- 18	XV	方形	273	-	-	斜線文	丸	丸形1条	O	無し	-	厚底	-	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅		
184	深溝1 18系集	10A17	XV	-	-	突起・平薄	横(断面内 面) 丸形	-	-	不明	-	不明	-	厚底	-	-	-	丸, 赤	10Y86/1 脚底		
185	深溝1 18系集	10A16- 17-18	XV	方形	312	-	-	同一方向 丸形	丸	無し	X	不明	丸形竹管	-	平薄	平底	丸形?	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅		
186	深溝1 18系集	10A17- 18-22- 23-28	XV	方形	-	-	-	非斜線条線 文	丸	丸形2列	X	無し	-	平薄	-	-	-	丸, 赤	10Y85/4 に似る浅	0段多	
187	深溝1 18系集	10A17- 18-22- 23-28	XV	-	104	-	-	-	-	-	-	不明	-	平薄	平底	丸形(脚 底)	丸形?	丸, 赤	7.0Y85/3 に似る浅		
188	深溝1 18系集	10A13- 18-21- 22-24	XV	方形	-	縦線文・コ ンバス文・ 内面竹管	手織竹管 ・斜線文? ・内面竹管	丸	丸	丸形2列	X	不明	丸形竹管 ・丸形3 列	同	平薄(1 方向)	-	-	丸, 赤	10Y86/3 に似る浅	0段多	
189	深溝1 21分集	10A23	XV	-	-	縦線	丸	不明	-	-	-	凸形	丸形2列	丸, 赤	厚底	-	-	丸, 赤	5Y88-4 脚底		
190	深溝1 21分集	10B1-18	XV	内面	344	-	-	斜線文	丸	丸形2列	O	不明	凸形	丸形3列	同	-	-	丸, 赤	10Y85/4 に似る浅		
191	深溝1 21分集	10B5- 10B6-18	XV	内面	282	-	-	斜線文	丸	丸形2列	O	不明	-	厚底	-	-	-	丸, 赤	10Y88/2 灰白		
192	深溝1 21分集	10B1	XV	方形	276	-	-	斜線文	丸	丸形2列	X	不明	丸形2列	丸, 赤	平薄	-	-	丸, 赤	10Y86/4 に似る浅		
193	深溝1 21分集	10A21- 22, 10B1- 2	XV	内面	336	無文	-	斜線文	丸	丸形2列	X	不明	凸形	丸形3列	丸, 赤	平薄	-	-	丸, 赤	7.0Y85/3 に似る浅	
194	深溝1 18系集	10B1-2 10A18	XV	丸形	-	-	縦手織文 ・斜線文	胎文	丸	斜線1列	X	無し	-	厚底	-	-	-	丸, 赤	10Y87/3 に似る浅		
195	深溝1 19分集	10B2- 13A21	XV	丸形	157	[S] 字紋文 ・内面竹管	手織竹管 ・内面竹管	-	-	丸形2列	X	不明	-	平薄	-	-	-	丸, 赤	7.0Y87/3 に似る浅		

縄文時代の前期土器観察表 (6)

発掘番号	分類	グロッド	群位	口縁形状	口径 (mm)	文様		胎文		口縁胎文		製造法		内面	底面	底面胎文	胎土	色	備考		
						白磁	黒磁	文様	胎文	文様	胎文	口縁	胎文							口縁	胎文
196	深淵1 I-A型	1082	XV	方形				「S」字状文 ?	半蔵竹管 ・高脚(同) ・内彫竹管	-	-	半蔵竹管 +高脚2列	×同	半蔵竹管 +高脚2列	同	摩耗	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
197	深淵1 I-B型	1082	XV	方形				格子状文	半蔵竹管	-	-	高脚2列	○同	無し	-	半磨	-	白	10Y86/2 に似る浅焼		
198	深淵1	1082	XV	-				格子状文?	半蔵竹管	-	-	-	-	無し	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
199	深淵1 I-B型	1082	XV	内径分				-	-	-	-	高脚2列	×	同	-	半磨	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
200	深淵1 I-B型	1081	XV	方形	(192)			-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	半磨	-	白	10Y86/2 に似る浅焼		
201	深淵1 I-B型	1081-2 I-A型	XV	内径分	162			-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
202	深淵1 I-A型	10A25	XV	-				縦線文	西本胎土(L)	-	-	不明	-	半蔵2列 以上	同	半磨	-	白	10Y87/4 に似る浅焼		
203	深淵1 I-C型	10A16- 17	XV	方形				縦線	目	縦線	目	縦線	×	同	-	3方弁	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
204	深淵1 D-F型	10A12	XV	方形				縦線文	横(高脚口)	-	-	縦線	×	同	-	半磨	-	白	10Y87/3 に似る浅焼		
205	深淵1 D-F型	10A22	XV	方形				横線文	半蔵竹管 ・高脚(同)	-	-	半蔵竹管 +高脚2列	×同	半蔵竹管 +高脚1列以上	-	半磨	-	白	10Y87/3 に似る浅焼		
206	深淵1 D-F型	10A12- 1089	XV	方形				横線文	半蔵竹管 ・高脚	-	-	半蔵竹管 +高脚1列	×	同	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
207	深淵1 D-F型	10A17	XV	方形				縦線文 ・内彫竹管文	半蔵竹管 ・高脚 ・内彫竹管	-	-	高脚2列	○	無し	不明	-	半磨	-	白	7.5Y87/3 に似る浅焼	
208	深淵1 I-B型	10A21	XV	方形				-	-	-	-	縦線	△	同	-	3方弁	-	白	10Y85/2 に似る浅焼		
209	深淵1 I-F型	10A21	XV	-				無文	-	-	-	縦線	△	同	-	3方弁	-	白	10Y87/2 に似る浅焼		
210	深淵1 I-B型	10A25	XV	方形				-	-	-	-	高脚3列 以上	×	同	-	半磨	-	白	10Y86/2 に似る浅焼		
211	深淵1 I-B型	10A17	XV	方形				-	-	-	-	半蔵竹管 +高脚3列	×	同	-	3方弁	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
212	深淵1 I-B型	10A19	XV	方形	424			コンパス文	半蔵竹管	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	半蔵竹管 +高脚3列	×	同	-	3方弁	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
213	深淵1 I-B型	10A16	XV	方形				コンパス文	半蔵竹管	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	半蔵竹管 +高脚3列	×	同	-	3方弁	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
214	深淵1 I-B型	10A15	XV	方形				縦線文	半蔵竹管	-	-	-	-	無し	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
215	深淵1 I-B型	10A11- 12-15	XV	方形	222			-	-	-	-	高脚1列	○	無し	-	半磨	-	白	7.5Y86/3 に似る浅焼		
216	深淵1 I-A型	10A18- 19-25	XV	内径分				-	-	-	-	縦線	×	同	-	半磨	-	白	10Y86/1 に似る浅焼		
217	深淵1 I-B型	10A16- 17	XV	方形	212			-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	-	半磨	-	白	10Y86/4 に似る浅焼	
218	深淵1 I-D型	1083	XV	方形				コンパス文	半蔵竹管	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	半蔵竹管 +高脚2列	×	同	-	半磨	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
219	深淵1 I-B型	10A24	XV	内径分				コンパス文	半蔵竹管	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	半蔵竹管 +高脚2列	×	同	-	3方弁	-	白	10Y85/3 に似る浅焼		
220	深淵1 I-B型	10A12	XV	内径分				コンパス文	半蔵竹管	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	高脚2列	×	交互	無し	-	半磨	-	白	10Y86/1 に似る浅焼	
221	深淵1 I-B型	10A23- 1084- 11A16	XV	方形				コンパス文	半蔵竹管 (目)	縦線文 ・高脚(同)	縦線文 ・高脚(同)	縦線	×	同	縦線	×	同	赤	10Y87/2 に似る浅焼		
222	深淵1 I-B型	10A14	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	×	交互	無し	-	半磨	-	白	7.5Y86/2 に似る浅焼	
223	深淵1 I-B型	10A11	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	×	同	無し	-	-	白	10Y85/3 に似る浅焼		
224	深淵1 I-B型	10A16	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	×	同	無し	-	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
225	深淵1 I-B型	10A22	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	×	同	無し	-	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
226	深淵1 I-B型	1085	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	×	同	無し	-	-	白	10Y85/1 に似る浅焼		
227	深淵1	1083	XV	-				-	-	-	-	内彫竹管	不明	-	内磨	無し	-	半磨	-	白	10Y85/3 に似る浅焼
228	深淵1	10A17	XV	-				不明	縦線文	縦線文	目	不明	-	不明	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
229	深淵1 I-B型	1083-8	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	半磨	-	白	10Y86/3 に似る浅焼		
230	深淵1 I-A型	10A13- 1A型	XV	方形				-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	半磨	-	白	10Y86/4 に似る浅焼		
231	深淵1 I-A型	1084	XV	方形	240			-	-	-	-	高脚1列	○	無し	-	-	-	白	10Y87/4 に似る浅焼		
232	深淵1	10A21	XV	-				-	-	-	-	高脚1列	○	無し	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y87/2 に似る浅焼	
233	小型土 器?	10A25	XV	-	14			-	-	-	-	高脚2列	○	無し	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y87/3 に似る浅焼	
234	小型土 器?	1084	XV	-	22			-	-	-	-	不明	-	不明	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	7.5Y87/6 に似る浅焼	
235	小型土 器?	10A19- 12	XV	-	30			-	-	-	-	不明	-	不明	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y86/3 に似る浅焼	
236	深淵1	10A14	XV	-	50			-	-	-	-	内彫竹管	不明	-	不明	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y87/2 に似る浅焼
237	深淵1	10A21- 12	XV	-	78			-	-	-	-	高脚(同)	不明	-	不明	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y86/3 に似る浅焼
238	深淵1	10A15	XV	-	84			-	-	-	-	不明	-	不明	-	半磨	先施	高脚(同) ・高脚(同)	白	10Y86/4 に似る浅焼	

観察表

縄文時代の前期土器観察表 (7)

報告番号	分類	グロッツ	群位	口縁形状	口径 (mm)		文様		胎文		口縁胎文		内面	底面形状	底面文様	胎土	色	備考				
					直径	高さ	種類	施文具	種類	胎文	方向	形状							文様	方向		
239	深鉢	10A13-群	XV	-	60	-	-	-	胎筋(縦一)	-	不明	-	不明	-	不明	-	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0330/4 に彩い焼	
240	深鉢	10A14	XV	-	88	-	-	-	-	-	不明	-	不明	-	不明	-	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0330/4 に彩い焼	
241	深鉢	10B1	XV	-	64	-	-	-	胎筋(縦一)	-	不明	-	不明	-	不明	-	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	
242	深鉢 1B類	RA10, 10A20, 11A11- 16-群	XV	方形	470	-	縞線状文・ 縞線文・ 縞線(縦一) 縞線(横一)	平織竹管・ 縞線(縦一) 縞線(横一) 縞線(縦一)	非結束縞線 縞線	HL=LR (同多量)	胎筋3列 × 矢羽 平筋 × 胎筋4 条	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0330/4 に彩い焼	0段多量
243	深鉢1 C類	11A16	XV	内反り	340	-	-	-	非結束縞線 縞線	HL=L (同多量)	胎筋2列 × 同	凸帯	胎筋1列	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/3 に彩い焼	(C)
244	深鉢1 B類	11A11	XV	方形	130	-	-	-	非結束縞線 縞線	HL=LR (同多量)	胎筋2列 × 同	無し?	-	-	-	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	口縁部縁付 部の胎筋と に彩い焼 施地の不揃 は異なる。
245	深鉢1 B類	11A11	XV	方形	-	-	-	-	非結束縞線 縞線	HL=LR (同多量)	胎筋2列 × 同	無し?	-	-	-	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0337/2 に彩い焼	断面方形の 工具で刻製
246	深鉢1 F類	11A11- 16-群	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	-	凸帯	胎筋3列	矢羽	磨光	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	
247	深鉢1 B類	11A16	XV	方形	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	無し	-	-	-	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	
248	深鉢1 B類	11A18	XV	方形	-	-	-	-	非結束縞線 縞線	HL=L (同多量)	胎筋2列 × 同	無し?	-	-	-	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/2 に彩い焼	断面方形の 工具で刻製
249	深鉢1 B類	11A22	XV	方形	-	-	-	-	非結束縞線 縞線	HL=L (同多量)	胎筋2列 × 同	無し	-	-	-	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	0段多量
250	深鉢1 C類	9C24-群	XV	方形	264	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋1列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/3 に彩い焼	
251	深鉢1 D類	4C25- 4D3	XV	内反り	206	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋4列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/3 に彩い焼	
252	深鉢1 B類	10B5-群	XV	内反り	214	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	
253	深鉢1 B類	4D13	XV	内反り	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/4 に彩い焼	
254	深鉢1 B類	5C17	XV	内反り	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋1列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	
255	深鉢1 D類	4D2	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/3 に彩い焼	
256	深鉢1 D類	4D8-11	XV	内反り	364	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/2 に彩い焼	
257	深鉢1 D類	4D8-1群	XV	丸形	92	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	
258	深鉢1 B類	4D12-117 18-群	XV	内反り	172	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/2 に彩い焼	
259	深鉢1 F類	4C11, 5D2	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/2 に彩い焼	
260	深鉢1 D類	10D3	XV	内反り	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/2 に彩い焼	
261	小型土 器1 C類	8B5-群	XV	-	34	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	
262	深鉢1 B類	10X21	XVc	方形	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y33/1 に彩い焼	
263	深鉢	10X21	XVc	丸形	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/2 に彩い焼	
264	深鉢	10X21	XVc	方形	110	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/3 に彩い焼	
265	深鉢	10X25	XVc	方形	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0335/2 に彩い焼	
266	深鉢	10X22	XVc	丸形	246	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	小紋状
267	深鉢	6B16	XVb	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	267 ~ 269は同一 個体
268	深鉢	6B13	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	267 ~ 269は同一 個体
269	深鉢	6B12	XVa	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	267 ~ 269は同一 個体
270	深鉢	6B17-1群	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/4 に彩い焼	
271	深鉢1 B類	8B4	XIb	方形	210	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	7.0330/4 に彩い焼	
272	小型土 器1 C類	8B30	XIb	方形	66	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/2 に彩い焼	
273	深鉢1 B類	8B30	XIb	方形	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y35/1 に彩い焼	
274	深鉢1 F類	不明	不明	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y37/3 に彩い焼	
275	深鉢?	不明	XV	-	-	-	-	-	縞線状文	平織竹管	胎筋2列 × 同	不明	不明	不明	不明	不明	平滑	平鉢	縄文(赤褐色)	縄文(赤褐色)	10Y306/2 に彩い焼	

縄文時代中期～後期土器観察表

報告番号	器形 器種 口縁	グリッド	層位	文様など	形式	地文	原体	口径 (mm)	胎土	色調	備考
276	深鉢	突起	103D3	XVb	半軌竹管?	新保	—	—	白	10YR6/3に多い黄褐色	
277	深鉢	—	103D1	XVa	大紐文(半軌竹管)	新保～新崎	調縄文	LR	白多	10YR4/2灰黄褐色	
278	深鉢	平縁	9A16	XV	半軌竹管4条以上(横位)	新崎	調縄文	LR	白	10YR2/4に多い黄褐色	
279	深鉢	波状	103C12	XVc	大紐「コ」字(斜付珠帯・半軌竹管)	新崎	調縄文	LR	白、黄	7.5YR7/4に多い黄褐色	
280	深鉢	—	5C4	XV	半軌竹管3条以上、直筆文、爪痕	新崎	—	—	黄、白	10YR6/4に多い黄褐色	
281	深鉢	波状	6B16-21	XVa	黄褐色・波状の珠帯、縞面状突起	大木Da	—	—	黄、灰、白	10YR6/3に多い黄褐色	
282	深鉢	—	8B17-20	XV	楕円形状の波線	大木Da	調縄文	LR	黄、灰、灰、灰	10YR6/3暗褐色	
283	深鉢	平縁	7A13-18	XVa	1線彫刻連珠、胴部起輪上の波線	大木Da	調縄文	RL	274	黄、灰、白、灰	10YR6/4に多い黄褐色
284	深鉢	平縁	6B9	XVa	1線彫刻付近無文	大木Da	調縄文	LR	252	黄、灰、灰	10YR5/2褐色
285	深鉢	平縁	7A14	XVa	無文	大木Da	—	—	226	黄、灰、灰	10YR6/3暗褐色
286	深鉢	平縁	6B21	XV	縦位の長楕円の区画内に調縄文	大木Da	調縄文	RL	—	黄	10YR6/3に多い黄褐色
287	深鉢	平縁	11A17	XV	波線、縞面状線文	加曾利B1	—	—	—	黄、灰、灰	10YR6/3に多い黄褐色
288	深鉢?	—	11A10-19	XVb	波帯2条、突帯頂部に連続線文	三十細草	無文	—	—	白多	10YR6/4に多い黄褐色

縄文時代後期～晩期土器観察表(1)

報告番号	器形 器種 口縁	グリッド	層位	形式	文様など	地文	原体	大きさ(mm) 口径 器高 器口 底径	内面	胎土	色調	群など		
289	深鉢 A1型	平縁	11A24	XVb	加曾利B1	多条波線	調縄文	LR		ミガキ	黄、灰、白	10YR5/2 褐色	第1群	
290	浅鉢 B型 小突起 口土器	8B12	XV	加曾利B1	幾何学文(半軌竹管・短突)1列、(半軌竹管・短突)1列					平滑	黄、白	10YR5/2 灰黄褐色	第2群	
291	浅鉢 B型	小突起	4C11	XVb	大洞C1	滑消縄文		LR		ミガキ	黄、灰	10YR7/2 に多い黄褐色	第4群	
292	深鉢	波状	10A22	XV	加曾利B3 ～腹	滑消縄文	調縄文	LR		ミガキ	黄、白	7.5YR3/2 黒褐色	第3群	
293	浅鉢 A1型	小突起	10B13	XV	大洞C1	波線、刺突、滑消縄文		LR	210	ミガキ	黄、白	10YR5/2 褐色	第4群	
294	深鉢 A2型	平縁	5C25、6C6、7B8	XIIIe XIIIb	加曾利B1	多条波線、区切り縦線文、内：波線1条	調縄文	LR	248 31 123	ミガキ	黄、白、灰	7.5YR7/2 明褐色	第1群	
295	深鉢 B型	平縁	5C2	XIIIe	加曾利B3	滑消縄文	調縄文	LR	302	ミガキ	黄、白	10YR5/4 に多い黄褐色	第1群	
296	深鉢 B型	平縁	6A10・12、7B9	XIIIe XIIIb XIIIb	加曾利B1?				296 305	平滑	黄、長、白	10YR7/3 に多い黄褐色	第3群	
297	深鉢 B型	—	E1K	XIIIe	(地山直上)	加曾利B3	波線、刺突	調縄文	LR	76	ミガキ	黄、黄緑	10YR6/3 に多い黄褐色	第1群
298	深鉢 A2型	平縁	9B22	XIIIe	加曾利B1	多条波線、口唇：キザミ、内：波線3条	調縄文	LR		ミガキ	黄、白、黒色粒	7.5YR6/3 に多い黄褐色	第1群	
299	深鉢 A2型	平縁	6B20	XIIIe	加曾利B1	多条波線、の字状半単位	調縄文	LR		ミガキ	長、白	10YR5/2 褐色	第1群	
300	深鉢 A2型	平縁	8B10	XIIIe	加曾利B1	多条波線、口唇：刺突	無文	—		ミガキ	黄、長、赤、白	7.5YR6/3 に多い黄褐色	第1群	
301	深鉢 A2型	—	6B20	XIIIe	加曾利B1	無文		85		不明	黄、白	10YR7/2 に多い黄褐色	内面透付者、第1群	
302	深鉢 A1型	平縁	6B12	XIIIe	加曾利B1	多条波線、内：波線2条	調縄文	LR		ミガキ	黄、白(表人物少)	10YR6/3 に多い黄褐色	第1群	
303	深鉢 A1型	波状	5B22	XIIIe	加曾利B1	多条波線、カウコ文、口唇：キザミ、内：波線2条	調縄文	LR		ミガキ	黄、白	7.5YR8/3 黒褐色	第1群	
304	深鉢	波状	9B12	XIIIe	加曾利B1	楕円波線? 円形浮文、円・弧状の波線・短線線		—		ミガキ	黄、白	10YR4/2 灰黄褐色	第3群	
305	浅鉢	平縁	5B18	XIIIb	加曾利B1	波線	調縄文	LR	182 71 48	ミガキ	黄、白	10YR7/2 に多い黄褐色	第1群	
306	壺	平縁	7B4・9	XIIIa XIIIb	加曾利B2?	滑消縄文	調縄文	LR	192	ミガキ・擦痕	白	10YR6/1 褐色	第1群	
307	深鉢	波状	9B2	XIIIb	楕円波線?	滑消縄文	調縄文	LR		ミガキ	黄、白	7.5YR6/4 に多い黄褐色	第3群	
308	深鉢	—	9B2・6・7	XIIIb	楕円波線	大紐文	調縄文 (灰黄)	LR		ミガキ	黄、白	10YR7/4 に多い黄褐色	第3群	
309	深鉢	突起	8B2	XIIIb	楕円波線	穴頭縄文	調縄文	RL		ミガキ	黄、白	10YR1.7/1 褐色	第2群	
310	深鉢	波状	4D6	XIIIb	楕円波線?	刺突、縞、弧線文	調縄文	RL		擦痕	黄、白	10YR7/2 に多い黄褐色	第2群	
311	深鉢	波状	9B1	XIIIb	楕円波線		調縄文	RL		ミガキ	黄、白、縞	10YR7/3 に多い黄褐色	第2群	
312	壺	—	4C23	XIIIb	大洞B	三叉文	調縄文 赤色漆	RL		ナデ	白	10R4/3 赤褐色	第3群	
313	台付鉢	—	4D4	XIIIb	大洞B	透かし	ミガキ	—	102	ミガキ	黄、長、白	10YR6/3 に多い黄褐色	内面アスフール付者、第3群	
314	浅鉢 B型	突起	7A19	XIIIb	大洞C1	雲形文・波線、半面状文(内面)	調縄文	LR		ミガキ	黄、長、白	10YR6/2 灰黄褐色	第4群	
315	深鉢 B型	平縁	103D2	XIIIa	加曾利B3	滑消縄文	調縄文	RL	196	ミガキ	黄、白	10YR6/2 灰黄褐色	第1群	

観 察 表

縄文時代後期～晩期土器観察表(2)

報告 番号	器形 口縁	グリッド	層位	型式	文様など	地名	原休	大きさ (mm)			内面	胎土	色調	群など		
								口縁	器高	最大 直径						
316	深鉢 A型	波状	5C2	XIIIa	櫛孔段彫	流線文、直線文、光 出縄文	銅縄文	LR				摩耗	雲、白、 灰	10YR7/3 に多い直焼	第V群	
317	壺	平縁	6B21	XIIIa	大淵B～ BC		銅縄文	LR	120				ミガキ 雲、白	7.5YR6/3 に多い焼	第V群	
318	壺	—	5B12	XIIIa		無文		—					ミガキ、 赤色漆	10YR6/4 に多い直焼	第V群	
319	浅鉢 B型	平縁	5B19・22・ 23	XIIIa	大淵B2	人組三叉文	銅縄文	LR	164	51	48	平滑	雲、白	10YR6/3 に多い直焼	既系ミガキ、 第IV群	
320	深鉢 B型	波状	5B15	XIIIa	大淵B2	人組三叉文	銅縄文	LR	254			擦痕	雲、白	10YR6/2 に多い直焼	第IV群	
321	浅鉢	平縁	5C21	XIIIa	大淵B2	人組三叉文、沈線3 条	銅縄文	LR				平滑	雲、白	10YR6/2 灰直焼	第IV群	
322	浅鉢	波状	5C16	XIIIa	大淵B1	三叉文	銅縄文	LR					ミガキ 雲、白	10YR6/2 灰直焼	第IV群	
323	小型壺	—	7B10	XIIIa	大淵B2	人組三叉文	銅縄文	LR			51	28	?	雲、白	10YR6/3 に多い直焼	既系ミガキ、 第IV群
324	口土器	—	6B21	XIIIa	大淵B1	玉敷き三叉文	(ミガキ)	—					ナデ	雲、白	7.5YR6/2 灰	第IV群
325	浅鉢?	平縁	6B19	XIIIa		無文	(ミガキ)	—	140				ミガキ 雲、白	10YR4/2 灰直焼	第IV群	
326	深鉢	波状	7A20	XIIIa	八日市新保	沈線による文様	無し	—					ミガキ 雲、長、 白	10YR4/2 灰直焼	第V群	
327	壺	平縁	4C15	XIIIa	大淵C1?	無文(ミガキ)	銅縄文	LR	174	180			ケズリ?	7.5YR5/3 に多い直焼	第IV群	
328	深鉢 B型	平縁	7B19	XIIIa		無文	(ミガキ)	—	208	222		擦痕	雲、白	10YR4/3 に多い直焼	第IV群	
329	深鉢 B型	平縁	5B24	XIIIa			徳典 (横位)		256				ミガキ 雲、白	7.5YR4/1 焼	第IV群	
330	深鉢	—	5B22、7B2・ 3	XIIIa	大淵B～ BC	無文		銅縄文	LR	95			不明	雲、白	10YR4/4 焼	アスファルト 入り、 第IV群
331	壺	—	4C9、4D2、 5C1・2	XII b・ XIII d	大淵BC1	人組三叉文、沈線	銅縄文	LR		182	88		ミガキ 雲、長、 白	10YR6/3 に多い直焼	第IV群	
332	壺?	—	4C7	XII b	大淵B1	磨消縄文		LR					ミガキ 雲、白、 海針	10YR4/1 灰	第IV群	
333	壺?	—	4C8/6B20	XII b/ XIII e	大淵B2	沈線	ミガキ、 黒色漆						灰	7.5YR8/2 灰白	第IV群	
334	深鉢 B1型	平縁	5C7、6A24 6C3、7A20	XII b	大淵BC1	羊歯状文・沈線	網目状徳 典文、 赤文	R・ R					ミガキ 雲、白	10YR4/1 灰	第IV群	
335	浅鉢 B型	突起	6A19、7A14 ・22	XII b	大淵C1	羊歯状文(内外)、 雲形、磨消縄文	銅縄文	LR					ミガキ 雲、白	N1.5/黒	第IV群	
336	深鉢	突起	6A19、7A14 ・22	XII b		磨消縄文	銅縄文	LR					雲、白	N1.5/黒	第IV群	
337	浅鉢 B型	平縁	5C3	XII b	大淵C1	羊歯状文・沈線	銅縄文	LR					ミガキ 雲、海 針、白	10YR4/1 灰	第IV群	
338	浅鉢 B型	突起	5C2	XII b	大淵C1	雲形文	銅縄文	LR	268				ミガキ 雲、白、 灰	10YR7/3 に多い直焼	第IV群	
339	壺	—	4D7	XII b	大淵C1?		銅縄文	LR		158	54		ミガキ 雲、白、 灰	10YR6/3 に多い直焼	第IV群	
340	深鉢	平縁	4D5	XII b	中層式	帯状縄状文、綾線帯 状文、内：刺突・沈 線	銅縄文	RL	218				ミガキ 雲、長、 白	10YR6/4 に多い直焼	第V群	
341	深鉢 B1型	波状	5C2	XII b	大淵B2	人組三叉文、玉敷き 三叉文	無文 (ミガキ)	—	136				ミガキ 雲、白、 器人物少 ない	7.5YR3/1 黒	第IV群	
342	浅鉢 B型	小突起	4C10、4D1	XII b	大淵C1	沈線、磨消縄文		LR					ミガキ 雲、白、 海針	10YR7/3 に多い直焼	第IV群	
343	深鉢	平縁	4C10・22	XII b	大淵C1	沈線	結節回転 文、赤 R・ R	208	218				ミガキ 雲、長、 白	10YR7/3 に多い直焼	第IV群	
344	深鉢	平縁	8B9・10、 9A23	XII b	大淵C1	羊歯状文・沈線	徳典、磨 典、赤 R・ R					平滑	雲、白	10YR6/3 に多い直焼	第IV群	
345	深鉢	平縁	6A24	XII b	大淵C1	刺突、沈線、羊歯状 文	網目状徳 典赤文 R・ R	235	250				雲、長、 白	10YR7/3 に多い直焼	第IV群	
346	深鉢	平縁	6A24	XII b	大淵C1	沈線、刺突	網目状徳 典赤文 R・ R	260					ミガキ 雲、白	10YR6/4 に多い直焼	第IV群	
347	深鉢 A型	平縁	7A15	XII b	大淵BC～ C1	口：ヨコナデ	結節回転 文、網目 状徳典赤 R・ R	400	420				ケズリ、 擦痕	10YR6/3 に多い直焼	第IV群	
348	深鉢 A型	平縁	6A24	XII b	大淵BC～ C1	口端ヨコナデ、結節 回転文	結節回転 文、銅縄 文、赤 R・ R					平滑	雲、白、 灰	7.5YR6/3 に多い直焼	第IV群	
349	深鉢 A型	平縁	4D7	XII b	大淵BC～ C1		銅縄文 (縦)	LR	260				ケズリ	雲、白	10YR7/2 に多い直焼	第IV群
350	深鉢 C型	波状	6A16、6C6	XII b		口端ヨコナデ	銅縄文	LR				平滑	雲、白	7.5YR6/2 灰	第IV群	
351	深鉢	—	6A25	XII b		沈線	銅縄文	RL			57		ミガキ 雲、白	7.5YR8/3 浅直焼	第IV群	
352	深鉢 A型	平縁	4D6・8	XII b	大淵BC～ C1	口縁：ヨコナデ	網目状徳 典赤文 R・ R	300	312				擦痕	雲、長、 白	10YR7/4 に多い直焼	第IV群
353	深鉢	—	6B11	XII b	大淵BC～ C1		網目状徳 典赤文 R・ R				85		ミガキ 雲、白、 灰	10YR7/4 に多い直焼	第IV群	

縄文時代後期～晩期土器観察表 (3)

報告番号	器形		グリッド	層位	型式	文様など	地名	原休	大きさ (mm)			内面	胎土	色調	群など	
	器種	口縁							口径	器高	最大					底径
354	深鉢	受口	6B8	XII b		無文	(ナ字)	—			79	ナ字	雲、白	7.5YR6/3 に-い黄緑	成外黒麻土 坑、第VI群	
355	浅鉢	平縁	7B25、SK95	XII a	中層式	口縁：貼付隠線・斜線文	調縄文	LR				ミガキ	雲、白	10YR4/4 黄	第V群	
356	深鉢 A型	平縁	6B25	XI b	a	口縁ヨコナデ	網目状隠 糸文 (縦 位の?)	R・ R	312			ミガキ	雲、基、 白	10YR6/6 明黄緑	第VI群	
357	深鉢 C型	小波状	5B24	XII a		無文	(ナ字)	—	172			ミガキ	10YR6/4 灰白、 赤針、 赤色漆	に-い黄緑	第VII群	
358	壺	平縁	5B25	XII	大淵C1?	無文	(ミガキ)	—	182			ミガキ	雲、白	N1.5/黒	第VIII群?	
359	深鉢 B型	平縁	10A20	XII			調縄文	LR	142	106	142	50	ミガキ	雲、白	10YR6/3 成外ミガキ、 灰白	第IX群
360	台付鉢	平縁	11A21	XII			調縄文、 ナ字	LR			86	ナデ	雲、白、 赤	7.5YR8/2 灰白	第X群?	
361	深鉢 B2型	平縁	103C10	XI	大淵BC	平南文・沈線	調縄文	LR				平漕	10YR7/1 灰白	10YR7/3 に-い黄緑	第XI群	
362	壺	受口	10A14	XI c	大淵BC	刺突、沈線	ミガキ、 赤色漆	—				ミガキ	白	2.5YR2/4 極赤	第XI群	
363	深鉢 B型	平縁	103D10	XI			隠糸	R・ R	335	342		ミガキ	雲、基、 灰、白	10YR7/3 に-い黄緑	第XI群	
364	深鉢 A1型	波状	6C7	XIII b ~ XV	加曽利B1	多条沈線・の字文、 カコウ文、口縁：キ ギミ	調縄文	LR				ミガキ	雲、白	7.5YR7/3 に-い黄緑	第I群	
365	深鉢 A型	—	7B9	VII a	大淵B1	三行文	調縄文・調 縄文	LR				ミガキ	雲、白	10YR6/2 灰黄緑	第II群	
366	深鉢 B1型	突起?	2D25	B期	大淵BC	平南状文、玉取き入 り組み文	調縄文	RL				ミガキ	雲、白、 赤	10YR6/4 に-い黄緑	第III群	
367	浅鉢 A型	平縁	黒麻土	—	大淵BC ~ C1	沈線、平南状文、雲 形文	調縄文	LR	190			磨粒	雲、赤 針、白	2.5Y5/1 黄灰	第IV群	
368	深鉢 B型	小波状	G1K黒麻土			無文	(ナ字)	—	86	137	55	96	ナデ	雲、白、 灰	2.5Y6/3 に-い黄緑	第VI群

弥生時代中期土器観察表 (1)

報告番号	器形		グリッド	層位	大きさ (mm)				調整	文 様		内面	色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		英文具	外面				
369	壺A型	受口	4D3	灰色 粘土	226				口縁ヨコナデ、器 内外ハケメ	縷 線	棒状浮文、矢羽 状隠日文、凸帯 +棒目文2条	無し	10YR8/4 浅黄緑	雲、白、 灰	
370	壺A型	受口	4D16・17	F期	196				口縁内ヨコナデ、 器内外ハケメ後ナ デ	縷 線	矢羽状隠日文、 凸帯+棒目文2 条	棒目状隠 日文	10YR7/3 に-い黄緑	雲、白、 灰	
371	壺A型	受口	4D5・10	灰色 粘土	172				口縁内ヨコナデ、 器内外ハケメ、器内 ハケメ後ナデ	縷 線	矢羽状隠日文、 直線線・凸帯+ 肩み・衝流水文	無し	7.5YR8/2 灰白	雲、白、 灰	
372	壺A型	受口	4D4・5、 5D1	灰色 粘土	176				器内外ハケメ	縷 線	矢羽状隠日文、 凸帯+矢羽状隠 日文・直線文、 波状文	無し	10YR7/4 に-い黄緑	雲、灰、 赤	
373	壺A型	小波状・ 受口	3D18	F期	162				口縁ヨコナデ、器 内外ハケメ	縷 線	無し	棒目文	10YR8/3 浅黄緑	雲、基、 灰、赤	
374	壺A型?	受口	4D9	灰色 粘土					器内外ヨコナデ、器 内割落	縷 線 (断面 内)	凸帯+刺突2条	無し	10YR7/4 に-い黄緑	雲、白	
375	壺B型	小波状	4C23、4D4 ・5、5D3	灰色 粘土	134				内外ハケメ	縷 線	刺突	無し	7.5YR8/3 浅黄緑	雲、基、 灰、白	
376	壺B型	小波状	4D5・10	灰色 粘土	112	330	240	48	口縁ヨコナデ、器 ・内外ハケメ、器 内ミガキ、体内ハ ケメ・ナデ	縷 線	無し	棒目文	2.5YR7/4 赤赤	雲、白、 灰	
377	壺C型	平縁 (高取巾)	4C19	灰色 粘土	75				内外ハケメ、口縁・ 器内外ハケメ、体内 ナデ	縷 線	棒目文	矢羽状隠 日文	10YR8/3 浅黄緑	雲、白、 黒	
378	壺B型	平縁	4D5・10、 5D1	灰色 粘土	160				口縁・器ヨコナデ	縷 線	棒目文	無し	10YR7/4 に-い黄緑	雲、白、 赤	
379	壺B型	平縁	4D5・10	灰色 粘土	146				内外ハケメ	縷 線	矢羽状隠日文	無し	10YR8/3 浅黄緑	雲、白、 赤	
380	壺C型	小波状	4D4	灰色 粘土	182				口縁ヨコナデ、器 ・内外ハケメ、器 内外ハケメ後ナデ	縷 線	無し	斜行短縄文	10YR8/3 浅黄緑	雲、 赤	体内割落
381	壺C型	小波状	4D8・9・ 13・14	灰色 粘土	150	360	251	70	口縁ヨコナデ、器 内外ハケメ後ミガキ、 体内ハケメ後ナ デ	縷 線	棒目文	棒目文	7.5YR8/3 浅黄緑	雲、白、 赤	
382	壺C型	平縁 (高取巾)	4D5・10	灰色 粘土	134	355	240	83	口コナデ、体内ハ ケメ・ナデ	縷 線	棒目文	無し	7.5YR8/3 浅黄緑	雲、白、 灰	
383	壺C型	小波状	4D5・10	灰色 粘土	188	402	270	76	口縁ヨコナデ、器 内外ハケメ、体内ナ デ・ハケメ	縷 線	棒目文、直線文 ・直線文・扇形 文	矢羽状隠 日文	10YR8/4 浅黄緑	雲、白、 黒	
384	壺D型	小波状	4D5・10	灰色 粘土	132	449	318	76	口縁ヨコナデ、器 ・内外ハケメ、器 内外ハケメ後ナデ	縷 線	棒目文	棒目文	7.5YR7/6 橙	雲、白、 灰、赤	

弥生時代中期土器観察表(2)

編内 番号	器形		グリッド	単位	大きさ (mm)			調整	文 様			色調	胎土	備考	
	分類	口縁			口径	器高	最大		底径	施文具	外面				内面
385	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	4D9・10	灰色 粘土	160	399	300	84	口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	黒、白、 灰	
386	壺Ⅱ類	小波状	4D5・10	灰色 粘土	130	409	283	88	口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、内ハケ メ後ナデ	棒	帯目文	無し	10YR8/4 浅黄褐色	黒、白、 灰	
387	壺Ⅱ類	平縁	3D14	F層	60				内ハケメ後ナデ	棒	直線文・垂状文・ 波状文	無し	10YR7/3 に灰い黄褐色	黒、白、 赤	
388	壺Ⅱ類	平縁	4D8・13	灰色 粘土	78				口縁内ヨコナデ、 頸外ハケメ、頸内 ナデ	棒・1R 縄文	斜線文・直線文 ・垂状文	無し	10YR8/2 灰白	黒、白・灰 ・赤	
389	壺Ⅱ類	小波状	3D20	F層	192				口縁内ハケメ、頸 外ハケメ	棒	直線文・垂状文	帯目文・垂 状文・垂形 文	7.5YR7/4 に灰い橙	黒、白、 赤	内面割溝
390	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	4D5・10	灰色 粘土	176				口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	棒	帯目文、波瀾水 文・垂状文	矢羽状帯目 文	7.5YR8/2 灰白	黒、白、 赤	
391	壺Ⅱ類	小波状	4D9, 5D1 9	灰色 粘土	288		362		口縁外ハケメ、体 内外ハケメ	棒	帯目文、直線文 ・垂状文・波状 文・垂形文	凸帯+帯目 文	7.5YR7/6 橙	黒、白、 赤、白、 黒	
392	壺Ⅱ類	小波状	4D11・12 -13	灰色 粘土	170				内外摩耗	—	無し	無し	10YR8/3 浅黄褐色	黒、赤、 黒	
393	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	5D1	灰色 粘土	170		332		口縁・頸ヨコナデ、 体外ハケメ、体内 ハケメ後ナデ	棒	帯目文	無し	7.5YR7/4 に灰い橙	黒、白、 灰	
394	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	4D10	灰色 粘土	152		282		口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ナ デ	—	無し	無し	10YR7/3 に灰い黄褐色	黒、灰、 赤、黒	
395	壺Ⅱ類	小波状	4D4, 5D1	灰色 粘土	200	355	260	80	口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	棒	帯目文、直線文 ・垂状文・垂形 文	矢羽状帯目 文	7.5YR7/4 に灰い橙	黒、白、 赤	
396	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	5D1	灰色 粘土	90		180	60	口縁ヨコナデ、体 外ハケメ後ナデラ ズガキ、内摩耗	棒	直線文・垂状文	矢羽状帯目 文	7.5YR/2 灰白	黒、白、 赤、赤	
397	壺Ⅱ類	小波状	4D7・9	灰色 粘土	137		226		口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	棒	直線文・垂状文	無し	10YR7/3 に灰い黄褐色	黒、白、 灰、赤	
398	壺Ⅱ類	平縁	5D6	灰色 粘土	140		192		口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ、ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/6 浅黄褐色	黒、白、 赤	
399	壺Ⅱ類	小波状	3D12	F層	208				口縁ヨコナデ、頸 部内外ハケメ	匙	刺突	無し	10YR5/2 灰黄褐色	黒、白、 赤	
400	壺Ⅱ類	小波状	4D6・11	F層	182				口縁ヨコナデ、体 内ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/4 浅黄褐色	黒、白、 灰、赤	
401	壺Ⅱ類	小波状	4D8・13	灰色 粘土	154				口縁ヨコナデ、体 外ハケメ、体内ナ デ	棒(断面 円)	刺突	無し	7.5YR8/3 浅黄褐色	黒、白、 灰	
402	壺Ⅱ類	小波状	4D5	灰色 粘土	130				口縁附近ヨコナデ、 体外ハケメ、内ナ デ	棒	矢羽状帯目文	帯目文	10YR8/4 浅黄褐色	黒、白、 灰	
403	壺Ⅱ類	平縁	2D6・15	D層、 F層	140		194		体外ハケメ後ナ デ、内ナデ	—	無し	無し	7.5YR6/4 に灰い橙	黒、白、 赤	
404	壺Ⅱ類	平縁	3D20	F層	140				内ナデ	棒	矢羽状帯目文、 直線文	無し	10YR8/4 浅黄褐色	黒、白、 赤	
405	壺Ⅱ類	平縁	不明	F層					口縁ヨコナデ	円形竹管	無し	円形竹管文	7.5YR7/4 に灰い橙	黒、白、 灰	口縁部小孔 2
406	壺Ⅱ類	平縁	3D17	F層					赤赤鉄、内ナデ	1.R縄文、 棒	斜線文(1.R) ・沈線	無し	2.5YR4/8 赤	白、赤、 赤、赤 質強い	
407	壺Ⅱ類	平縁	3D6	F層					赤ミガキ、内ナデ	棒	沈線	無し	7.5YR6/4 に灰い橙	黒、白、 灰	
408	壺Ⅱ類	平縁	3D24	F層					内ナデ	棒	斜線文・沈線	無し	7.5YR5/6 灰白	黒、白、 灰	
409	壺Ⅱ類	平縁	2D15	F層					内ナデ	1.R縄文、 棒	斜線文・沈線(扇 面状)	無し	2.5YR/3 赤	黒、白	
410	壺Ⅱ類	平縁 (高取口)	4D4	灰色 粘土	98		151		赤ヘラミガキ、内 ナデ	1.R縄文、 棒	斜線文・沈線	無し	10YR8/2 灰白	黒、白、 赤	
411	壺Ⅱ類	平縁	4D5	灰色 粘土			170	70	赤ヘラミガキ、内 ナデ	1.R縄文、 棒	斜線文・沈線	無し	10YR8/2 灰白	黒、白、 赤	
412	壺Ⅱ類	平縁	4D5・10	灰色 粘土					内ナデ	1.R縄文、 棒	斜線文、三角形 刺突	無し			
413	壺Ⅱ類	平縁	3D8	F層			104	52	体外ハケメ後ナデ、 体内ナデ	棒	三角形刺突	無し	10YR5/4 に灰い黄褐色	黒、白、 灰	
414	壺Ⅱ類	平縁	4D5	灰色 粘土	48				赤ナデ、内ハケメ 後ナデ	棒	並行沈線(直線)	無し	10YR6/1 黄褐色	黒、白、 赤	
415	鉢Ⅰ類	小波状	4D12	F層	64	49	—	40	赤ナデ、内ハケメ 後ナデ	棒	帯目文	無し	2.5Y2/1 黒	黒、白	
416	鉢Ⅰ類	平縁	5D2・7	灰色 粘土	86		94		口縁ヨコナデ、体 内外ハケメ後ナデ	—	無し	無し	10YR8/4 浅黄褐色	黒、白、 灰	口縁部小孔 2
417	鉢Ⅰ類	平縁	3D13	F層	210				口縁ヨコナデ、内 外ハケメ後ナデ	棒、円形 竹管	格子状帯目文、 竹管文	無し	10YR8/3 浅黄褐色	黒、白、 赤	

弥生時代中期土器観察表 (3)

編年 番号	器形		グリッド	単位	大きさ (mm)				調整	文 様			色調	胎土	備考
	分類	口縁			口径	器高	最大	底径		施文具	外面	内面			
418	鉢A類	口縁	3D25	F層					ハケメ	—	無し	無し	10YR8/3 浅黄緑	黒, 白	
419	鉢B類	平縁	4D21	F層	190				口縁外ヨコナデ, 体外ハケメ, 内ハケメ	—	無し	無し	10YR7/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
420	鉢A類	小波状	3D20	F層	145	98		61	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	線	曜日文	無し	10YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	
421	鉢A類	平縁	4D8・9・13	灰色 粘土	168	108		68	口縁外ヨコナデ, 体外ハケメ, 内ハケメ・ナデ	線	曜日文	無し	7.5YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	
422	鉢A類	平縁 (面取り)	5D6	灰色 粘土	146	128		57	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	黒, 白, 赤	
423	釜A類	小波状	4D10・15	灰色 粘土	274		339		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	2.5Y7/3 灰	黒, 白, 赤	
424	釜A類	小波状	5D1・2	灰色 粘土	210	260	216	64	外ハケメ, 口縁内ヨコナデ, 体内ハケメ後ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/2 灰白	黒, 白, 赤	底部焼成後 穿孔
425	釜A類	小波状	4D16	F層	216		192		口縁ヨコナデ, 外ハケメ, 内ハケメ後ヨコナデ	線	曜日文	無し	10YR7/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
426	釜A類	小波状	4D8・13	灰色 粘土	210	266	214	66	口縁外ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	10YR7/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
427	釜A類	小波状	4D10・5D6	灰色 粘土	224	292	225	74	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	線	無し	曜日文	10YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	底部焼成後 穿孔
428	釜A類	小波状	4D11	灰色 粘土	218		222		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 内ナデ	線	無し	曜日文	7.5YR7/4 に-い橙	黒, 白, 赤	
429	釜A類	小波状	5D6	灰色 粘土	172	257	197	63	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	10YR8/4 浅黄緑	黒, 白, 赤	底部焼成後 穿孔
430	釜A類	小波状	4C23, 4D4・5	灰色 粘土					口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	線	無し	矢羽状曜日文	10YR5/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
431	釜A類	小波状	4D12	F層	220		224		口縁ヨコナデ, 外ハケメ, 内ナデ	—	無し	無し			
432	釜A類	平縁 (面取り)	3D20	F層	228		270		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	線	曜日文	無し	7.5YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	
433	釜A類	平縁 (面取り)	3D11	F層	193		208		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	—	無し	無し	7.5YR7/6 橙	黒, 白, 赤	
434	釜A類	平縁 (面取り)	3D20, 4D16	F層					口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	—	無し	無し	10YR6/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
435	釜A類	小波状	5D6	灰色 粘土	168		144		口縁ヨコナデ, 外ハケメ, 内ナデ	線	無し	曜日文	7.5YR8/2 灰白	黒, 白, 赤	
436	釜A類	小波状	4D8・13, 5D6	灰色 粘土	193		162		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	線	無し	曜日文	10YR7/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
437	釜A類	平縁 (面取り)	4D20	F層	188	286	191	64	口縁外ヨコナデ, 体外ハケメ, 口縁内ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	7.5YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	底部焼成後 穿孔
438	釜A類	平縁 (面取り)	4D17	灰色 粘土	158	231	170	62	外ハケメ, 口縁内ナデ, 体内ハケメ・ナデ	—	無し	無し	10YR6/3 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
439	釜B類	小波状・受口	4D9・10	灰色 粘土	188		210		外ハケメ, 口縁内ハケメ後ヨコナデ, 体内ハケメ・ナデ	線	曜日文	無し	10YR6/4 に-い黄緑	黒, 白, 赤	
440	釜B類	小波状	4D5・10	灰色 粘土	248	327	252	70	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ・ナデ	線	曜日文, 直線文・康状文	無し	10YR8/2 灰白	黒, 白, 赤	
441	釜B類	小波状	4D5・10	灰色 粘土	330	340	338	96	口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	線	曜日文, 縦流水文・康状文	無し	7.5YR8/4 浅黄緑	黒, 白, 赤	
442	釜B類	小波状	4D4	灰色 粘土	242				口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ナデ	線	直線文・康状文・波状文	矢羽状曜日文	2.5Y7/2 浅黄	黒, 白, 赤	
443	釜B類	平縁	4D8・13, 5D6	灰色 粘土	272				外ハケメ, 口縁内ハケメ, 体内ナデ	線	曜日文, 直線文	矢羽状曜日文	7.5YR8/3 浅黄緑	白・灰 黒(丸 い)	
444	釜B類	平縁 (面取り)	4D12・17	F層	208		198		口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ後ナデ	線	曜日文, 直線文・波状文	無し	7.5YR6/4 に-い橙	黒, 白, 赤	
445	釜B類	平縁 (面取り)	4D11・16	F層	194				口縁ヨコナデ, 体外ハケメ, 体内ハケメ	線	格子状曜日文・直線文・康状文	懸垂文	10YR8/3 浅黄緑	黒, 白, 赤	
446	釜B類	小波状	4D5・10	灰色 粘土	190		166		外ハケメ, 口縁内ハケメ後ヨコナデ, 体内ナデ	線	直線文・康状文	曜日文・懸垂文	7.5YR6/6 橙	黒, 白, 赤	

観 察 表

弥生時代中期土器観察表 (4)

報告書 番号	器形	グリッド	層位	大きさ (mm)			調整	文 様	色 調	胎 土	備 考	
				口径	器高	底径						
447	蓋口類 分類	小波状	4D9・10	灰色 粘土	172	158	口縁コナナデ、外 ハケメ、内ナデ	縞 縞目文・直線文	無し	10YR7/3 に近い	灰、白、 褐色	
448	蓋口類	小波状	4D9・14	F層	168		口縁コナナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ・ナデ	—	無し	10YR4/2 灰黄褐色	灰、白	ハケメが深 林式風
449	蓋口類	小波状	4D4	灰色 粘土	158	168	口縁コナナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	縞 直線文・懸垂文 ・蛇行懸垂文	縞目文2列	10YR7/3 に近い	灰、白、 赤	
450	蓋口類	平縁 (曲取)	3D12	F層	180		口縁コナナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	縞 直線文・波状文 ・懸垂文	無し	5YR6/4に 近い	灰、白	
451	蓋口類	平縁 (曲取)	5D6	灰色 粘土	138	158	外ハケメ、口縁内 ハケメ、体内ナデ	縞 縞目文・直線文 ・蛇行懸垂文・ 縞目文	無し	7.5YR7/4 に近い	灰、白	
452	蓋口類	小波状	3D20	F層	200	210	口縁コナナデ、体 外ハケメ、体内ハ ケメ後ナデ	縞・縞 三角形刺突	縞目文	10YR5/3 に近い	灰、白、 褐色	
453	蓋口類	平縁	3D11	F層			内外摩耗	縞 並行波線(直線 ・弧線状)	波線(直線 ・弧状)	10YR6/2 灰黄褐色	灰、白	
454	蓋口類	平縁	2D10・15、 3D8・11・ 25、4C17 ほか	B層・ D層・ 23層・ Vb層	240		口縁外ハケメ、口 縁内外ミガキ、頸部 内外ミガキ	縞 縞目文・凸帯十 指子状縞目文	凸帯十 指子状縞目文	7.5YR6/6	灰、白、 灰	
455	蓋口類	平縁	2D25、2E5	B層	181		口縁コナナデ、頸 内外ハケメ	縞 縞目文・濁流水文	無し	7.5YR8/2 灰白	灰、白、 赤	
456	蓋口類	平縁	6C12	23層	128 185	120 48	口縁コナナデ、体 外ハケメ、体外ハ ケメ・ナデ	—	無し	7.5YR7/4 に近い	灰、白、 黒	底部穿孔
457	蓋口類	平縁	5C8	SD51 -1層		96 62	外ミガキ7、内ナ デ	—	無し	10YR8/3 浅黄褐色	灰、白	
458	蓋口類	小波状	4B24	Vb層	160	136	口縁コナナデ、体 内外ハケメ	縞 縞目文・直線文 ・懸垂文・斜行 短線文	矢羽状縞目 文・凸帯縞 目文	7.5YR7/4 に近い	灰、白、 赤	
459	高杯		7B22, 7C2	赤層		174	内外ハケメ後ミガ キ	縞・縞 縞目文・凸帯	縞目文	7.5YR5/2 灰黄	灰、白、 黒	
460	高杯		7C2	赤層			外ナデ、内ハケメ 後ナデ	縞・縞 縞目文・懸垂文	無し	2.5Y7/3 浅黄	灰、白、 赤	
461	鉢ナデ類	平縁	4D13	Vb層 [243]			外ナデ、内ハケメ 後ナデ	LR縞文	縞文	2.5Y7/3 浅黄	灰、白	
462	無蓋甕	平縁	3D6	B層	168	186	内外ハケメ後ナ デ	—	凸帯縞文	10YR8/3 浅黄褐色	灰、白	
463	蓋口類	平縁	1E10	A層	92		摩耗	縞 波線(多糸、方 形)	無し	7.5YR4/2 灰黄	灰、白	
464	甕瓦類	平縁	8B16	SD51 -3層	133		内外ナデ	縞 並行波線(弧状)	並行波線 (波状)	10YR7/2 に近い	灰、白	
465	甕瓦類	平縁	7C1	Vb層	59		口縁・頸外コナナ デ、頸内ハケメ、 体内外ナデ	縞 波線(弧状)	無し	10YR7/2 に近い	灰、白、 黄	
466	甕瓦類	平縁	9A20	20c 層			外ナデ、頸内ミガ キ、体内ナデ	縞 並行波線(直線)	無し	10YR7/3 に近い	灰、白、 灰	
467	台付鉢		3D15	21層		76	内ナデ	LR縞文・並行波 線	縞文	10YR8/2 灰白	灰、白、 黒	

弥生時代中期土器観察表 (5)

報告書 番号	器形	グリッド	層位	文様など	地文	原体	口径 (mm)	内面	胎土	色調	備 考
468	深鉢	5B18, 9B12・18ほか	SD51-3層, 赤層, 23層ほか	横線波状文3段	調縄文・朱灰文	LR	268	ナデ	灰、白	10YR2/1黒?	
469	壺?	3D8	21層	多糸波線・刺突	調縄文	LR		底肌	灰、白、赤	10YR6/3に近い	胎土砂質強い
470	深鉢	5A24	SD46-2層	多糸波線	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR4/1黄灰	胎土砂質強い
471	壺	9B24	SD50-3層	多糸波線	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR7/3に近い	胎土砂質強い
472	壺	9B20	SD50-3層	多糸波線	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR6/2灰黄褐色	胎土砂質強い
473	深鉢	5C24	IV-23層	広義の赤滑縄文	調縄文	RL		ミガキ	灰、白、灰	10YR4/1黄灰	胎土砂質強い
474	深鉢	9B25	23層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ミガキ	灰、白	10YR3/1黄褐色	
475	深鉢	9B18	23層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR4/2灰黄褐色	
476	深鉢	9B21	23層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR4/2灰黄褐色	
477	深鉢	9B19	SD50-3層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR2/2黄褐色	
478	深鉢	5B18, 9B15	SD50-3層, SD51-3 層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR7/3に近い	胎土砂質強い
479	深鉢	9B19	SD50-3層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR4/2灰黄褐色	
480	深鉢	B-ベルトトレンチ		広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR6/2灰黄褐色	
481	高杯	5B16	20層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	10YR7/4に近い	胎土砂質強い
482	深鉢	9B23	23層	広義の赤滑縄文	調縄文	LR		ナデ	灰、白	7.5YR6/3に近い	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表(1)

発掘 番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			調査	文様	色調	胎土	備考	
					口徑	器高	最大径						形状
483	蓋C1類	8B21	SD50	3層	168			口縁ヨコナデ、体外摩耗、 体内ナデ	縦凹線	7.5YR6/3 に赤い斑	黒、白、赤	弥生時代後期	
484	蓋A類	7B24	SD50	3層	180			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラケズリ	縦凹線	7.5YR7/3 に赤い斑	黒、長、白	弥生時代後期	
485	蓋A類	10B14	SD50	3層	186			口縁ヨコナデ、体内ヘラケ ズリ	縦凹線	7.5YR6/3 に赤い斑	黒、黒、 赤、黒	胎頭圧痕無し	
486	蓋A類	9B20、10B11	SD50	3層	168			口縁ヨコナデ、体内ヘラケ ズリ	縦凹線	10YR7/4 に赤い斑	黒、白、灰、赤	胎頭圧痕無し	
487	蓋A類	10B13ほか	SD50	3層	144			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ後ヘラケズリ	縦凹線・頸部 斬突	10YR7/3 に赤い斑	黒、長、白、 灰、赤	胎頭圧痕無し	
488	蓋A類	10B7・12	SD50	3層	147			口縁ヨコナデ、体内ヘラケ ズリ	縦凹線	7.5YR8/4 浅黄橙	黒、灰、赤	胎頭圧痕無し	
489	蓋B類	10B12	SD50	3層	168			口縁ヨコナデ、体内外ハケ メ		10YR7/2 に赤い斑	黒、長、白、 灰、赤		
490	蓋A類	9B20	SD50	3層	152			口縁ヨコナデ	縦凹線	10YR6/4 に赤い斑	黒、長、白、灰		
491	蓋B類	6B14	SD50	3層	118			口縁ヨコナデ、体内ハケメ、 ヘラケズリ		10YR5/3 に赤い斑	黒、灰、赤		
492	蓋N類	8B24	SD50	3層				内外ナデ	斜線文(卍、 縄文)、並行沈 線(直線・弧 状)	10YR7/2 に赤い斑	白、灰	天王山式	
493	蓋H類	10B17・18・ 22	SD50	3層	180			口縁ヨコナデ、体外叩き、 体内ヘラケズリ		10YR6/4 に赤い斑	黒、白、赤		
494	蓋C1類	6B13	SD50	3層	192			口縁ヨコナデ、体内ハケメ		10YR6/3 に赤い斑	黒、長、灰		
495	蓋C1類	7B14	SD50	3層	177			内外ヨコナデ		10YR7/2 に赤い斑	黒、長、白		
496	蓋C1類	7B15	SD50	3層	180			口縁ヨコナデ	口縁斬突	10YR5/4 に赤い斑	黒、白、灰、赤	弥生時代後期	
497	蓋C1類	6B19、7B20 ほか	SD50	3層	140	184		口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4 に赤い斑	白、赤	並行線の可能性 がある	
498	蓋C2類	8B19	SD50	3層	178	222		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラケズリ・ナデ		7.5YR7/4 に赤い斑	黒、長、白、 灰、赤		
499	蓋C2類	8B18・19・ 24	SD50	3層	164	180		外ハケメ、口縁内ハケメ、 体内ナデ		10YR6/4 に赤い斑	黒、白、灰		
500	蓋C2類	7B25	SD51	3層	132	217		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ・ナデ		10YR7/4 に赤い斑	黒、長、白、 灰、赤		
501	蓋C2類	7B16	SD50	3層	180			口縁ヨコナデ、体部ハケメ		10YR6/4 に赤い斑	黒、白、赤		
502	蓋C2類		SD50	3層	168			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ後ナデ		7.5YR5/6 明褐色	黒、長、白		
503	蓋C3類	7B14・8B16 ほか	SD50	3層	178	238		口縁ヨコナデ、体ハケメ		7.5YR7/4 に赤い斑	黒、長、白、 灰、黒		
504	蓋F類	7B12・19	SD50	3層	166			口縁ヨコナデ、体内外ハケ メ		10YR6/3 に赤い斑	黒、白、灰		
505	蓋C2類	6B7・8・12	SD50	1-3層	158	174		口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰		
506	蓋C2類	8B11・16	SD50	3層	162			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ・ナデ		10YR6/4 に赤い斑	黒、白		
507	蓋C3類	8B17	SD50	3層	146			口縁ヨコナデ、体ハケメ		10YR6/4 に赤い斑	黒、長、白、 灰、赤		
508	蓋C3類	6B13	SD50	3層	178	184		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ・ヘラケズリ・ ヘラケズリ		10YR7/4 に赤い斑	黒、白、灰		
509	蓋C3類	5B5	SD51	3層	156			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラケズリ		7.5YR7/6 橙	長、白、赤		
510	蓋C3類	6B14・15	SD50	3層	142	182		口縁ヨコナデ、体外ハケメ・ ナデ、体内ハケメ後ナデ		10YR4/3 に赤い斑	黒、白、黒		
511	蓋C3類	6B8	SD50	3層	164	174		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 胎内ナデ×ヘラケズリ		10YR7/3 に赤い斑	黒、白、灰		
512	蓋C3類	9B17	SD83	3層	142	131		口縁ヨコナデ、体外ハケメ		7.5YR8/4 浅黄橙	黒、白、赤		
513	蓋C3類	8B16	SD50	3層	118	146		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ハケメ・ナデ		7.5YR5/3 に赤い斑	黒、長、灰		
514	蓋C3類	9B15・18・ 19・22	SD50・ 83	3層	76	63	78	40	口縁ヨコナデ、体外縮れ、 体内ナデ		5YR6/6橙	黒、長、白、 灰、赤	
515	蓋G類?	9B15	SD50	3層	72	34		34	体外ヘラミガキ、体内ナデ		10YR6/3 に赤い斑	黒、白	
516	蓋G類	8B16	SD50	3層	58	66	88	21	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ナデ		10YR6/2 灰黄橙	黒、白	
517	鉢B類	9B15	SD50	3層	126	74		丸形	口縁ヨコナデ、体内外ヘラ ケズリ・ヘラミガキ	2.5Y7/2灰 黄	黒、長、白、灰		
518	鉢D類	9B18	SD50	3層	78	40		34	外ナデ、内ハケ後ナデ	7.5YR8/5 浅黄橙	黒、長、白、 灰、赤		
519	鉢D類	9B17	SD50	3層	55	38	63	46	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ナデ		10YR7/3 に赤い斑	黒、白、灰	
520	甕L類	6B6	SD51	3層	128				口縁ヘラミガキ、体外ヘラ ミガキ、体内ヘラケズリ	縦凹線	10YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰、赤	

観 察 表

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (2)

報告 番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)				調査	文様	色調	胎土	備考
					口徑	器高	最大径	底径					
521	赤土類	11B6	SD83	3層	116	93	116	尖	外赤彩・ヘラミガキ、口縁内ヘラミガキ、体外ヘラミガキ・ハケメ・ナデ・ヘラナデ	縦凹線	10R4/8赤	白	
522	赤土類	6B15	SD50	3層	134				口縁外ヘラミガキ、口縁内ココナデ、外ハケメ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、灰	
523	赤土類		SD50	3層	168				口縁ココナデ、口縁内ハケメ、体内ヘラナデ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、灰	
524	赤土類	7B11・15、 9B11・12・ 16・18	SD50	3層	150	214	222	23	口縁ココナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、黒	
525	赤土類	9B15、 10B11・13	SD50	3層			300	54	口縁ココナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		10YR7/3 に赤い裏地	黒、長、白、灰	
526	赤土類	6B6、7B12	SD50	3層	193				口縁内ヘラミガキ、他摩耗	円形竹管文	7.5YR8/2 灰白	白、赤、赤	
527	赤土類	7B13・14	SD50	3層	124	248	233	65	口縁ココナデ、外ハケメ、内ナデ・ハケメ		7.5YR7/4 に赤い裏地	黒、白、灰	
528	赤土類	6D8・14他	SD50	3層	142				口縁ココナデ、黒・体内ハケメ		10YR7/4 に赤い裏地	黒、長、白	
529	赤土類	8B16	SD50	3層	316				内外赤彩・ヘラミガキ	円形浮文	7.5R4/6赤	黒、白	
530	赤土類	5C8、6B3・ 24	SD50	3層				234	外ヘラミガキ、内ナデ	縦凹線	10YR7/3 に赤い裏地	黒、白、灰	弥生時代後期
531	赤土類	6B10	SD50	3層	127				外ヘラミガキ、内ココナデ		7.5YR7/6 赤	黒、長、白、灰	
532	赤土類	5C8・14・ 20、9B20	SD50	3層	146				口縁赤彩・ヘラミガキ、頸外ハケメ後ヘラミガキ、頸内ハケメ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ		10YR7/4 に赤い裏地	黒、白、赤、赤	弥生時代後期?
533	赤土類	8B17	SD50	3層	148				口縁内ヘラミガキ、体外ハケメ後ナデ、体内ナデ		10YR7/3 に赤い裏地	黒、長、白、灰、赤	
534	赤土類	10B14	SD50	3層	150				口縁ハケメ後ココナデ		7.5YR7/4 に赤い裏地	黒、白、赤、黒	
535 536	赤土類		SD50	1-3層	92	126	21		口縁ココナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		7.5YR6/3 に赤い裏地	黒、長(多)、灰	
537	赤土類	7B14	SD50	3層	100				口縁・体外ヘラミガキ、体内ナデ		10YR7/6 明裏地	黒、長、白	
538	赤土類	7B12	SD50	3層	102	111			外ヘラミガキ、口縁内ココナデ、体内ハケメ・ナデ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、灰	
539	赤土類	11B10	SD50	3層	166				口縁ココナデ	縦凹線	7.5YR7/4 に赤い裏地	黒、白、赤、灰	
540	鉢A型	9B17・ 11B10	SD50	3層	141				内外ヘラミガキ		10YR7/4 に赤い裏地	黒、白、灰	高杯B型の可能性がある
541	高杯B型	B区	SD50	3層	164				杯部・頸外ハケメ後ヘラミガキ、頸内ナデ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白	
542	高杯B型	6B15	SD50	3層	132				内外ヘラミガキ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、灰	
543	高杯A型		SD50	3層	208				口縁ココナデ、杯下・頸外ヘラミガキ		7.5YR8/4 浅裏地	黒、白、灰	弥生時代後期
544	高杯	5B23	SD51	3層					外赤彩・ヘラミガキ、内ナデ		10YR7/3 に赤い裏地	白、灰	
545	高杯A型	8B19	SD50	3層	248				内外ヘラミガキ	縦凹線	10YR7/4 に赤い裏地	黒、白、灰	弥生時代後期
546	高杯A型	8B11・16・ 17・19ほか	SD50	3層			136		杯部ハケメ後ヘラミガキ、頸外ヘラミガキ、頸内ナデ、ヘラミガキ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、白、灰	弥生時代後期
547	高杯B型	6B11・13・ 14・15・19	SD50	3層	258				内外ヘラミガキ	縦凹線	10YR7/4 に赤い裏地	黒、白、灰、赤	
548	高杯A型	6B15	SD50	3層					杯部・頸外ヘラミガキ、頸内ナデ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、長、灰、赤	
549	蓋A型	11B16	SD83	3層	48	43	82	18			10YR6/3 浅裏地	白、灰	器面摩耗
550	蓋B型	10B13	SD50	3層	132	52		38	外赤彩・ヘラミガキ、内ヘラミガキ		7.5R4/6赤	黒、白、赤、赤	
551	高杯A型		SK55、 SD83	3層	316				外・杯内ヘラミガキ、赤彩、頸内ハケメナデ		10R5/6赤	黒、長、白、灰	
552	高杯C型	7B17	SD50	3層	208	120	126		外・杯内赤彩・ヘラミガキ、頸内ナデ・ハケメ・ココナデ		10R6/6赤 澄	黒、白、灰	
553	高杯C型	10B14・15・ 16・25ほか	SD50	3層	212				内外ヘラミガキ		7.5YR7/6 澄	黒、長、灰、白、赤	
554	高杯F2型	6B13・22	SD50	3層				184	杯・頸外ヘラミガキ、頸内ナデ・ハケメ		10YR6/4 に赤い裏地	黒、長、白	
555	高杯F2型	8B16	SD50	3層	142				内外ヘラミガキ		10YR7/2 に赤い裏地	黒、白、赤、黒	
556	高杯C型	10B14	SD50	3層	136				頸外ヘラミガキ、頸内ナデ、ココナデ		7.5YR6/4 に赤い裏地	黒、白、赤	
557	高杯F型	6B8	SD50	3層					内ヘラミガキ	横行文・直線文	10YR8/2 灰白	白(少量)	
558	器台C型	9B18	SD83	3層	215	118		110	内外赤彩・ヘラミガキ		10R5/8赤	長、白、赤	
559	器台C型	7B1・20、 9B10他	SD50	3層ほか	219				外・内赤彩・ヘラミガキ、頸内ナデ		2.5YR5/6 明赤地	黒、白、灰、赤(大)	

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (3)

発掘 番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			調整	文様	色調	胎土	備考
					口徑	器高	最大径					
560	器台 K 類	7B12	SD50	3層	106	103	122	外・受部ヘラミガキ、脚内ナデ・ヘラミガキ		10YR6/2 灰黄緑	黒、白、 灰、赤	
561	器台 K 類		SD50	3層	68	77		93 外・受内ヘラミガキ、脚内ナデ・ヘラミガキ		7.5YR7/4 に 白 い 焼	黒、白、灰	
562	釜 A 類	10B18・24		23層	164			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ	縦凹線	7.5YR8/4 浅黄緑	黒、長、赤	胎直圧痕無し
563	釜 B 類	7B22		23層	167			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		7.5YR8/3 浅黄緑	黒、白、赤	
564	釜 B 類	9B22		23層	237			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内厚具		5YR8/8 黄	黒、白、灰	
565	釜 C1 類	7B24		23層	133	186	162	34 口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ヘラナデ	縦凹線	5YR7/4 に 白 い 焼	黒、赤	弥生時代後期
566	釜 C 類	7C1		23層	152			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ・ハケメ	縦凹線・波状文・刺突・直線文	7.5YR7/4 に 白 い 焼	黒、長、白、赤	弥生時代後期
567	釜 C 類	8B23		23層	165	278	197	42 口縁ヨコナデ、体外ハケメ	刺突	7.5YR8/3 浅黄緑	黒、赤	弥生時代後期
568	釜 C 類	6C5		23層	118	205	170	44 口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ハケメ		10YR7/4 に 白 い 焼	黒、白、灰、赤	弥生時代後期
569	釜 C1 類	7B21・7C1		23層	158		206	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ・ヘラケズリ	刺突	7.5YR8/3 浅黄緑	黒、赤、白	
570	釜 C1 類	9B21		23層	126			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR8/1 灰白	黒、白、赤	
571	釜 C1 類	7B22		23層	171			口縁ヨコナデ、体外ハケメ		7.5YR7/4 に 白 い 焼	黒、白	
572	釜 C1 類	8B21		23層	194		216	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		10YR8/2 灰白	黒、長、白、赤	弥生時代後期
573	釜 C2 類	6B12		23層	168			口縁ヨコナデ、体外ハケメ		10YR6/4 に 白 い 黄 焼	黒、白、灰	
574	釜 C2 類	6B25・7B21		23層	142			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 に 白 い 黄 焼	黒、白、灰、赤	
575	釜 C2 類	10B25		23層	136			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/4 に 白 い 黄 焼	黒、長、白、赤	
576	釜 C2 類	7B22		23層	214		234	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内厚具		7.5YR7/6 黄	黒、白、赤	
577	釜 C3 類	7B23		23層	218			口縁ヨコナデ、体外ハケメ		10YR6/6 明黄緑	黒、白、灰	
578	釜 C3 類	4C25		23層	246			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		10YR6/3 に 白 い 黄 焼	黒、長、白、灰	
579	釜 C3 類	6B12・16・17		23層	142		214	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ		10YR6/5 に 白 い 黄 焼	黒、長、白、赤	
580	釜 C3 類	6B12		23層	170			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		10YR5/2 灰黄緑	白、砂質強い	
581	釜 C2 類	7B22		23層	138		162	52 口縁ヨコナデ、体外ハケメ		7.5YR8/1 灰白	黒、長、白、灰、赤	
582	釜 C1 類	7B9・24		23層	153		156	口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR7/4 に 白 い 黄 焼	黒、灰、赤	
583	釜 C1 類	9B18・19		23層	134		136	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR6/4 に 白 い 焼	黒、白、赤	
584	釜 C1 類	7B24		23層	144			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ		7.5YR6/6 黄	黒、白、赤	
585	釜 C2 類	7B22		23層	120			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、内ヘラケズリ		7.5YR7/4 に 白 い 焼	黒、長、白、赤	
586	釜 N 類	10B24		23層			62	口縁内ヨコナデ、体内ハケメ	外磨・刺突	7.5YR7/4 に 白 い 焼	長(多)、白	弥生時代後期
587	釜 C3 類	8B21		23層	121	111	112	22 口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ハケメ		7.5YR8/4 浅黄緑	白、灰、赤	弥生時代後期
588	釜 C3 類	8B24		23層	130		150	口縁ヨコナデ、体内外ハケメ		7.5YR8/2 灰白	黒、白、灰、赤	
589	釜 C3 類	7B21		23層	114			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		5YR7/6 黄	黒、長、白、灰、赤	
590	釜 C3 類	6B25		23層	93	70	90	丸底 口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ミガキ		10YR7/2 に 白 い 黄 焼	黒、灰、赤	
591	釜 C 類	7B21		23層	158			口縁ヨコナデ、体外ハケメ	縦目文・波線	5YR7/4 に 白 い 焼	長、白	弥生時代後期
592	釜 C 類			23層	174			口縁ヨコナデ	縦目文	7.5YR8/4 浅黄緑	白、灰、赤	弥生時代後期
593	甕 I 類	6C3		23層	150			口縁内・体外ヘラミガキ	縦凹線	10YR7/4 に 白 い 黄 焼	黒、赤、灰	弥生時代後期
594	甕 I 類	6B24・6C5		23層	152			口縁ヘラミガキ、体外ハケメ後ヨコナデ、体内ナデ		7.5YR8/3 浅黄緑	黒、白、灰、赤	
595	甕 I 類	6B11		23層	128			内外ヘラミガキ		7.5YR7/3 に 白 い 焼	黒、長、白	
596	甕 I 類	10B17		23層	128			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/4 に 白 い 黄 焼	黒、灰	
597	甕 M 類	6C2・5		23層	168			内外ヘラミガキ	刺突	10YR7/3 に 白 い 黄 焼	黒、長、白、灰、赤	
598	甕 M 類	6B19		23層	173			内外ヘラミガキ	円形浮文	10YR6/3 に 白 い 黄 焼	黄緑、白、赤	
599	甕 M 類	5B9		23層				外ハケメ後ヘラミガキ、口縁内ヘラミガキ、脚内ハケメ、体内ナデ		10YR6/3 に 白 い 黄 焼	黒、白	

観 察 表

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (4)

発掘番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			調査	文様	色調	胎土	備考	
					口徑	器高	最大径						
600	壺V類	6C9		23層				外ヘラミガキ、内ナデ	直線文・鋸歯状・内彫り	7.5R4/6赤	灰、赤		
601	壺V類	10B16		23層	158			口縁ヨコナデ、胴・体外ハケメ、頸内ナデ、体内ヘラミガキ		10YR8/4浅黄褐色	灰、灰	弥生時代後期	
602	壺S類	8B22		23層	96			口縁・体外ヘラミガキ、体内ハケメ・ナデ		10YR7/3に赤い黄褐色	灰、白、赤	弥生時代後期	
603	壺C類	6C3・4・7・8		23層		212	68	外ハケメ後ヘラミガキ、内ハケメ後ナデ		7.5YR7/6褐色	灰、白、赤、黒	弥生時代後期	
604	壺I類	7B17		23層	127			口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ後ナデ		7.5YR7/4に赤い黄褐色	灰、白、灰		
605	壺I類	10B19		23層	140			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ		10YR6/6黄褐色	灰、長、灰(多)		
606	壺I類	6B20・25		23層	120		142	内外ヘラミガキ、頸内ハケメ		7.5YR7/4に赤い黄褐色	白(少)		
607	壺S類	7B24		23層	75	78	108	丸底 口縁内・外赤彫・ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ		10R5/6赤	灰、白、灰、赤	口縁部小孔2	
608	壺	7B23		23層	124			体外ハケメ後ヘラミガキ、体内ハケメ		10YR8/3浅黄褐色	灰、白、黒		
609	鉢A類	9B19		23層	124			内外赤彫・ヘラミガキ		10Y4/8赤	灰、白、赤		
610	鉢A類	8B19・21・23		23層	155			内外赤彫・ヘラミガキ		10R6/8赤褐色	灰、長、白、灰、赤		
611	鉢A類	7B21・24・25		23層	158		104	内外ヘラミガキ	陶器輪	10YR5/4に赤い黄褐色	灰、灰、赤		
612	鉢A類	9B18		23層	156	120		内外ヘラミガキ		7.5R4/8赤	灰、灰(少)		
613	鉢A類	9B18		23層	143	94	60	杯内赤・脚外ヘラミガキ、脚内ヨコナデ		10YR7/3に赤い黄褐色	灰、白、黒		
614	高杯A類	9B16・21・22他		23層	220			外ハケメ・ヘラミガキ、内赤彫・ヘラミガキ	短直線鋸歯状文	10YR7/4に赤い黄褐色	灰、長、白、灰	弥生時代後期	
615	高杯A×高台B×C類	10B21		23層	300			内外摩耗		10YR8/3浅黄褐色	灰、白、灰、赤	弥生時代後期	
616	高杯A類	7B24		23層	160	90	68	杯内赤・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ・ヨコナデ		7.5YR7/4に赤い黄褐色	灰、白、灰		
617	高杯F類	4C14		23層	121	97	106	杯部・脚外ヘラミガキ、脚内ヘラミガキ、ヨコナデ		10YR6/4に赤い黄褐色	灰、白		
618	蓋B類	4C10		23層			28	内外ヘラミガキ	刺突	7.5YR7/3に赤い黄褐色	白、灰		
619	高杯C類	7B22		23層			124	杯部・脚外ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケメ・ヨコナデ		10YR7/4に赤い黄褐色	灰、白、灰、赤		
620	高杯C類	7B25		23層			102	外・杯内ヘラミガキ、脚内ナデ	内彫り透かし8か所	7.5YR8/3浅黄褐色	灰、白、灰		
621	高杯C類	7B17		23層			158	内外ヘラミガキ		7.5YR8/4浅黄褐色	灰、白、灰、赤		
622	高台A類	7B25		23層	164			脚内ハケメ・ナデ、他摩耗		7.5YR7/4に赤い黄褐色	灰、長、白、灰、赤	弥生時代後期	
623	高台A類	7B25		23層				外ヘラミガキ、内ナデ		10YR8/6黄褐色	灰、白、赤	弥生時代後期	
624	高台	9B10		23層			156	脚端ヨコナデ、脚外ヘラミガキ、脚内ナデ		10YR7/4に赤い黄褐色	灰、長、白、灰、赤	弥生時代後期	
625	高台A類	9B18		23層	129	78	86	外・内赤彫・ヘラミガキ、脚内ナデ・ハケ後ヘラミガキ	陶器輪	10YR7/3に赤い黄褐色	灰、白、灰		
626	鉢D類	10B17		23層	157	66	54	内外ヘラミガキ		7.5YR7/4に赤い黄褐色	灰、白、灰、赤		
627	鉢D類	7B21		23層			32	外ナデ、内彫り直紋		10YR6/4に赤い黄褐色	灰、白、黒		
628	鉢D類	9B18		23層	80	40	36	内外ヘラミガキ		10YR6/4に赤い黄褐色	灰、白	古墳時代中～後	
629	釜A類	6C3	SD51	1層	200	216		外・口縁内摩耗、体内ハケメ後ナデ		7.5YR6/4に赤い黄褐色	長、白、灰、赤		
630	釜C2類	9B13、10B12・18	SD83	1層	158			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラケズリ		7.5YR8/3浅黄褐色	灰、白、灰、赤		
631	釜C2類	C区	SD83	1層	154	231	215	23	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ハケメ・ナ		10YR7/6明黄褐色	灰、白、灰	
632	釜C3類	9B11	SD83	1層	125	244	212	69	口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ヘラナデ・ナデ		7.5YR6/2灰褐色	灰、長、白、赤	
633	釜C3類	10B8	SD83	1層	132	134			口縁外ヘラナデ、体外ハケメ、内ナデ		7.5YR8/4浅黄褐色	灰、白、灰、赤	
634	鉢E類	7B18	SD50	1層	82	69	91	24	口縁ヨコナデ、体外ハケメ後ナデ、体内ナデ		10YH5/3に赤い黄褐色	灰、長、白	
635	鉢E類		SD50	1層	70	59	92	25	外ハケメ、口縁内ヨコナデ、体内ハケメ・指間直紋・ナ		7.5YR6/4に赤い黄褐色	灰、長、白、灰、赤	
636	釜C3類	9B13・18ほか	SD83	1層ほか	208	281	290	80	口縁外ヨコナデ、体外・内ヘラミガキ		10YR7/3に赤い黄褐色	灰、白、灰	壺1類の可能性もある
637	壺C類	10B12	SD83		157	303	290	66	口縁ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ	陶器輪、線状浮文、刺突	10YR7/4に赤い黄褐色	長、赤、赤	
638	壺I類	9B21	SD83	1層	103			内外ヘラミガキ		7.5YR8/3浅黄褐色	灰、白、赤		

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (5)

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			形状	調査	文様	色調	胎土	備考
					口徑	器高	最大径						
639	高杯C型	9B11	SD83	1層		226			外ハケム後ヘラミガキ、内ヘラミガキ		5YR6/3黄緑	黒、白、赤	
640	高杯H型		SD50	1層	140	115	100		外・杯内赤彩・ヘラミガキ、脚内ヘラミガキ		10R5/8赤	黒、長、白	赤彩
641	高杯F型		SD50	1層			236		外ヘラミガキ、内ハケム・ヨコナデ		10YR7/3 に赤い黄緑	黒、白、黒	
642	釜C2型	11B16	SD83		163	249	209	34	口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ハケム・ナデ		10YR6/4 に赤い黄緑	黒、長、白	
643	漆台C型	7B10、8B20	SD50	1-2層	256				外摩耗、内ヘラミガキ		7.5YR7/3 に赤い黄緑	黒、白、灰	弥生時代後期
644	高杯F型	6B14	SD50		190				内ヨコナデ	藤日文・赤線文	10YR6/2 灰黄緑	長、灰	
645	釜C2型	5A25、6A16	SD47	2-5層	180				口縁ヨコナデ、体内外ハケム		7.5YR7/3 に赤い黄緑	黒、赤	弥生時代中期の 釜の可能性ある
646	釜C1型	5A25、6A16	SD47	2-5層	176				口縁ヨコナデ、体内外ハケム	陶器線	7.5YR3/1 黒濁	黒、白	弥生時代後期
647	釜C1型	6B7	SD46	2層	186				体内ヘラケズリ、他摩耗		7.5YR8/2 灰白	黒、白、灰、赤	弥生時代後期
648	釜C2型	5A20、6B24	SD46	2層	270		316	40	口縁外ヨコナデ、口縁内ヘラミガキ、体外ハケム、体内ナデ		7.5YR6/4 に赤い黄緑	黒、白、赤、灰	
649	釜M型	5A25	SD46	2層					頸ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ		7.5YR8/3 黄黄緑	黒、白、灰	
651	釜C2型	8B22ほか	SD50 SK85	3層 3層	149	263	309	40	口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ナデ・ハケム		7.5YR8/4 黄黄緑	黒、長、白	
652	釜C3型		SK85	3層	180				口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ヘラナデ		7.5YR5/6 明褐色	黒、長、白	
653	釜C3型		SK85	3層	152				口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ハケム後ナデ		7.5YR6/6 灰、赤	黒、長、白、赤	
654	釜M型		SK85	3層	168				口縁ヨコナデ		7.5YR7/6 黄	黒、白、灰、赤	頸部摩耗
655	高杯F型	3D20	SK70		112				内外ヘラミガキ		5YR6/6黄	黒、白、赤	
656	鉢M型	3D25	SK70		129	78		4.4	口縁外ヨコナデ、体外ハケム・ヘラミガキ、内ヘラミガキ		7.5YR7/4 に赤い黄緑	白、赤	
657	壺I型	3D25	SK70		117				口縁・体外ヘラミガキ、体内ナデ		5YR8/4黄緑	黒、白、灰、赤	
658	壺G型	3D25	SK70		36	39	44	20	口縁・体外赤彩・ヘラミガキ、体内ナデ		10YR7/3 に赤い黄緑	黒、白、灰	
659	壺G型	3D25	SK70		70	71	65	35	口縁ヨコナデ、体ハケム・ナデ		7.5YR7/6 灰、赤	黒、長、白、灰、赤	
660	(壺C×E型)	3D25	SK70		130				口縁ヨコナデ	藤日文	5Y7/6黄	黒、白、灰	弥生時代中期
661	釜C3型		SK55	3層	192	258	216	26	口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ハケム・ナデ		10YR7/3 に赤い黄緑	黒、白、灰、黒	
662	壺N型		SK55	3-5層	159	300	222	69	口縁・体外ヘラミガキ、体内ヘラケズリ		10YR8/2 灰白	黒、長、黄	
663	鉢M型	6C3-4	SK55	2層	300				口縁外ヨコナデ、体外ハケム、体内ヘラミガキ		7.5YR7/4 に赤い黄緑	長、白、赤	
664	壺G型		SK55	3層	98	132	145	美	口縁ヨコナデ、体外ハケム後ナデ・体内ナデ・ハケム		10YR7/3 に赤い黄緑	白、灰	
665	鉢C型		SK55	3層				24	外ヘラケズリ、内ヘラナデ・ナデ		7.5YR7/3 に赤い黄緑	白、灰、赤	
666	釜C3型		SD33	3層	131	163	144	30	口縁ヨコナデ、体ハケム		10YR7/3 に赤い黄緑	黒、長、白	
667	釜C1型		SD33	2層				60	口縁ヨコナデ、体ハケム	陶器線	10YR8/3 黄黄緑	黒、長、白	弥生時代後期
668	漆台A×C型	8B9	SD33	3層				102	受け部・外赤彩・ヘラミガキ、脚内ハケム後ナデ・ヨコナデ		10YR7/2 に赤い黄緑	黒、白、灰	
670	釜C2型		SK40		138				口縁ヨコナデ、体ハケム		7.5YR8/4 黄黄緑	黒、白、灰、赤	
671	釜C3型		SK40	1層	186		202		口縁ヨコナデ、体ハケム	刺突2列	7.5YR7/3 に赤い黄緑	黒、長、灰	
672	釜C2型		SK95	2層	158	190	196	34	口縁ヨコナデ、体外ハケム・ヘラケズリ、体内ハケム・ナデ		10YR6/3 に赤い黄緑	黒、白、灰	古墳時代中期
673	高杯G型		SK95	2層	204	123	136		口縁ヨコナデ、体外ハケム		10YR7/4 に赤い黄緑	黒、長、白	古墳時代中期
674	高杯G型		SK95	1層	182				外ヘラミガキ、内ハケム後ナデ		10YK5/4 に赤い黄濁	黒、長、白	古墳時代中期
675	高杯G型		SK95	2層			129		外・内下ヘラミガキ、内上巻き上げ痕		10YR6/3 に赤い黄濁	黒、白	古墳時代中期
676	釜C3型	6C7		2層	164				口縁ヨコナデ、体ハケム		10YR7/3 に赤い黄緑	黒、白	
677	釜C3型	3D10		2層	176		226		口縁ヨコナデ、体外ハケム、体内ナデ		5Y7/6黄	黒、長、白、赤	
678	釜A型	3D19		2層	150				口縁ヨコナデ、体内ハケム	陶器線、刺突	7.5YR7/6 黄	黒、白、赤	

観察表

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (6)

発掘番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			調整	文様	色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径					
679	釜Ⅲ類	3D15 4D11		21期 VIb層	130			口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、内摩耗		5YR6/6橙	黒、灰、白	
680	鉢Ⅲ類	6C9		21期	102	74	106	50	口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、体内摩耗	10YR8/3 浅黄緑	黒、灰、白	
681	高杯FⅢ類	6C7		21期				202	内外ヘラミガキ	7.5YR6/4 に白焼	黒、長	
682	壺Ⅰ類	3D10		21期	114				内外摩耗	7.5YR6/4 に白焼	白、赤	
683	手づくね土器?	3D9		21期				30	外側面江底、内ナデ	7.5YR8/4 浅黄緑	黒、白、灰	
684	須恵器杯蓋	6C17		20期	128	48		130	頂外口コケズリ、他口コナデ	2.5Y7/1灰 白	白(少)	
685	鉢Ⅲ類	5C20		20期	104				口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ・ヘラナデ	10YR7/2 に白焼	白、灰、赤	
686	鉢Ⅲ類	4B24		20期	96	69	109	50	外ヘラミガキ、内ナデ	10YR6/3 に白焼	白、灰	
687	鉢Ⅲ類	4B25		20期	74	38		40	内外側面江底	10YR7/4 に白焼	黒、白、赤	古墳時代中期?
688	釜C2類	5B8		VIc層	119	129	11.1	丸底	口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	10YR6/3 に白焼	黒、長、白、赤	弥生時代後期
689	長差bⅢ類	6B20・25		23期 VIc層	154				口縁部ヨコナデ、体外ハケメ 後ヘラケズリ、体内ヘラナデ	10YR6/3 に白焼	黒・長・白	古墳時代後期?
690	壺NⅢ類	7B17		VIc	138	224	196	50	口縁部ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ハケメ	10YR7/3 に白焼	黒、白、黒	
691	手づくね土器	6B20		VIb層	44	37		46	内外側面江底	10YR5/3 に白焼	黒、白、灰、赤	古墳時代中期?
692	壺CⅢ類	6C2		VIc層			68	20	外ヘラミガキ、内ナデ	7.5YR7/6 橙	黒、長、白、赤	
693	長差aⅢ類	11B19・24	旧川道 (SX88)	古灰砂	174				口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラケズリ	10YR7/3 に白焼	黒、白、灰、赤	古墳時代後期
694	長差aⅢ類	11B3	旧川道 (SX88)	古灰砂	206				口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラケズリ	10YR6/4 に白焼	黒、長、赤、白	古墳時代後期
695	長差aⅢ類	10A19	(SX88)	古灰砂	190				口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ナデ	10YR6/2 灰黄緑	黒、長、赤	古墳時代後期
696	長差aⅢ類	11A21	(SX88)	古灰砂	160				口縁部ヨコナデ、体ハケメ	10YR6/3 に白焼	黒、白、黒	古墳時代後期
697	瓶	11B8	(SX88)	古灰砂 ⑤	343		352		口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ナデ	7.5YR8/2 灰白	黒、白、灰	古墳時代後期
698	杯a1Ⅲ類	11A25、 11B16	(SX88)	古灰砂 ⑤	130	45		丸底	口縁部ヨコナデ、体外ヘラミガキ、 体内摩耗	7.5YR7/4 に白焼	黒、黄緑、白、赤	古墳時代後期
699	杯a1Ⅲ類	11A10	(SX88)	古灰砂	151	60		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	7.5YR8/2 灰白	白、赤	古墳時代後期
700	杯a1Ⅲ類	11A12	(SX88)	古灰砂	140	57		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	10YR5/3 に白焼	黒、長、白、灰	古墳時代後期
701	杯a1Ⅲ類	11A11	(SX88)	古灰砂	148	60		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	10YR6/3 に白焼	黒、白、灰	古墳時代後期
702	杯a1Ⅲ類	11A25	(SX88)	古灰砂	152	61		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	7.5YR8/2 灰白	黒、長	古墳時代後期
703	杯a1Ⅲ類	11B18	SX88	砂類	152	66		丸底	外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	7.5YR6/2 灰黒	黒、白、赤	古墳時代後期、 漆継ぎ
704	杯a2Ⅲ類	11A12	(SX88)	古灰砂	144				外ヘラミガキ、内ヘラミガキ・ 黒色処理	7.5YR6/2 灰黒	黒、白、灰	古墳時代後期
705	杯bⅢ類		SX88	砂類	125	54		47	口縁部ヨコナデ、体外ナデ、 体内ヘラミガキ・黒色処理	7.5YR6/1 褐色	黒、長	古墳時代後期
706	杯c2Ⅲ類	12B1	(SX88)	古灰砂	124	54		丸底	内外ヘラミガキ	7.5YR8/1 灰白	白	古墳時代後期
707	杯c1Ⅲ類		SX88	砂類	111	57		丸底	内外ヘラミガキ	7.5YR8/2 灰白	黒、白	古墳時代後期
708	杯c2Ⅲ類	11A16	(SX88)	古灰色	133	46		丸底	内外ヘラミガキ	7.5YR6/1 褐色	黒、黄緑、白	古墳時代後期
709	鉢Ⅲ類	11A20	(SX88)	古灰砂	90		104		口縁部ヨコナデ、体外ハケメ、 体内ヘラミガキ	10YR7/3 に白焼	黒、長、白	古墳時代前期?
710	壺Ⅰ類	11A11	(SX88)	古灰砂	97	98	91	丸底	口縁部ヨコナデ、体外ヘラミガキ、 口縁内ハケメ、体内ナデ	10YR8/1 灰白	黒、灰、赤	古墳時代後期
711	壺cⅢ類	11A12	(SX88)	古灰色	112		122		口縁部ヨコナデ、体ナデ	7.5YR8/1 灰白	黒、白、灰、赤	古墳時代後期
712	壺aⅢ類	11B16	(SX88)	古灰砂 ⑤	132				コナデ・側面江底	10YR6/3 に白焼	黒、白、灰 (多)	古墳時代後期
713	高杯a×bⅢ類	11B3	(SX88)	古灰砂	196				内外ヘラミガキ	7.5YR7/4 に白焼	黒、長、白、灰	古墳時代後期
714	高杯aⅢ類	11B18	旧川道 (SX88)	古灰砂 ⑤				133	外・内下ヘラミガキ、内上 ヘラケズリ	10YR7/2 に白焼	黒、長、灰	古墳時代後期
715	高杯a×bⅢ類	11A6	(SX88)	古灰砂	208				内外ヘラミガキ	10YR6/3 に白焼	黒、長	古墳時代後期
716	高杯bⅢ類	10A9	(SX88)	古灰砂				138	脚外ヘラミガキ・コナデ、 脚内上向き上げ肌・ヘラミガキ・ コナデ	10YR6/2 灰黄緑	黒、白、灰	古墳時代後期
717	釜C3Ⅲ類	SK49			210		262		口縁部ヨコナデ、体ハケメ	10YR7/3 に白焼	黒、長、白、灰、赤	古墳時代中期?

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (7)

報告 番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)		調査	文様	色調	胎土	備考	
					口徑	器高 最大径						底径
718	蓋C3類		SK6	I層	148	160	口縁摩耗、体外ハケメ、体内ハラナデ		7.5YR7/2 明黄灰	黒、白	弥生時代後期?	
719	蓋C1類	7B23		Ⅱ期	185		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハラナデ	縦四線	7.5YR8/4 浅黄橙	黒、白、灰、赤	弥生時代後期	
720	蓋C2類	7B25		Ⅱ期	131		口縁ヨコナデ、体ハケメ	縦突	7.5YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰、赤	弥生時代後期	
721	壺	7B24		Ⅱ期		53	26	体外ナデ・ハラナデ、体内ナデ	10YR7/3 に濃い黄橙	黒、白、灰		
722	鉢E類	11A14		VⅡa層	94	69	95	50	口縁ヨコナデ、体・体外ハケメ、体内ナデ・ハケメ	10YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰、赤	
723	蓋B類	7A11・12		VⅡb層	102	47			内外ハラミガキ	10YR8/2 灰白	黒、長、白、赤	
724	器台M類	2D15・20		B・D層	101	110	120		外赤彩・ハラミガキ、内ハラミガキ	1B5/6赤	黒、長、白、灰	
725	高杯b類	7B19		VⅡb層	164	115		118	外・杯内ハラミガキ、脚内摩耗	10YR8/2 灰白	黒、白、灰	古墳時代中～後期
726	壺b類	6C7、7B6・11		VⅡb層	145				口縁ヨコナデ、脚～体ハケメナデ	10YR6/3 に濃い黄橙	黒、長、白、灰	古墳時代中～後期
727	煎豆器杯蓋	7B19		VⅡb層	130	49			頸部クロコケズリ、他口縁ナデ	N5/灰	白	古墳時代後期
728	煎豆器杯身	6C5		VⅡb層	96	39	116	116	底外口クロケズリ、他口縁ナデ	N4/灰	白(少)	古墳時代後期
729	煎豆器蓋	10B8		Vd層		80			・体下口クロケズリ、他口縁ナデ	N4/灰	白(多)	古墳時代後期
730	壺E類?	6A23		VⅡb層		70	35		外ハラミガキ、内ハケメ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰	
731	手づくね土器	4D7		VⅡb層	33	33	39	33	内外摩耗	5YR8/3 黄橙	黒、白、赤	古墳時代中期?
732	手づくね土器	4D16		VⅡb層	37	31	46	40	外側面圧痕、内ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	黒、白、灰、赤	古墳時代中期?
733	手づくね土器	4D11		VⅡb層	39	34	41	内外摩耗	7.5YR7/2 明黄灰	黒、白、灰	古墳時代中期?	
734	手づくね土器	6B25		VⅡb層	46	37	35	外側面圧痕、内ナデ	10YR6/3 に濃い黄橙	黒、白、灰	古墳時代中期?	
735	手づくね土器	6C21		VⅡb層			27	外ハケメ、内ナデ	10YR6/4 に濃い黄橙	黒、白、灰	弥生中期?	
736	手づくね土器	4D11		VⅡb層	37	25	41	34	外側面圧痕、内ナデ	7.5YR8/4 浅黄橙	黒、黄、白、赤	古墳時代中期?
737	手づくね土器	4D16		VⅡb層	38	35	45	30	外側面圧痕、内ナデ	7.5YR7/4 に濃い黄橙	黒、長、灰	古墳時代中期?
738	手づくね土器	4D6		VⅡb層	39	30	40	内外摩耗	10YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰	古墳時代中期?	
739	手づくね土器	7B21		VⅡb層			35	外ナデ、内ハケメ	7.5YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰	古墳時代中期?	
740	蓋C3類	6C8		VⅡb層	168				口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	10YR7/3 に濃い黄橙	黒、白、灰、赤	
741	蓋C1類	6C10		B層	180	183			口縁ヨコナデ、外ハケメ、内ハケメ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	黒、長、白、赤	
742	蓋B類	2E6		B層	132				口縁ヨコナデ、体内ナデ	7.5YR6/3 に濃い黄橙	黒、白、灰	弥生時代後期
743	壺V類	3E1、10B17		VⅡb層		113			口縁ヨコナデ、体内外ハケメ	7.5YR7/3 に濃い黄橙	黒、長、白、赤	
744	壺H類	9B3		VⅡb層	63	149	130	19	口縁ハケメ後ヨコナデ、体外ハラミガキ、体内ナデ・ハケメ	10YR7/4 に濃い黄橙	黒、長、白、赤	弥生時代後期
745	蓋A類	6C3		VⅡb層	53	39	80	22	内外ハラミガキ	10YR6/2 灰黄橙	黒、白、赤	
746	高杯E類	6B7		3I層					杯部摩耗、脚外赤彩・ハラミガキ、脚内ナデ	7.5R4/8赤	白、灰、赤	
747	鉢C類	2E1		D-②層	180		50		外ハラミガキ、内ハラナデ	10YR7/6 明黄橙	黒、赤、白	
748	壺B類	9C3		層土a		123	70		外赤彩・ハラミガキ、鉢部内ハラナデ、脚内ハケメ後ナデ	10YR8/3 浅黄橙	黒、長、白	
749	壺M類	G区崩潰土		23層	176				内外ハラミガキ	10YR7/3 に濃い黄橙	黒、白、灰、黒	
750	壺O類	G区		崩潰土	146				口縁外ヨコナデ、脚外ナデ、内摩耗	7.5YR8/3 浅黄橙	黒、白、灰、赤(多)、黄針?	
751	壺C類	1E9		A層	133				外・口縁内赤彩・ハラミガキ、体内ナデ	7.5R4/8赤	黒、白、灰、赤	
752	壺C類	2E4		B層	66				外ハラミガキ、内ハケメ(後ミガキ?)	10YR8/4 浅黄橙	黒、灰、赤	
753	手づくね土器	2D24		B層			26	外側面圧痕、内ナデ	10YR7/4 に濃い黄橙	黒、白、灰		
754	鉢A類	2E2		A層	94	74	28		口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ナデ	5YR7/6橙	黒、白、灰、赤	
755	蓋A類	11B19		X1層	71	98			口縁ヨコナデ、体外ハケメ、体内ハケメ後ナデ	5YR7/6橙	黒、長、白、灰、赤	
756	壺	9A22		XV層		86	71		外ハラミガキ	10YR8/2 灰白	黒、白、灰、赤	

観 察 表

古代土師器・須器観察表

報告番号	種類	器種	グリッド	遺構	層位	法量 (mm)		調整	色調	胎土	備考		
						口径	器高 底径						
757	須臾器	杯蓋	5D3		Vb層	150		内口クロナズリ、内口クロナデ	2.5Y6/1 黄灰	C3	直線垂ね焼き日A類		
758	須臾器	杯蓋	10H16		Vb層	16		内外クロナデ	N5/灰	C3	直線垂ね焼き日A類		
759	須臾器	杯蓋	2D21-22		D層	150		直線口クロナズリ、口外、内口クロナデ	10YR6/1 黄灰	B	内面摩耗、直線垂ね焼き日A類		
760	須臾器	有台杯	4D13		Vb層		104	内外クロナデ、底外回転盤切り、高台貼付け後クロナデ	10YR5/1 黄灰	C3	見込み、高台端摩耗		
761	須臾器	有台杯	4D14		Vb層		83	内外クロナデ、底外回転盤切り、高台貼付け後クロナデ	N5/灰	C1			
762	須臾器	無台杯	10B21		23層	130	33	94	内外クロナデ、底外回転盤切り	5Y6/1 灰	C1	直線垂ね焼き	
763	須臾器	無台杯	7C4		Vb層	124	32	84	内外クロナデ、底外回転盤切り	5Y6/1 灰	B	直線垂ね焼き、底外摩害「女」	
764	須臾器	無台杯	5B3-7		Vc層	118	32	78	内外クロナデ、底外回転盤切り	7.5Y6/1 灰	B	直線垂ね焼き、底外摩害「上」カ	
765	須臾器	無台杯	9B20-25		23層	124	31	85	内外クロナデ、底外回転盤切り	7.5Y6/1 灰	B	直線垂ね焼き	
766	須臾器	無台杯	11C2		SX87	Va層	119	32	72	内外クロナデ、底外回転盤切り	2.5Y6/1 黄灰	B	直線垂ね焼き、底外摩害「内」
767	須臾器	無台杯	10D12		IV	132	35	40	内外クロナデ、底外回転盤切り	10YR7/3に赤い炭粒	C3	直線垂ね焼き、結核	
768	須臾器	長頸瓶	7B8		Vb層	154			内外クロナデ	2.5Y6/1 黄灰	B		
769	須臾器	長頸瓶	9C24 8B25		赤層	61			内外クロナデ	5Y4/1 灰	B		
770	須臾器	瓶頸	5C24		黒色土遺層			60	内外クロナデ、高台貼付け後クロナデ	5Y4/1 灰	C1		
771	須臾器	甕	4C8		Vb層				内口クロナデ、外口クロナデ、磨損痕状	5Y6/1 灰	C3		
772	土師器	無台杯	8B23		Vb層	114	39	66	内外クロナデ、底外回転盤切り	7.5YR7/4に赤い炭	長・白・灰		
773	土師器	無台杯	11D4		Va層	116	40	52	内外クロナデ、底外回転盤切り	7.5YR8/4浅黄橙	白・灰・赤		
774	土師器	小釜	9B17		砂層	126			内外クロナデ	7.5YR7/4に赤い炭	白・赤		
775	土師器	長釜	B-ベルト		Va～Vc層			170	内外クロナデ	2.5YR7/4浅黄橙	長・白・灰		
776	土師器	長釜	B-ベルトA列		Vb層	102			内口クロナデ、外口クロナデ、カキミ	10YR7/3に赤い炭粒	長・黄		
777	土師器	長釜	8B3		Vb層	190			内外クロナデ、外口クロナデ、カキミ	10YR8/3浅黄橙	白・赤		
778	土師器	鉢	4D6		Vb層	330			内外クロナデ	10YR8/3浅黄橙	白・灰・赤		

縄文時代の土師器観察表 (追加)

報告番号	分類	グリッド	層位	口縁部 口径 器高 底径	法量 (mm)	文様部 文様 施文具	胎文		口縁部文		調整以前		内面	底面 底径	胎土	色調	備考
							種類	原形	文様	方向	形状	文様					
779	須臾器 IC型	9B5	XV	方			ループ文	HL	底筋3列	×矢頭	平刷	底筋3列	矢頭	摩耗	黄・白・灰	2.5Y7/2 灰黒	
780	須臾器 加	9A22	XV	方			非線形点線 横文	HL	底筋1列	○	—	—	—	斜線文	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭粒	
781	須臾器 加	6B13	XV	内角 方			斜線文	HL	底筋2列	○矢頭	—	—	—	斜線文	黄・赤	2.5YR4/2 灰黒	
782	須臾器 IA型	11A12	XV	内角 方	114		斜線点線文	L	底筋1列	○	無し?	—	—	磨痕	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭粒	
783	須臾器 加	9A25	XV	方	134		斜線文	HL	底筋3列	○	同・矢頭	—	—	平刷	黄・白・灰	2.5YR7/3 に赤い炭	
784	須臾器 加	6B13-16	XV	内角 方	106		斜線点線文	L	無し	×	—	—	—	磨痕	黄・白・灰	2.5YR7/3 に赤い炭	
785	須臾器 加	11A11	XV	一筋 方	200		斜線点線文	L	六角・底筋1列	×	—	—	—	磨痕	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭	
786	須臾器 IA型	6B21	XV	丸	90		赤紋?	無し	×	—	無し?	—	—	平刷	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭	
787	須臾器 加	9B12	XV	内角 方			ループ文	HL+ LN	無し	×	—	—	—	摩耗	黄・白・灰	10YR6/2 灰黒	
788	須臾器 IV型?	6C17	XV	内角 方		文字模文・ 線紋文(遺 跡不明)	不明	—	斜線2列	×	—	—	—	摩耗	黄・白・灰	7.5YR7/3 に赤い炭	
789	須臾器 加	9B3	XV	内角 方	240		ループ文	LR HL	押印1列	○	—	無し?	—	磨痕	黄・赤	10YR7/3 に赤い炭	
790	須臾器 加	5D6	XV	方			非線形点線 横文	HL+ LN	無し	×	—	—	—	平刷	黄・白・灰	2.5YR6/2 灰黒	
791	須臾器 加	11A17	XV	方		コンパス文	斜線	L	底筋2列	×同	—	—	—	カキミ	黄・白・灰	10YR6/2 灰黒	
792	須臾器 IA型	10A13	XV	一筋 丸			非線形点線 横文	HL	底筋2列	○	—	無し?	—	平刷	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭	
793	須臾器 IA型	10A18	XV	丸			斜線点線文	HL	無し	×	—	無し?	—	摩耗	黄・白・灰	7.5YR6/2 灰黒	
794	須臾器	6B5-10	XV				非線形点線 横文	LN	—	—	—	—	—	摩耗	黄・白・灰	10YR7/3 に赤い炭	口縁多量
795	須臾器 IV型?	7A18	XVd	内角 方		多量の点線	不明	—	無し	×	—	—	—	平刷	黄・赤	10YR6/2 灰黒	
796	須臾器 加	6B14-15	XV	方			斜線文	HL	底筋2列	×矢頭	—	—	—	底面さ け付	黄・赤	10YR6/2 黒	
797	須臾器	9A22	XV		96		斜線	無し	—	—	—	—	—	摩耗	黄・白・灰・赤	2.5Y7/2 灰黒	797と同一 個体?

縄文時代中期～晩期土器観察表 (追加)

報告 番号	器形		グリッド	層位	文様など	形式	地文	原休	大きさ (mm)			胎土	色調	備 考
	器種	口縁							口径	器高	最大径			
798	深鉢	平縁	9A12	XVa		大木8～9	斜縄文	RL	315		342	雲・白・黒・灰	10YR6/3 に 近い黄緑	
799	壺		5C21	XDb	人形三文文・沈線	大洞鉢	斜縄文	LR				雲・白	10YR7/3 に 近い黄緑	第Ⅲ群、外面赤色塗
800	深鉢A 型	平縁	5C2	XDa	結節斜縄文	太洞C1	斜縄文 (縦位)	LR	124	127	78	長・白・灰	10YR7/2 に 近い黄緑	第Ⅲ群

弥生時代中期土器観察表 (追加)

報告 番号	分類	器形	グリッド	層位	大きさ (mm)			調整	文 様			色調	胎土	備考
					口径	器高	最大径		底径	施文具	外面			
801	壺口類	波状?	5D2	灰色 粘土	120			外ハケメ、内ハラ ミガキ	棒	直線文・縦線状 文	無文	10YR7/3 に 近い黄緑	雲・白	
802	壺口類		4C25	23期				内外ミガキ	棒、RL 縄文	沈線、斜縄文	無文	10YR7/3 に 近い黄緑	白・灰	
803	壺口類		5D4	灰色 粘土				内ミガキ	円形竹 管、LR 縄文	竹管文、斜縄文	無文	10YR6/3 に 近い黄緑	白・灰・ 雲	
804	壺口類	平縁	4D4・5・ 10	灰色 粘土	48			内ナデ	棒、RL 縄文	縦線状文、直線 文、刺突、斜縄 文	無文	7.5YR7/4 に 近い橙	雲・白・ 灰・赤、 砂鉄混 い	
805	壺		4D3	灰色 粘土				内外ナデ	一	凸帯3条	無文	10YR7/3 に 近い黄緑	白・杯	
806	壺A型	平縁	4C25	23期				内ヨコナデ、内外 ハケメ	棒	斜行短線文	横目文	10YR8/3 浅黄緑	長・白・ 灰	
807	壺A型	平縁	3D21	F層	182			口ヨコナデ、内外 ハケメ、器内割高	棒	矢羽状横目文	無文	10YR5/2 灰黄緑	雲・白・ 黒・灰	
808	壺B型	小波状	3D23	D層	162			内外ナデ	棒	矢羽状横目文	無文	10YR7/4 に 近い黄緑	白・灰	
809	壺		4D5	灰色 粘土				外ハケメ、内ナデ	篋状工具	凸帯2条、刺突	無文	10YR8/3 浅黄緑	雲・白・ 灰	
810	壺C型	平縁	4D5、 5D1・6	灰色 粘土	216			内外ハケメ	棒	横目文・直線文	矢羽状横目 文	7.5YR7/4 に 近い橙	長・白・ 黒・灰・ 赤	
811	壺E型	小波状	4D12	灰色 粘土	158			内外ハケメ	棒	横目文	無文	10YR7/3 に 近い黄緑	雲・白・ 黒	
812	壺E型	小波状	5D2	灰色 粘土	180			口ヨコナデ、内外 ハケメ、体内ナデ	棒	横目文、直線文	横目文	5YR8/4淡 黄緑	長・雲・ 白・黒	
813	壺口類	平縁	5D6	灰色 粘土	94			内・口ヨコナデ、 内外ハケメ	棒	横目文、直線文	無文	10YR8/2 灰白	雲・白・ 灰	
814	壺E型	小波状	5D2	灰色 粘土	100			内外ナデ	棒	直線文	無文	10YR8/3 浅黄緑	白・黒・ 灰・赤	
815	瓦形土器	平縁	3D25、 4D6	F層				内外摩耗	一	無文	無文	5YR8/2灰 白	長・白・ 黒・灰	
816	鉢B型	小波状	4C23	23期	280			口外ハラミガキ、 口内ヨコナデ、体 内外ハケメ	棒	刺突、波状文	無文	10YR6/2 灰黄緑	長・白・ 灰・赤	
817	鉢B型	小波状	4D13	灰色 粘土	216			内外ナデ	篋状工具	刺突	無文	10YR7/2 に 近い黄緑	黒・灰・ 赤	
818	鉢B型	平縁	3D5	灰色 粘土				外摩耗、内ハケメ	篋状工具	刺突・凸帯	無文	7.5YR8/3 浅黄緑	雲・白・ 灰	
819	鉢B型	平縁	5D3	灰色 粘土	181			外ハケメ、内ナデ	棒	横目文、矢羽状 横目文	無文	10YR6/2 灰黄緑	長・雲・ 白	
820	鉢A型	平縁	4D13	23期	148			外ハケメ、内ナデ	棒	無文	無文	10YR5/2 灰黄緑	雲・白・ 灰	
821	把手		3D11	F層				内外ナデ	一	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・ 灰・赤	
822	脚部		5D7	灰色 粘土		48		外ハケメ、内ナデ	一	無文	無文	2.5Y5/2 暗灰黄	雲・白・ 灰	
823	脚部		4D16	F層		62		外ハケメ、体内ナ デ、脚内ハケメ後 ナデ	一	無文	無文	7.5YR6/4 に 近い橙	雲・白・ 赤	
824	脚部		4D11	Ⅷb層		42		内外ハケメ	一	無文	無文	10YR6/3 に 近い黄緑	雲・白・ 灰	
825	脚部		4D16	F層		112		外ハケメ後ナデ、 内ナデ	一	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・ 黒・灰	
826	脚部		3D18	F層		76		外ハケメ、内ナデ	一	無文	無文	10YR7/4 に 近い黄緑	雲・黄 に 近い黄緑	
827	脚部		5D2	灰色 粘土				外ハケメ、体内ハ ケメ、脚内ナデ	一	無文	無文	2.5Y7/2 灰黄	雲・白・ 灰	
828	脚部		4D10	灰色 粘土		96		内外ナデ	一	無文	無文	7.5YR7/6 橙	雲・白・ 灰	
829	蓋C型	平縁	6B11 (SX48)	Ⅷb層	190	198		内外ハケメ	棒	横目文・直線文	無文	10YR7/3 に 近い黄緑	雲・白・ 灰	
830	蓋B型	小波状	5D2・3	灰色 粘土	169			口ヨコナデ、体外 ハケメ、体内ナデ	棒	直線文・横線文、 斜行短線文・円 形浮文	矢羽状横目 文	10YR7/3 に 近い黄緑	長・雲・ 白・灰・ 赤	
831	蓋A型	小波状	4D5、 5D1・6	灰色 粘土	140	121		内外ハケメ	一	無文	無文	10YR8/3 浅黄緑	雲・白・ 黒・灰	

観 察 表

弥生時代後期～古墳時代土器観察表 (追加)

報告番号	器種	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			形状	調整	文様	色調	胎土	備考
					口徑	器高	最大径						
832	蓋C2類	4D2		23層	286			外ハケメ、内摩耗			10YR7/4 浅黄緑	雲・白・黒・赤	
833	蓋C1類	6B13	SD47	2層	68	99	80	30	口ヨコナデ、体内外ハケメ		10YR7/3 浅黄緑	長・雲・白・黒・赤	
834	小形壺	6D21		灰色粘土層	44	53	58	28	口ヨコナデ、体内ナデ、体外摩耗		10YR8/4 浅黄緑	雲・白・灰・赤	
835	壺I類	8B22		V層			96	丸底 口ヨコナデ、体外ヘラミガキ、体内ナデ			10YR8/3 浅黄緑	雲・白・黒・赤	胴部打ち欠き?
836	壺I類	4D5		23層	228			内外摩耗	陶器類文		7.5YR7/3 浅黄緑	長・雲・白・黒・灰	
837	壺I類	3D25		F層	204			口・頸内外ヨコナデ、体内ナデ	陶器類文		5YR7/4 浅黄緑	長・雲・白・黒・赤	
838	壺I類	4D8		23層	140			内外摩耗			10YR7/2 浅黄緑	雲・白・黒・赤	
839	蓋H類	4C24		23層	140	65		42 内外ハケメ			10YR6/4 浅黄緑	雲・白	
840	鉢M類	6B12	SD47	2層	108			外ヘラミガキ、口内ヨコナデ、体内ナデ			10YR7/3 浅黄緑	白・黒・灰	
841	壺Q類	4D8		23層	101	76	92	16 口ヨコナデ、体内ナデ、体外上ヘラミガキ、体外下ハケメ			10YR7/3 浅黄緑	長・雲・白・黒・灰・赤	
842	鉢M類	4D1		23層	194			口ヨコナデ、体内ナデ、体外ハケメ			10YR8/4 浅黄緑	雲・白・黒・赤	
843	結合器台	4C19		23層		(140)		内外ヘラミガキ			10YR7/3 浅黄緑	白・灰	
844	器台C類	4D14		23層	200			内外ヘラミガキ			10YR7/2 浅黄緑	雲・白・灰	
845	高杯×器台	4D3・6・9		23層			200	内外ヘラミガキ	印刷透かし	5YR7/6緑	長・雲・白・灰・赤		
846	高杯×器台	4D7		23層			232	内外ヘラミガキ	凸帯・印刷透かし	10YR8/4 浅黄緑	雲・白・黒・赤		
847	高杯	8B17	SD50	3層	302			内外ヘラミガキ・赤彩			5YR5/3 浅黄緑	雲・白・黒・赤	
848	高杯A類	9B17	SD83	1層			172	外ヘラミガキ、外上ハケメ後ナデ、内下ヨコナデ			10YR6/3 浅黄緑	雲・白・灰・赤	
849	瓶志部杯蓋	4C21		Vb	124	52	—	— 胴部ヘラミガキ、他口クロナデ			5Y6/1灰	D類	内面磨化
850	瓶志部瓶	11C13		F/V層			96	内・外上口クロナデ、外下口ヨコナデ			N/6灰	D類	
851	壺I類	10A1, 10B21	SE89		131	241	229	60 口ヨコナデ、体外ハケメ・ヘラミガキ、体内ナデ・ハケメ			7.5YR8/4 浅黄緑	白・黒・赤	体外下磨

土製品観察表 (1)

報告番号	種類	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)			重 (g)	色調	胎土	文様	調整	備考
					縦	横	厚						
1	土鈴	6B13		XVb	27	38	21	8.7	7.5YR8/3浅黄緑	白・長・雲			
2	不明土製品	8A16		XV	59	24	19	27.1	10YR7/3浅黄緑	長・雲		手づくね	
3	不明土製品	7B25		XV	20	38	17	11.7	10YR8/2灰白	白・雲		手づくね	
4	土鍋	2E3		D・赤層	4	6	2	36.4	10YR8/3浅黄緑	灰・白・雲・			
5	土器片群	10A12		XV	42	51	10	22.4	7.5YR8/2灰濁	織・雲・白	非粘束羽状織文	内ナデ?	
6	土器片群	6B10		XV	56	66	10	42.0	7.5YR7/4浅黄緑	織・雲・白・灰	ループ文	内磨肌	
7	土器片群?	7B1		XVb	66	74	11	47.0	10YR7/3浅黄緑	織・長・雲・白	扇形回紋	ナデ	
8	土器片群	10A13		XV	66	80	11	55.7	10YR6/2灰黄濁	織・雲・長・灰	非粘羽	内ナデ	
9	土器片群	7A22		XVd	59	75	12	52.3	10YR7/2浅黄緑	織・雲・白	斜織文	内ミガキ	
10	土器片群	6B15		XV	62	43	10	29.1	10YR7/3浅黄緑	織・雲・白	斜織文	内磨肌	
11	土器片群	6B18		XV	60	72	10	51.6	10YR7/2浅黄緑	織・長・雲・白	斜織文	内摩耗	
12	土器片群	6B5		XVb	50	79	10	40.4	10YR5/2灰黄濁	織・長・雲・白	斜織文	内ナデ	
13	土器片群	6B19		XV	72	76	9	57.2	10YR6/2灰黄濁	織・長・雲・白	非粘束羽状織文 扇形	内ミガキ	
14	土器片群	6B14		XV	56	73	14	51.5	7.5YR6/4浅黄緑	織・雲・長・灰	斜織文	内磨肌	
15	土器片群	9A22		XV	5	8	1	37.0	7.5YR7/2明濁灰	織・雲・白・灰	斜織	内ナデ	
16	土器	3D20		21層	27	23	22	11.3	10YR7/2浅黄緑	雲・白・灰			
17	土器	8B18		23層	40	40	38	63.5	10YR6/3浅黄緑	白		磨面圧痕	磨光形
18	土器	6B25		23層	55	53	20	58.7	10YR6/2灰黄濁	白・灰		磨面圧痕	磨光形
19	土器	10B13	SD83	1層	59	54	64	173.4	10YR6/2灰黄濁	海針・白・灰		磨面圧痕	
20	結縷者?	4C13		XVb	6	3	1	11.1	2.5Y2/1黒	白・雲・赤	矢羽状紋縷		
21	凹字?	6B14	SD63		21	29	16	8.7	10YR6/3浅黄緑	雲・白・灰			
22	転用粘着率	3D10		21層	64	68	5	25.0	10Y7/3浅黄緑	雲・白・赤・灰			内外ハケメ?
23	転用粘着率	6C11		3層	50	56	7	23.1	7.5YR6/2灰黄濁	白・雲			外ハケメ、内ナデ
24	転用粘着率	6B20	SD50	3層	54	59	8	31.2	7.5YR7/3浅黄緑	長・雲・白・灰	波状文・塵状文		外ハケメ、内ナデ
25	転用粘着率	4D10		灰色粘土層	49	50	6	18.4	10YR6/2灰黄濁	長・雲・白・灰			外ハケメ、内ハケメ
26	転用粘着率	4B24		Vf	42	46	7	15.3	10YR5/3浅黄濁	雲・白・灰			外ハケメ、内ナデ
27	転用粘着率	5B9	SD51	1層	40	41	7	12.3	10YR7/3浅黄緑	雲・白・灰			外ハケメ、内ハケメのちナデ

土製品観察表 (2)

報告番号	種別	グリッド	遺構	層位	大きさ (mm)		重 (g)	色調	胎土	文様	調整	備考
					縦	厚						
28	転用結鉢車	2D23		D層	39	31	7	7.7	7.5YR7/4に赤い橙	雲・白・赤		秀ハケム、内ハケメのち子デ
29	転用結鉢車	3D6		D層	36	33	5	7.3	10YR8/4に赤い黄橙	雲・白・灰		秀ハケム、内子デ
30	転用結鉢車 未成品?	3D5		F層	44	47	1	11.7	10YR8/3浅黄橙	長・雲・白・灰		秀ハケム、内子デ
31	転用結鉢車 未成品?	7B12		2層	49	51	1	22.4	7.5YR5/2灰濁	長・雲・白・灰	点線文・波状文	秀ハケム、内ハケメ
32	土器片付盤	9B19		SD83	66	73	19	65.6	7.5YR7/4に赤い橙	長・雲・白・灰・赤		
33	土器片付盤			最高土	40	40	8	11.7	10YR7/2に赤い黄橙	長・雲・白・灰		秀ハケム、内子デ
34	土器片付盤	6A13		N/b	42	47	11	18.8	10YR7/3に赤い黄橙	長・雲・白・灰		
35	土器片付盤	6B14		SD50	3層	39	6	7.7	7.5YR8/3浅黄橙	長・雲・白・灰		秀ミガキ?、内子デ?
36	土器片付盤	4D13		N/b	53	59	12	28.7	10R8/2灰白	雲・白		内黒色処理ミガキ、秀摩託
37	土器片付盤	103C8		Vf	45	47	8	16.3	10YR8/2灰白	雲・白・灰		秀ハケム、内子デ
38	支脚?	4D7		21層	66	54	53	213.2	10YR8/2灰白	雲・白・灰		手づくね
39	土製玉?	3E5		XVb	17	11	5	0.8	10YR7/2に赤い黄橙	白・赤・黒		

石器・石製品観察表 (1)

報告番号	種別	分類	石材	出土位置				質量 (単位: mm ³) () は破損品の残存量			備考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		重量
1	石鏝	完形	埴貫頁岩	A	SD47	2	6A17	20.0	17.0	2.0	0.50	
2	石鏝	完形	玉髄(半透明頁岩)	C		V/b	9B9	19.0	15.0	3.0	0.50	
3	石鏝	破損品	ガラス質安山岩	F		XVb	11A24	20.0	(13.0)	3.0	0.50	
4	石鏝	完形	黒曜石	-		-	-	21.0	15.0	2.0	0.50	
5	石鏝	完形	凝灰岩	B		XV	8A24	25.0	17.0	3.0	0.60	
6	石鏝	破損品	頁岩	F		XVb	11A23	(30.0)	(12.0)	2.0	0.30	断片種
7	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	10A23	19.0	11.0	2.0	0.30	
8	石鏝	完形	埴貫頁岩	D		藤土	-	29.0	19.0	3.0	0.50	
9	石鏝	破損品	埴貫頁岩	A		XV	6B19	(3.0)	14.0	4.0	0.90	
10	石鏝	完形	埴貫頁岩	B		XV	-	37.0	18.0	4.0	1.40	
11	石鏝	完形	埴貫頁岩	-		-	-	26.0	12.0	3.0	0.50	
12	石鏝	破損品	埴貫頁岩	A		XV	5C4	27.0	(14.0)	4.0	1.10	
13	石鏝	完形	埴貫頁岩	-		-	-	24.0	18.0	5.0	1.30	
14	石鏝	完形	玉髄	-		-	-	24.0	16.0	4.0	1.00	
15	石鏝	破損品	凝灰岩	F		XV	10A18	(26.0)	(15.0)	4.0	0.90	
16	石鏝	完形	埴貫頁岩	D		C	3D11	58.0	15.0	6.0	4.50	
17	石鏝	破損品	凝灰岩	F		XVb	11A18	(32.0)	10.0	4.0	0.80	
18	石鏝	破損品	埴貫頁岩	F		XVb	11A18	(17.0)	9.0	2.0	0.30	
19	石鏝	未成品	凝灰岩	F		XVb	11A	20.0	14.0	4.0	0.50	
20	石鏝	未成品	埴貫頁岩	B		XVb	7A17	21.0	12.0	7.0	2.40	
21	石鏝	未成品	埴貫頁岩	B		XVf	6B10	29.0	24.0	11.0	4.50	
22	石鏝	未成品	埴貫頁岩	B		XV	9A21	38.0	25.0	10.0	6.50	
23	石鏝	未成品	埴貫頁岩	G		XV	4C20	32.0	26.0	6.0	3.00	
24	石鏝	未成品	埴貫頁岩	F		XV	9B3	33.0	26.0	8.0	3.00	
25	石鏝	未成品	頁岩	-		-	-	37.0	23.0	11.0	7.00	
26	石鏝	未成品	頁岩	F		XV	9A15	34.0	24.0	7.0	4.60	
27	石鏝	未成品	頁岩	F		XV	10A22	29.0	24.0	9.0	4.90	
28	石鏝	未成品	鉄石英(赤)	-		-	-	32.0	22.0	8.0	4.90	
29	石鏝	未成品	メノウ	-		-	-	37.0	28.0	10.0	8.60	
30	石鏝	未成品	頁岩	B		XV	8A25	51.0	43.0	12.0	22.70	
31	石鏝	未成品	頁岩	B		XV	6B5-10-15	55.0	30.0	12.0	22.50	
32	石鏝	未成品	凝灰岩	F		XV	10A14	27.0	19.0	7.0	2.50	
33	石鏝	未成品	埴貫頁岩	A		XV	5C5	64.0	41.0	9.0	22.50	
34	石鏝	未成品	鉄石英(赤)	G		XV	5C21	65.0	43.0	9.0	31.00	
35	石鏝	完形	埴貫頁岩	G		XV	5C11	54.0	9.0	7.0	3.70	
36	石鏝	完形	凝灰岩	F		XV	9B5	49.0	35.0	10.0	9.00	
37	石鏝	完形	埴貫頁岩	A		XV	6B14	53.0	38.0	16.0	19.50	
38	石鏝	完形	凝灰岩	A		XVb	6B17	(41.0)	46.0	15.0	15.50	
39	石鏝	完形	埴貫頁岩	E		XIII-XV	-	46.0	18.0	5.0	2.50	松原型石鏝
40	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	10A22	54.0	23.0	6.0	6.00	松原型石鏝
41	石鏝	完形	埴貫頁岩	B		XV	6B15	95.0	31.0	10.0	20.50	松原型石鏝
42	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	10B4	73.0	26.0	11.0	12.00	松原型石鏝
43	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	10A25	80.0	23.0	8.0	10.00	松原型石鏝
44	石鏝	完形	埴貫頁岩	A		XVb	6B12	78.0	33.0	12.0	22.60	松原型石鏝
45	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	11A12	69.0	28.0	10.0	13.50	松原型石鏝
46	石鏝	完形	埴貫頁岩	-		XV	-	78.4	22.7	10.7	11.91	
47	石鏝	完形	埴貫頁岩	F		XV	10B4	78.0	45.0	8.0	19.50	松原型石鏝
48	石鏝	完形	埴貫頁岩(玉髄化)	F		XV	11A16	72.0	44.0	12.0	17.00	松原型石鏝

観 察 表

石器・石製品観察表(2)

報告番号	種類	分類	石材	出土位置				属性(単位:mm/g) ()は破損品の残存量				備考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
49	石蕊	完形	埴貫頁岩	G	XIa	409	37.0	25.0	6.0	3.50		
50	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	10A23	73.0	40.0	7.0	17.00	松原型石蕊	
51	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	10A20	56.0	28.0	11.0	11.50		
52	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	10A21	63.0	25.0	12.0	11.50		
53	石蕊	完形	埴貫頁岩	A	XV	7A21	71.0	27.0	14.0	18.00		
54	石蕊	完形	埴貫頁岩	A	XV	6B10	56.0	23.0	9.0	10.00		
55	石蕊	完形	黒色頁岩	B	XV	6B14	75.0	26.0	10.0	20.00	松原型を模倣した地石材で製作か?	
56	石蕊	完形	黒色頁岩(白色風化)	B	XV	9A23	46.0	17.0	7.0	3.00		
57	石蕊	完形	埴貫頁岩	A	XVd・XV	6C2・7	40.0	57.0	10.0	15.00		
58	石蕊	未成品	埴貫頁岩	A	XV	6B18	75.0	29.0	14.0	15.40		
59	黒形石蕊	破損品	鉄石葉(赤)	-	-	-	(23.0)	17.0	5.0	2.00		
60	尖頭器	破損	緑色凝灰岩	G	XV	5D1	(44.0)	(47.0)	(15.0)	27.00		
61	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV一括	9G5・10	64.0	38.0	7.0	36.50	スクレイパー	
62	石蕊	未成品	鉄石葉(黄)	B	XV	6B14	67.0	35.0	15.0	31.00		
63	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV一括	10A21	54.0	40.0	15.0	30.50		
64	石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	10A11	64.0	44.0	13.0	33.00		
65	石蕊	未成品	埴貫頁岩	-	-	-	65.0	41.0	16.0	44.00		
66	原石	完形	黒曜石	F	XV	11A17	27.0	25.0	16.0	7.50		
67	楔形石蕊	完形	頁岩	A	XV	5C4	70.0	56.0	28.0	118.50		
68	楔形石蕊	完形	埴貫頁岩	B	XV	9B1	30.0	27.0	9.0	6.50		
69	楔形石蕊	完形	黒色頁岩	F	XV	9A25	61.0	17.0	17.0	13.00		
70	楔形石蕊	完形	頁岩	G	XV	4D9	36.0	29.0	11.0	12.00		
71	楔形石蕊	完形	頁岩	F	XV	9A20	22.0	13.0	5.5	1.50		
72	楔形石蕊	完形	埴貫頁岩 (半透明頁岩)	F	XV	10A17	32.0	25.0	11.0	10.50		
73	楔形石蕊	完形	頁岩	F	XV	10A18	32.0	30.0	16.5	14.50		
74	楔形石蕊	完形	頁岩	A	XV	5C6	51.0	55.0	20.0	66.00		
75	楔形石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	10A13	36.0	46.0	8.0	13.00		
76	楔形石蕊	完形	黒曜石	A	XV	6B14	37.0	36.0	17.0	21.00		
77	石蕊	完形	黒色頁岩	F	XV	10B7	66.0	70.0	35.0	142.00		
78	不定形石蕊	完形	埴貫頁岩	F	XV	9B4	37.0	63.0	8.0	20.50		
79	原石	完形	黒曜石	B	XV	9A11	34.0	27.0	21.0	19.00		
80	不定形石蕊	完形	緑色凝灰岩	B	XV	6D15	40.0	38.0	7.0	8.00		
81	圓形石蕊	完形	黒曜石	F	XV	10A22	37.4	36.8	8.9	11.74		
82	石蕊	完形	玉髄	-	-	-	28.0	70.0	55.0	95.50		
83	刮削	完形	埴貫頁岩	A	XV	6B9	63.0	26.0	8.0	13.00		
84	石蕊	完形	埴貫頁岩	B	XVb	7B2	59.0	50.0	30.0	35.00		
85	石蕊	完形	砂岩	B	XVb	7B1	56.0	77.0	30.0	68.50		
86	磨製石斧	完形	ガラス貫安山岩	G	XV	4C24	49.0	30.0	10.0	22.50		
87	磨製石斧	完形	蛇紋岩	B	XV	9A12	45.0	19.0	8.0	9.50		
88	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	10A20	(38.0)	27.0	7.0	12.00	基部折損	
89	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F	XV	11A22	58.0	34.0	10.0	31.50		
90	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F	XV	11A21	52.0	36.0	7.0	21.50		
91	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F	XV	9A23	58.0	37.0	9.0	32.50	継軸(黒化)	
92	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	11A14	(62.0)	39.0	(9.0)	24.00	基部折損	
93	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	9B5	(62.0)	34.0	10.0	33.00	基部折損	
94	磨製石斧	完形	蛇紋岩	F	XV	9B6	93.0	47.0	19.0	138.50	刃部使用痕跡(摩磨)	
95	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	11A16	(49.0)	(44.0)	(19.0)	55.50	基部折損	
96	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	A	XV一括	6B17・18	(55.0)	43.0	20.0	62.00	基部折損	
97	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	9B4	(62.0)	49.0	26.0	116.00	基部折損	
98	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	-	-	-	(61.0)	47.0	20.0	92.50	基部折損	
99	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	-	-	-	(73.0)	44.0	23.0	107.50	基部折損	
100	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	A	XV	6A14	(87.0)	53.0	25.0	167.00	基部折損のうち加工	
101	磨製石斧	破損品	閃緑岩	F	XV	10A24	(94.0)	56.0	34.0	267.50	基部折損のうち加工	
102	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10A21	126.0	52.0	30.0	267.50		
103	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	9B4	(78.0)	52.0	23.0	150.50	基部折損	
104	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	B	XV	8A13	(86.0)	58.0	31.0	228.50	基部折損	
105	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	B	XV・XVb	7A14・15	(66.0)	55.0	24.0	130.50	基部折損	
106	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	11A16	(61.0)	63.0	23.0	85.50	基部折損	
107	磨製石斧	破損品	硬砂岩	F	XV	10A25	(100.0)	56.0	32.0	286.50	基部折損	
108	磨製石斧	破損品	硬砂岩	F	XV	6B18	(96.0)	56.0	27.0	137.50	刃部折損	
109	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	9A25	(103.0)	66.0	33.0	294.50	刃部折損	
110	磨製石斧	破損品	安山岩	B	XV	6A25	(103.0)	53.0	28.0	218.50	刃部折損	
111	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	10A24	(98.0)	63.0	33.0	292.50	刃部折損	
112	磨製石斧	破損品	蛇紋岩	F	XV	10A20	(94.0)	52.0	23.0	140.50	刃部折損	
113	磨製石斧	破損品	安山岩	G	XV	4C20	(75.0)	45.0	28.0	120.00		
114	磨製石斧	破損品	硬砂岩	A	XV	5C4	(85.0)	45.0	36.0	164.00	刃部折損	
115	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	G	XV	4D3	(88.0)	72.0	32.0	323.00	半損	
116	磨製石斧	未成品	硬砂岩	F	XV	11A11	98.0	64.0	26.0	187.50		
117	磨製石斧	未成品	硬砂岩	F	XV	10A16	97.0	52.0	25.0	199.00		

石器・石製品観察表 (3)

報告 番号	類別	分類	石材	出土位置			属性(単位:mm/g)				備考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	()は破損品の残存数				
								長さ	幅	厚さ		重量
118	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	G	XV	4D13	73.0	38.0	15.0	44.00		
119	磨製石斧	未成品	蛇紋岩?	F	XV a	9A18	133.0	82.0	53.0	717.50	石鏡か	
120	磨製石斧	未成品	硬砂岩	B	XV	9F25	118.0	62.0	43.0	431.50	手組	
121	磨製石斧	未成品	安山岩	B	XV-一括	6B10・15	108.0	62.0	36.0	268.50		
122	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10A19	97.0	68.0	38.0	302.50		
123	磨製石斧	未成品	安山岩	B	XV	7B1	119.0	58.0	21.0	203.50		
124	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10B15	104.0	63.0	31.0	258.00		
125	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B	XV	6B14	84.0	63.0	32.0	257.50		
126	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B	XV	9B2	84.0	52.0	26.0	153.50		
127	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10A18	78.0	52.0	21.0	116.50		
128	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	-	XV	-	71.0	42.0	13.0	43.40		
129	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10B5	57.0	38.0	15.0	43.50		
130	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	11A22	86.0	58.0	19.0	146.00		
131	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	-	-	-	118.0	94.0	44.0	739.00		
132	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	F	XV	10A12	53.0	32.0	13.0	23.90		
133	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B	XV	8B7	52.0	27.0	11.0	23.00		
134	磨製石斧	未成品	蛇紋岩	B	XV	7A18	79.0	49.0	25.0	127.00		
135	原石	完形	蛇紋岩	B	XV-一括	6B5・10・15	65.0	50.0	20.0	95.50		
136	石鏃	A1	安山岩	B	XV	8B13	112.8	153.4	26.9	727.91		
137	石鏃	A1	安山岩	B	XV-一括	6B5・10・15	94.5	126.0	34.6	622.11		
138	石鏃	A2	安山岩	F	XV	10A25	126.0	122.0	19.7	441.32		
139	石鏃	A1	流紋岩	B	XV	7B5	81.8	97.5	25.0	251.91		
140	石鏃	A2	砂岩	C	XV	9B6	89.1	92.8	27.6	269.48		
141	石鏃	A1	花崗岩	F	XV b	11A18	67.9	107.9	19.8	228.16		
142	石鏃	A1	安山岩	A	XV	6B21	61.8	99.0	30.0	269.11		
143	石鏃	A1	花崗岩	F	XV	10A13	88.5	107.3	29.3	429.83		
144	石鏃	A1	砂岩	G	XV	5D2	78.7	108.9	25.0	318.19		
145	石鏃	A1	砂岩	G	XV	5C4	73.9	88.0	27.2	253.36		
146	石鏃	A1	安山岩	A	XV b	6B13	58.5	71.5	24.1	126.41		
147	石鏃	A1	安山岩	F	XV	9B9	61.6	105.5	23.2	183.69		
148	石鏃	A1	安山岩	A	XV	5C13	36.5	32.4	10.6	16.95		
149	石鏃	A1	安山岩	B	XV	7B1	73.9	84.6	15.3	153.31		
150	石鏃	A2	安山岩	A	XV	5C9	74.4	72.3	23.0	172.46		
151	石鏃	A1	安山岩	B	XVb~XV	7B1	79.0	104.1	22.3	296.12		
152	石鏃	A2	砂岩	G	XV	4D4	77.2	78.3	17.8	117.74		
153	石鏃	A1	砂岩	G	XV	4D2	58.8	67.5	15.0	90.61		
154	石鏃	A1	蛇紋岩	B	XV	8A25	50.8	64.8	17.7	78.94		
155	石鏃	A1	安山岩	F	XV	10A17	44.4	85.0	15.1	94.37		
156	石鏃	A1	粘板岩	XV	XV	5C8	38.6	44.7	9.3	20.05		
157	石鏃	B	安山岩	B	XV-一括	6B5・10・15	100.8	68.0	19.9	184.10		
158	石鏃	B	砂岩	G	XV-一括	5C16・17	76.8	108.0	32.4	357.21		
159	石鏃	A1	肉岩	B	XV	8A13	61.4	80.0	21.3	160.54		
160	石鏃	A1	凝灰岩	B	XV	6B15	62.5	116.9	29.0	258.55		
161	石鏃	A1	凝灰岩	C	XV	9B7	67.6	61.1	18.4	94.46		
162	石鏃	A	凝灰岩	C	XV	8B15	90.4	43.1	28.7	103.44		
163	磨石類	A2	凝灰岩	A	XV	6B18	127.0	89.0	39.5	550.58		
164	磨石類	B1	砂岩	A	XV	8B1	120.1	99.0	35.8	488.18		
165	磨石類	A'	硬砂岩	G	XV	5C22	145.0	72.0	44.0	632.66		
166	磨石類	B2	安山岩	A	XV	5C5	91.0	71.5	34.7	264.06		
167	磨石類	B3	安山岩	A	XV	6B14・19	99.5	81.0	39.0	574.07		
168	磨石類	B3	安山岩	B	XV	7A22	101.0	76.0	35.0	403.80		
169	磨石類	B3	安山岩	F	XV	10A17・18・22・23	105.5	70.0	48.0	554.70		
170	磨石類	B4	凝灰岩	B	XV	8A11	111.5	88.5	54.5	558.10		
171	磨石類	C3	安山岩	B	XV	7B11	98.0	88.0	50.0	581.23		
172	磨石類	C1	硬砂岩	A	XV	5C4	89.5	63.0	34.0	293.03		
173	磨石類	C2	安山岩	B	XV	7B19	88.5	84.0	36.5	376.71		
174	磨石類	C4	硬砂岩	B	XV	8A12	111.5	70.5	39.0	516.67		
175	磨石類	C4	硬砂岩	B	XV	8B23	94.5	72.0	35.0	334.63		
176	磨石類	C6	礫岩	B	XVb~XV	7B1	98.0	87.0	43.0	638.61		
177	磨石類	C8	花崗岩	B	XV b	7A22	115.5	94.0	46.5	823.86		
178	磨石類	C5	流紋岩	B	XV	8B9	135.0	51.0	40.0	425.04		
179	磨石類	D1	花崗岩?	F	XV	10B4	160.0	81.5	50.0	1035.62		
180	磨石類	D2	硬砂岩	C	XV	9A14	(109.0)	68.0	43.5	543.29		
181	石皿	-	安山岩	B	XVb~XV	7A22	158.0	185.0	41.0	1609.80		
182	石皿	-	安山岩	G	XV	5D16	161.0	135.0	41.0	1406.02		
183	石皿	-	安山岩?	B	XV	8A13	200.0	161.0	56.0	1919.08		
184	白石	-	安山岩	F	XV	10A16・17	221.0	115.0	67.4	2120.00		
185	砥石	-	凝灰岩	F	XV	11A17	118.0	77.0	47.0	525.35		
186	砥石	-	砂岩	B	XV	7A19	126.0	68.5	32.0	228.73		
187	砥石	-	凝灰岩	G	XV	6C7	73.0	73.5	32.0	167.07		

観 察 表

石器・石製品観察表(4)

報告番号	種別	分類	石材	出土位置			属性(単位:mm/g)				備考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		重量
188	砥石	—	砂岩	C	XV c	988	125.0	84.5	15.0	203.56		
189	砥石	—	砂岩	A	XV	6819	145.5	89.0	30.4	703.70		
190	砥石	—	砂岩	G	XV	4D12	91.0	107.0	35.7	416.83		
191	砥石	—	砂岩	A	XVb	6817-18	148.0	134.0	37.0	829.71	表面一部剥落	
192	砥石	—	砂岩	B	XV	8A17	500.5	150.0	147.5	1439.00	砥面3面	
193	砥石	—	砂岩	B	XV	7A23	91.0	70.5	34.6	385.97		
194	砥石	—	砂岩	F	XV	10A19	149.0	79.0	47.6	518.16		
195	槌石棒	—	安山岩	A	XV	6814	77.0	57.5	58.0	303.00	敲打工 工用品か	
196	槌石棒	—	流紋岩	F	XV	10A15	117.5	45.0	33.0	295.15	断面六角形	
197	塊状耳飾	破損品	滑石(黄 不透明)	C	IVb	9818	42.0	24.0	6.0	9.00		
198	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	A	20	6C8	43.0	43(46)	6.0	12.00	接合	
198	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	C	IVb	9C22						
199	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	C	XVb	9A22	31.0	28(32)	11.0	7.50		
200	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	B	SD50	3	7B15	46(49)	24(50)	7.0	11.00	
201	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	G	XIII d	5C8	43.0	23(46)	7.0	11.00		
202	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	B	SD50	3	8B19	37.0	22(39)	8.5	11.50	
203	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	C	XVb	9A23	38.0	20(44)	5.5	7.00		
204	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	F	XIII e	—	22.0	14(33)	5.0	3.00		
205	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	A	XV	5C4	31.0	21(40)	5.5	6.00		
206	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	G	IV	5D1	34.0	21(39)	8.0	8.00		
207	塊状耳飾	破損品	滑石(緑)	XV e	6810	33.0	22.5(35)	6.0	6.00			
208	塊状耳飾	破損品	滑石(黄)	B	XIII b	8B12	36.0	26(36)	6.0	7.50		
209	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	C	藤七a	9C5	16(35)	18(38)	5.0	2.50		
210	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	A	XV	5C19	35.0	30(43)	7.0	10.50		
211	塊状耳飾	破損品	滑石(黒)	F	XV	10A20	37.0	22(34)	9.0	11.50	砥面に研痕	
212	重玉?	完形	滑石(茶)	D	C	3D2	32.0	31.0	7.0	6.50	塊状耳飾からの転用品	
213	塊状耳飾	未成品	滑石(黄)	C	XIII b	9B12	34.0	28.0	8.0	8.00	耳飾状素材	
214	塊状耳飾	未成品	滑石(黄)	C	トレンチ23	9B20-25	35.0	29.0	16.0	25.00	耳飾素材 穿孔、切目作出途中	
215	塊状耳飾	未成品	滑石(黄 不透明)	C	XIII a	9B6	43.0	33.0	7.5	19.00	耳飾素材	
216	碧玉	破損品	滑石(黒)	A	XV	5B25	21.0	19.0	12(19)	6.50		
217	碧玉	破損品	滑石(黄)	F	XV	10A20	23.0	15.0	7(13)	3.00		
218	碧玉	未成品	滑石(黒)	—	XII	—	50.0	18.0	16.0	24.00		
219	重玉	完形	滑石(黒)	A	XVb	6B12	27.0	17.0	5.0	3.00		
220	重玉	完形	滑石(黒)	B	XIII	8B12	28.0	15.0	6.0	3.00		
221	重玉	破損品	滑石(黄)	F	XV	11B1	20.0	11.0	3.0	5.00		
222	重玉	破損品	滑石(黄)	C	XVb	9A22	30(36)	14(16)	5.0	3.00		
223	不明石製品	破損品	流紋岩	A	XVa	6B6	34.0	12.0	7.0	4.00	摺切技法	
224	不明	破損品	滑石(黄 不透明)	F	XV	10A11	27.0	31.0	7.0	9.50		
225	原石	—	滑石(黄)	F	XI c	11B1	40.0	31.0	13.0	18.50	非心状の剥落で円盤状に成形	
226	原石	—	滑石(黄)	A	XV	5C3	52.0	44.0	27.0	78.50		
227	原石	—	滑石(黄)	B	XIII b	8B12	28.0	23.0	10.0	8.50		
228	石鏝	破損品	凝灰岩	B	XVa	9A18	26.0	17.0	4.0	1.30		
229	石鏝	完形	珉質頁岩	B	XVa	6B15	46.0	26.0	8.0	6.00	松原型石鏝	
230	石鏝	完形	珉質頁岩(玉髄)	B	XVa	9A16	50.0	27.0	7.0	6.00	松原型石鏝	
231	石鏝	完形	鉄石(赤・黄緑)	A	XVa	7B6	39.0	50.0	15.0	18.50		
232	不定形石鏝	—	珉質頁岩	B	XVa	9A17	45.0	42.0	7.0	18.00		
233	礫磨	完形	凝灰岩	B	XVa	7B1	144.0	64.0	43.0	372.50		
234	石塊	完形	頁岩	B	XVa	8A16	65.0	39.0	13.0	33.50		
235	砥石	—	砂岩	B	XVa	9A18	126.0	125.1	27.1	696.60	砥面不明瞭	
236	石鏝	A1	安山岩	B	XVa	6B12	51.0	61.9	16.4	76.34		
237	石鏝	A1	安山岩	B	XVa	7B2	76.2	107.3	37.0	401.65		
238	石鏝	A1	砂岩	B	XVa	7A19	81.5	89.7	25.6	275.13		
239	石鏝	A1	凝灰岩	B	XVa	6B15	62.9	86.8	22.6	142.00		
240	楔形石鏝	A2	珉質頁岩	B	XVb	8A20	31.9	34.1	8.5	10.23		
241	石鏝	B	凝灰岩	C	XVb	9A22	53.5	49.4	21.6	49.01		
242	磨石類	C8	安山岩	B	XVb	8A8	111.0	86.5	36.5	539.09		
243	石鏝	A1	硬砂岩	B	XVb	8A20	111.0	78.0	20.5	232.07		
244	石鏝	A1	礫岩?	B	XVb	8B5	77.0	87.0	31.0	239.18		
245	石鏝	B	安山岩	F	XVb	10A16	99.0	88.0	32.5	386.67	磨石類転用	
246	砥石	—	砂岩	B	XVb	8A20	122.5	87.0	22.5	215.59		
247	砥石	—	砂岩	B	XVb	8A23	110.0	82.0	35.0	318.00		
248	砥石	—	凝灰岩	B	XVb	8A20	72.0	36.0	15.0	32.00		
249	石皿	—	砂岩	B	XV	8A13	176.0	151.0	30.0	775.03	砥面不明瞭	
250	石鏝	完成品 A3	頁岩	C	XIII b	9B6	16.2	14.8	3.2	0.55	アスファルト付着	
251	石鏝	完成品 A3	チャート	C	XIII b	9B8	33.6	17.2	5.4	2.31	アスファルト付着	
252	石鏝	完成品 D1	珉質頁岩	A	XIII	6A22	36.7	12.3	9.9	3.10	アスファルト付着	
253	石鏝	完成品 D2	流紋岩	A	XIII	6C5	43.5	12.3	7.4	3.01	アスファルト付着	
254	石鏝	完成品 D2	頁岩	A	XIII	6B18	43.6	9.8	5.6	2.23	アスファルト付着	

石 器 ・ 石 製 品 観 察 表 (5)

報告 番号	種 別	分 類	石 材	出 土 位 置				質 性 (単位 : mm/g) は破損品の残存部				備 考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量		
255	石鏝	D1 完成品	凝灰岩	C	XIIIb	9B10	21.8	14.0	4.2	1.13	アスファルト付着		
256	石鏝	D2 完成品	珪質頁岩	A	XIIIe	5B16	28.2	7.9	3.6	0.76	アスファルト付着 長方形破損		
257	石鏝	B 未成品	珪質頁岩	C	XIIIb	9B7	44.4	34.3	11.6	16.21			
258	石鏝	B 未成品	珪質頁岩	F	XIIIe	11A22	33.3	24.3	8.1	5.73			
259	石鏝	C 未成品	流紋岩	B	XIIIb	8B10	40.5	29.9	12.1	11.83			
260	石鏝	C 未成品	流紋岩	A	XIIIb	6C2	40.9	31.5	8.9	10.85			
261	石鏝	A 未成品	流紋岩	A	XIIIa	4B25	29.0	8.7	8.4	1.51			
262	石鏝	A 未成品	流紋岩	G	XIIIb	4D9	61.0	17.8	17.0	13.17			
263	石鏝	D	頁岩	B	XIII	8B19	30.7	53.9	13.8	15.51	上部アスファルト付着 (石鏝転用)		
264	石鏝	B	玉髄	A	XIIIb	6C11・12	(28.4)	15.2	9.2	3.03			
265	石鏝	D	頁岩	B	XIIIa	8A14	49.8	45.7	28.5	51.62			
266	石鏝	E	頁岩	A	XIIIa	6A10	29.9	11.5	6.2	1.69			
267	石鏝	—	ガラス質安山岩	A	XIII	6B12	35.2	47.6	8.0	12.19			
268	石鏝	—	珪質頁岩	A	XIIIe	6C11	56.0	50.3	11.1	24.68			
269	楔形石鏝	A2	頁岩	B	XIIIe	8B8	35.5	46.8	12.0	20.27			
270	楔形石鏝	B	流紋岩	A	XIII	4A3	35.9	35.8	8.6	7.49			
271	楔形石鏝	A1	流紋岩	A	XIII	6B18	50.3	33.5	13.6	23.60			
272	不定形石鏝	C	頁岩	B	XIII	8B9	36.7	65.0	9.2	18.72			
273	不定形石鏝	A	珪質頁岩	B	XIII	7B7	74.7	36.0	14.7	31.02			
274	不定形石鏝	B	流紋岩	A	31	5A24	34.4	59.1	15.7	21.37			
275	不定形石鏝	C	珪質頁岩	B	XIIIe	8B9	43.8	51.8	12.3	25.31			
276	不定形石鏝	E	頁岩	G	XIIIe	4D5	57.5	41.8	17.7	35.18			
277	石鏝	A	珪質頁岩	D	XIIIa	4D6	27.0	80.8	22.0	35.49			
278	不定形石鏝	1	頁岩	A	XII	6B11	47.5	40.0	12.0	15.28			
279	磨製石鏝	A2	定形	蛇紋岩	C	XIIIe	9A22	58.0	28.6	9.7	24.95		
280	磨製石鏝	A2	破損品	蛇紋岩	C	XI 7	9B12・17	36.9	22.2	8.9	12.37	基部折損	
281	磨製石鏝	A2	定形	蛇紋岩	A	XIIIa	4B20	38.4	20.1	6.3	8.50		
282	磨製石鏝	A1	破損品	硬砂岩	B	XIIIb	6B25	94.5	52.5	27.2	238.14	基部折損	
283	磨製石鏝	A1	破損品	閃緑岩	A	X1	5B15	(100.1)	59.0	35.8	360.79	基部折損	
284	磨製石鏝	C 未成品	安山岩	F	X1 b	11B6	(105.3)	74.5	35.7	489.36	手組		
285	磨製石鏝	B 未成品	蛇紋岩	B	XIIIb	6C5	60.5	37.0	16.2	55.50			
286	石鏝	A1	礫岩	A	XIIIe	6C6・7	39.0	43.5	12.5	27.42			
287	石鏝	B	花崗岩	C	XIIIe	11B22	64.0	117.5	40.0	440.81			
288	石鏝	A1	砂岩	G	XIIIb	4D7	88.5	95.5	32.0	457.39			
289	石鏝	A1	流紋岩	B	XIIIe	8B7	82.0	95.0	29.5	291.35			
290	磨石類	A1	安山岩	G	XIIIb	4C25	92.5	84.4	59.1	662.21			
291	磨石類	B4	頁岩	B	XIIIa	8B7	109.8	36.6	26.1	172.85			
292	磨石類	E	硬砂岩	—	XIIIb	—	123.0	56.0	28.0	270.82			
293	磨石類	A'	硬砂岩	A	XIIIe	5B22	95.0	62.0	31.5	286.46			
294	磨石類	B2	花崗岩	B	X	8A25	105.0	67.0	33.0	352.50			
295	磨石類	C1	硬砂岩	A	XIIIe	5C7・8	91.0	72.0	45.0	411.48			
296	磨石類	C4	安山岩	—	XIIIb	—	159.0	65.0	57.0	823.63			
297	磨石類	C8	安山岩	A	XIIIa	5B18	105.0	82.5	54.0	628.21			
298	原石	—	焼岩	C	XIIIb	9B12	31.0	30.0	14.0	4.50	産地：岐阜県瑞穂		
299	原石	—	砂岩	B	XIIIe	8B3	69.0	140.0	31.5	249.38			
300	磨石棒	—	粘板岩	A	31	5B5	116.7	29.0	10.9	55.02	割傷著しい		
301	石鏝	A1	定形	流紋岩	D	F	3D19	35.5	12.0	4.3	1.34		
302	石鏝	A1	定形	流紋岩	D	F	4D16	37.7	15.7	4.8	2.10		
303	石鏝	A1	定形	流紋岩	G	灰色粘土	5D8	28.9	14.3	3.5	1.06		
304	石鏝	A1	定形	流紋岩	D	21	3D9	24.3	14.3	4.0	1.04		
305	石鏝	A1	定形	緑色凝灰岩	D	21	3D9	15.9	10.5	3.4	0.49		
306	石鏝	A2	定形	流紋岩	H	V	10B82	32.3	11.5	5.1	1.39		
307	石鏝	A2	定形	流紋岩	A	SD50	2	6B19	32.7	11.2	5.0	1.21	
308	石鏝	A2	定形	流紋岩	D	D	3D17	28.9	11.2	4.1	1.03		
309	石鏝	A3	破損品	流紋岩	D	D	2D10	36.1	13.2	5.1	1.68		
310	石鏝	A3	定形	頁岩	D	F	3D17	19.9	10.7	2.8	0.50		
311	石鏝	A3	定形	流紋岩	D	21	3D4	28.1	15.1	5.0	1.82	アスファルト付着	
312	石鏝	D1	定形	玉髄	D	F	3D12	31.0	15.3	6.7	1.94		
313	石鏝	A1	定形	流紋岩	D	21	3D20	43.1	16.4	3.8	2.49		
314	石鏝	D1	定形	珪質頁岩	—	不明	—	42.3	13.1	6.5	3.30	アスファルト付着	
315	石鏝	D2	定形	流紋岩	D	F	4D11	23.2	11.9	5.2	1.39		
316	石鏝	E	定形	流紋岩	A	SK55	1	—	32.0	12.5	6.3	2.12	
317	石鏝	D2	破損品	頁岩	D	V	4D21	(38.0)	11.3	9.6	3.93	長方形破損	
318	石鏝	F	破損品	結晶片岩	D	21	3D4	(27.3)	14.9	2.6	1.09		
319	石鏝	F	破損品	粘板岩	D	F	2D20	(21.9)	10.5	2.6	0.79		
320	石鏝	完形	ガラス質安山岩	A	IV	4C7	14.5	18.8	2.4	0.55			
321	石鏝	A 完形	流紋岩	C	23	9B21	29.5	9.4	5.1	1.74	使用痕跡著		
322	石鏝	A 完形	流紋岩	D	B	2D25	19.6	7.8	5.0	0.72			
323	石鏝	A 完形	流紋岩	D	D	2D23	31.7	11.4	8.0	2.78			

観 察 表

石器・石製品観察表 (6)

報告番号	種類	分類	石材	出土位置				属性(単位:mm/g) ()は破損品の残存量				備考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量		
324	石鏃	B 完形	珉質頁岩	D		不明	-	42.4	20.7	7.8	5.95		
325	石鏃	C 完形	流紋岩	A		Va	6018	35.9	15.7	7.3	4.32		
326	石鏃	E 完形	緑色凝灰岩	G		灰色粘土	5D13	18.5	10.5	3.2	0.58		
327	石鏃	D 完形	流紋岩	B		Vc	708	35.0	24.3	9.6	6.1		
328	石鏃	A 未成品	流紋岩	B	SD33	2	-	44.0	29.9	13.1	15.09	取上げNo.9	
329	石鏃	A 未成品	流紋岩	B	SD50	3	8016	59.6	32.4	13.5	19.22		
330	石鏃	B 未成品	珉質頁岩	D		D-2	3D19	50.9	31.8	9.4	14.91		
331	石鏃	B 未成品	流紋岩	D		F	2D25	48.6	23.1	9.6	8.71		
332	石鏃	C 未成品	玉髓	B		Va	8A14	47.2	17.7	10.7	7.80		
333	石鏃	C 未成品	緑色凝灰岩	B		Vb	8018	34.5	17.1	7.9	3.68		
334	石鏃	C 未成品	流紋岩	D		F	4D21	34.2	22.6	12.1	7.02		
335	楔形石鏃	A1	チャート	C	SD50	砂	10013	30.6	24.5	6.4	6.14		
336	楔形石鏃	A2	頁岩	B	SD50	3	7011	26.0	43.1	10.4	11.20		
337	楔形石鏃	A1	頁岩	-		Vb	-	44.9	28.1	9.6	12.43		
338	楔形石鏃	B	頁岩	D		23	3D5	31.8	35.0	13.8	15.63		
339	楔形石鏃	B	流紋岩	B	SD51	3	7015	27.8	39.1	9.8	8.58		
340	不定形石鏃	A	流石英	A	SD7	1	4025	58.5	46.6	13.0	44.30		
341	不定形石鏃	A	流紋岩	D		F	3D15	35.2	50.7	11.8	18.02		
342	不定形石鏃	B	頁岩	G		23	5C21	31.0	40.0	8.6	10.40		
343	不定形石鏃	C	流紋岩	B	SD50	3	8017	67.4	38.3	11.5	28.14		
344	不定形石鏃	C	流紋岩	A		23	6025	53.2	39.7	12.0	15.07		
345	不定形石鏃	E	流紋岩	C	SD50	砂	10020	39.5	43.5	10.8	21.54		
346	不定形石鏃	G	流紋岩	G		23	3D5	37.5	59.4	13.3	20.32		
347	不定形石鏃	G	流紋岩	A	NX4	1	4018	42.8	50.2	8.2	14.05		
348	不定形石鏃	I	流紋岩	A		Vb	5A24	35.6	43.8	8.8	11.62		
349	石核	G	流紋岩	D		D	2D17	39.2	37.8	20.7	28.86		
350	石核	D	ガラス質安山岩	D		F	3D7	56.2	57.2	38.0	136.31		
351	石核	x	頁岩	B		Vc	7025	49.1	71.4	38.5	119.90		
352	石核	E	流紋岩	D		Vb	4D11	60.3	72.6	38.4	142.87		
353	板状石鏃種	-	凝灰岩	G		23	4C3	52.0	55.6	9.1	30.50		
354	打製石鏃	-	凝灰岩	C	SD50	砂	10013	98.0	68.8	13.0	83.15	使用痕 上部・下部に光沢あり	
355	打製石鏃	-	凝灰岩	-		Vc	-	136.1	81.0	25.6	455.73		
356	打製石鏃	-	凝灰岩?	G		崩落土	-	95.6	54.0	16.3	98.18	使用痕 下部に光沢あり	
357	磨製石鏃	A1	凝灰岩	緑色凝灰岩	D	D-2	3D11	92.7	46.0	19.8	135.53	刃部欠損	
358	磨製石鏃	A1	凝灰岩	安山岩	D	F	2D15	96.3	55.0	32.5	290.27	基部折損	
359	磨製石鏃	A1	凝灰岩	硬砂岩	A	20	6C1	88.5	139.0	29.0	155.28	刃部折損	
360	磨製石鏃	A3	凝灰岩	硬砂岩	G	23	5D8	81.5	143.0	32.0	140.21	刃部折損	
361	磨製石鏃	A3	完形	凝灰岩	-	F	-	78.2	44.3	9.6	48.09	自然腐蝕に刃部作り出したのみ	
362	磨製石鏃	B4	完形	蛇紋岩	B	不明	6014	40.3	7.4	7.3	4.15		
363	磨製石鏃	A2	完形	蛇紋岩	C	24	10023	34.2	18.0	5.9	5.63		
364	磨製石鏃	B2	凝灰岩	緑色凝灰岩	A	20	5C20	(84.0)	(35.0)	(21.7)	82.48	基部・片側折損	
365	磨製石鏃	B2	凝灰岩	緑色凝灰岩	G	IV	4021	(57.9)	(39.9)	(21.6)	77.21	平頭	
366	磨製石鏃	B2	凝灰岩	緑色凝灰岩	A	20	5C10	(110.5)	(12.3)	43.0	89.09	片側面のみ残存	
367	磨製石鏃	B2	凝灰岩	緑色凝灰岩	A	21	5C14	(111.0)	(20.5)	(43.3)	113.00	両側面・刃部折損	
368	磨製石鏃	B1	凝灰岩	閃輝岩	B	23	7024	(87.2)	71.1	41.5	403.74	基部折損	
369	磨製石鏃	B3	凝灰岩	閃輝岩	G		灰色粘土	5D5	(50.4)	62.3	20.0	143.06	基部折損
370	磨製石鏃	B1	凝灰岩	閃輝岩	A	21	5C14	148.0	65.2	41.0	724.39	刃部欠損	
				A		23	6C8						
371	磨製石鏃	B1	凝灰岩	閃輝岩	A	24	5C5	(150.5)	67.0	40.0	499.23	基部に磨行痕 基部欠損	
				D		D-3	2D19						
372	磨製石鏃	B1	凝灰岩	閃輝岩	D	Vb + 25	3D4	(83.7)	64.1	38.9	333.36	基部折損	
373	磨製石鏃	B3	完形	閃輝岩	A	Va	6A24	94.0	56.7	18.5	183.71		
374	磨製石鏃	B3	完形	硬砂岩	B	23	8021	80.5	33.3	13.7	53.35		
375	磨製石鏃	B3	完形	蛇紋岩	G	23	4D8	57.6	38.1	13.7	45.26		
376	磨製石鏃	C 未成品	安山岩	B		Vb	8C6	(99.0)	73.0	54.0	458.99		
377	磨製石鏃	C 未成品	閃輝岩	D		D	3D11	(129.0)	79.2	51.7	362.74		
378	磨石鏃	A1	安山岩	B	SD50	3	8016	119.0	106.0	33.0	597.17		
379	磨石鏃	A2	安山岩	D		F	3D17	122.0	71.0	44.0	646.30		
380	磨石鏃	A2	安山岩	B	SD50	1	7020	58.0	70.0	52.0	283.39		
381	磨石鏃	A'	硬砂岩	A	SD46	2	5A9	115.0	81.0	43.0	562.29		
382	磨石鏃	B2	安山岩	D		D	2E1	100.0	84.5	49.5	525.33		
383	磨石鏃	B3	安山岩	C		Vb	9016	95.5	87.0	37.0	545.68		
384	磨石鏃	C1	蛇紋岩	B	SD50	1	7018	143.0	106.5	68.0	1578.83	取上げNo.13	
385	磨石鏃	C2	流紋岩	A		20	6C16	79.0	58.0	54.0	329.35		
386	磨石鏃	C3	安山岩	A	SD53	-	6010	99.0	78.0	50.0	517.49		
387	磨石鏃	C3	安山岩	B		23	7016	86.0	48.5	49.0	497.61		
388	磨石鏃	C5	安山岩	G		灰色粘土	5D3	96.0	79.0	51.0	491.23		
389	磨石鏃	C6	流紋岩	A		20	-	125.0	92.0	74.0	1106.60		
390	磨石鏃	E	閃輝岩	B	SD50	3	6015	107.7	60.5	31.9	382.82		

石器・石製品観察表(7)

報告 番号	種 別	分 類	石 材	出 土 位 置			属 性 (単位: mm/g) () は破損品の残存量				備 考	
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		重量
391	磨石類	E	蛇紋岩	A	Vb	6C5	49.0	63.0	38.0	29.0	103.57	
392	磨石類	E	閃緑岩	D	Nb	4D22	115.5	71.3	43.7	600.56		
393	多面体磨石	-	流紋岩	D	F	2D22	77.0	76.0	66.0	515.88		
394	石鏝	-	安山岩	G	藤原土	-	222.0 ⁽¹⁾	171.0 ⁽¹⁾	42.0	2130.00		
395	石鏝	-	安山岩	C	D-4	10B24	121.0 ⁽¹⁾	172.0 ⁽¹⁾	37.0	894.77		
396	白石	-	花崗岩	D	Va	3D	220.0	188.0	101.0	6880.00		
397	白石	-	砂岩	A	Nb	6C12	154.0 ⁽¹⁾	153.0 ⁽¹⁾	52.0	1027.19	表面破損	
398	砥石	-	砂岩	C	23	11B23	186.0 ⁽¹⁾	99.0 ⁽¹⁾	29.0	251.98		
399	砥石	-	流紋岩	B	SD50	3	8B19	150.0	86.0	29.0	393.65	
400	砥石	-	砂岩	D	23	4D2	156.0	106.0	23.0	448.07		
401	砥石	-	砂岩	D	23	4D2	200.0	169.0	82.0	2460.00		
402	砥石	-	砂岩	D	D-4	2E4	1165.0 ⁽¹⁾	141.0 ⁽¹⁾	55.0	1324.24		
403	砥石	-	砂岩	D	2E6	196.0 ⁽¹⁾	74.0	65.0	701.42			
404	砥石	-	砂岩	G	F	4D12	77.0 ⁽¹⁾	75.0 ⁽¹⁾	50.0	269.09	磨打痕	
405	砥石	-	砂岩	B	23	7B23	129.0	92.0	26.0	367.13		
406	砥石	-	砂岩	D	Vb	3D4	1123.0 ⁽¹⁾	97.0 ⁽¹⁾	49.0	654.13		
407	砥石	-	砂岩	D	不明	-	31.5	34.5	13.0	14.67		
408	砥石	-	砂岩	A	SD50	3	7B	299.0	102.0	85.0	3970.00	砥面4面
409	砥石	-	砂岩	A	SD47	-	6A	90.0	75.0	26.7	179.26	
410	砥石	-	砂岩	G	23	4D1	64.0 ⁽¹⁾	24.0	11.0	29.62		
411	砥石	-	砂岩	D	3D2	40.5 ⁽¹⁾	22.5	11.0	13.49	砥面非常に平滑		
412	砥石	-	砂岩	D	F	3D17	88.0 ⁽¹⁾	72.0 ⁽¹⁾	42.0	308.24		
413	砥石	-	砂岩	C	SD83	ガツボ	10B18	24.5 ⁽¹⁾	28.5	21.0	22.69	砥面4面
414	砥石	-	凝灰岩	D	D	2D12	123.0	70.0	53.0	556.93		
415	砥石	-	凝灰岩	A	20	5C15	89.0	45.0	44.0	330.06		
416	砥石	-	凝灰岩	D	D-4	3D13	101.0 ⁽¹⁾	60.0	26.0	222.69		
417	砥石	-	砂岩	B	23	7B21	49.0	35.0	27.5	63.48		
418	砥石	-	凝灰岩	D	21	3D19	176.0 ⁽¹⁾	52.0 ⁽¹⁾	15.0	71.32		
419	砥石	-	凝灰岩	D	F	3D14	77.0 ⁽¹⁾	68.0	25.0	128.04		
420	砥石	-	軽石	A	SD51	3	5B4	96.0	67.0	49.0	93.00	
421	砥石	-	頁岩	D	23	3D19	136.0 ⁽¹⁾	49.0 ⁽¹⁾	15.0	112.37		
422	石鏝	A1	安山岩	D	D	2E4	33.0	41.6	15.8	28.82		
423	石鏝	A1	砂岩	A	SD46	2	5A	34.4	49.5	13.0	28.11	
424	石鏝	A1	硬砂岩	B	SD50	3	8B19	74.5	86.5	23.5	200.27	
425	石鏝	A1	凝灰岩	-	藤土	-	68.5	93.5	29.5	190.29		
426	石鏝	A2	砂岩	C	Db	10B22	108.5	82.5	21.0	198.62		
427	石鏝	B	安山岩	D	21	4D17	70.0	114.0	31.0	358.50	磨打痕 磨石類利用	
428	石鏝	A2	ホルンフェルス	G	23	4D14	101.0	52.0	18.0	143.77		
429	石鏝	C	安山岩	D	D	2E3	72.0	82.0	20.0	143.03	磨打痕 磨石類利用	
430	石鏝	-	砂岩	D	Vb	4D12	29.5	33.0	28.0	27.67		
431	研磨具	-	軽石	B	SD50	3	8B21	27.2	30.0	25.0	6.12	
432	研磨具	-	軽石	F	青灰砂	11B	46.0	44.0	12.0	7.41		
433	研磨具	-	軽石	B	SD50	3	7B20	50.0	36.5	37.5	8.03	
434	不明石製品	-	蛇紋岩	D	F	1E9	24.5	32.5	3.5	3.18	表面平滑に研磨 削先状	
435	不明石製品	-	粘板岩	D	不明	-	34.2	20.5	5.4	4.69	台形状 四方を平滑にする	
436	磨石石鏝か	-	黒色頁岩か	D	F	2D23	64.0	44.0	16.0	37.34	砥面あり	
437	不明石製品	-	粘板岩	G	23	4D2	34.0	70.8	14.4	33.72		
438	不明石製品	-	粘板岩	C	23	4C21	42.3	62.7	15.2	53.04	孔1か所	
439	不明石製品	-	黒色頁岩	C	23	9B17	75.5	36.1	8.0	16.83	正面磨痕、周縁に溝線	
440	不明石製品	-	粘板岩	B	Va	8B12	51.6	31.6	15.3	30.49	上面が凹部? 上面に孔2か所	
441	不明石製品	-	黒色頁岩	-	不明	-	26.7	15.6	5.5	2.80	正面裏面に研磨痕	
442	石鏝丁か	-	粘板岩	A	25	6C8	51.2	37.3	8.5	25.75	孔2か所、 刃部わずかに残存	
443	ミガキ具	-	蛇紋岩	A	20	5C13	46.0	44.0	12.0	32.96		
444	石製模造品	-	滑石	B	23	7B22	23.1	21.6	4.0	3.59	2孔1対	
445	石製模造品	-	滑石	A	23	6C9	20.7	20.7	2.9	2.69	2孔1対	
446	石製模造品	-	滑石	B	0	7C7	15.5	16.4	2.6	1.28	2孔1対	
447	石製模造品	-	滑石	C	SD83	ガツボ	9B18	18.0	19.4	2.5	1.37	2孔1対
448	不明石製品	-	砂岩	G	23	灰色粘土	4D9-10	46.0	67.5	19.1	43.90	
449	不明石製品	-	凝灰岩	C	23	9B22-23	27.5	31.1	7.1	6.61	孔3か所、下部に磨痕	
450	不明石製品	-	凝灰岩	D	21	4D11	38.1	18.3	16.2	13.47		
451	不明石製品	-	凝灰岩	D	不明	-	28.8	10.7	9.3	5.06		
452	管玉工用品	石核	緑色凝灰岩	A	Vb	6B23	40.7	52.5	35.4	60.29		
453	管玉工用品	石核	緑色凝灰岩	D	F	4D16	26.5	43.1	28.4	32.97		
454	管玉工用品	石核	緑色凝灰岩	B	Vc	8B12	39.8	85.9	68.0	220.07		
455	管玉工用品	石核	緑色凝灰岩	A	21	6C4	50.5	40.6	36.4	113.41		
456	管玉工用品	剥片	緑色凝灰岩	A	Va	6B10	21.0	45.1	26.0	18.48		

観察表

石器・石製品観察表(8)

報告番号	種類	分類	石材	出土位置			属性(単位:mm/g) ()は破損品の残存数				備考		
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		重量	
457	管玉工	大管洞片	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	86.0	66.0	21.4	91.17		
458	管玉工	洞片	緑色凝灰岩	C	SD60	3	29	10810	20.3	64.9	24.3	26.60	
459	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	G	-	23	408	30.7	22.3	16.6	12.83		
460	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	D	-	F	2E4	34.6	19.2	20.6	19.91		
461	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	G	-	灰色粘土	5D3	60.0	18.5	17.3	26.38		
462	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	23.8	14.5	12.6	7.60		
463	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	G	-	灰色粘土	4D9	28.0	15.1	13.1	9.61		
464	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	B	SD60	3	889	47.1	19.8	17.1	28.04		
465	管玉工	角柱状:大	緑色凝灰岩	D	Vb	4D17	42.0	17.0	15.0	15.04			
466	管玉工	側面距離:中	緑色凝灰岩	D	21	3D10	24.3	9.8	9.0	2.92			
467	管玉工	側面距離:大	緑色凝灰岩	D	D	2E6	38.5	20.7	19.9	18.98			
468	管玉工	多角柱:大	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	22.2	19.5	19.7	8.33		
469	管玉工	板状:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	32.9	24.4	13.3	17.73		
470	管玉工	板状:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	31.8	31.2	18.0	19.37		
471	管玉工	角柱状:小	緑色凝灰岩	G	23	5D11	32.1	12.8	10.0	5.21			
472	管玉工	角柱状:小	緑色凝灰岩	B	SD50	3	6B15	33.5	11.2	8.8	3.44		
473	管玉工	角柱状:小	緑色凝灰岩	B	SD50	3	8B17	21.8	10.8	10.1	4.02		
474	管玉工	角柱状:小	緑色凝灰岩	A	SD48	1	6A17	26.5	9.7	5.6	2.86		
475	管玉工	角柱状:小	緑色凝灰岩	D	Vb	3D20	22.3	10.1	7.5	2.27			
476	管玉工	側面距離:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	21.9	6.2	6.1	1.43		
477	管玉工	側面距離:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	20.3	5.9	5.1	0.77		
478	管玉工	側面距離:小	緑色凝灰岩	D	21	3D19	11.6	4.2	3.8	0.30			
479	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	D	F	3D17	23.8	7.6	5.4	0.98			
480	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	G	-	灰色粘土	5D2	23.2	6.6	4.0	0.92		
481	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	10.4	7.1	4.5	0.50		
482	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	D	20	4D6	18.9	5.7	3.7	0.54			
483	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	D	F	4D16	25.4	6.1	3.7	0.83			
484	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	D	Vb	4D16	23.2	6.6	4.6	0.43			
485	管玉工	扁平柱:小	緑色凝灰岩	D	Vb	3D20	11.1	5.4	4.6	0.33			
486	管玉工	多角柱:小	緑色凝灰岩	D	Vb	4D16	13.4	3.3	3.3	0.26			
487	管玉工	多角柱:小	緑色凝灰岩	D	Vb	3D20	16.0	2.9	2.5	0.21			
488	管玉工	多角柱:小	緑色凝灰岩	-	-	表様	-	11.5	2.7	2.5	0.16	目メインセクションベルト上 美廻り 下層径1.2mm	
489	管玉工	多角柱:小	緑色凝灰岩	D	Vb	3D18	13.5	2.6	2.6	0.10			
490	管玉工	多角柱:小	緑色凝灰岩	D	D	2D23	8.5	3.0	3.3	0.13			
491	管玉工	穿孔:小	緑色凝灰岩	D	不明	-	8.7	3.0	2.9	0.10	孔径1.2mm		
492	管玉工	穿孔:小	緑色凝灰岩	D	不明	-	9.3	2.3	2.3	0.08	孔径上1.0mm 下0.6mm		
493	管玉工	仕上げ磨削:小	緑色凝灰岩	D	F	3D21	7.7	2.7	2.6	0.09	孔径1.0mm		
494	管玉工	仕上げ磨削:小	緑色凝灰岩	-	-	不明	-	14.5	2.7	2.6	0.15	孔径1.3mm	
495	管玉工	完成品:小	緑色凝灰岩	D	F	2E4	10.0	2.6	2.6	0.11	孔径1.3mm		
496	管玉工	完成品:小	緑色凝灰岩	D	Vb	4D16	9.3	3.2	3.2	0.16	孔径1.7mm		
497	管玉工	完成品:小	緑色凝灰岩	D	Vb	4D16	7.5	2.4	2.4	0.06	孔径1.2mm		
498	管玉工	完成品:小	緑色凝灰岩	D	21	3D14	6.6	3.2	3.1	0.11	孔径1.7mm		
499	管玉工	完成品:中	緑色凝灰岩	D	Vb	4D16	28.7	7.7	7.7	3.10	孔径2.9mm 両面穿孔		
500	管玉工	穿孔:大	緑色凝灰岩	A	20	5C20	22.1	7.1	7.1	1.06	孔径2.5mm 両面穿孔。破損		
501	管玉工	研磨痕	ヒスイ	D	Vb	3D4	45.0	41.0	21.5	84.46			
502	管玉工	研磨痕	ヒスイ	D	B	1E14	35.0	33.5	21.5	38.80			
503	管玉工	穿孔痕	ヒスイ	A	20	5B16	23.0	26.1	18.6	12.24			
504	管玉工	研磨痕	ヒスイ	D	F	3D8	61.0	36.5	16.0	51.54			
505	管玉工	施溝	ヒスイ	H	V	10B55	65.4	35.7	30.7	145.71			
506	管玉工	施溝	ヒスイ	G	-	黒粘土	-	53.3	42.5	34.2	141.51		
507	管玉工	施溝	ヒスイ	G	VI	6D21	21.6	12.6	4.8	5.43			
508	管玉工	施溝	ヒスイ	-	-	不明	-	41.2	32.7	22.8	63.80		
509	管玉工	施溝	ヒスイ	G	-	灰色粘土	5C22	38.5	29.6	23.6	39.28		
510	管玉工	成形(D字面)	ヒスイ	-	-	不明	-	17.3	10.9	8.0	3.01		
511	管玉工	成形(D字面)	ヒスイ	G	-	灰色粘土	5D6	37.6	27.4	16.7	33.64	銀行痕あり	
512	管玉工	成形(D字面)	ヒスイ	D	Vb	4D11	26.8	15.0	14.6	10.14	磨痕		
513	管玉工	成形(D字面)	ヒスイ	D	F	3D15	17.0	12.3	7.5	2.14	磨痕		
514	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	G	-	灰色粘土	5C16	26.8	20.5	14.0	12.71		
515	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	G	-	黒粘土	-	21.6	15.1	10.9	7.89		
516	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	-	-	不明	-	9.6	6.0	4.9	0.68		
517	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	D	-	不明	-	11.8	9.4	6.0	1.55		
518	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	-	-	不明	-	15.7	8.9	8.4	3.27		
519	管玉工	整形(D字状)	ヒスイ	D	F	2D18	16.2	8.4	6.7	1.31			
520	管玉工	整形(楕円)	ヒスイ	A	Vb	4B17	25.2	17.1	11.7	9.51			
521	管玉工	整形(楕円)	ヒスイ	G	-	灰色粘土	5C24	20.5	13.7	11.5	5.88		
522	管玉工	整形(楕円)	ヒスイ	D	21	3D13	18.0	9.6	5.4	1.31			
523	管玉工	整形(楕円)	ヒスイ	-	-	不明	-	10.7	7.8	5.4	0.71		
524	管玉工	整形(楕円)	ヒスイ	G	-	灰色粘土	5D6	10.9	7.9	5.6	0.86		

石器・石製品観察表(9)

報告 番号	種 別	分 類	石 材	出 土 位 置				質 性 (単位:mm/g) ()は破損品の残存量				備 考
				地区	遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	重量	
525	勾玉工用品	完成品	ヒスイ	G	灰色粘土	409		14.5	10.1	6.2	1.76	
526	勾玉工用品	完成品	ヒスイ	D	不明	-		14.2	10.0	6.2	1.48	
527	勾玉工用品	穿孔中	ヒスイ	D	漆土	-		12.8	10.1	6.6	1.32	
528	勾玉工用品	完成品	ヒスイ	-	不明	-		11.0	6.8	6.2	0.93	
529	勾玉工用品	仕上げ研磨中	蛇紋岩	-	不明	-		7.1	5.8	2.9	0.16	
530	勾玉工用品	完成品	ヒスイまたは軟玉	P413	-	-		9.4	6.9	4.2	0.51	
531	勾玉工用品	穿孔中	石炭か	D	D	2D19		7.6	5.8	3.2	0.25	
532	勾玉工用品	完成品	蛇紋岩	D	F	2D18		7.1	4.4	2.2	0.10	
533	石群工用品	角柱状	安山岩	G	灰色粘土	5D7		12.2	2.8	2.7	0.15	
534	石群工用品	角柱状	安山岩	D	F	3D24		10.7	1.7	1.7	0.05	
535	石群工用品	剥片状	安山岩	-	不明	-		10.2	3.2	2.0	0.02	
536	石群工用品	完成品	安山岩	D	不明	-		13.3	2.5	2.4	0.14	前面回転痕あり
537	石群工用品	完成品	安山岩	D	F	1E10		23.8	2.5	2.5	0.31	
538	石群工用品	完成品	安山岩	D	不明	-		22.7	2.1	2.1	0.20	
539	石群工用品	完成品	安山岩	D	F	2E4		18.1	2.7	2.6	0.20	前面回転痕あり
540	石群工用品	完成品	安山岩	D	F	2E5		14.3	2.3	2.3	0.17	前面回転痕あり
541	石群工用品	完成品	安山岩	D	不明	-		13.5	2.4	2.4	0.16	前面回転痕あり
542	石群工用品	完成品	安山岩	D	2I	3D8		11.8	2.0	2.0	0.09	前面回転痕あり 下部折損
543	石群工用品	完成品	安山岩	-	不明	-		12.5	2.6	2.6	0.16	前面・側面回転痕あり
544	磨切具	-	流紋岩	D	F	3D17-20		36.0	101.0	8.5	36.72	
545	磨切具	-	馬化木	F	F	3D20		15.0	39.0	5.0	4.86	
546	磨切具	-	流紋岩	G	灰色粘土	4D9		28.0	77.0	7.0	14.23	
547	磨切具	-	流紋岩	I	VI	103C10		53.0	86.0	7.3	23.70	
548	磨切具	-	凝灰岩	A	不明	6C3		76.0	145.0	11.0	115.64	
549	磨切具	-	凝灰岩	C	SD83	9-10B		56.0	62.0	13.0	25.53	
550	磨切具	-	凝灰岩	B	23	6C5		34.5	46.5	6.5	9.40	
551	磨切具	-	凝灰岩	C	23	9B21		36.5	52.0	5.5	15.75	
552	押車	-	砂岩	G	灰色粘土	4D3		89.2	56.7	20.5	113.15	直径100mm
553	押車	-	凝灰岩	G	灰色粘土	4D9		43.5	44.0	24.8	26.18	直径様式114mm
554	押車	-	硬砂岩	D	塊瓦	3D13		58.3	51.0	19.0	51.38	直径様式104mm 裏面平坦
555	押車	-	硬砂岩	D	砂岩	4D7		107.0	105.0	18.0	217.66	直径100mm
556	押車	-	硬砂岩	D	B	6B15		99.0	102.5	19.5	182.30	直径102.5mm
557	磨石	-	ヒスイ	D	B	3D12		64.5	60.0	41.5	262.03	磨痕あり
558	磨石	-	ヒスイ	-	不明	-		52.0	43.5	28.5	114.25	磨痕あり
559	磨石	-	ヒスイ	G	F	4D6		58.0	33.5	26.0	104.41	磨痕あり
560	磨石	-	ヒスイ	A	20	6C16		65.0	63.5	49.5	292.30	磨痕あり
561	磨石	-	ヒスイ	D	-	トレンチ		59.5	62.0	48.0	190.43	磨痕あり
562	勾玉	完成品	黒色頁岩	-	不明	-		39.7	25.5	10.7	12.13	
563	勾玉	完成品	滑石	B	Vc	7B23		23.7	14.6	5.6	2.53	
564	勾玉	完成品	滑石	D	B	2D25		11.0	7.2	4.2	0.50	
565	勾玉	破損品	滑石	D	F	2E3		13.5	10.7	5.0	0.95	
566	垂玉	完成品	ヒスイ	-	不明	-		5.1	4.9	2.3	0.10	孔径0.5mm
567	勾玉	破損品	ヒスイ	A	Vc	5B13		14.5	10.5	6.0	0.93	
568	小玉	完成品	ヒスイ	A	XIIa	4B25		6.8	7.0	5.5	0.36	孔径 上:1.7mm, 下:4.7mm
569	小玉	未成品	石英か	-	不明	-		4.4	4.8	5.2	0.14	孔径2.0mm
570	白玉	破損品	石英か	-	不明	-		4.9	6.2	2.5	0.13	孔径1.7mm
571	碧玉	完成品	滑石	D	F	-		14.8	9.7	7.8	1.79	孔径5.3mm
572	白玉	完成品	滑石	I	III	104D7		9.5	10.5	4.5	0.56	孔径4.2mm
573	丸玉	-	緑色凝灰岩	B	Vb	7B21		12.0	10.2	7.0	0.98	
574	白玉	完成品	滑石	C	Vb	11B24		4.5	4.4	3.7	0.14	孔径1.4mm
575	白玉	完成品	滑石	D	F	2E1		4.9	4.9	3.7	0.14	孔径1.7mm
576	白玉	完成品	滑石	D	2I	2D25		5.2	5.3	2.6	0.14	孔径1.4mm
577	白玉	完成品	滑石	G	不明	-		5.7	5.4	2.3	0.14	孔径1.4mm
578	白玉	完成品	滑石	-	不明	-		4.1	4.1	3.4	0.10	孔径1.7mm
579	白玉	完成品	滑石	G	IV	5D7		5.2	5.2	1.3	0.05	孔径2.0mm
580	白玉	完成品	滑石	G	灰色粘土	5D5		3.1	3.1	1.7	0.03	孔径1.2mm
581	白玉	完成品	滑石	G	灰色粘土	5D14		3.3	3.5	1.7	0.04	孔径1.4mm
582	丸玉	完成品	ガラス(青色)	D	Vb	3D25		7.0	7.0	2.0	0.18	平皿
583	小玉	完成品	ガラス(淡青色)	D	B	2D22		4.6	4.7	4.8	0.15	孔径1.3mm
584	小玉	完成品	ガラス(淡青色)	A	VI	6B23		5.2	5.8	3.8	0.14	孔径2.1mm
585	小玉	完成品	ガラス(群青色)	A	23	6C8		4.3	4.5	2.0	0.06	孔径1.4mm
586	小玉	完成品	ガラス(淡青色)	C	Vla	10B21		3.5	3.6	1.9	0.03	孔径1.3mm
第28 図1	石鏝	A2	黒曜石	M	SD (中腰)	2	104E21	48.9	21.3	5.8	5.04	上下欠損
第28 図2	石袋丁か		粘板岩	G	Vb	4C26		34.1	45.0	7.8	14.49	
第28 図3	磨製石斧	B3	閃輝岩	G	Vb	4C13		32.5	28.0	16.0	27.67	
第28 図4	石棒か		安山岩	C	Vb	9C23		107.0	51.0	43.5	291.51	

観 察 表

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(1)

標種・分析していない個体のうち、肉眼観察により判断できたものについては広葉樹(「広」)、針葉樹(「針」)と記載した。

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	未取り	地 区	出土位置		グリッド グリッド 層位	グリッド 層位	法量 (cm)			備 考	
							遺構 番号	層位 層位			長さ	幅	厚さ		
1	板					志待丸木	G	SK96	1	6D21		31.7	2.6	2.4	板状残存
2		板状	広			熊出	G	SK96	1	6D21		40.3	5.1	5.7	
3		板状	広			熊出	G	SK96	1	6D21		45.2	8.3	5.3	
4		板状	広			志待丸木	G	SK96	1	6D21		43.5	9.6	3.9	板状残存
5	月ノ神側板		クリ	210		丸木朝枝	E	SE89		5U11		80.1	直径 60.0	4.0	内面加工痕
6	板					志待丸木	C	SE89			Ⅶ	33.5	3.1	3.4	
7		溝状	広			板口	A	SK49				29.3	4.2	1.5	
8	加工材		広			ミカン割	A	SK49				8.8	2.2	2.4	片割に折り
9		板状	スギ	141		板口	A	SK49	2			10.0	4.7	0.7	
10	板					志待丸木	A	SK55	2, 3			40.7	8.0	7.1	
11	板		広			志待丸木	A	SK55	3			18.0	4.5	3.8	
12		短冊状	針			板口	A	SK55	3			11.5	4.8	0.7	形代の可能性あり
13		短冊状	キハダ属	152		板口	A	SK55	3			16.8	4.1	0.8	形代の可能性あり
14		板状	広			板口	A	SK55	3			43.3	5.5	2.8	
15		棒状	広			熊出	A	SK55	1			89.0	8.8	7.2	
16	内仲型田下駄 (残)か		スギ	105		板口	B	SD33	1			38.1	3.1	1.0	下部板状
17	内仲型田下駄 (残)か		スギ	106		板口	B	SD33	1			30.8	2.9	1.2	下部板状
18	内仲型田下駄 (残)か		スギ	107		板口	B	SD33	2			21.8	3.3	1.0	下部板状
19	蓋か		モミ属	112		板口	B	SD33	3			21.9	4.0	1.0	径1mmの小孔列(縦約8mm・ 横約5mm間隔)
20	部材	板状	スギ	108		板口	B	SD33	2			26.0	7.4	1.4	狭り7まかな 表面全面腐化
21	礎板か	板状	広			板口	B	SD33	3			39.9	11.6	4.5	上下欠損
22	部材	板状	針			板口	B	SD33	3			27.0	2.8	0.9	上下欠損
23	部材	板状	スギ	109		波板口	B	SD33	3			36.4	4.0	0.9	両端に孔(直径約1cm) 左側 面折り
24	部材	板状	スギ	111		板口	B	SD33	3			42.8	5.0	1.1	上下欠損
25	建築材か	板状	スギ	227		板口	B	SD33	2			101.5	9.4	2.3	一部腐化
26	建築材か	板状	スギ	216		波板口	B	SD33	2			88.3	11.4	1.7	幅円形の孔がほぼ等間隔で一列 4個(片側)
27		板状	針			板口	B	SD33	2			26.7	6.2	1.4	上下欠損
28		板状	針			板口	B	SD33	3			31.4	3.5	1.1	切込み 上下欠損
29		板状	針			板口	B	SD33	1	8B15		34.3	5.0	1.1	上下欠損
30		棒状(平)	針			板口	B	SD33	2			41.8	4.1	2.8	
31		板状	針			板口	B	SD33	1			17.1	4.7	0.7	上下欠損
32		短冊状	広			板口	B	SD33	3			7.1	2.8	0.6	上下欠損
33		棒状(平)	針			板口	B	SD33	3			26.1	1.7	0.6	上下欠損
34		棒状(角)	針			熊出	B	SD33	3			24.6	1.2	0.9	上下欠損
35		棒状(角)	針			熊出	B	SD33	3			29.5	1.8	1.1	上下欠損
36		棒状(角)	スギ	110		板口	B	SD33	3			33.9	2.1	1.3	上下欠損
37		棒状(角)	針			熊出	B	SD33	3			34.8	2.7	1.8	上下欠損
38		棒状(角)	針			熊出	B	SD33	1			43.4	5.3	4.8	上下欠損
39	杓子(ヘタ)		スギ	203		板口	E	SD46				27.5	7.2	0.8	
40	杓か		コナラ属 アカガシ亜属	121		熊出	E	SD46		4U20	Ⅱ?	22.1	3.5	2.8	上部釘痕状に作出 下部細める -腐化
41	杓か		針			熊出	A	SD46	1			16.6	3.5	3.0	
42	杓か		針			板口	E	SD46		5U11		21.1	4.3	1.9	
43	蓋か	圓状	針			板口	E	SD46	2	4U20		15.4	1.1	0.9	上下欠損
44	形代か	スギ	113			板口	E	SD46	2	4U20		17.8	2.1	0.7	
45	不明製品	スギ	114			熊出	A	SD46	2	5A25		14.1	3.9	1.4	
46	部材	板状	スギ	118		波板口	A	SD46	4			22.0	2.5	0.9	上部凹形状の把手状 大小円孔2 裏面線状痕 一部 腐化
47	部材	板状	スギ	120		波板口	E	SD46		5U11		26.2	8.0	1.4	
48	部材	棒状(平)	スギ	212		熊出	E	SD46		4U20		54.4	6.0	3.1	
49		板状	クリ	117		志待丸木	A	SD46	2			54.8	4.4	4.4	Y字状の自然木屑用 下部細める
50	部材	棒状(角)	スギ	116		熊出	A	SD46	2			50.4	2.7	1.4	好形形 狭り2か所ずつ
51		板状	スギ	119		板口	E	SD46		4U10		20.4	8.2	0.8	上端に溝形状の狭り
52		板状	針			波板口	A	SD46	1			47.7	8.5	0.8	
53		短冊状	針			波板口	A	SD46	2			19.7	3.9	0.9	
54		短冊状	針			板口	E	SD46	2	4U20		19.5	3.0	0.7	上下欠損
55		板状	クリ	115		板口	E	SD46	2	5U16		29.0	20.6	3.2	礎板の可能性あり
56		棒状(平)	針			板口	E	SD46		4U15		25.0	2.6	0.9	上下欠損
57		棒状(平)	針			板口	E	SD46	2	5U16		26.5	3.1	1.3	上下欠損
58		板状	針			板口	E	SD46		5U21		10.5	1.4	0.5	上下欠損
59		棒状(角)	針			熊出	E	SD46		5U16		11.4	1.2	0.7	
60		棒状(角)	針			熊出	E	SD46	2	4U20		11.9	1.1	1.0	上下欠損
61		箸状	針			熊出	A	SD46	4			12.0	0.8	0.8	上下欠損
62		棒状(円)	針			熊出	E	SD46		5U21		20.4	2.0	1.3	加工丁寧 裏欠損
63		棒状(平)	針			板口	A	SD46	2			38.0	3.0	1.9	上下欠損
64		棒状(角)	針			熊出	A	SD46	1			45.5	3.4	1.9	

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(2)

報告番号	種 類	形状・断面	樹 種	試料番号	木取り	地区	出土位置			法量 (cm)			備 考
							遺構番号	層位	グリッド	長さ	幅	厚さ	
65		棒状(角)	針			板口 A	SD46	2		31.1	4.2	2.4	上欠損
66	柄か	棒状(角)	針			板出 E	SD46		5U16	34.4	4.1	2.4	上下欠損
67		棒状(角)	針			板出 A	SD46	1		50.7	4.2	2.2	上下欠損
68		棒状(角)	広			板出 E	SD46		5U21	53.5	3.8	3.8	
69	直柄銀身平銀		コナラ属 コナラ属	130		板口 A	SD47	2	6B13	22.2	7.9	2.4	着斜角度 65°
70	一本軸		コナラ属 アカガシ変種	139		板口 E	SD47		5A4	(59.9)	16.8	2.2	
71	角持型田下駄 (残)か		針	239		板口 A	SD47			45.4	3.8	0.9	端部削状 上欠損
72	角持型田下駄 (残)か	棒状(平)	スギ	137		板口 A	SD47			54.4	4.9	1.0	端部削状
73	角持型田下駄 (残)か	棒状(平)	スギ	136		板口 A	SD47			54.6	4.9	0.9	端部削状
74	角持型田下駄 (棒)		スギ	221		板口 A	SD47			68.7	5.1	2.1	物孔 11 5孔に柄および縦溝 存 西端近くに取りまたは内 物孔長 1.2 ~ 2.3cm, 幅 1.1 ~ 1.8cm, 間隔 3.4cm ~ 4cm
75	扁棒か	棒状(円)	コナラ属 アカガシ変種	131		板出 A	SD47	2	6B13	34.6	5.5	5.0	
76	匙か		スギ			板口 A	SD47	2	6A12	9.6	3.8	1.5	両端欠損
77	弓		イヌガヤ	132	志持丸木	A	SD47	2		26.1	1.3	2.0	側部分 弓腹に平坦面作出 加工丁寧 下欠損
78	弓		イヌガヤ	134	志持丸木	E	SD47		5U17	25.5	1.9	1.5	弓腹部分を面取り 上欠損
79	刀剣把		カヤ	140		板出 E	SD47		5U16	10.1	4.5	1.9	真欠損
80	器物棒		スギ	123	板本取り	A	SD47	1		12.9	13.5	2.3	内面に突部をゆるく 上部に把手
81	器物か		スギ	142	板口 B	SD47	2	6B13		7.4	26.4	1.0	
82	不明製品	板状	スギ	135	板口 E	SD47		5U23		19.6	7.0	1.1	
83	刀形		スギ	122	板口 E	SD47	1	5U11		31.7	1.4	0.5	
84	部材	棒状(平)	モミ属	138	板口 E	SD47		5U1		26.9	2.5	1.2	片端 狭りにより面取り作出
85	部材	棒状	スギ	124	板出 E	SD47	2	5U24		33.2	7.1	1.5	両端両面 側孔 3
86	部材	棒状(角)	針			板出 E	SD47		5U1	22.6	2.7	1.5	小孔あり
87	部材	板状	スギ	125	板口 A	SD47	2	6A12		59.2	7.5	1.0	孔 4 本の配列 縁部縮じ 上欠損
88	部材	板状	モミ属	127	板出 A	SD47	2	6B2		10.3	3.8	2.1	上欠損
89	浮子		スギ	128	板口 A	SD47	2	6B3		12.3	3.8	0.9	亀甲状 小孔 2
90	加工材	広	志持丸木			板口 A	SD47	2	6B3	19.4	7.9	5.6	両端加工
91	加工材	ヤブツバキ		126	板出 A	SD47	2	6B12		25.6	11.8	11.5	両端加工
92	加工材	広				板出 A	SD47	2	6A22	11.0	3.6	2.6	
93	加工材	針				板口 A	SD47	2	6B7	22.0	4.9	1.8	上下欠損
94	柄柄か		広			板出 A	SD47		6B7	22.6	5.1	2.9	
95	柄か	棒状(角)	広			板口 A	SD47			52.7	4.0	4.6	
96	加工材	広	ミカン類			板口 A	SD47	2		24.4	4.9	2.4	
97	加工材	広				板口 A	SD47	2	6A22	11.5	7.4	3.4	
98	加工材	広				板口 A	SD47			21.7	9.3	3.4	下欠損
99	柄	板状				志持丸木	A	SD47	2	31.0	10.0	7.2	上・真欠損
100	柄		トネリコ属	129		志持丸木	A	SD47	2	46.7	9.3	8.5	上・真欠損
101		棒状(角)	針			板出 A	SD47	2	6B3	18.9	1.5	1.2	下欠損
102		棒状	針			板出 E	SD47		5U17	16.0	2.6	1.0	真欠損
103		棒状(平)	針			板口 A	SD47	2		21.3	2.3	1.0	
104		棒状(角)	針			板出 E	SD47		5U23	26.3	2.7	2.2	上欠損
105		棒状(角)	針			板出 E	SD47		5U16	24.8	2.0	1.5	
106		棒状(角)	針			板出 A	SD47	2	6B3	29.5	2.4	1.7	
107		棒状(角)	針			板出 A	SD47	2		28.9	1.4	1.2	断面五角形 上下欠損
108		棒状(角)	針			板出 E	SD47		5U23	47.7	3.1	2.2	
109		棒状(角)	針			板口 A	SD47	2	6B13	12.9	1.1	0.6	
110		棒状(円)	針			板出 E	SD47		5U22	40.9	2.2	2.2	加工丁寧
111		棒状(角)	針			板出 A	SD47	2	6B2	44.6	1.8	1.6	下部腐食
112		棒状(角)	針			板出 A	SD47	2	6B7	52.0	2.3	1.5	
113		棒状(平)	針			板口 E	SD47		5U16	46.2	3.4	0.9	上欠損
114		棒状(角)	針			板口 A	SD47	2		69.0	4.3	3.2	
115	角持型田下駄 (残)か	棒状(平)	針			板口 A	SD47			35.5	3.8	0.8	上下欠損
116		板状	トネリコ属	133		板口 A	SD47	2		(51.7)	7.9	1.8	加工丁寧
117		板状				板口 E	SD47		5U23	65.4	16.5	1.7	
118		短冊状	針			板口 E	SD47		5U23	20.6	2.3	0.7	
119		短冊状	針			板口 A	SD47	2	6B8	18.6	4.8	0.8	上下欠損
120		短冊状	広			板口 A	SD47	2	6A17	15.9	2.8	1.1	上部腐食
121		短冊状	針			板口 A	SD47	2	6B3	16.5	1.8	0.7	
122		短冊状	針			板口 A	SD47	2	6B13	14.3	1.6	0.8	
123		短冊状	針			板口 A	SD47	1		14.6	1.6	0.5	
124		短冊状	針			板口 A	SD47	2	6B12	9.8	2.9	0.6	上下欠損
125		短冊状	針			板口 A	SD47	1		10.9	2.2	0.5	
126		板状	針			板出 A	SD48	1		39.9	2.9	2.4	
127		棒状(平)	針			板口 A	SD48	1		52.1	3.9	1.7	

観察表

大武遺跡 木製品・漆製品観察表 (3)

報告番号	種 類	形状・断面	樹 種	試料番号	木取り	地区	出土位置			法量 (cm)			備 考	
							遺構番号	層上位置	グリッド	グリッド層位	長さ	幅		厚さ
128		棒状(角)	針		削出	A	SD48	1	6B18		35.5	1.7	1.2	
129	建築材か	棒状(平)			板口	A	SD48	1			79.3	0.6	2.8	
130	斧柄(曲柄)		コナラ属 コナラ節	146	削出	B	SD50	3	8B16		16.6	?	3.5	枝利用
131	直柄掘身 平鍔		コナラ属 クヌギ属	232	板口	B	SD50	1			13.6	7.9	3.7	
132	高柄		トチノキ	204	構木取り	B	SD50	3	11B11		直径 43.6	—	0.8	残存高 11.1cm 有段
133	肥子付管部		スギ	144	構木取り	B	SD50	1	6B15			12.4	3.4	残存高 9.2cm 方形か
134	鏃か		クリ	49	芯持丸木	B	SD50	1			16.3	4.9	4.1	中央部分に抉り
135	不明製品		トネリコ属	84	芯持丸木	B	SD50	1	8B16		19.8	6.2	5.4	上部釘痕状に作出 下部縮める かか
136	弓か				削出	B	SD50	1	7B14		27.3	2.2	1.7	
137	叩き板		スギ	145	板口	B	SD50	3	7B16		25.4	10.4	2.1	先端腐化
138	杓子伏		スギ	45	波板口	B	SD50	1			50.3	6.3	0.7	破の可能性もある 上下右側欠損
139	鏃		スギ	214	板口	B	SD50	1			79.4	9.7	3.0	
140	鏃		コナラ属 アカガシ変種	217	板口	C	SD50	3			107.1	9.1	2.8	
141	梯子		モクレン属	215	板口	B	SD50	1			84.7	18.2	9.8	2段残存
142	部材	棒状(円)	イヌガヤ	72	芯持丸木	C	SD50	3	10B16		32.1	1.5	1.1	上端に切込 全面に細かい加工 り利用か
143	部材	棒状	スギ	143	削出	B	SD50	1			26.6	2.0	2.0	284と近似
144	加工材	加工材	広	芯持丸木	B	SD50	3	8B18			15.0	8.7	7.3	
145	加工材	加工材	ヤマダブ	62	芯持丸木	B	SD50	3	8B17		15.8	9.5	9.2	一部腐化
146	加工材	加工材	広	芯持丸木	B	SD50	3	8B17			15.7	8.7	8.7	横皮残存
147	加工材	加工材	広	芯持丸木	B	SD50	3	8B19			10.9	6.8	6.4	
148	直柄又鍔 取掛けか		スギ	95	板口	B	SD50	3	7B13		23.7	14.9	1.0	上部左右端に孔2
149	部材	短冊状	スギ	41	板口	B	SD50	1	7B12		20.2	3.1	0.7	孔2
150	部材	板状	スギ	44	板口	B	SD50	1			24.0	8.2	1.0	左側に方形孔3、右側に円形孔3
151	部材	板状	スギ	48	板口	B	SD50	1			23.6	7.8	1.1	大小の孔 棒皮1か所残存 上 欠損
152	器物		スギ	52	板口	B	SD50	1			26.3	8.3	1.2	右側面に抉り 上下端木釘痕
153	器物		スギ	66	板口	B	SD50	3	8B22		28.2	8.2	1.0	右側面に木釘3
154	部材	板状	スギ	46	波板口	B	SD50	1			43.6	11.7	1.1	横一列に孔6 別か所に木釘孔 棒皮残存
155	部材	板状	スギ	57	板口	B	SD50	3	7B14		33.3	12.4	8.0	孔3
156	部材	板状	スギ	73	板口	B	SD50	3			37.1	8.1	7.0	
157	部材	棒状(角)	針		削出	B	SD50	3	7B12		60.5	4.4	2.7	木釘痕3
158	器物		スギ	64	板口	B	SD50	3	8B18		13.3	5.5	0.6	木釘痕3
159	部材	板状	スギ	40	波板口	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅵ	22.9	7.9	0.8	孔2、縦掛付痕 上部に孔また はひずり状抉り
160	部材	板状	スギ	85	板口	B	SD50	3	8B17		21.9	9.7	0.9	大小孔4 上下欠損
161	部材	板状	スギ	47	板口	B	SD50	1			33.2	11.6	2.6	方形孔2
162	部材	板状	スギ	68	板口	C	SD50	3	10B15		29.8	8.6	1.3	上部切込み 方形孔1
163	部材	板状	針		波板口	B	SD50	3	7B15		16.7	5.0	1.1	孔1
164	部材	板状	スギ	70	波板口	C	SD50	3	10B11		21.8	5.5	0.9	孔1 片端強状 上欠損
165	部材	板状			板口	B	SD50	1	7B12		42.9	4.9	0.9	横皮縦じり 孔3
166	部材	棒状(平)	スギ	39	板口	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅵ	10.7	4.8	1.6	方形孔か
167	板状	棒状(平)	針		板口	B	SD50	1	7B14		7.1	2.2	0.6	孔1
168	部材	棒状(平)	スギ	74	板口	B	SD50	3			14.4	2.1	0.8	方形孔か
169	部材	板状	トネリコ属	60	板口	B	SD50	3	8B17		14.6	7.6	0.9	上部半円状抉り
170	部材	板状	スギ	43	波板口	B	SD50	1	7B17		18.1	5.6	1.0	側面に抉り 両端腐化
171			板状	スギ	54	波板口	B	SD50	1		7.3	9.9	9.0	上下欠損
172	部材	板状	スギ	56	板口	B	SD50	3	7B13		23.7	6.7	0.7	半円筒状
173	部材	板状	遺孔材	51	板口	B	SD50	1			35.7	9.2	2.3	両端(上下)対称形
174			棒状(角)		板口	B	SD50	1			80.4	5.9	3.5	
175	部材	板状			波板口	B	SD50	1			113.9	23.5	1.6	両端(左右)抉りか
176	部材	棒状(平)	遺孔材	50	削出	B	SD50	1			160.1	5.6	3.1	端部欠込
177	棒状	棒状(角)	針		削出	B	SD50	1	7B12		60.5	2.5	1.6	下部欠込
178	杭				削出	B	SD50		8B17		111.7	5.5	4.9	杭 No.35
179	杭		スギ	42	削出	B	SD50	1	7B16		27.5	1.9	1.4	
180	杭		針		削出	B	SD50	1	7B15		44.1	15.1	3.3	上欠損
181	杭		針		削出	B	SD50	3	7B12		38.3	4.1	3.0	上欠損
182	杭		広		削出	B	SD50	3	8B17		32.7	3.4	2.2	
183	板状か		広		削出	B	SD50	3	8B17		(43.1)	9.6	3.3	
184	杭		ヤブツバキ コナラ属 アカガシ変種	228	芯持丸木	B	SD50		8B22		57.3	12.4	9.5	杭 No.15 粗皮残存
185	杭		76 コナラ属 アカガシ変種	76	芯持丸木	B	SD50		7B16		64.3	8.9	8.6	杭 No.7
186	杭		223	削出	B	SD50		8B21		67.5	8.3	8.3	杭 No.12	
187	杭		平型	削出	B	SD50		7B16		66.5	8.9	3.9	杭 No.3	
188	杭		遺孔材	65	芯持丸木	B	SD50	3	8B22		31.1	8.9	8.4	杭 No.9 半部材利用か 欠欠損
189	杭		広	削出	B	SD50	3	7B12		18.7	9.3	8.5	杭 No.8 枝利用 上欠損	
190			板状	針	削出	B	SD50	1			19.5	2.2	0.9	杭 No.24

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(4)

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	木取り	地区	出土位置			法量 (cm)			備 考	
							番 号	層 位	グリッド 位置	長さ	幅	厚さ		
191		棒状	針		側出	C	SD50	3	10R20		19.2	1.8	0.8	杭 No.22
192	杭		広		芯持丸木	B	SD50	3	8B17		33.9	16.4	6.1	
193	杭				芯持丸木	B	SD50	3	8B11		71.6	6.6	6.0	杭 No.9 平割材利用か
194	杭		広		芯持丸木	C	SD50	3	10B15		35.3	3.9	3.0	
195	杭		エゾノキ属	63	芯持丸木	B	SD50	3	8B17		21.9	2.8	2.4	
196	杭		広		芯持丸木	B	SD50		8B11		73.3	6.2	6.7	杭 No.8 枝利用
197		加工材	広		側出	B	SD50	3	8B17		43.0	17.0	8.6	製品素材または礎板か 加工不明瞭
198		加工材	広		平割	B	SD50	3	8B17		42.1	24.4	13.5	製品素材または礎板か 下面加工か 上欠損
199		棒状(平)	針		縦目	B	SD50	1			72.7	3.5	2.5	
200		板状	スギ	69	縦目	C	SD50	3	10B11		43.6	2.1	0.6	
201		板状	針		板目	B	SD50	1	7B13		41.7	3.5	1.2	一部炭化
202		加工材	広		板目	A	SD50	1			53.0	10.0	5.0	
203		板状	広		板目	B	SD50	3	8B17		68.1	7.8	2.2	一部平面加工
204		板状	針		縦目	B	SD50	1			36.6	7.2	2.2	
205		板状	針		板目	B	SD50	3	8B19		34.7	3.1	0.8	縦状面わずか
206		短冊状	針		縦目	B	SD50	1			15.4	2.9	0.7	縦状面わずか
207		短冊状	針		縦目	B	SD50	3			11.6	3.7	0.3	上下欠損
208		板状	針		縦目	B	SD50	1			18.6	4.4	1.1	欠込あり 下文損
209		板状	広		板目	B	SD50	1	7R20		18.1	5.3	0.9	加工丁寧
210		板状	針		縦目	B	SD50	3	8B17		16.8	5.0	0.8	上下欠損
211		板状	針		縦目	B	SD50	1			24.6	6.0	1.4	上下欠損
212		板状	広		側出	B	SD50	1	8B16		69.9	9.1	1.8	加工丁寧 下文損
213		板状			板目	B	SD50	1	6B15		67.6	9.0	0.7	
214		加工材	広		側出(板目)	B	SD50	3	8B16		25.6	17.7	4.5	養物または動物素材か
215		加工材	針		板目	C	SD50	3	10R20		23.0	6.3	2.4	上部欠込 下文損
216		棒状(平)	広		側出	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	27.4	16.4	2.2	側面傾り2か所 上欠損
217		棒状(角)	広		側出	B	SD50	1	8B16		16.8	3.4	2.1	
218		棒状(角)	広		側出	B	SD50	3	8B16		25.8	4.8	3.0	下文損
219		棒状(角)	広		側出	B	SD50	1	8B11		36.6	5.2	3.5	縦状面多数(差しものか)
220		棒状(平)	広		側出	B	SD50	1	6B15, 7B11	Ⅴ・Ⅶ	37.0	4.8	2.2	
221		棒状(角)	針		側出	B	SD50	3	7B12		29.6	4.9	3.4	面取り
222		棒状(角)	広		側出	B	SD50	3	7B15		26.9	2.9	1.8	
223		棒状(角)	針		側出	B	SD50	3	7B19		21.0	4.6	4.9	上部炭化
224		棒状(角)	広		側出	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	19.5	4.0	3.7	断面五角形
225		棒状(円)	広		側出	B	SD50	3	8B17		11.6	4.5	3.8	一部面取り 加工丁寧
226		棒状(円)	カエズ属	83	側出	B	SD50	1	8B16		12.1	3.1	2.3	上下欠損
227		棒状(円)	カエズ属	89	側出	B	SD50	1			19.5	3.1	2.3	加工丁寧 縦状面 下欠損
228		棒状(角)	広?		側出	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	43.0	6.3	4.8	上下欠損
229		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1	7B12		20.8	2.4	1.6	下欠損
230		棒状(角)	針		側出	C	SD50	3	10B11		23.7	1.9	1.0	上下欠損
231		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1	7B13		18.7	1.4	0.8	上欠損
232		棒状(角)	針		板目	B	SD50	3	8B19		14.7	2.4	1.4	平面加工 縦状面 上下欠損
233		棒状(平)	広		縦目	B	SD50	1	6B20		41.9	3.3	1.6	
234		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1	7B17		42.9	3.2	2.9	
235		棒状(角)	広		側出	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	45.0	3.6	2.3	
236		棒状(角)	広		側出	B	SD50		8B16		50.7	5.1	3.3	上下欠損
237		棒状(角)	針		板目	B	SD50	1			50.0	7.0	3.4	上下欠損
238		棒状(角)	スギ	53	側出	B	SD50	1			37.5	1.9	1.5	
239		棒状(角)	スギ	87	側出	D	SD50	1			26.9	1.3	1.3	
240		棒状(角)	スギ	86	側出	B	SD50	1	8B22		26.6	0.9	0.7	上欠損
241		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1			29.9	0.7	0.4	
242		棒状(平)	針		側出	B	SD50	1			20.6	1.0	0.6	下部に穿物痕 下欠損
243		箸状	針		側出	B	SD50	1	7B11		33.8	1.2	0.7	
244		箸状	スギ	67	側出	B	SD50	3	8B23		37.2	1.0	1.0	
245		箸状	針		側出	B	SD50	3	7B12		54.9	2.1	1.9	
246		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1	7B13		63.0	1.8	1.4	
247		棒状(角)	針		側出	B	SD50	1	7B13		88.3	2.4	2.2	加工丁寧
248		棒状(角)	針		側出	B	SD50	3	7B20		54.5	2.5	2.3	
249		棒状(平)	針		板目	B	SD50	1	7R20		46.2	2.0	1.0	
250		棒状(平)	針		側出	B	SD50	1	7B12		53.1	2.2	2.1	中央付近で扁平面が90°傾ける
251		棒状(平)	広		側出	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	59.2	3.7	2.4	
252		棒状(平)			側出	B	SD50		8B16		115.4	6.7	5.4	杭 No.24
253		棒状(円)			側出	B	SD50		8B14		57.9	3.9	3.3	杭 No.22
254		棒状(角)	スギ	75	側出	B	SD50	1	6B15		36.8	2.6	2.0	
255		棒状(平)	針		縦目	B	SD50	3	8B22		33.4	1.8	1.2	
256		棒状(平)	針		縦目	B	SD50	3	7B13		22.0	2.5	0.9	
257		棒状(角)	スギ	71	側出	C	SD50	3	10B15		42.7	2.5	1.6	上欠損
258		棒状(平)	針		縦目	B	SD50	1	6B15	Ⅴ・Ⅶ	21.8	1.6	0.8	

観 察 表

大武遺跡 木製品・漆製品観察表 (5)

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	木取り	地 区	出土位置			法量 (cm)			備 考	
							番 番 番	層 大 層	グリッド 位置	長さ	幅	厚さ		
259		棒状(平)	針		側出	B	SD50	3	7B13		16.8	1.4	0.9	上欠損
260		棒状(平)	スギ	59	板目	B	SD50	3	8B17		16.9	1.8	0.6	
261		棒状(角)	スギ	88	側出	B	SD50	1			20.6	2.7	1.8	
262		棒状(平)	広		板目	B	SD50	3	8B19		9.5	2.7	1.6	
263		棒状(平)	針?		板目	B	SD50	3	8B16		8.4	1.4	0.5	
264	直柄胴身 平腹		コナラ属 アカガシ亜属	150	板目	B	SD61	3	6B20		21.9	10.4	2.1	
265	不明製品		スギ	149	側出	A	SD51	3	6B6		14.9	3.8	2.0	上端欠込み 杓の可能性ありか
266	部材	板状	針		流経目	A	SD51	3	5C13		30.0	8.1	0.8	片側面残り2か所 上下欠損
267	部材	棒状(平)	スギ	148	板目	B	SD51	3	8B11		47.5	4.0	0.9	片側面に孔1
268	部材	板状	針	151	板目	B	SD51	3	7B14		54.1	9.7	2.3	方形孔2
269		加工材	広		板目	A	SD51	3	6B24		22.7	21.6	3.7	下端丸く作出
270		加工材	コナラ属 アカガシ亜属	147	板目	A	SD51	3	5C8		30.8	14.9	4.8	
271		棒状(円)	針		側出	A	SD61	1			22.2	2.0	1.4	加工丁寧
272		棒状(円)	針		側出	A	SD61	1			72.0	1.9	1.6	
273	整骨		コナラ属 アカガシ亜属	153	側出	C	SD83		10B13		60.3	8.6	8.7	下欠損
274	盤		針			F	SD83		11B6		37.0	12.5	5.2	側材 外面表面炭化
275	切物櫛		スギ	155 (流経目)	F	SD83			11A21		27.0	6.9	4.3	
276		加工材	コナラ属 アカガシ亜属	80	芯持丸木	C	SD83		9B20		19.3	6.6	4.6	真欠損
277	整骨	折曲げ	タケ巻料	156	一	C	SD83	ガツボ	10B13		3.3	3.5	0.4	折曲げ 黒漆塗 312と近似
278	不明製品		アサダ	157	側出	F	SD83	ガツボ	11B1		13.7	5.2	2.3	
279		筒状	広		側出	F	SD83	ガツボ	11A21		20.0	3.2	1.4	上欠損
280	円形板か	スギ	154	板目	F	SD83	底面	10B10			24.0	13.2	1.1	
281	部材	板状	針		板目	F	SD83	底面	10B10		18.5	4.2	1.4	孔1 上下欠損
282	部材	円			芯持丸木	C	SD83		9B		47.4	5.9	5.6	半割材面取り 作出 下部細め
283	部材	棒状(平)	スギ	78	側出	C	SD83	ガツボ	9B18		50.4	2.9	1.5	加工丁寧
284	部材	円	スギ	77	側出	C	SD83		10B13		54.9	3.2	2.8	半割材 143と近似
285	部材	板状	スギ	220	板目	C	SD83	ガツボ	9B12		63.0	15.2	1.9	方形孔2
286	部材	板状	針		板目	C	SD83				66.0	3.8	0.8	孔3
287	部材	棒状(平)	スギ	79	板目	C	SD83	ガツボ	9B18		66.3	1.8	0.8	両面に残り
288	部材	棒状(平)	広		平割	C	SD83		10B12		63.8	11.2	5.7	半割材面取り 方形孔1
289		加工材	ヤブツバキ	81		C	SD83		9B		34.5	15.7	11.0	製品素材または礎板か
290		板状			芯持丸木	C	SD83		9B		44.0	13.3	10.2	製品素材または礎板か 板皮残存
291	杭				芯持丸木	C	SD83		9B		66.6	5.7	5.5	杭No.3 板皮残存 上部劣化
292	杭				芯持丸木	C	SD83		9B		69.2	5.7	4.1	杭No.15 自然木利用 枝流とし
293	杭		トネリコ属	82	芯持丸木	C	SD83				32.4	4.1	3.6	杭No.11
294		板状	スギ	158	板目	F	SD83	ガツボ	11B1		19.5	6.1	1.1	
295		棒状(平)	針		板目	C	SD83		10B13		19.2	4.4	1.7	左側面削加工 上欠損
296		板状	針		板目	C	SD83	ガツボ	9B16		36.2	6.4	1.3	上欠損
297		板状	針		側出	F	SD83	ガツボ	11A21		24.0	2.5	0.9	上下欠損
298		棒状(角)	針		側出	F	SD83	ガツボ	11A21		32.8	2.2	1.7	下欠損
299		棒状(角)	針		側出	C	SD83		10B11		52.8	4.6	3.3	上下欠損
300		棒状(平)	針		側出	F	SD83	ガツボ	11B2		21.2	2.3	1.4	
301		棒状(平)	針		側出	C	SD83		10B11		33.4	1.9	1.4	上欠損
302		棒状(円)	針		側出	C	SD83		9B20		32.4	2.0	1.5	
303		棒状(平)	針		板目	C	SD83	ガツボ	10B18		41.0	3.1	1.8	
304		筒状	広		側出	C	SD83		9B		42.0	4.0	1.9	
305		棒状(角)	針		側出	C	SD83	ガツボ	9B18		52.3	1.8	1.5	下欠損
306		棒状(円)	針		側出	C	SD83	ガツボ	9B18		42.1	2.0	1.7	
307		棒状(角)	針		側出	C	SD83	ガツボ	10B18		18.6	1.1	1.1	
308		棒状(角)	針		側出	C	SD83	ガツボ	10B18		18.0	3.0	0.8	上下欠損
309		棒状(角)	針		側出	C	SD83		10B13		15.5	0.7	0.4	下欠損
310	側・胴 未成品か		トネリコ属	160	板目	G	SK95	1	6D21		23.9	14.1	3.6	
311	直柄胴身 平腹		コナラ属 アカガシ亜属	167	板目	G	SK95	1	6D21		29.7	14.7	4.0	記録片張り孔(方形)2
312	整骨	折曲げ	タケ巻料	234	一	G	SK95	1	6D21		4.2	5.2	0.4	折曲げ 黒漆塗 277と近似
313	杓子形		スギ	165	板目	G	SK95	1	6D21		57.0	4.0	1.8	加工丁寧
314	火照目				板目	G	SK95	1	6D21		8.1	1.9	1.9	
315	部材	板状	スギ	161	板目	G	SK95	1	6D21		10.1	5.9	0.8	
316	不明製品	板状	針		芯持丸木	G	SK95	1	6D21		15.0	1.9	2.0	
317	不明製品	棒状(平)	スギ	168	板目	G	SK95	2	6D21		21.0	2.7	1.1	下部炭化
318		棒状(角)	トネリコ属	162		G	SK95	1	6D21		18.3	2.6	2.2	
319	杭		トネリコ属	159	ミカン割 (側出)	G	SK95	1	6D21		39.0	4.5	2.3	板皮残存
320		棒状(平)	広		芯持丸木	G	SK95	1	6D21		33.9	2.4	1.8	
321		棒状(平)	針		側出	G	SK95	1	6D21		28.5	2.9	1.5	上下欠損
322		棒状(平)	針		側出	G	SK95	1	6D21		24.0	2.4	0.7	下欠損
323		棒状(平)	針		側出	G	SK95	2	6D21		51.1	1.1	0.3	
324		棒状(円)	ハコナラ属	166	側出	G	SK95	2	6D21		20.3	0.7	0.6	

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(6)

報告番号	種 類	形状・断面	樹 種	試料番号	木取り	地区	出土位置			法量 (cm)			備 考	
							遺構番号	層上層位	グリッド	長さ	幅	厚さ		
325		棒状(平)	トネリコ属	163	榎目	I	SK95	1	6D21	43.1	2.4	1.4		
326		棒状(角)	広		榎目	G	SK95	1	6D21	18.5	1.7	1.2		
327		棒状(平)	広		榎目	G	SK95	1	6D21	21.6	2.9	1.2		
328		棒状(平)	広		榎目	G	SK95	1	6D21	38.4	3.1	1.2		
329	部材	棒状(角)	広		榎目	C	SK87			47.0	4.9	2.8	孔1	
330	板面下駄か		クリ	97	榎目	C	SK88		11B23	21.0	18.1	1.5	上欠損	
331		棒状(平)	広		淡緑目	C	SK88	ガツボ	11B25	12.1	3.6	1.7	上欠損	
332	容器蓋か				榎目	C	SK88	下	11B13,18	33.2		0.5	筒縁に孔列	
333	弓(長弓)		イヌガヤ	207	芯持丸木	C	SK88		11B18	168.0	2.7	2.7	片側全面加工	
334		加工材			芯持丸木	C	SK88		11B17	10.8	4.9	4.6		
335	部材	棒状(角)	クリ	96	榎目	C	SK88	ガツボ	11B20	15.9	4.3	4.4	両端に差込孔(上端円形、下端方形)	
336		加工材	針		榎目	C	SK88		11B17	14.8	5.1	3.2		
337	井戸枠板か		スギ	219	榎目	C	SK88	下	11B13,18	106.5	20.5	2.6	下側全面加工 一部酸化	
338		板状	針		榎目	C	SK88	ガツボ	11B19	44.6	5.7	1.0	上表面全面加工 下欠損	
339		板状			榎目	C	SK88		11B17	30.5	9.1	2.4		
340	杭				芯持丸木	C	SK88	ガツボ	11B18	68.5	7.1	6.7		
341	杭				芯持丸木	C	SK88	砂	11B18	121.6	7.8	7.2		
342	杭		広		芯持丸木	C	SK88		11B17	85.8	5.5	4.8		
343	杭				芯持丸木	C	SK88	ガツボ	11B18,24	70.1	12.6	12.6		
344	杭		広		芯持丸木	C	SK88	ガツボ	11B19	30.5	6.1	3.4	上・裏欠損	
345	杭		広		芯持丸木	C	SK88		11B17	36.9	5.0	4.4		
346		棒状(平)			榎目	C	SK88		11B17	19.4	1.3	0.7		
347		棒状(平)	ヤマグワ	95	榎目	C	SK88	ガツボ	11B18	31.9	3.3	1.4	上欠損	
348		棒状(円)			榎目	C	SK88		11B18	117.1	3.0	2.2		
349		棒状(平)			榎目	C	SK88	ガツボ	11B18	23.6	5.0	2.8	下欠損	
350	加工材	トネリコ属	94	榎目	C	SK88	下	11B13,18	33.4	17.0	6.8			
351		広			芯持材	C	SK88		11B17	33.9	13.4	8.7	劣化著しい 礎板または製品素材か	
352		棒状(平)			榎目	C	SK88		11B17	38.3	2.7	1.1		
353		棒状(角)	広		榎目	C	SK88		11B17	43.1	3.8	3.3		
354		棒状(角)			榎目	C	SK88	ガツボ	11B19	22.1	2.0	1.9		
355		棒状(角)			榎目	C	SK88		11B23	64.7	3.0	2.1		
356		棒状(平)			榎目	C	SK88	ガツボ	11B	27.6	1.6	1.0		
357		棒状(角)	針		榎目	C	SK88	ガツボ	11B18	20.2	0.8	0.4		
358	脚付盤か		ヤマグワ		榎木取り	E			5724	XIIIe	38.2	30.2	2.1	全体高 12.9cm、台高 9.0cm、盤幅 18.9cm 上面縁板状
359		板状	コナラ属 コナラ	2	芯持丸木	B			7A	XV	13.5	5.0	4.0	
360		板状	クリ	3	芯持丸木	C			9A21	XV	43.9	6.3	6.6	
361		板状	広		芯持丸木	B			7A	XV	61.8	4.9	2.8	
362		棒状(平)	スギ	1	榎目	B			7D23	XVd	18.1	1.8	0.7	
363		棒状(円)	クリ	5	芯持丸木	B			7A15	XV	19.5	3.4	3.4	横皮残存
364		加工材			芯持丸木	B			7A15	XV	9.5	3.8	3.1	
365		加工材	サワグルミ	172	榎目	E			5724	XVb	10.7	6.0	1.9	
366	乾納漆器(壺)		不明	171	不明	G			4C19	XII d	-	-	0.3	残存高 9.7cm、胴部最大径 24.5cm 赤漆塗 榫刺孔と思われる孔1
367	棒状	棒状(平)	ヒノキ科	19	榎目	E			5722	XII 砂	17.2	1.2	0.5	
368		加工材	針		榎目	A			3A5	XII	34.0	7.4	3.4	
369		加工材	カマツカ属	170	芯持丸木	B			6C13	XIII d	19.9	5.8	5.4	
370	舟料(曲柄)		モチノキ属 ヤブノハキ		芯持丸木 枝利用	B			6C13	XIII d	34.5	10.4	5.5	添え木固定式 樹種:(370、370b)モチノキ属・(370b、c)ヤブノハキ
371	不明製品	板状	広?		榎目	B			8B2	XIIIa	24.7	20.0	1.4	横皮残存 下端縁板加工
372	漆塗陶輪		ニシキ平属		-	F			10A22	XIc	(標定 径8.0)	2.4	赤漆塗 内径標定 6.5cm	
373		加工材	広		編平属	F			10A25	XIc	38.8	33.1	11.8	
374		板状	広		芯持丸木	F			11B13,18	XIc	27.2	11.9	7.6	
375	円形板		スギ	181	淡緑目	G			4C23	XIc上	19.9	8.4	0.6	
376	不明製品		針		榎目	E			4U20	IXa	14.8	3.5	4.4	節部部分辺を加工
377	給弾車		スギ	23	榎目	F			11A22	IXc	7.0	7.5	0.9	中心に孔1 直径4~5mm
378	弓		広		榎目	B	SD51		6B15,20	IX	43.8		2.7~ 3.7	
379	部材	棒状(角)	スギ	24	榎目	F			11A22	IXc	48.0	4.8	2.3	上部に欠込 建築材の可能性もあり 下欠損
380	井戸枠板か		クリ	226	榎目	E			5U23	IXc	85.5	20.7	6.0	
381	杭		ツナ属	20	芯持丸木	C			IXc	30.5	6.2	6.4	横皮残存	
382		棒状(角)	広		榎目	F			10B6	IXc	39.7	7.7	6.5	
383	柱根か		広		榎目	F			11A24	IXc	51.3	10.2	6.1	柱根か 劣化により加工痕不明
384		加工材	ハンノキ属 ハンノキ	21	ミカン割	E			6U16	IXc	29.3	16.7	8.0	表面と下側加工 礎板または製品素材か
385		棒状(円)	スギ	225	榎目	F			11A22	IXc	102.3	3.8	4.0	
386		棒状(角)	スギ	22	榎目	F			11A19	IXc	50.9	3.3	2.6	上下欠損

観察表

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(7)

報告番号	種類	形状・断面	樹種	試料番号	木取り	地区	出土位置		法量 (cm)			備考	
							遺構番号	層上層位	グリッド	グリッド層位	長さ		幅
387		棒状(角)	針		削出	F		11A22	Ⅸc	27.4	3.2	2.2	
388		棒状(角)	針		削出	F		10B1	Ⅸc	12.6	1.1	0.6	上下欠損
389		知照状	ヒノキ	180	榎目	G		4D13	灰色粘土	6.0	2.9	0.2	下部に浅い円形凹みあり
390		知照状			榎目	G		4D13	灰色粘土	15.3	3.1	0.2	
391	円形板か		針					4c トレンチ	灰色粘土	31.1	8.4	0.8	
392		知照状	スギ	183	榎目	D		3D17	F	17.4	2.0	0.3	下部側に接り
393		知照状			板目	D		3D17	F	20.4	1.6	0.2	
394	部材	板状	スギ	179	榎目	D		3D7	D	14.8	3.2	0.6	上部に孔1 下欠損
395	部材 (円形板)	板状	ヒノキ	178	榎目	D		2D25	D	26.7	12.1	1.2	孔、左側に2個1対、上部に1対物痕
396		棒状(角)			削出	A		5B10	31	27.7	2.5	1.8	上部切込
397	部材	板状			榎目	A		4A10	31	28.3	3.6	1.1	
398	板状		針		流経目	A		6A12	31	35.9	5.8	2.3	
399		棒状(角)	針		削出	A		6C3	27	32.8	4.1	5.7	
400		棒状(平)	針		流経目	A		6C3	27	29.0	2.7	1.0	
401		棒状(角)	針		削出	B		6B25	27	30.1	1.7	1.4	上下欠損
402	部材	板状	スギ	184	榎目	G		4C19	23	20.1	5.3	1.6	
403	部材	板状	スギ	182	流経目	A		5B15	23	15.7	7.0	1.2	孔 物痕残存(二重に巻く)
404	惣物箱	スギ	185	榎木取り	G			6B5土	23	27.3	16.2	3.0	
405		棒状(平)			削出	G		4D15	23?	22.7	2.3	1.3	
406		棒状(平)	針		削出	A		6B16	23	27.1	2.6	1.6	下欠損
407	建築材か	スギ	218	流経目	A			5A24	23	125.0	26.5	5.1	左側に2個1対、間に浅い凹み
408	柱組か	スギ	175	志持丸木	G			5D8	23?	52.0	15.8	13.2	
409		棒状(円)	針		志持丸木	A		21	31.2	1.4	1.5		
410		棒状(平)	針		削出	A		5C10	21	12.6	2.2	1.3	下部炭化
411		棒状(平)	針		削出	A		5C8	20	26.8	3.2	1.6	
412		知照状	針		榎目	D		3D13	20	9.8	1.8	0.4	
413		棒状(角)	針		削出	B		7A24	Ⅸb	32.0	4.7	3.0	
414		棒状(平)	針		削出	B		7A24	Ⅸb	46.7	2.9	2.3	
415		棒状(角)	針		削出	A		5A19	Ⅸb	62.0	1.5	1.8	
416	部材	板状	針		榎目	B		7D6	Ⅸa	25.3	9.3	0.5	横円形孔1
417		板状	針		榎目	B		8A19	Ⅸa	9.0	14.7	1.4	下・左側欠損
418		知照状	針		板目	E		5U23	Ⅸa	15.1	6.5	0.6	
419	部材	板状	スギ	222	板目	B		8D7	Ⅸa	56.6	12.1	1.4	左側に孔3配列 建築材の可能性もあるか
420		棒状(角)	針		削出	E		5U23	Ⅸa	44.8	5.7	4.3	上下欠損
421		棒状(平)	針		榎目	A		6B12	Ⅸa	45.7	4.9	2.1	上下欠損
422		棒状(平)	針		削出	E		5U6	Ⅸa	30.7	3.0	1.6	上部欠込 下欠損
423		棒状(角)	針		削出	E		5U6	Ⅸa	27.5	2.6	1.3	下欠損
424		棒状(角)	針		削出	A		5B8	Ⅸa	17.8	2.1	1.1	
425		知照状	針		板目	A		5B10	Ⅸa	12.5	1.9	0.5	下欠損
426		棒状(角)	針		削出	E		Ⅸa	16.7	3.7	2.4		
427	直轄隼身(頭部部分)		コナラ属 アカガシ亜属	28	板目	A		6A17	Ⅸb	15.4	6.0	1.0	隼身の柄差込部分が脱落したものが、劣化著しい
428	浮子		スギ	34	榎目	F		11A20	Ⅸb	8.9	1.2	0.5	
429	弓		イヌガヤ	213	志持丸木	C		11C5	Ⅸb	75.3	接3.2		全面に細かい加工痕 上下欠損
430	釣り形		スギ	35	板目	F		11B7	Ⅸb	33.0	6.6	7.0	
431	枠か		トネリコ属	36	志持丸木	C		11B23	Ⅸb	4.8	2.4	2.1	上部切込 下部加工
432	曲物底板		スギ	169	榎目	C		11B23	Ⅸb	16.3	16.4	1.0	側面木釘6か所
433	槽		スギ	224	榎目	I		10B4	Ⅸb	103.0 (検定)	21.5		底0.7 残存高8.2cm、知照厚5.0cm 底面部分なし
434	不明製品		針		削出	A		Ⅸb	7.6	4.1	1.6	欠損	
435		棒状(角)	針		削出	A		6B18	Ⅸb	11.7	2.1	1.4	節のある枝を面取り 下欠損
436		棒状(角)	針		削出	A		6B18	Ⅸb	13.7	1.4	1.8	
437	籾か		散孔材	233	削出	C		11B23	Ⅸb	32.6	9.5	4.6	
438	刀形か		ケヤキ	38	削出			4a トレンチ	Ⅸb	31.6	3.4	1.5	加工丁寧 刀状か
439		棒状(円)	スギ	29	削出	A		6B18	Ⅸb	32.8	2.1	1.8	断面多角形 下部有段
440		棒状(角)	スギ	37	削出	C		11C4	Ⅸb	28.4	1.8	1.4	上部四角形状に作出
441	彫形か		スギ	211	板目	C		11B18	Ⅸb	65.9	6.8	1.3	
442		棒状(円)	スギ	26	削出	A		4A5	Ⅸb	49.6	4.2	3.4	
443		加工材	針		削出	A		6B18	Ⅸb	13.3	7.4	1.8	
444		棒状(角)	針		榎目	A		6B18	Ⅸb	10.2	2.0	1.0	
445		棒状(角)	針		削出	A		6B18	Ⅸb	11.7	1.9	1.3	下欠損
446		加工材			削出			11B18	Ⅸb	27.2	4.2	3.8	
447	部材	板状	針		流経目	A		6A12,17	Ⅸb	29.1	4.3	0.9	上下に孔2個1対 下部両側に接り
448	部材	板状	針		流経目	A		6A11	Ⅸb	24.9	6.8	0.9	
449	部材	板状	トネリコ属	231	志持丸木			4a トレンチ	Ⅸb	55.0	16.4	2.9	2個1対の孔3
450	部材	板状	モミ属	27	板目	A		5A3	Ⅸb	37.1	4.9	1.6	2個1対の孔2、単孔5
451		板状	針		榎目	A		6B17	Ⅸb	43.9	6.0	0.9	上下欠損
452		板状	針		榎目	A		5A19	Ⅸb	43.1	6.8	1.2	上下欠損
453		板状	針		榎目	E		4U5	Ⅸb	29.4	11.1	2.8	表面加工痕、彫状痕

大武遺跡 木製品・漆製品観察表(8)

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	木取り 部位	地 区	出土位置		法量 (cm)			備 考	
							遺構 番号	層上 層位	グリッド グリッド	グリッド 層位	長さ		幅
454		短冊状	針		榎目 A			6B18	Vb	9.9	2.1	0.4	
455	部材	板状	スギ	32	榎目 A			6B23	Vb	53.5	6.6	0.8	孔4 上欠損
456		棒状(角)	針		榎目 A			6A22	Vb	36.5	4.1	2.2	
457		棒状(角)	針		榎目 A			6A4	Vb	34.3	3.9	2.8	上欠損
458		棒状(平)	針		榎目 C			11B18	Vb	27.7	5.0	3.3	
459		板状	広?		志持丸木 C			11B23	Vb	47.2	2.4	2.4	上欠損
460	板状	アサダ		33	榎目 A			6B18	Vb	60.0	9.0	4.3	
461		板状	針		榎目 A			5A3	Vb	60.9	6.1	2.0	
462		棒状(平)	広		榎目 B			4a トロンチ	Vb	49.3	3.8	2.1	
463		棒状(角)	広		榎目 B			102C10	Vb	43.4	2.9	2.0	
464		棒状(平)	針		榎目 I			6B9	Vb	47.3	2.8	1.5	
465		棒状(角)	針		榎目 A			6B18	Vb	27.9	2.2	1.4	
466		棒状(角)	スギ	30	榎目 A			6B18	Vb	21.3	1.8	1.2	下欠損
467		棒状(平)	針		榎目 A			6A17	Vb	22.9	1.6	0.8	
468		棒状(平)	針		榎目 I			103C20	Vb	13.3	1.0	0.4	
469		棒状(平)	針		榎目 A			6B18	Vb	17.3	3.0	1.8	下欠損
470		棒状(平)	針		榎目 C			11B12	Vb?	19.1	1.1	0.7	上欠損
471		棒状(角)	針		榎目 I			103C23	Vb	20.0	1.2	1.1	下部炭化
472		棒状(平)	針		榎目 I			102C10	Vb	15.2	1.8	0.7	下部炭化
473		棒状(角)	針		榎目 I			103C12	Vb	12.1	1.5	0.9	全面炭化
474		棒状(角)	針		榎目 I			103C13	Vb	16.1	0.9	0.7	下部炭化
475		棒状(角)	針		榎目 I			103C7	Vb	22.8	0.9	0.7	下部炭化
476		棒状(角)	スギ	31	榎目 A			6B18	Vb	23.7	1.7	1.2	
477		棒状(円)	針		志持丸木 A			5B18	Vb	16.5	1.2	8.0	
478		棒状(角)	針		榎目 I			103C13	Vb	15.5	0.9	0.8	上部炭化 炭化
479		加工材	クリ	25	榎目 A			6A21	Vb	9.6	6.5	5.1	
480		板状	針		志持丸木 A			6B1	Vb	26.3	5.5	2.4	
481		板状	針		榎目 A			6A21	Vb	52.3	10.0	2.0	
482		棒状(角)	針		榎目 A			5A25	Vb	35.0	3.1	1.9	上下欠損
483		棒状(円)	針		榎目 A			5A14	Vb	34.7	2.2	1.8	
484		棒状(平)	針		榎目 A			5A19	Vb	91.4	5.0	2.6	上下欠損
485		棒状(円)	針		榎目 A			6A1	Vb	42.4	1.8	1.5	
486		棒状(平)	針		榎目 A			5A19	Vb	24.1	2.4	0.7	
487		箸状	スギ	93	榎目 I			101D5	Vt	10.1	0.6	0.6	上下欠損
488		箸状	スギ	90	榎目 A			6A21	Vt	17.5	0.7	0.6	
489		短冊状	針		榎目 F			10B5	Vt	6.5	3.1	0.5	上欠損
490	舟形凹下駄 (残) 残		針		榎目 C			9B3	Vt	35.8	2.3	1.5	上欠損
491		棒状(円)	針		榎目 F			10A25	Vt	34.9	4.4	1.1	両端板状
492		板状	針		榎目 A			6B12	Vb	29.7	10.9	2.6	
493		棒状(角)	針		榎目 A			5B18	Vb	22.6	1.7	1.2	上下欠損
494	不明製品	棒状(角)	スギ	92	榎目 B			ベルトA列	Vb	14.0	2.0	1.2	下部に断面長方形の未貫通孔 孔内は炭化
495	円形板か		スギ	91	榎目 B			ベルトA列	Vb	14.0	2.9	0.5	
496		板状	針		榎目 B			ベルトA列	Vb	22.6	4.1	0.6	
497	柱根		針		志持丸木 C			11B18	Vb	57.4	20.3	17.2	
498		板状	針		榎目 B			8B20	Vb	49.9	3.5	1.8	上欠損
499		棒状(平)	針		榎目 A			6C7	Vb	23.7	1.6	0.8	
500		棒状(円)	針		榎目 B			ベルトA列	Vb	15.4	1.5	1.2	上欠損
501	部材	棒状(平)			榎目 B			ベルトB列 V-VIa	V-VIa	22.8	1.8	1.1	表面上部に木釘2枚存。側面に 木釘孔1
502	部材	板状	スギ	200	榎目 B			ベルトB列 V-VIa	V-VIa	24.0	3.3	0.9	上下端部板状。右側に木釘孔列
503		棒状(円)	針		榎目 B			ベルトB列 V-VIa	V-VIa	15.0	1.1	1.0	
504	断面下駄(南)		スギ	201	榎目 B			ベルトB列 V-VIa	V-VIa	12.5	7.0	2.3	
505	曲物脚板		ヒノキ	195	榎目 F			11B7	V	10.1	4.5	0.4	ケビキ痕
506	不明製品	短冊状	スギ	198	榎目 E			5720	V	8.8	2.9	0.2	上部つまみ状に作出
507	不明製品	短冊状	スギ	197	榎目 E			4018	V	11.1	2.4	0.2	上部つまみ状に作出 形代か
508	円形板か		スギ	102	榎目			ベルトB列 V	V	16.0	8.9	0.6	
509	円形板か		スギ	103	榎目			ベルトB列 V	V	16.5	8.2	0.9	
510		板状	針		榎目 C			11B5	V	54.6	11.8	3.7	表面中央炭化
511	部材	棒状(角)	スギ	101	榎目 I			103C24	V	14.4	2.6	2.2	上部欠込状
512	不明製品	板状	スギ	104	榎目 C			2a トロンチ	V	44.4	3.0	2.0	加工痕跡 上欠損
513		板状	スギ	99	榎目 I			102D10	V	21.6	1.0	0.8	
514		棒状(円)	アスノ口	100	榎目 I			102D10	V	16.9	1.5	1.0	加工了事 上欠損
515		棒状(平)	スギ	98	榎目 A			6B16	V	12.9	2.1	1.0	上欠損
516		棒状(角)	針		榎目 E			6711	V	15.7	1.4	1.1	上下欠損
517		加工材	針		榎目 A			6C3	V	10.7	16.5	1.1	上下欠損か
518		棒状(平)	針		榎目 B			7B22	V	8.7	1.6	0.6	
519		棒状(平)	針		榎目 L			104E1	V	7.5	1.5	0.6	
520		加工材	広		榎目 C			11B14	V	9.1	3.6	1.4	上欠損
521	不明製品	棒状(平)	スギ	208	榎目 F			11A8.13	Vd	128.3	9.7	2.2	両側面に抉り 不規則に連続
522	部材	板状	スギ	206	榎目 G			11A9	Vd	33.8	16.4	1.6	孔1

観 察 表

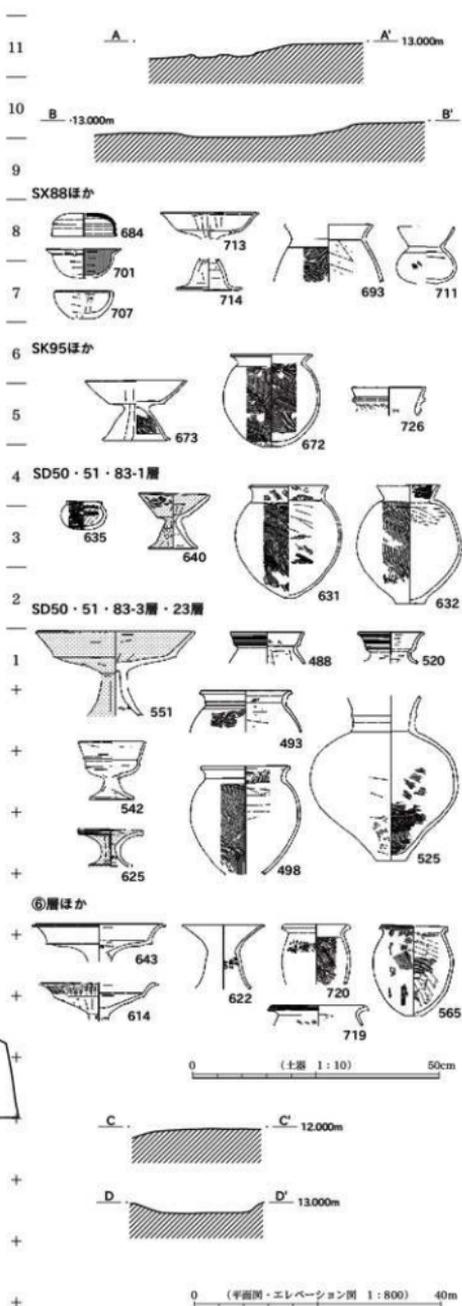
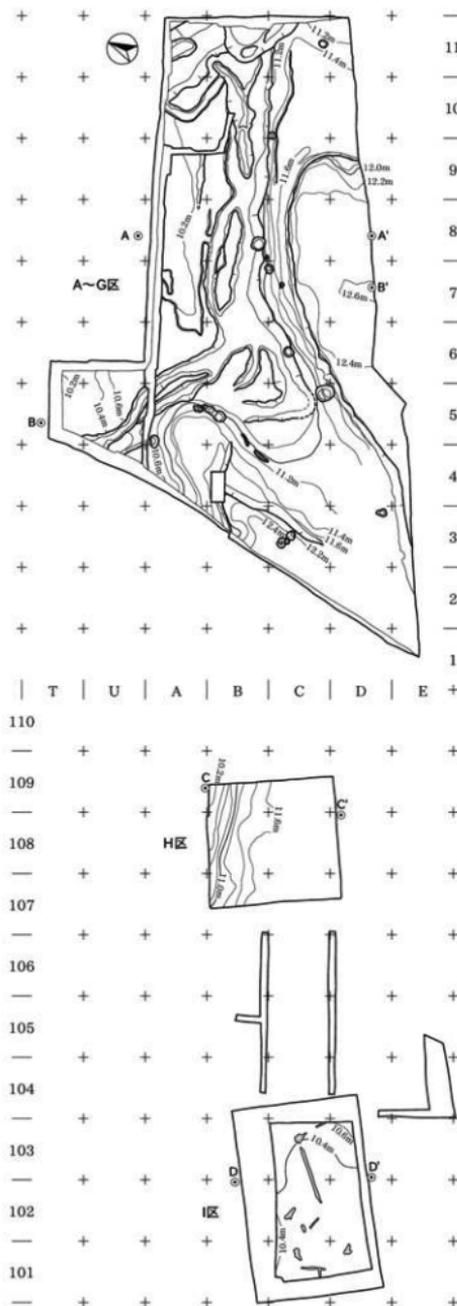
大武遺跡 木製品・漆製品観察表 (9)

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	木取り	地 区	出土位置		法量 (cm)			備 考	
							遺構 番号	層上 層位	グリッド	グリッド 層位	長さ		幅
523		板状						11A12	Vd	45.0	12.0	3.0	
524		棒状(円)						11A24	Vd	51.2	1.4	1.2	
525		棒状(平)	針					11B9	Vd	18.7	2.0	0.8	上欠損
526		棒状(平)	針					11B10	Vd	26.9	3.4	1.3	上欠損
527	部材	棒状	スギ	202	彫出	F		11A18	Vc	27.9	3.2	1.4	左側に方形切り
528	浮子		針					11A13	Vc	9.5	1.1	0.6	両側に切り
529	不明製品	棒状(平)	スギ	209	流経口	F		11B23	Vc	59.7	7.4	1.9	両側面に切り 不規則に連続 下欠損
530		棒状(円)						11B8	Vc	39.1	1.3	1.1	
531		板状	スギ	205	板口	F		11B7	Vc	38.0	11.7	3.0	
532		棒状(角)	スギ	199	彫出	F		11A7	Vc	23.0	3.3	3.4	上端つまみ状に作出
533	円形板		ケヤキ	196	板口	B		7B22	Vb	14.3	7.9	0.5	両縁やや厚み減 板破か
534		棒状(平)	針					5C13	Va	14.2	2.5	0.9	上欠損
535	箸		針					5U2	Va	9.7	0.7	0.8	下欠損
536	人形か		スギ	6	板口	F		11A8	古灰砂 (下)	11.3	3.0	0.8	
537	楕		スギ	237	榎板取りか	F		11A18	古灰砂	44.0	16.1	2.7	断面 9.7cm
538	曲柄鎌身 平鍔		コナラ属 アガチ虫属	11	板口	F		11A30	古灰砂	36.0	11.3	1.6	
539	榎または 櫨か		アサダ	4	板口	F		4B10	古灰砂	30.1	11.6	1.4	
540	部材	板状	スギ	7	板口	F		11A12	古灰砂	22.1	6.7	1.6	上部方形孔1
541	動物	板状	スギ	16	板口	F		11B3	古灰砂	45.4	9.3	1.9	下部に欠込 左側面本釘4、真 面5
542	部材	板状	スギ	8	板口	F		11A16	古灰砂	19.1	5.2	1.4	上層に切り 孔縦列2
543	動物	板状	スギ	12	板口	F		11A24	古灰砂	22.3	4.5	0.7	両端撚形に広がる 孔4
544	部材	板状	スギ	18	板口	F		11B9	古灰砂	24.1	6.1	0.6	孔3(小2・大1)
545	動物	板状	スギ	14	板口	F		11A25	古灰砂	13.0	5.4	0.6	右側に弧状の切り、切込
546	部材	板状	スギ	15	板口	F		11A16	古灰砂3	26.3	6.9	1.1	上部孔1 縁状欠
547	不明製品	板状	スギ	236		F		11A23	古灰砂	29.6	8.6	2.4	
548		棒状(平)	広		彫出	F		11A19	古灰砂	59.9	4.2	2.0	上部欠込
549	建築材か		針		彫出	F		11B7	古灰砂	48.6	4.5	5.0	両側面欠込状
550		加工材	針		彫出	F		11A11	古灰砂	31.0	5.2	4.0	
551		加工材	広		板口	F		11A17	古灰砂	20.5	4.7	2.3	上欠損
552		加工材	コナラ属 アガチ虫属	10	板口	F		11A19	古灰砂	31.3	12.7	5.2	破板の可能性あり
553		加工材	針		板口	F		11A16	古灰砂3	13.0	3.7	1.7	上欠損
554	作業台か		アサダ	13	板口	F		11A25	古灰砂	35.2	21.7	5.5	縁状榎串敷
555	杭		広		不明	F		11A21	古灰砂	20.2	7.5	6.6	上欠損
556	杭		広		芯持丸木	F		11A6	古灰砂3	82.5	9.5	4.3	真欠損
557		板状	板口		F			11B3	古灰砂	54.8	10.0	1.5	
558		板状	板口		F			11A8	古灰砂	26.7	6.1	1.3	
559		板状	針		板口	F		11B11	古灰砂	20.7	5.3	1.2	
560		板状	針		板口	F		11B5	古灰砂5	16.7	4.4	0.7	縁状欠 上下欠損
561		板状	針		板口	F		11A11	古灰砂	15.2	4.9	1.1	
562		板状	針		板口	F		11B7	古灰砂	14.2	4.8	1.1	縁状欠 上欠損
563		短冊状	針		板口	F		11A17	古灰砂2	16.5	1.6	0.6	上下欠損
564		短冊状	針		板口	F		11B10	古灰砂	11.3	2.4	0.6	
565		棒状(平)			板口	F		11A15	古灰砂	9.9	1.5	0.8	
566		棒状(角)	針		板口	F		11B10	古灰砂	13.7	3.5	2.1	
567		棒状(角)	広		板口	F		11B10	古灰砂	15.3	2.5	1.8	
568		棒状(角)	針		彫出	F		11A6	古灰砂	24.3	2.9	3.4	上欠損
569		棒状(円)	針		彫出	F		11A6	古灰砂	24.6	2.3	1.5	上下欠損
570		棒状(平)	針		板口	F		11A17	古灰砂3	16.5	1.6	0.6	
571		短冊状	針		板口	F		11B4	古灰砂	35.1	1.7	0.2	動物痕板か 上下欠損
572		棒状(角)	針		板口	F		11B10	古灰砂	29.7	2.3	2.3	欠込み
573		棒状(角)	針		彫出	F		10A7	古灰砂	38.3	2.8	2.0	上欠損
574		棒状(平)	針		板口	F		11B4	古灰砂	38.9	4.0	1.6	接合
575		棒状(角)	針		板口	F		11A17	古灰砂	64.1	7.3	3.9	
576	浮網か	棒状(平)	クリ	9	板口	F		11A18	古灰砂	54.7	6.7	2.8	
577		棒状(平)	針		板口	F		11A21	砂	37.7	5.0	1.8	下欠損
578		棒状(平)	針		板口	F		11A17	古灰砂	36.0	3.3	1.2	
579		棒状(平)	針		板口	F		11A6	古灰砂	31.2	14.4	1.6	
580	網か	棒状(円)	針		彫出	F		11A11	古灰砂3	60.0	2.5	2.6	
581	網か	棒状(円)	針		彫出	F		11A11	古灰砂	64.1	2.7	2.5	
582		板状	針		板口	F		11A17	古灰砂	24.9	2.2	1.5	
583		棒状(平)	針		板口	F		11A13	古灰砂 (下)	16.0	1.9	1.0	上欠損
584		棒状(円)	針		彫出	F		11B10	古灰砂	19.5	1.4	1.0	
585		棒状(平)	針		彫出	F		11A16	古灰砂	15.7	2.3	1.0	加工丁寧
586		棒状(円)	針		彫出	F		11B6	古灰砂2	15.6	1.0	0.7	上下欠損
587		棒状(平)	針		彫出	F		10A8	古灰砂	158.7	7.2	3.6	
588		棒状(角)	針		彫出	F		11A20	古灰砂	178.1	12.3	7.6	跡残る 前面加工

大武遺跡 木製品・漆製品観察表 (10)

報告 番号	種 類	形状・ 断面	樹 種	試料 番号	木取り 地区	出土位置			法量 (cm)			備 考		
						遺構 番号	層土 階位	グリッド	グリッド 階位	長さ	幅		厚さ	
589		棒状(角)						11A17.22	石灰砂	(推定 238.8)	9.5	5.6		
590		棒状(角)						11A12	石灰砂	212.4	5.5	5.5		
591	不明製品		スギ	177	削出			6A21	B	17.4	2.6	1.9	形状は木鏝に近似	
592	不明製品	板状	スギ	176	堀目	D		4E1	B	28.0	6.7	0.5	加工丁寧 線状痕多数	
593		短冊状						3D13	C	11.9	1.6	0.5	線状痕	
594	部材	棒状(平)						4A10	C	21.1	3.5	1.1	下部板状 上部孔1(破損)	
595	部材	板状						5A13.15	C	39.0	7.1	1.7	右側に方形孔2	
596	部材	棒状(角)						4A9	C	37.5	2.3	3.2	欠込状	
597		棒状(角)						5A3	A	74.6	3.0	2.5		
598		棒状(円)						4A8	C	97.1	5.4	2.9		
599	板田下敷		スギ	192	堀目				不明	32.0	20.2	3.0	横孔3	
600	部材	板状	スギ	235		D		3D12	D	15.2	2.7	0.5		
601	器物		スギ	173	波縁目	D		4D22	覆瓦	15.8	9.7	1.4	端の部材が一部炭化	
602	箸		スギ	174	削出	D		4D22	覆瓦	10.2	0.6	0.4	上下欠損	
603	箸		スギ	193	削出				不明	12.3	0.7	0.5	上下欠損	
604	不明製品	短冊状							不明	7.7	4.0	0.4	孔3	
605	不明製品	板状	スギ	190	板目	E		5U22	覆瓦	9.0	2.4	0.7	刀状 上部に孔1	
606	不明製品	板状				D			排土	10.0	5.6	0.7		
607	不明製品	板状							不明	18.2	6.3	0.5	線状痕	
608	部材	棒状(平)							不明	19.7	3.8	0.9		
609	部材	棒状(角)	スギ	189	板目	D			排土	26.8	2.1	1.6	上下磨削 上部欠り 木釘孔2	
610	部材	板状	スギ	191	堀目				不明	30.1	7.7	0.8	左側方形孔1, 中央に円形孔1	
611	部材	板状				G			崩落土	35.1	3.5	0.5		
612	部材	板状	スギ	186	板目	A			崩落土	37.3	4.8	1.1	上下に孔2	
613	部材	板状							不明	40.0	10.0	2.3	上部に長方形孔1	
614	部材	棒状(平)	ヒノキ	229	板目		SD50	3	不明	109.3	9.7	2.6	上下対称形, 孔も対称	
615	部材	板状							不明	69.6	8.5	2.1	孔1 上下欠損	
616	部材	棒状(角)			A				6B7	①	60.1	2.2	2.9	上部欠い・後りか
617	不明製品	棒状(角)	クワ	194	削出	A			6B7	①	41.4	4.7	2.6	
618	直納鎌身か		コナ少葉 コナ少葉	188	堀目	D			排土	22.6	5.3	1.8		
619		棒状(平)				G			崩落土	21.3	2.4	1.3		
620		棒状(角)				A			6B17	2	9.0	0.9	1.1	
621	漆皮								不明	3.7	5.4			
622		加工材				G			崩落土	14.7	3.7	1.6	板状	
623		加工材	スギ	187	削出	G			崩落土	19.1	7.5	2.2		
624	杭		広			F			11A17	53.5	7.0	6.4		
625		クワ		230	削出				不明	175.9	20.1	13.9		
626	漆皮	-							6B14・15	XV	-	-		
627	漆皮	-							6B	XV	-	-		

圖 版

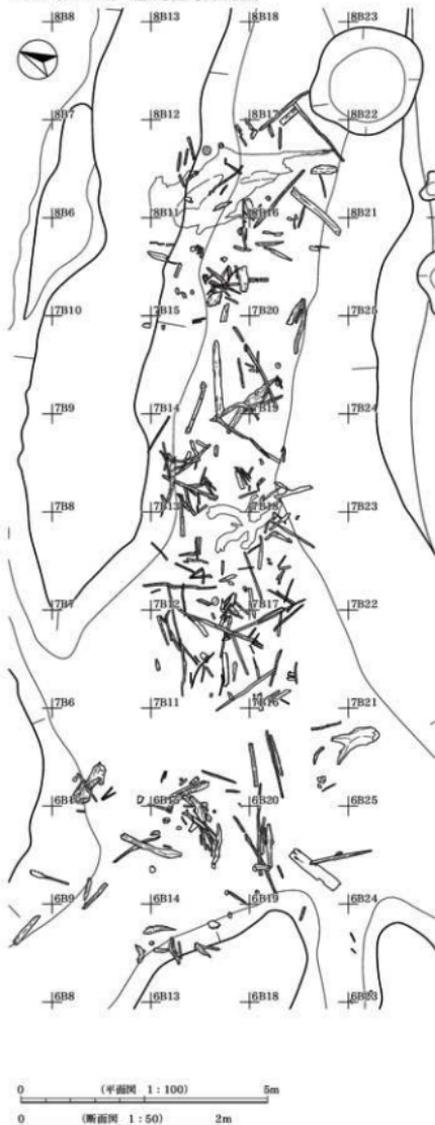




SD33
 1 暗褐色土。礫物遺体多く含む。基本層序Ⅷ層に同じ
 2 暗褐色土。砂・礫物遺体少量含む。
 3 暗褐色砂質土。炭屑土粒にアワクラを混入する。SD50・51の3層に同じ。
 W: 木製品・自然木



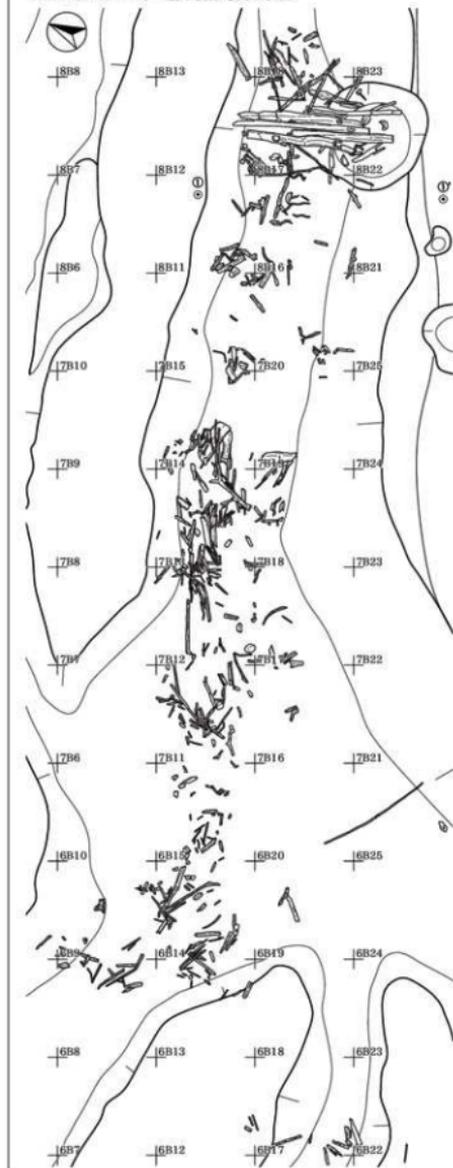
SD50 (5~8A) 1層木製品等出土状況



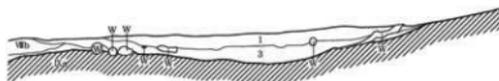
SD50



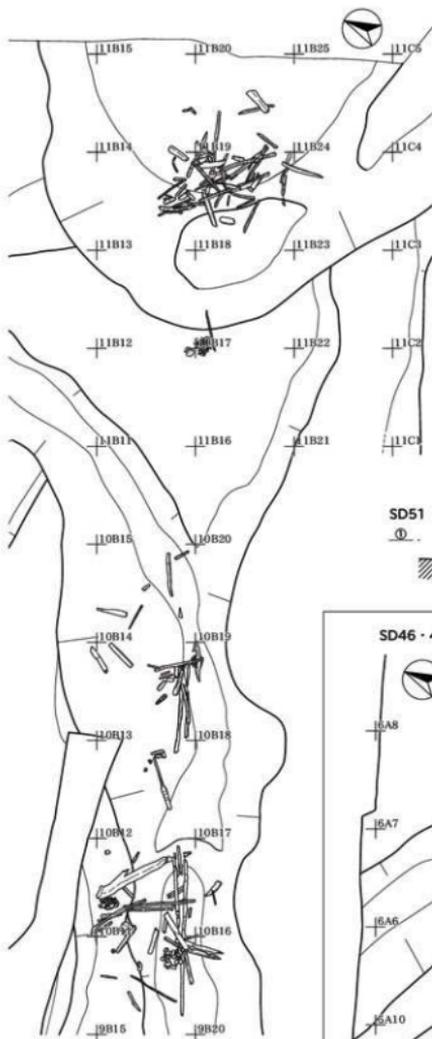
SD50 (5~8A・B) 3層木製品等出土状況



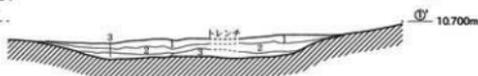
SD50
 1 赤褐色ビート層、基本層序明確に同じ。
 2 暗黄褐色砂層、遺物多く含む。
 3 SD23・5143層に同じ。
 W: 木製品・自然木



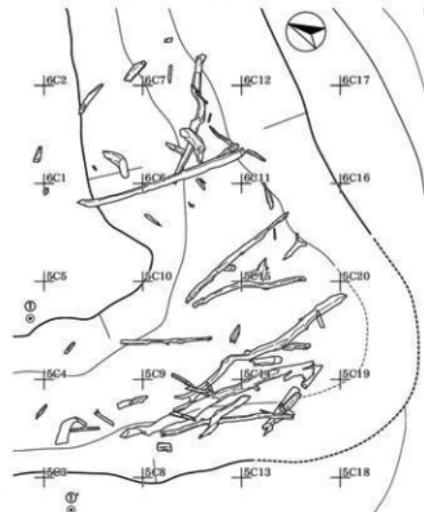
SD83 (9・10・11B) 木製品等出土状況



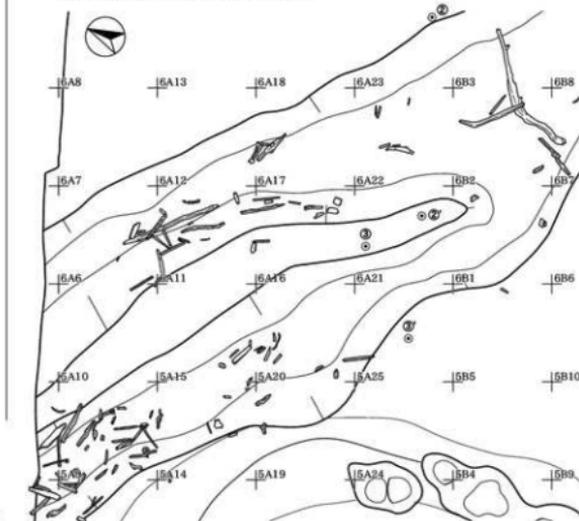
SD51



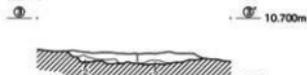
SD51 (5・6C) 木製品等出土状況



SD46・47 (5・6A) 木製品等出土状況



SD46



SD46
1 暗黄褐色砂礫。
2 濃褐色砂礫。

SD47



SD51

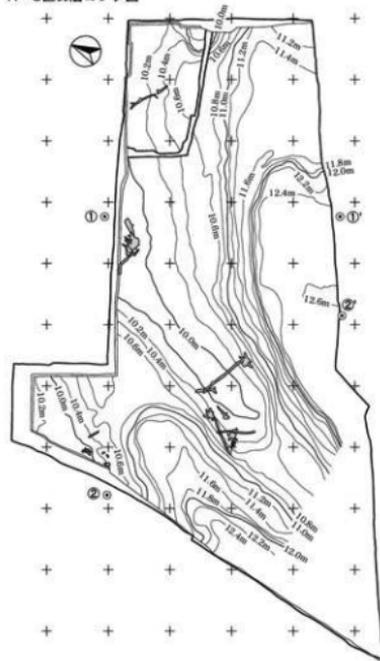
SD51
1 暗灰色粘土。新山崎層21層に同じ。炭化物・遺物多い。
2 暗褐色粘土。粘性強い。
3 暗黄褐色砂礫。SD33・50の3層に同じ。

SD47

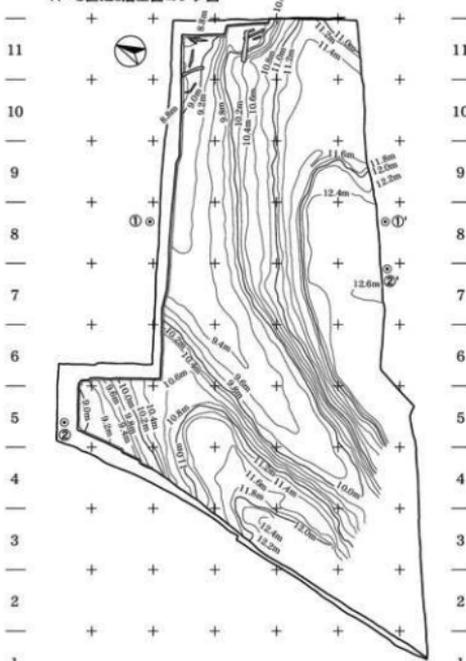
SD47
1 濃褐色粘土層。基本順序4層に同じ。
2 暗黄褐色砂礫。遺物多く含む。SD50・51など20層に同じ。

0 (平面図 1:100) 5m 0 (断面図 1:50) 2m

A~G区X層コンタ図



A~G区XIIIa層上面コンタ図



T | U | A | B | C | D | E | T | U | A | B | C | D | E

① ⑦ 13.000m



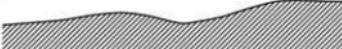
① ⑦ 13.000m



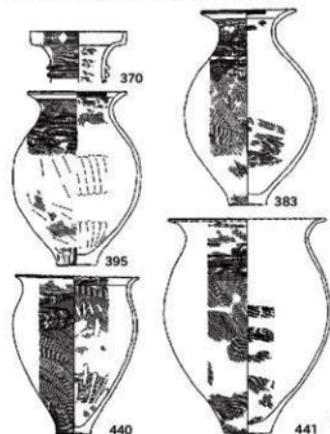
② ⑦ 13.000m



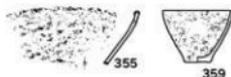
② ⑦ 13.000m



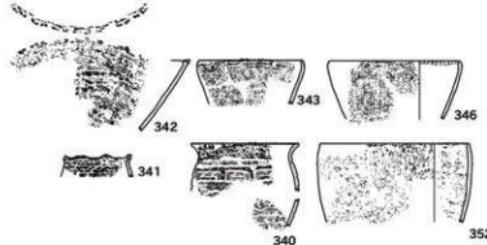
D区F層・G区灰色粘土層 (Xa~c層相当)



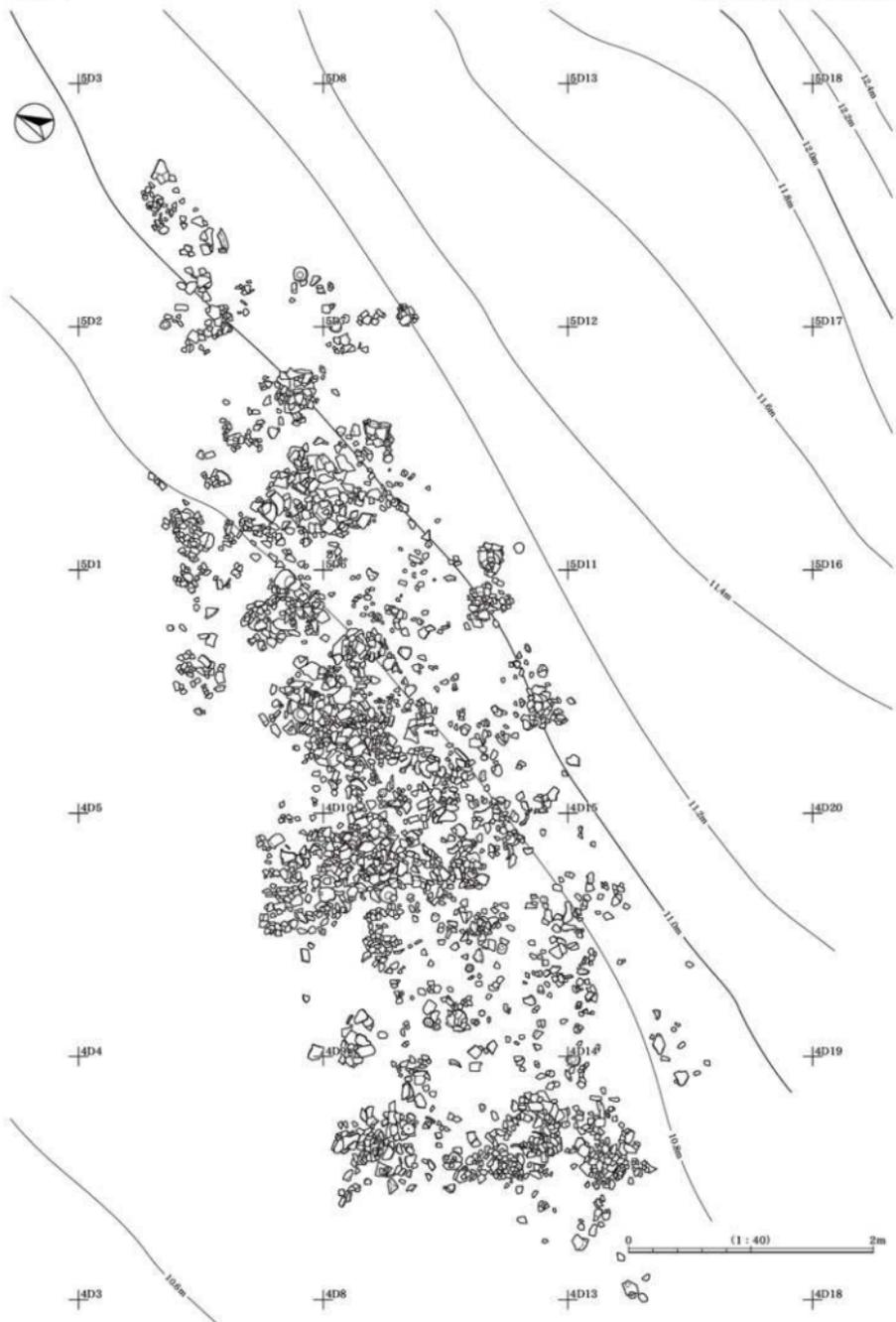
XIa層

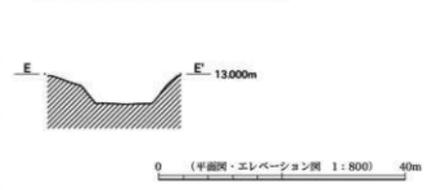
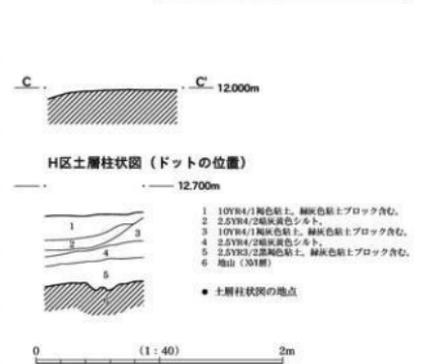
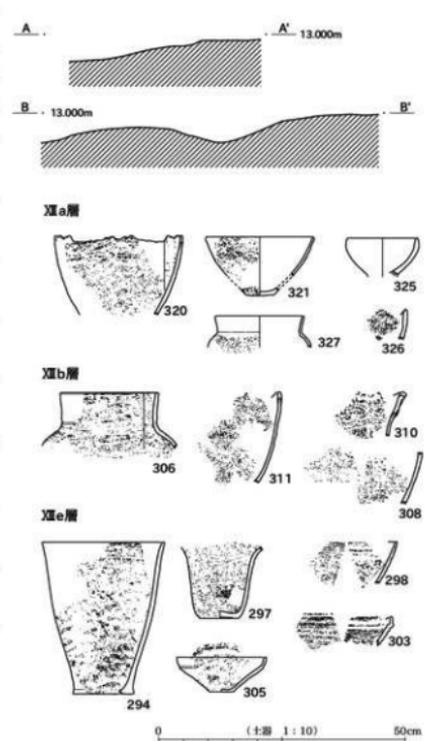
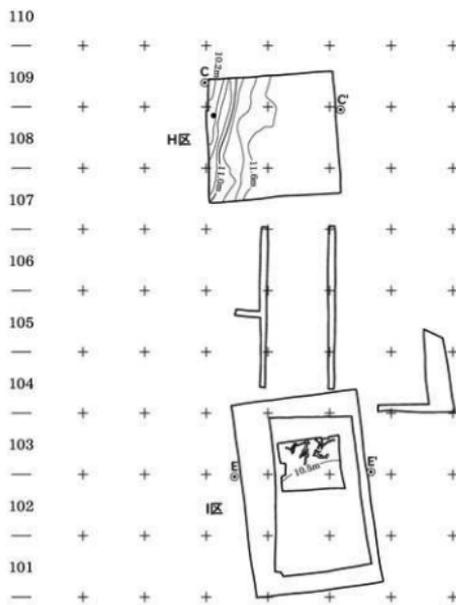
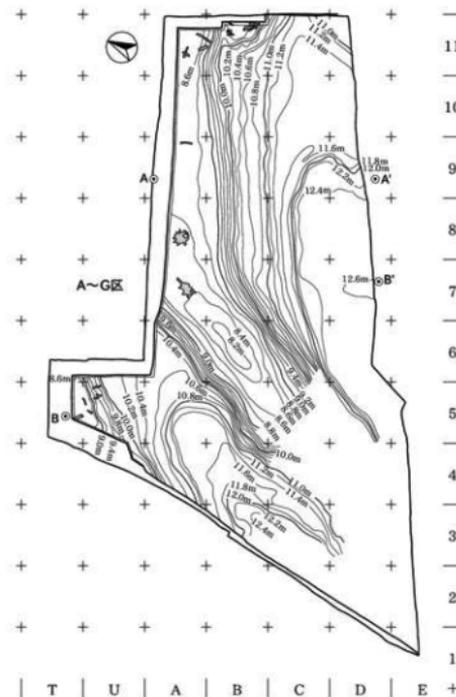


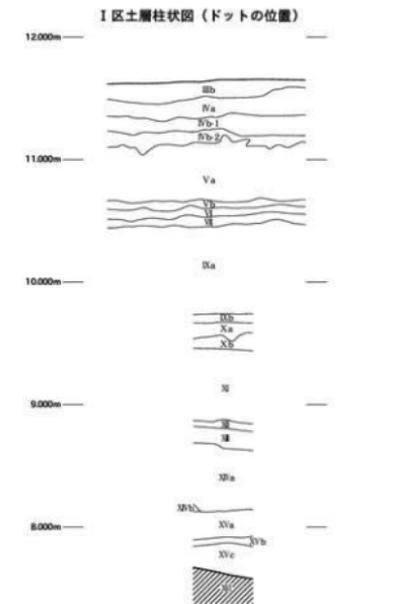
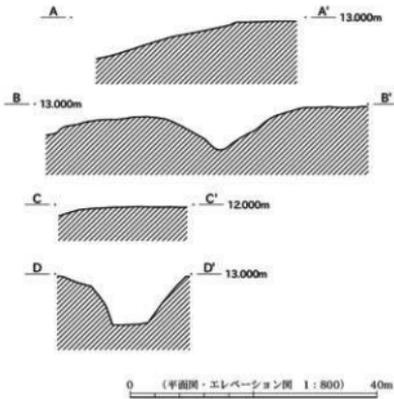
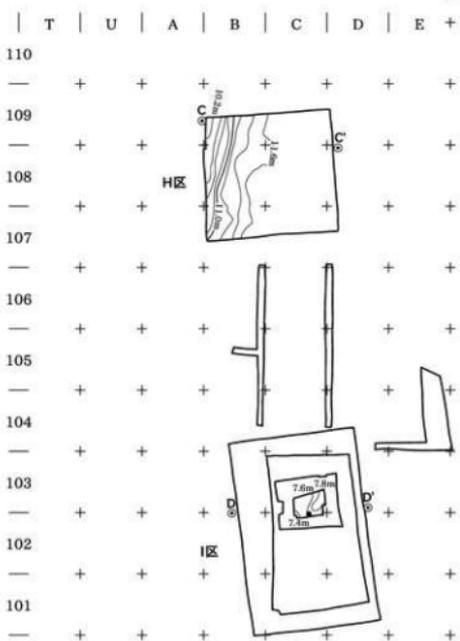
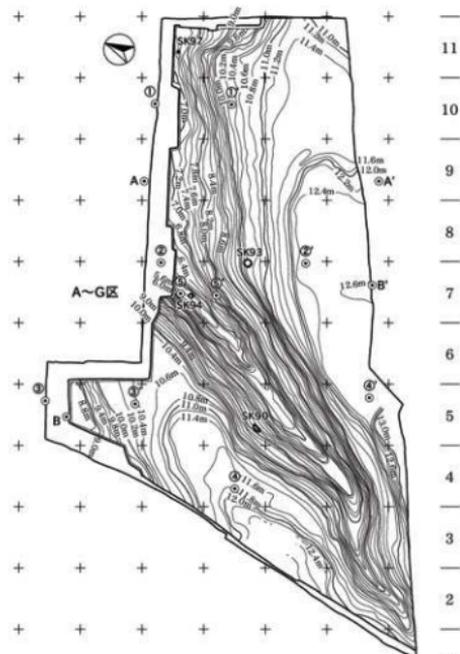
XIb層



0 (平面図・エレベーション間 1:800) 40m 0 (土器 1:10) 50cm

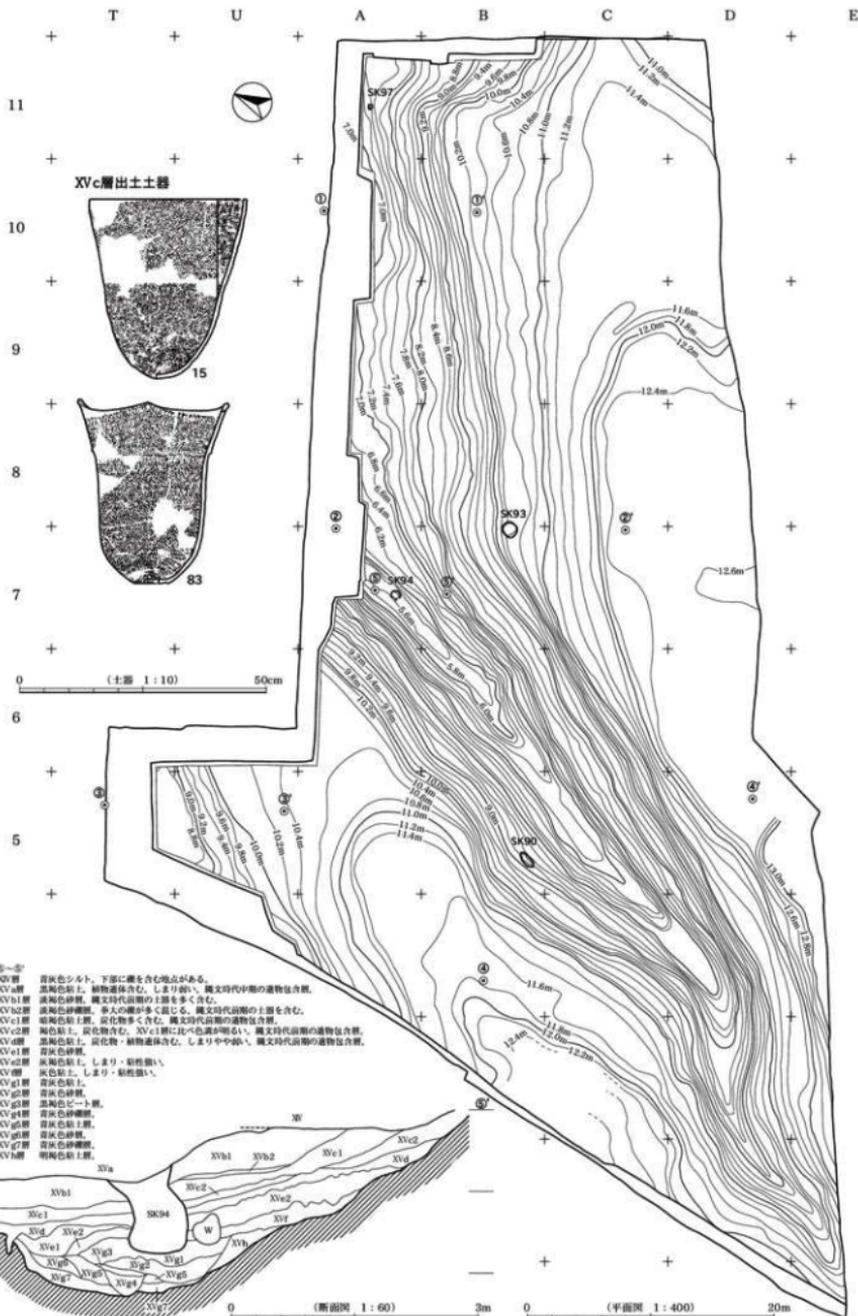


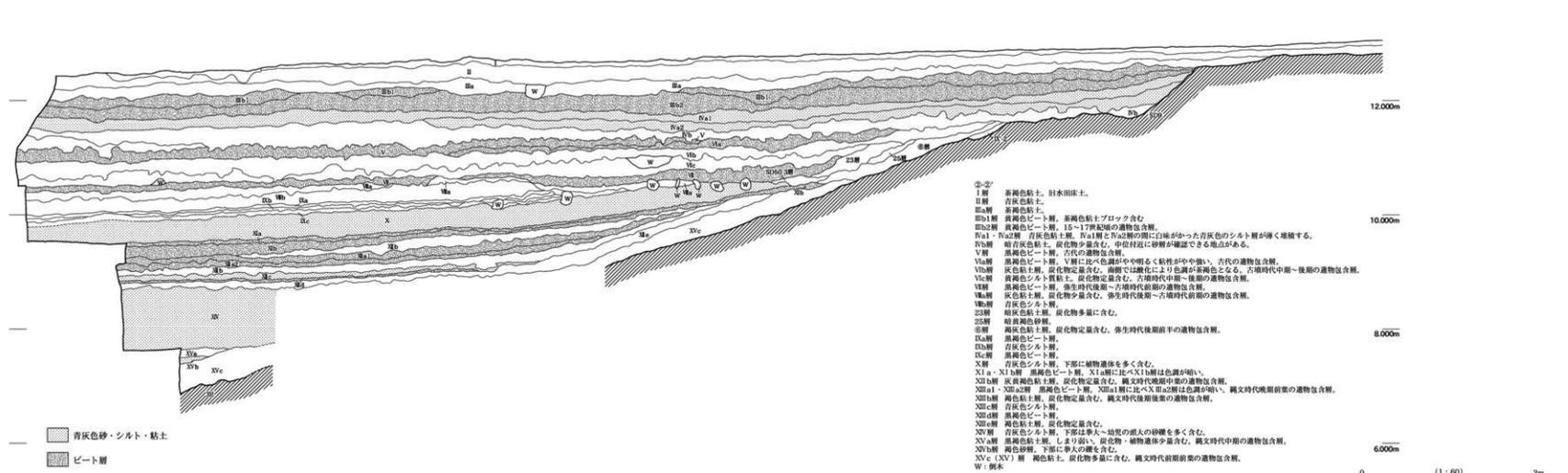
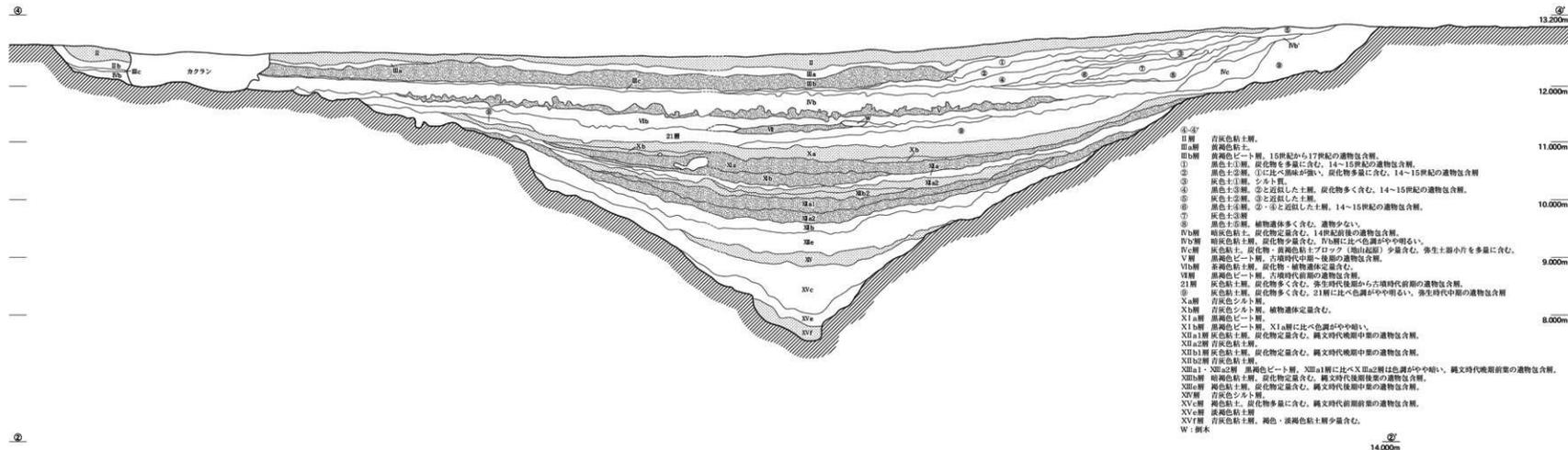




- III層 黄褐色ビート層、15~17階地の遺物包含層。
- IVa層 黄褐色粘土層。
- IVb1 IVb2層 暗褐色粘土上、炭化物少量含む、IVb1層とIVb2層の間に部分的に薄い砂層あり。
- Va層 黄褐色ビート層、古代の遺物包含層。
- V層 黄褐色ビート層、Va層に比べ色調がやや明るく粘性がやや強い。
- VI層 黄褐色ビート層、Va・b層に比べ色調が明るく、粘性がやや強い。
- VII層 黄褐色ビート層、弥生時代前期~古墳時代前期の遺物包含層。
- IXa層 黄褐色シルト質粘土層。
- IXb層 黄褐色ビート層。
- Xa~b層 黄褐色シルト層、Xb層は薪物遺体を定量的含む。
- XI層 黄褐色ビート層、縄文時代前期の遺物定量的含む。
- XII層 黄褐色粘土層。
- XIII層 黄褐色粘土層。
- XIV a層 黄褐色シルト層。
- XIV b層 黄褐色砂質土層。
- XVa層 黄褐色粘土層、しりりしい、炭化物・薪物遺体少量含む、縄文時代中期の遺物包含層。
- XVb層 褐色砂層。
- XVc (XV)層 褐色粘土上、炭化物含む、縄文時代前期の遺物包含層。

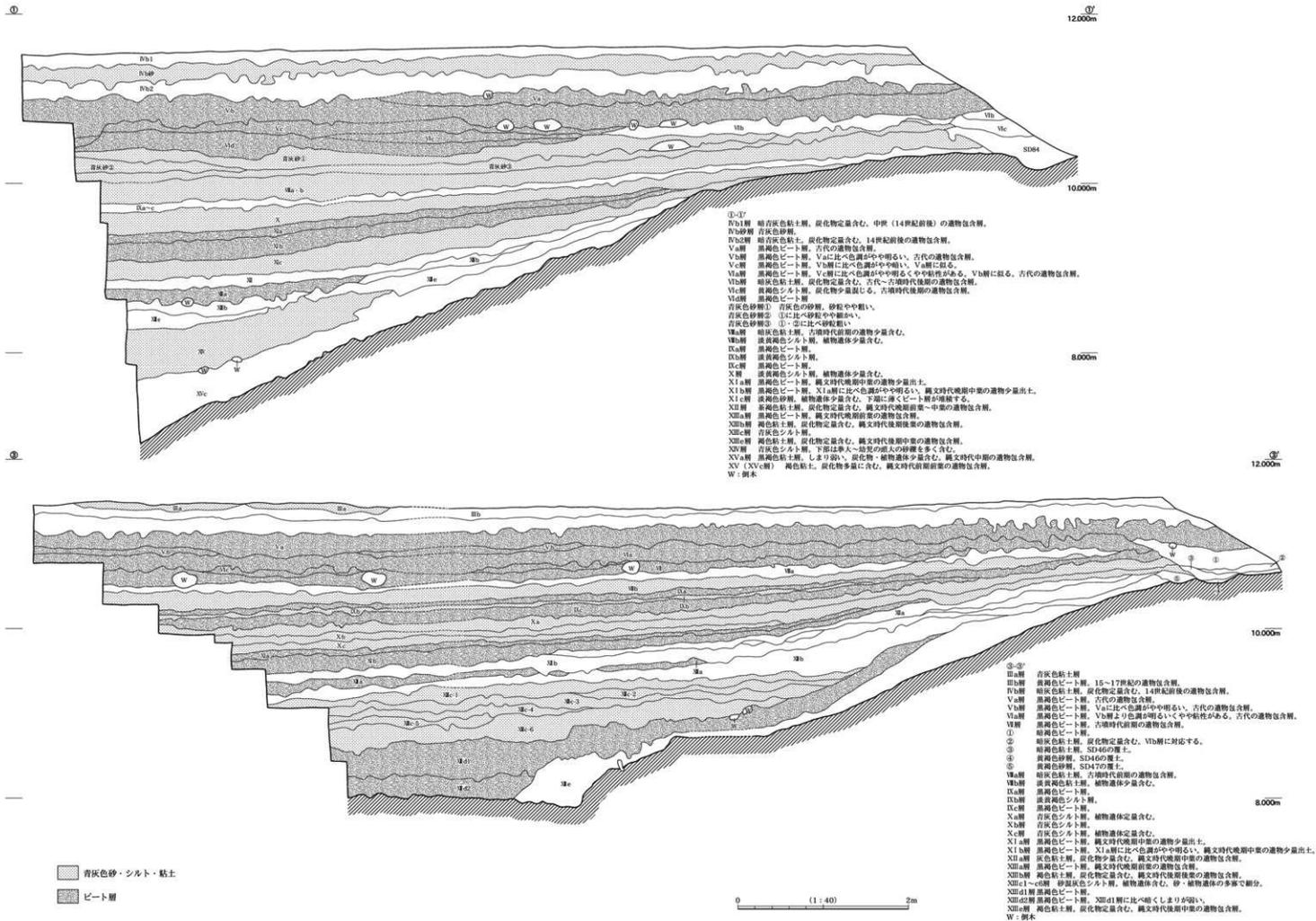
● 土層柱状図位置
0 (1:40) 2m

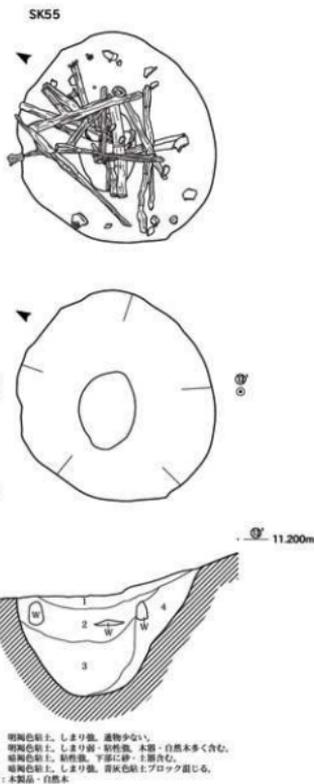
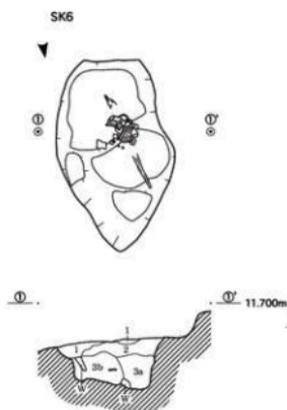
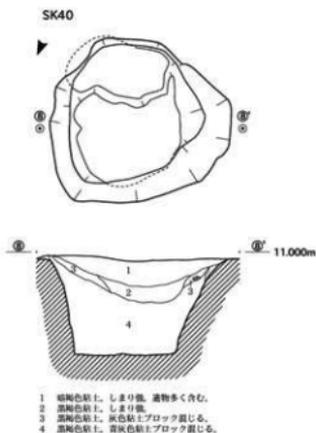
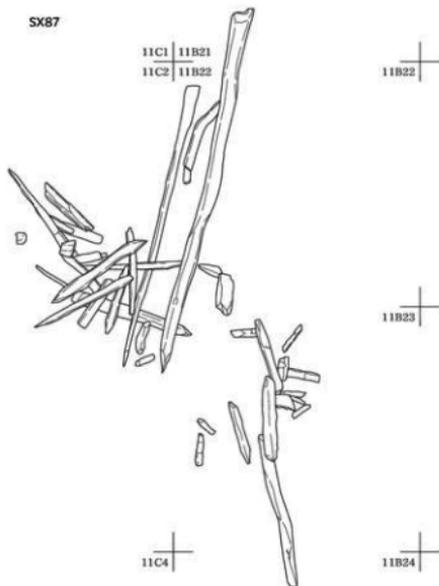




青灰色砂・シルト・粘土
 ビート層

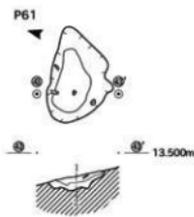
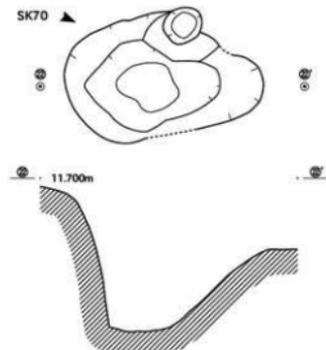
0 (1:60) 3m



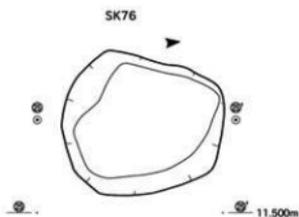


- 1 灰色粘土。しまり地。粘状物。
 - 2 黄褐色土。しまり地。粘状物。
 - 3a 灰色粘土。しまり地。粘状物。青灰色粘土ブロック多く含む。炭化物含む。
 - 3b 灰色粘土。しまり地。粘状物。
- W: 木製品・自然木

- 1 黒色ビート。基本層厚30cm。
- 2 黒色ビート。砂・青灰色粘土を少量含む。

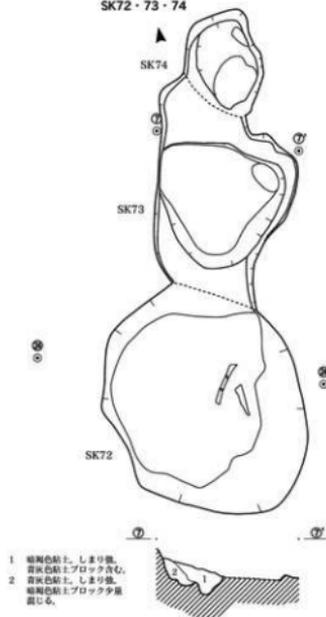


- 1 褐褐色土、粘物遺体・径1~10mmの炭化物を多量に含む。
- 2 灰褐色土、黄灰色土ブロック・径1~3mmの炭化物を少量含む。



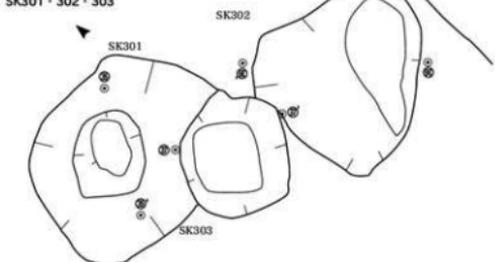
- 1 7.5YR3/1黒褐色土、粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。平安時代の土層出土。
- 2 7.5YR3/1黒褐色土、粘性強。1cm前後の炭化物含む。
- 3・4 7.5YR3/1黒褐色土、粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。
- 5 7.5YR3/1黒褐色土、粘性強。1cm前後の炭化物含む。
- 6・7 7.5YR3/1黒褐色土、粘性強。5cm前後の7.5GY6/1緑灰色粘土ブロック・1cm前後の炭化物含む。

SK72・73・74

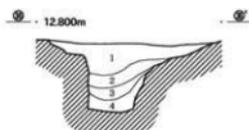


- 1 褐褐色土、しまり強、黄灰色土ブロック含む。
- 2 黄灰色土、しまり強、褐褐色土ブロック少量混じる。

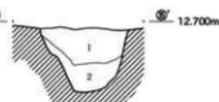
SK301・302・303



- 1 褐褐色土、炭化物粒含む。
- 2 褐褐色土、炭化物粒・黄灰色土ブロック含む。



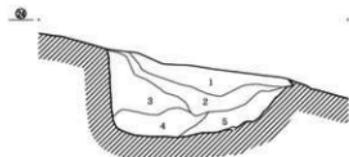
- 1 褐褐色土、炭化物粒含む。
- 2 褐褐色土、炭化物粒・黄灰色土ブロック含む。
- 3 黄灰色土、炭化物粒含む。
- 4 褐褐色土、黄灰色土ブロック多く含む。



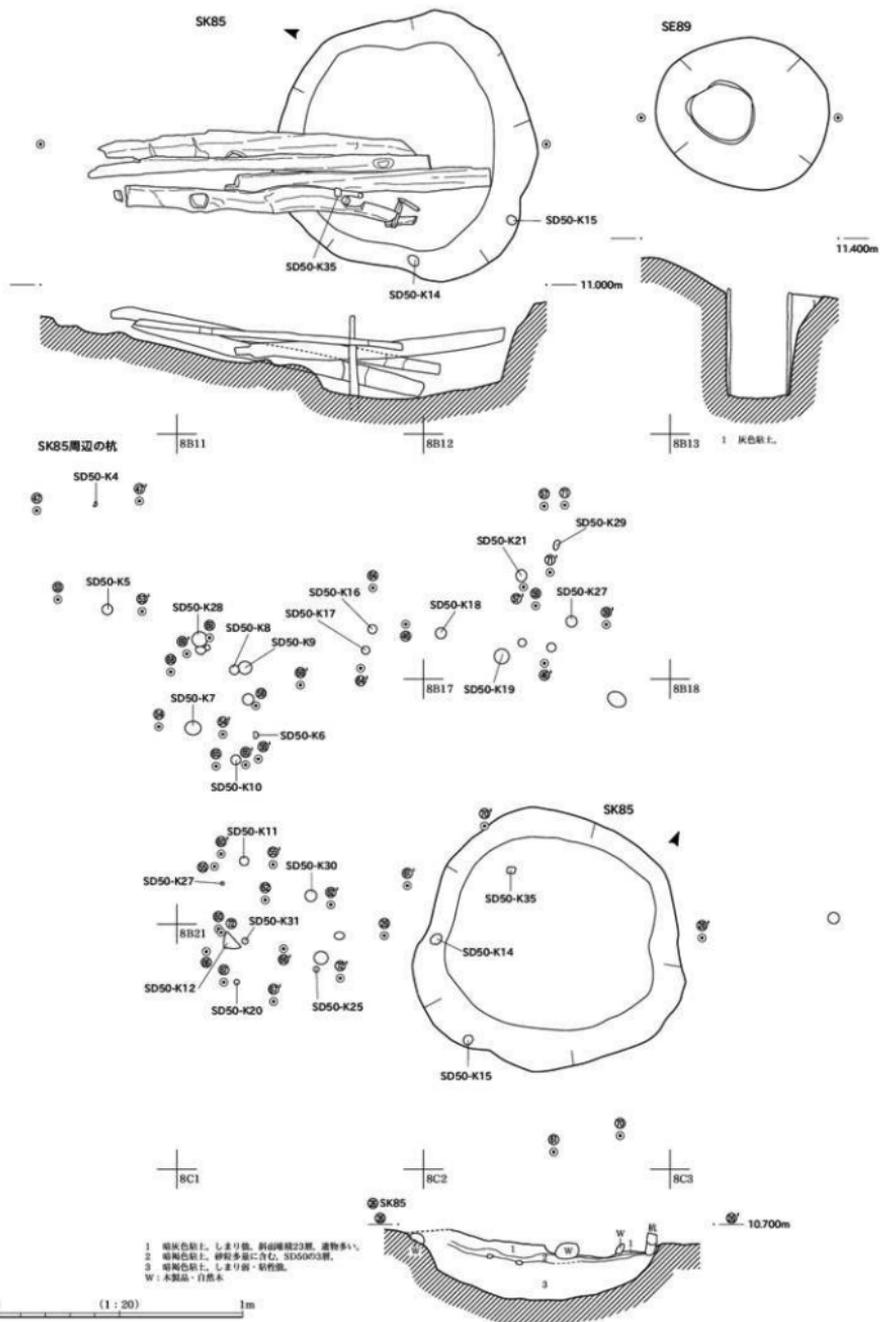
- 1 褐褐色土、炭化物粒混じる。
- 2 褐褐色土、炭化物粒・黄灰色土ブロック含む。

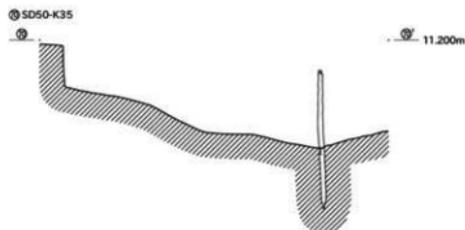
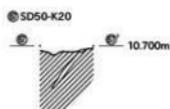
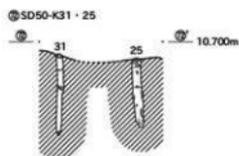
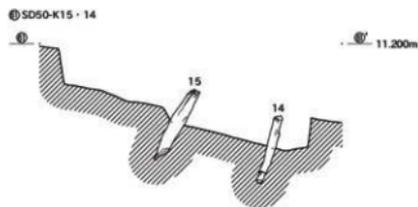
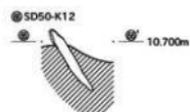
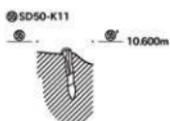
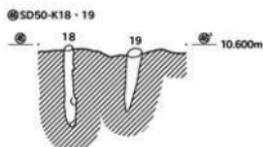
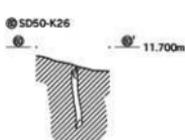
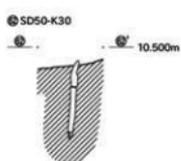
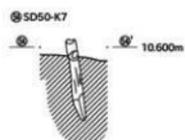
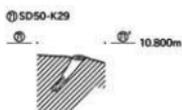
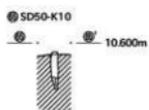
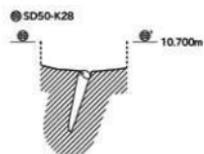
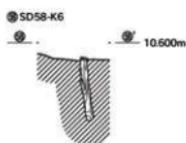
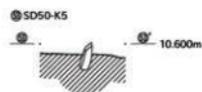
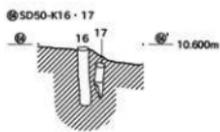
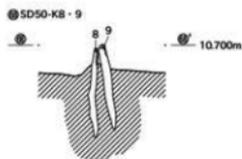
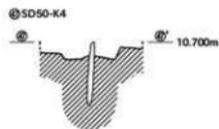


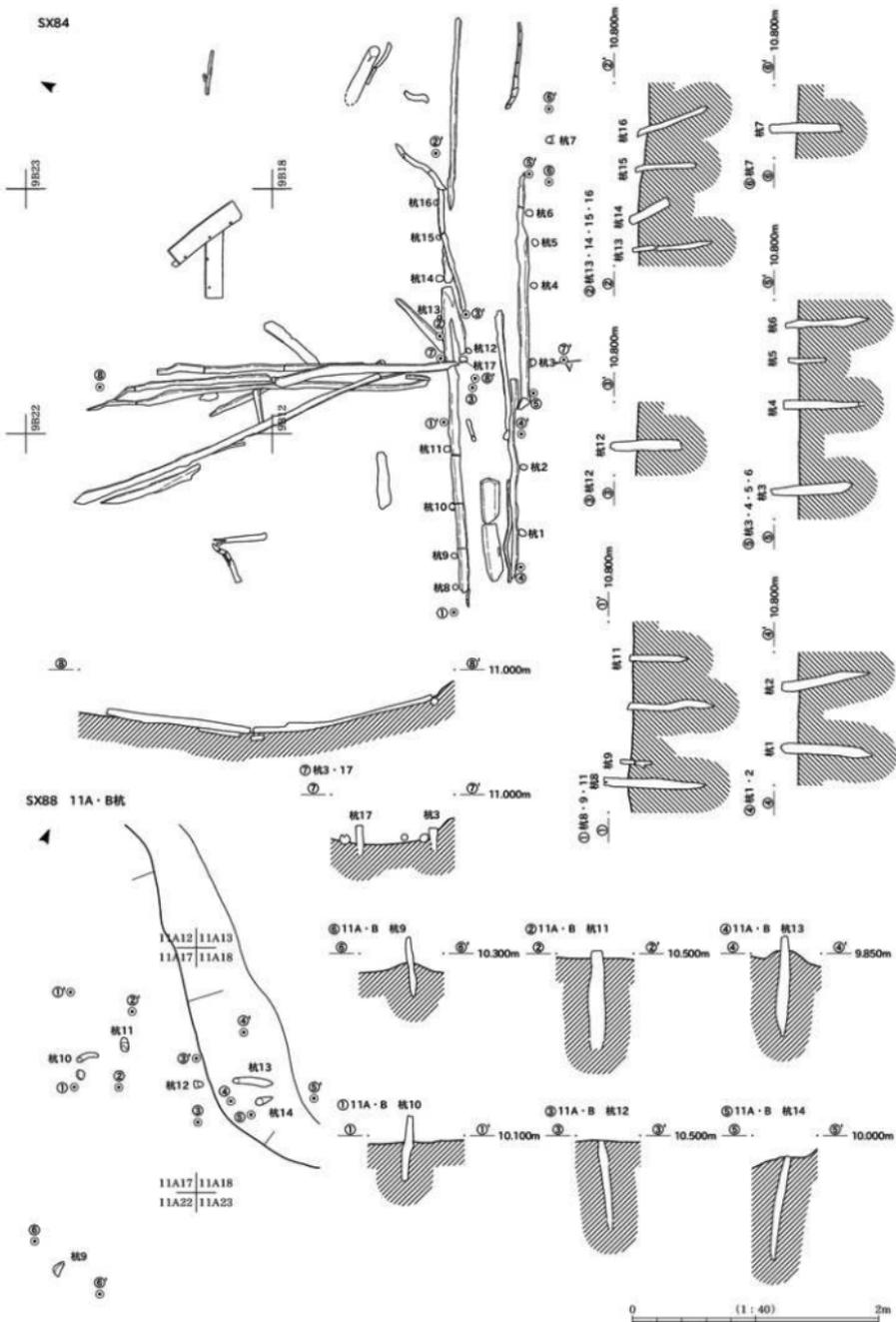
- 1 10YR3/1緑褐色土、炭化物含む。
- 2 10YR4/1緑褐色シルト。
- 3 10G7/1明緑色シルト、7.5Y4/1緑灰色シルトブロック・土層・未調査。
- 4 7.5Y4/1黄褐色シルト、粘り強含む。
- 5 10G7/1明緑色砂、しまり強、粘性強。



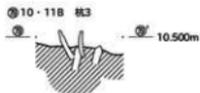
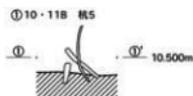
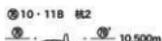
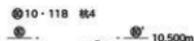
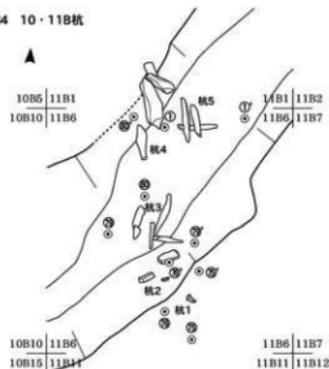
- 1 褐褐色土、しまり強。
- 2 褐褐色土、黄灰色土ブロック含む。
- 3 黄灰色土、褐褐色土ブロック含む。
- 4 黒褐色土、黄灰色土ブロック多く含む。
- 5 褐褐色土、黄灰色土ブロック多く含む。



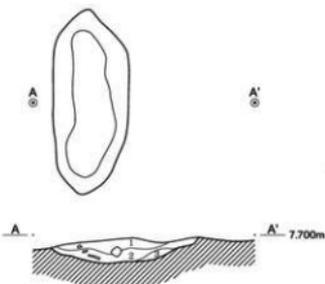




SD84 10・11B 枕

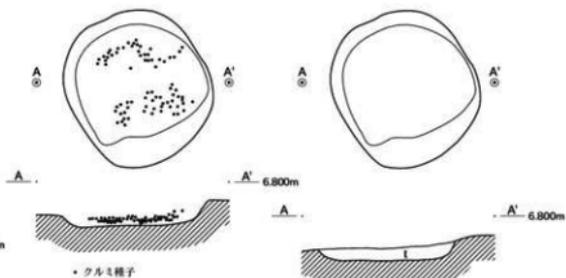


SK90



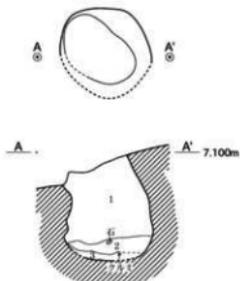
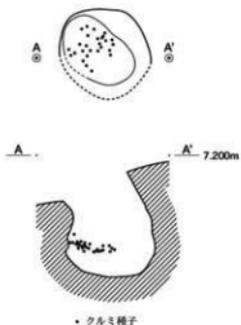
- 1 褐色粘土、炭化物少量含む。基本層序のXVc層に同じ。
- 2 褐色粘土。炭化物・黄灰色シルトブロック少量含む。
- 3 黄灰色シルト。炭化物・褐色粘土ブロック少量含む。

SK93



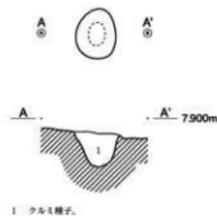
- 1 褐色粘土。炭化物・クルミ種子含む。基本層序のXV層に同じ。

SK94

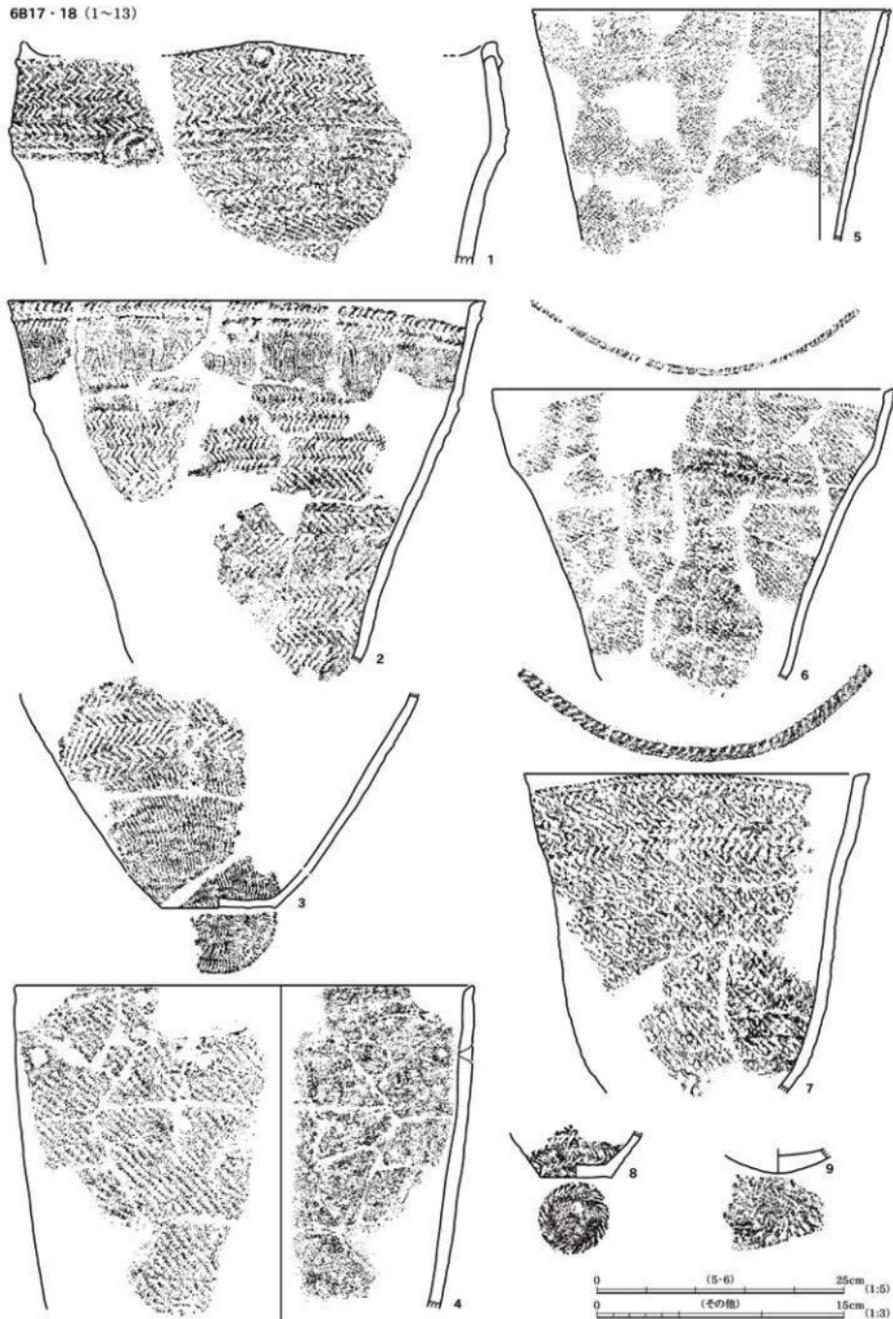


- 1 黒褐色粘土。植物遺体少量含む。基本層序のXVc層に同じ。
- 2 灰褐色粘土。器土層少なく均質な土層。クルミ種子含む。
- 3 黒褐色粘土。1に比べ植物遺体少なく、しまり強い。

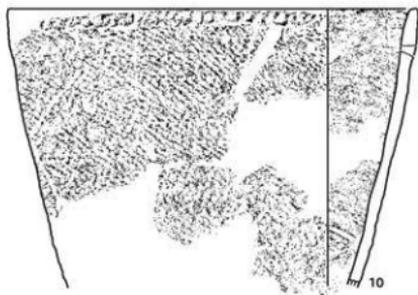
SK97



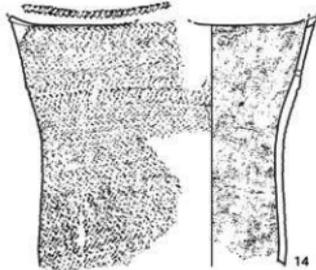
6B17・18 (1~13)



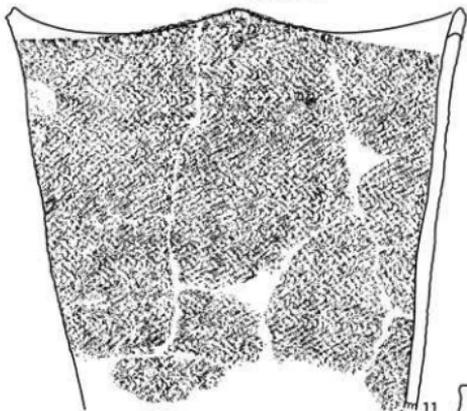
6814・19 (14~22)



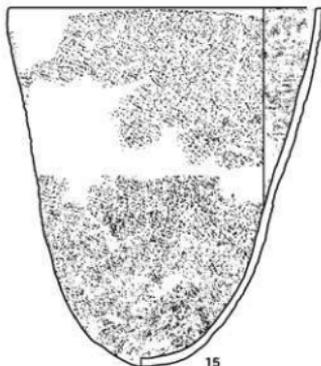
10



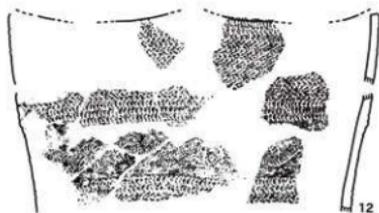
14



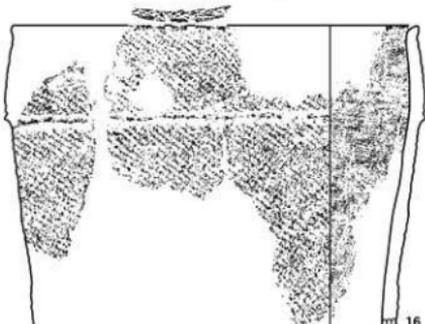
11



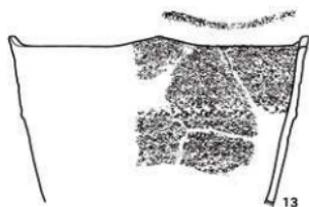
15



12



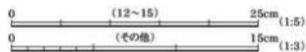
16

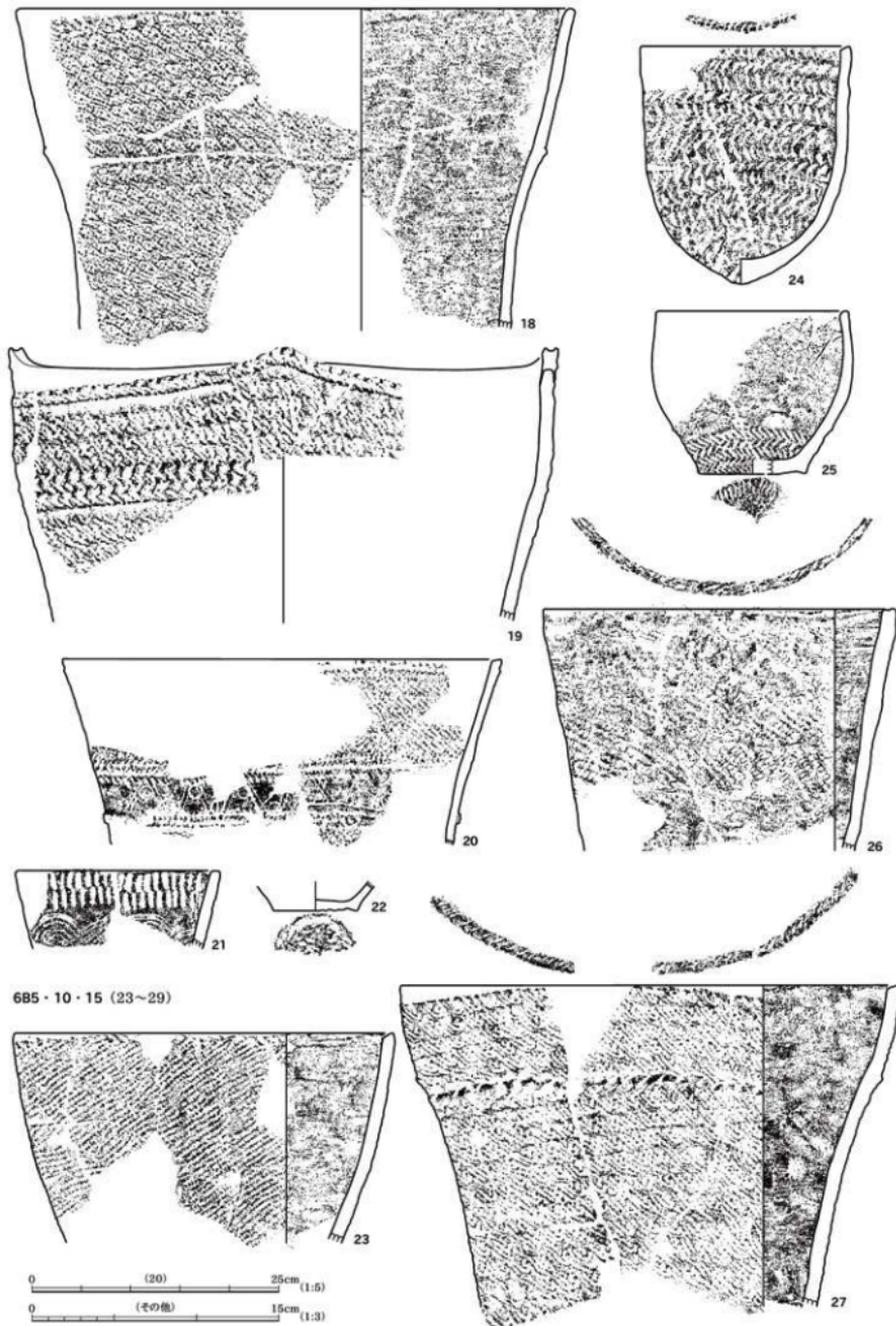


13

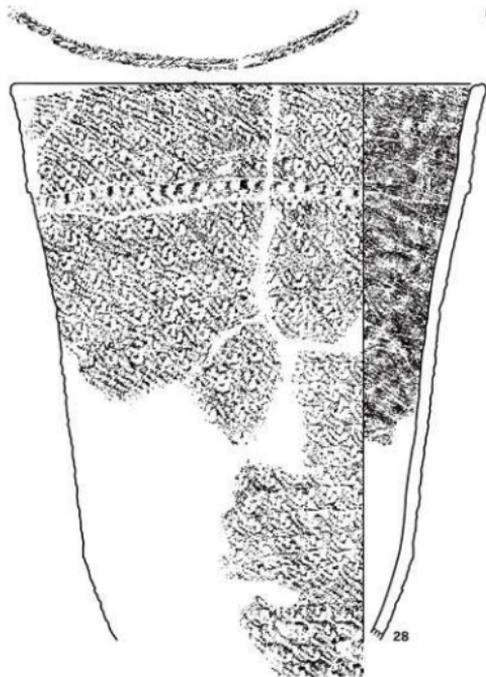


17

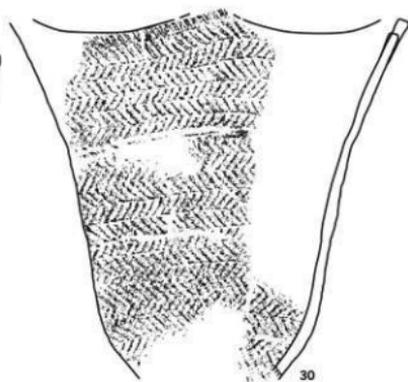




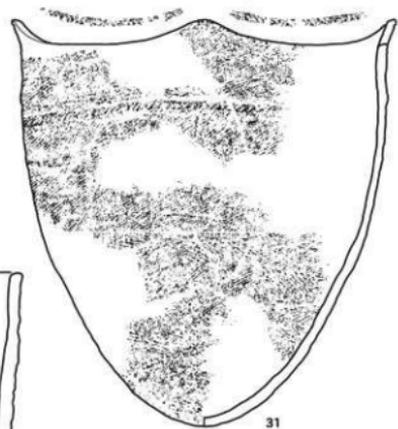
6B5 (30~35)



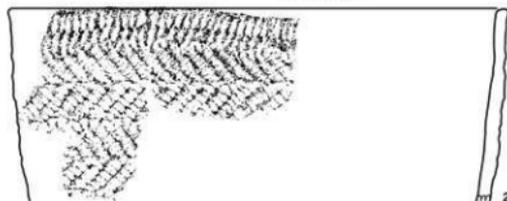
28



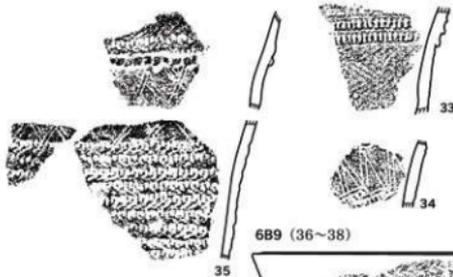
30



31



29



35

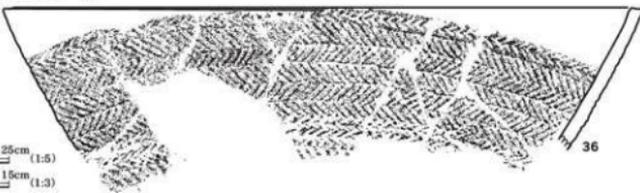
33

34

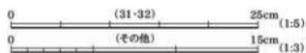
6B9 (36~38)



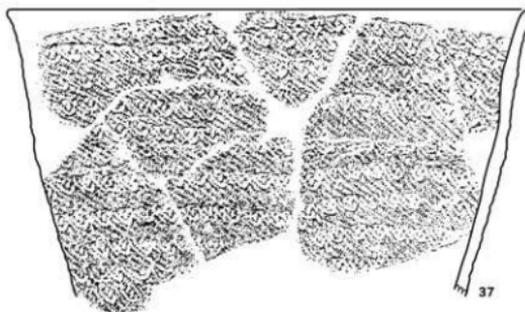
32



36



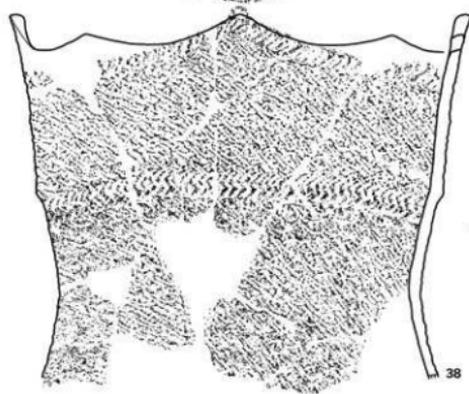
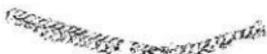
6B13・14 (39・40)



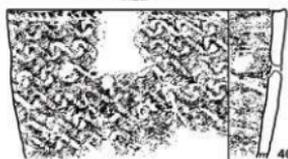
37



39



38



40

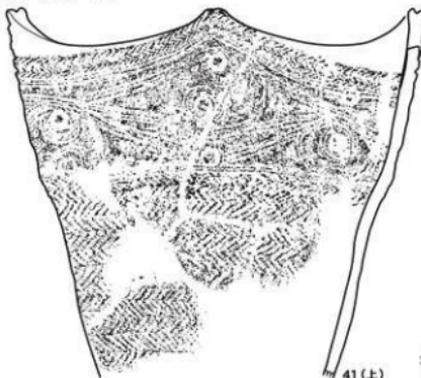


44



45

6A・B (41~71)



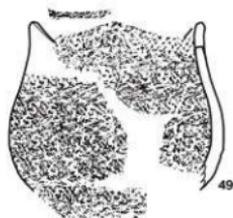
41 (上)



47



48



49

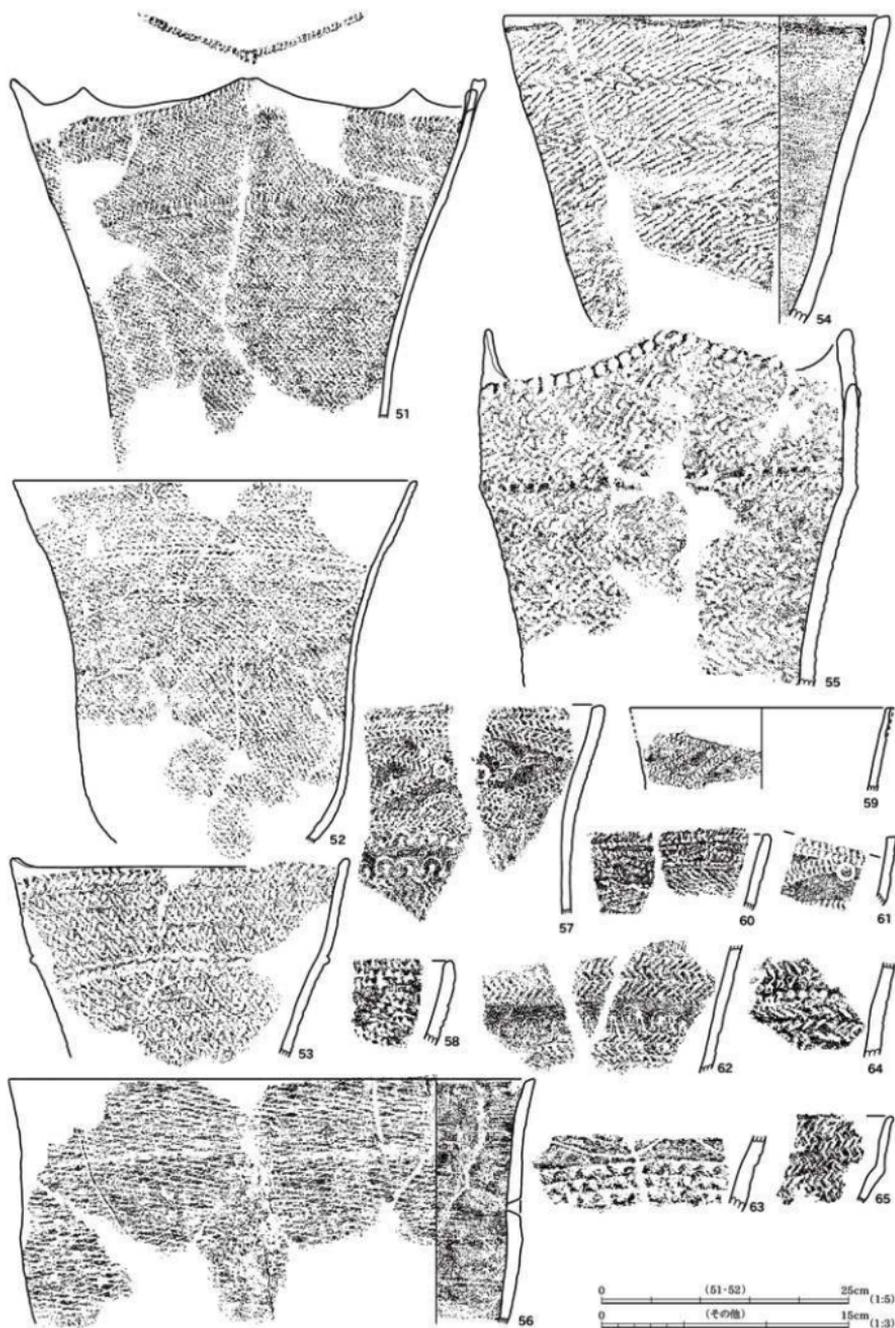


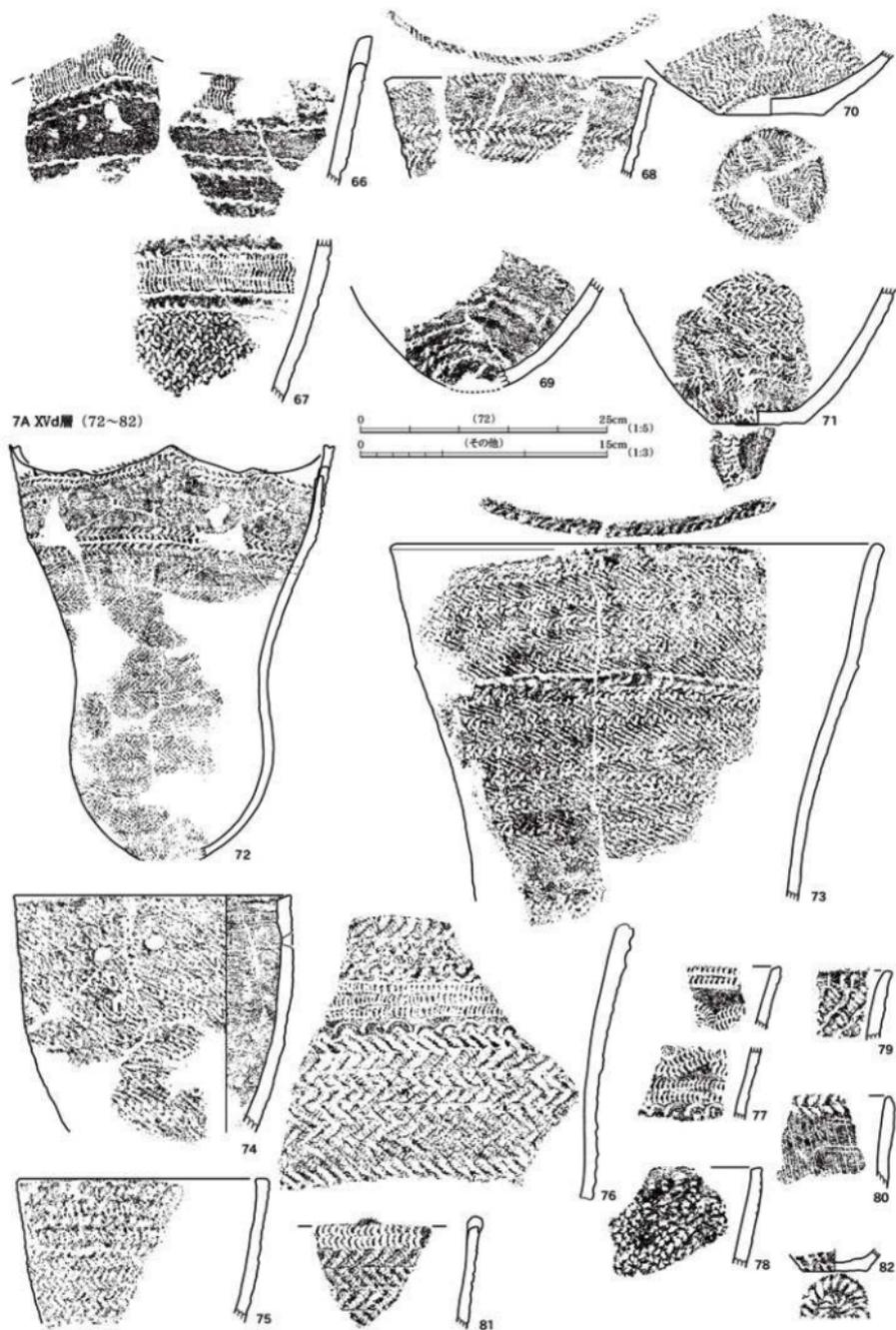
41 (下)



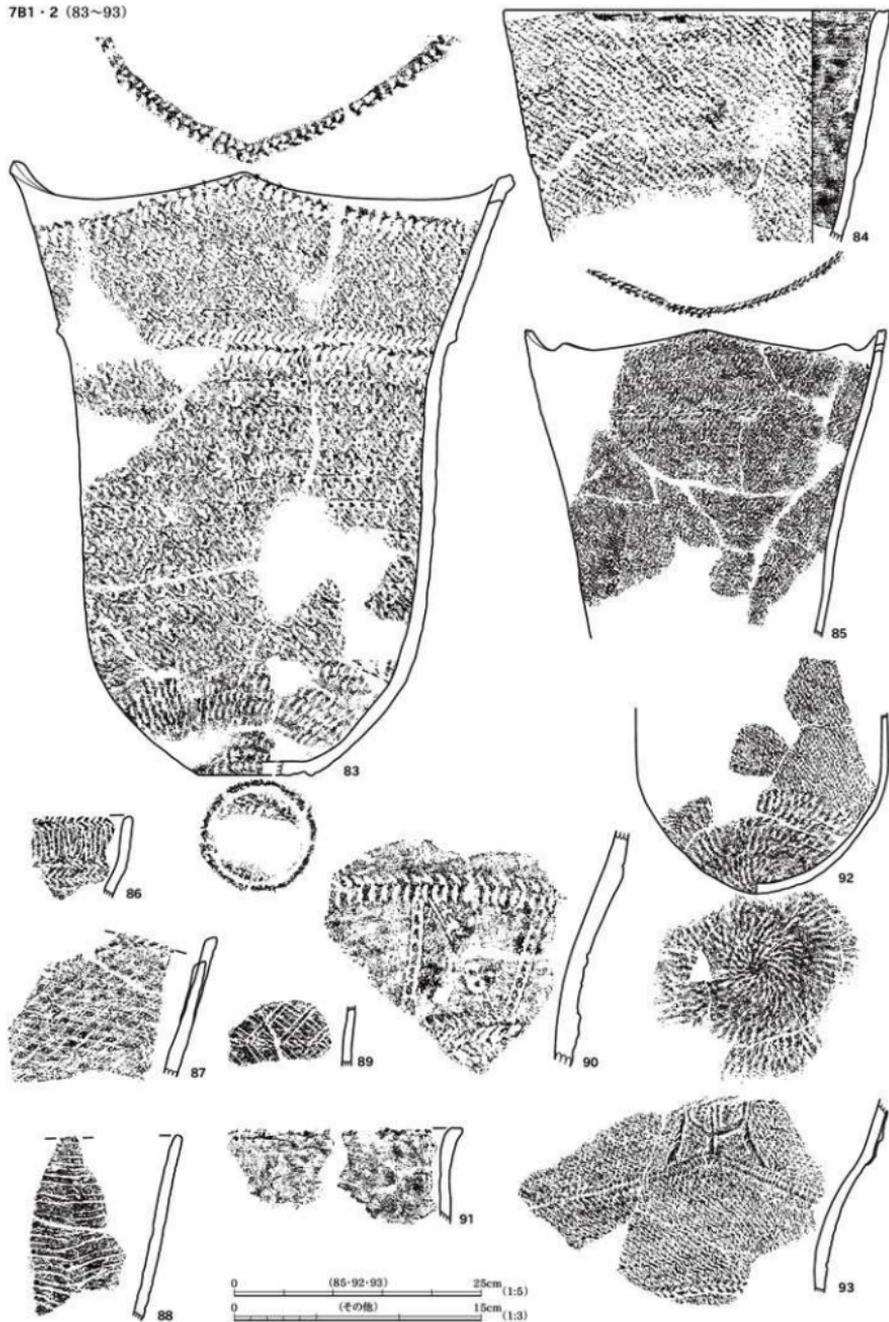
50



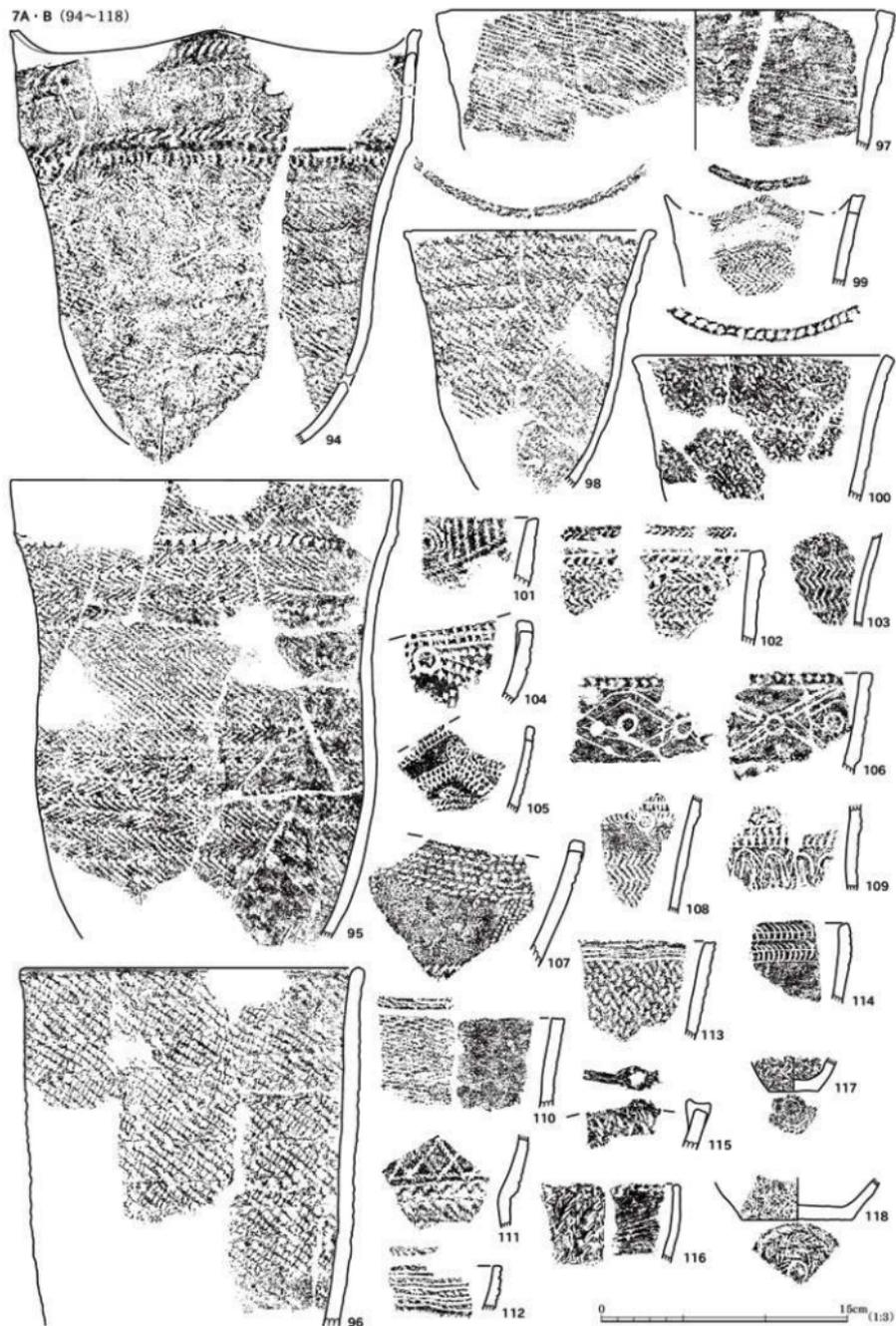




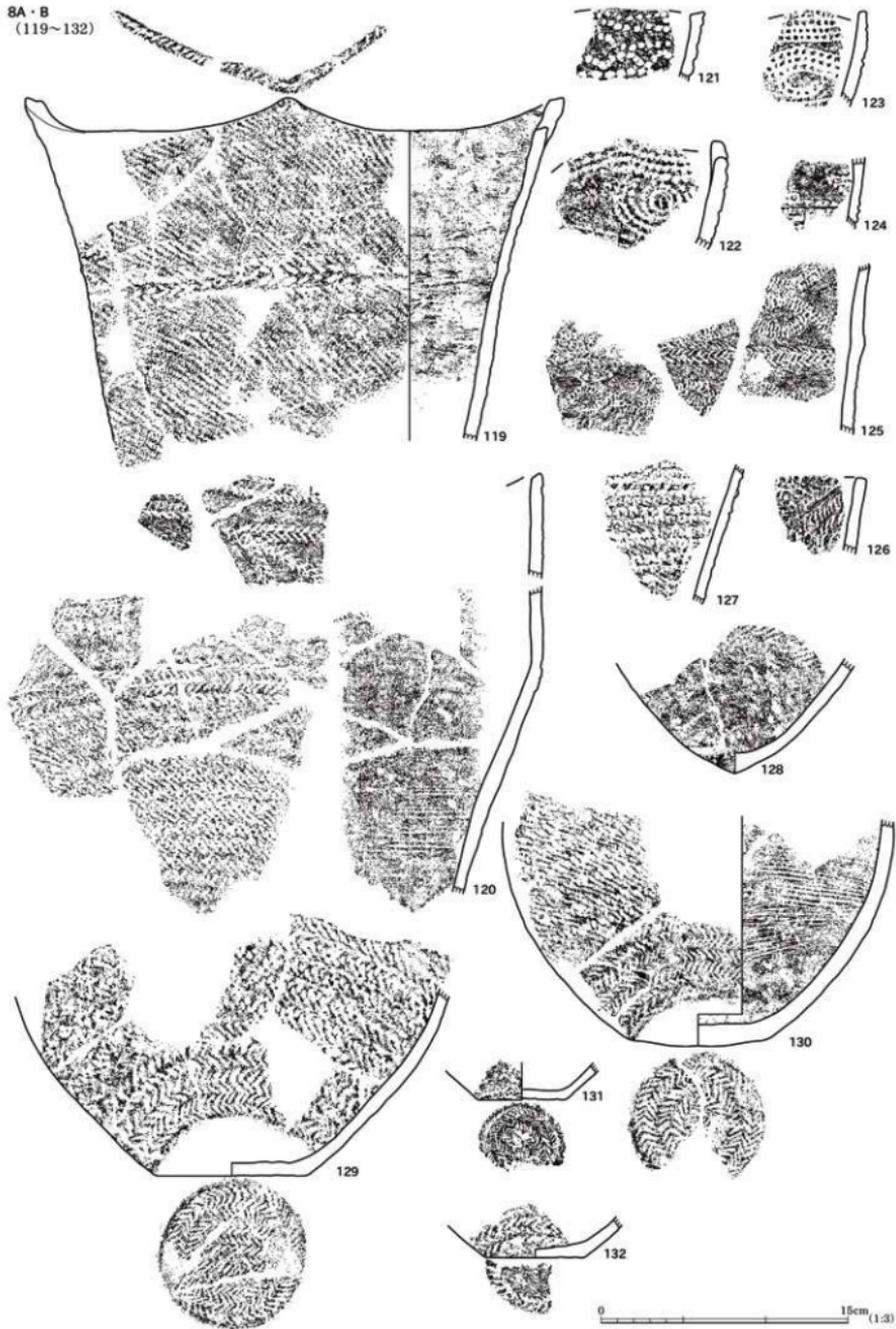
7B1・2 (83~93)



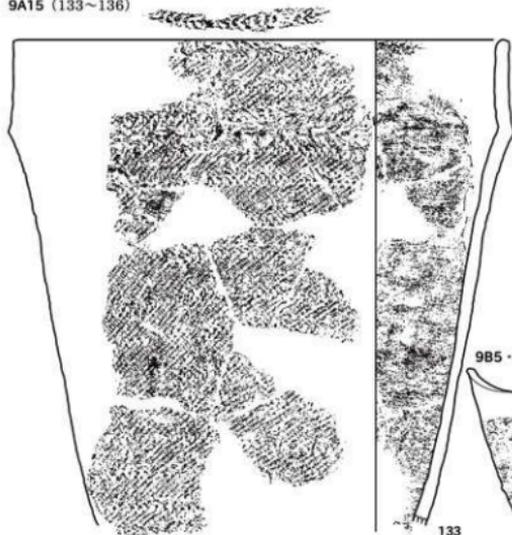
7A・B (94~118)



8A·B
(119~132)



9A15 (133~136)



133



135

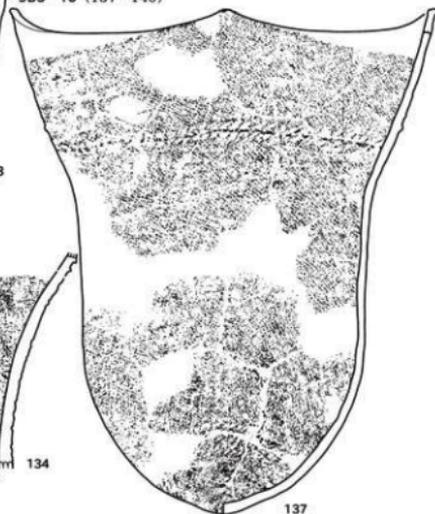


136

9B5・10 (137~140)



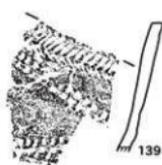
134



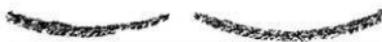
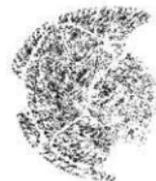
137



138



139

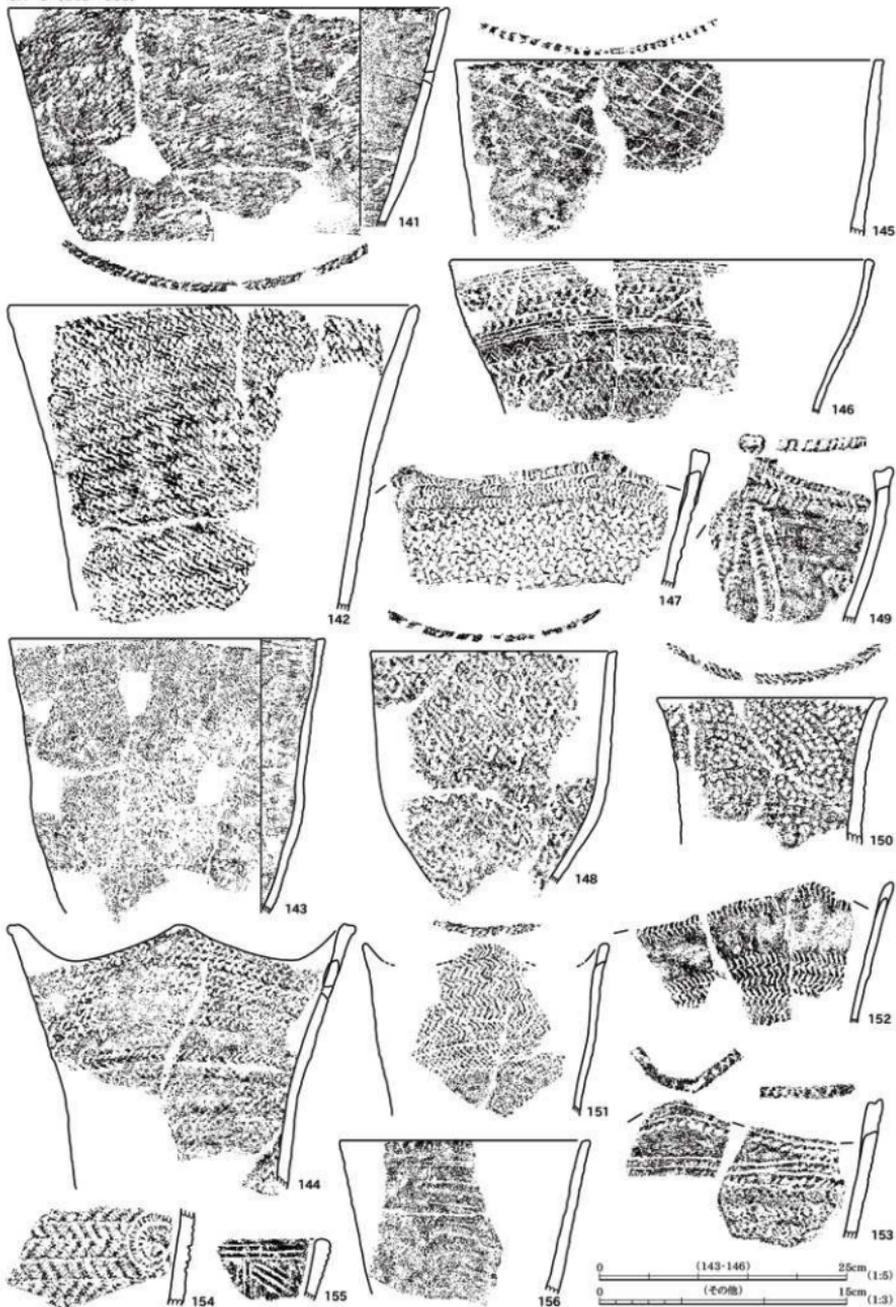


140

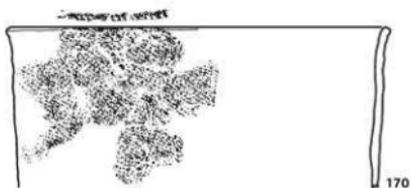
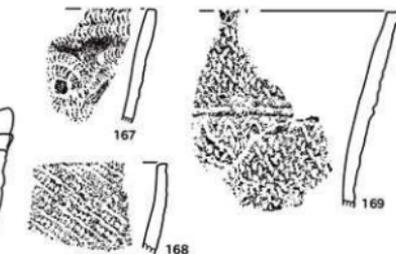
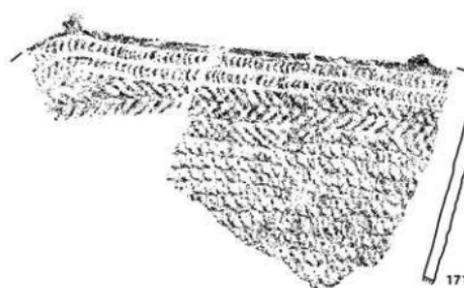
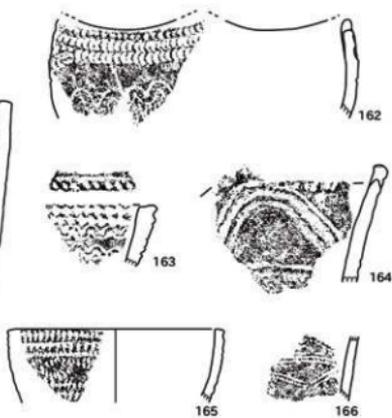
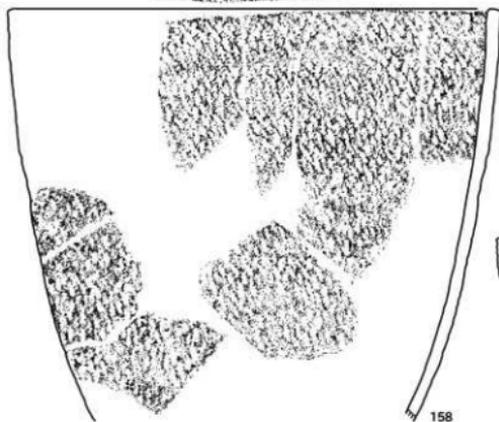
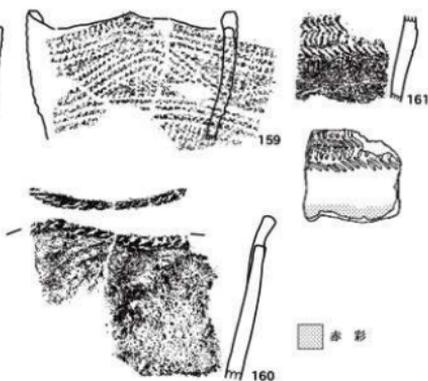
0 (137) 25cm (1.5)

0 (その他) 15cm (1.3)

9A-B (141~156)



10A・B (157~241)



0 (170) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)



172



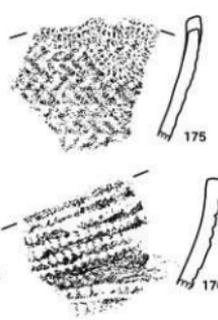
173



175



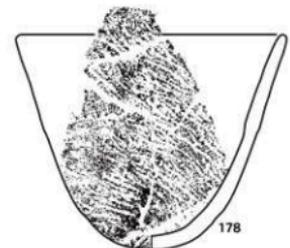
174



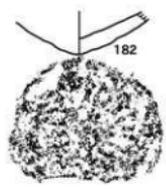
176



177



178



182



181

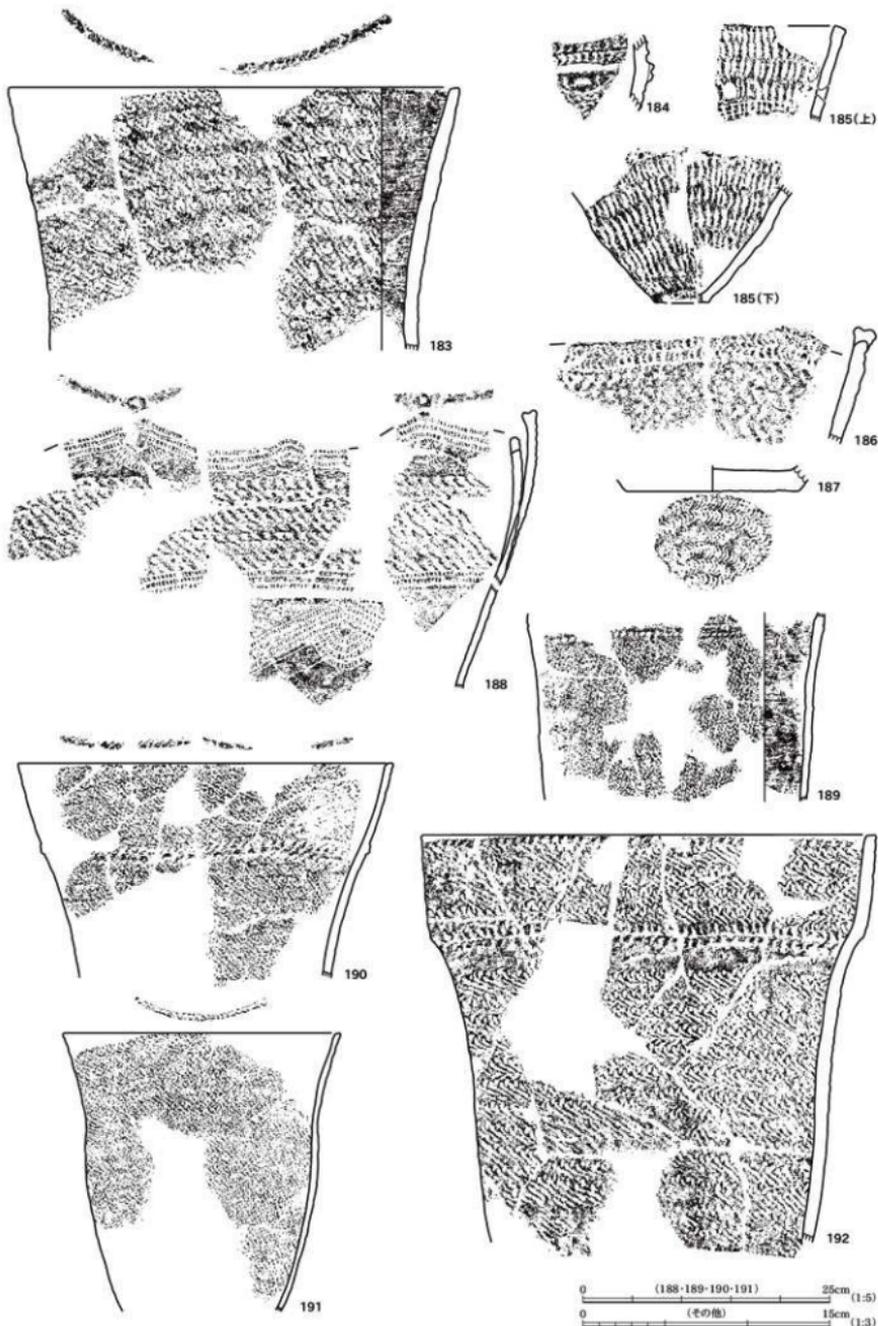


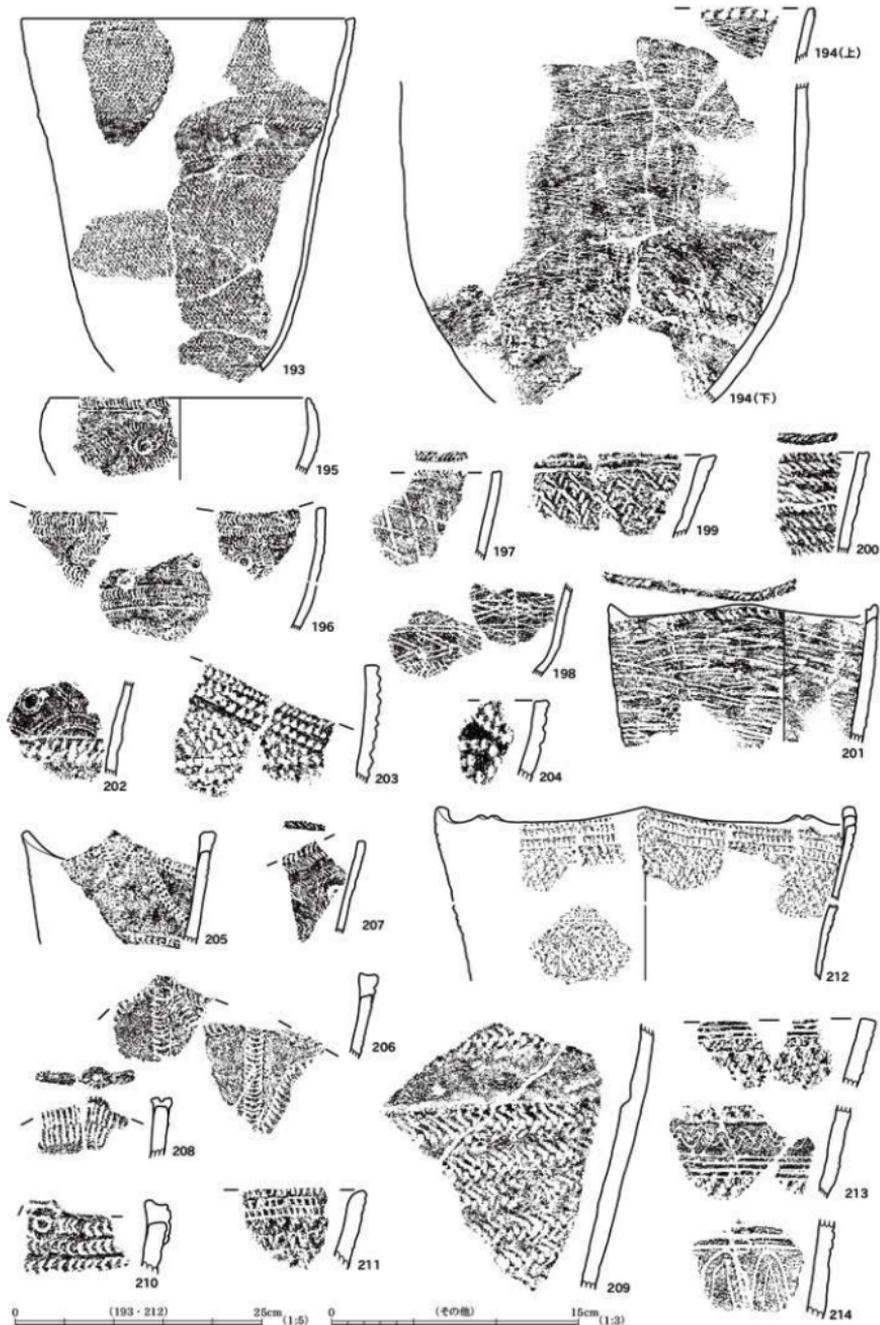
179

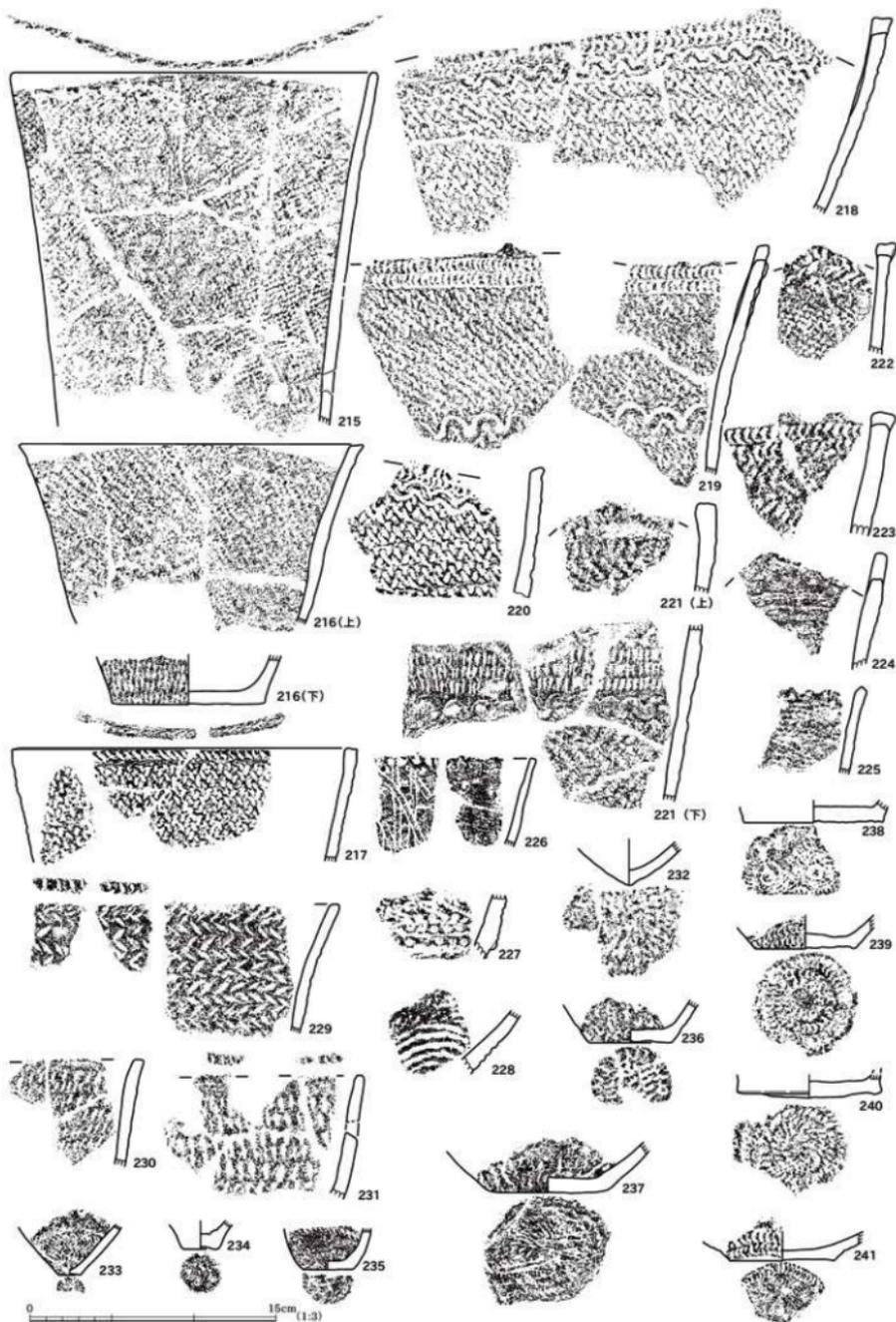


180

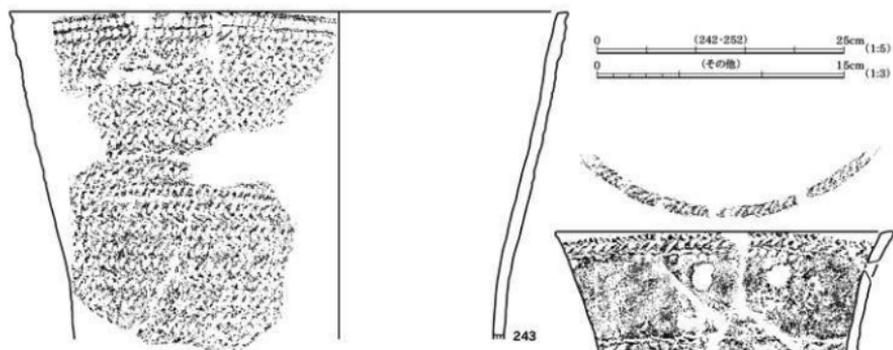
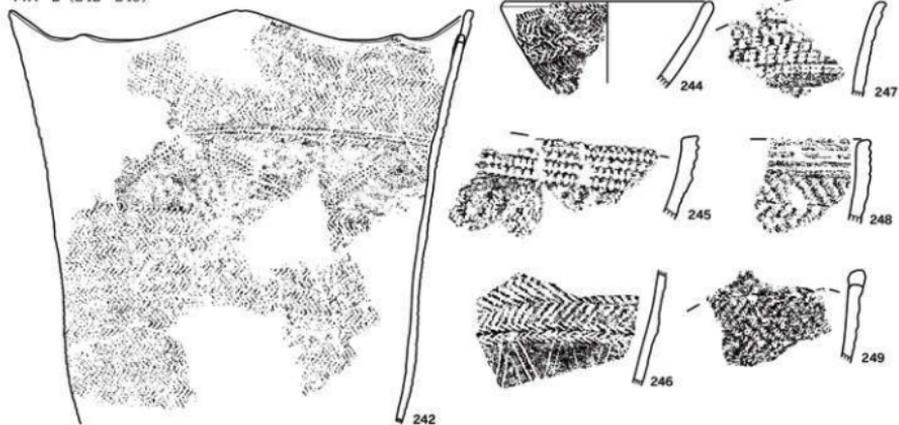
0 (172・177) 25cm (1:5)
 0 (その他) 15cm (1:3)



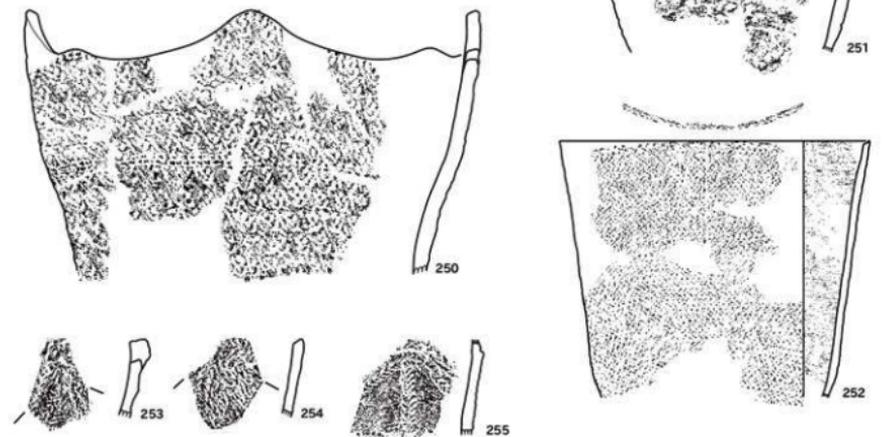


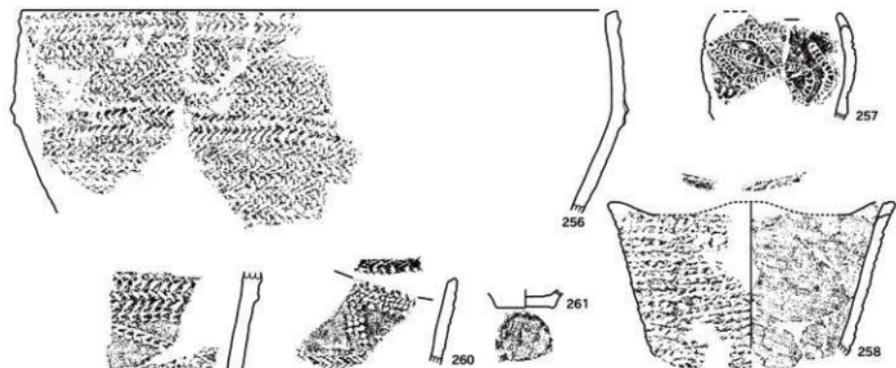


11A・B (242~249)



4C・D、5B・C・D (250~261)

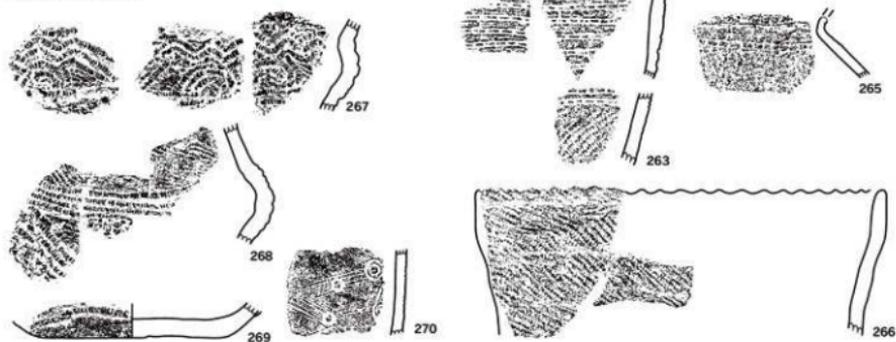




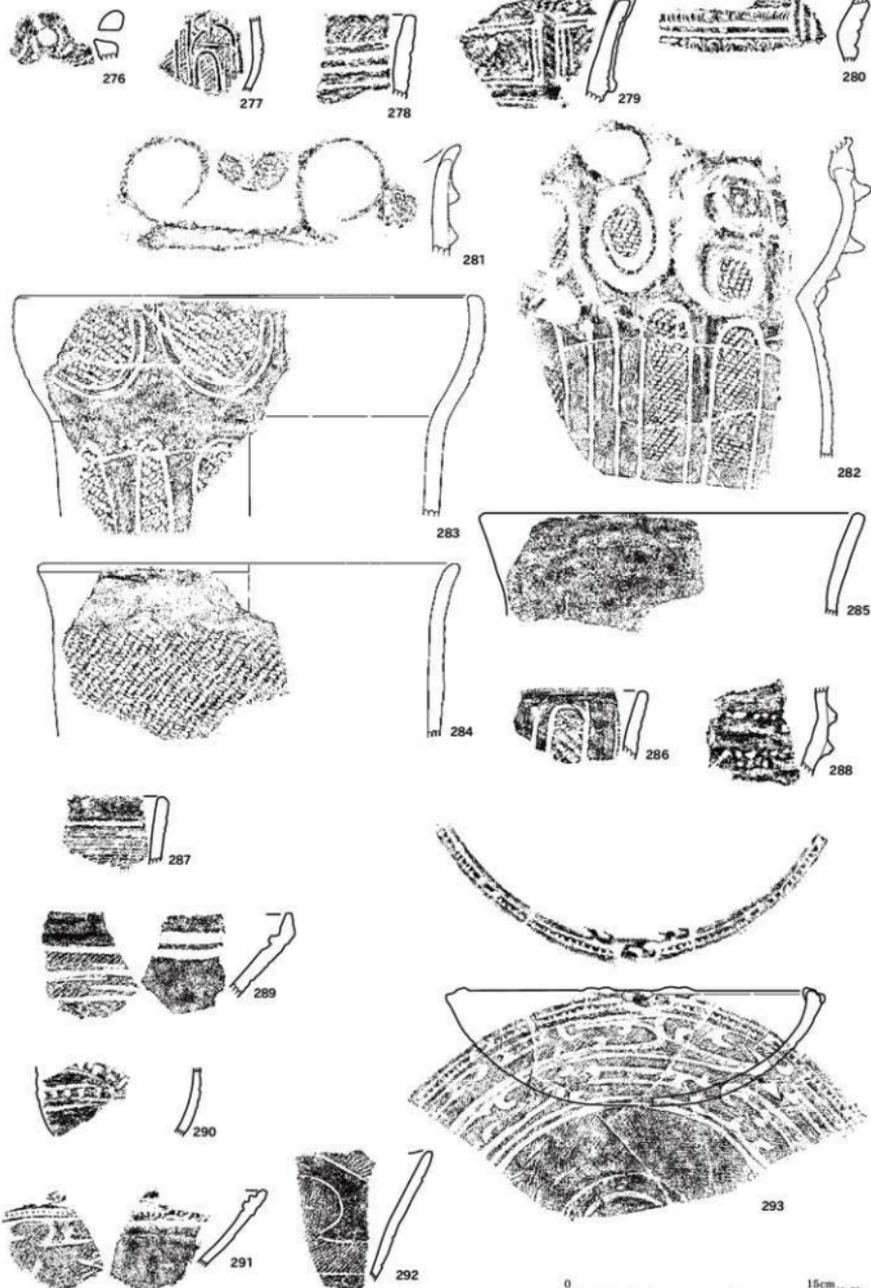
I区 (102・103C) (262~266)



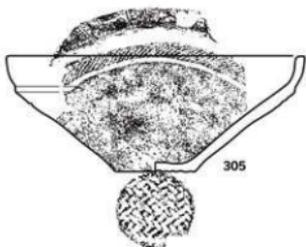
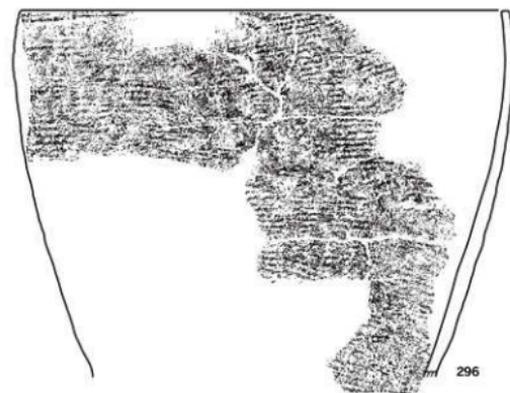
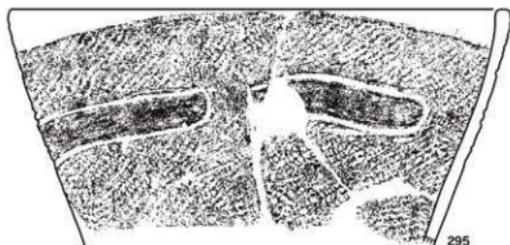
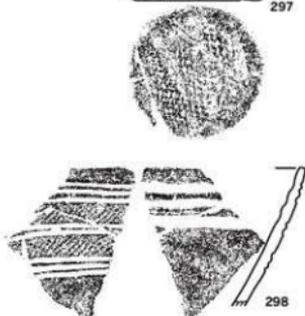
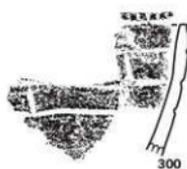
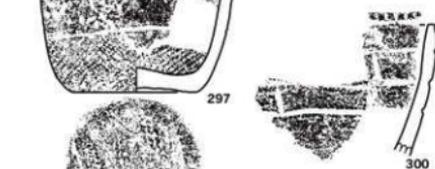
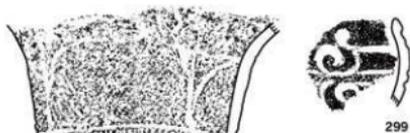
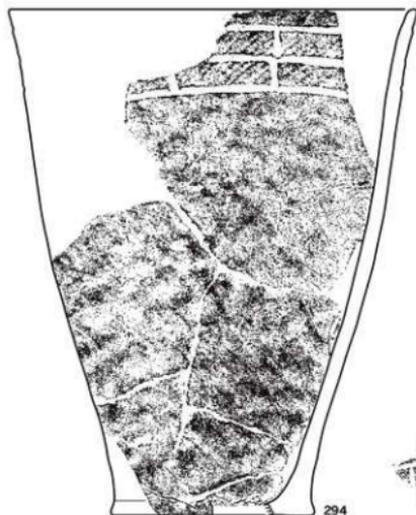
その他 (267~275)



XV・XVa層出土の縄文時代中期～晩期の土器 (276～293)

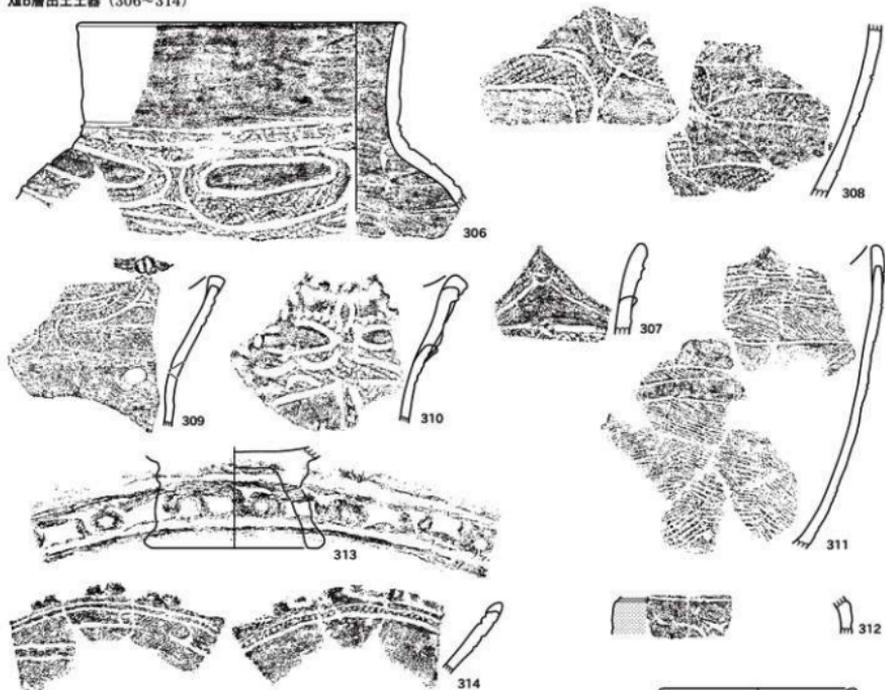


XIIIe 層出土土器 (294~305)

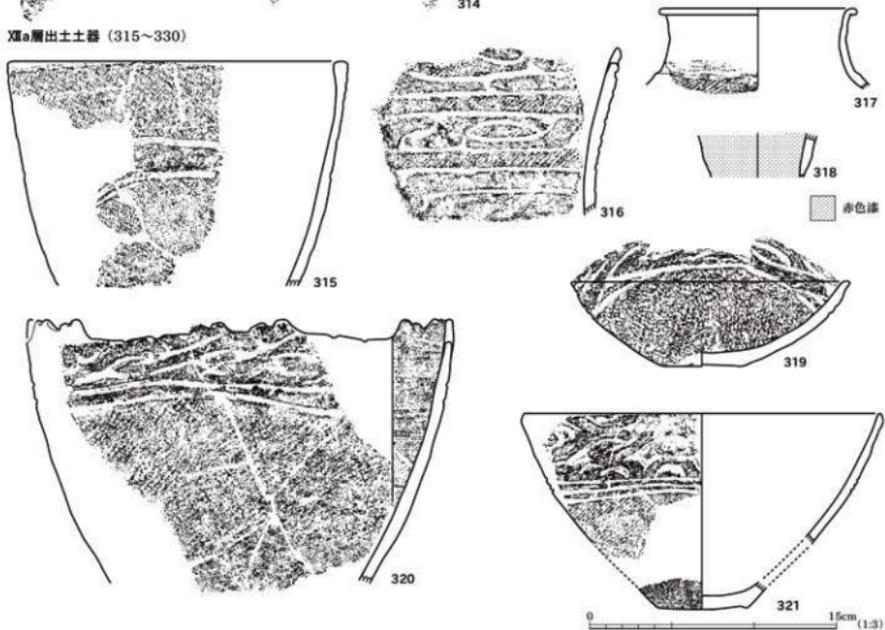


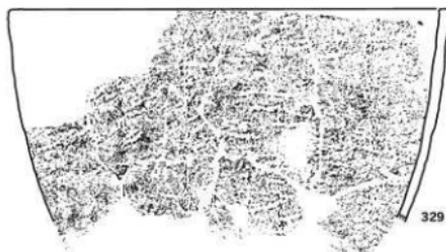
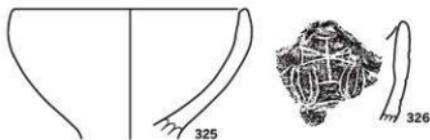
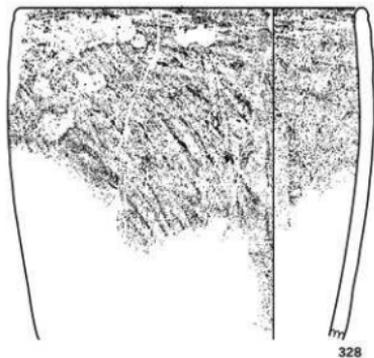
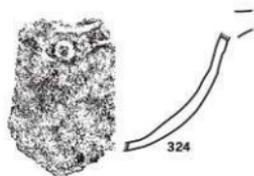
0 15cm (1.3)

XIIIb層出土土器 (306~314)

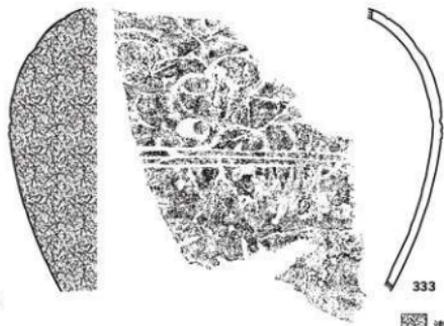
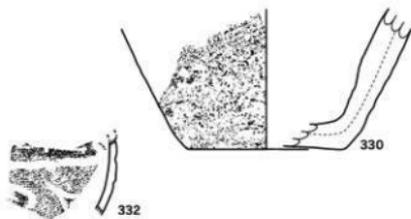


XIIIa層出土土器 (315~330)



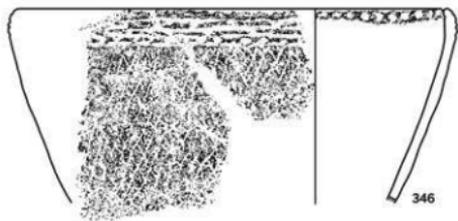
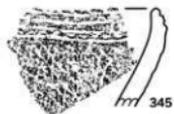
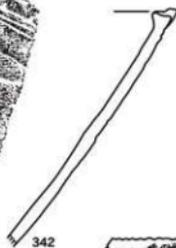
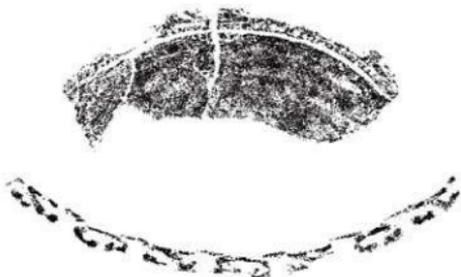
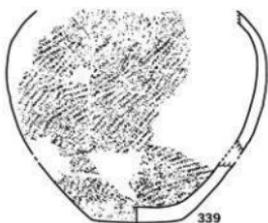
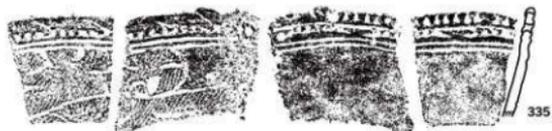


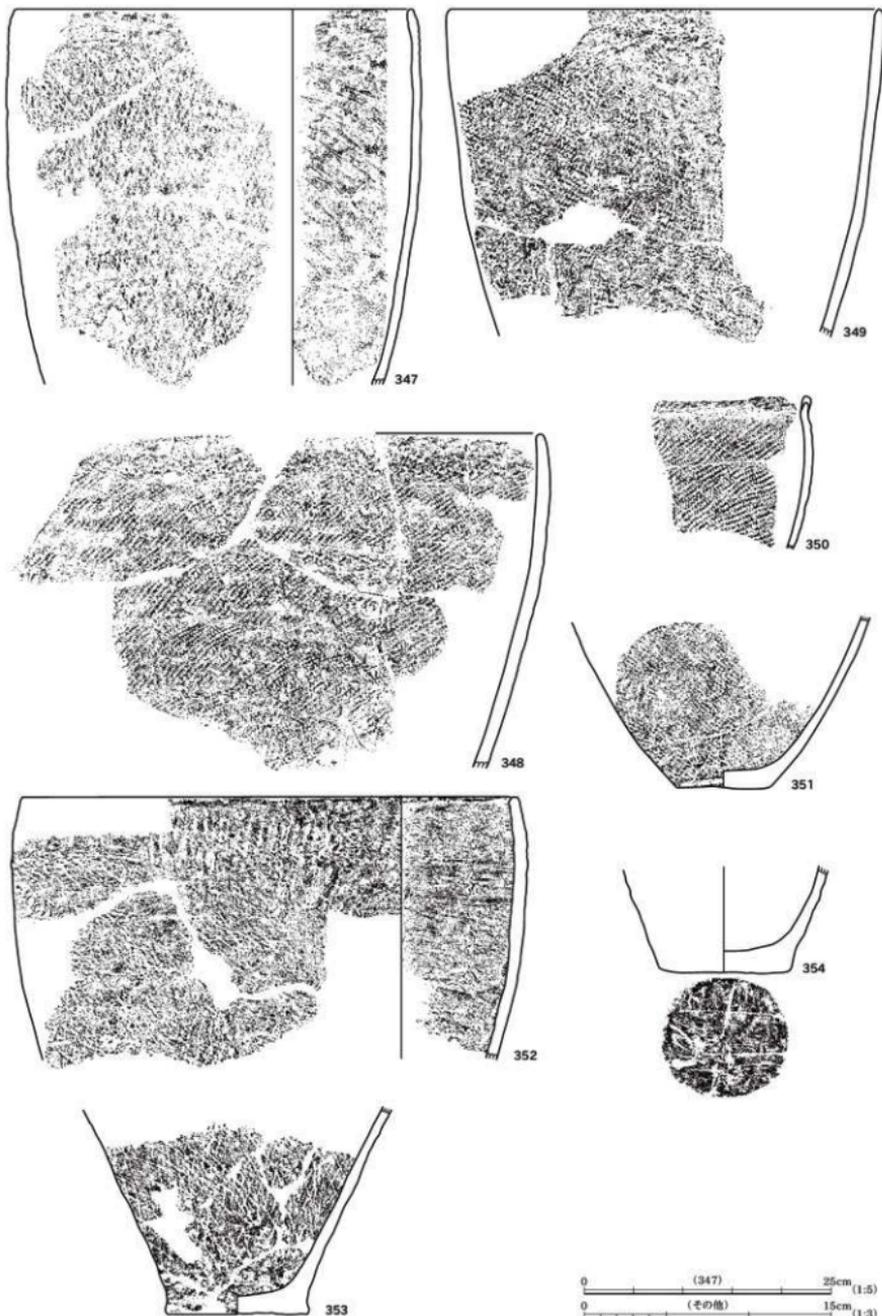
XIb層出土土器 (331~354)



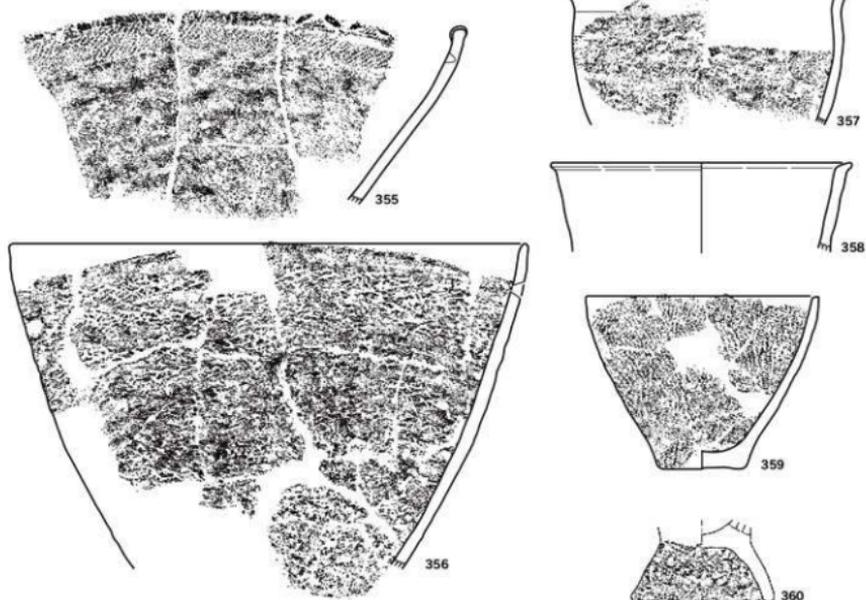
漆喰?

0 15cm (1:3)

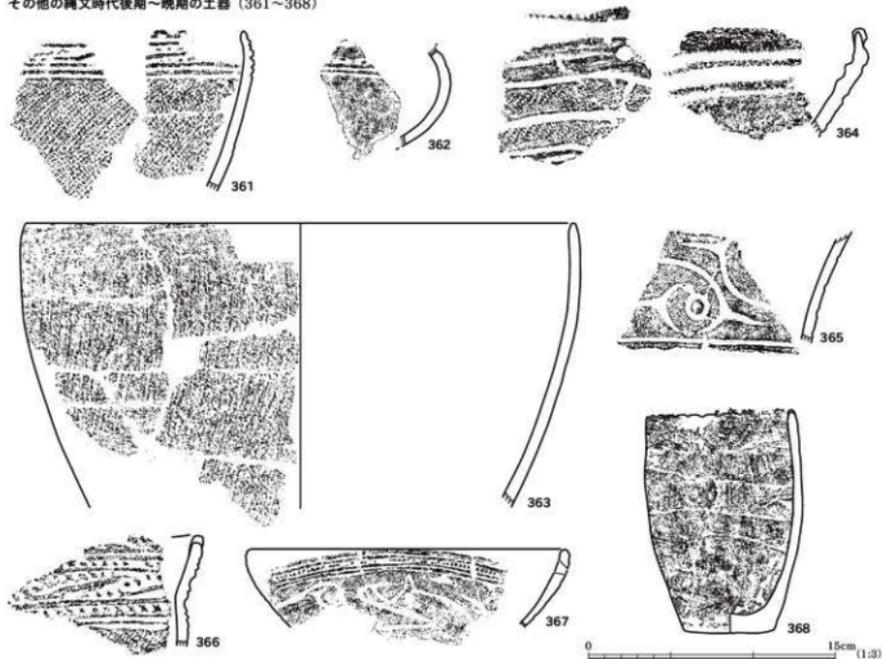




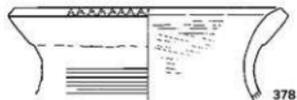
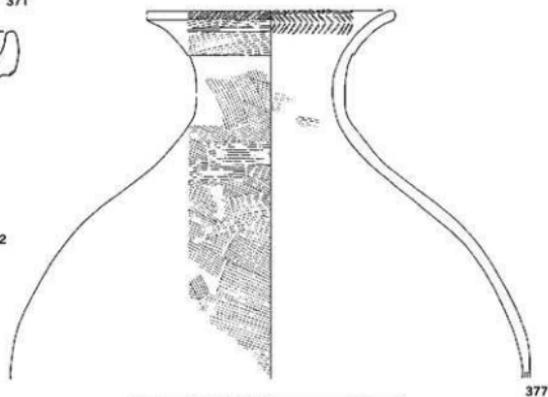
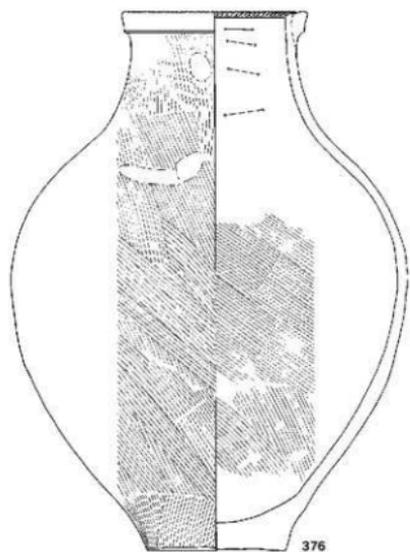
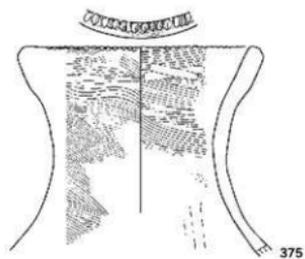
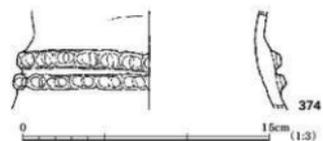
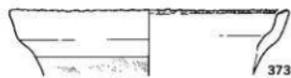
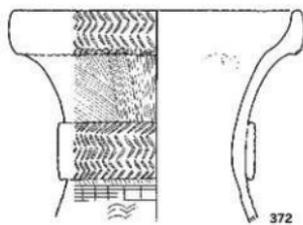
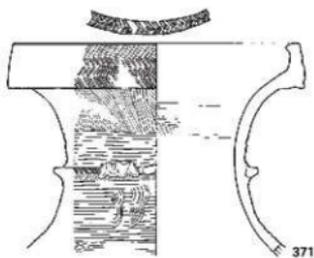
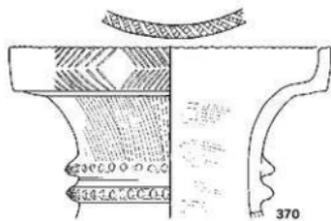
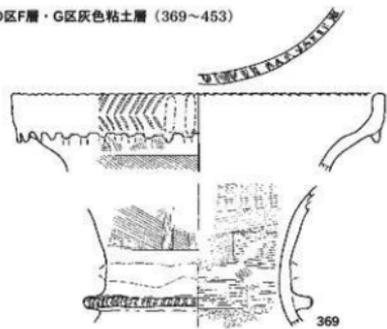
XIIa層出土土器 (355~360)

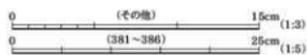
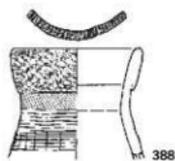
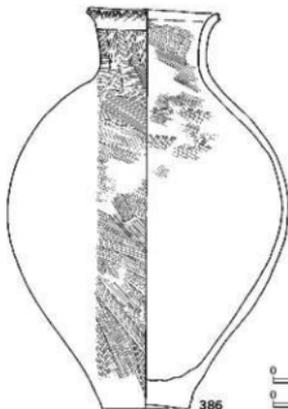
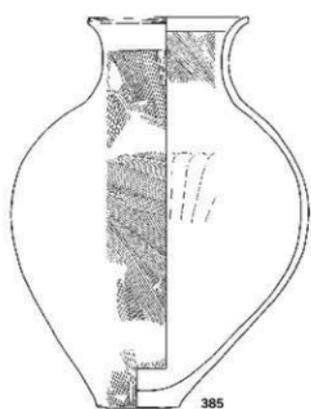
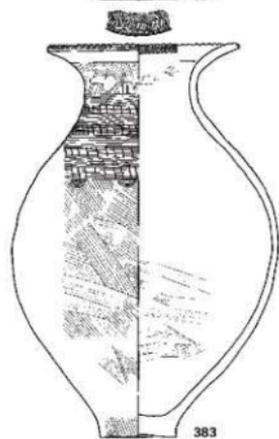
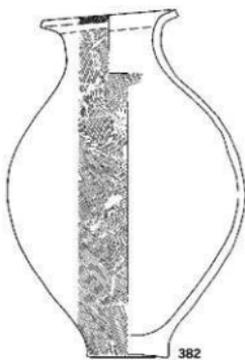
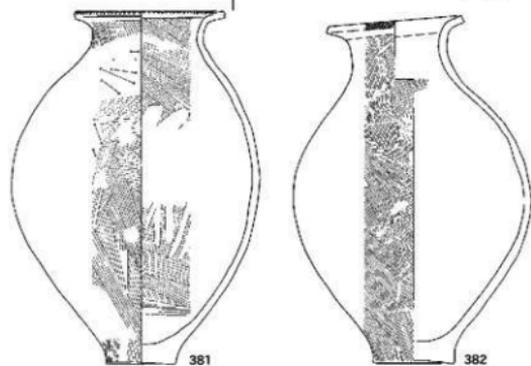
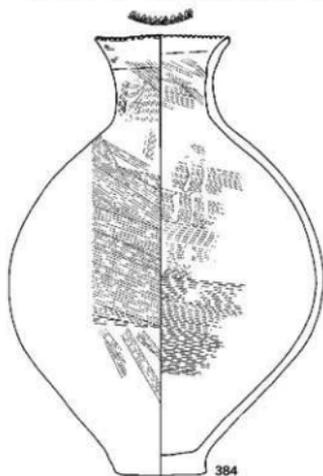
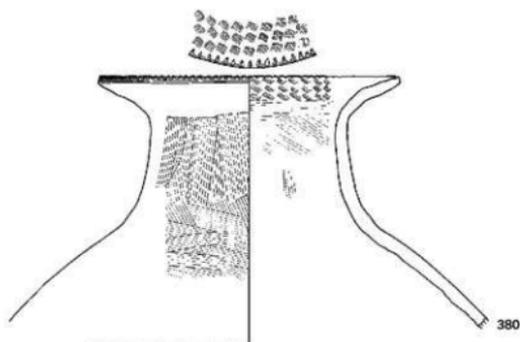
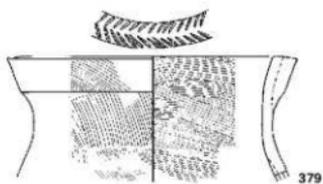


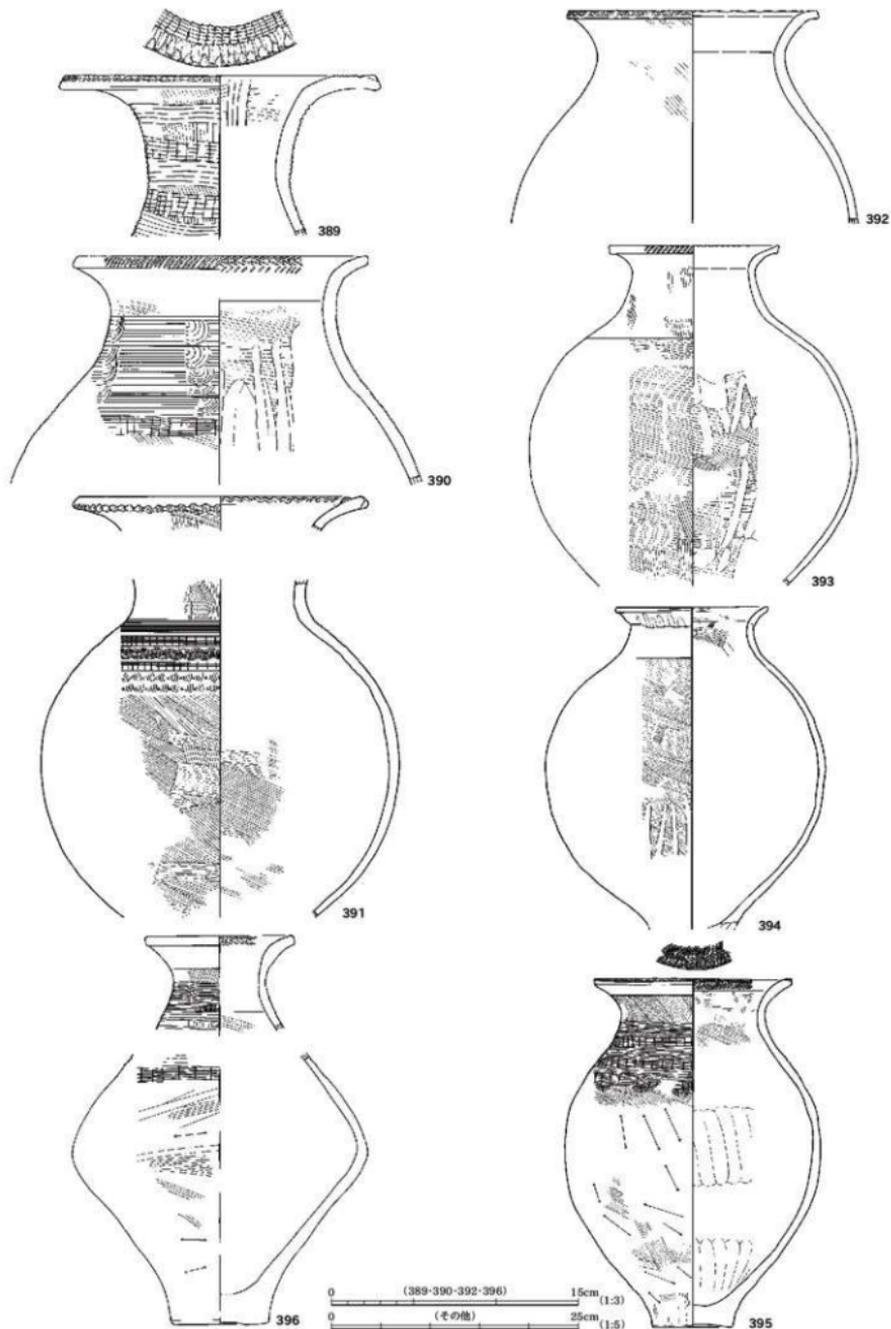
その他の縄文時代後期～晩期の土器 (361~368)

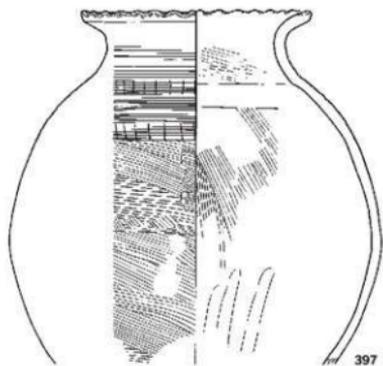


D区F層・G区灰色粘土層 (369~453)

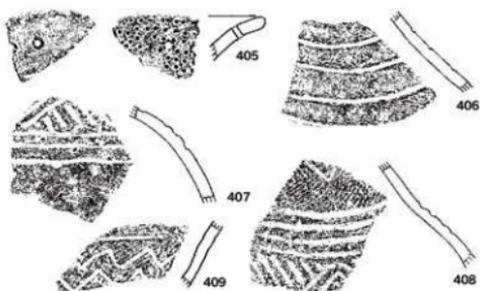








397

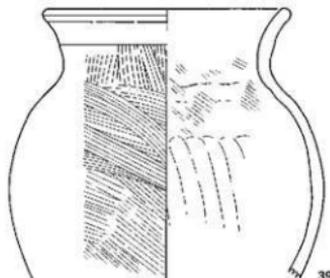


405

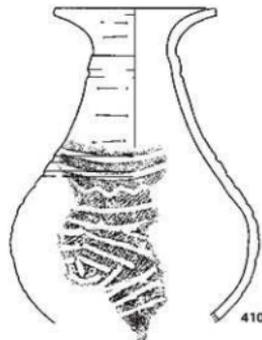
406

407

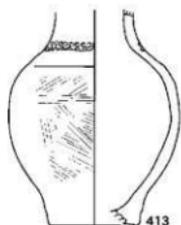
408



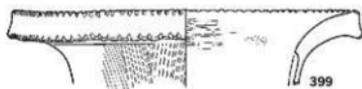
398



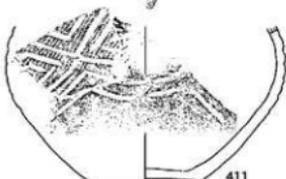
410



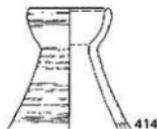
413



399



411



414



400



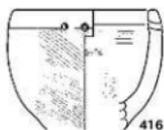
415



401



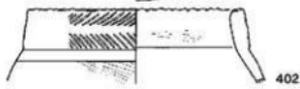
412



416



404



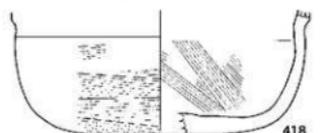
402



417



403

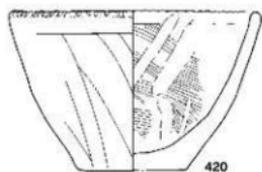


418

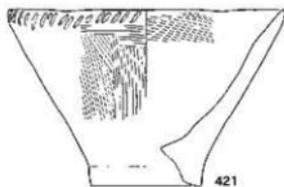


419

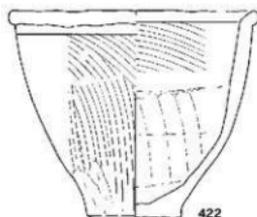
0 15cm (1:3)



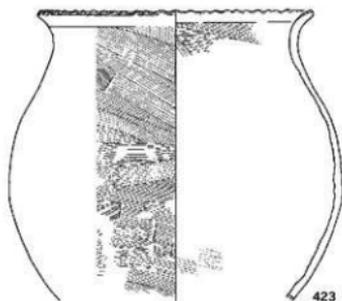
420



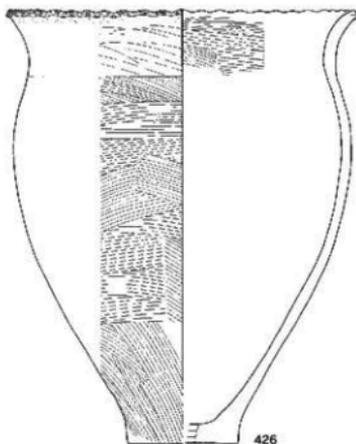
421



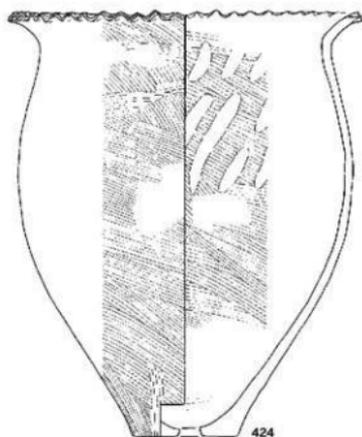
422



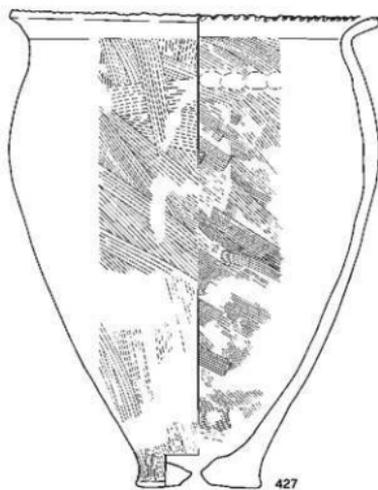
423



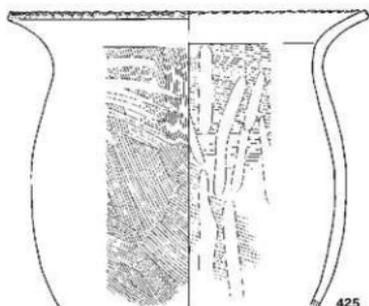
426



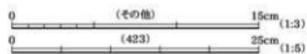
424

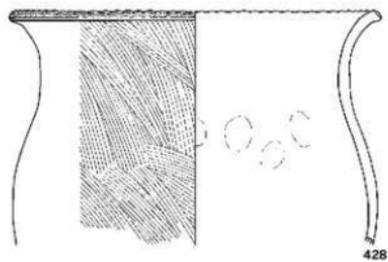


427

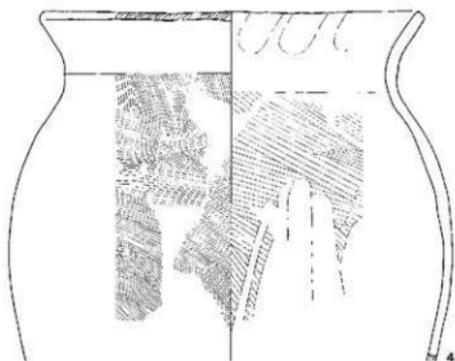


425

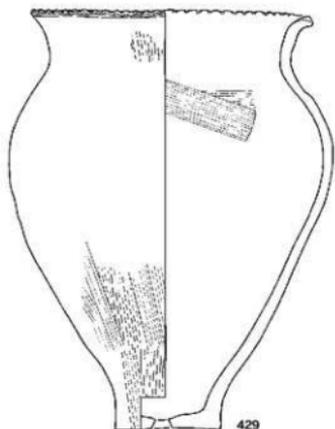




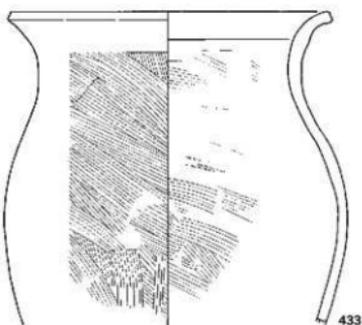
428



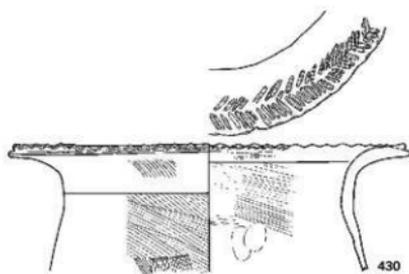
432



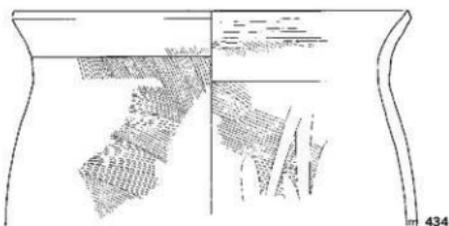
429



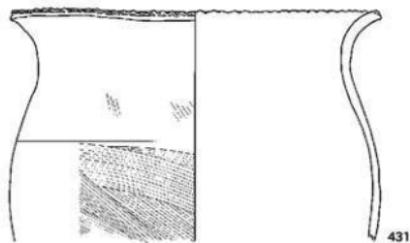
433



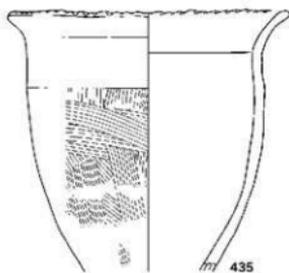
430



434

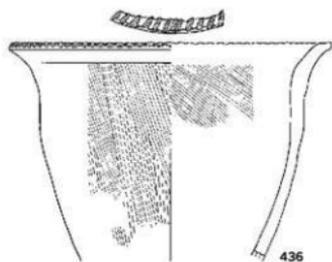


431

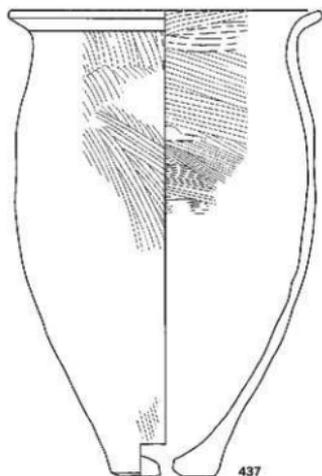


435

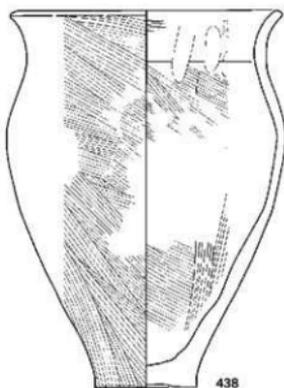
0 15cm (1:3)



436



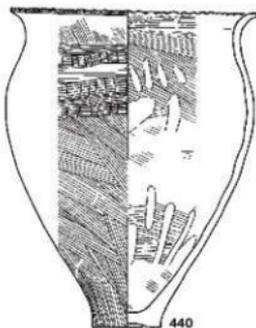
437



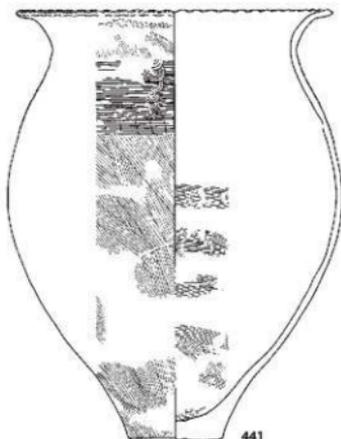
438



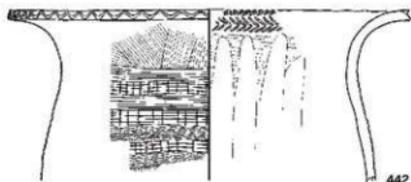
443



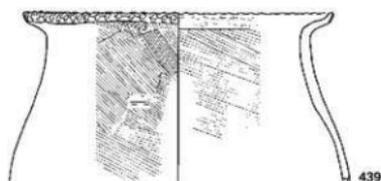
440



441

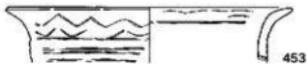
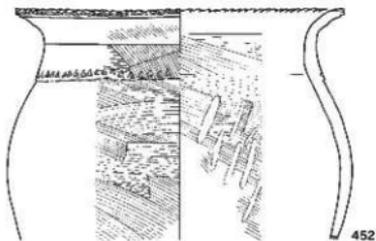
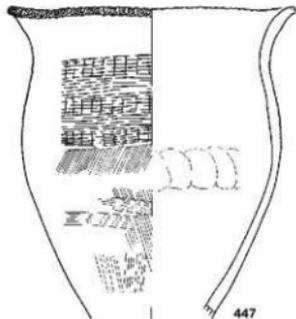
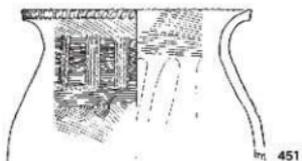
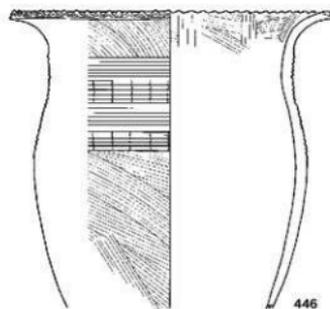
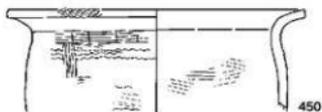
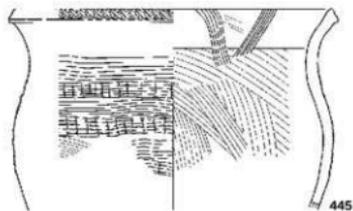
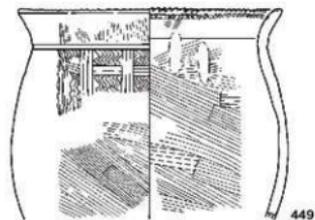
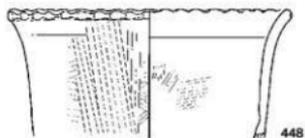
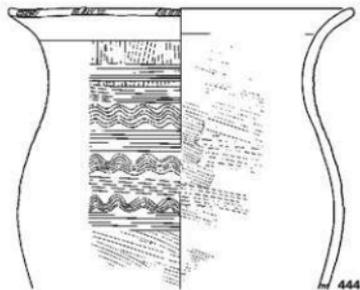


442

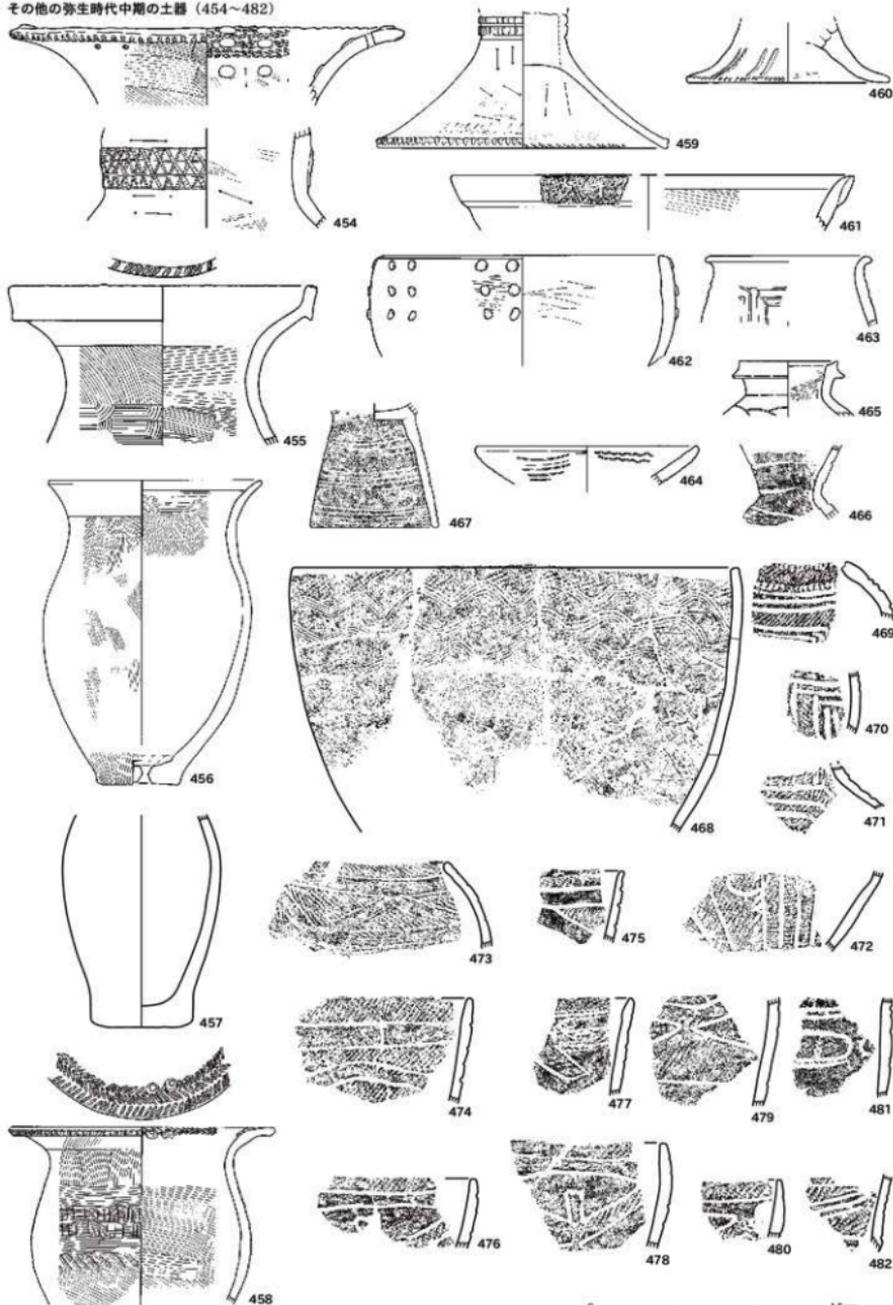


439

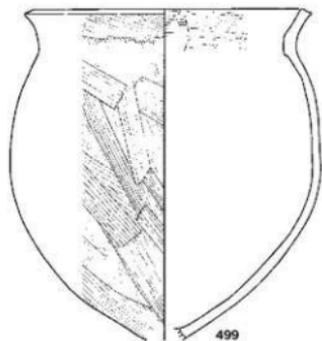
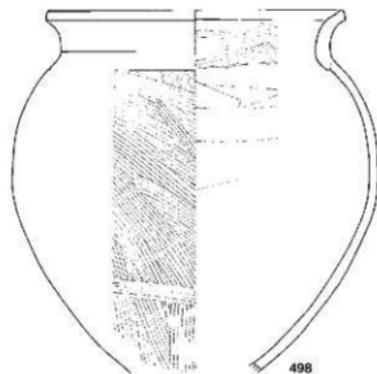
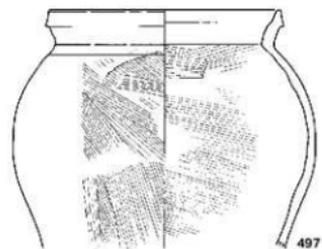
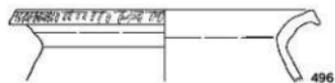
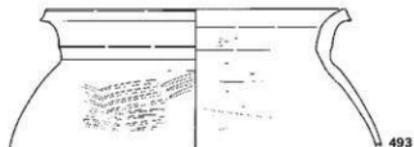
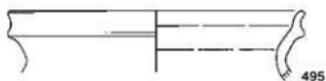
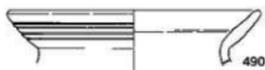
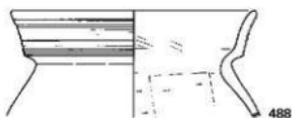
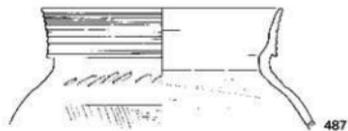
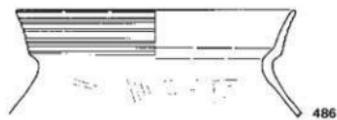
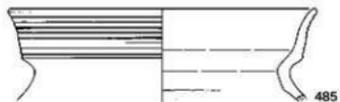
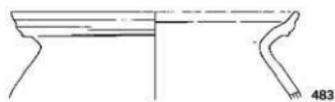
0 (440-441) 25cm (1:5)
0 (その他) 15cm (1:3)



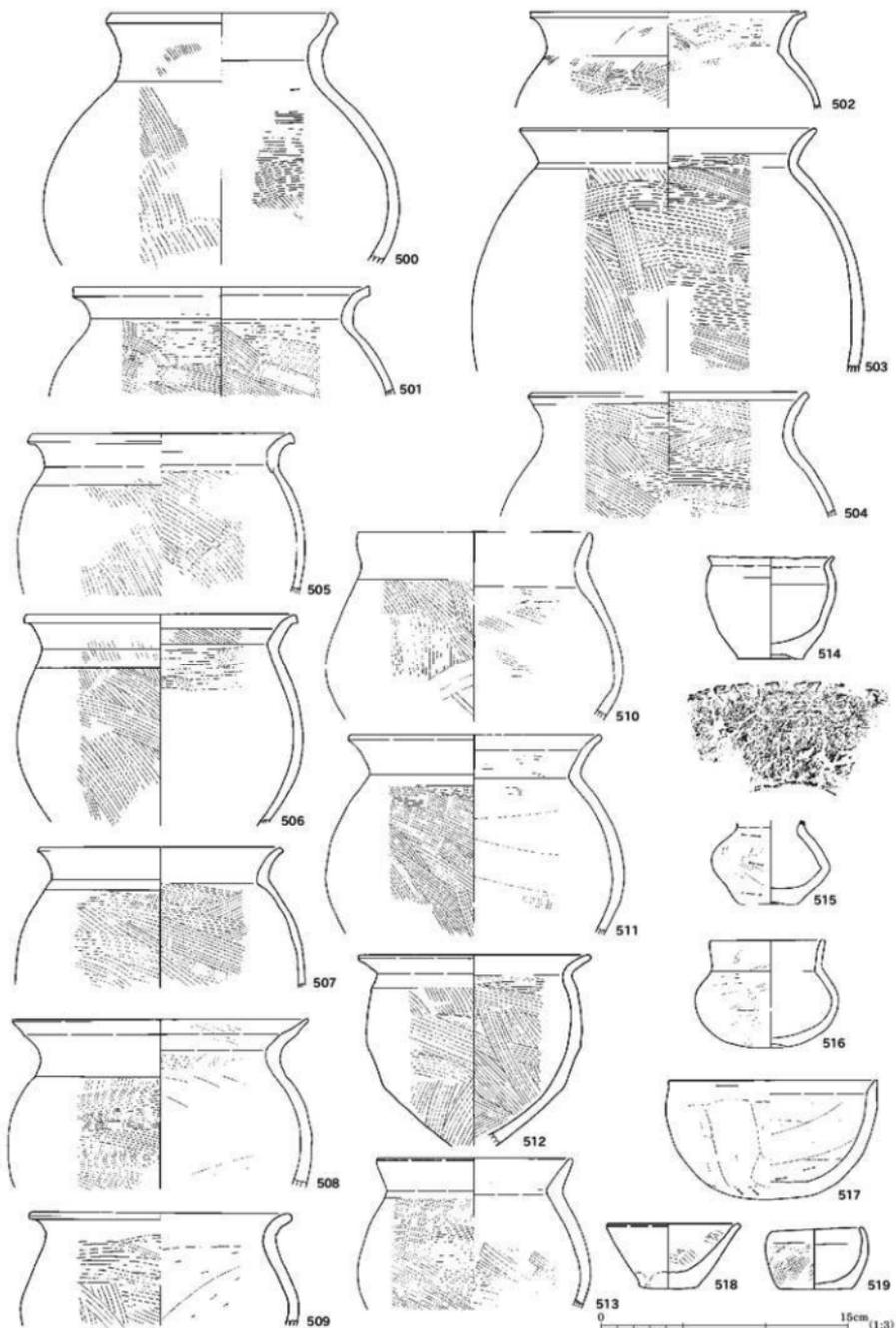
その他の弥生時代中期の土器 (454~482)

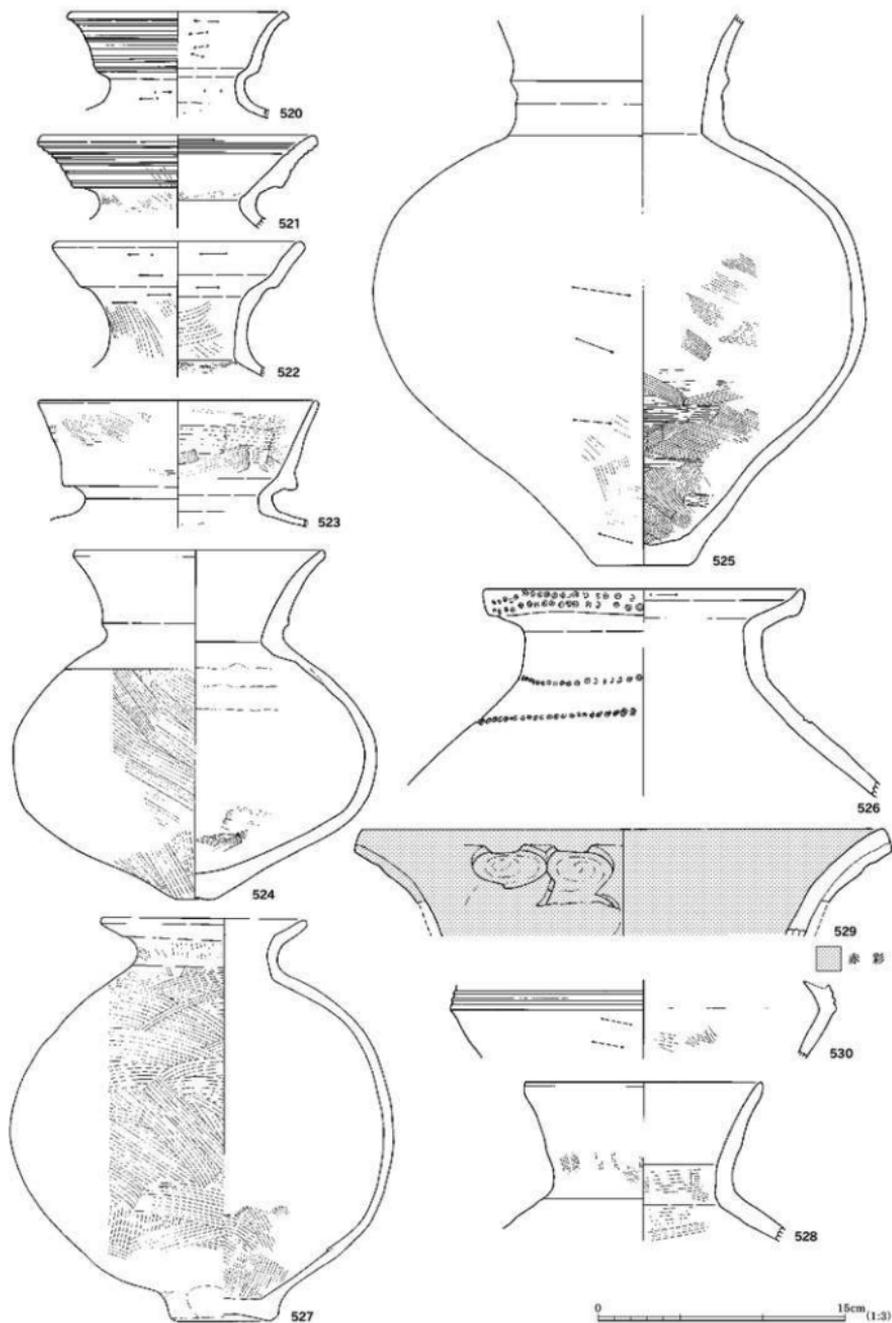


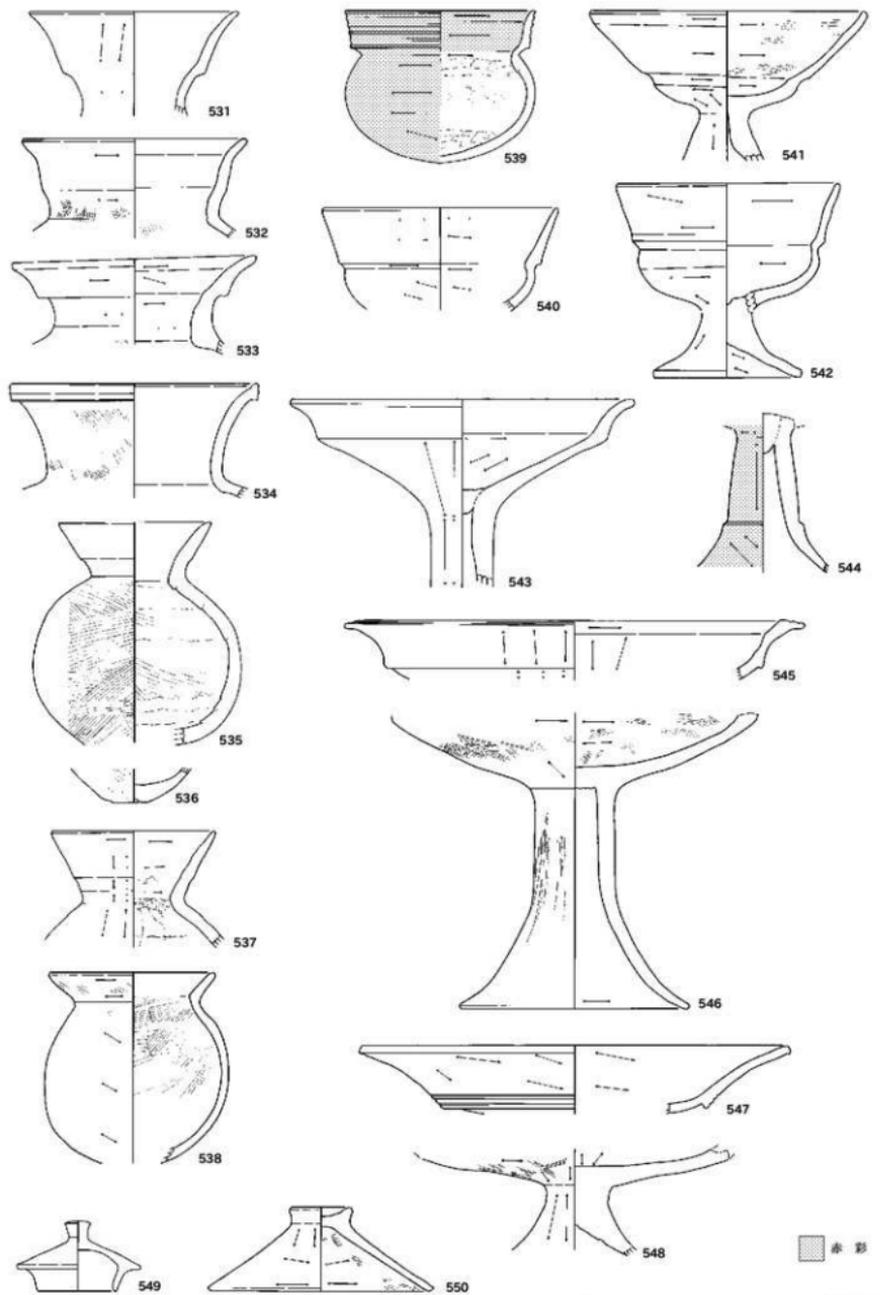
SD50・51・83-3層 (483~561)

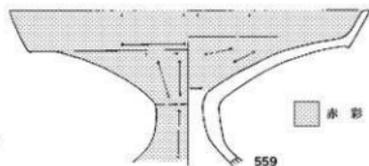
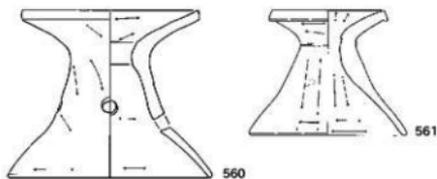
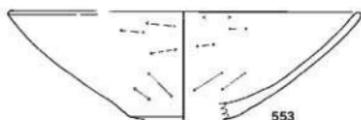
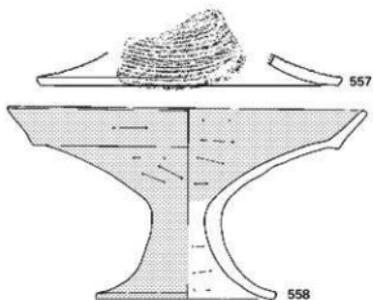
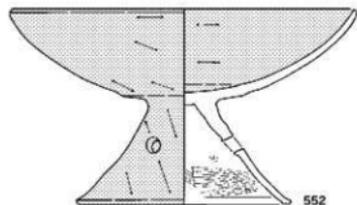
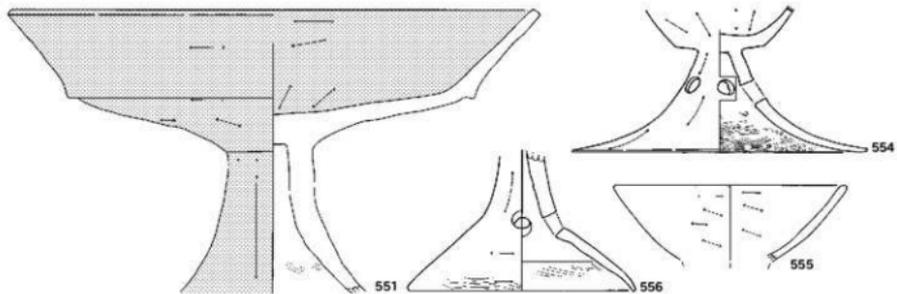


0 15cm (1:3)

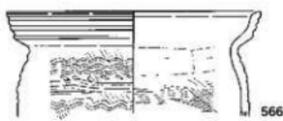
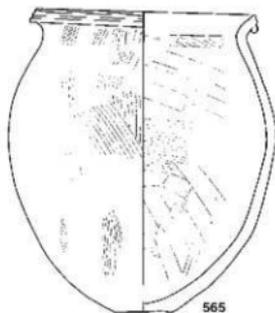
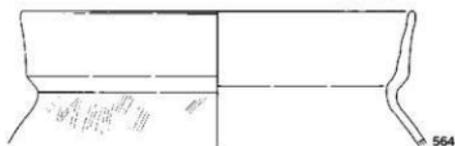
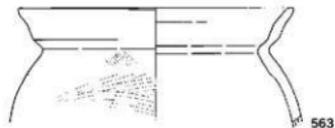
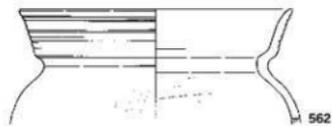




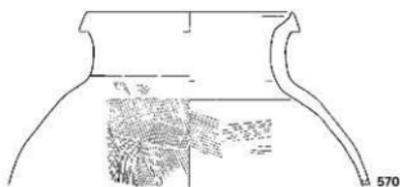
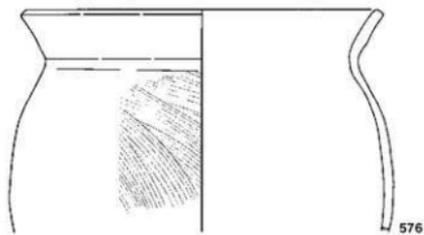
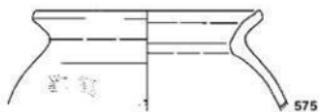
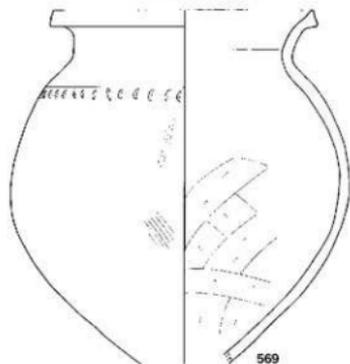
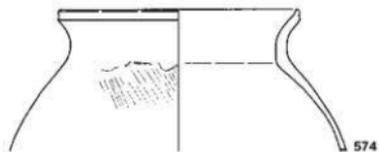
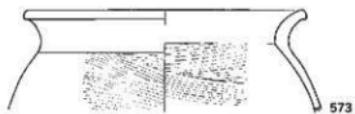
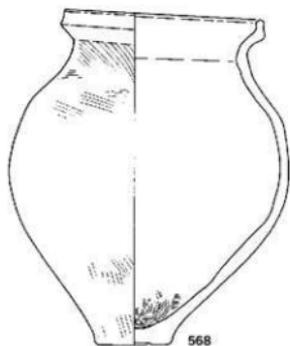
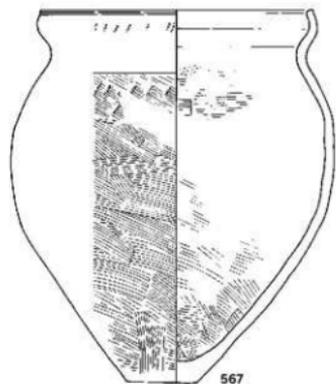




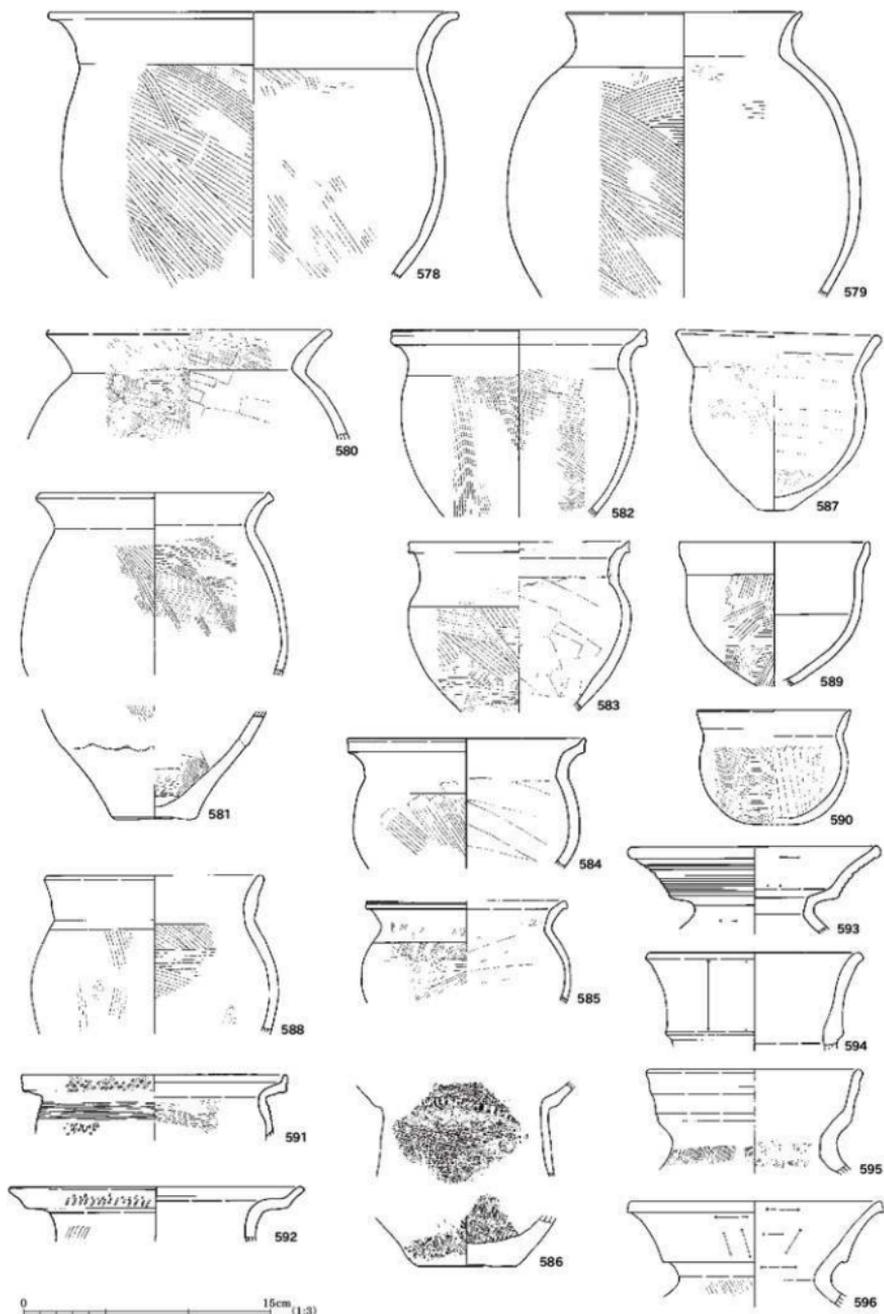
23層 (562~628)



0 15cm (1:3)



0 15cm (1:3)



578

579

580

582

587

581

583

589

590

584

593

588

585

594

591

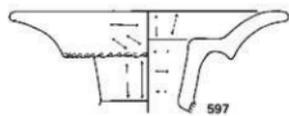
595

592

586

596

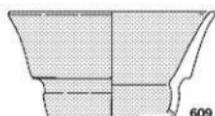
0 15cm (1:3)



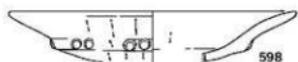
597



604



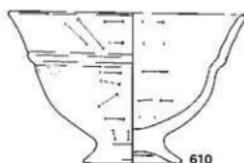
609



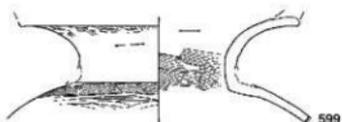
598



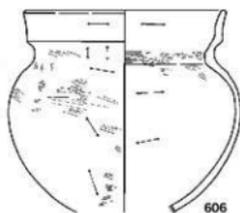
605



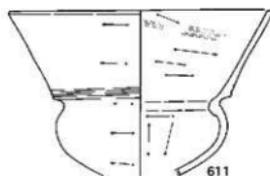
610



599



606



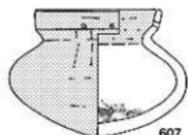
611



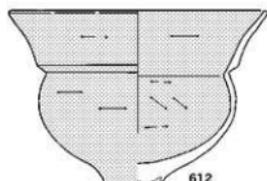
600



601



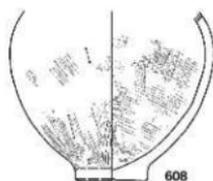
607



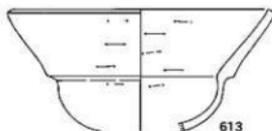
612



602



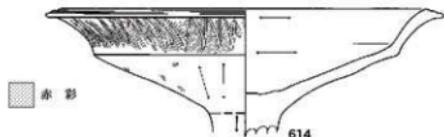
608



613



603



614



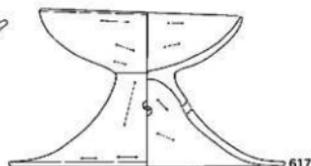
615



618



616

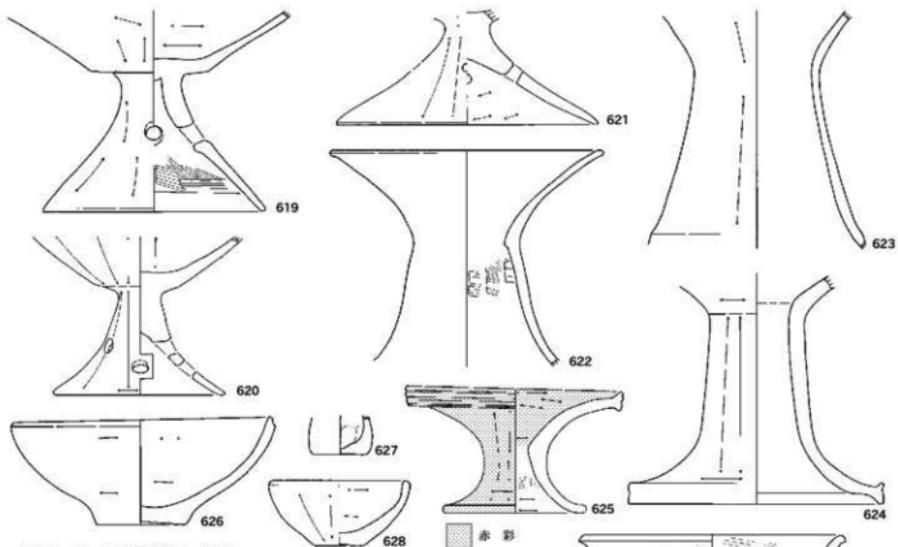


617

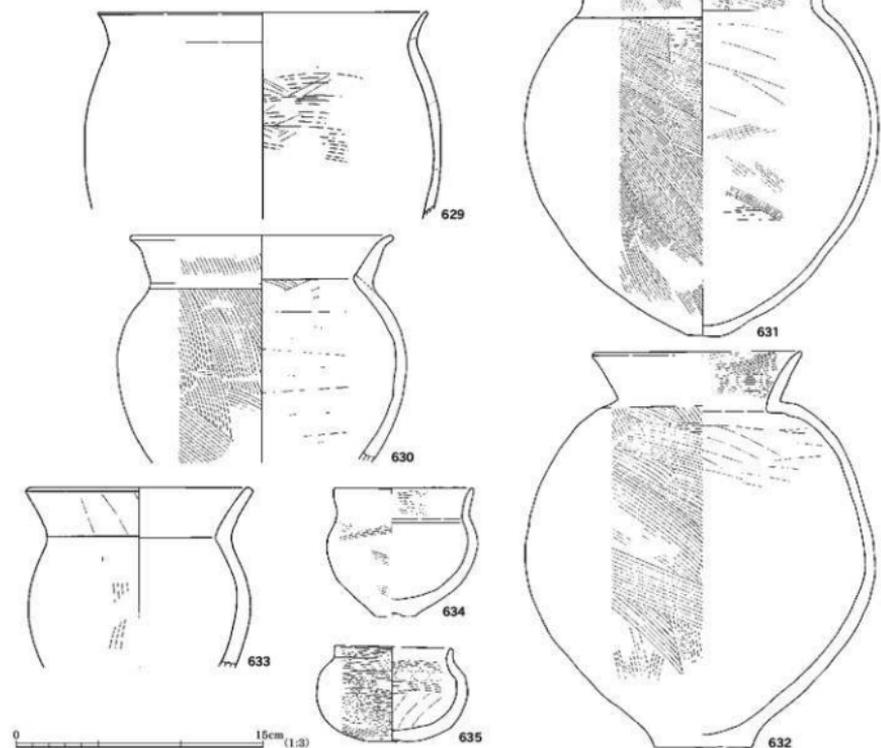


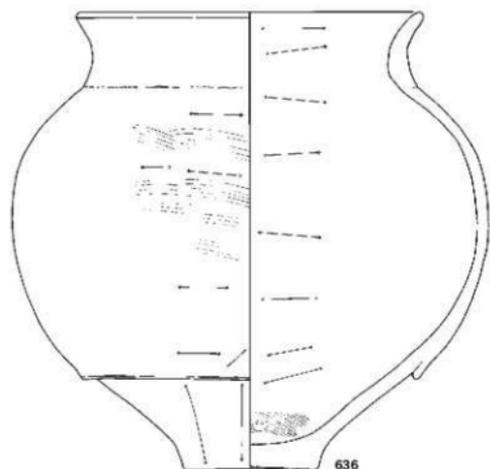
赤影



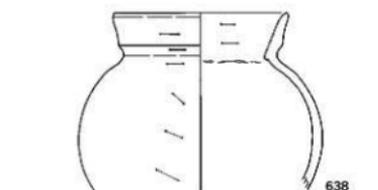


SD50・51・83-1層 (629~641)

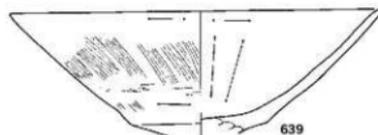




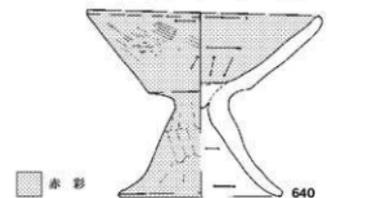
636



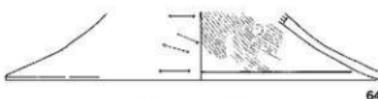
638



639

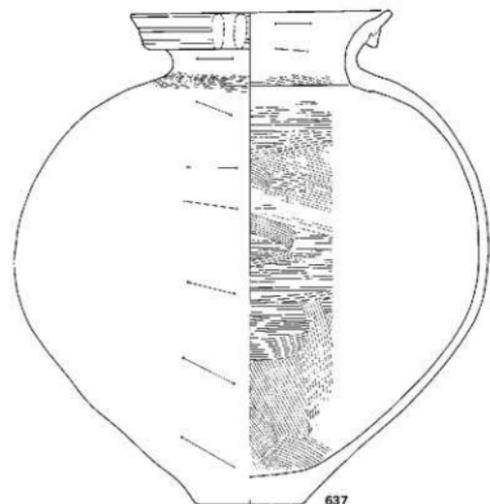


640

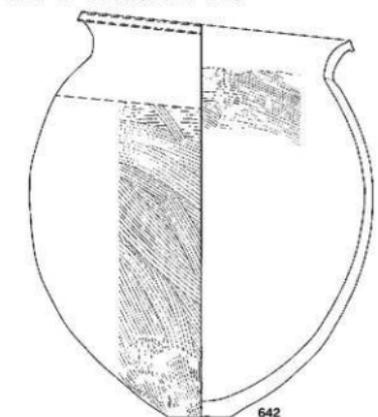


641

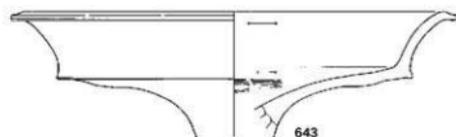
SD50・51・83-その他 (642~644)



637



642



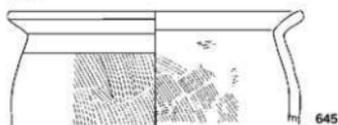
643



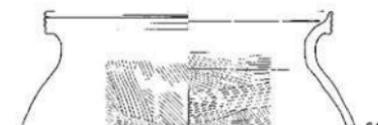
644

0 15cm (1:3)

SD47 (645・646)

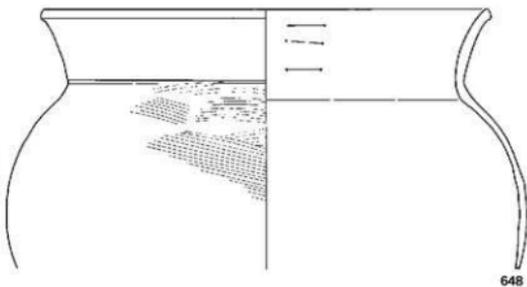
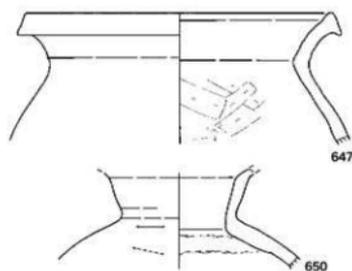


645

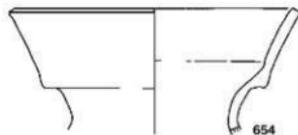
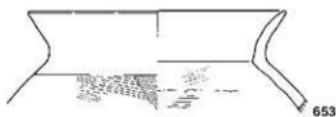
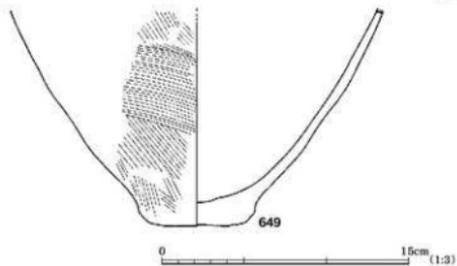
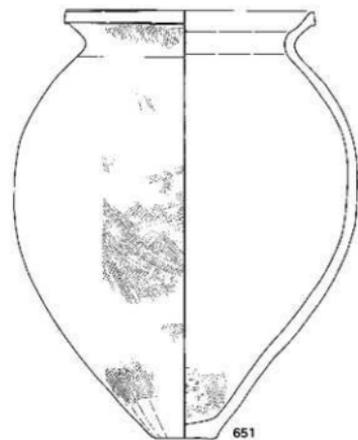


646

SD46 (647~650)



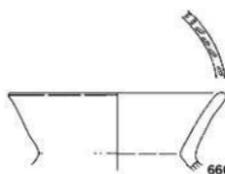
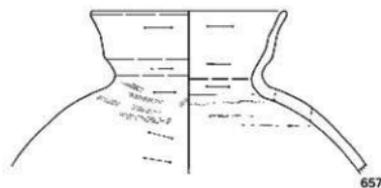
SK85 (651~654)



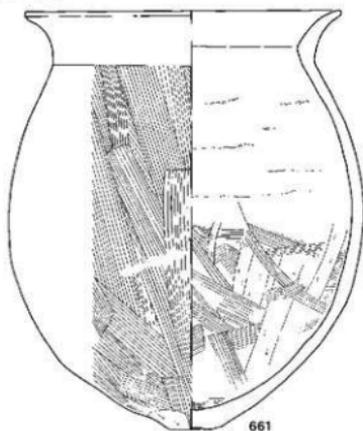
SK70 (655~660)



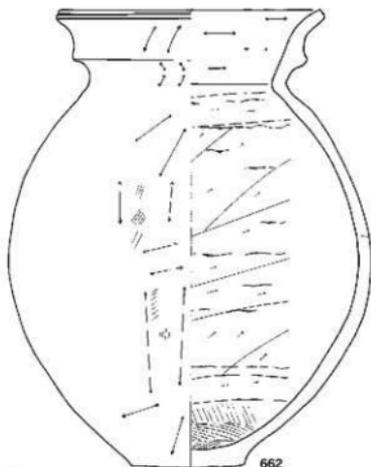
■ 赤彩



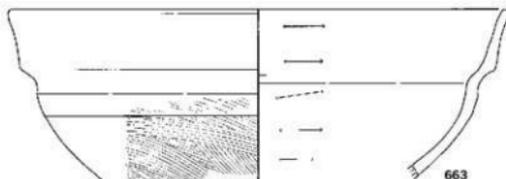
SK55 (661~665)



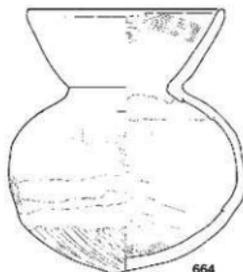
661



662



663



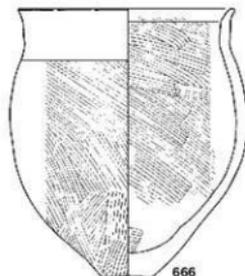
664



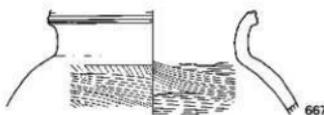
665

SD33 (666~669)

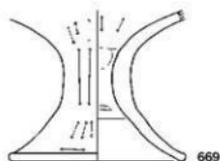
0 15cm (1:3)



666



667



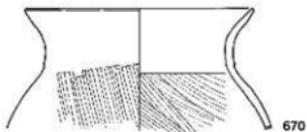
669



668



SK40 (670 - 671)

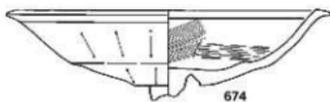
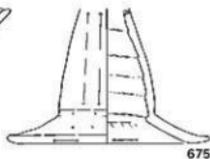
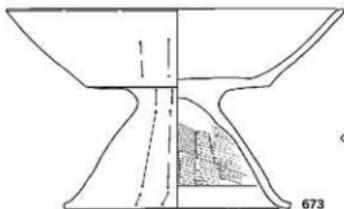
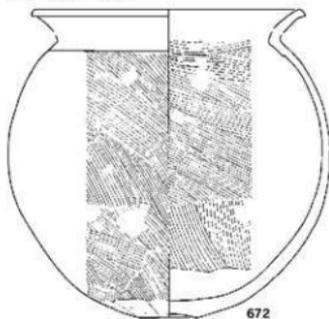


670

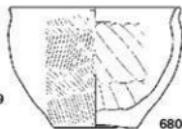
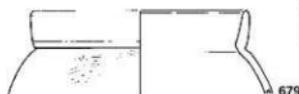
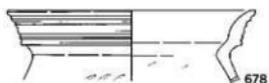
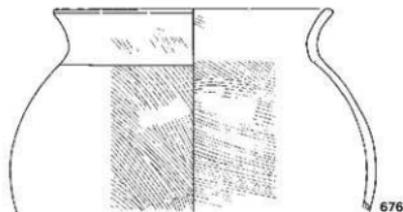


671

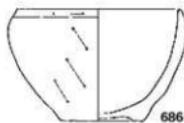
SK95 (672~675)



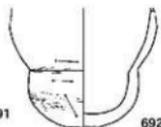
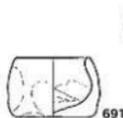
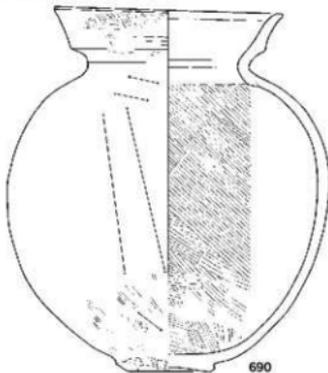
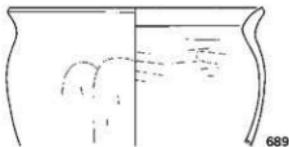
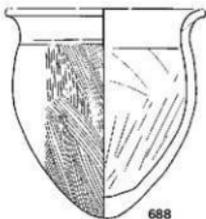
21層 (676~683)



20層 (684~687)

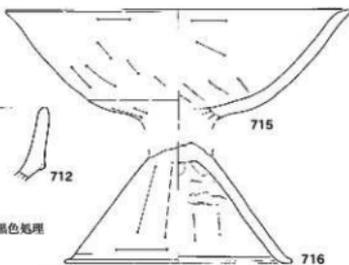
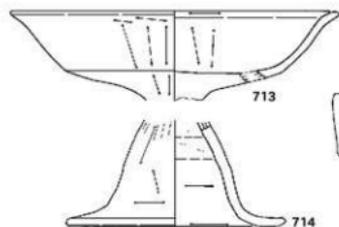
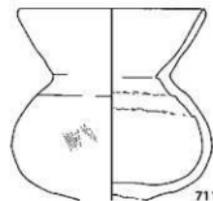
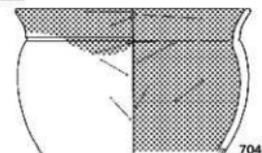
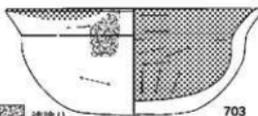
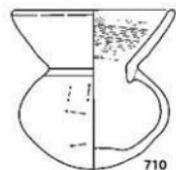
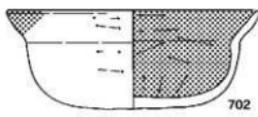
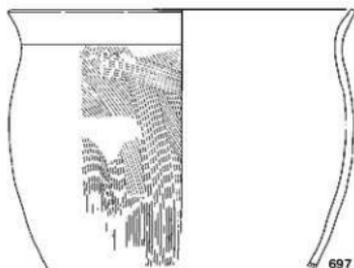
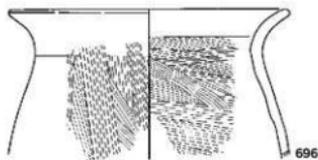
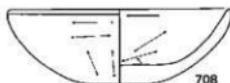
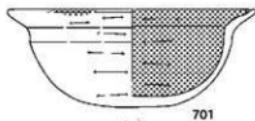
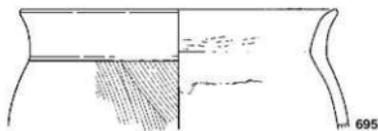
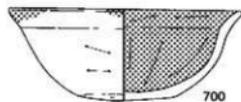
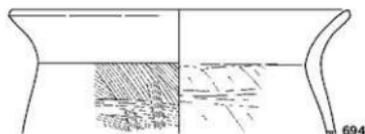
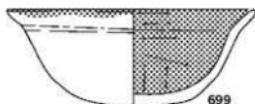
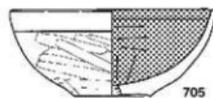
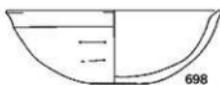


Vc層 (688~692)



0 15cm (1:3)

SX88 (693~716)



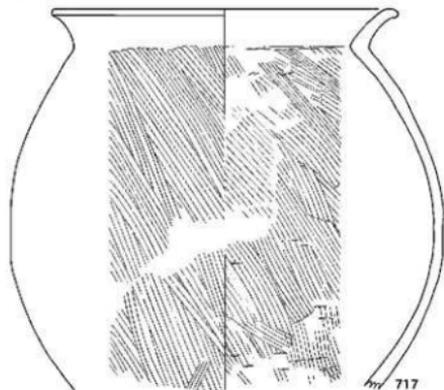
714

黒色処理

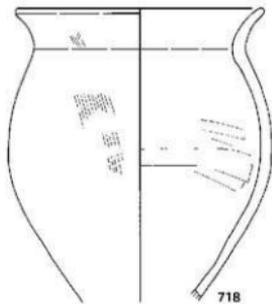
0 (697) 25cm (1:5)

0 (その他) 15cm (1:3)

その他の土坑 (717・718)

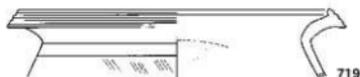


717

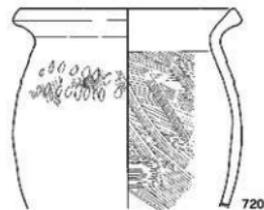


718

⑥層 (719~721)



719



720



721

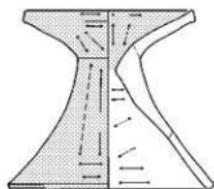
VIIa・b層相当層 (722~724)



722



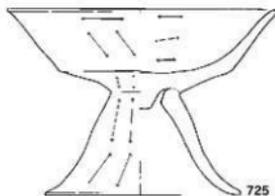
723



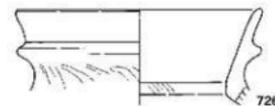
724

赤影

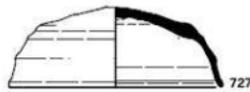
VIb層・B層 (725~745)



725



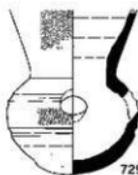
726



727



728



729



730



735



731



736



732



737



733



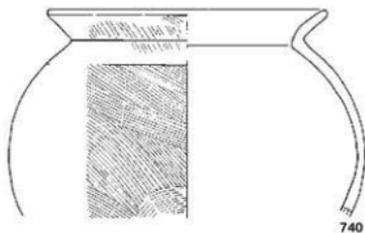
738



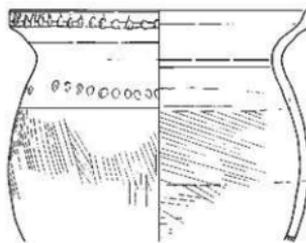
734



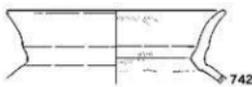
739



740

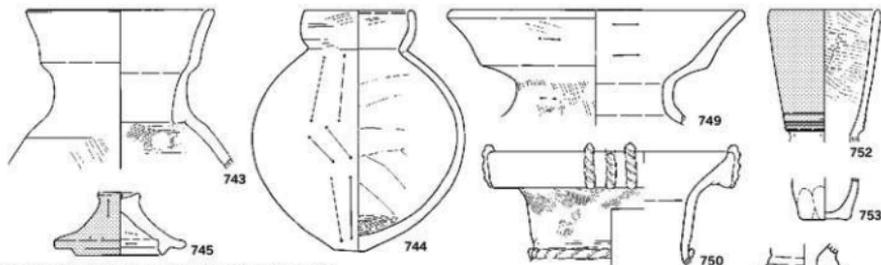


741

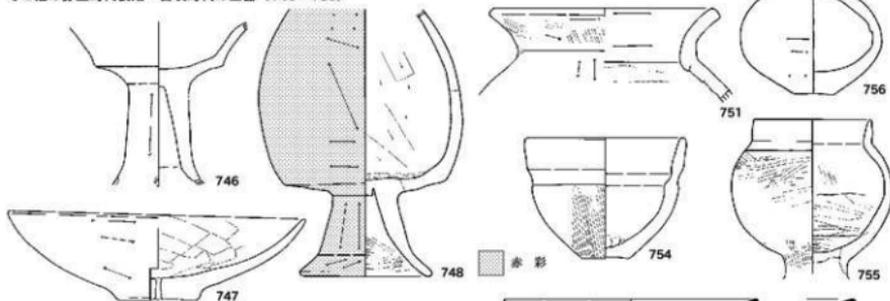


742

0 15cm (1:3)

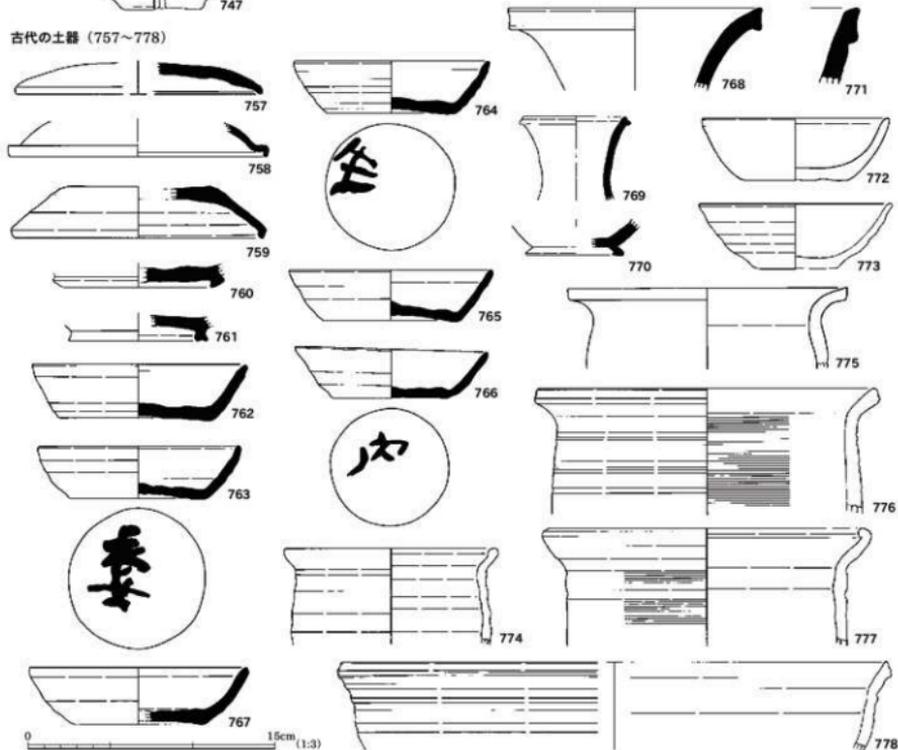


その他の弥生時代後期～古墳時代の土器 (746～756)

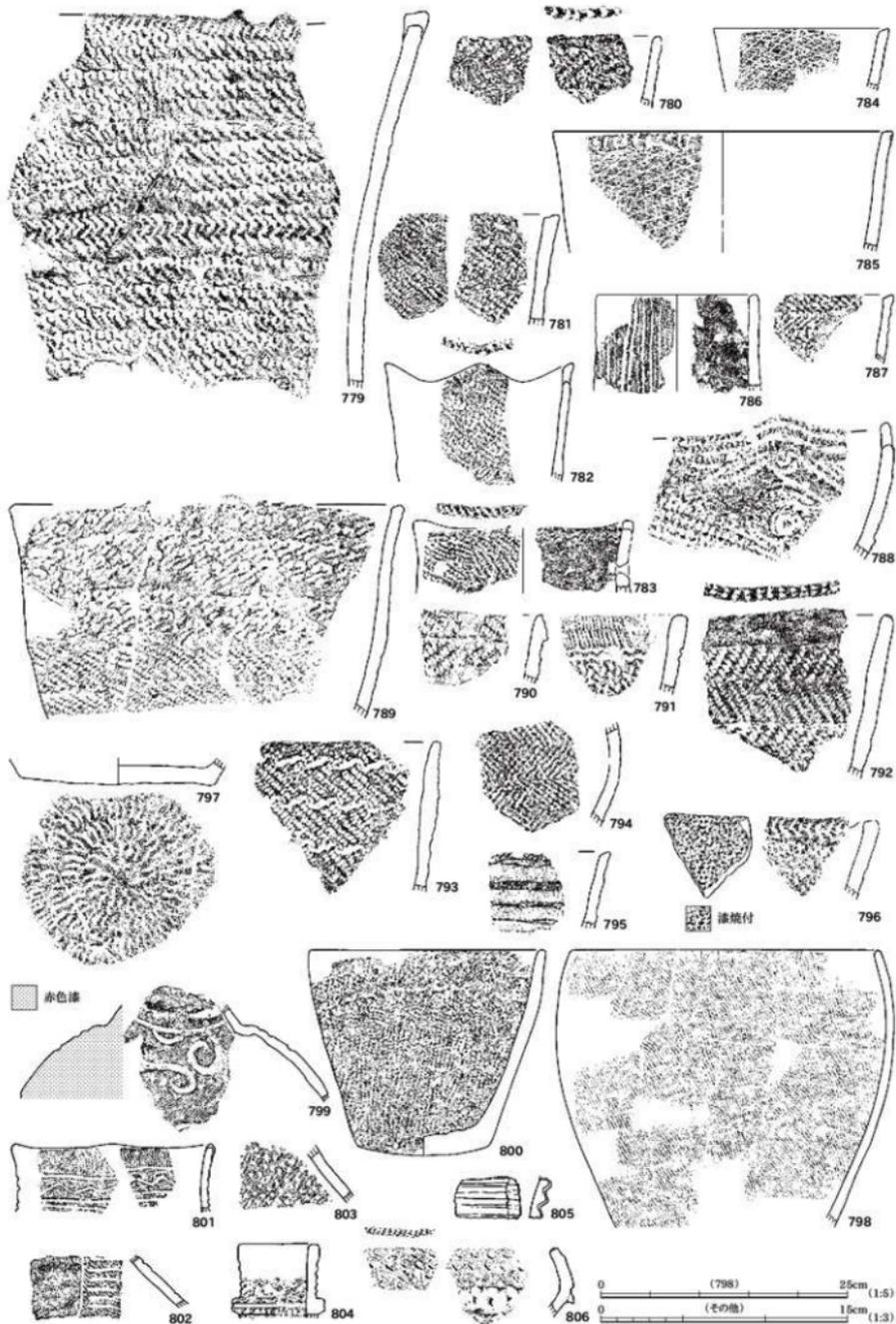


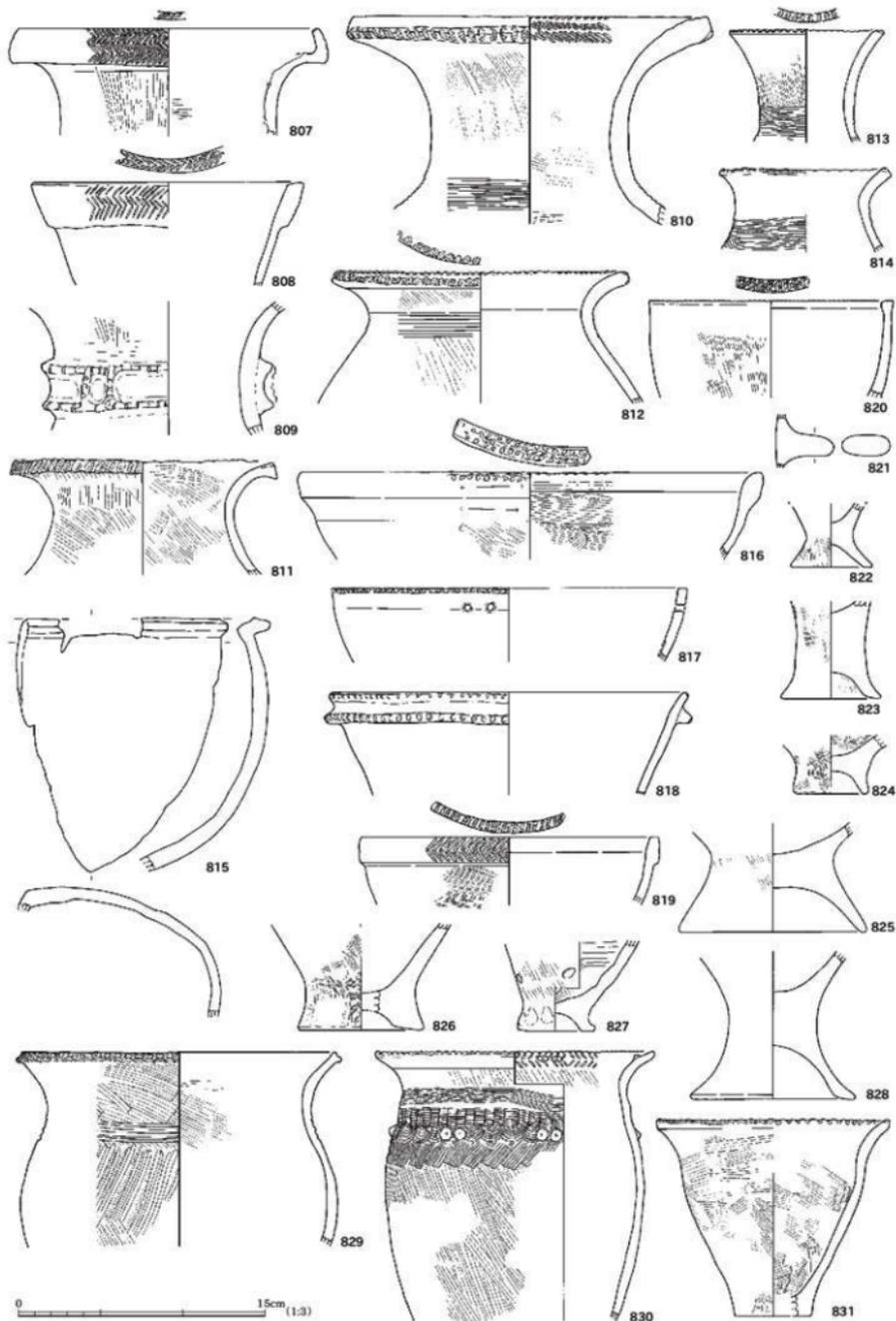
赤影

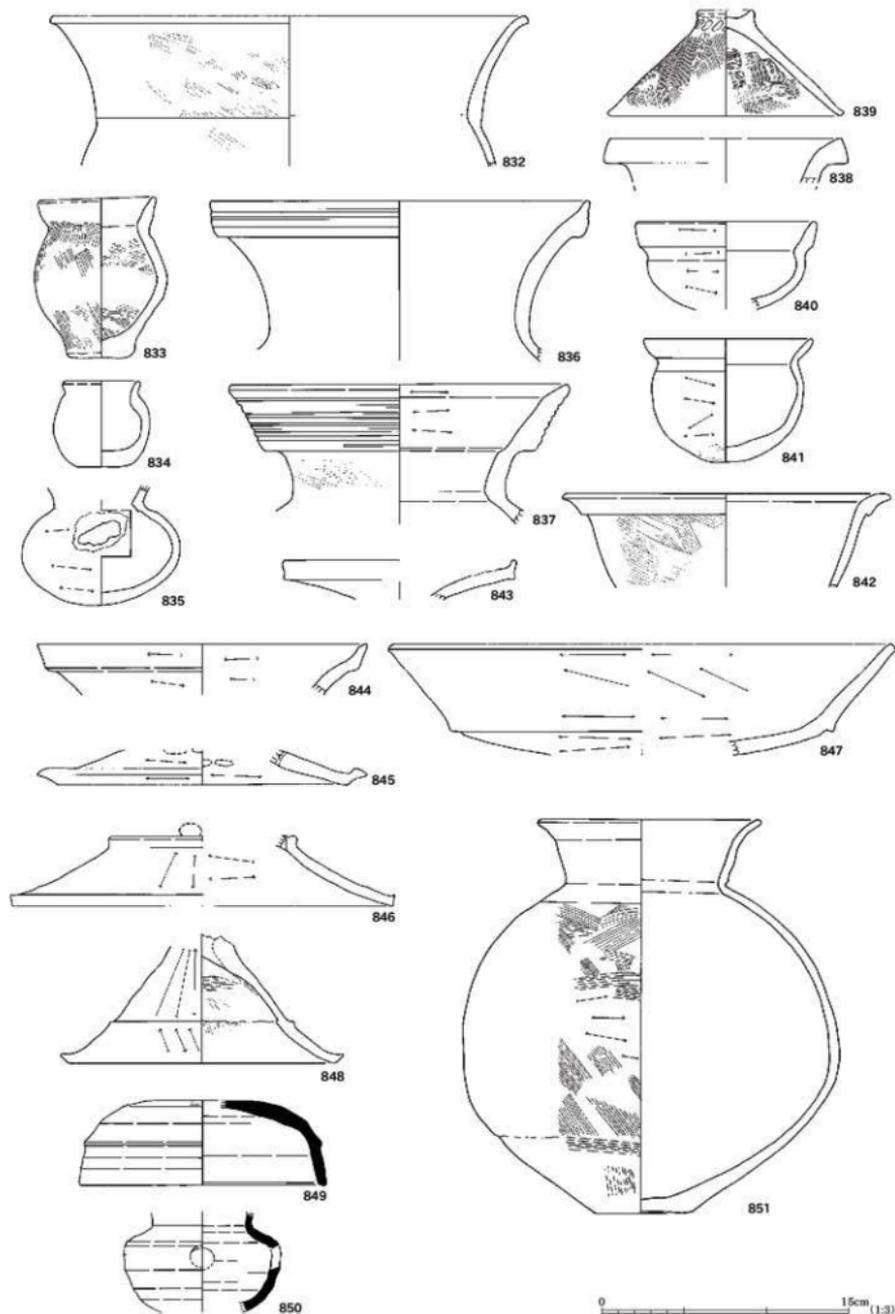
古代の土器 (757～778)



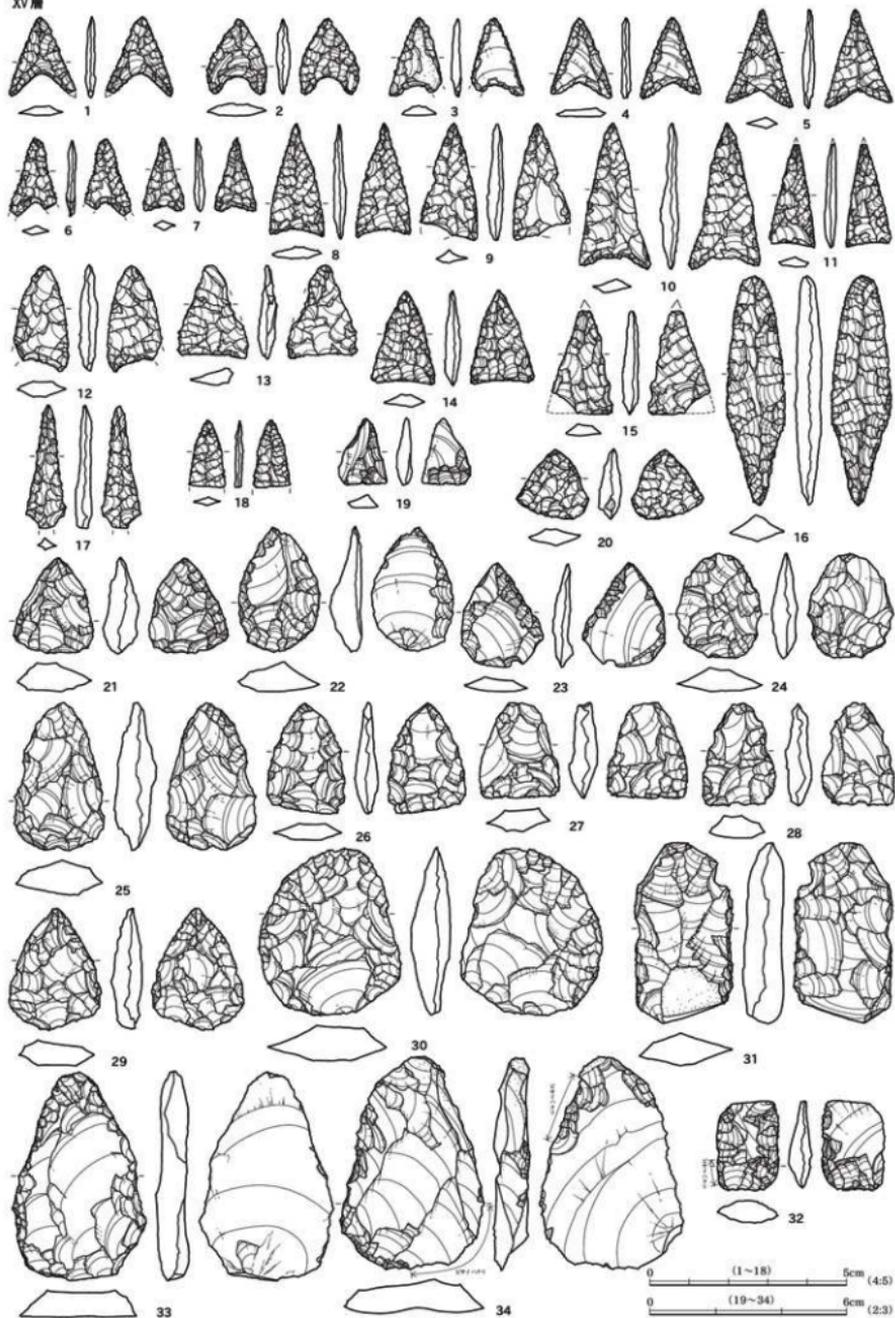
0 15cm (1:3)

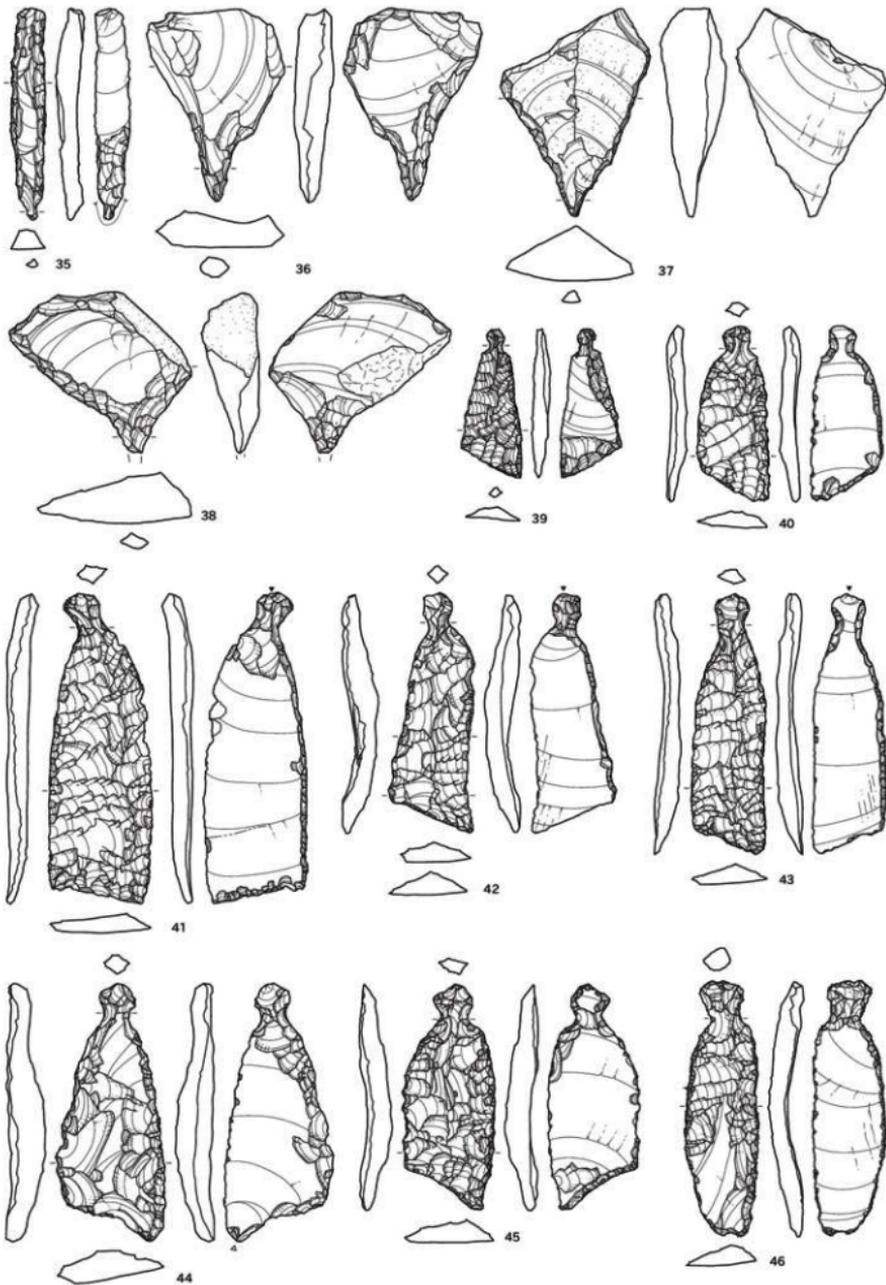


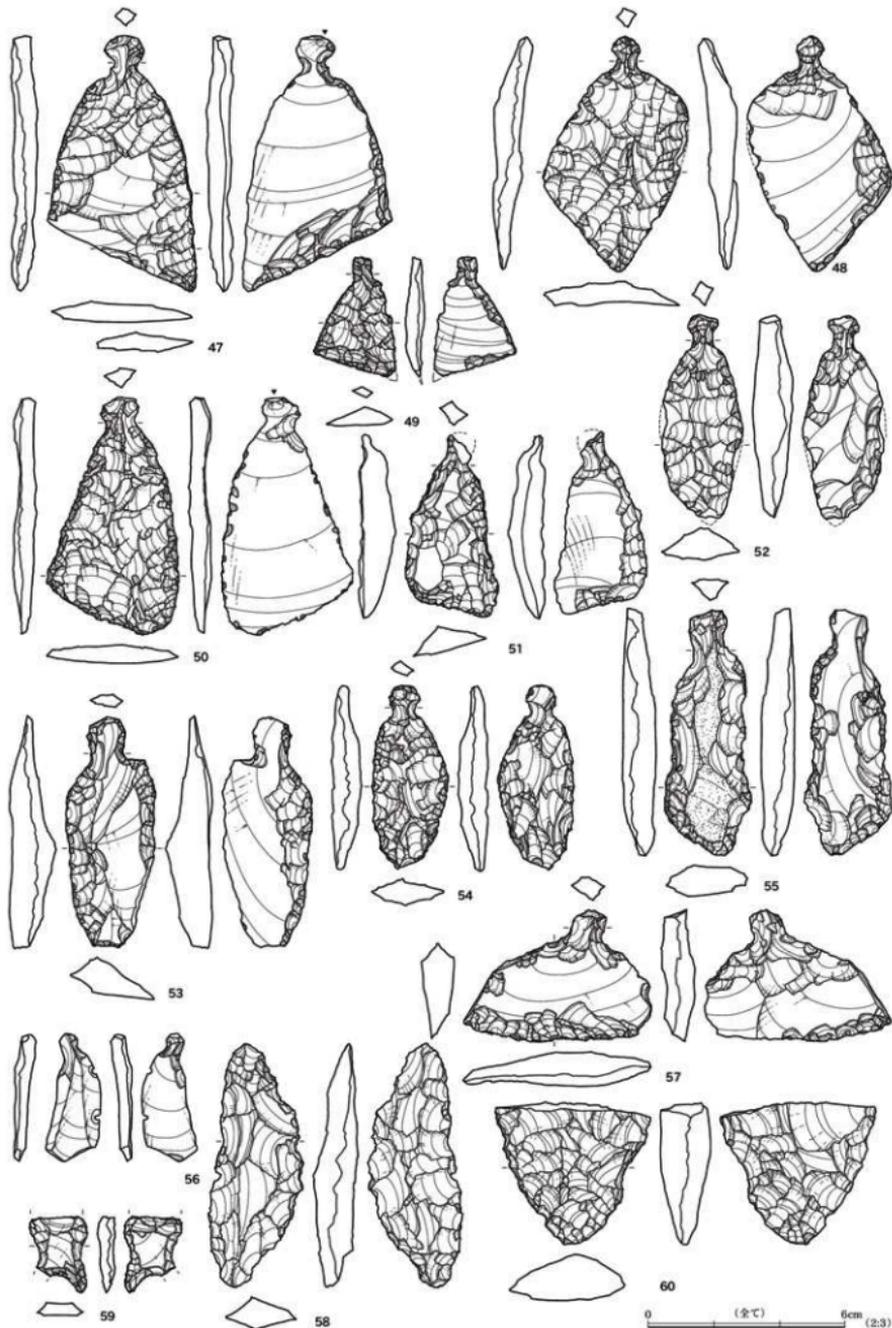


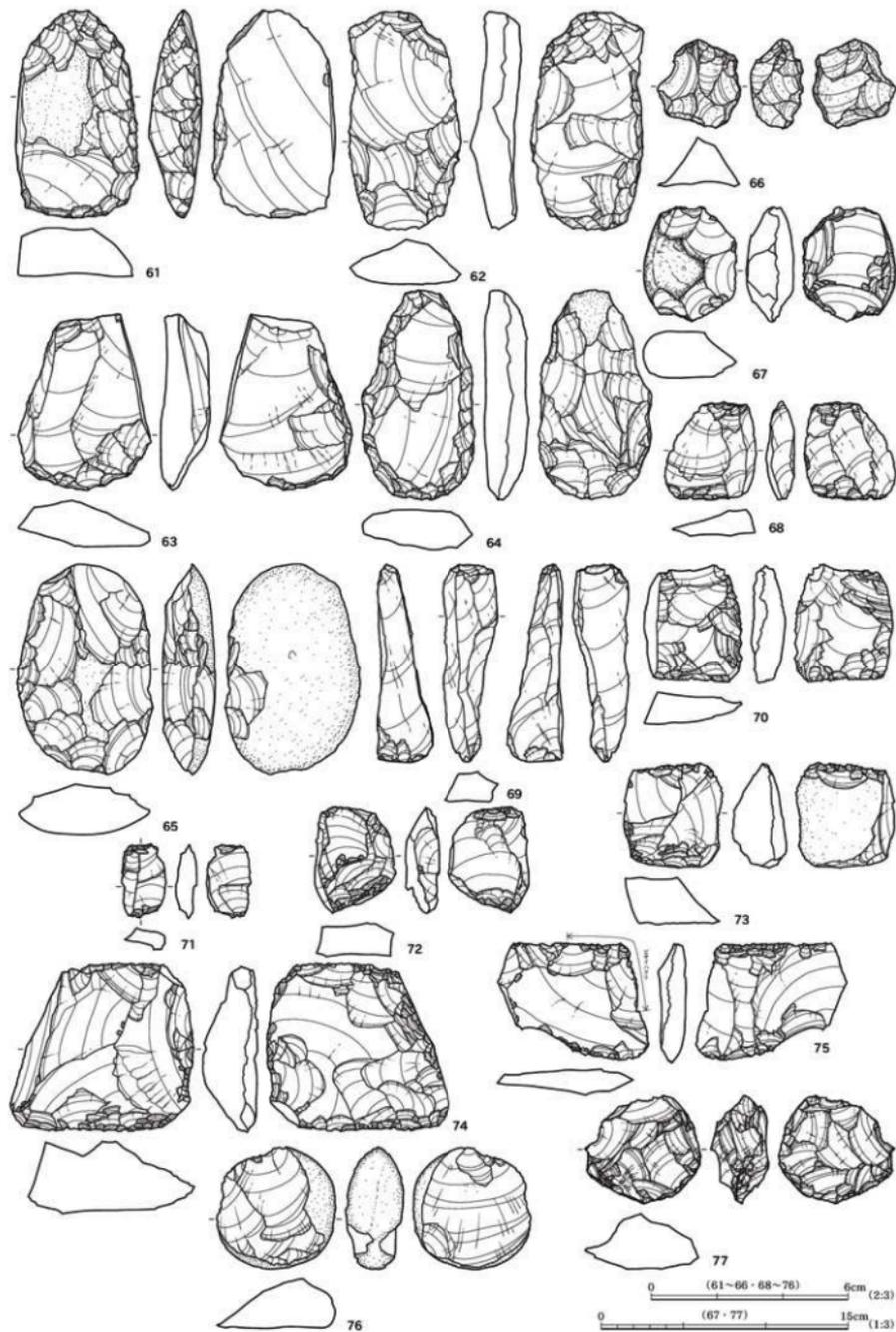


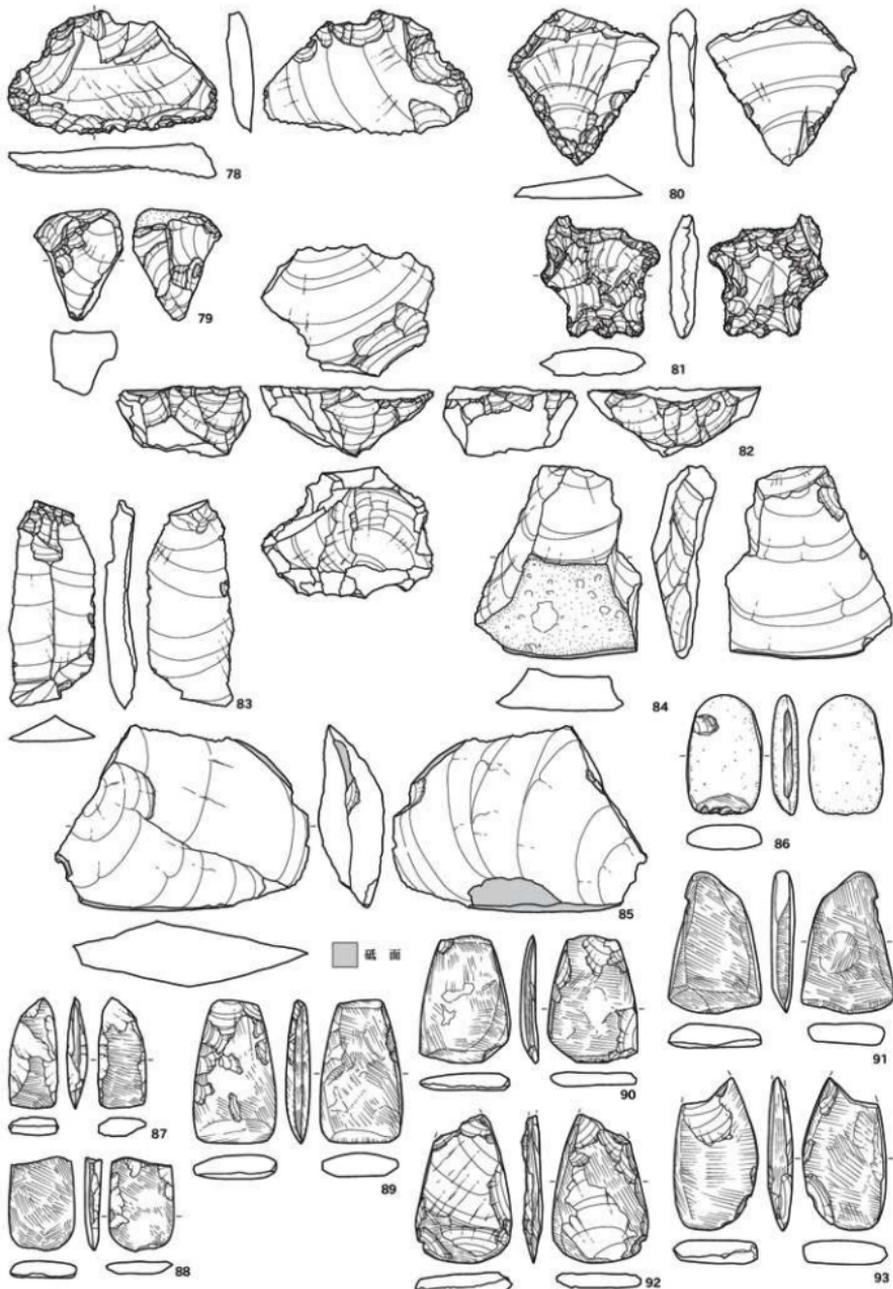
XV層

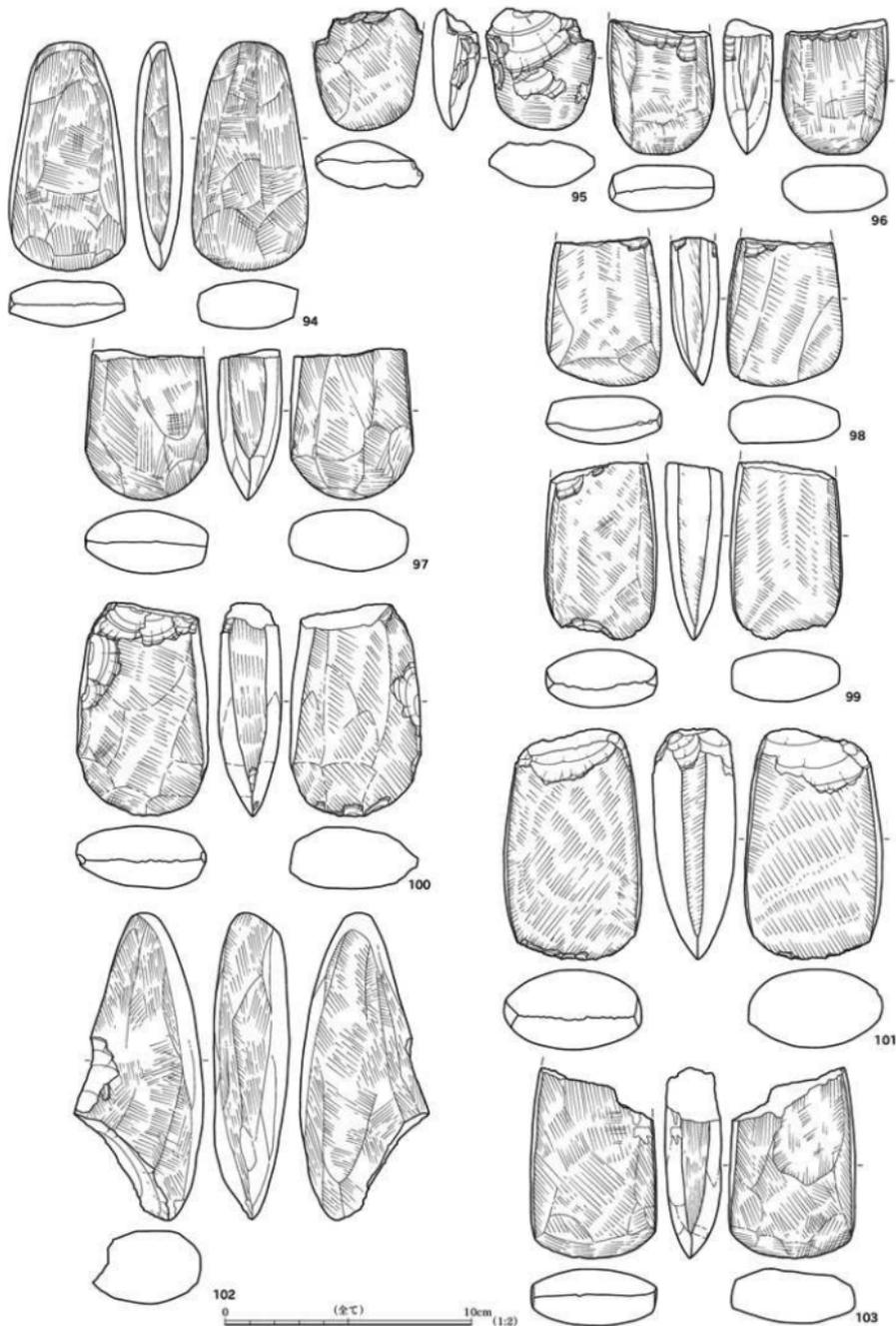


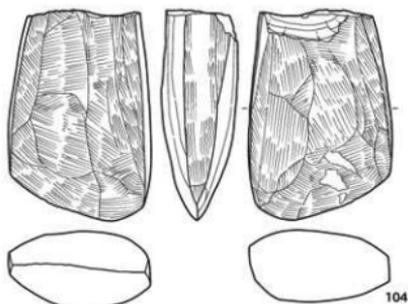




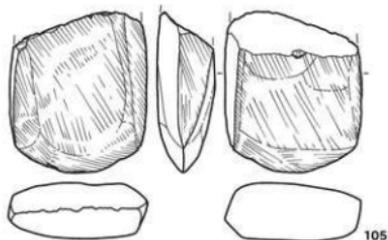




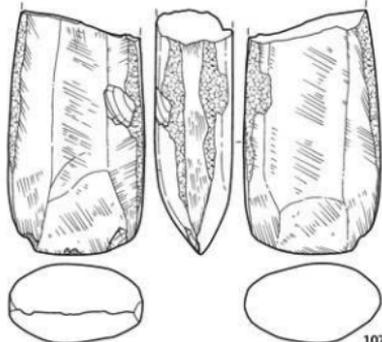




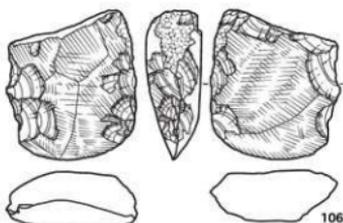
104



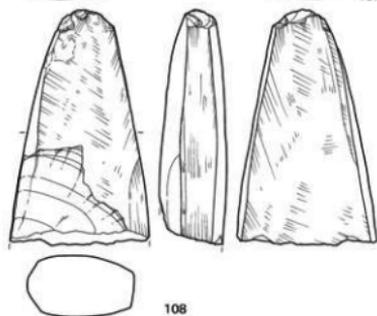
105



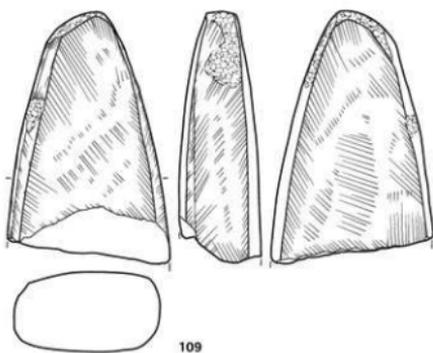
107



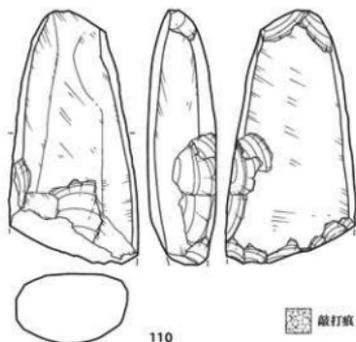
106



108

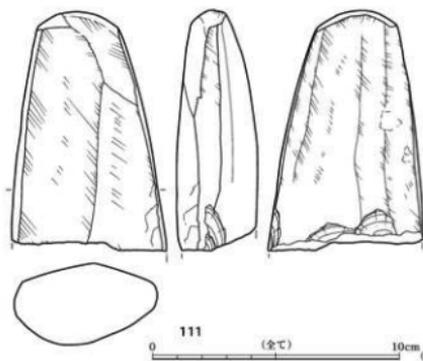


109



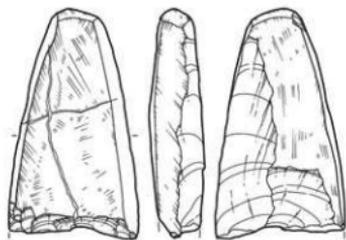
110

敲打痕

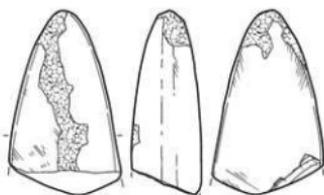


111

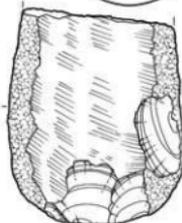
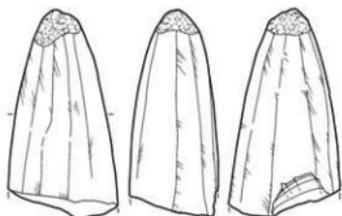
0 (全て) 10cm (1:2)



112



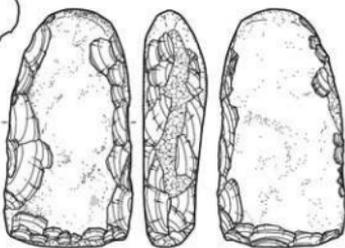
113



115



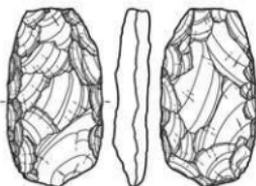
114



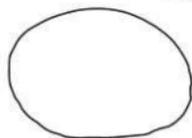
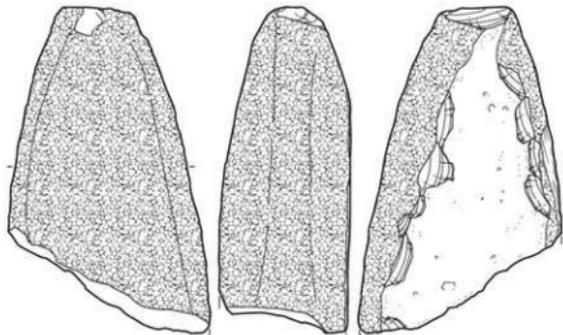
117



116



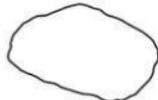
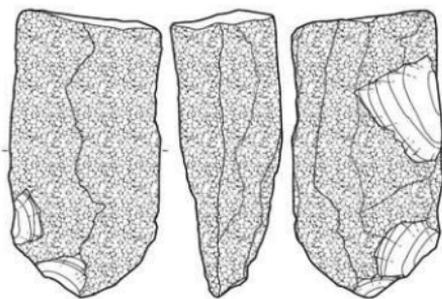
118



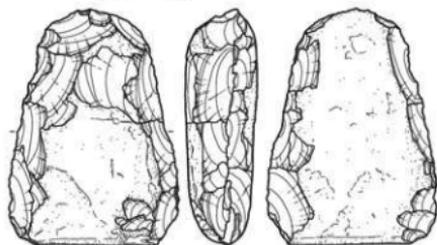
119

磨痕 敲打痕

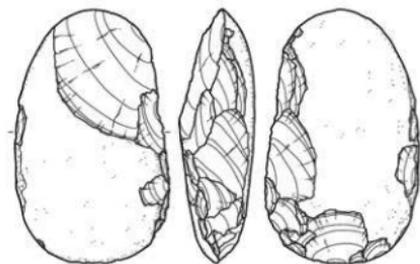
0 (全て) 10cm (1:2)



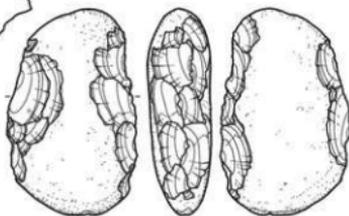
120



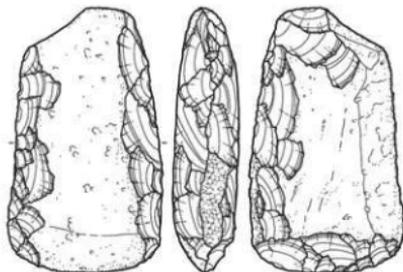
122



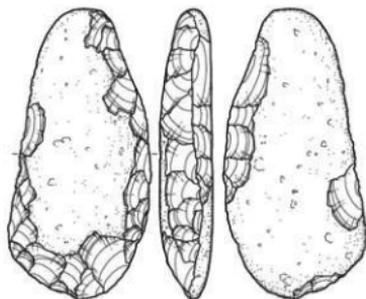
124



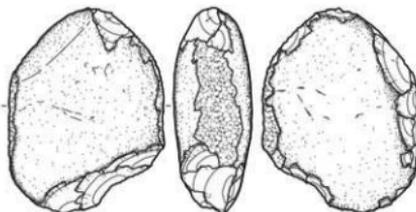
126



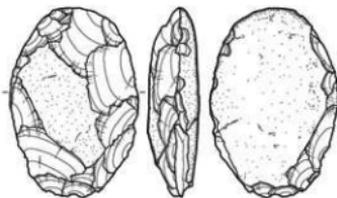
121



123



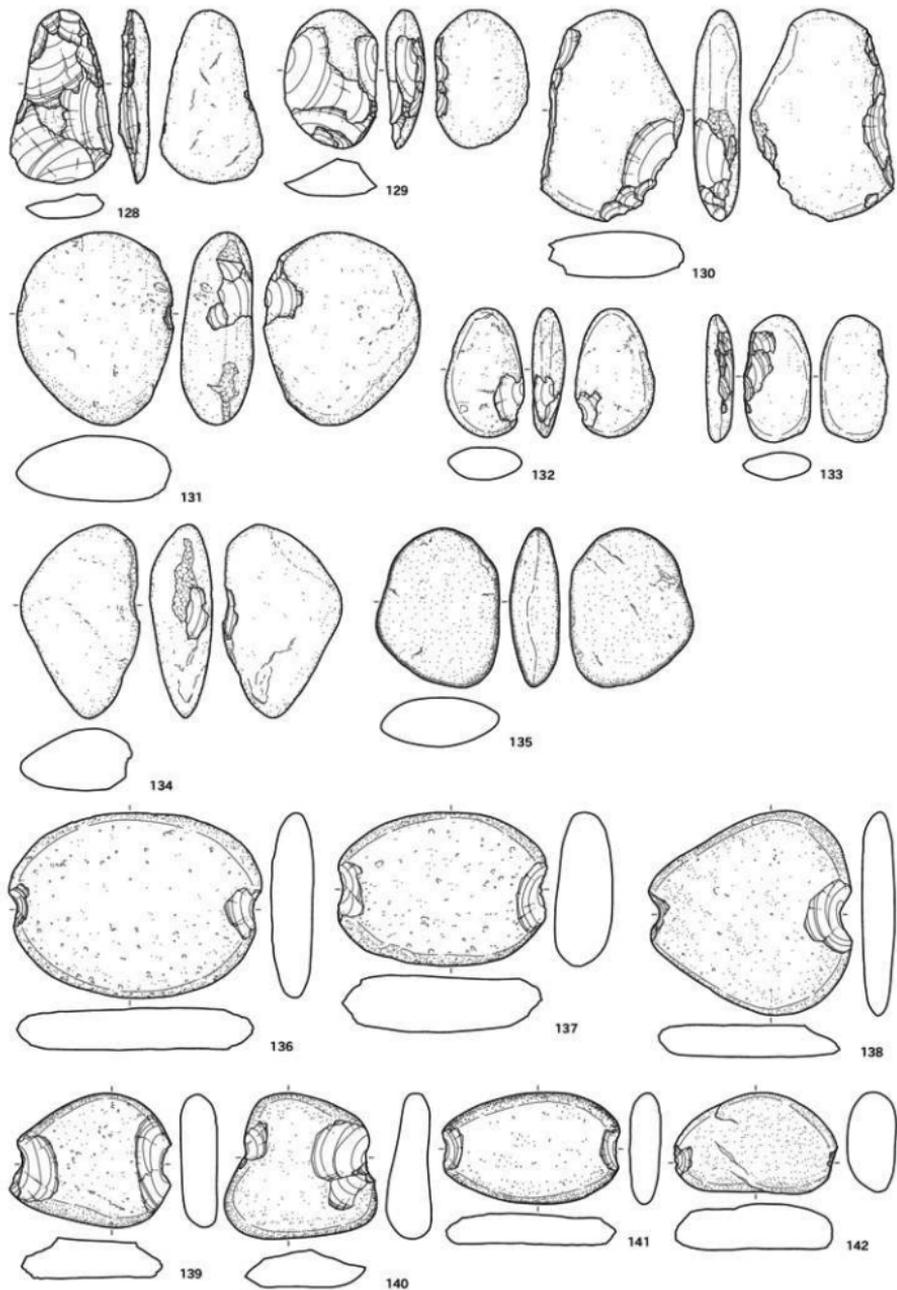
125



127

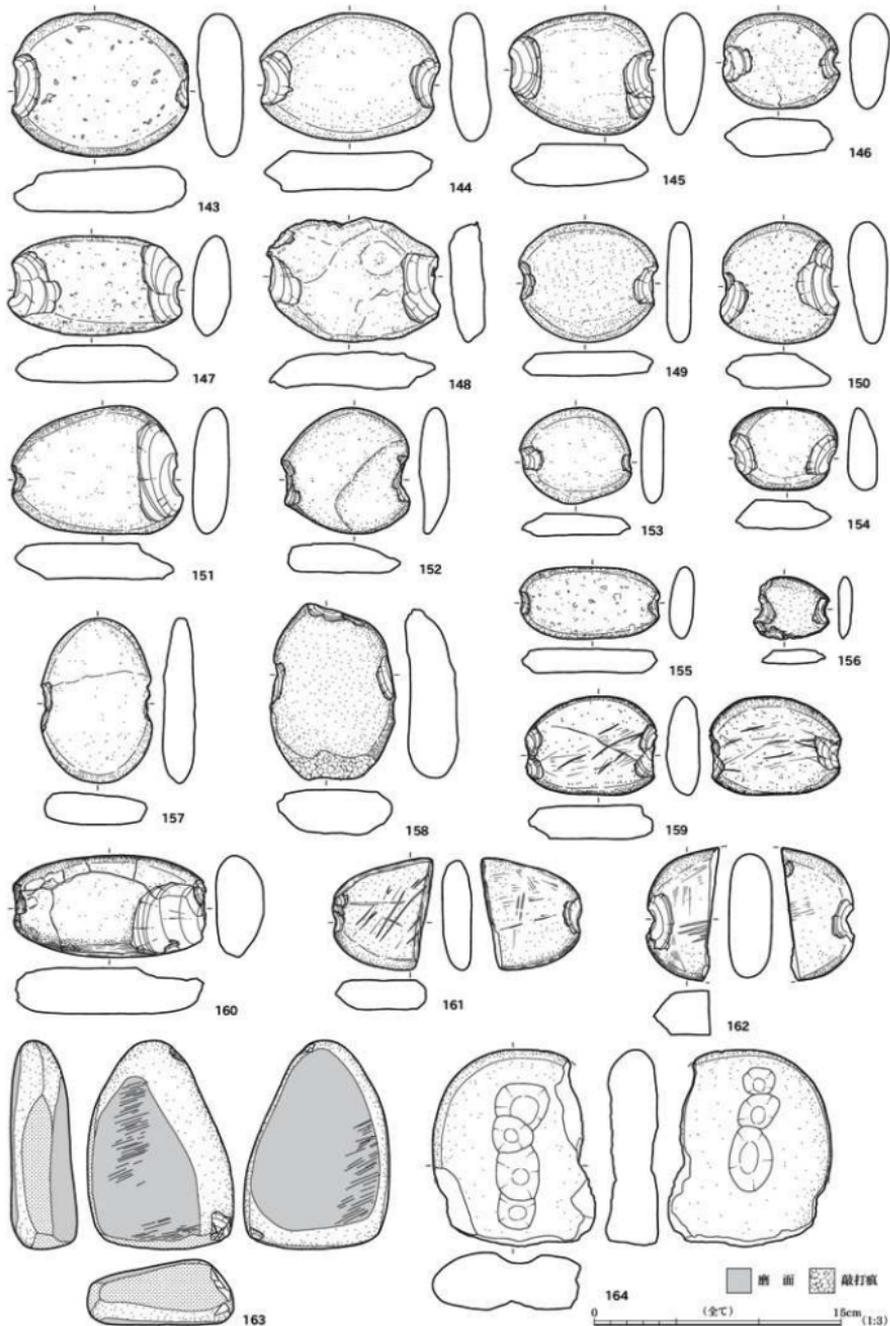
■ 敲打痕

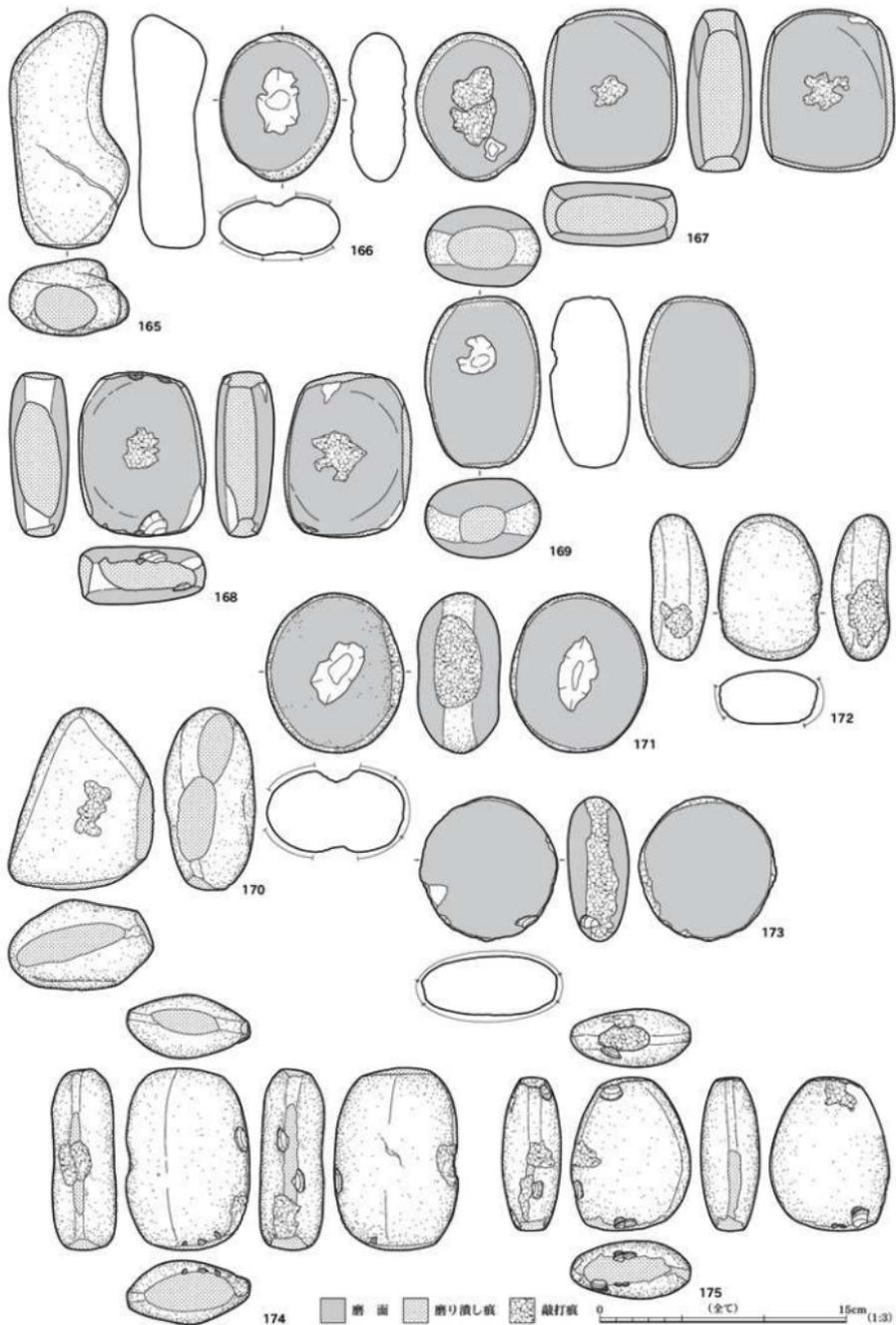
0 (全て) 10cm (1:2)

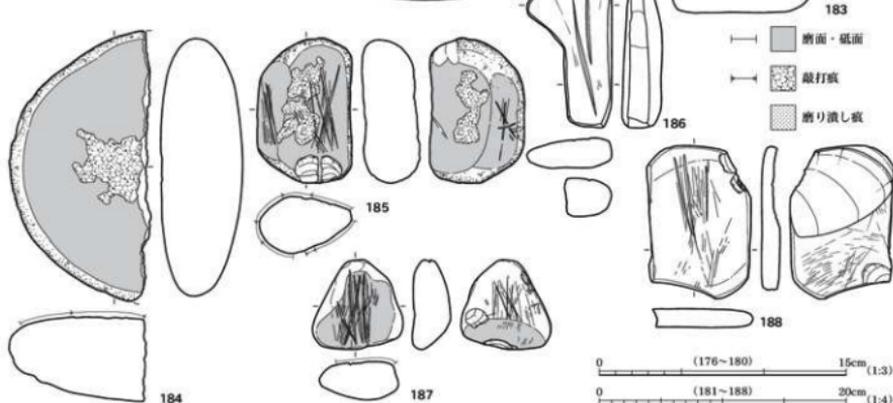
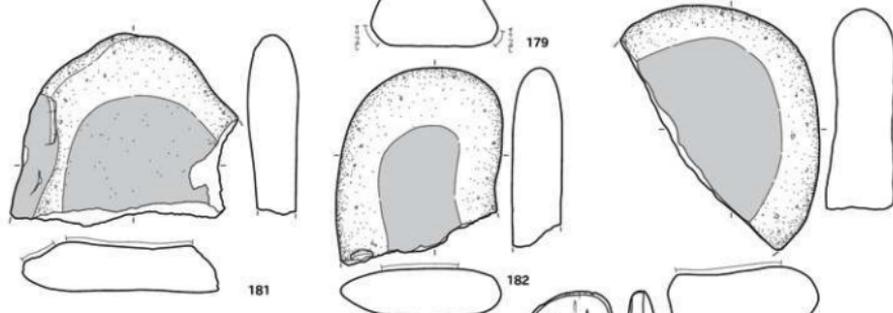
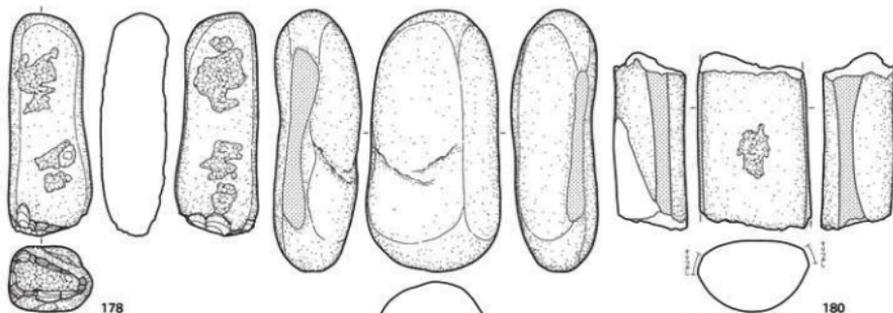
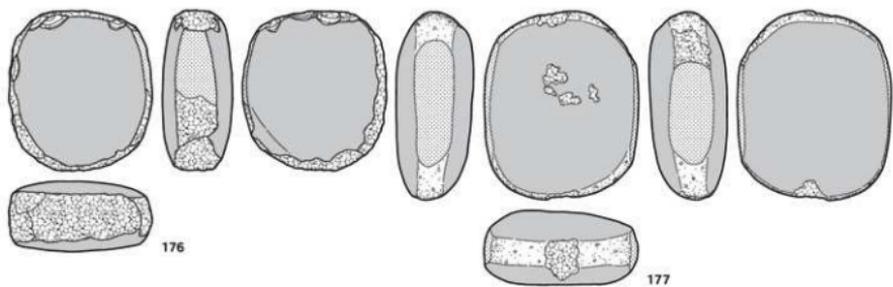


■ 敲打痕

0 (128~135) 10cm (1:2) 0 (136~142) 15cm (1:3)

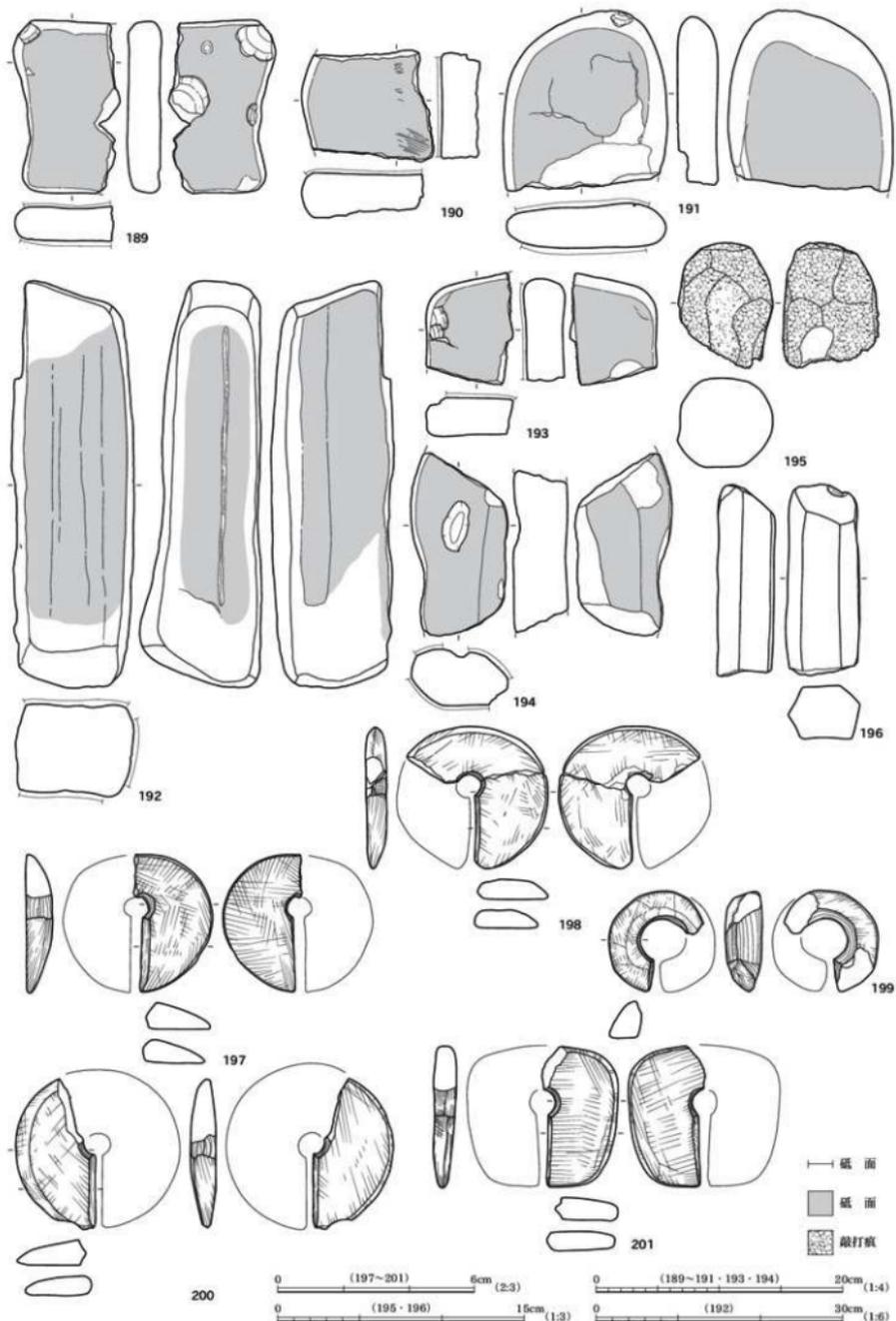


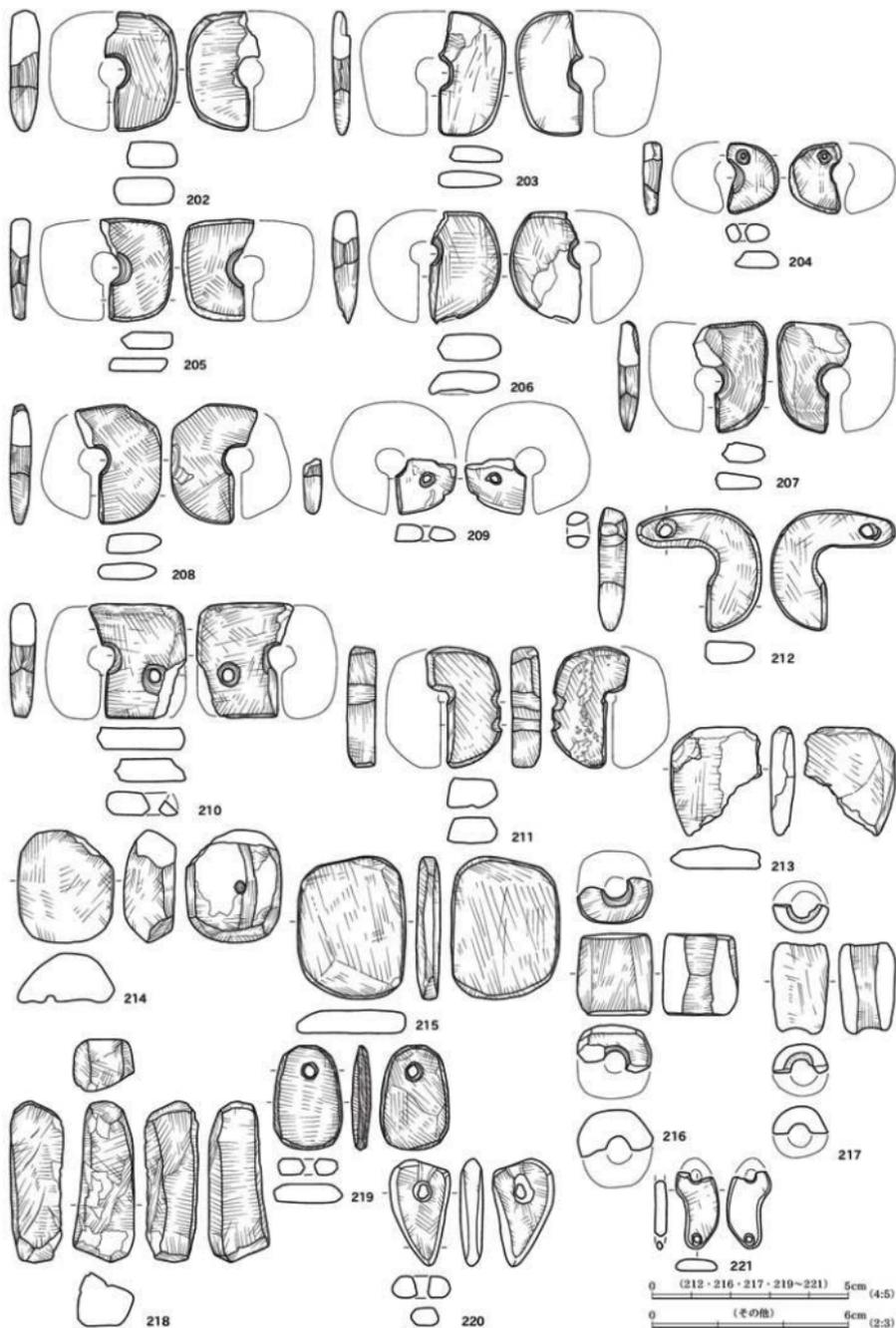


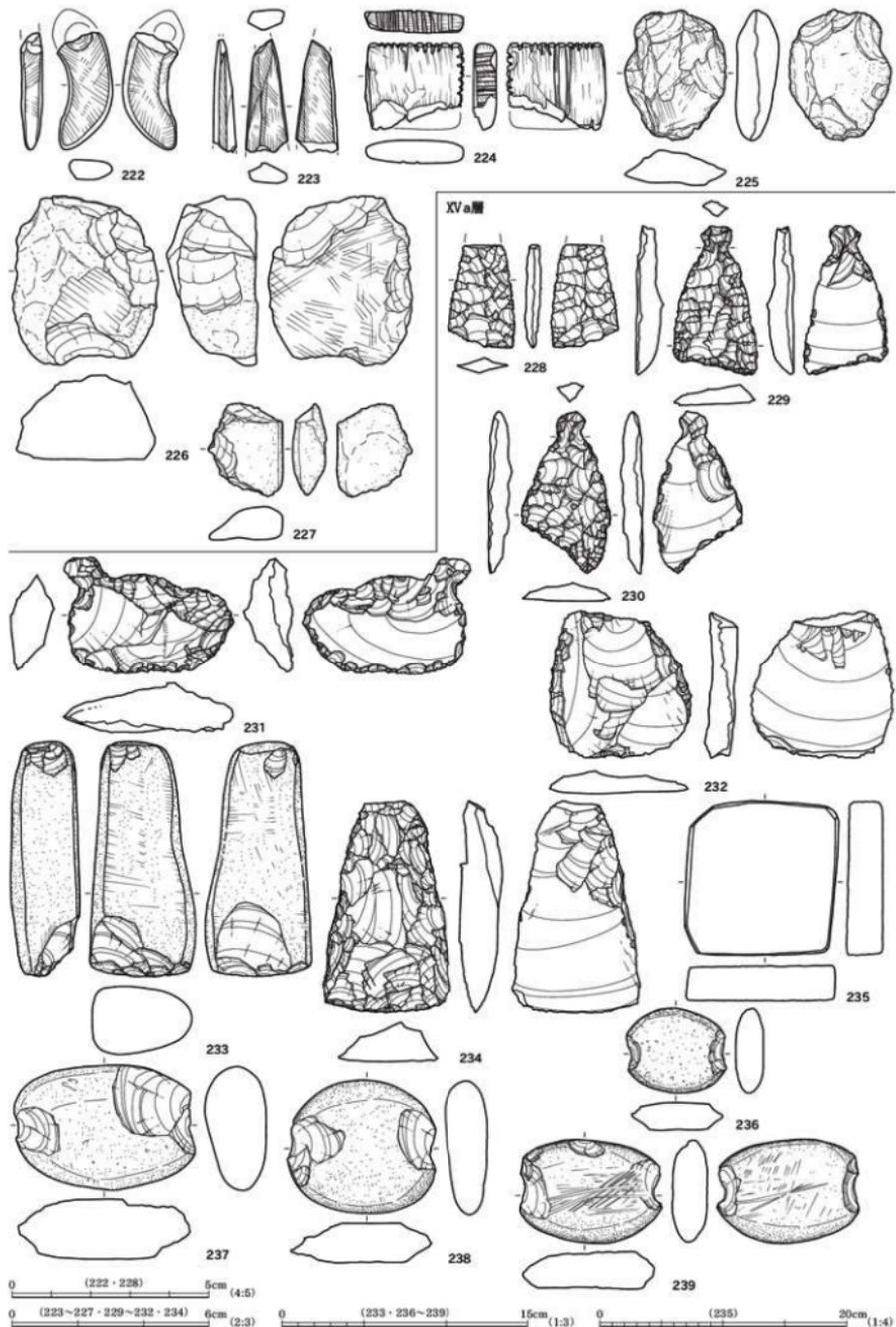


磨面・砥面
 敲打痕
 磨り潰し痕

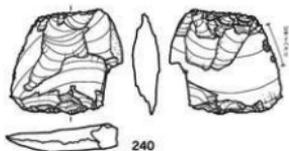
0 (176~180) 15cm (1:3)
 0 (181~188) 20cm (1:4)



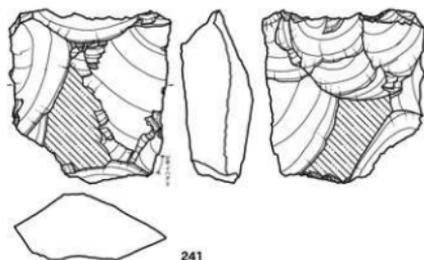




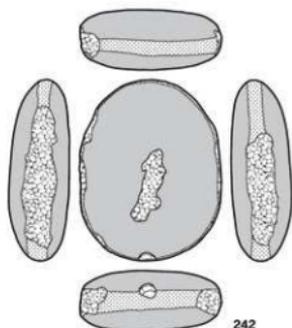
XIV層



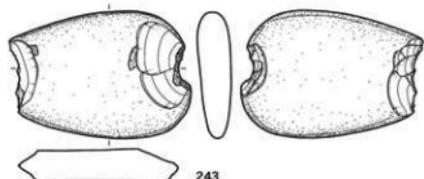
240



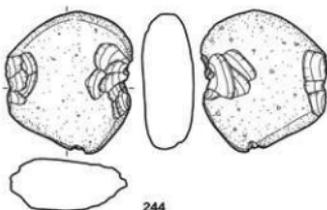
241



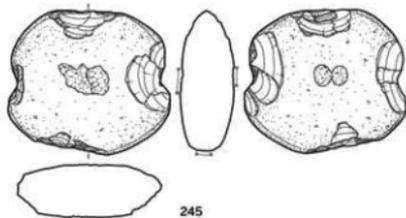
242



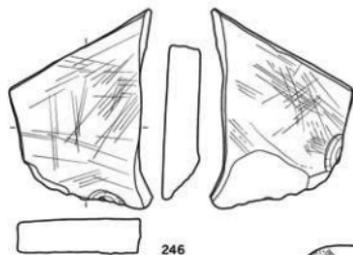
243



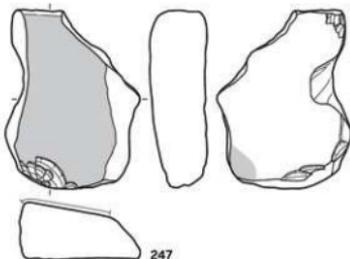
244



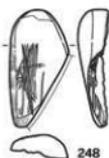
245



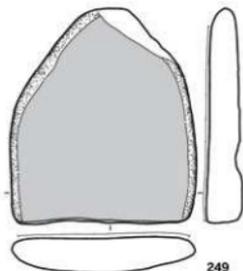
246



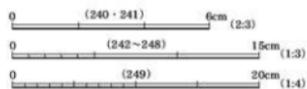
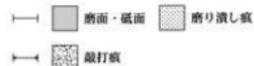
247



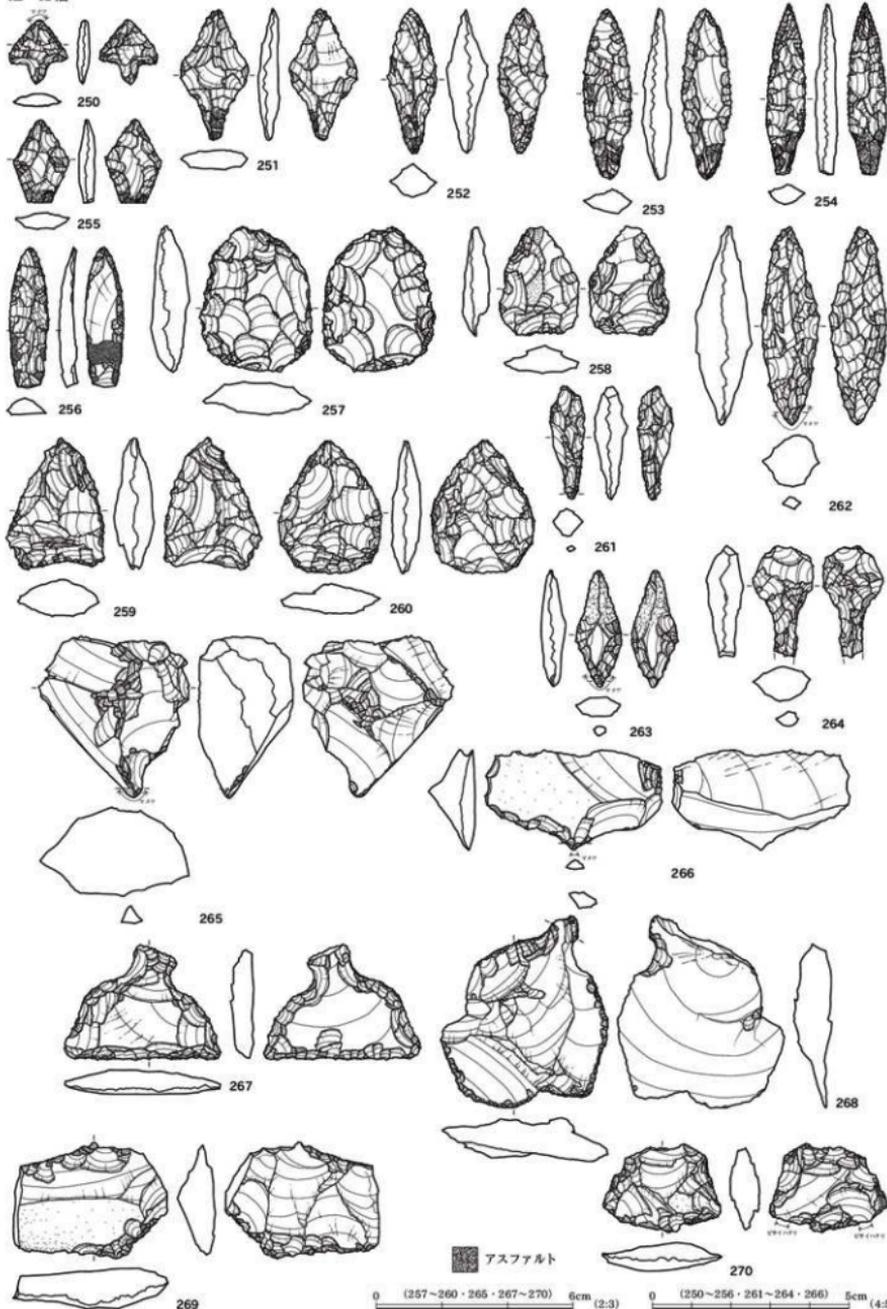
248



249

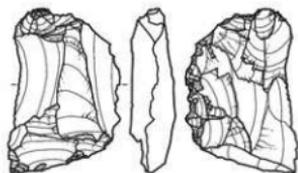


XI~X層

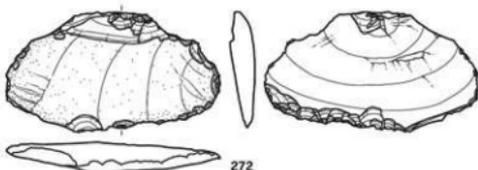


アスファルト

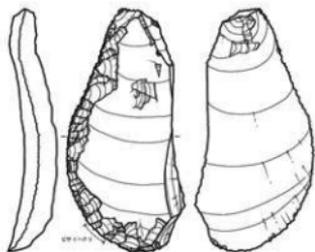
0 (257~260・265・267~270) 6cm (2:3) 0 (250~256・261~264・266) 5cm (4:5)



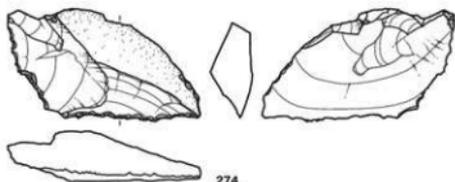
271



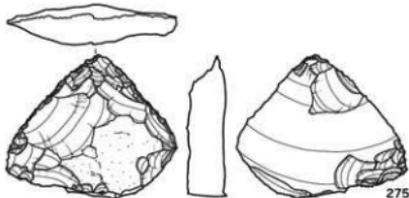
272



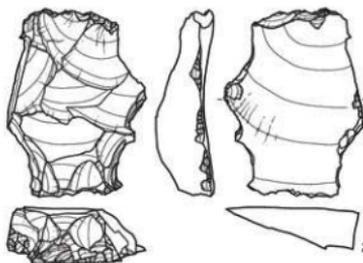
273



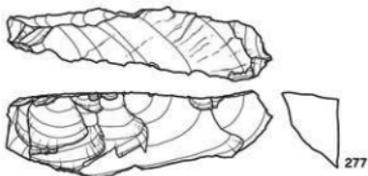
274



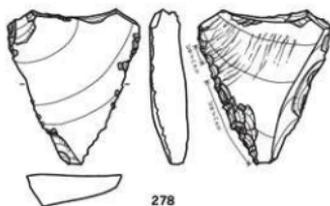
275



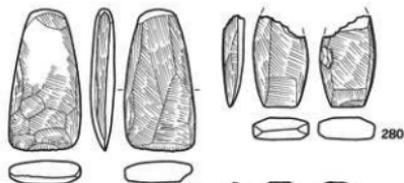
276



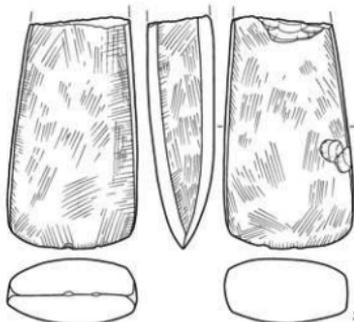
277



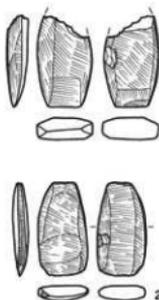
278



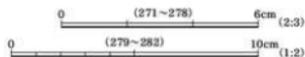
279

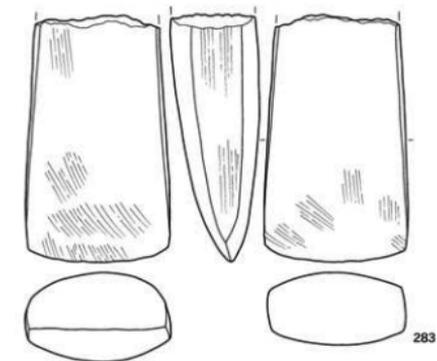


282

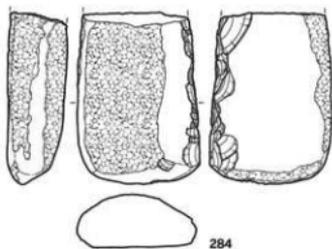


281

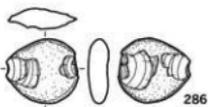




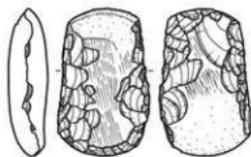
283



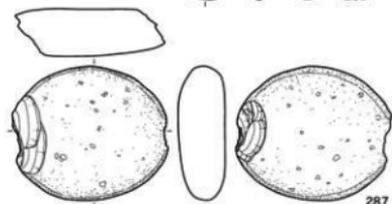
284



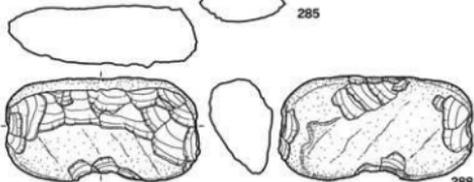
286



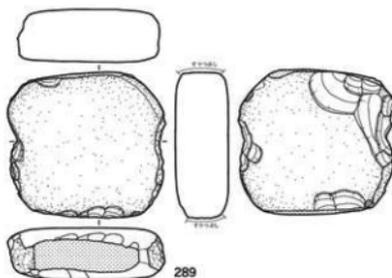
285



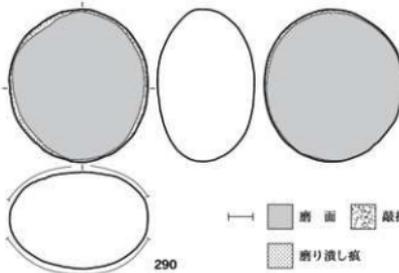
287



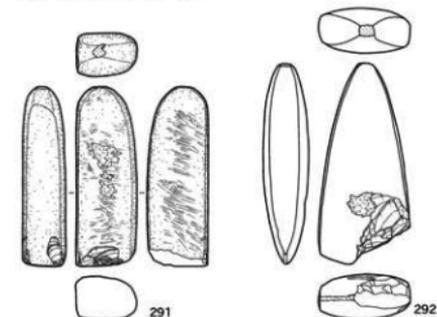
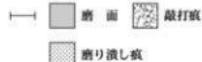
288



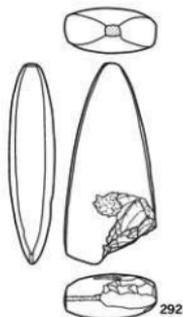
289



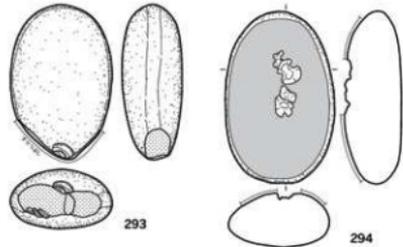
290



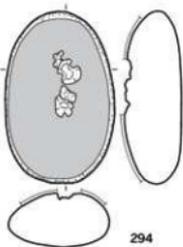
291



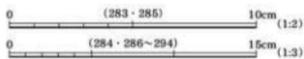
292

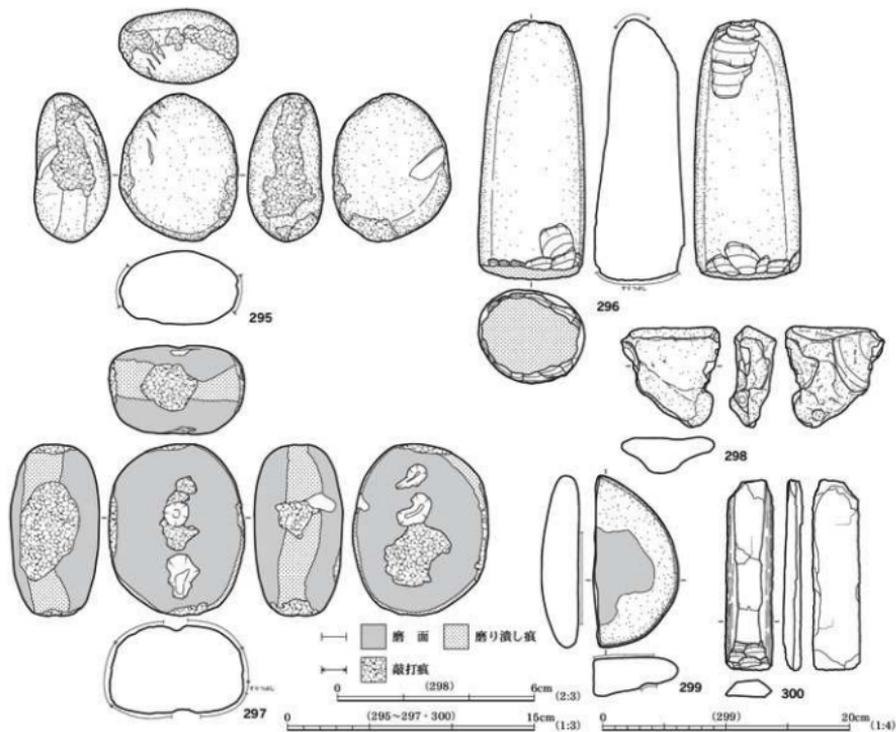


293

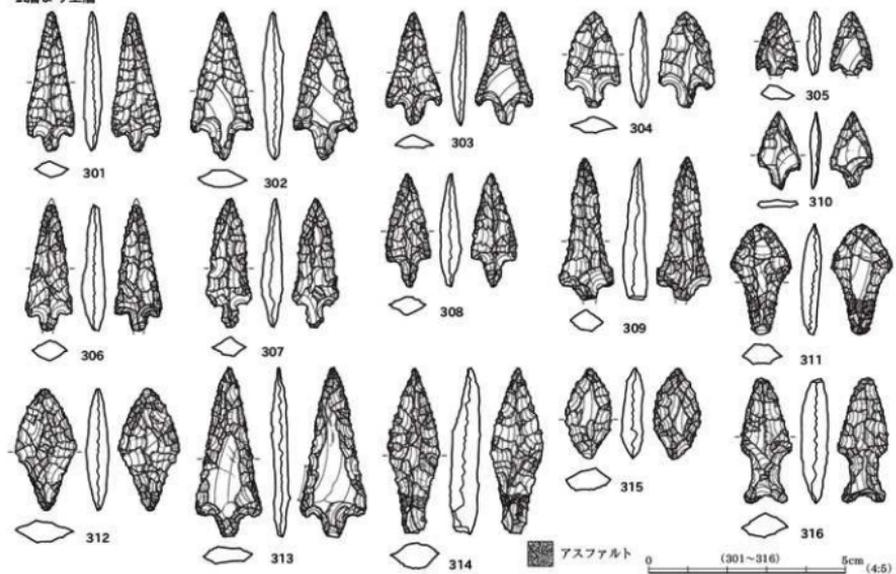


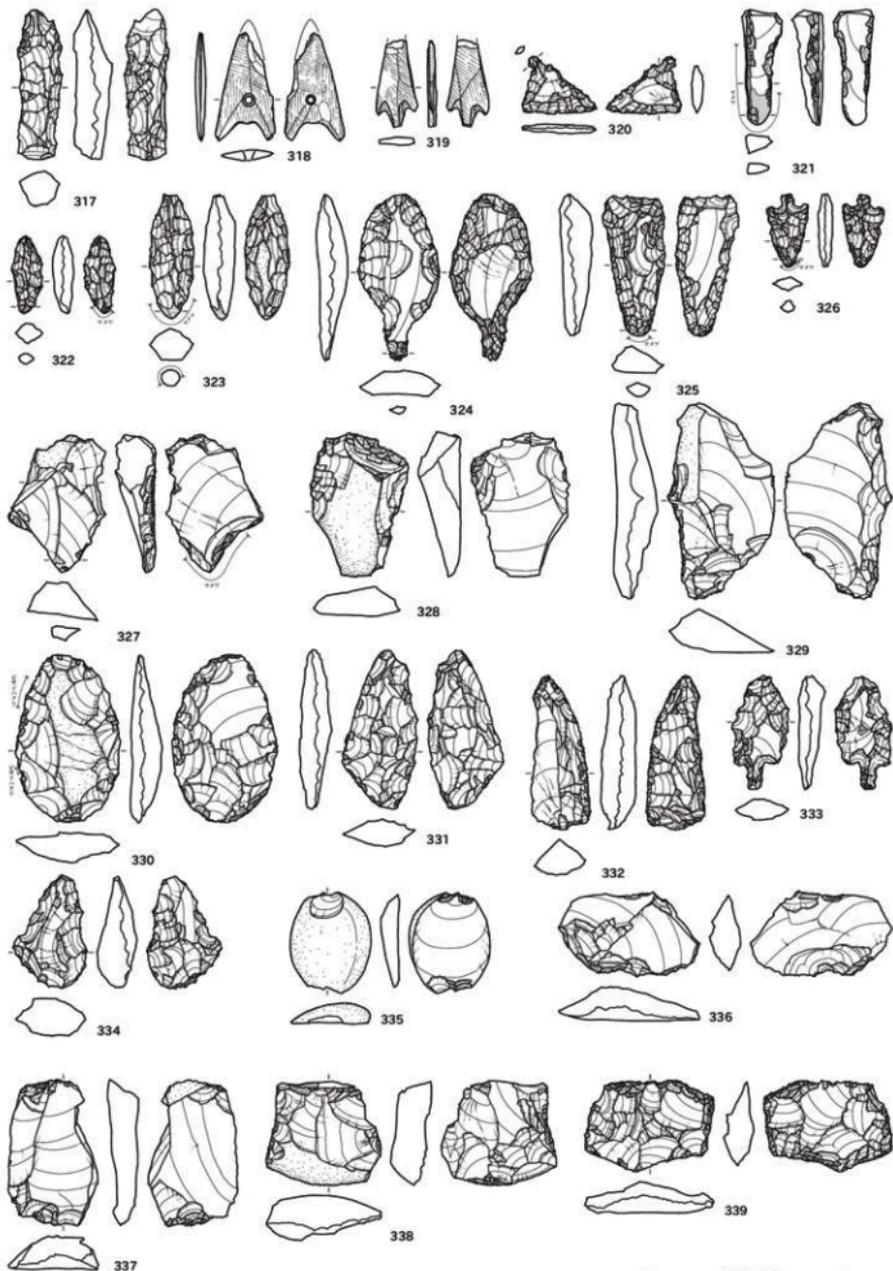
294





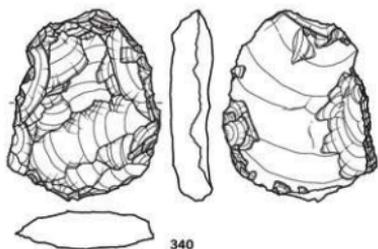
IX層より上層



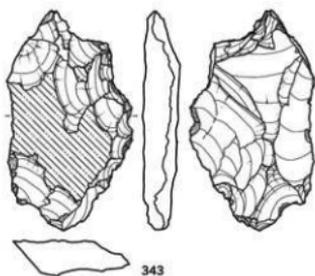


■ 使用痕

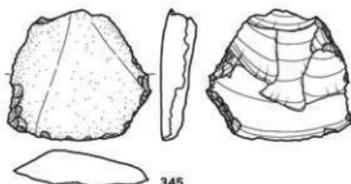
0 (317~327) 5cm (4:5)
0 (328~339) 6cm (2:3)



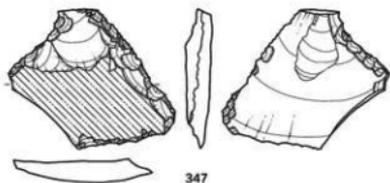
340



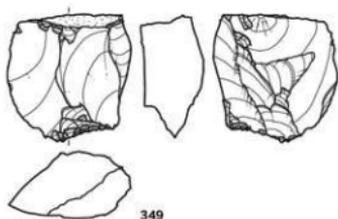
343



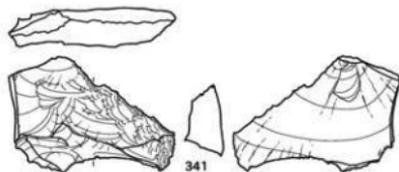
345



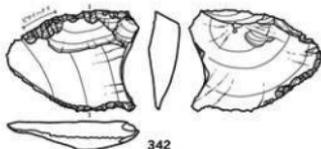
347



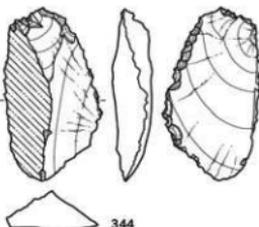
349



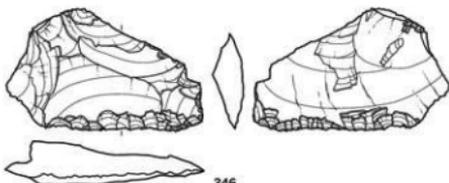
341



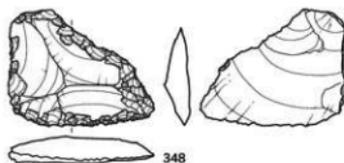
342



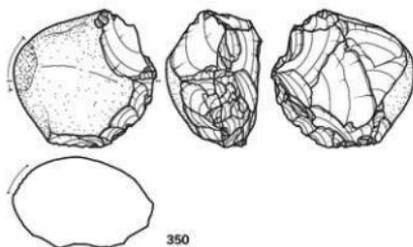
344



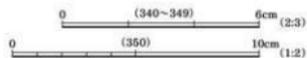
346

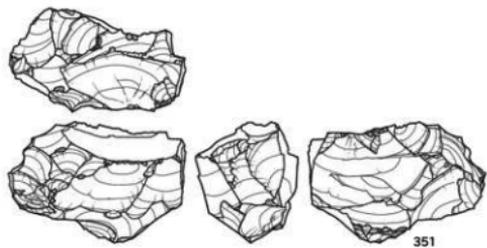


348

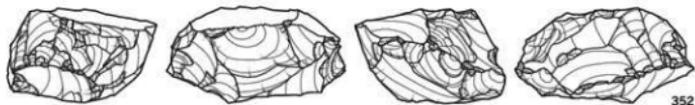
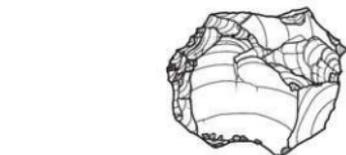


350

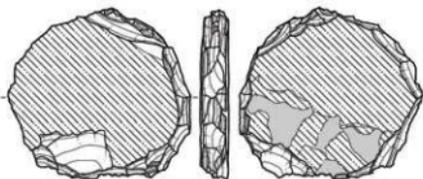




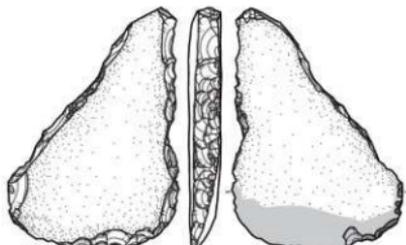
351



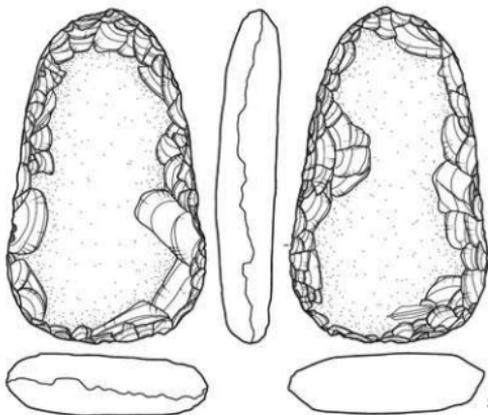
352



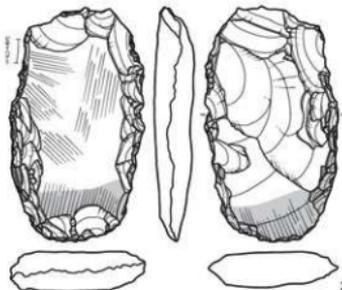
353



354

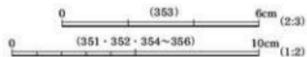


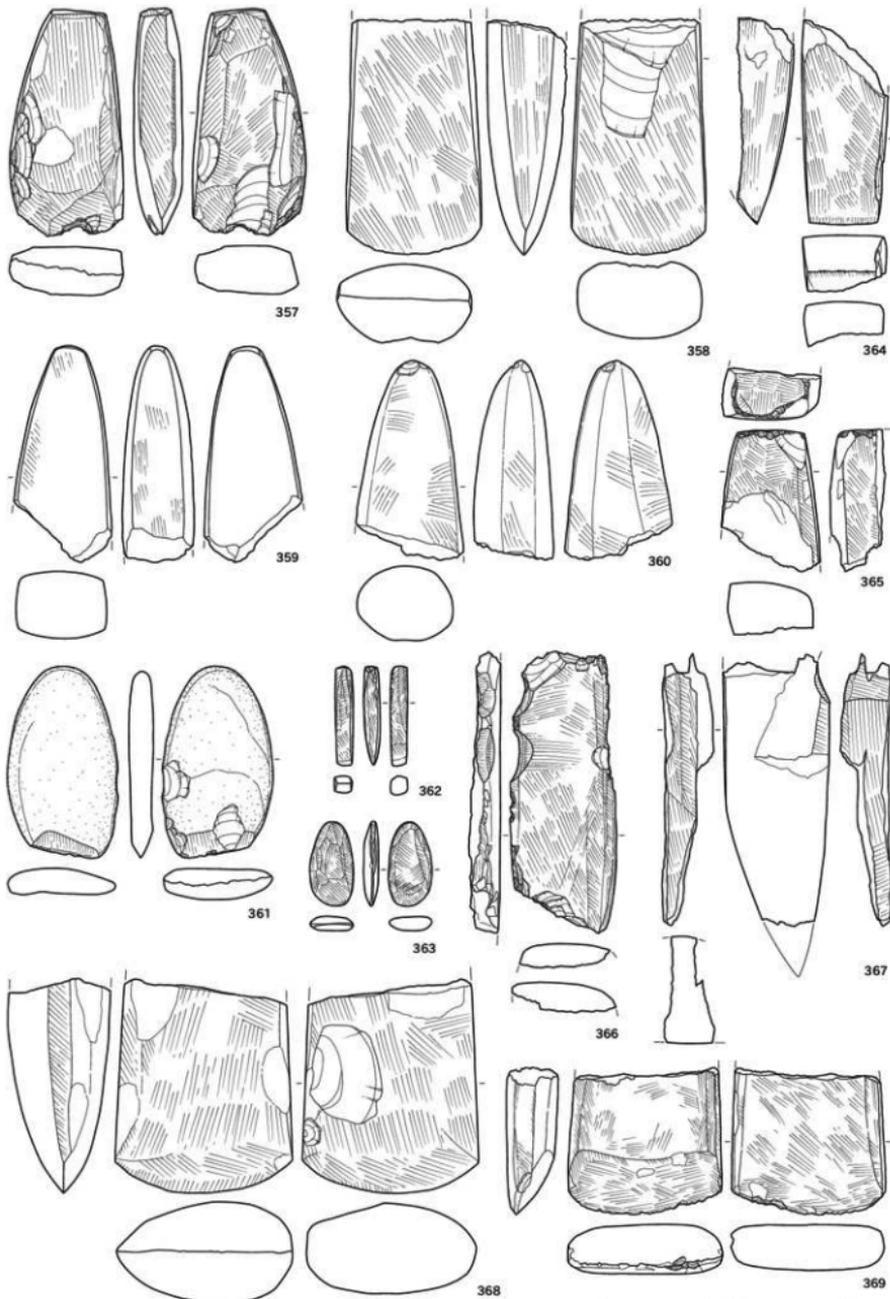
355

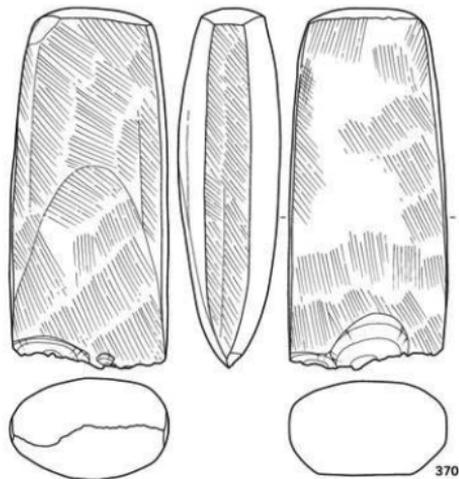


356

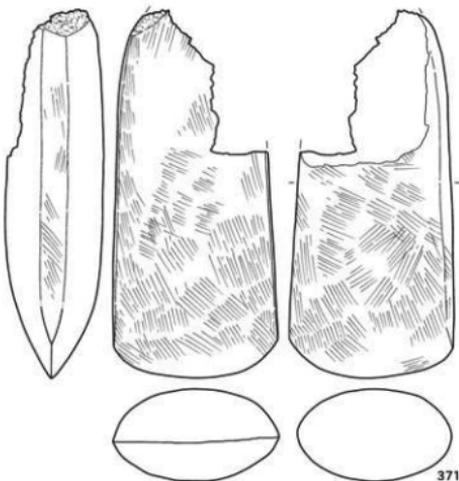
■ 磨痕・使用痕



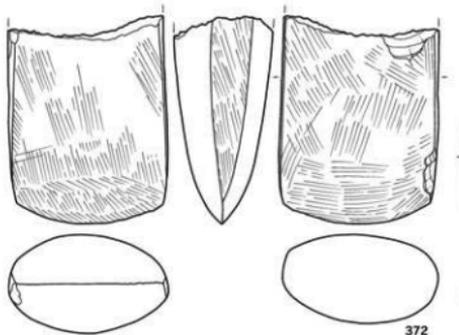




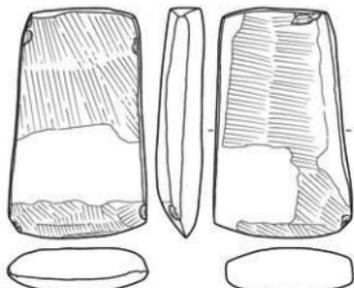
370



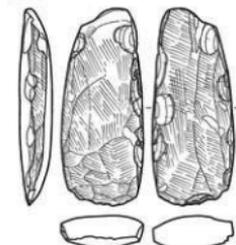
371



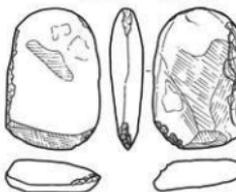
372



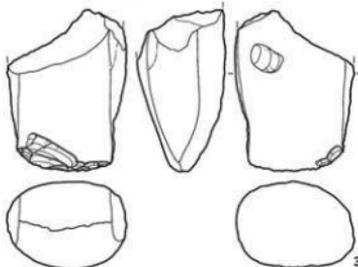
373



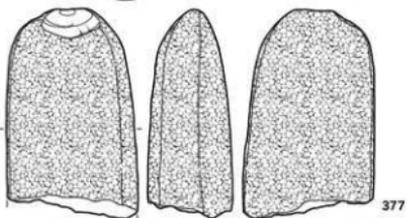
374



375

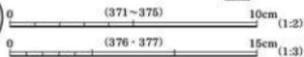


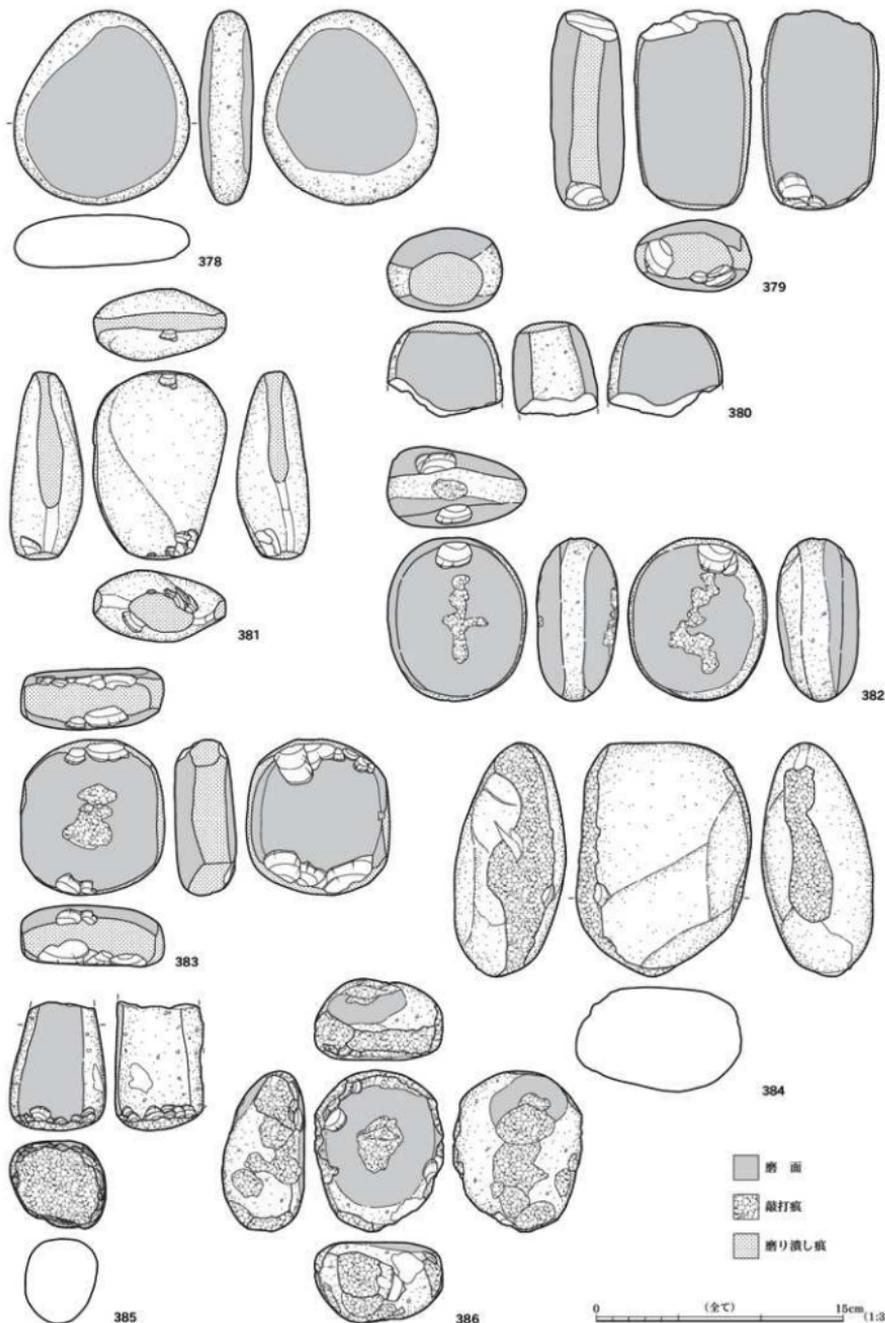
376

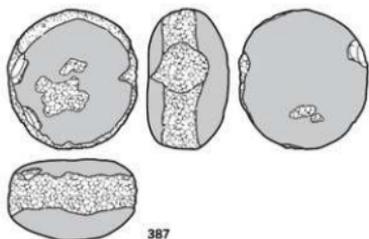


377

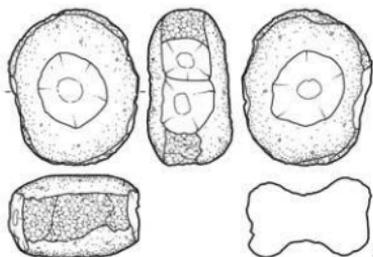
銀打痕



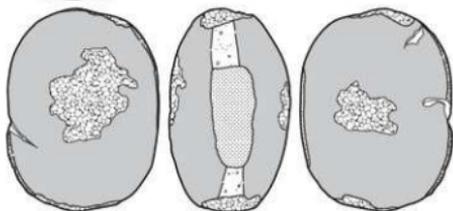
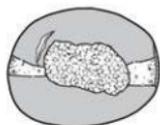




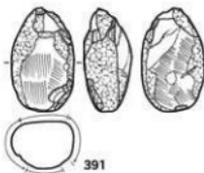
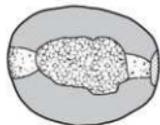
387



388



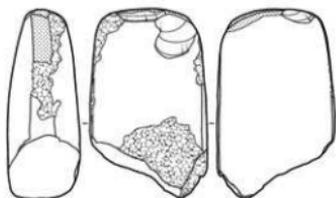
389



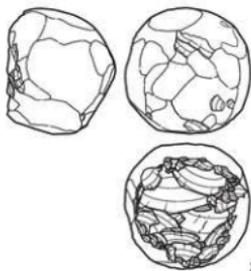
391



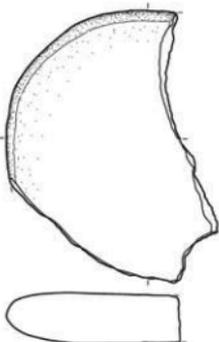
390



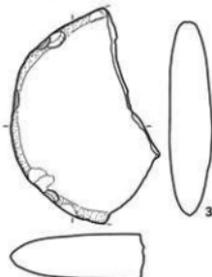
392



393



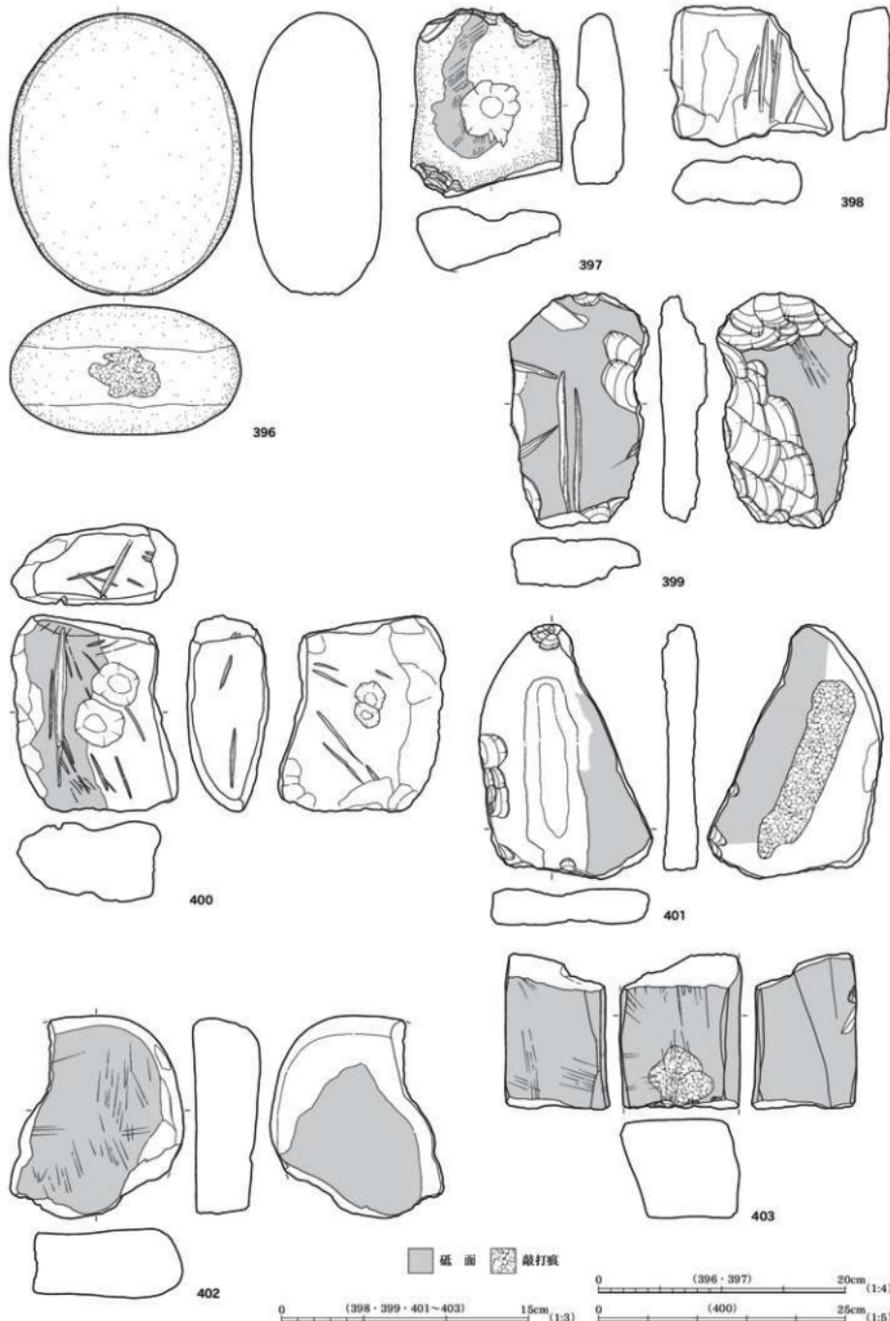
394

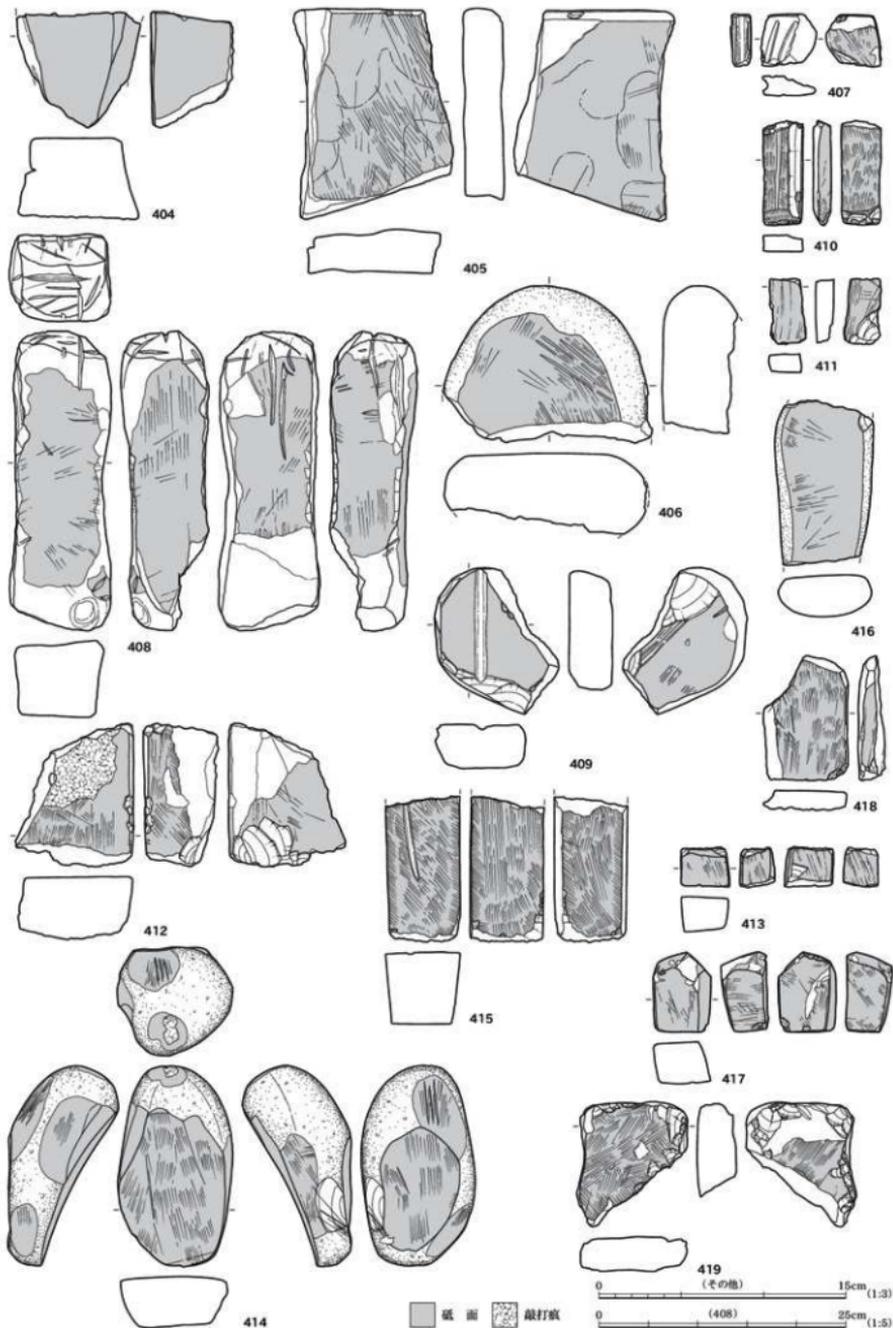


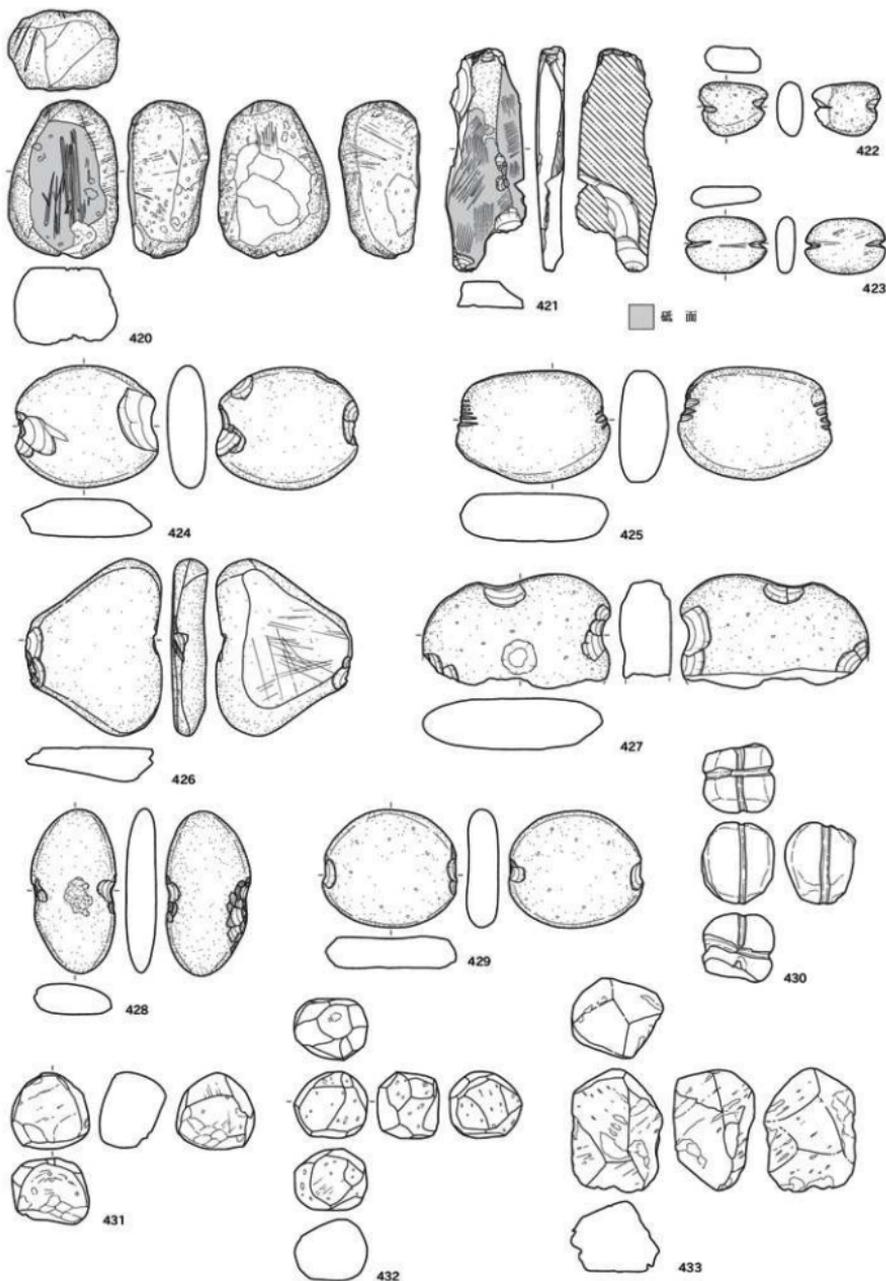
395

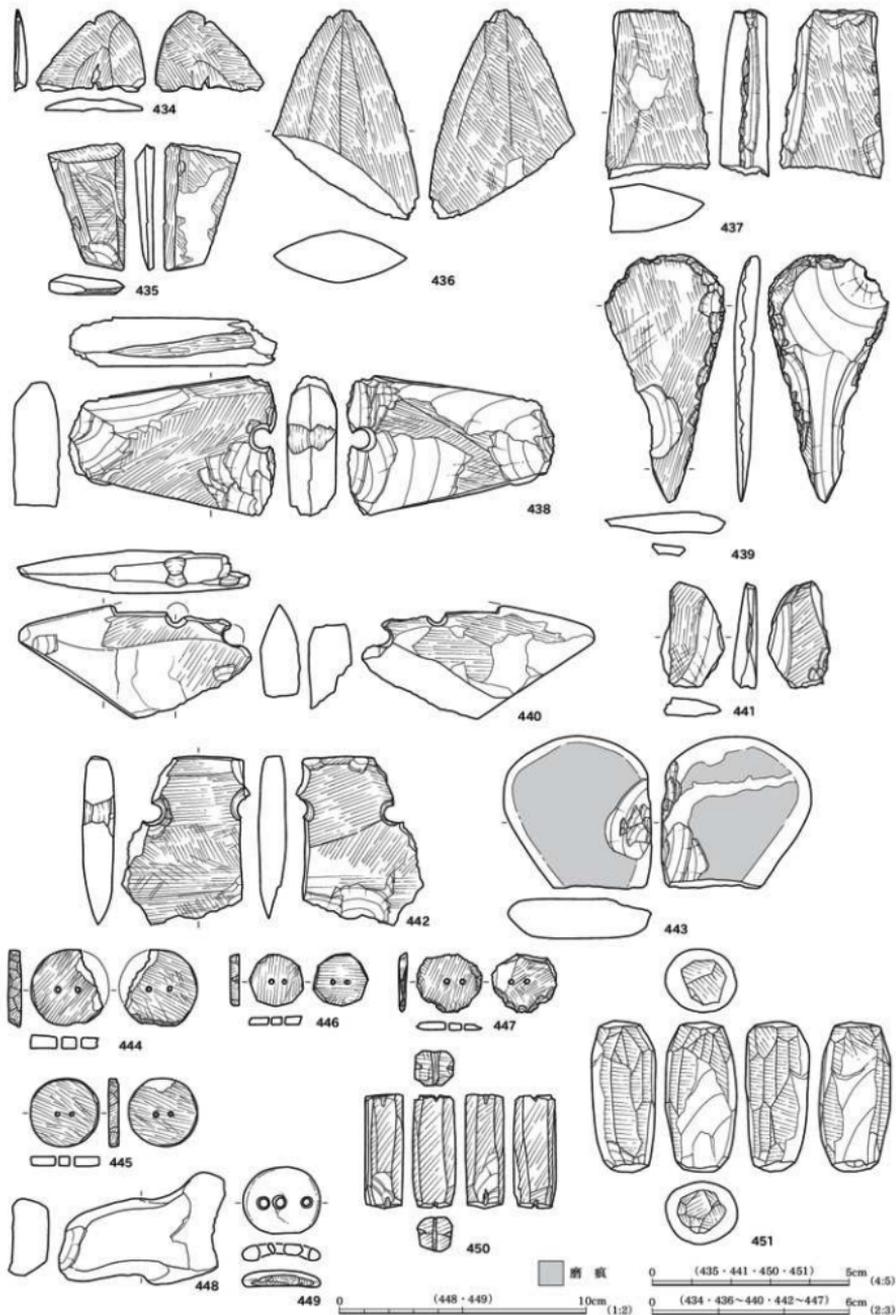
■ 磨面 ▨ 磨り潰し痕 ▩ 敲打痕

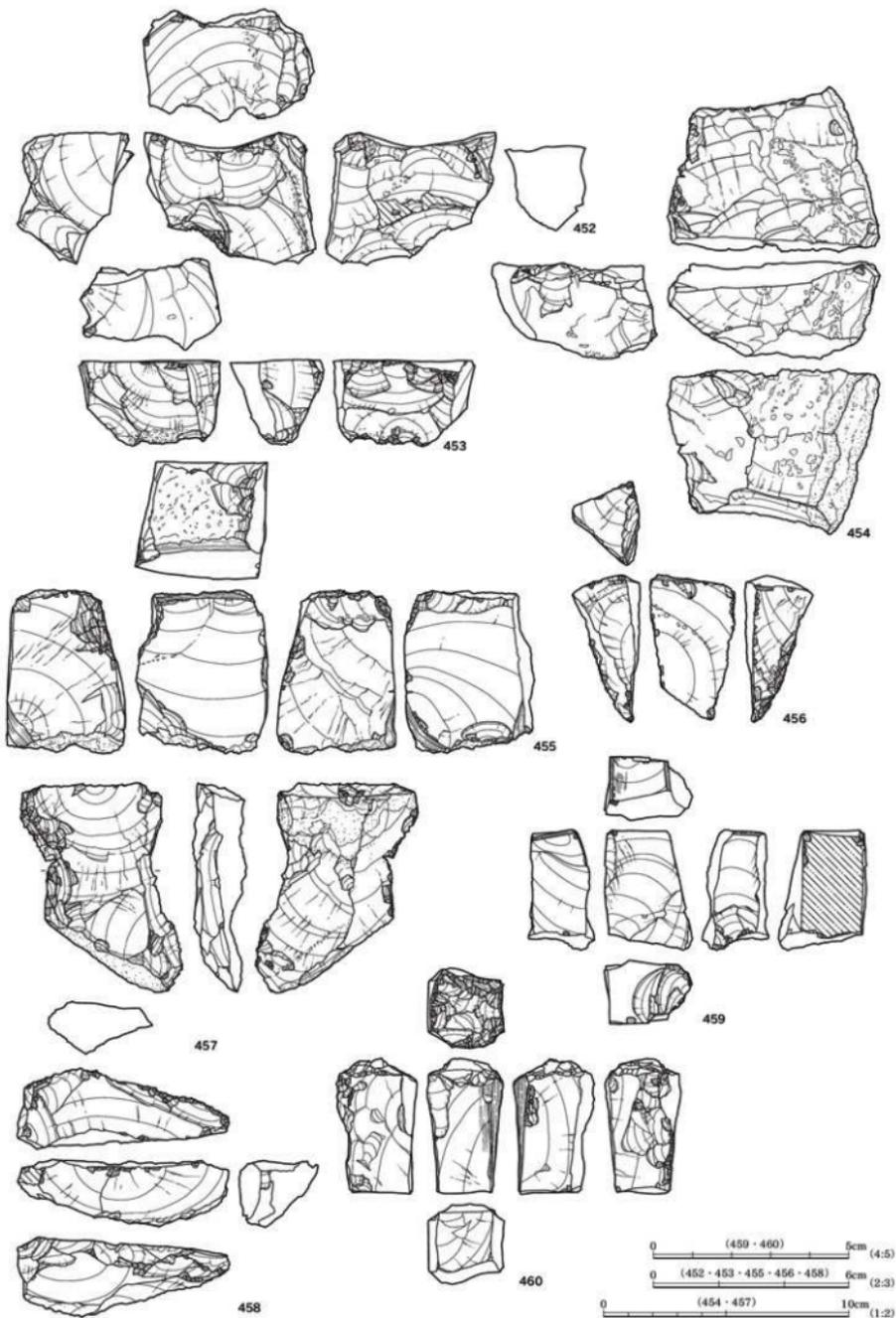
0 ————— 15cm (1:3)
 0 ————— 20cm (1:4)

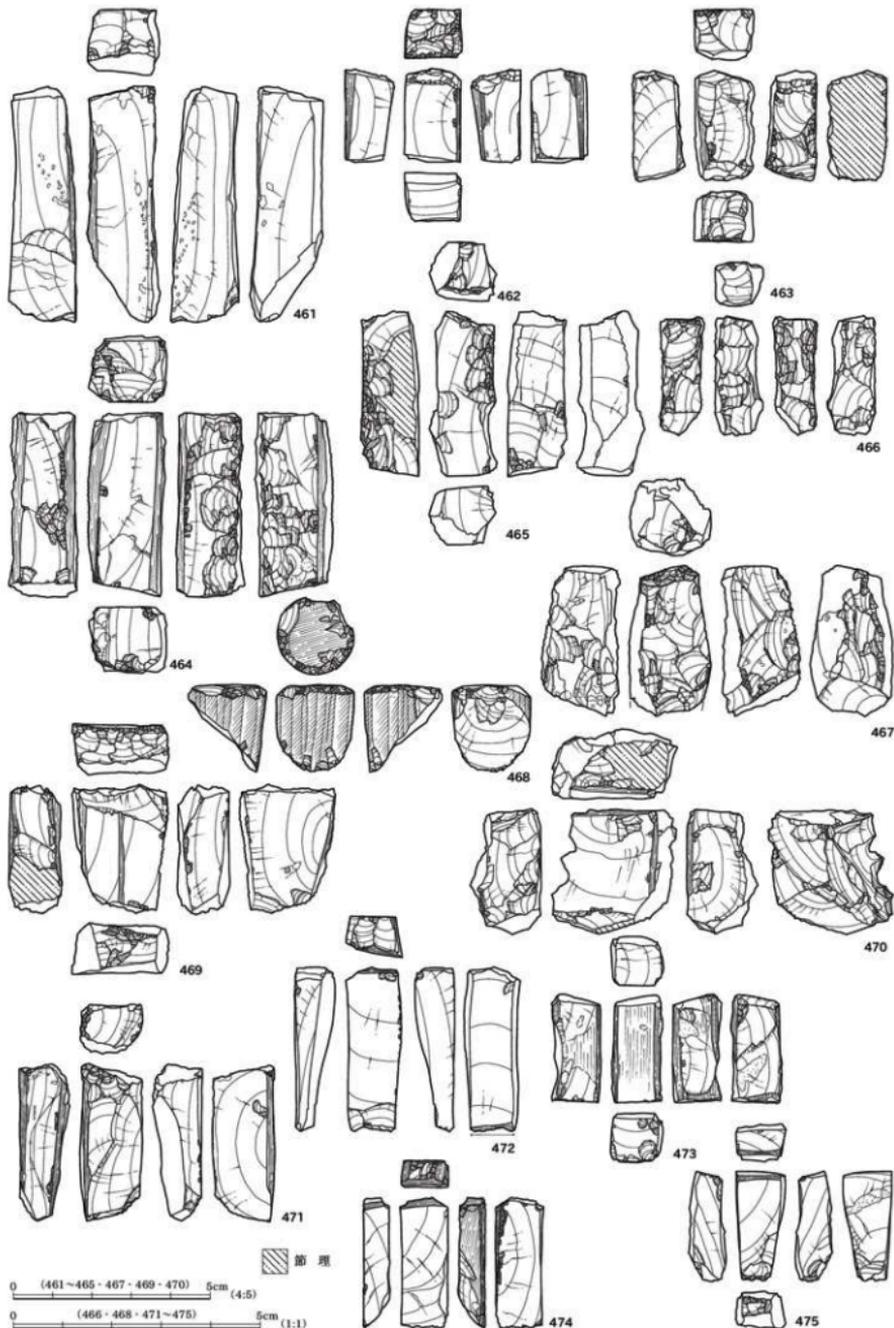


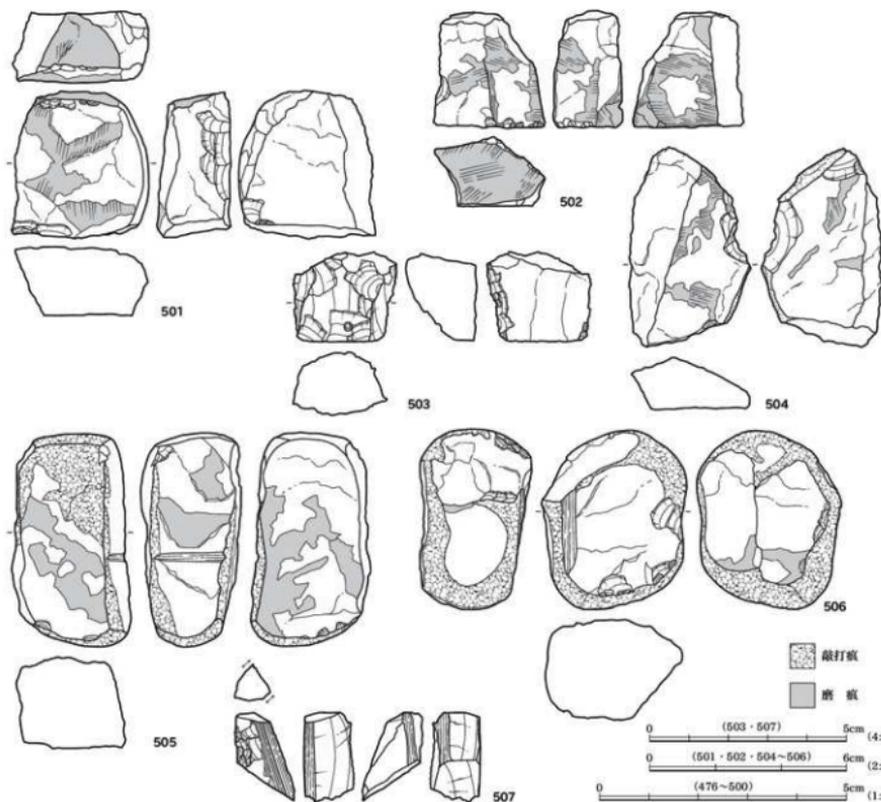
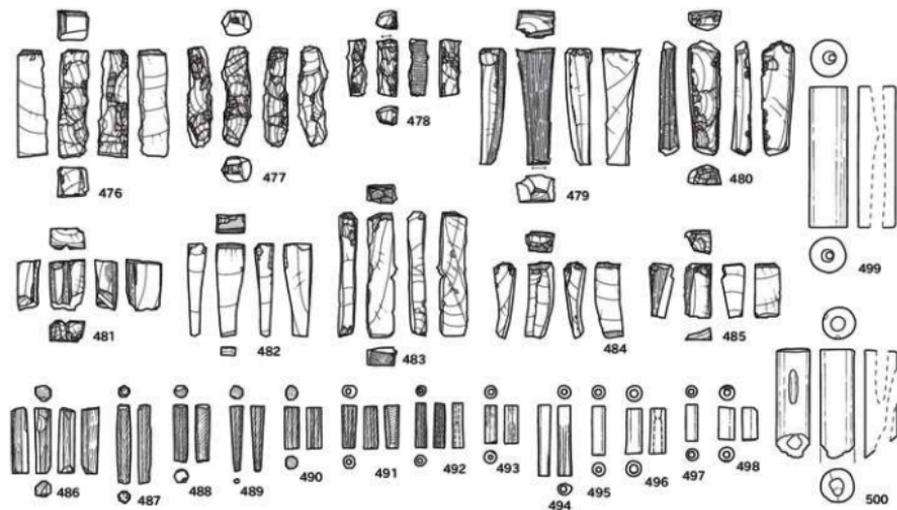


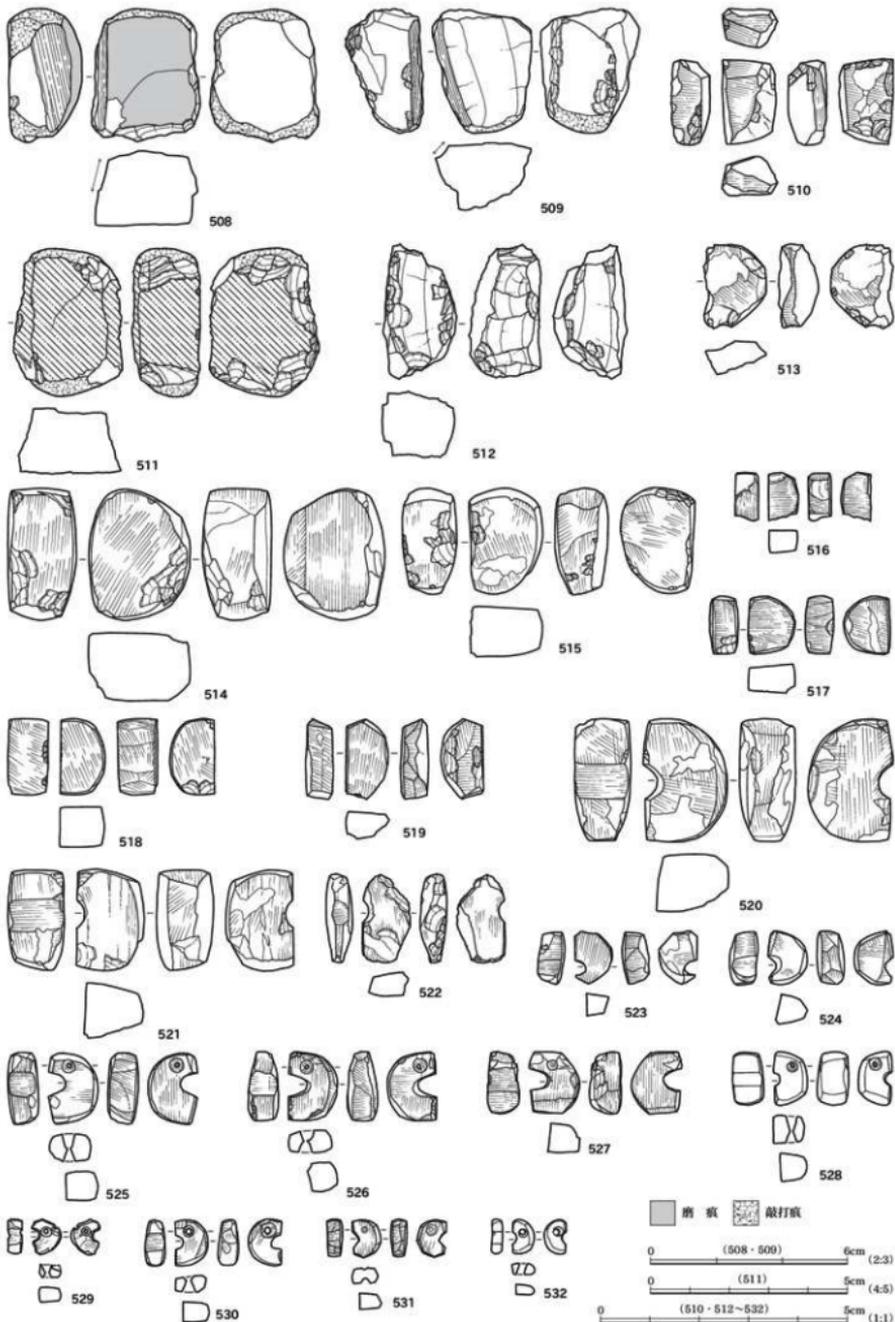


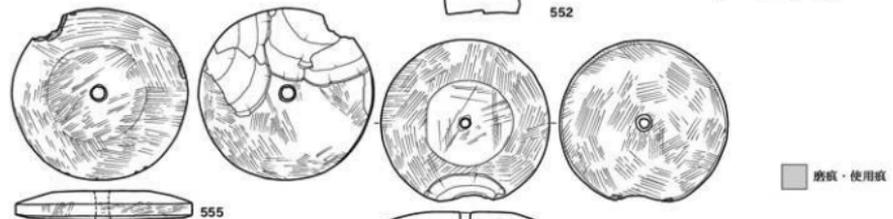
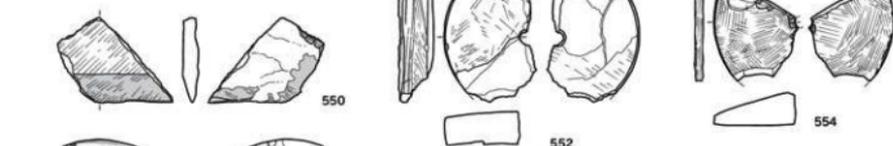
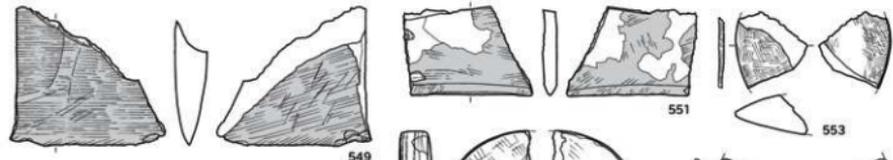
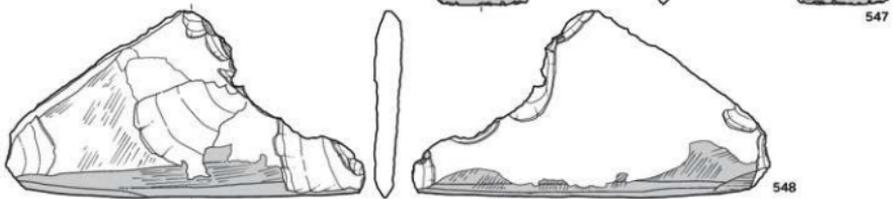
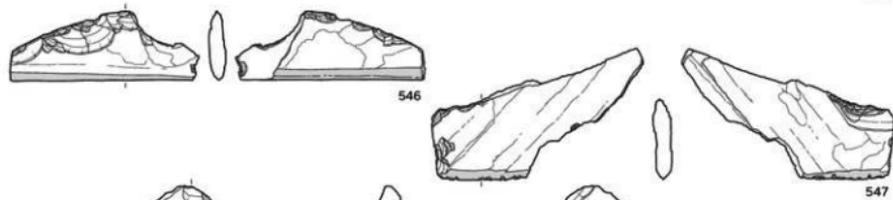
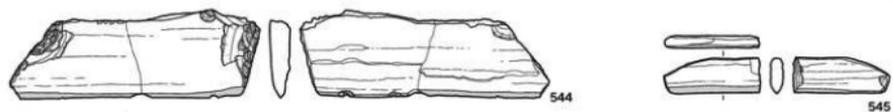
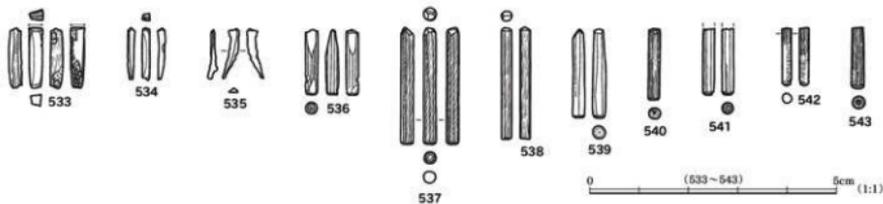




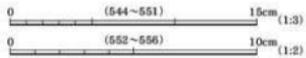


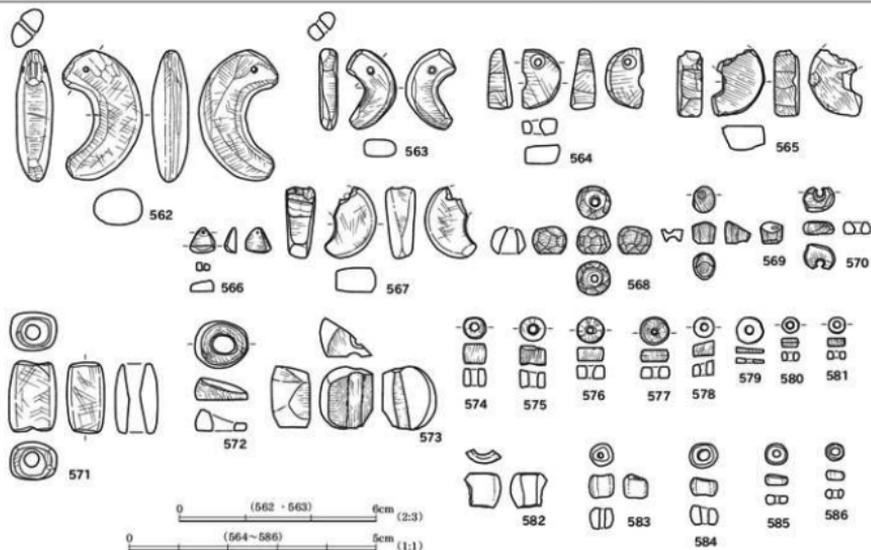
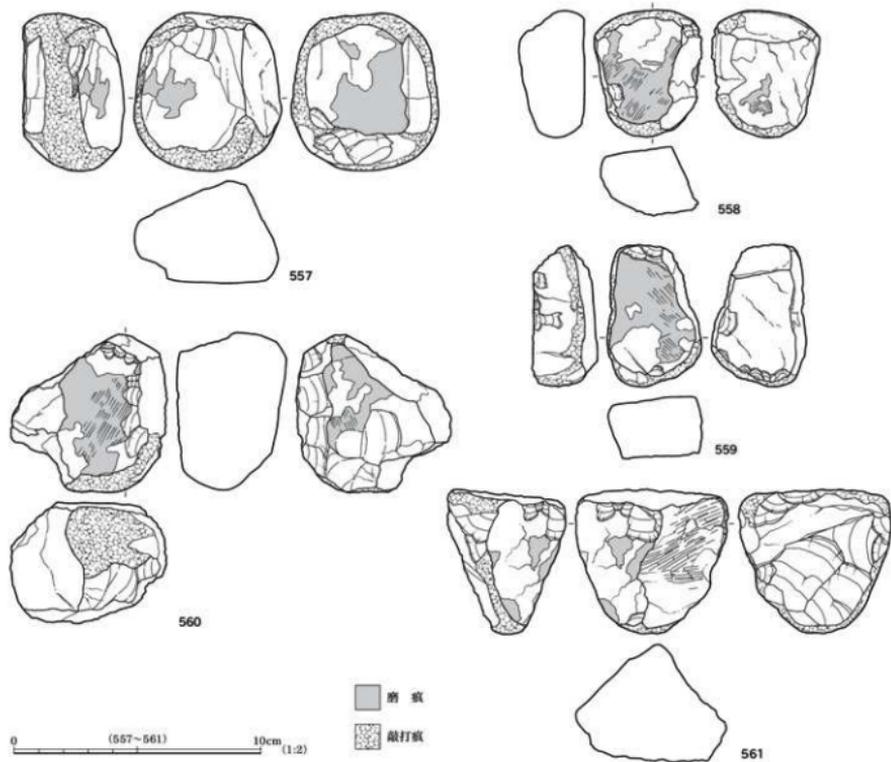




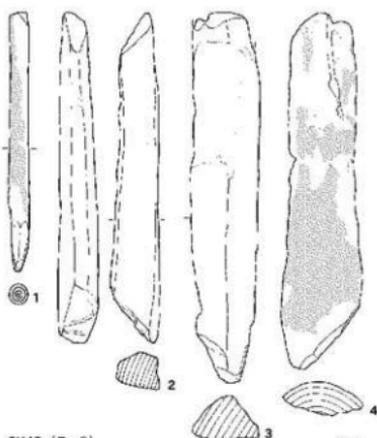


磨痕・使用痕

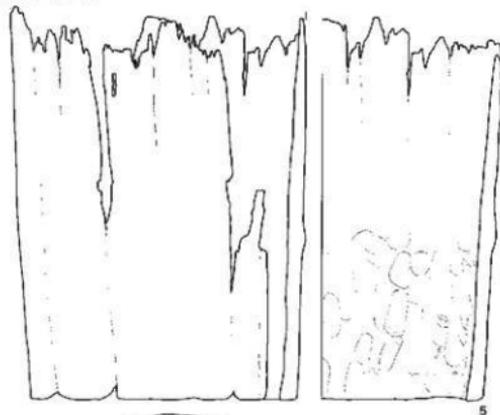




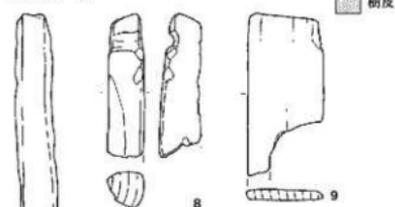
SK96 (1~4)



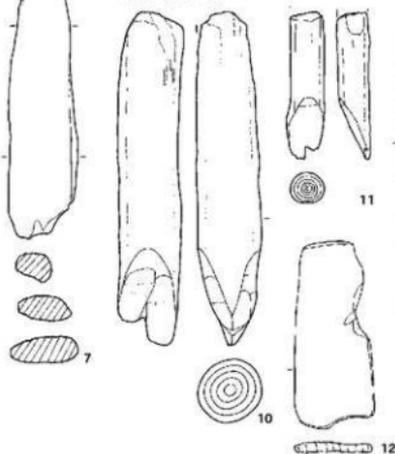
SE89 (5 · 6)



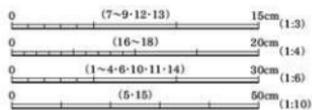
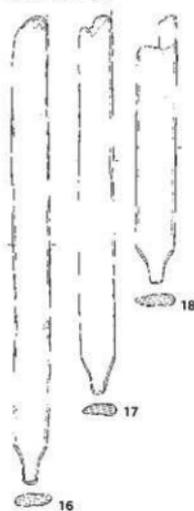
SK49 (7~9)



SK55 (10~15)



SD33 (16~18)



15

16

17

18

6

5

樹皮

8

9

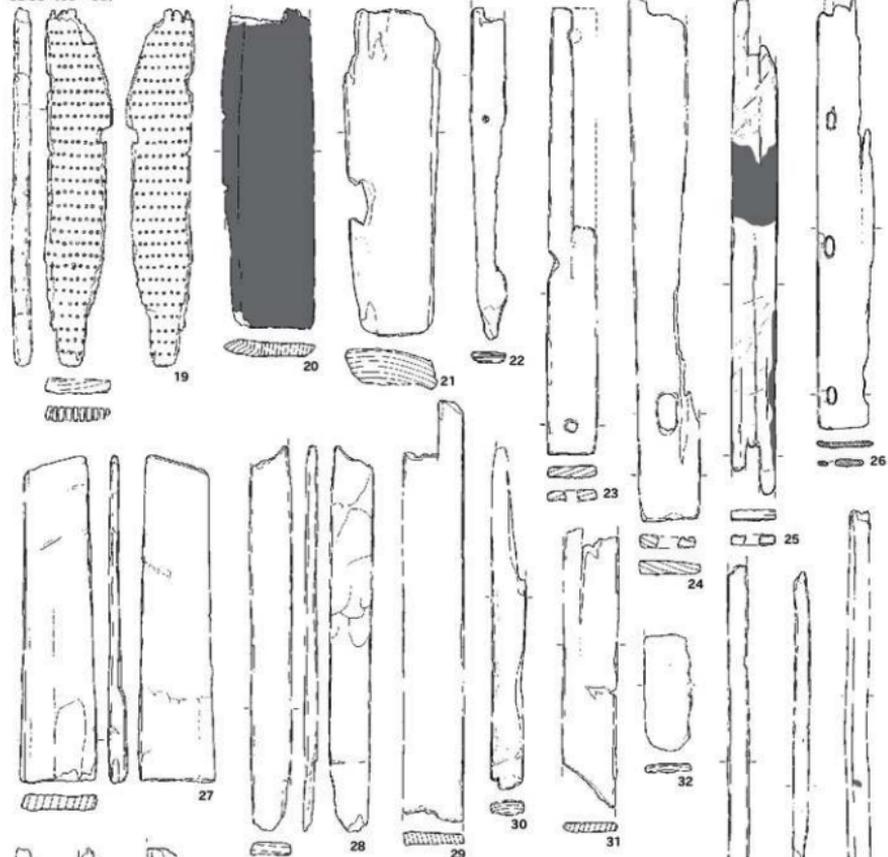
3

4

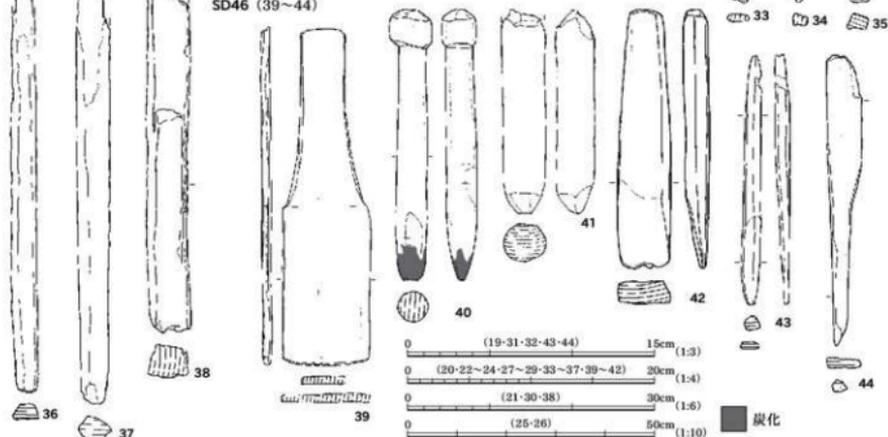
2

1

SD33 (19~38)

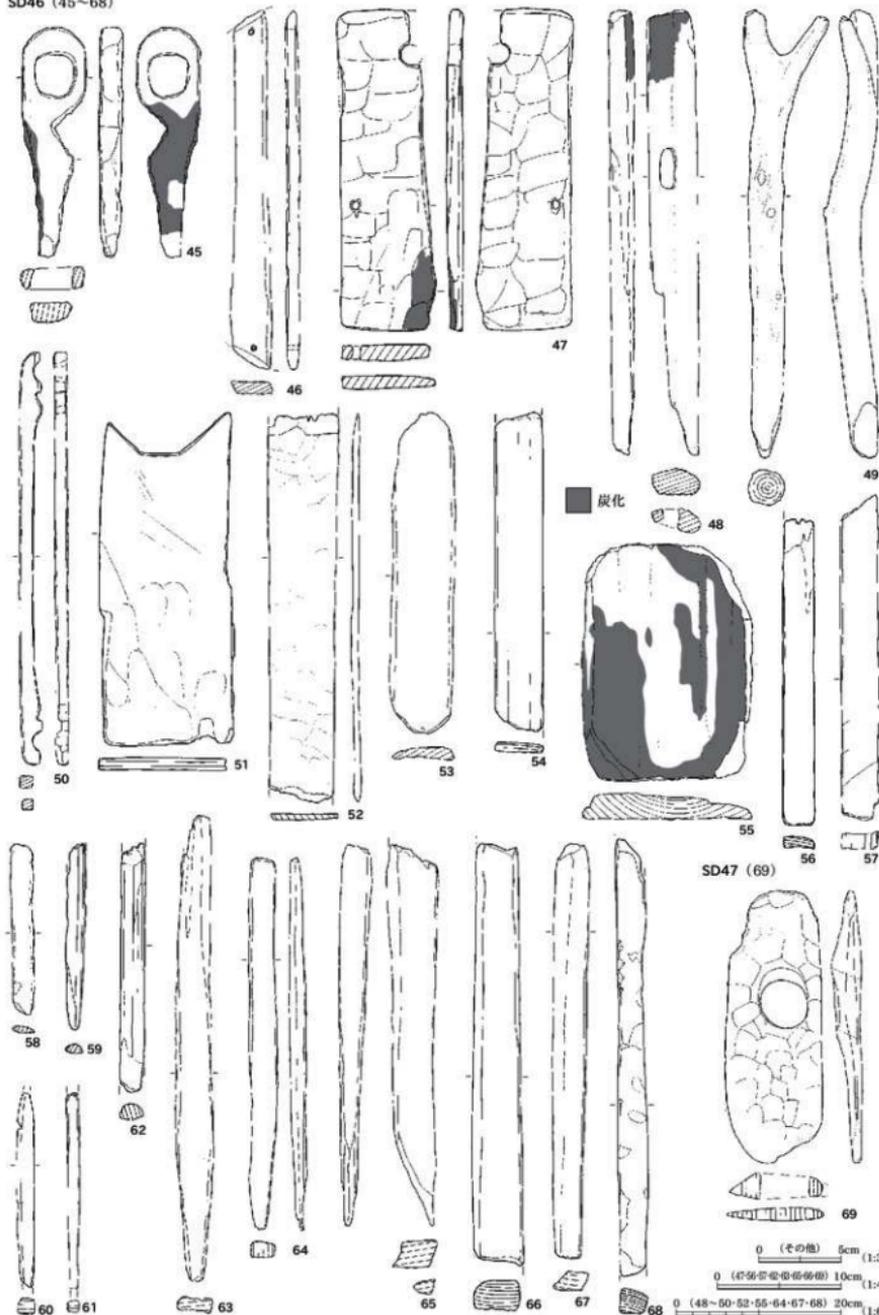


SD46 (39~44)

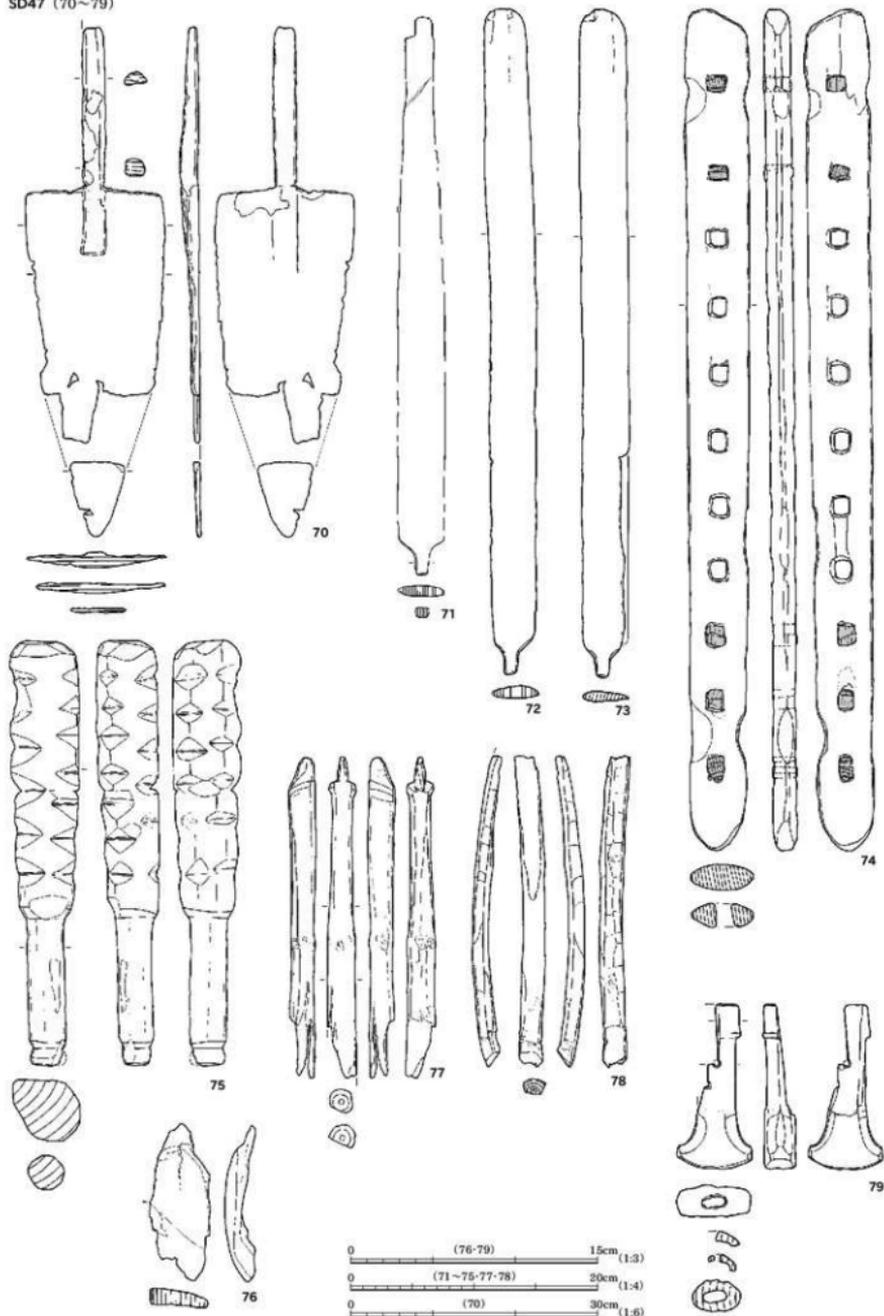


■ 炭化

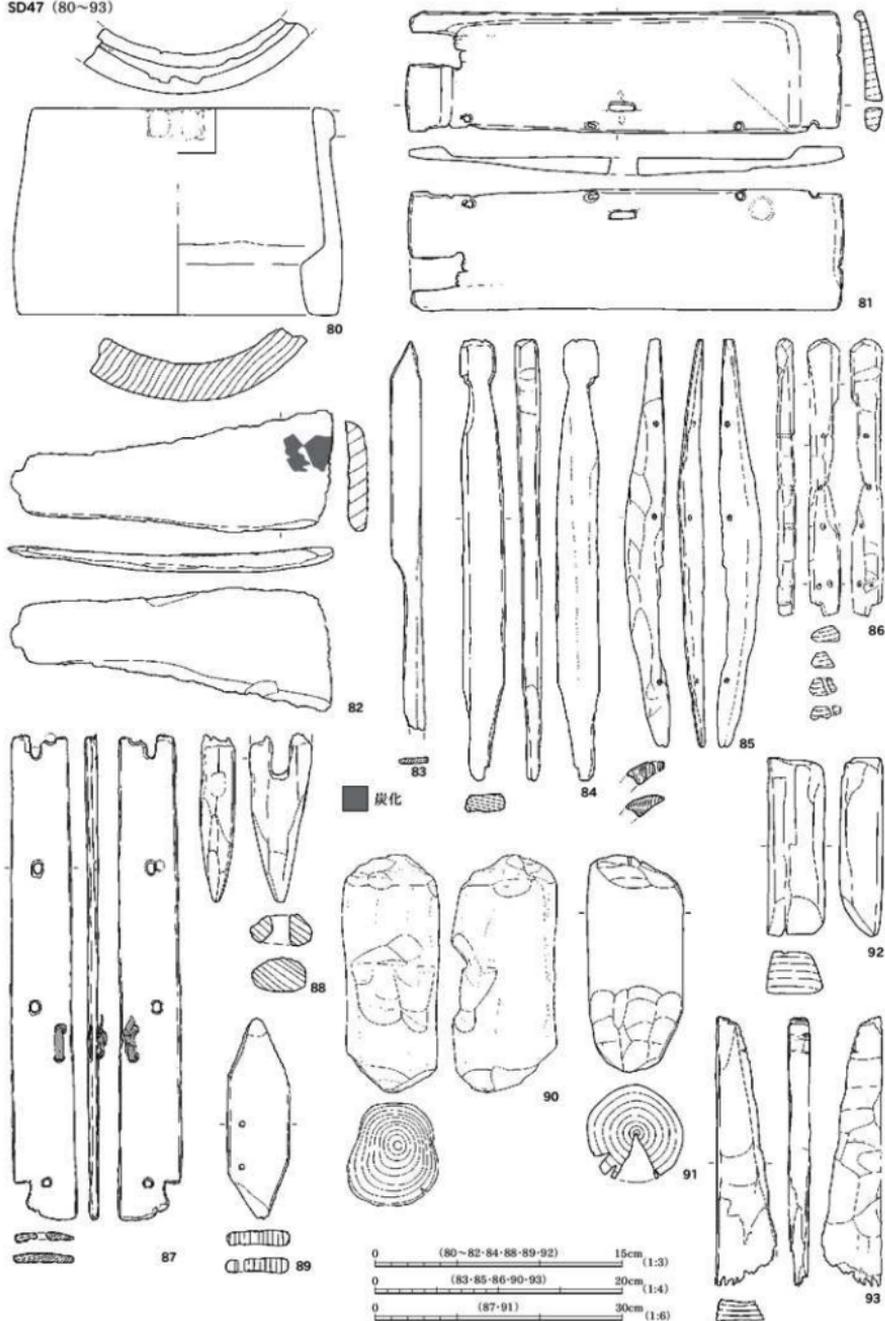
SD46 (45-68)



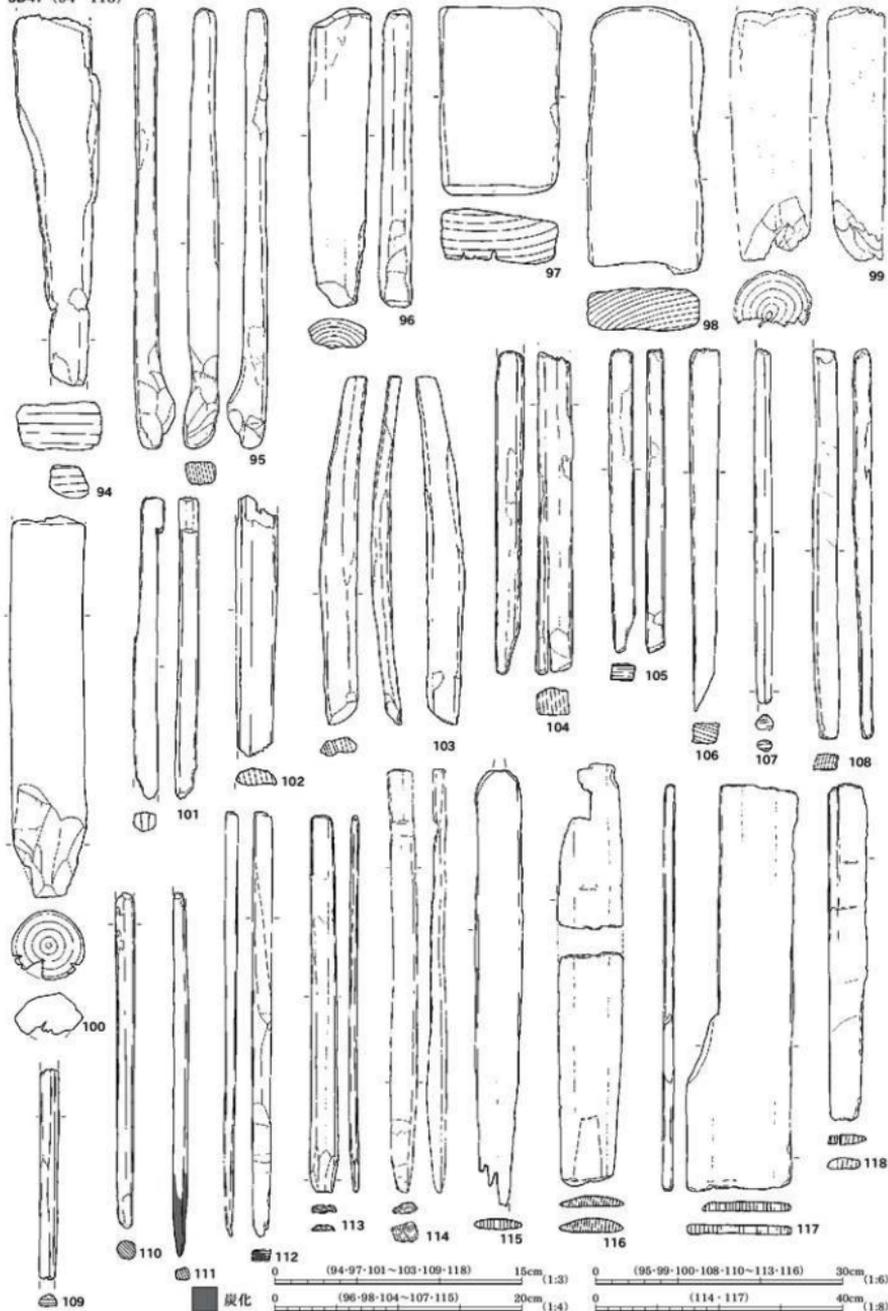
SD47 (70~79)



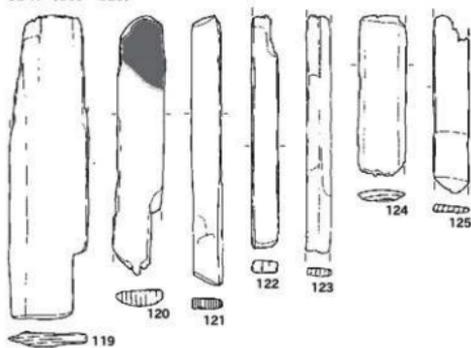
SD47 (80~93)



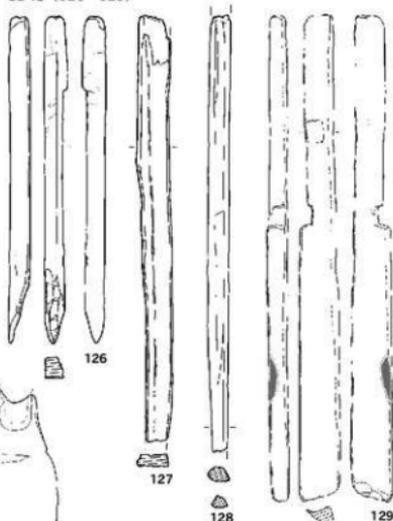
SD47 (94~118)



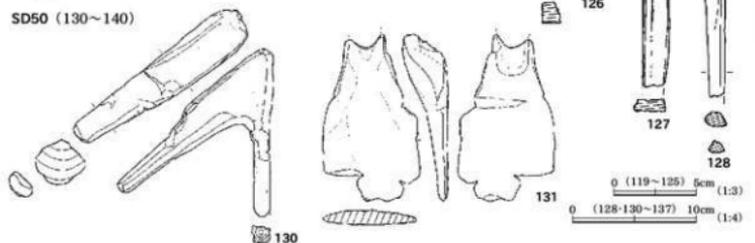
SD47 (119~125)



SD48 (126~129)

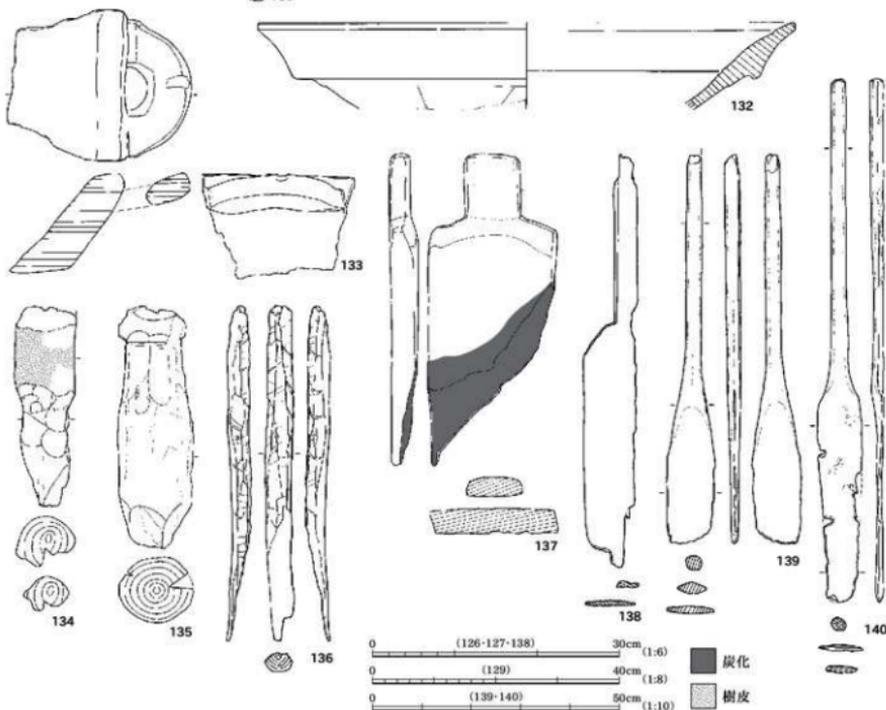


SD50 (130~140)



0 (119~125) 5cm (1:3)

0 (128-130~137) 10cm (1:4)



0 (126-127-138) 30cm (1:6)

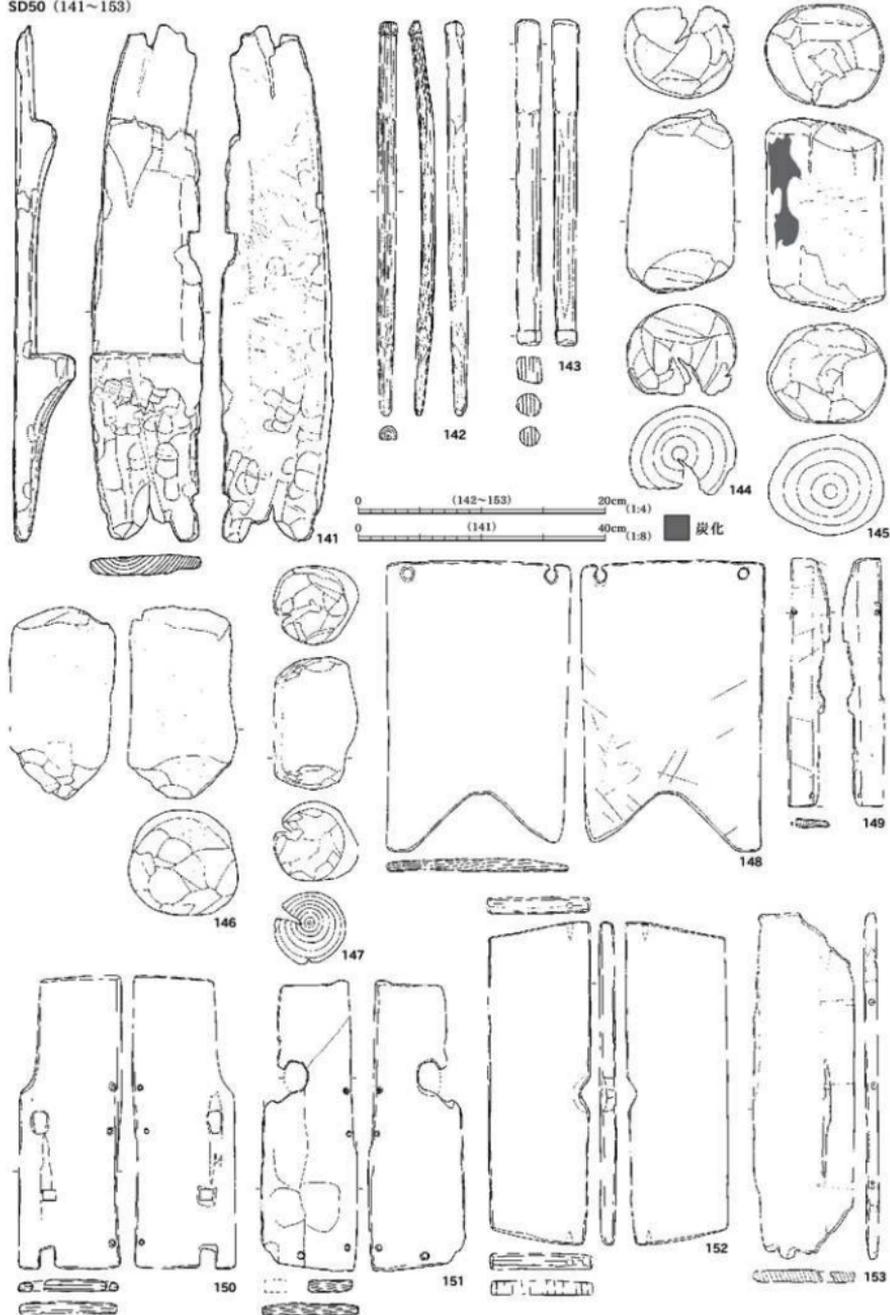
0 (129) 40cm (1:8)

0 (139-140) 50cm (1:10)

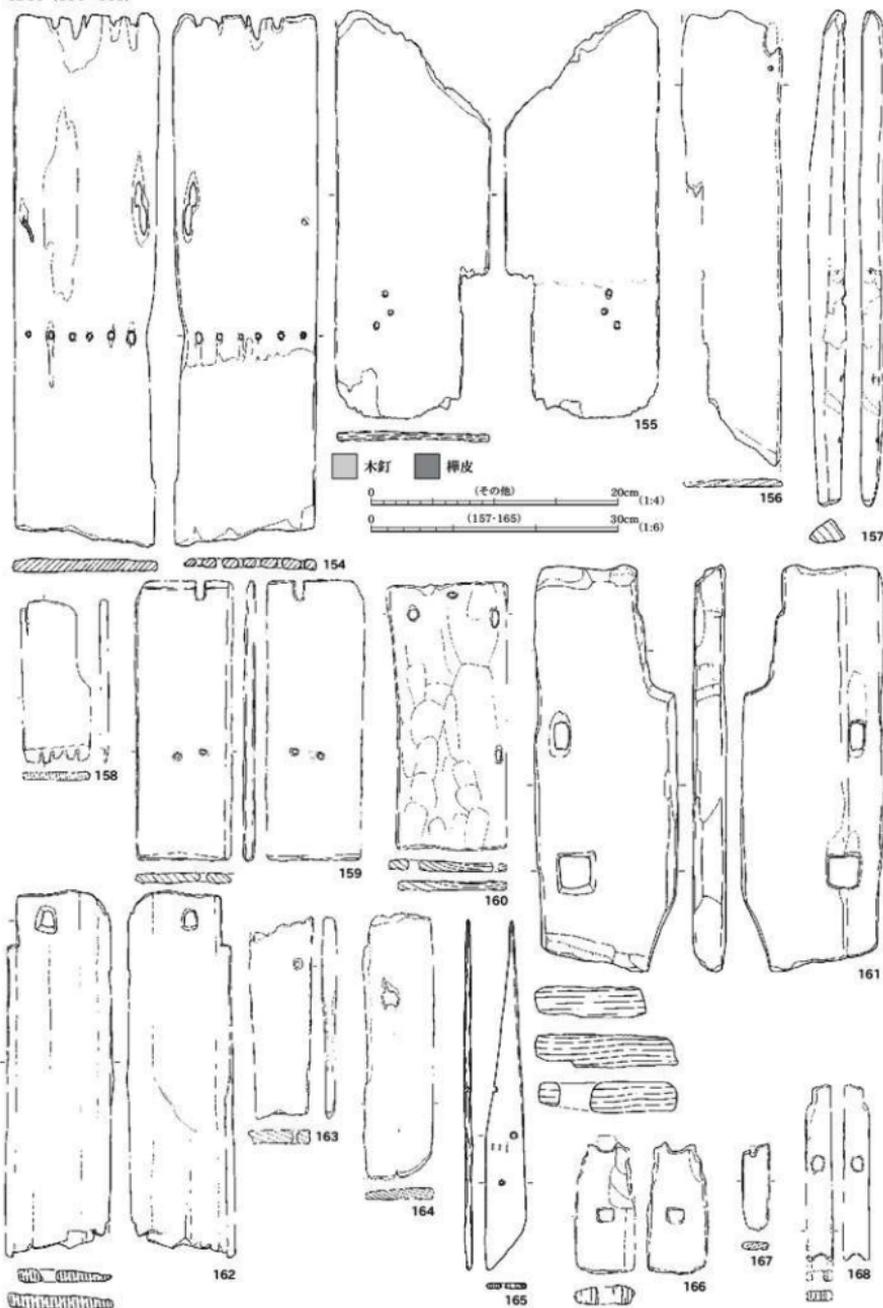
■ 炭化

■ 樹皮

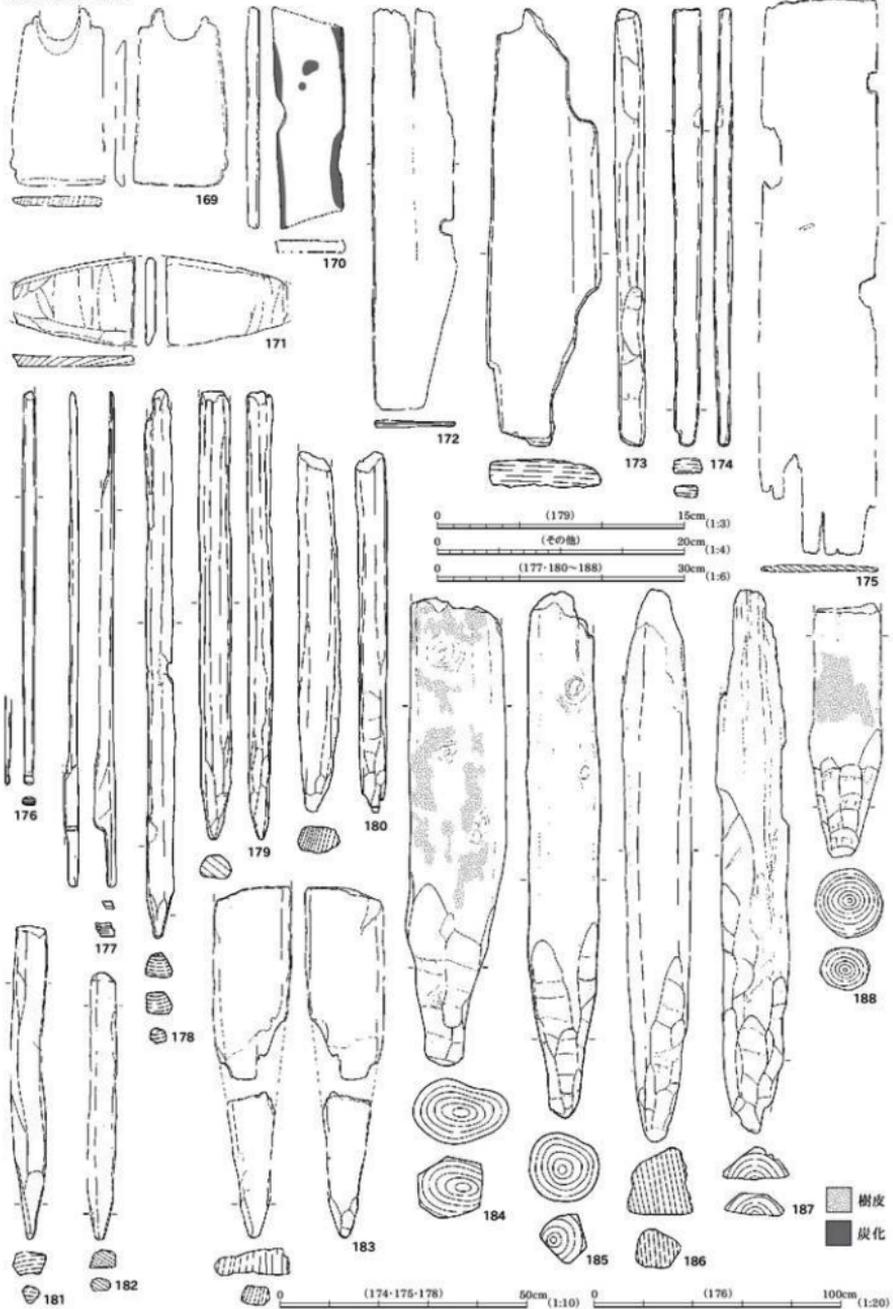
SD50 (141~153)



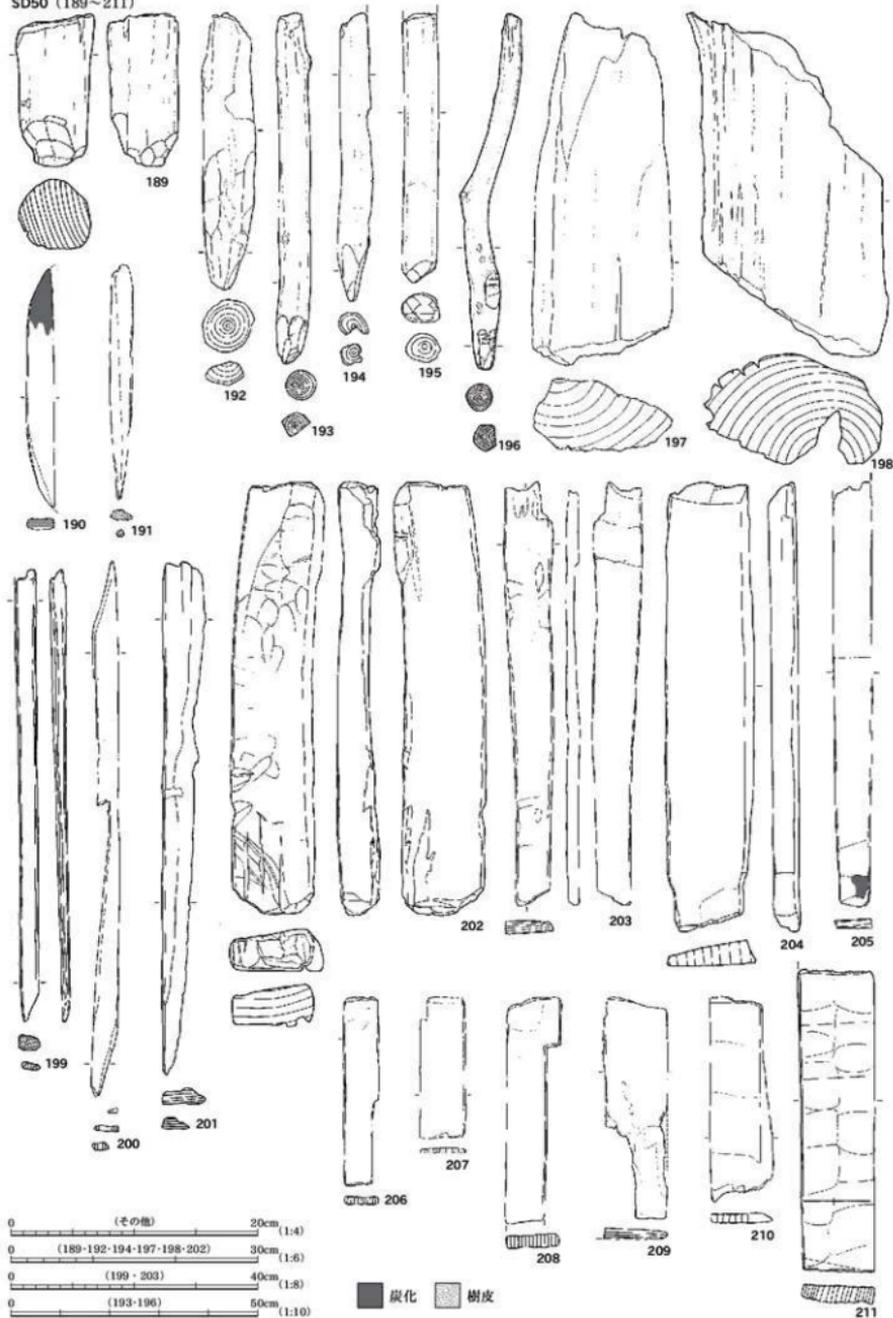
SD50 (154~168)



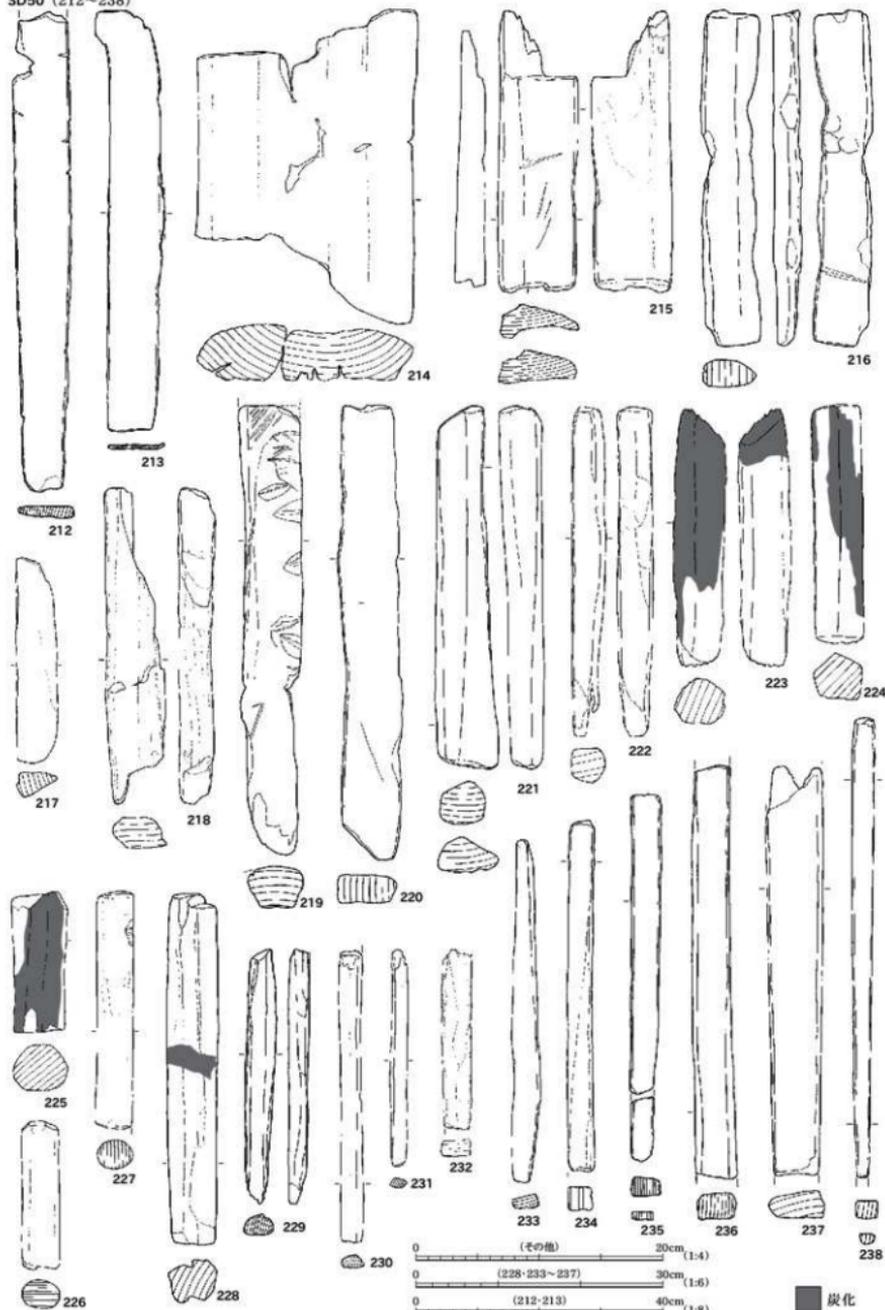
SD50 (169~188)



SD50 (189~211)

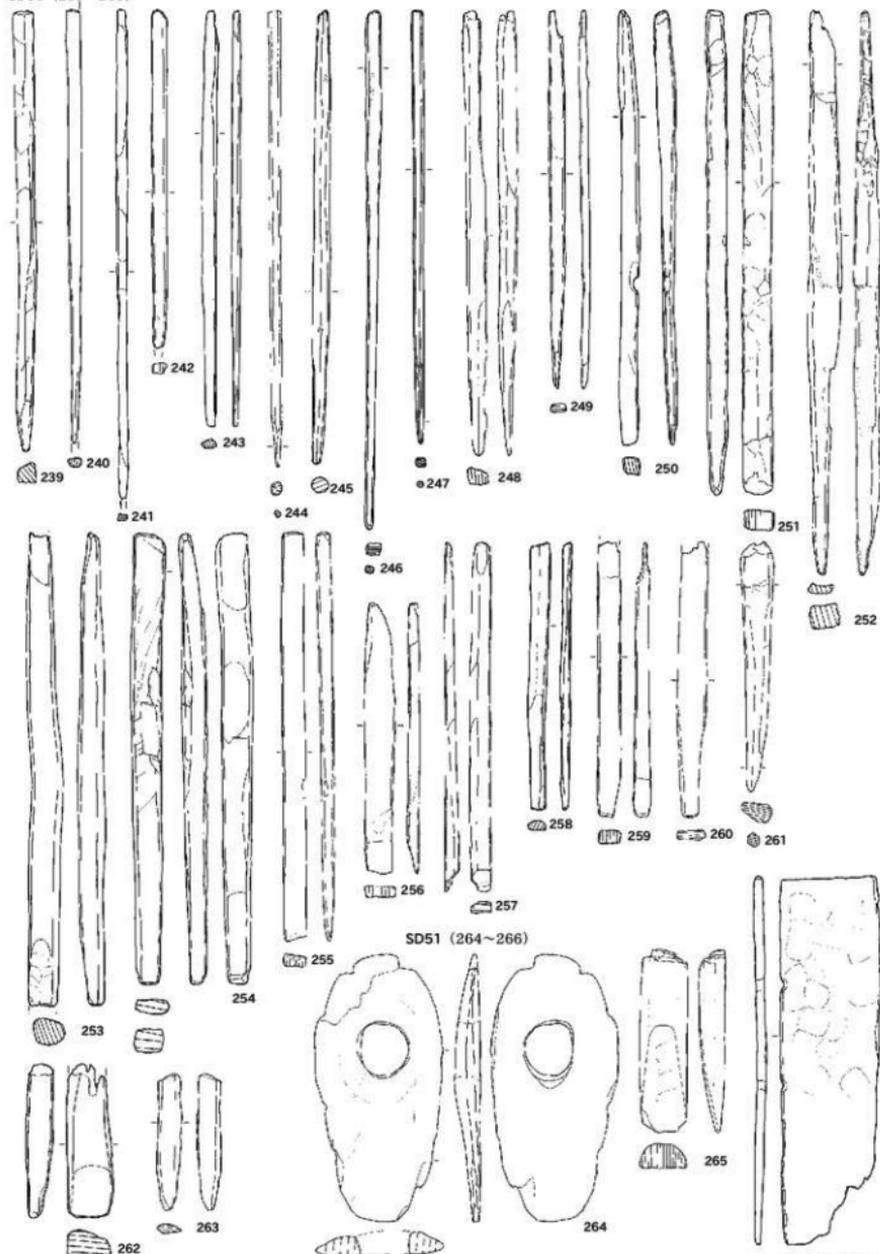


SD50 (212~238)



■ 炭化

SD50 (239~263)



0 (239-242-259-260-262-263) 15cm (1:3)

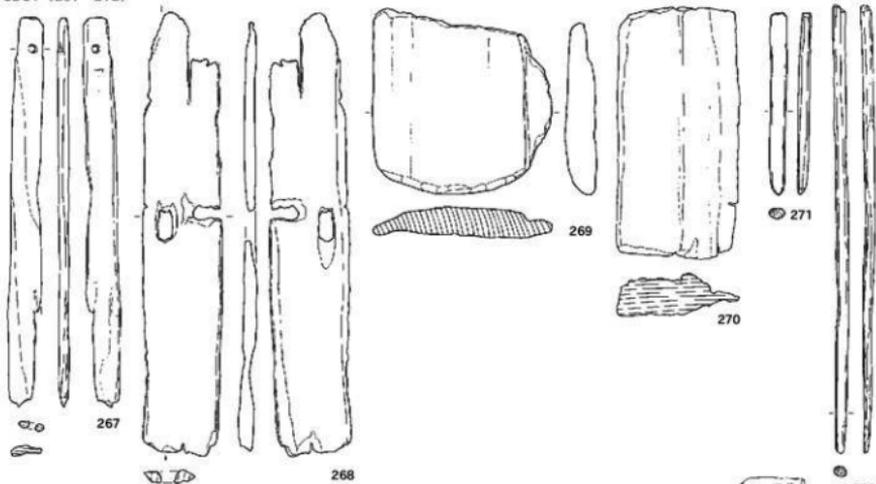
0 (243-244-254-256-258-261-264-266) 20cm (1:4)

0 (245-246-248-251-253-257) 30cm (1:6)

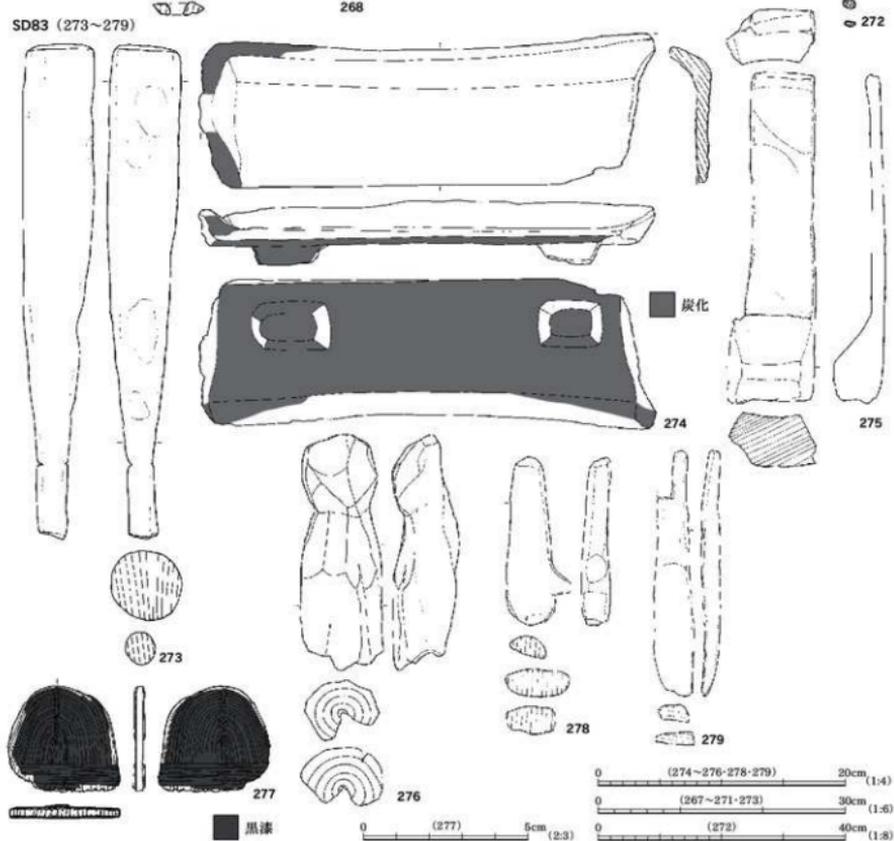
0 (247-252) 40cm (1:10)

266

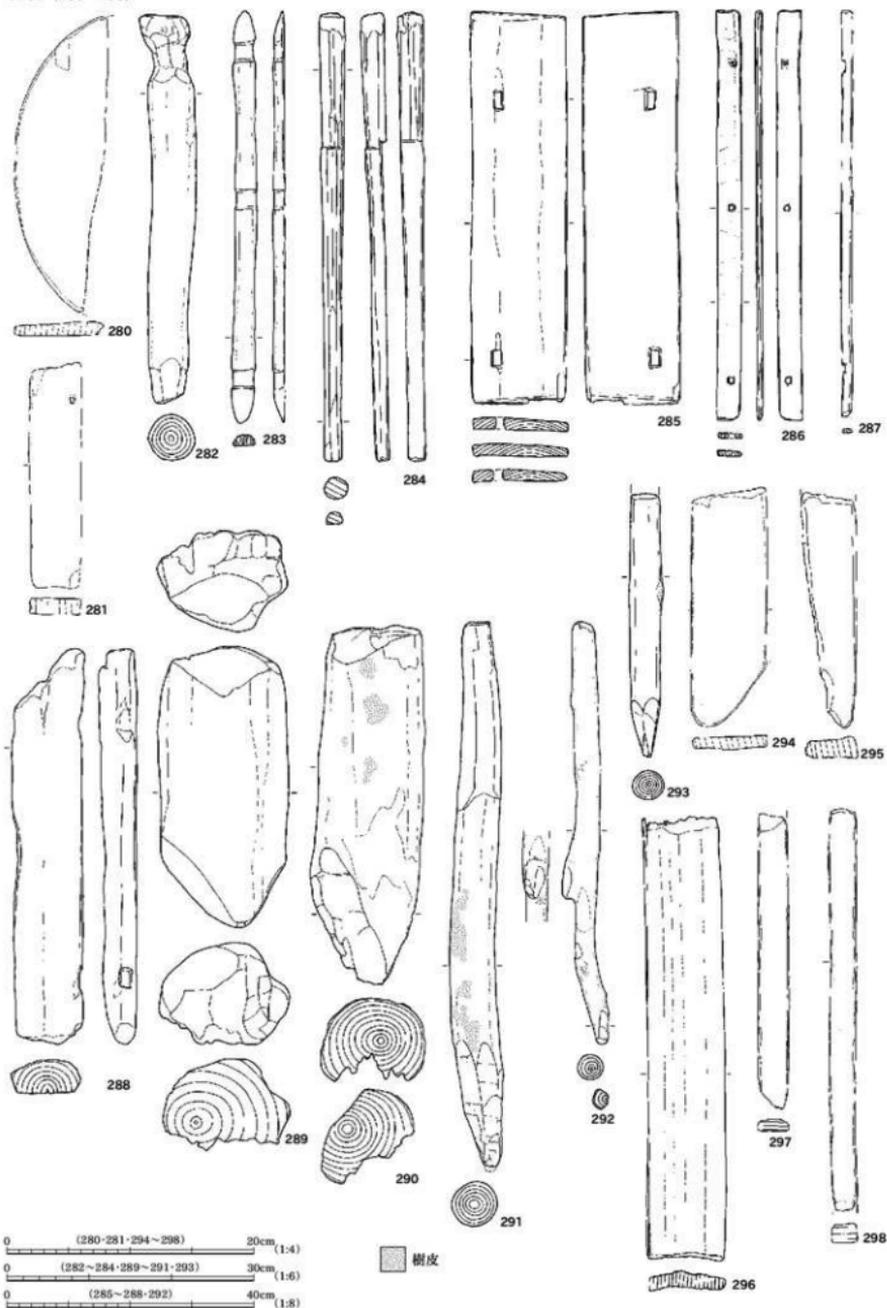
SD51 (267~272)



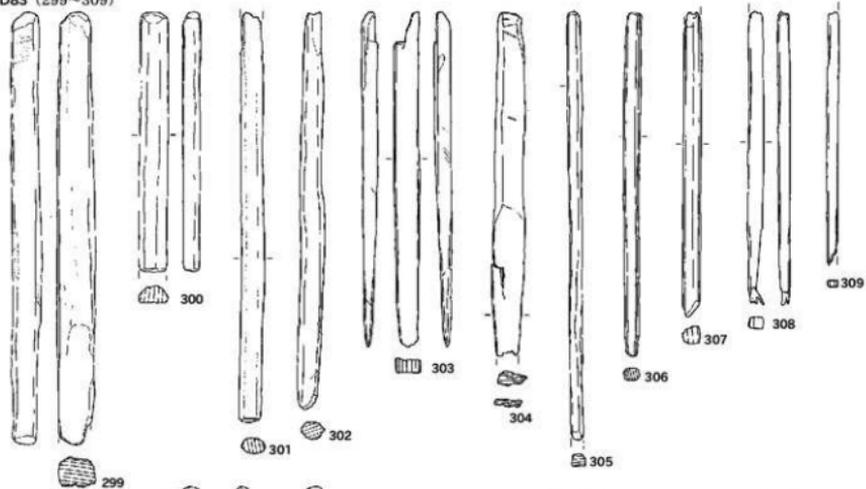
SD83 (273~279)



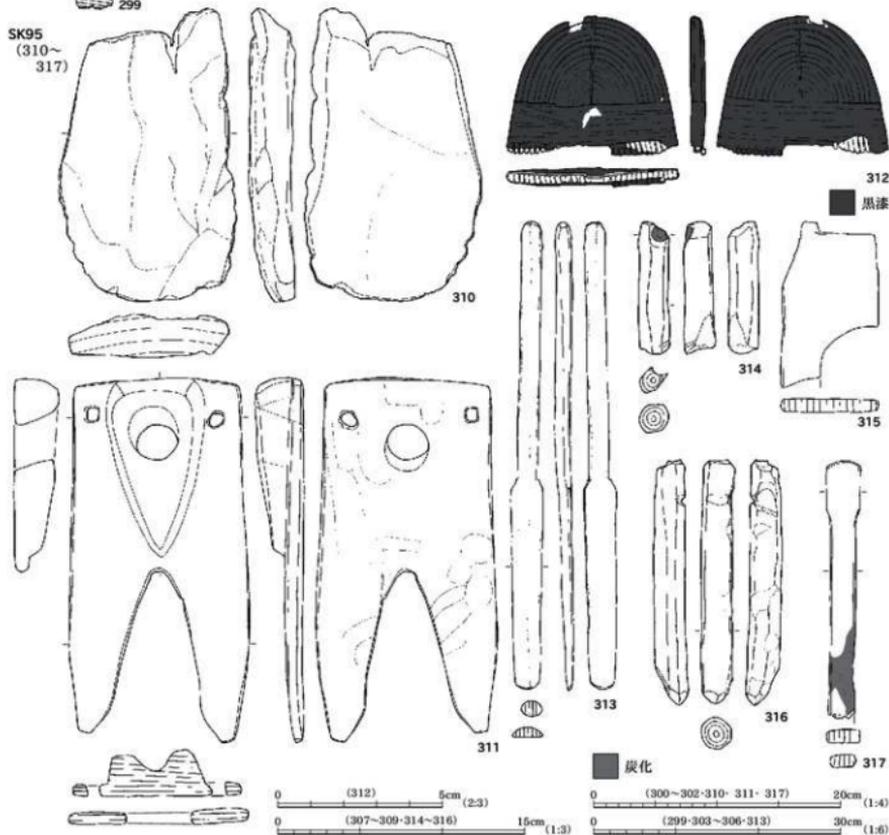
SD83 (280~298)



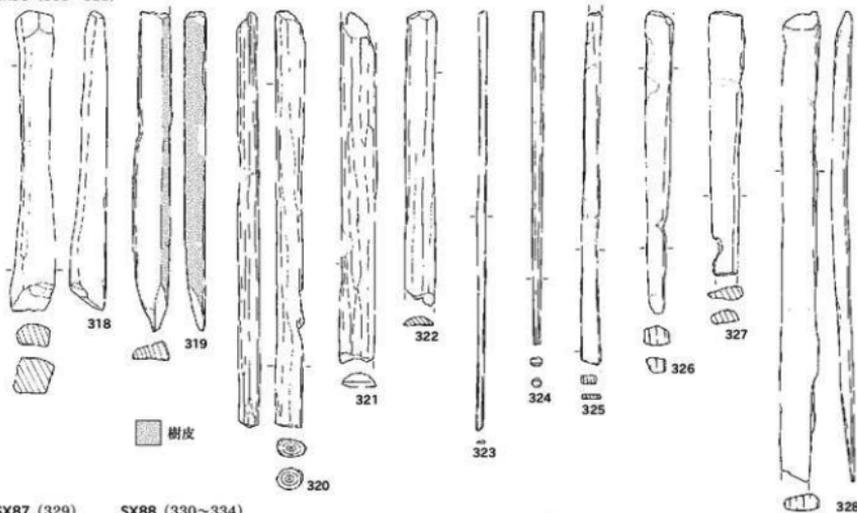
SD83 (299~309)



SK95
(310~
317)



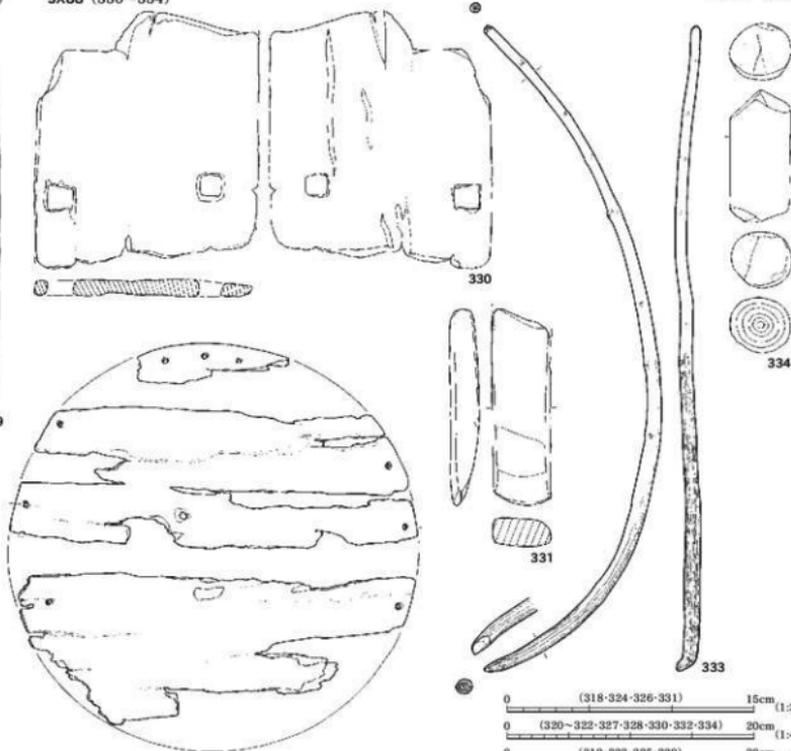
SK95 (318~328)



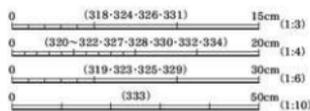
SX87 (329)



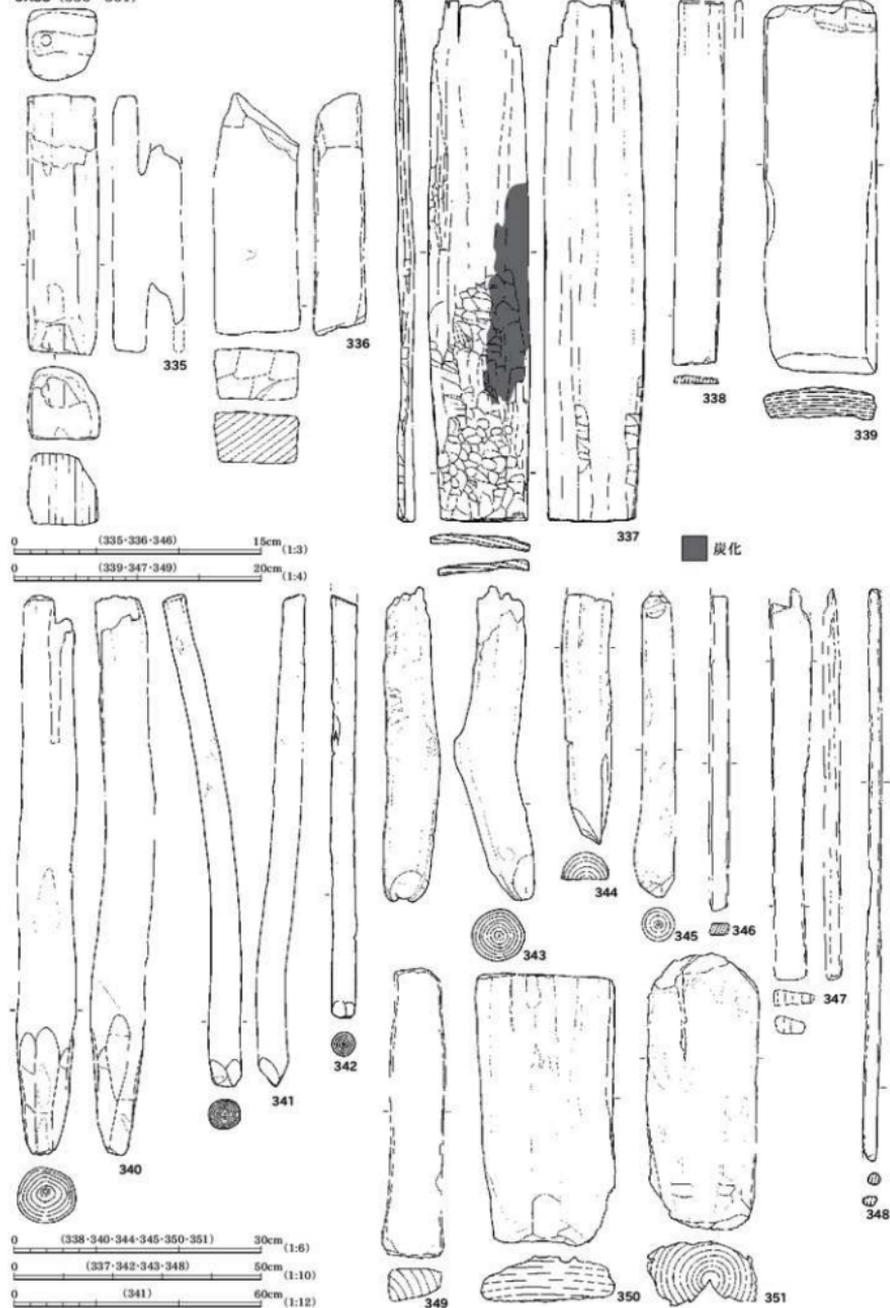
SX88 (330~334)



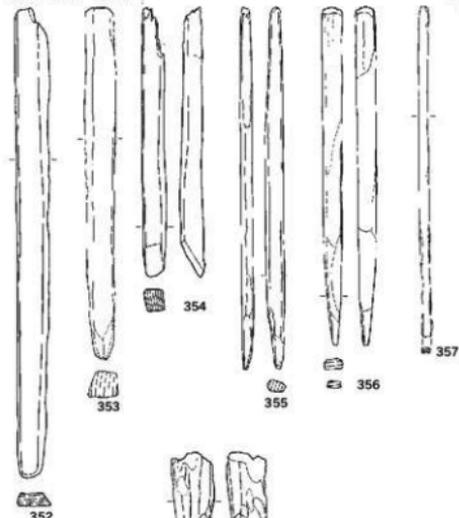
332



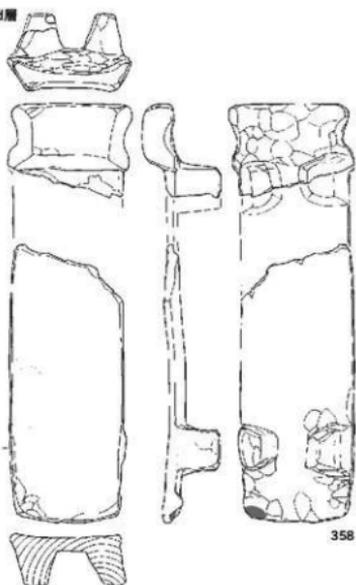
SX88 (335~351)



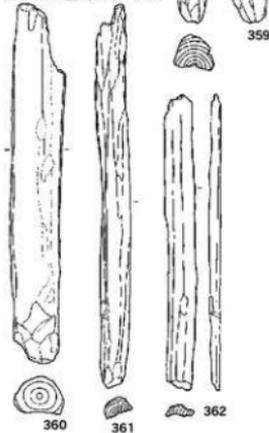
SX88 (352~357)



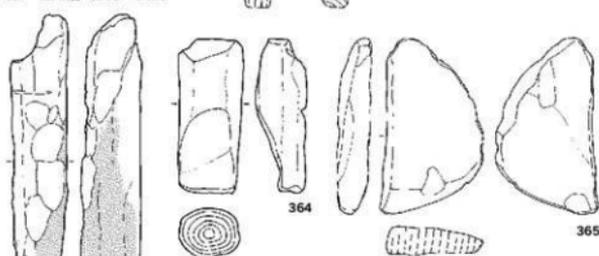
XIIa~XIId層 (358)



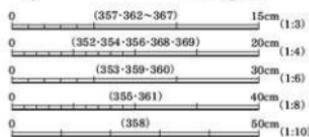
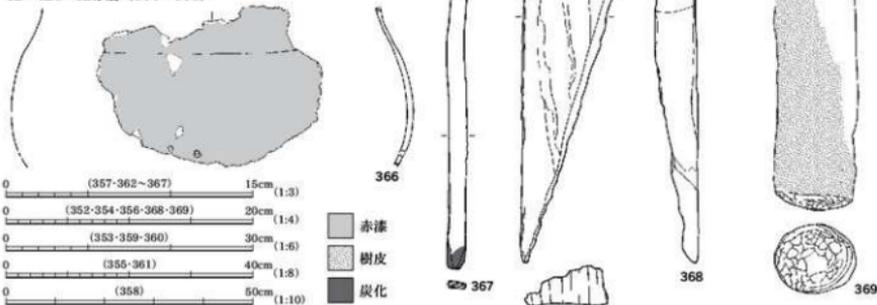
XV・XVd層 (359~362)



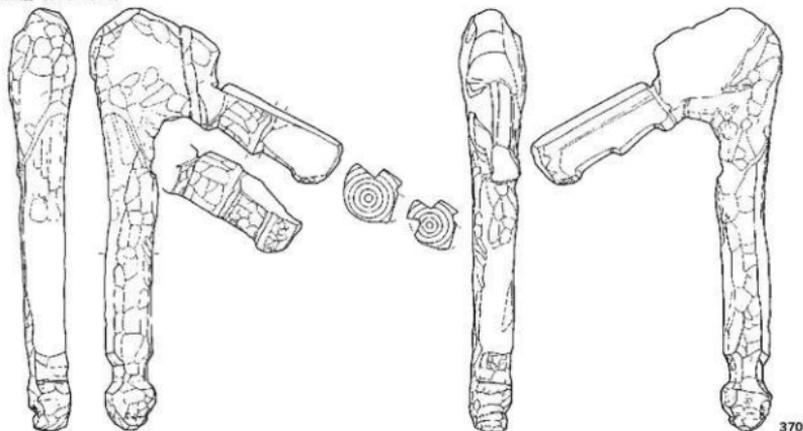
XV・XVb層 (363~365)



XII・XIIa・XII砂層 (366~368)



Ⅹa・Ⅹd層 (370・371)



370



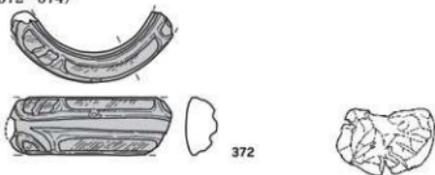
370a

370b

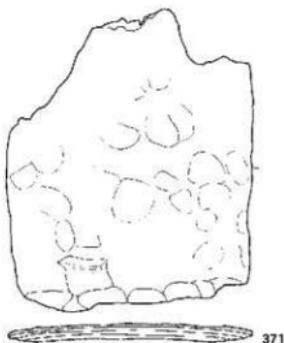
370c

370復元図 (S=1/8)

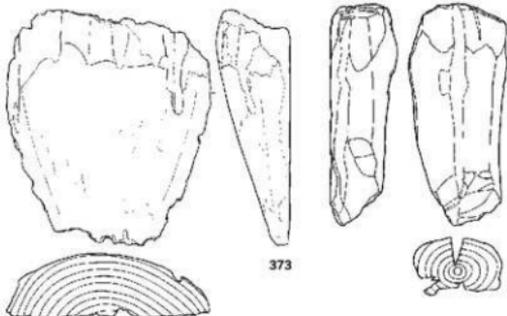
Ⅹc層 (372~374)



372

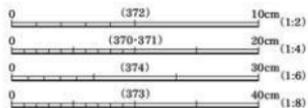


371



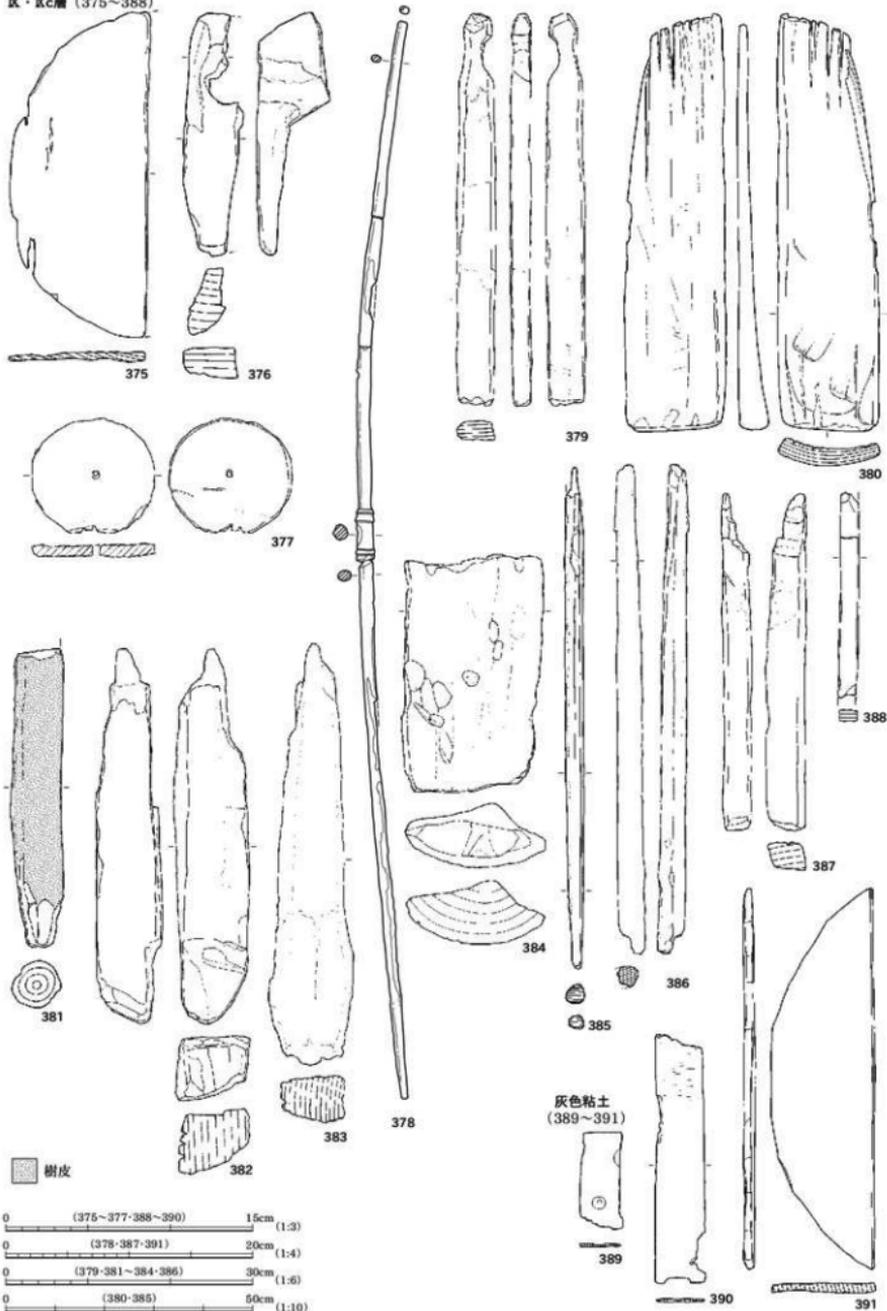
373

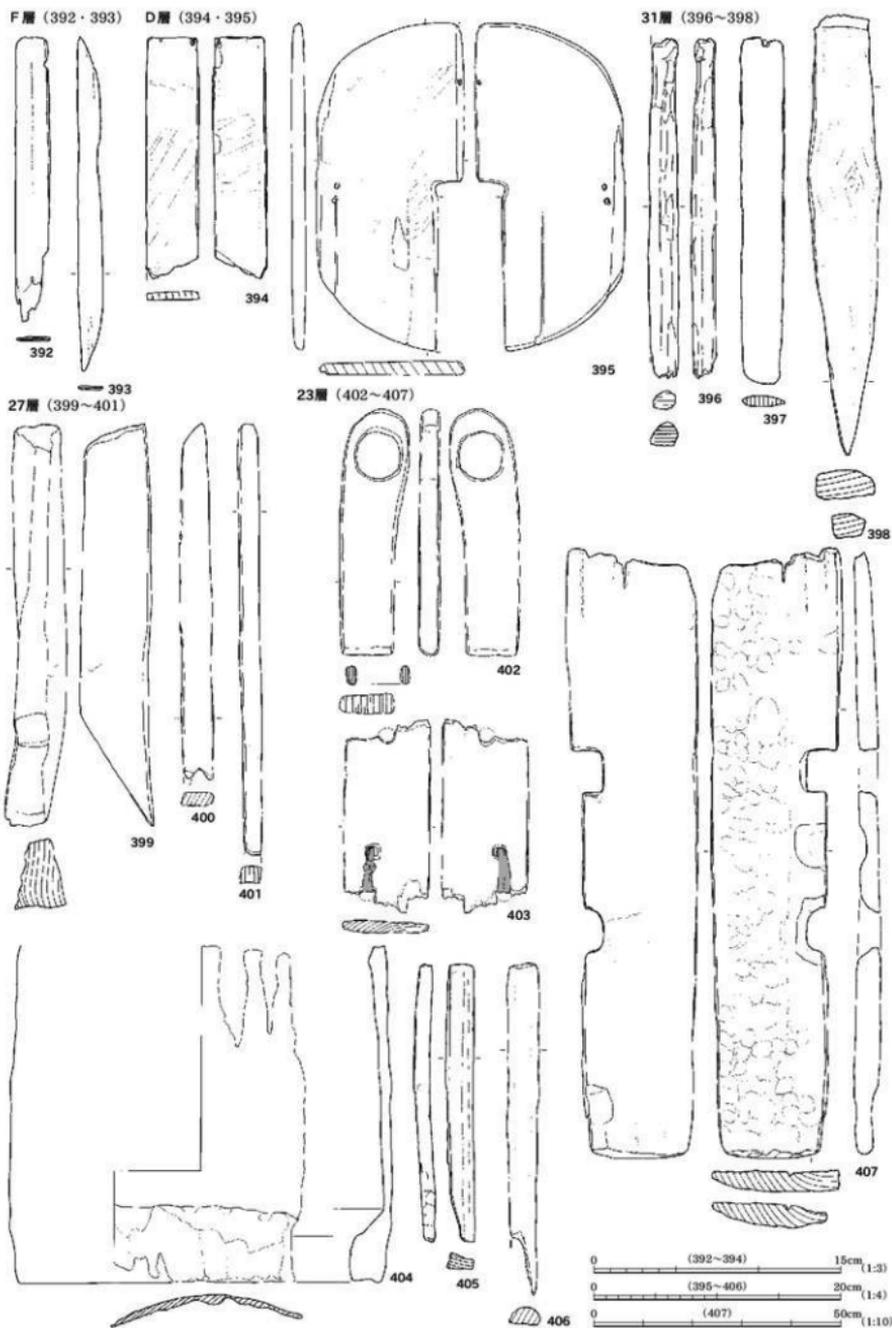
374



■ 樹皮 ■ 赤漆

K・Kc層 (375~388)





23層 (408)



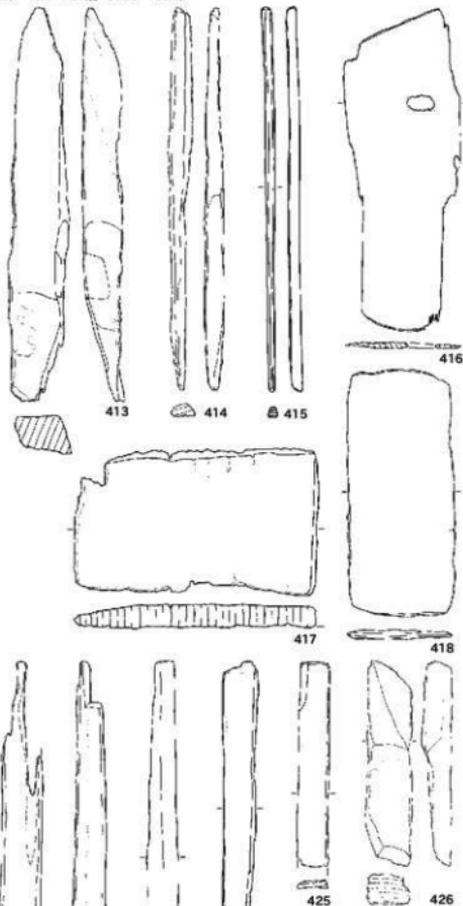
21層 (409・410)



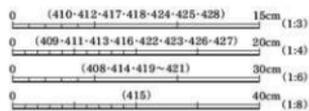
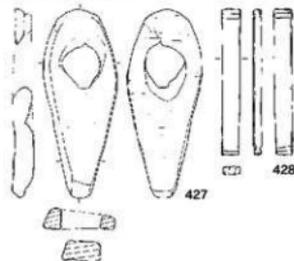
20層 (411・412)



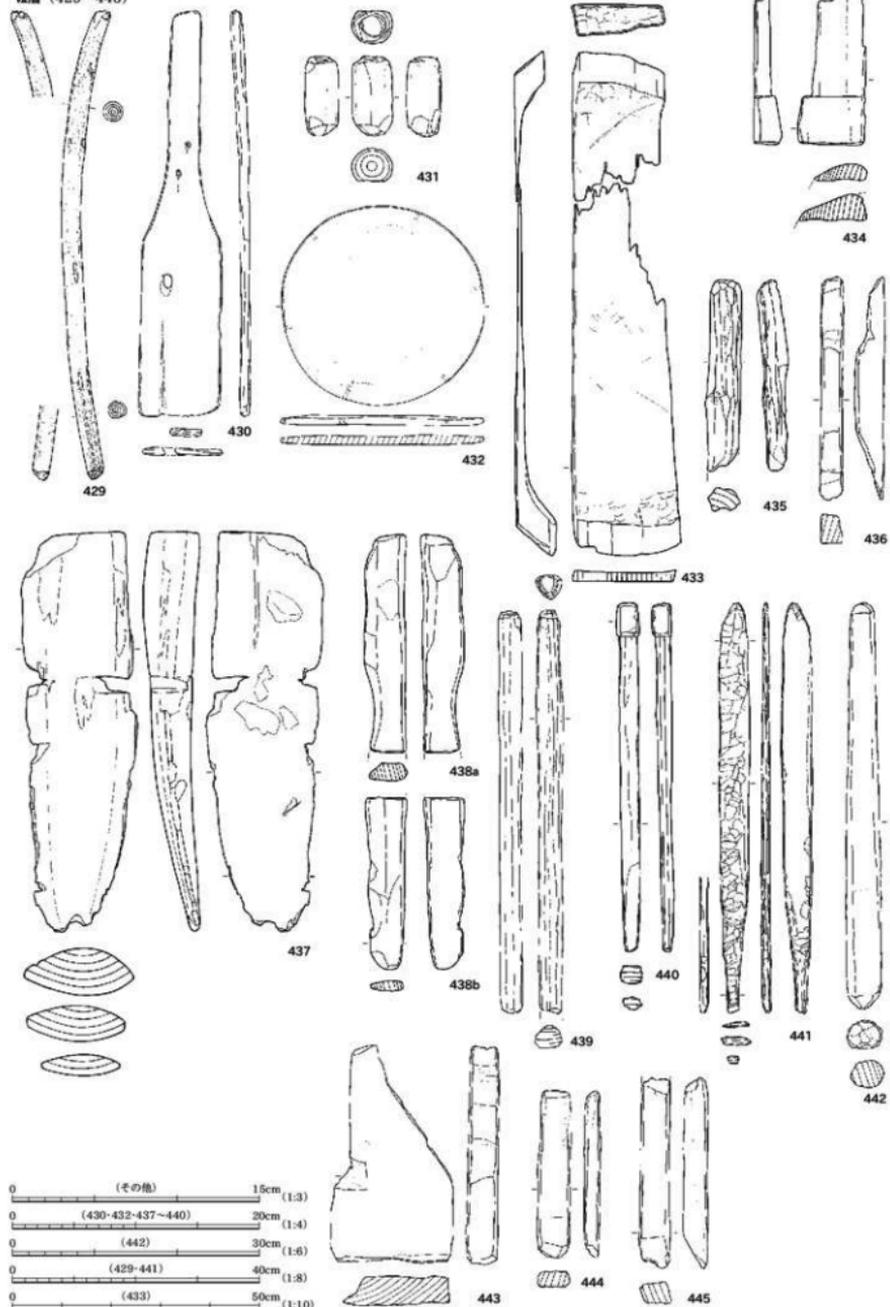
Ⅷa・Ⅷb層 (413~426)



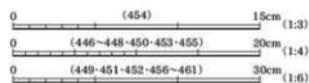
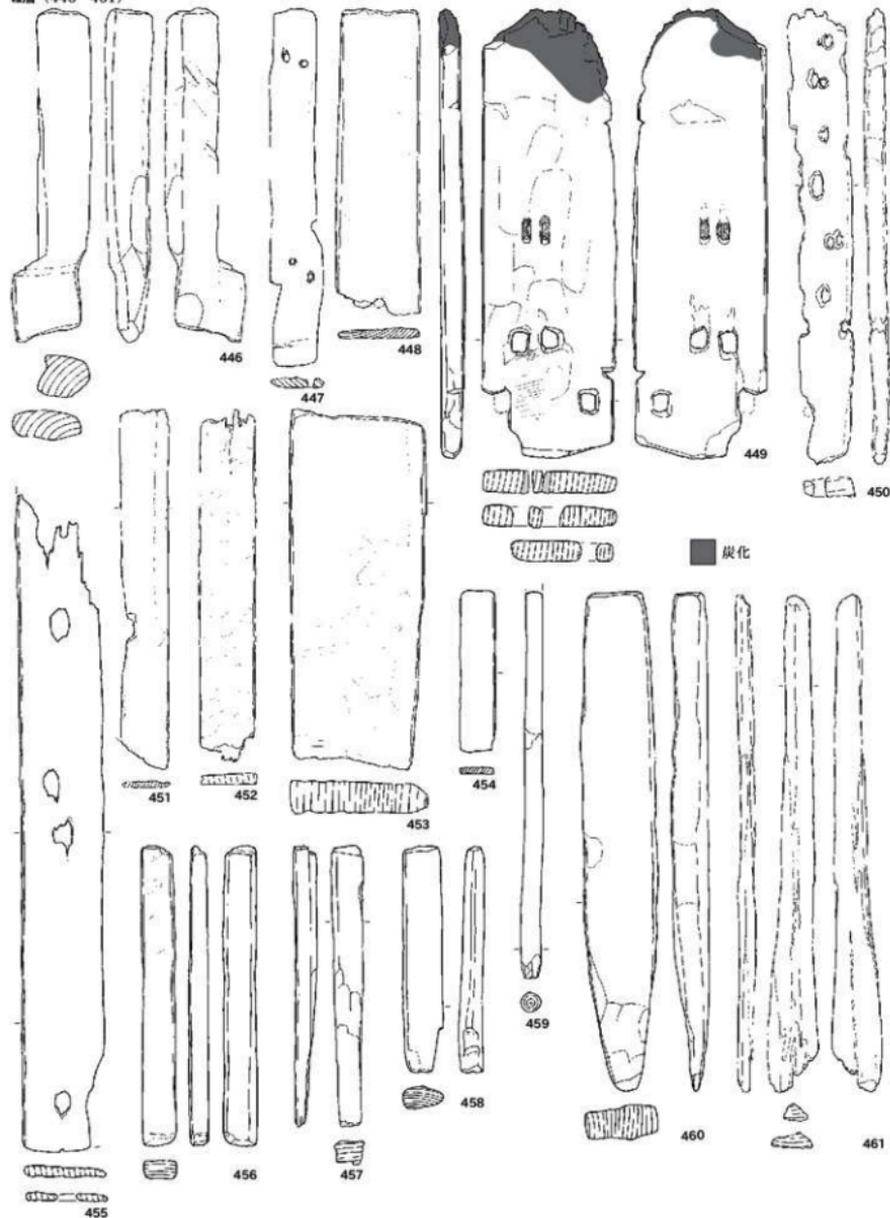
Ⅶ層 (427・428)


 炭化

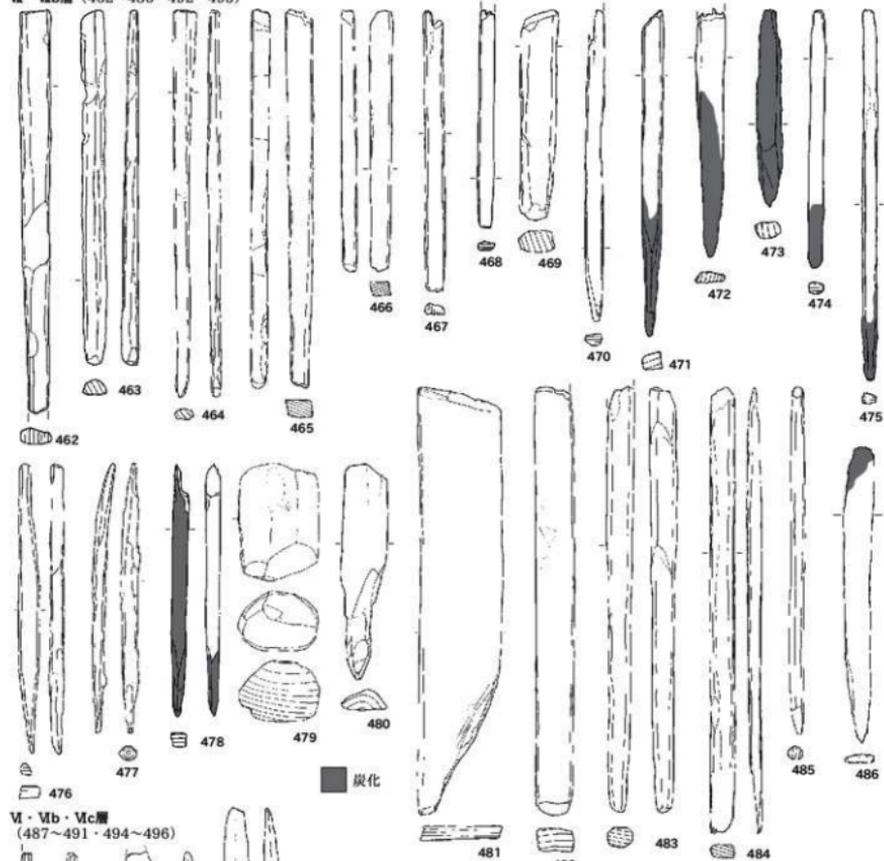
瓦層 (429~445)



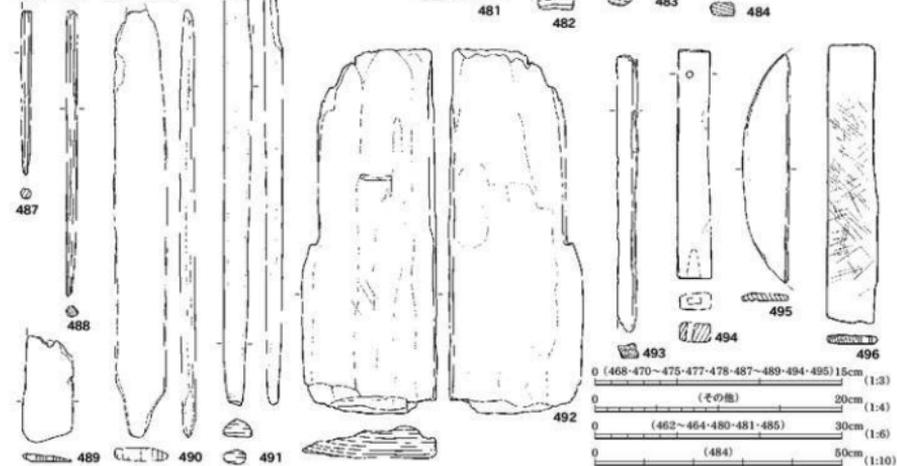
VII層 (446~461)



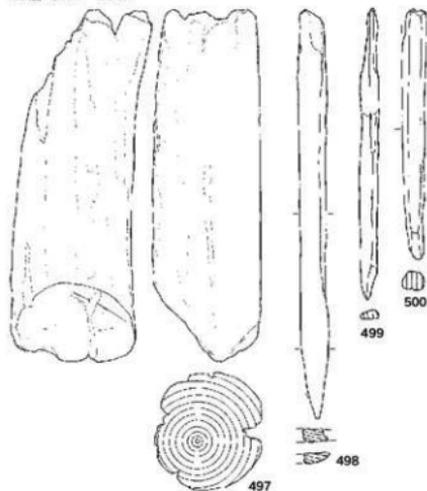
Ⅴ・Ⅴb層 (462~486・492・493)



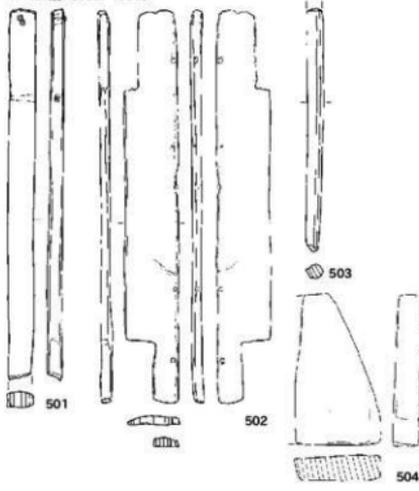
Ⅴ・Ⅴb・Ⅴc層 (487~491・494~496)



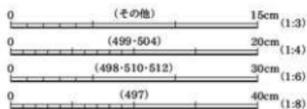
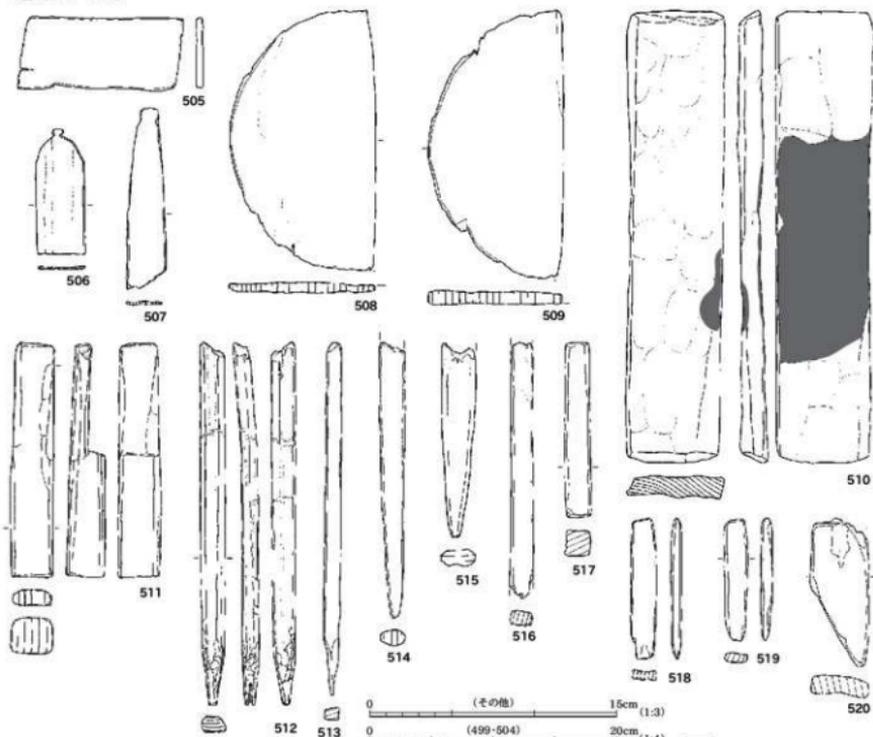
Mb層 (497~500)



V・Va層 (501~504)

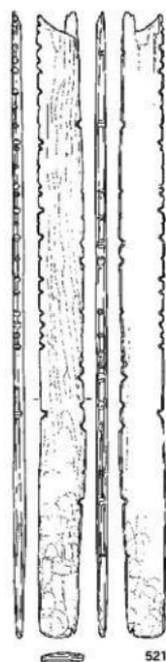


V層 (505~520)



■炭化

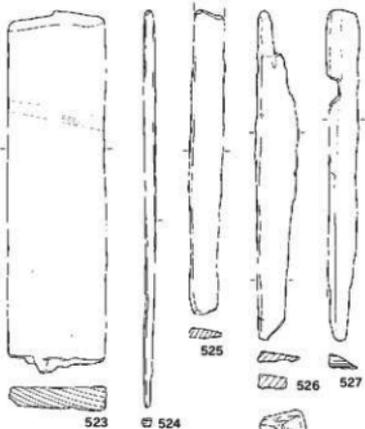
Va~Vd層 (521~535)



521

522

■ 炭化



523

□ 524

525

526

527

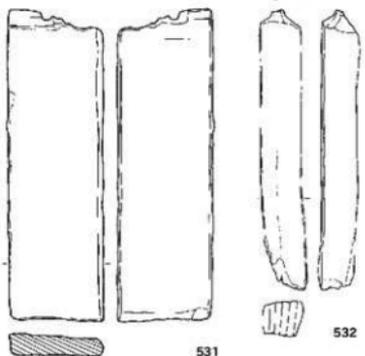


528

529



530

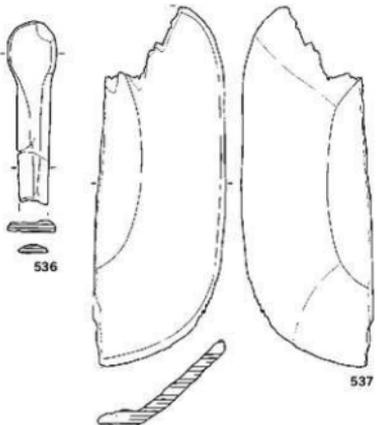


531

532

533

青灰砂層 (536~537)

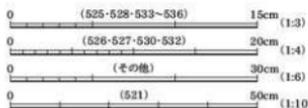


534

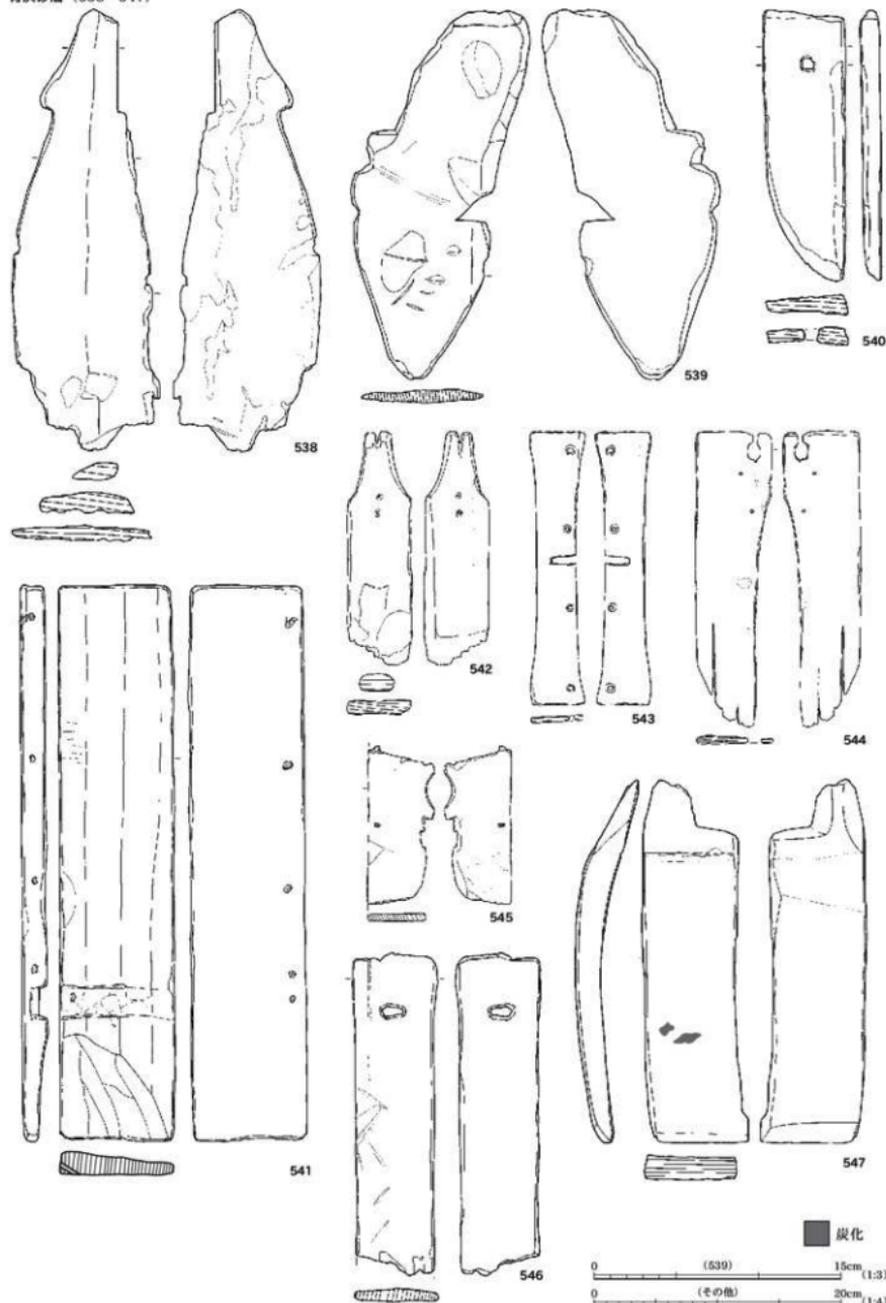
535

536

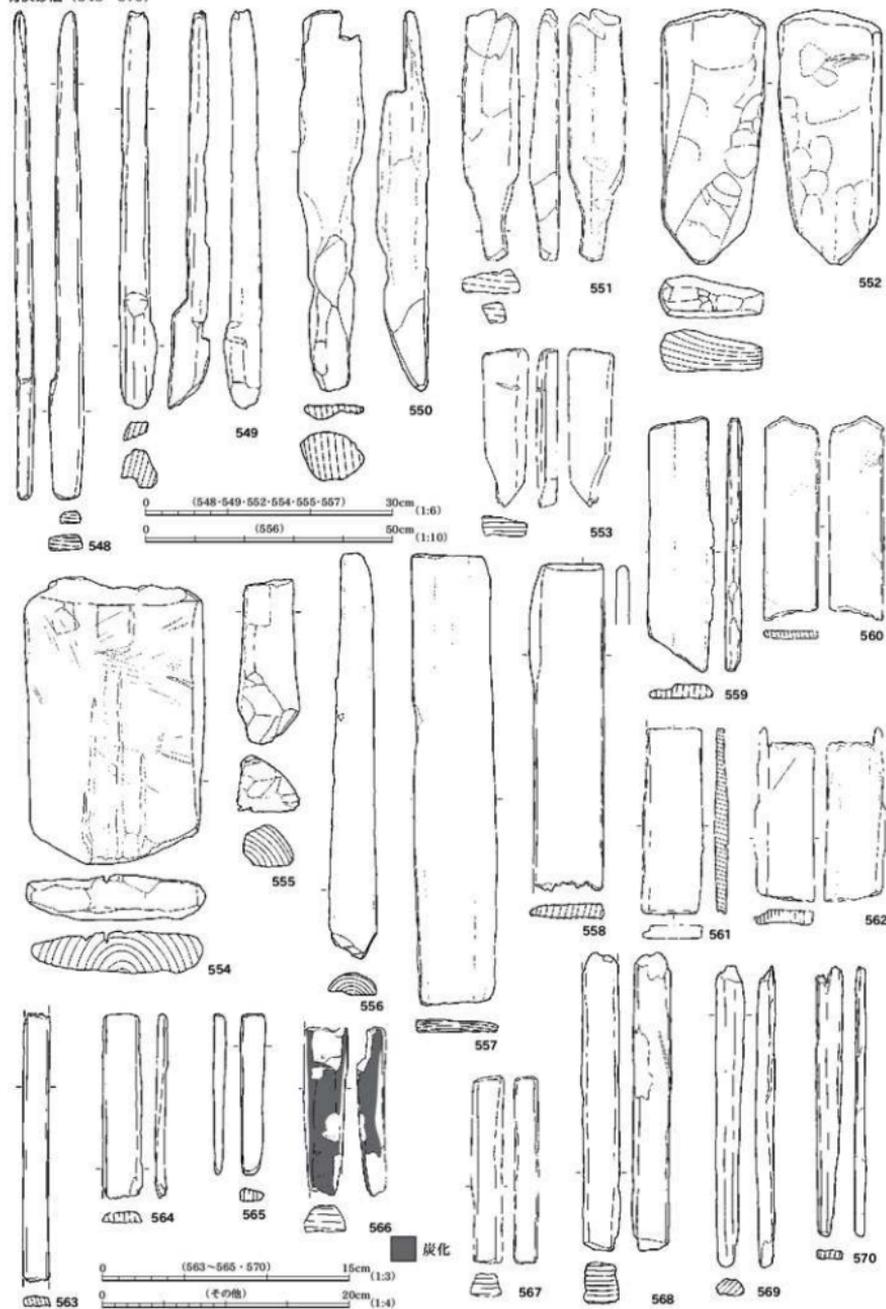
537



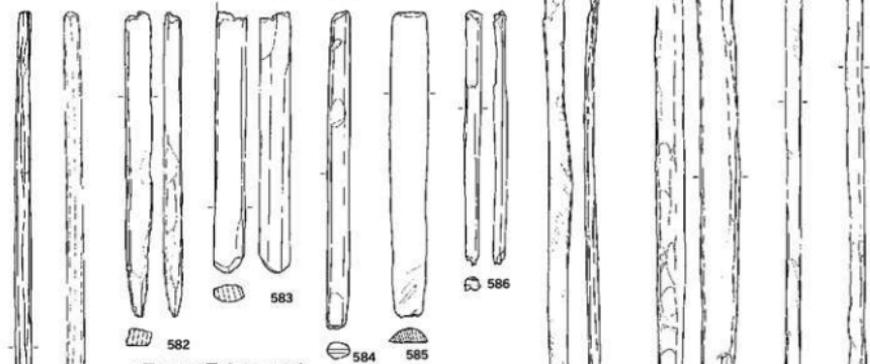
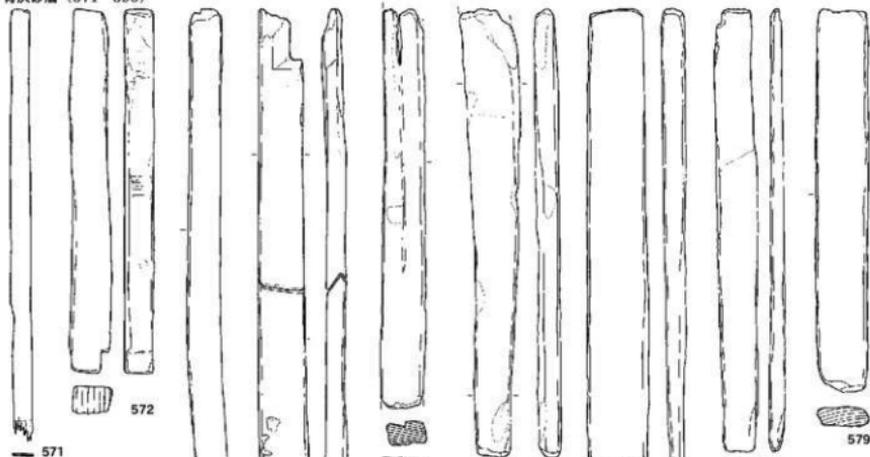
青灰砂層 (538~547)



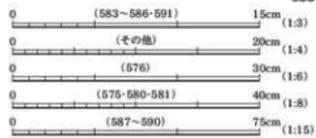
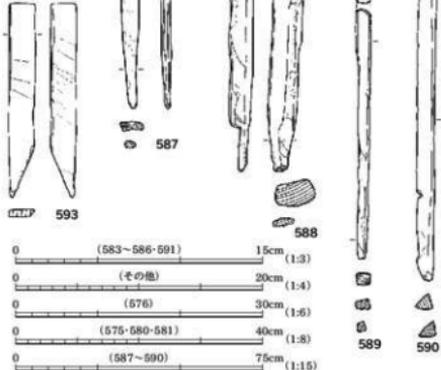
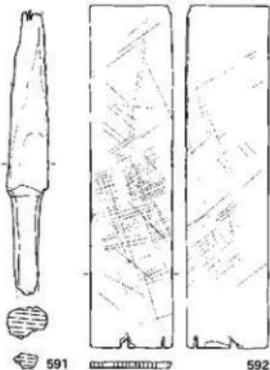
青灰砂層 (548~570)



青灰砂層 (571~590)

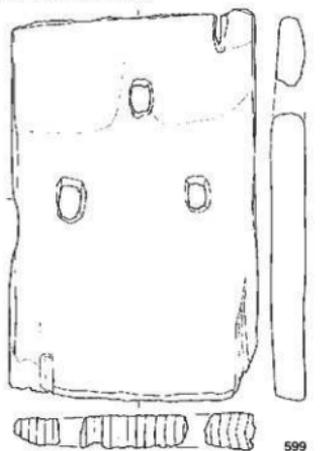
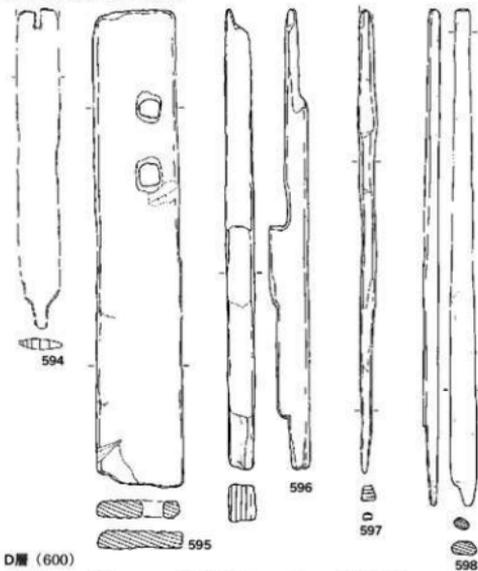


D区A・B・C層 (591~593)

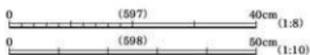
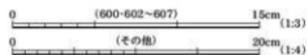
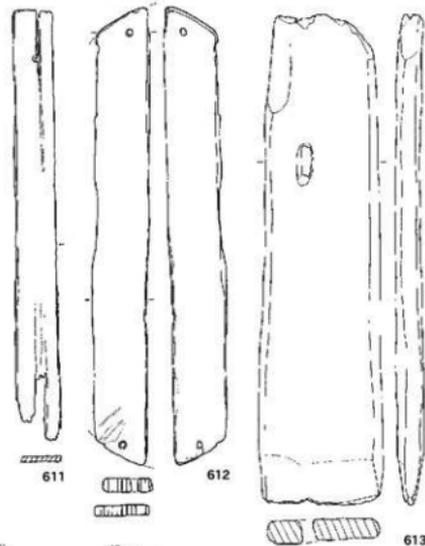
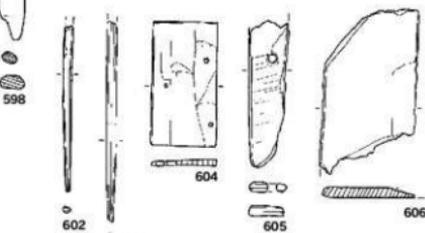
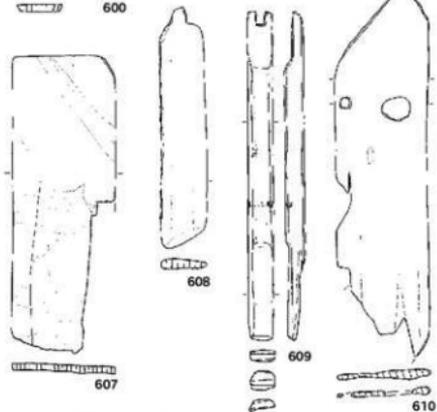
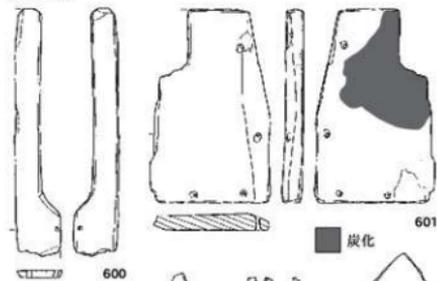


D区A・B・C層 (594~598)

不明など (599~613)



D層 (600)

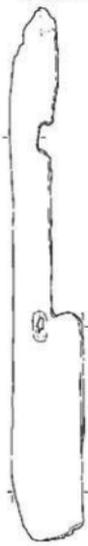


SD50 (614)

不明など (615~625)



614



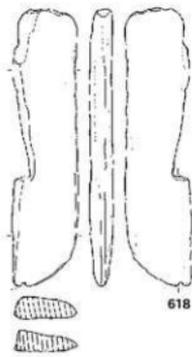
615



616



617



618



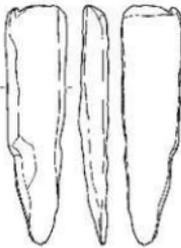
619



620



621



622



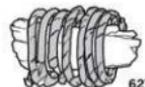
623



624

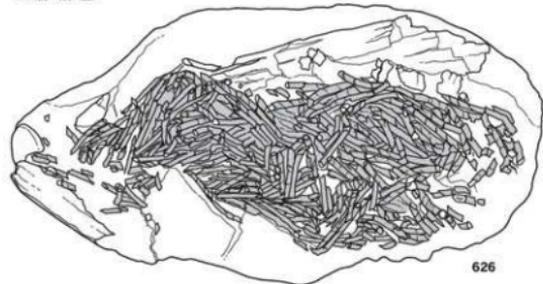


625



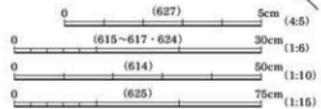
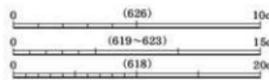
627

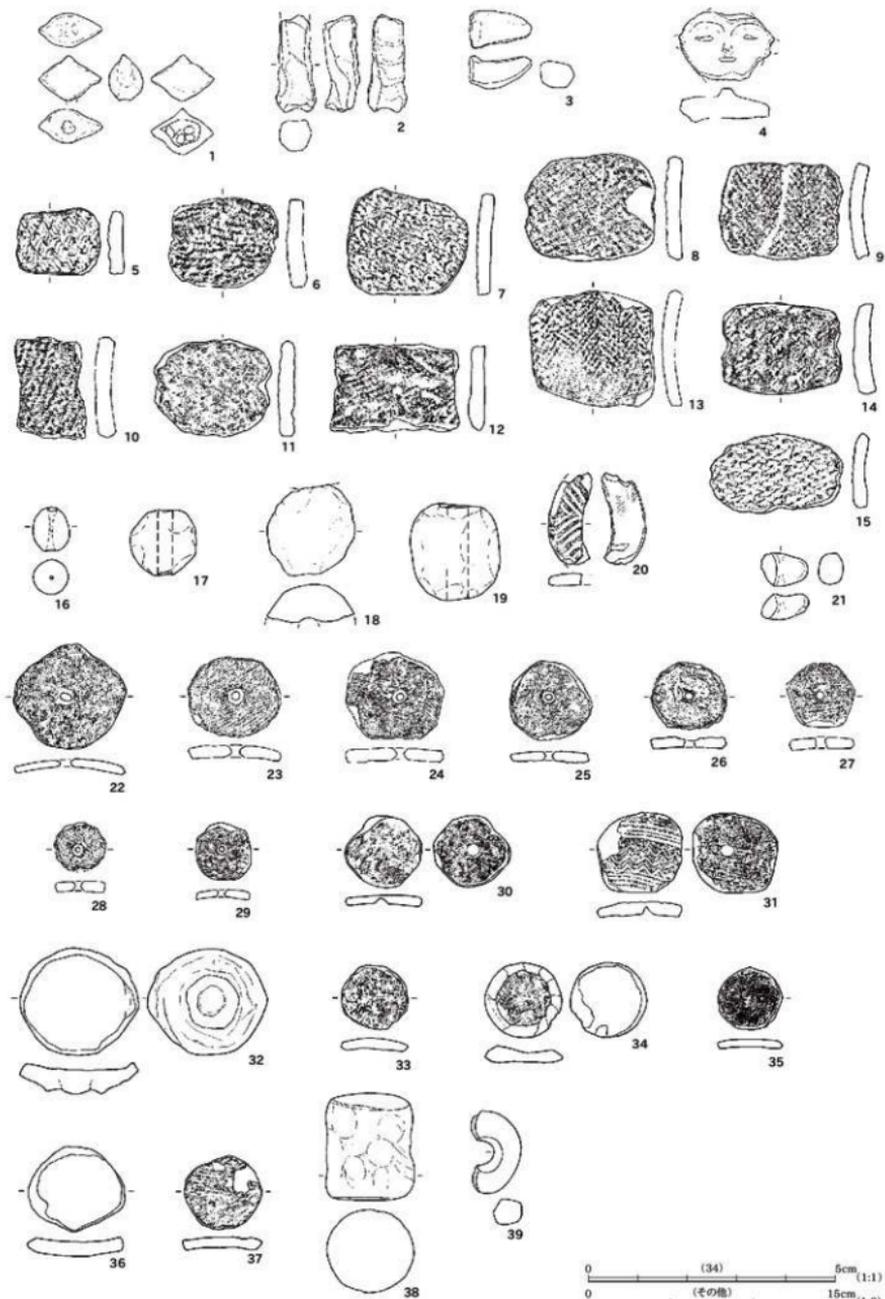
XV層 (漆組)



626

■ 赤色漆





0 (34) 5cm (1:1)
 0 (その他) 15cm (1:3)



遺跡遠景（南から）



A・B区完掘（北東から）



23層土器出土状況（北から）



23層ガラス玉（報告No.585）出土状況（北から）



灰色粘土土器・緑色凝灰岩出土状況（西から）



Mb層勾玉未成品（報告No.520）出土状況（北から）



XIc層紡輪（報告No.372）出土状況（西から）



XII d層土器・籃胎漆器（報告No.366）出土状況（東から）



XVc層漆紐（報告No.626）出土状況（西から）



XV層(6B)赤色ペースト状塊出土状況（西から）



I～Ⅷb層 (西から)



I～Ⅷb層 (西から)



XIIa層～XIIe層 (西から)



I～Ⅷb層 (西から)



XVa層～XVd層 (南から)



Xa層～XIb層 (西から)



XV層～XVI層 (西から)



縄文時代前期の土器



弥生時代中期の土器



古墳時代の土器



漆紐（報告 No.626）と石匙（報告 No.46）・土器（報告 No.796）



脚付盤か（報告 No.358）



并柄（報告 No.370）使用例



漆紐（報告 No.627）



腕輪（報告 No.372）



堅櫛（報告 No.312）



緑色絹灰岩製管玉工成品



ヒスイ製勾玉工成品



石匙 (縄文時代前期前葉)



玦状耳飾・玉類 (縄文時代前期前葉)



磨製石斧 (縄文時代前期前葉)



石鏃 (弥生時代中期)



磨製石斧 (弥生時代中期)



石製品 (弥生時代中期)



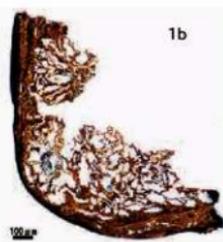
ヒスイ原石・分割工程品



玉類 (弥生～古墳時代)



漆膜分析 試料 No.1 (報告 No.626)



試料 No.1 横断面



漆膜分析 試料 No.2 (報告 No.366)



報告 No.626

2.5 ×



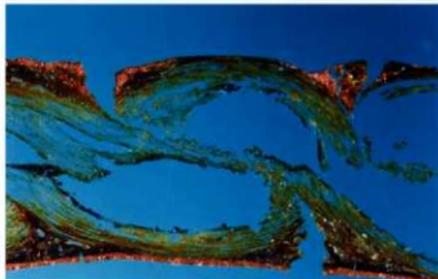
上：報告 No.626 下：報告 No.627

5.0 ×



横断面

上：50 × 下：90 ×



縦断面

上：14.5 × 下：50 ×



XI層上面 (南から)



XI層上面 (東から)



作業風景 (A・B区XI層上面の清掃 北東から)



XI層上面 (南から)



F区発掘 (東から)



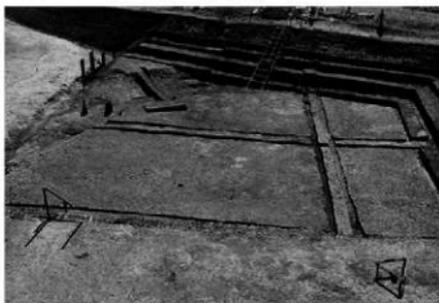
F区VIIb層上面(東から)



E区VIIa層上面(東から)



F区X層上面(東から)



E区VIIb層上面(東から)



F区XII a層上面(東から)



E区XII a層上面(東から)



F区XII b層上面(東から)



E区完掘(東から)



G区X層上面検出状況(東から)



I区Va層上面(東から)



G区XIIIa層上面(東から)



I区VIb層上面(東から)



D区完掘(北から)



I区XVe層上面(東から)



H区完掘(東から)



I区完掘(東から)



I～Ⅱb層（西から）



XVa層～XVI層（西から）



XIIa層～XIIc層（西から）



SX87 検出状況（東から）



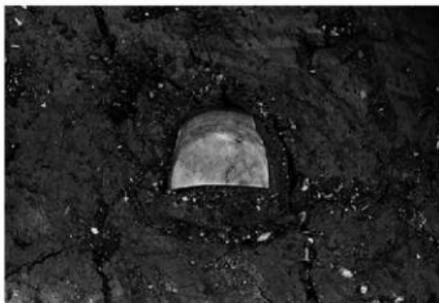
XVa層～XVc層（西から）



10・11A V層遺物出土状況（東から）



XV～XVI層（西から）



V層(58)須恵器無台杯(報告No.764)出土状況(南から)



98 杭 (南から)



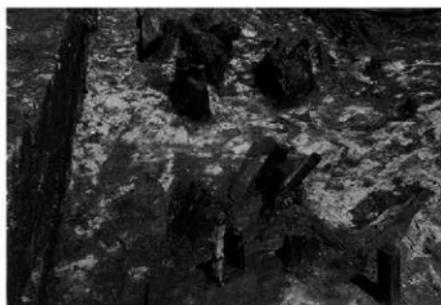
SX88 青灰砂層木製品 (備 報告 No.537) 出土状況 (南から)



10A 杭 (南から)



SX88 青灰砂層木製品 (備 報告 No.70) 出土状況 (南から)



11A 杭 (南から)



SX88 青灰砂層木製品出土状況 (南から)



SX88 青灰砂層木製品出土状況 (南から)



SX88 青灰砂層木製品 (備 報告 No.547) 出土状況 (南から)



SX88 青灰砂層土器（報告 No.705・715・710）出土状況（東から）



SX88 青灰砂層土器出土状況（西から）



SX88 青灰砂層土器（報告 No.705・715・710）出土状況（南から）



SX88 青灰砂層土器（報告 No.697）出土状況（東から）



Mb 層土器（報告 No.725）出土状況（西から）



SX88 青灰砂層土器（報告 No.711）出土状況（東から）



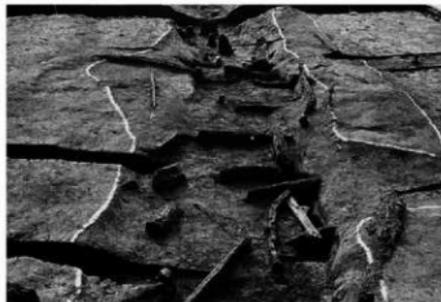
Mb 層須恵器（報告 No.729）出土状況（東から）



Mb 層須恵器（報告 No.728）出土状況（南から）



SD33・水田跡完掘 (西から)



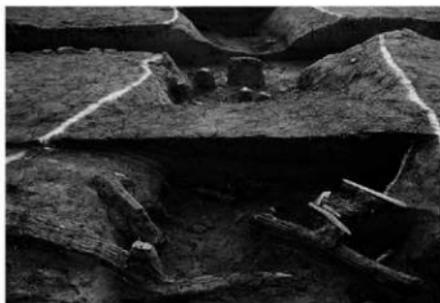
SD33 木製品出土状況 (西から)



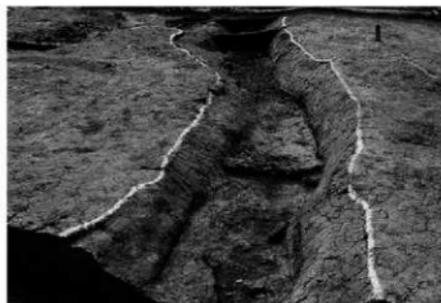
SD33 断面 (西から)



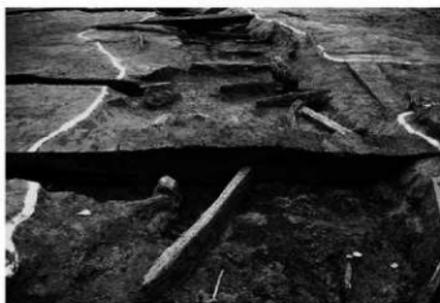
SD33 木製品出土状況 (西から)



SD33 断面 (西から)



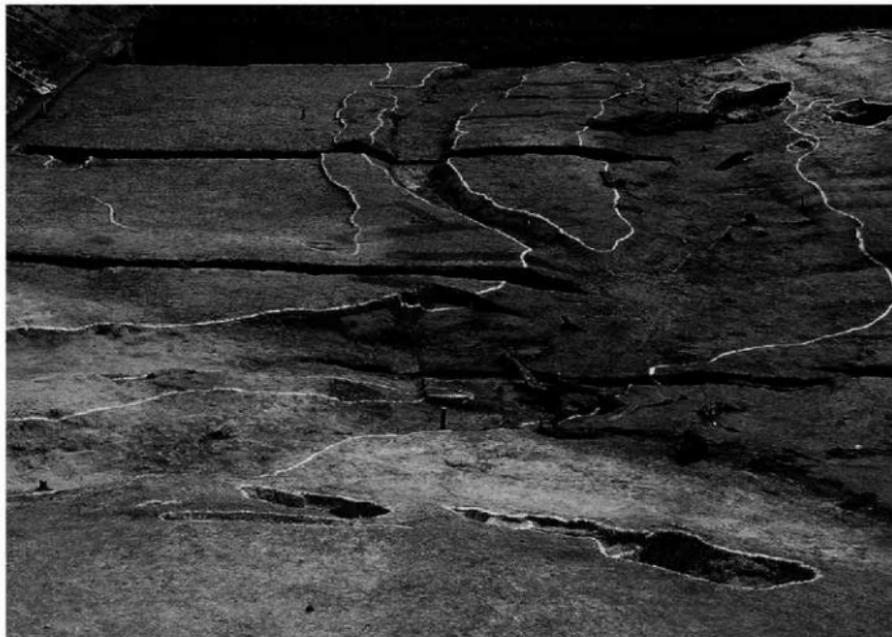
SD33 完掘 (西から)



SD33 断面 (西から)



畦畔断面 (西から)



SD50・33・水田跡完照



SD50 断面 (西から)



SD50 断面 (西から)



SD50 断面 (西から)



SD50 断面 (東から)



SX84 検出状況 (西から)



SX84 検出状況 (南から)



SD50・51 検出状況 (北西から)



SX84 検出状況 (西から)



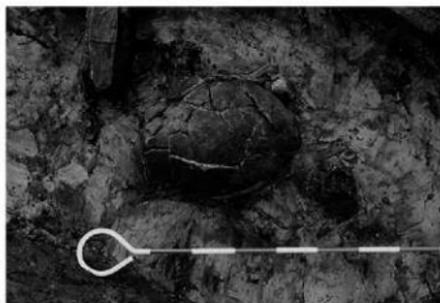
SD50・51 検出状況 (西から)



SD50 3層土器(報告No.541)出土状況(北から)



SD50 3層土器(報告No.833)出土状況(東から)



SD83 土器(報告No.642)出土状況(南から)



SD83 1層土器(報告No.637)出土状況(東から)



SD83 1層土器(報告No.631)出土状況(南から)



SD50 1層土器(報告No.640)出土状況(西から)



SD83 1層土器出土状況(南から)



SD50 3層石器(左 報告No.390, 右 報告No.556)出土状況(西から)



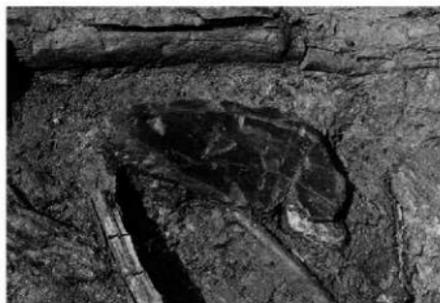
SD50 3 層木製品出土状況 (南から)



SD50 3 層ひょうたん出土状況 (西から)



SD50 3 層木製品出土状況 (東から)



SD50 3 層木製品 (高杯 報告 No.132) 出土状況 (南から)



SD50 3 層木製品 (洋柄 報告 No.130) 出土状況 (南から)



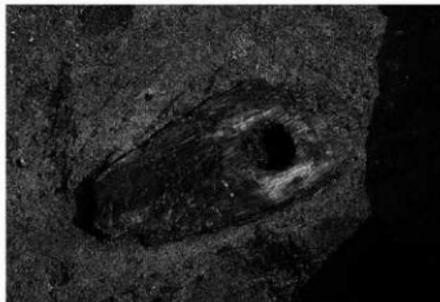
SD50 3 層木製品 (報告 No.614) 出土状況 (南から)



SD50 3 層木製品 (櫂 報告 No.140) 出土状況 (南から)



SD50 3 層木製品 (報告 No.137) 出土状況 (西から)



SD51 3層木製品(嵌身 報告No.264) 出土状況(南から)



SD83 3層木製品(整件 報告No.273) 出土状況(南から)



SD50 1層木製品(容器 報告No.133) 出土状況(西から)



SD50 1層木製品(櫂 報告No.139) 出土状況(南から)



SD50 1層木製品(梯子 報告No.141) 出土状況(西から)



SD47 3層木製品出土状況(南から)



SD47 2層木製品(報告No.81) 出土状況(南から)



SD47 2層木製品(嵌身 報告No.69, 榎棒 報告No.75) 出土状況(南から)



SK85 木製品検出状況 (西から)



SK85 木製品検出状況 (南から)



SK85 完掘 (南から)



SK59 断面 (東から)



SK59 完掘 (東から)



SK6 断面 (北から)



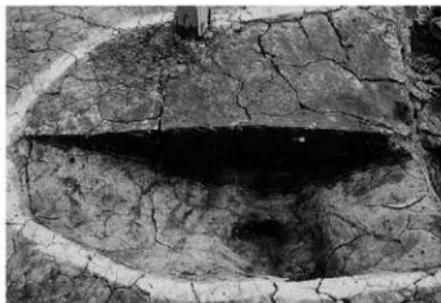
SK6 遺物出土状況 (西から)



SK6 遺物出土状況 (西から)



SK40 断面 (北から)



SK43 断面 (南から)



SK40・43 完掘 (南から)



SK70 遺物出土状況 (南から)



SK70 遺物出土状況 (北から)



SK55 断面 (南から)



SK55 木製品出土状況 (南から)



SK55 土器出土状況 (南から)



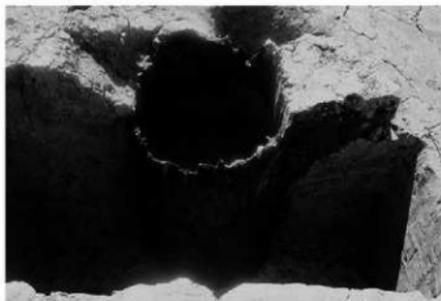
SK55 土器出土状況 (南から)



SK55 土器出土状況 (南から)



SK55 完掘 (西から)



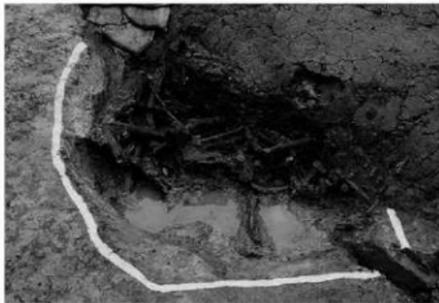
SE89 断面 (西から)



SE89 土器出土状況 (南から)



SK49 断面 (西から)



SK49 遺物出土状況 (西から)



SK72 断面 (南から)



SK74 断面 (南から)



SK72・73・74 (南から)



SK95 断面 (東から)



SK95 木製品出土状況 (兼 報告 No.311) (東から)



SK95 完掘 (東から)



23層(10B)土器出土状況(南から)



23層(7B)土器出土状況(北から)



23層(8B)土器出土状況(北から)



23層(7B)土器出土状況(南から)



灰色粘土層(4・5D)土器出土状況(東から)



作業風景 (灰色粘土層土器出土状況清掃 東から)



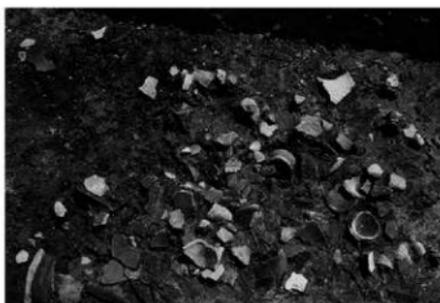
灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (南から)



灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (南から)



灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (南から)



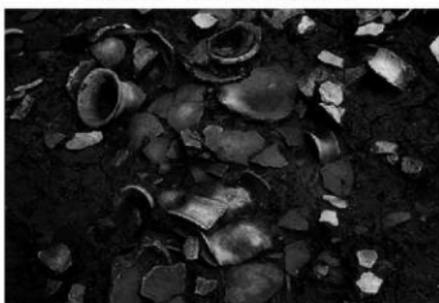
灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (南から)



灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (南から)



灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (東から)



灰色粘土層 (4・5D) 土器出土状況 (東から)



灰色粘土層(4・5D)土器出土状況(東から)



灰色粘土層(4・5D)土器出土状況(北から)



灰色粘土層(4・5D)土器出土状況(東から)



灰色粘土層(4・5D)土器・石器出土状況(南から)



灰色粘土層(4・5D)石器出土状況(東から)



F層(3D)土器出土状況(南から)



F層(3D)土器出土状況(南から)



F層(3D)土器出土状況(南から)



XII層 (10A) 土器 (報告 No.359) 出土状況 (南から)



XII層 (68) 土器出土状況 (南から)



XIIb層 (4D) 土器 (報告 No.339) 出土状況 (南から)



XIIb層 (4C) 土器 (報告 No.333) 出土状況 (北から)



XIIb層 (7A) 土器 (報告 No.347) 出土状況 (東から)



XIIb層 (6B) 土器 (報告 No.353) 出土状況 (南から)



XIIIa層 (7B) 土器 (報告 No.323) 出土状況 (南から)



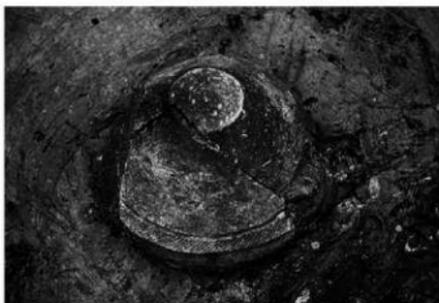
XIIIa層 (5C) 土器 (報告 No.313) 出土状況 (南から)



XIIIb 層 (9B) 土器 (報告 No.308) 出土状況 (西から)



XIIIb 層 (4D) 土器出土状況 (西から)



XIIIe 層 (5B) 土器 (報告 No.305) 出土状況 (北から)



XIIIe 層 (5U) 土器 (報告 No.297) 出土状況 (北から)



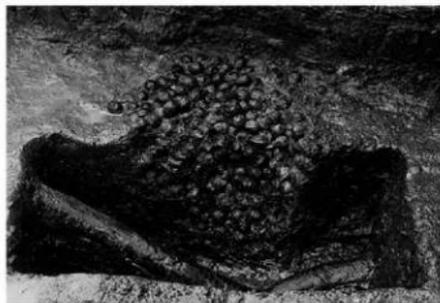
XIIIe 層 (5U) 木製品 (報告 No.358) 出土状況 (南から)



XIV 層上面 (8A) 樹木根検出状況 (西から)



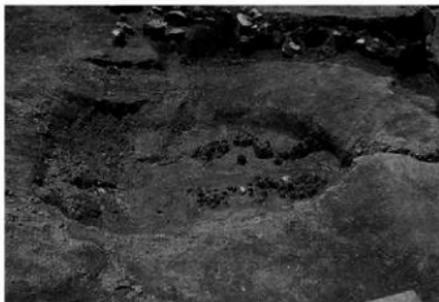
SK97 検出状況 (東から)



SK97 断面 (東から)



SK93 断面 (東から)



SK93 クルミ種子出土状況 (東から)



SK94 断面 (西から)



SK94 クルミ種子出土状況 (東から)



SK94 完掘 (東から)



SK90 断面 (西から)



XVc 層 (10・11AB) 土器出土状況 (北から)



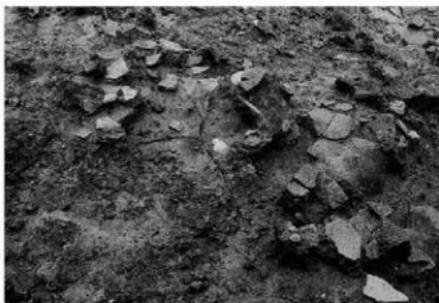
XVc 層 (10AB) 土器出土状況 (東から)



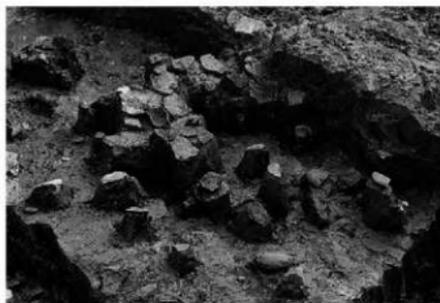
XVc層 (10A19・20) 土器出土状況 (東から)



XVc層 (10B1・2) 土器出土状況 (北から)



XVc層 (10A17・18) 土器出土状況 (東から)



XVc層 (10A) 土器出土状況 (東から)



XVc層 (11A11・16) 土器出土状況 (北から)



XVc層 (6B17・18) 土器出土状況 (北から)



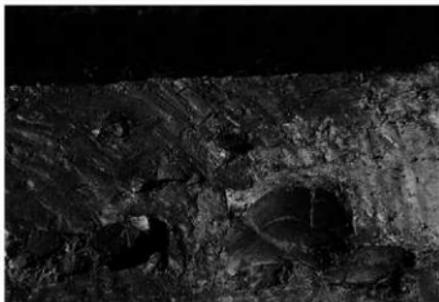
XVd層 (7A22) 土器出土状況 (西から)



XVc層 (10B1) 土器出土状況 (南から)



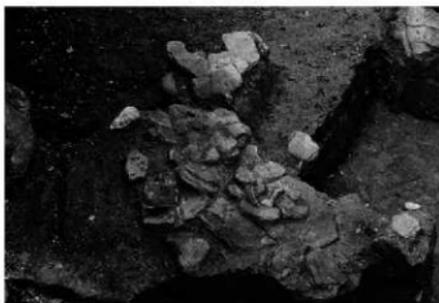
XVc 層 (9A4・9B23) 土器出土状況 (北から)



XVc 層 (10A11・12) 土器出土状況 (南から)



XVc 層 (10B1・5) 土器出土状況 (東から)



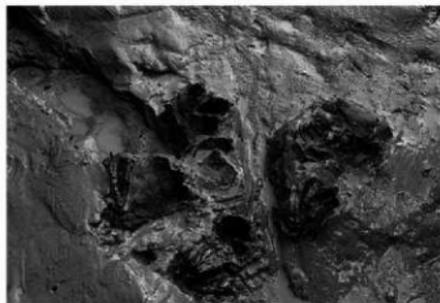
XVc 層 (11A) 土器出土状況 (北から)



XVc 層 (6B14・19) 土器出土状況 (東から)



XVc 層 (9B5) 土器出土状況 (北から)



XVc 層 (103C) 土器出土状況 (東から)



XVc 層 (103C) 石器 (石錘) 出土状況 (東から)



冬の作業風景 (1994年12月 D区 北から)



夏季の集中豪雨による調査区水没 (1995年8月 東から)



矢板打設後のX3/崩掘削 (1996年10月 西から)



矢板の打設 (1996年9月 南から)



矢板打設後の作業風景 (1996年9月 南西から)



矢板打設後の作業風景 (1997年5月)



1区の下層確認作業 (鋼管の打設 南から)



1区の下層確認作業 (ワイヤーをかけた交換の抜き取り 南から)

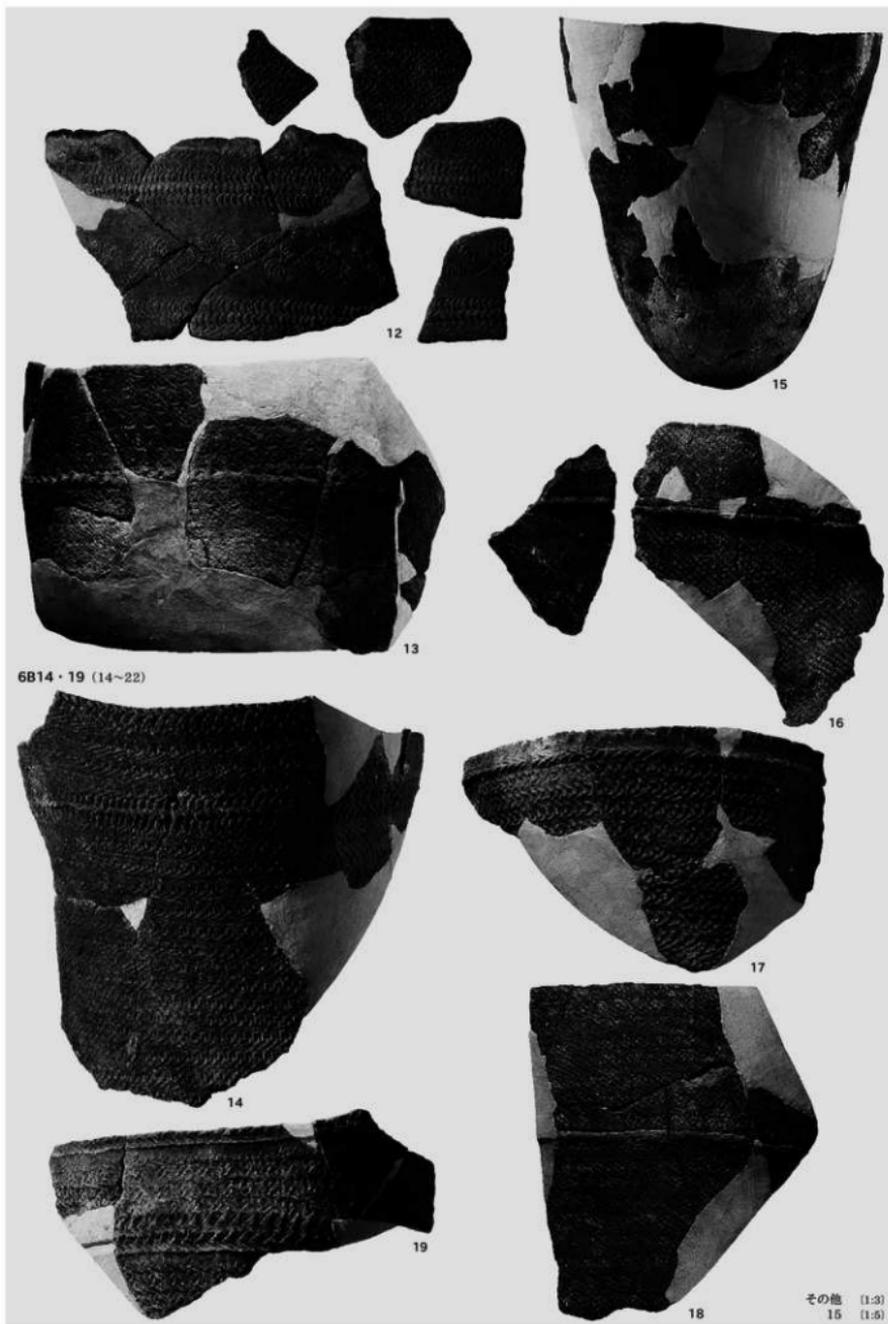


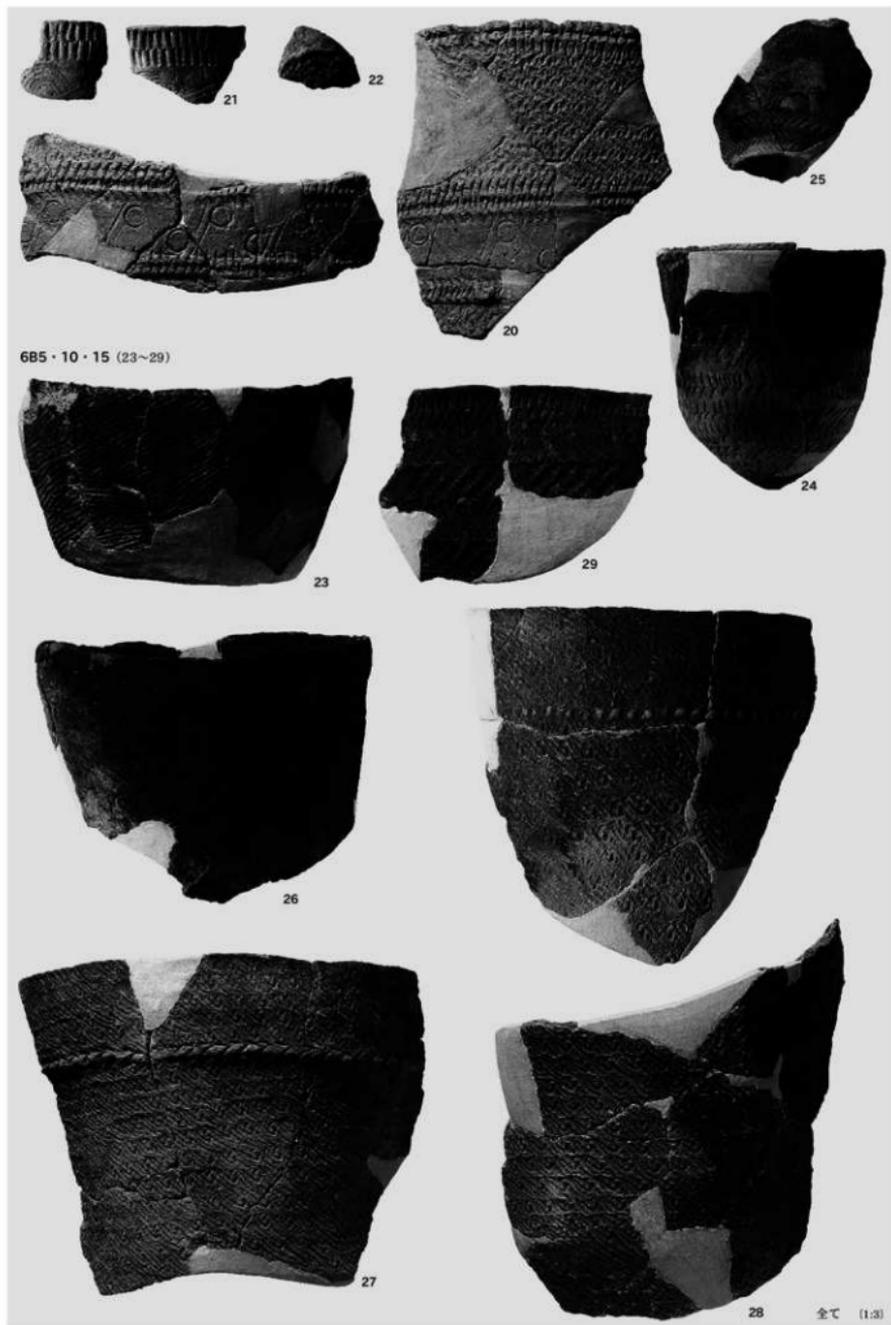
溶接を取り外した鋼管中の土塊

6B17・18 (1~13)



その他 (1.3)
5・6 (1.8)





6B5 (30~35)



30



32



31



33



34

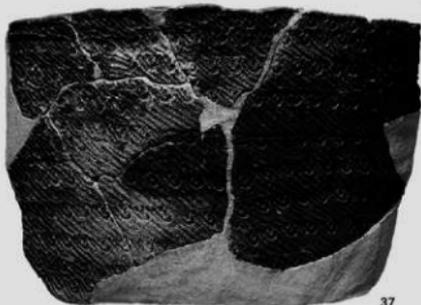


35

6B9 (36~38)



36



37



38

その他 (1:3)
31 (1:6)

6B13・14 (39・40)



39



40



48



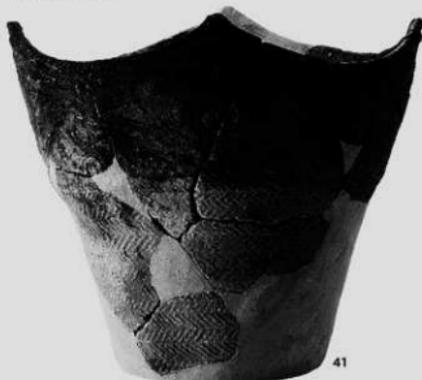
49



50



6A・6B (41~71)



41



51



53



42



44



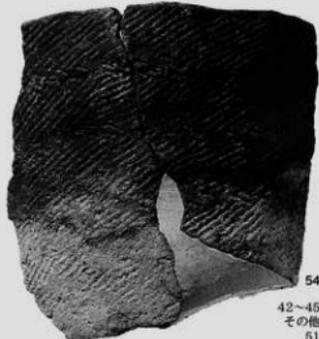
46



43

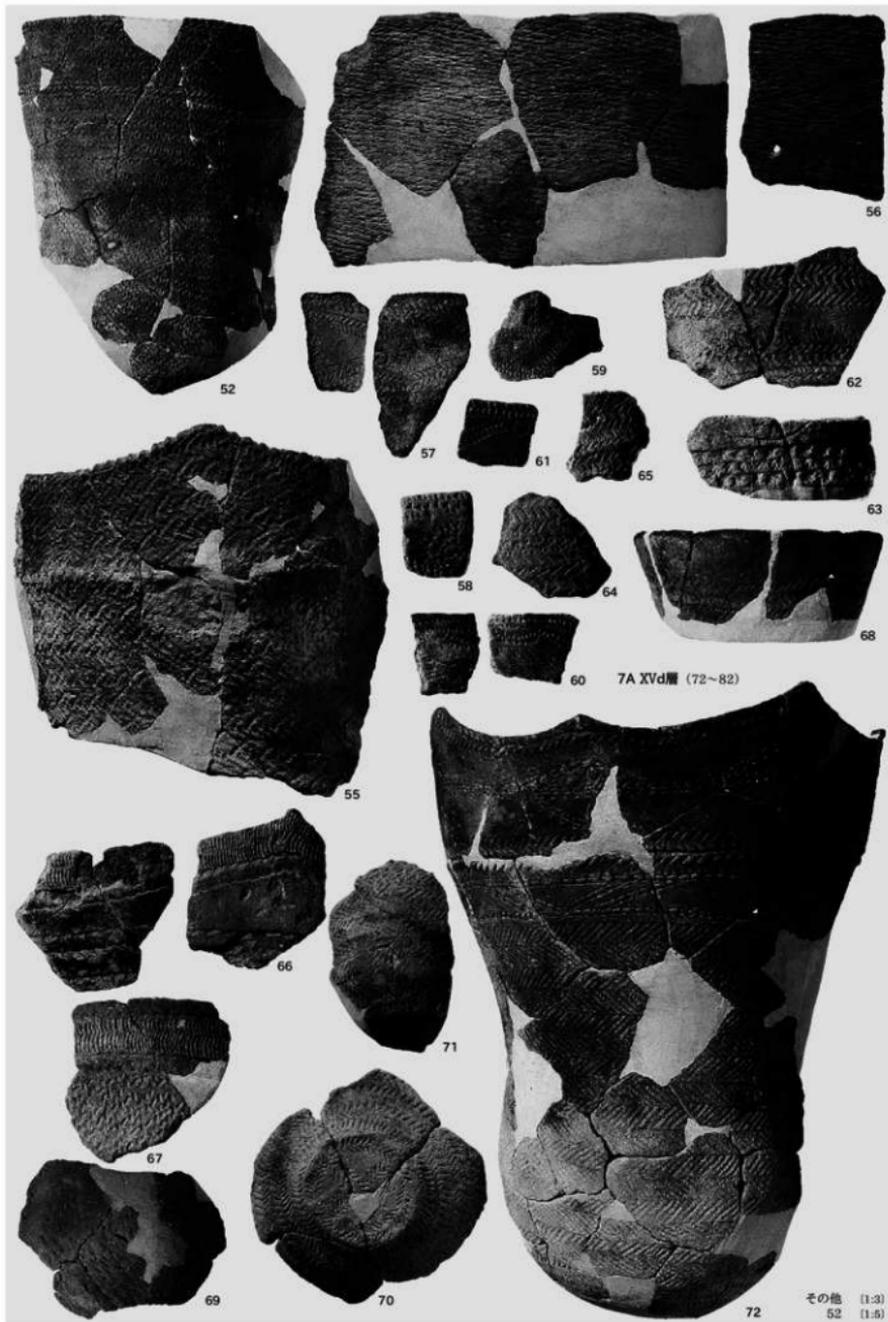


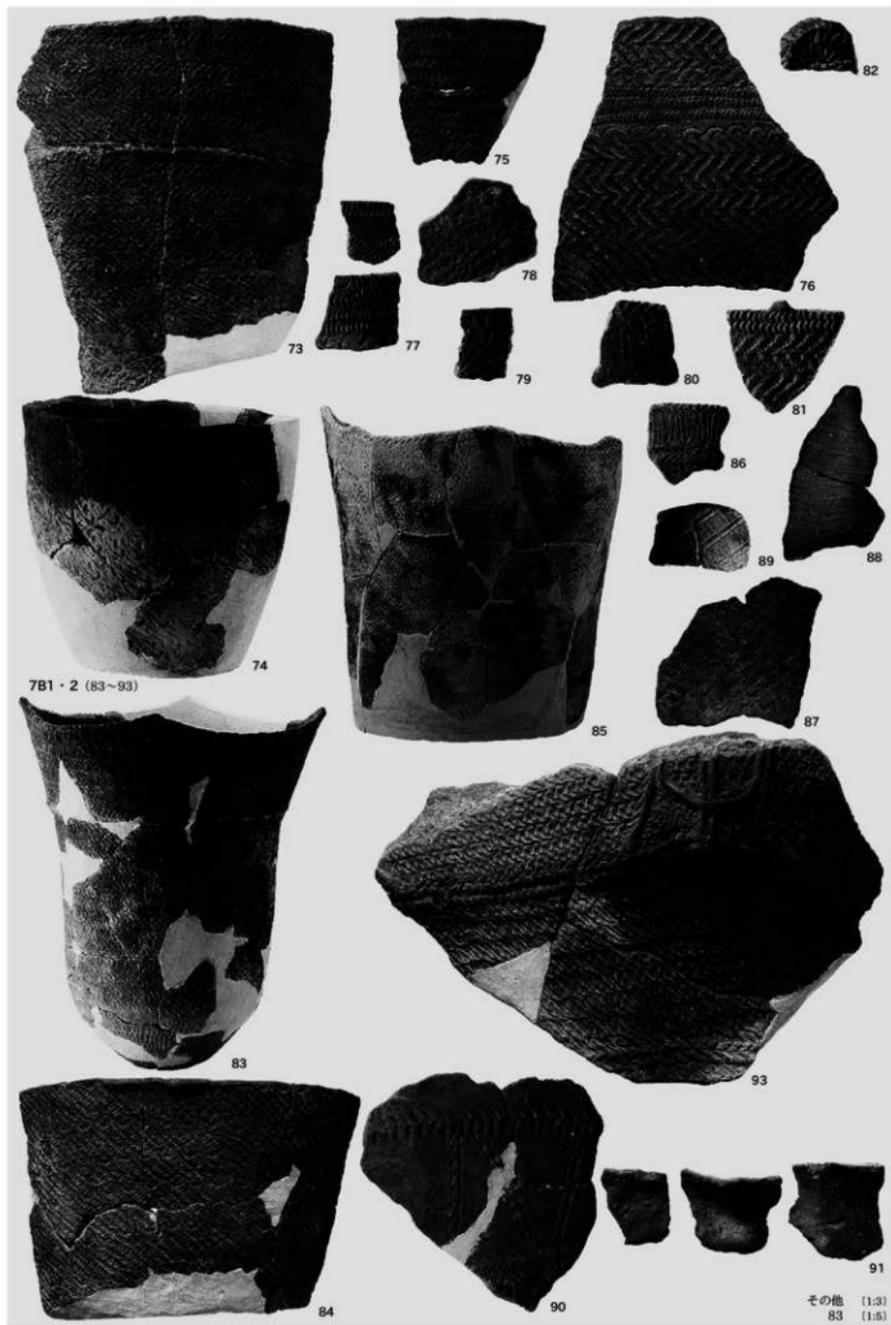
47



54

42~45 (1:2)
その他 (1:3)
51 (1:8)





7A・B (94~118)



92



94



95



97



98



99



105



100



106



101



107



110



102



108



111



112



103



104



109

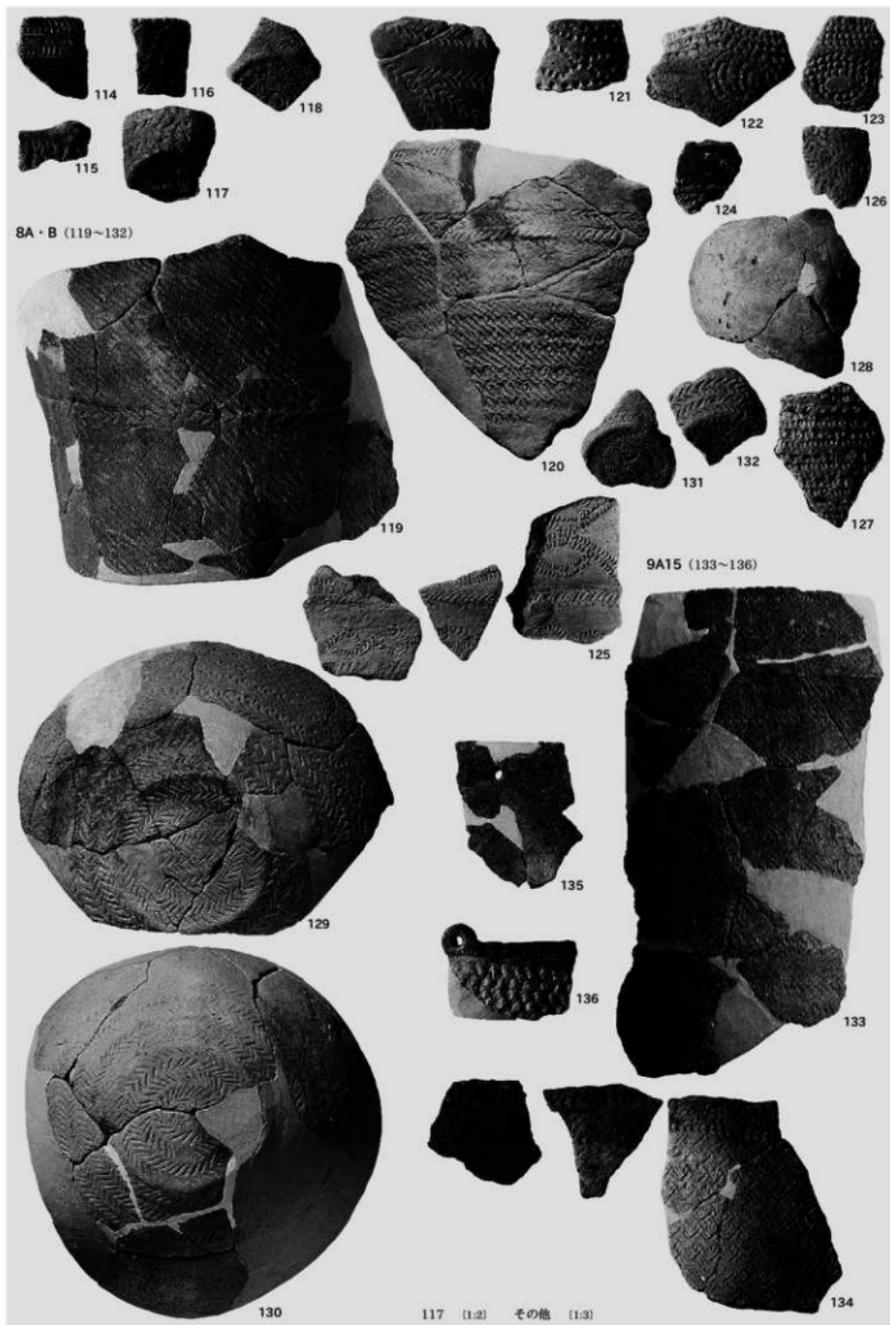


113



96

101 (1-2)
その他 (1-3)



985・10 (137~140)

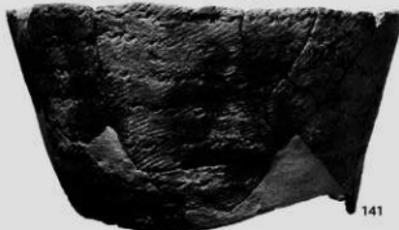


137 (上)

9A・B (141~156)



138



141



137 (下)



139



140



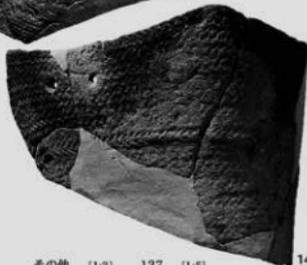
143



142

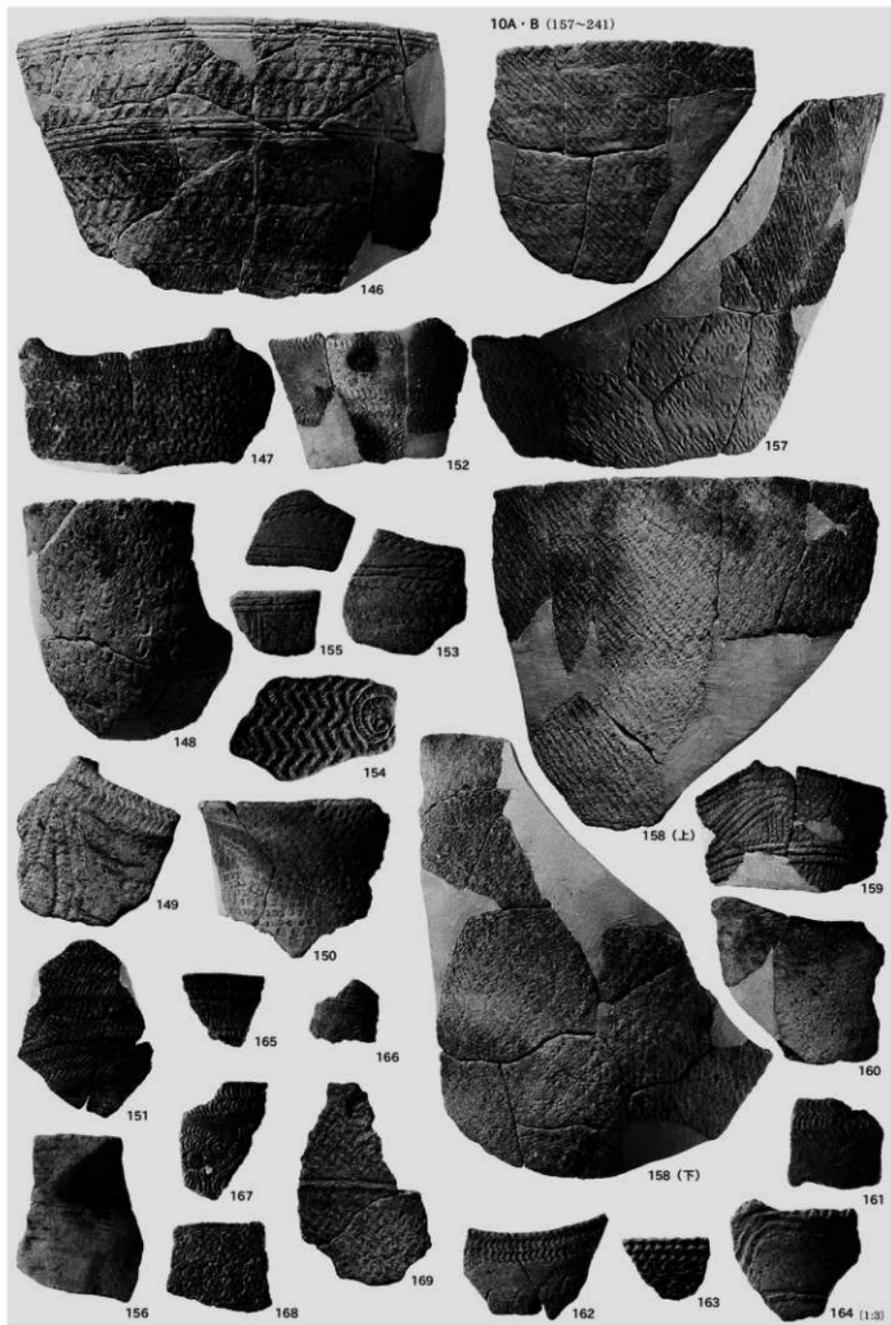


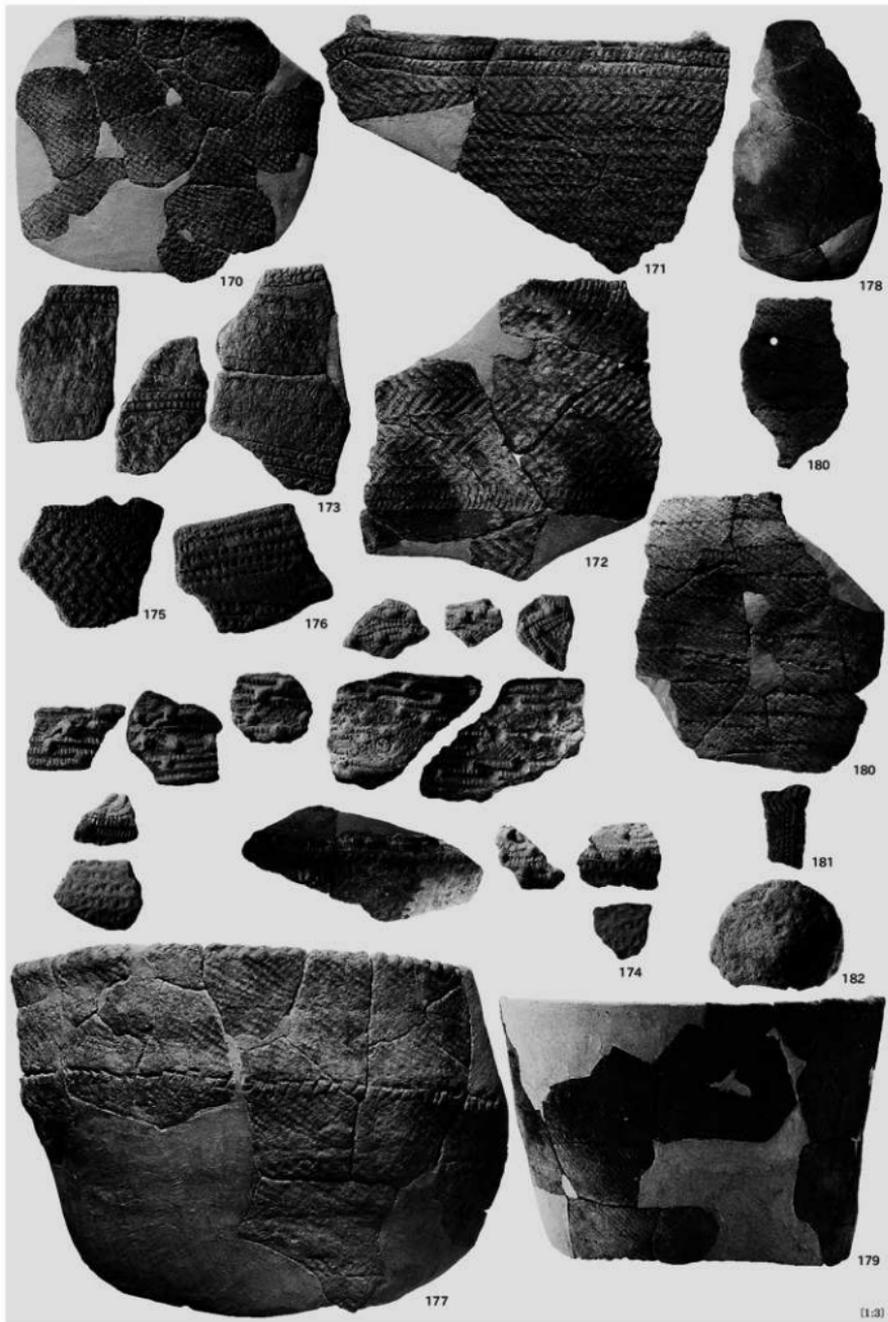
145

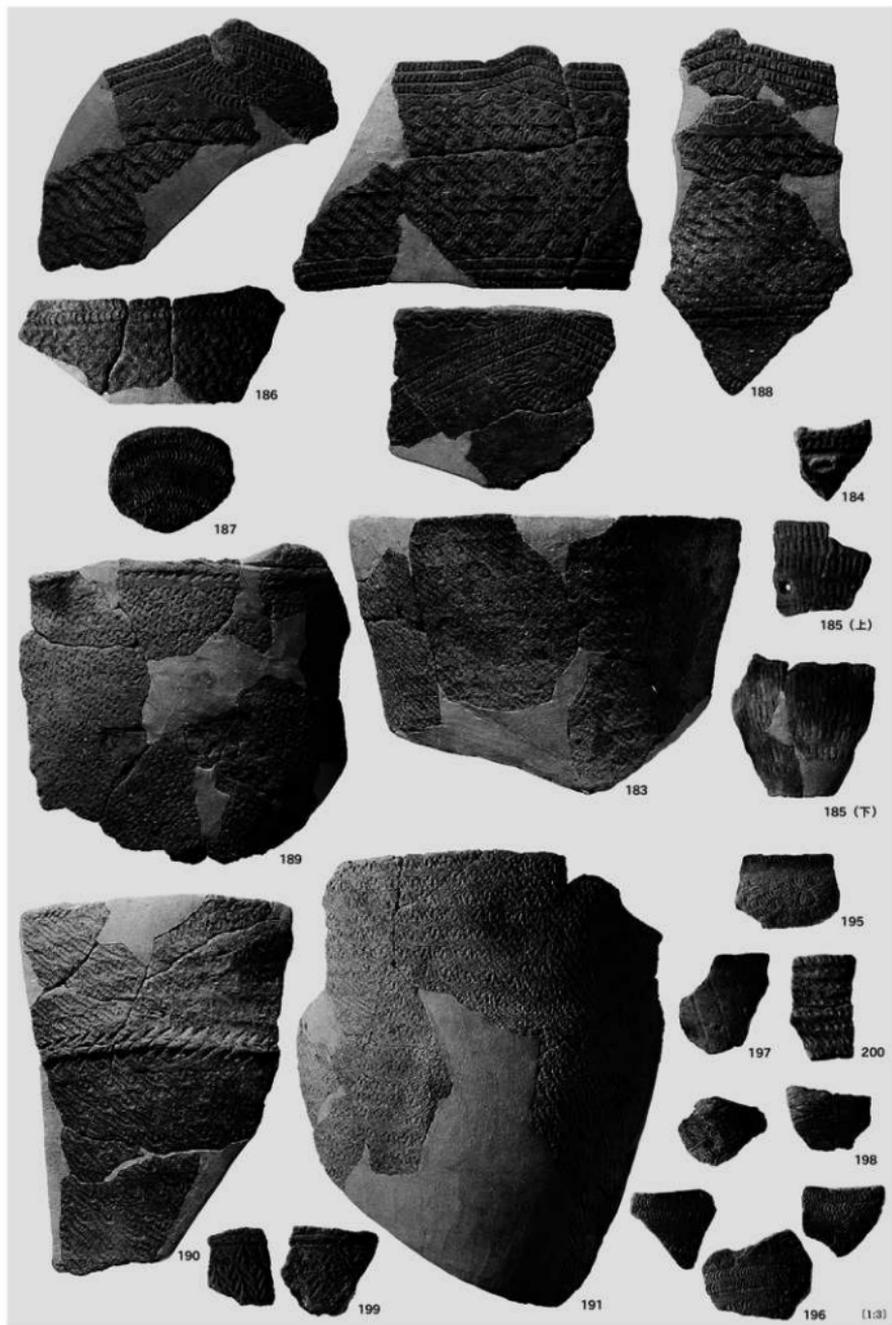


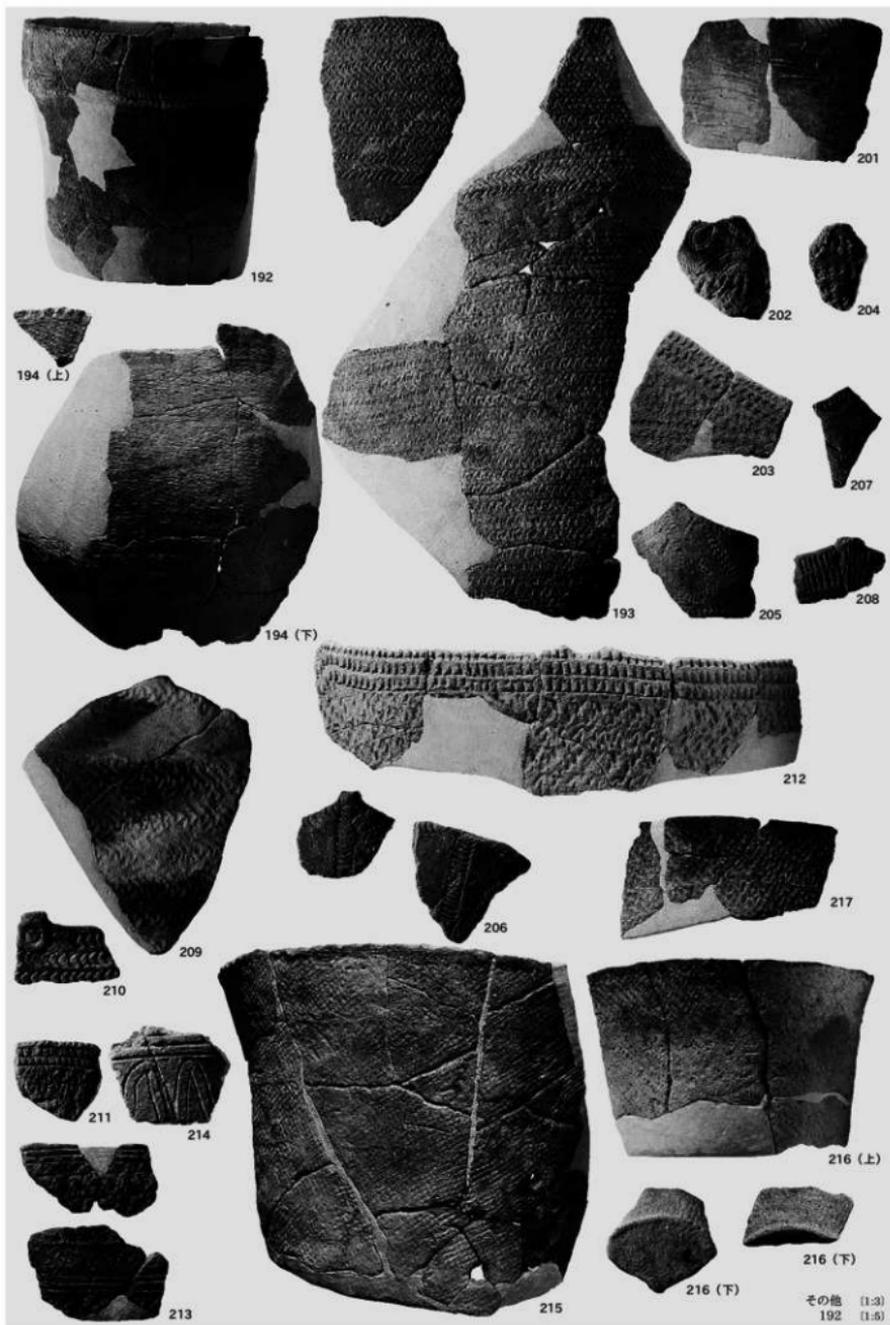
144

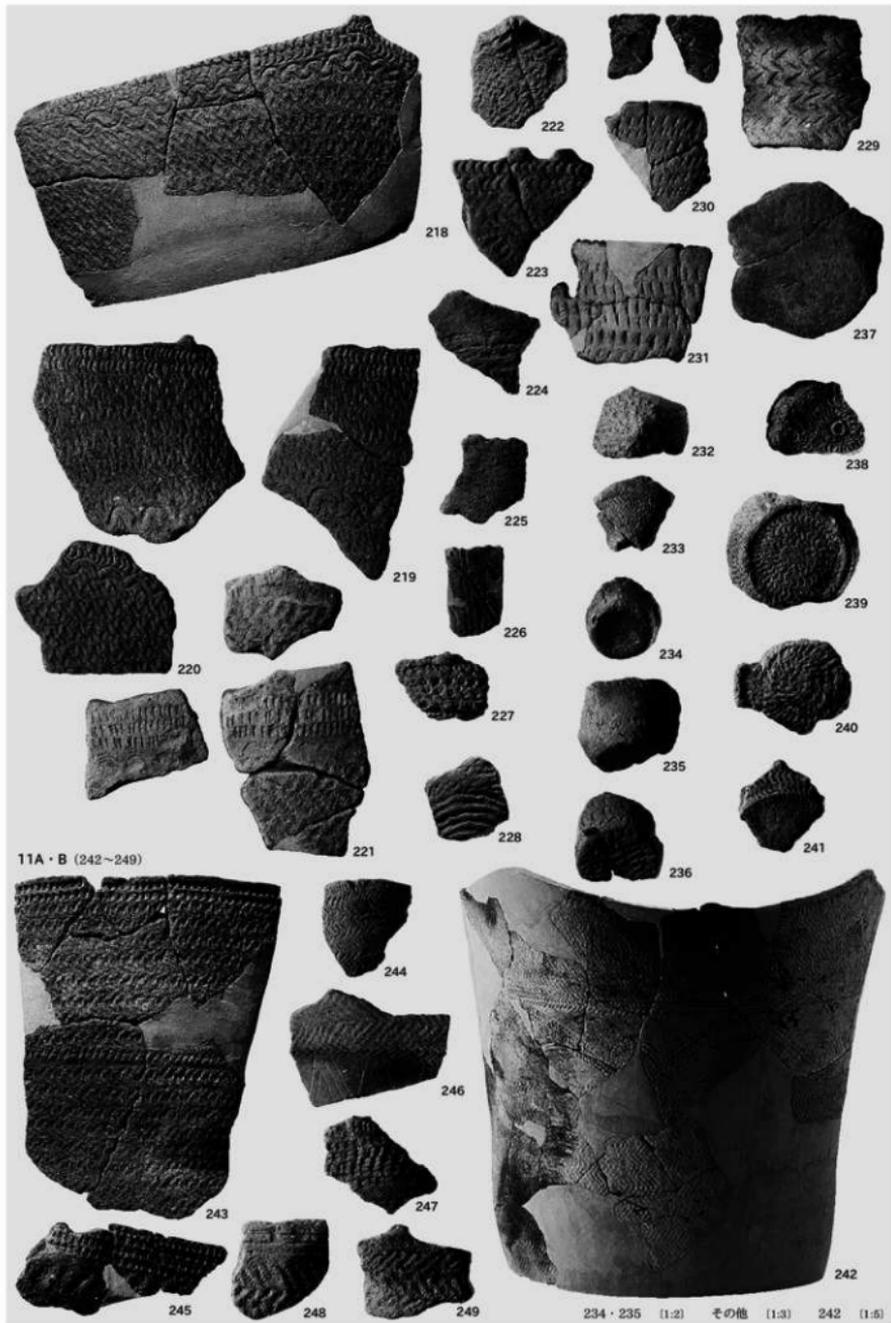
その他 (1:3) 137 (1:5)











4C・D、5B・C・D (250~261)



250



252



253



254



255



251



256



257



259



258



261



260



262



263



265



264



266



270



272



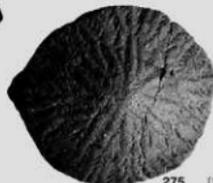
274



271



273



275 (1.3)

I区 (102・103C) (262~266)

その他 (267~275)



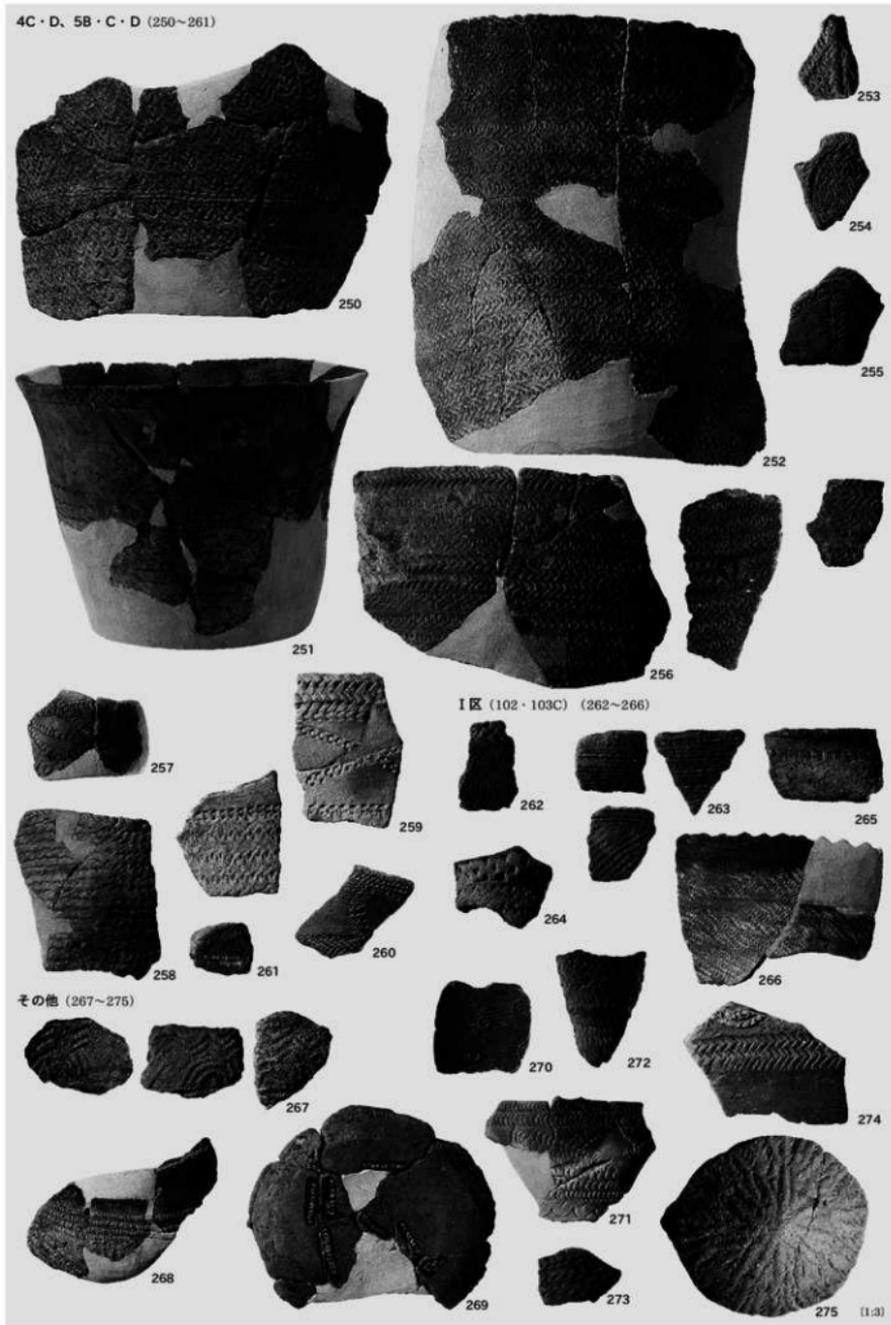
267



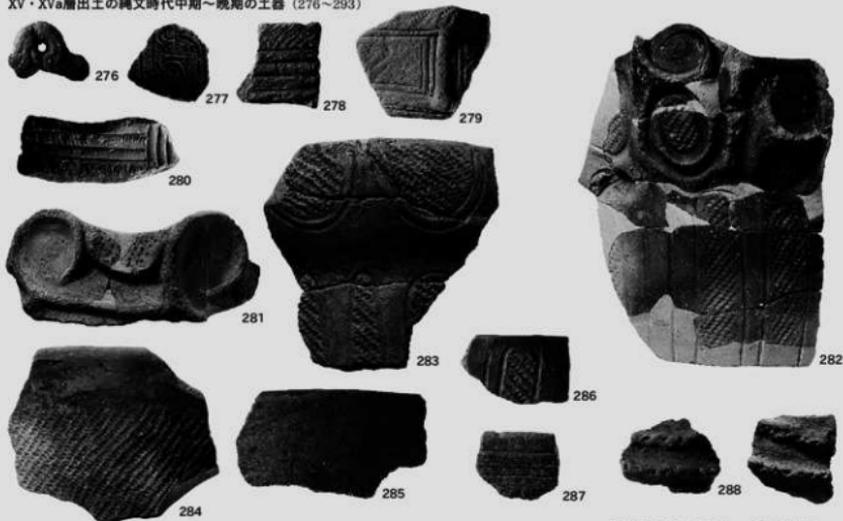
268



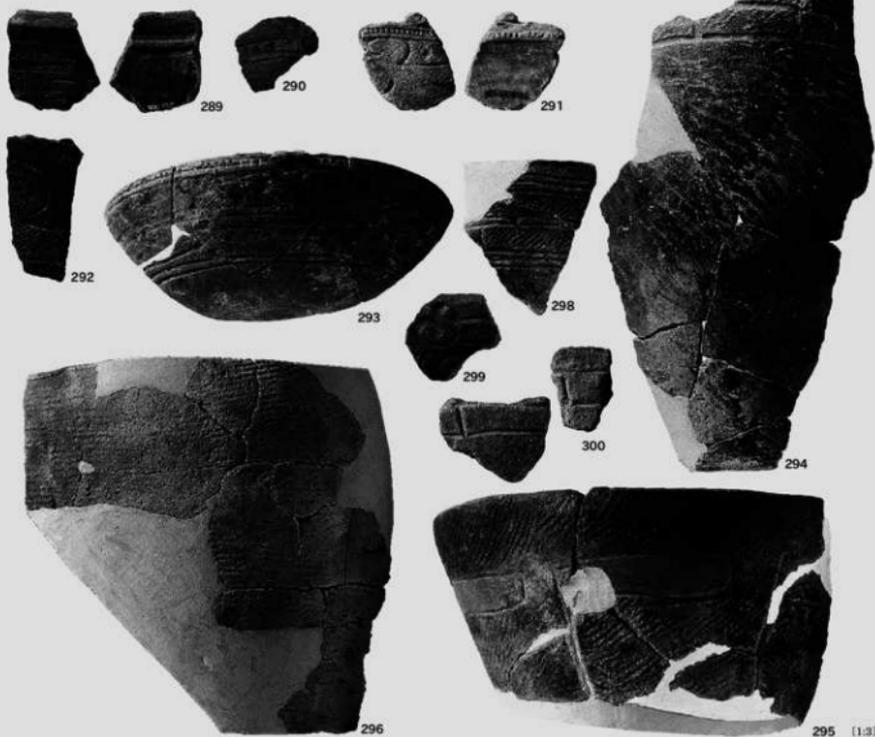
269

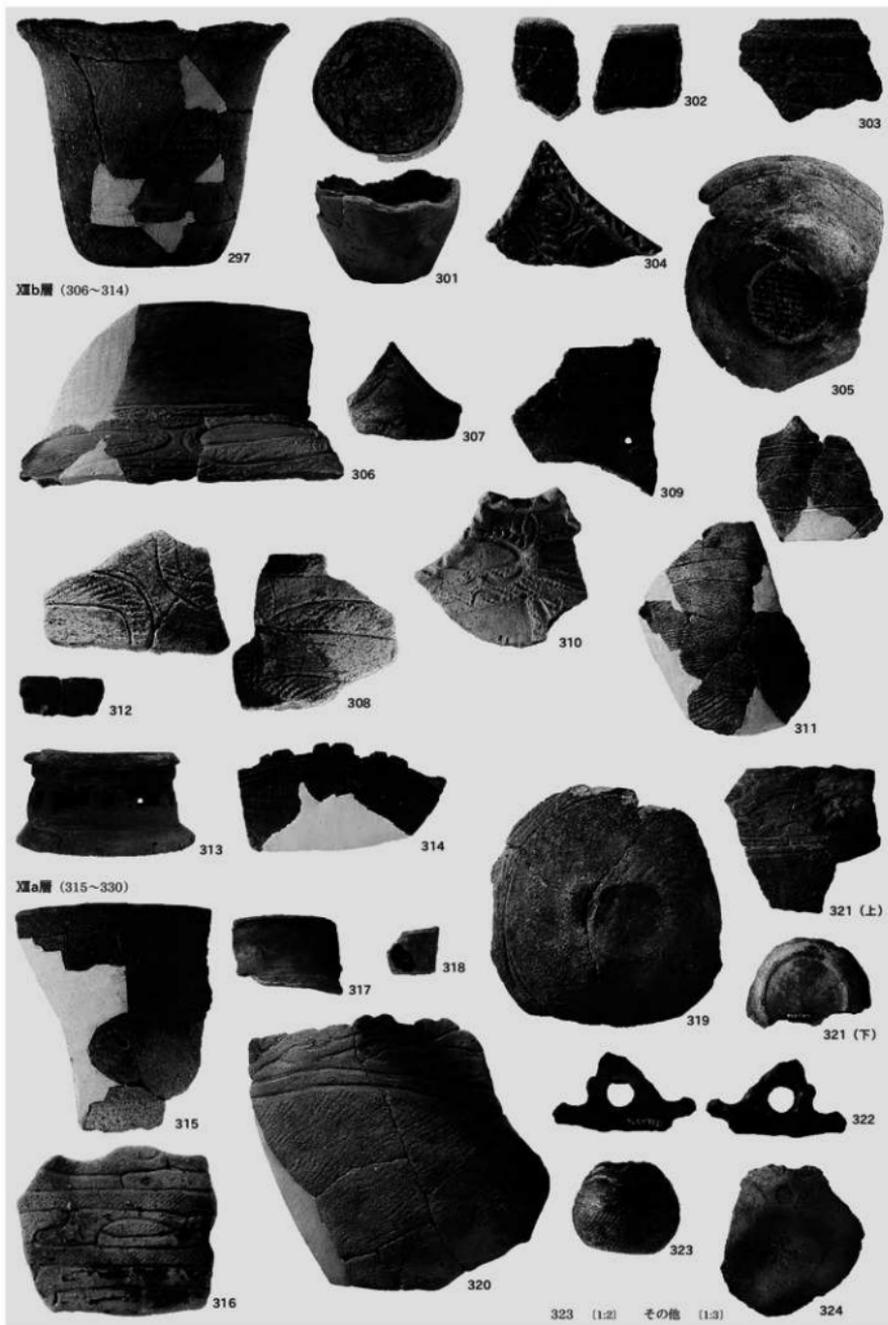


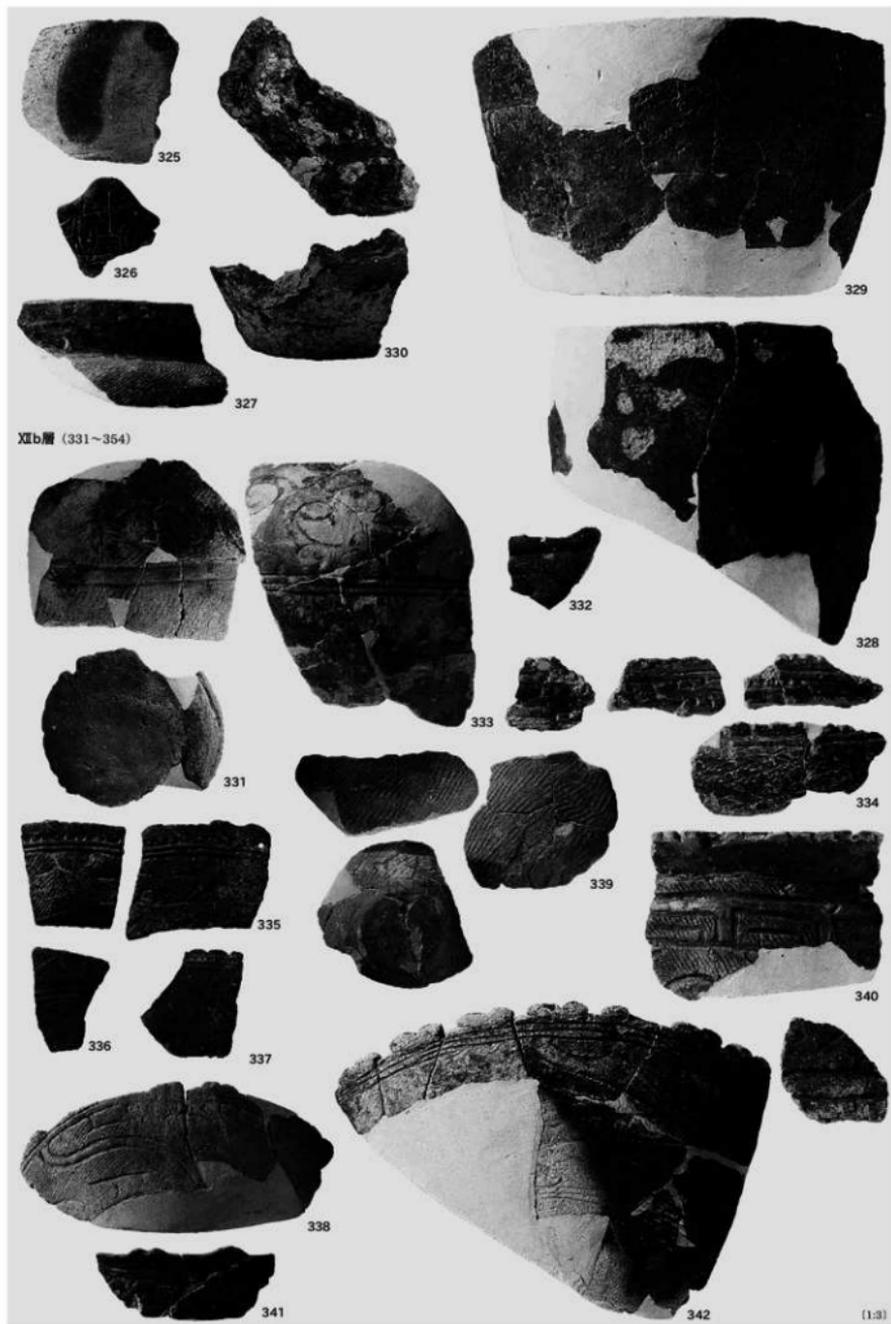
XV・XVa層出土の縄文時代中期～晩期の土器 (276～293)

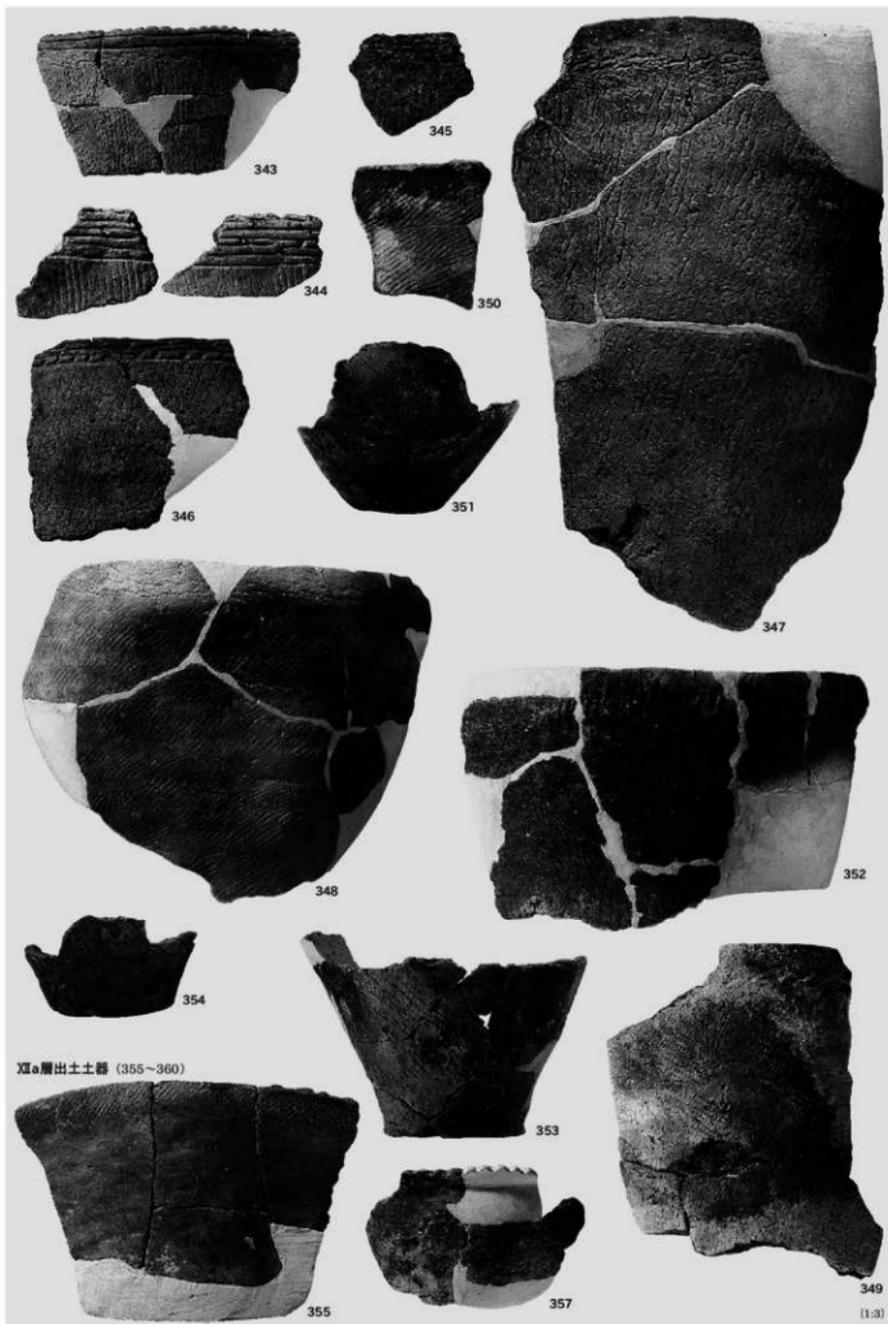


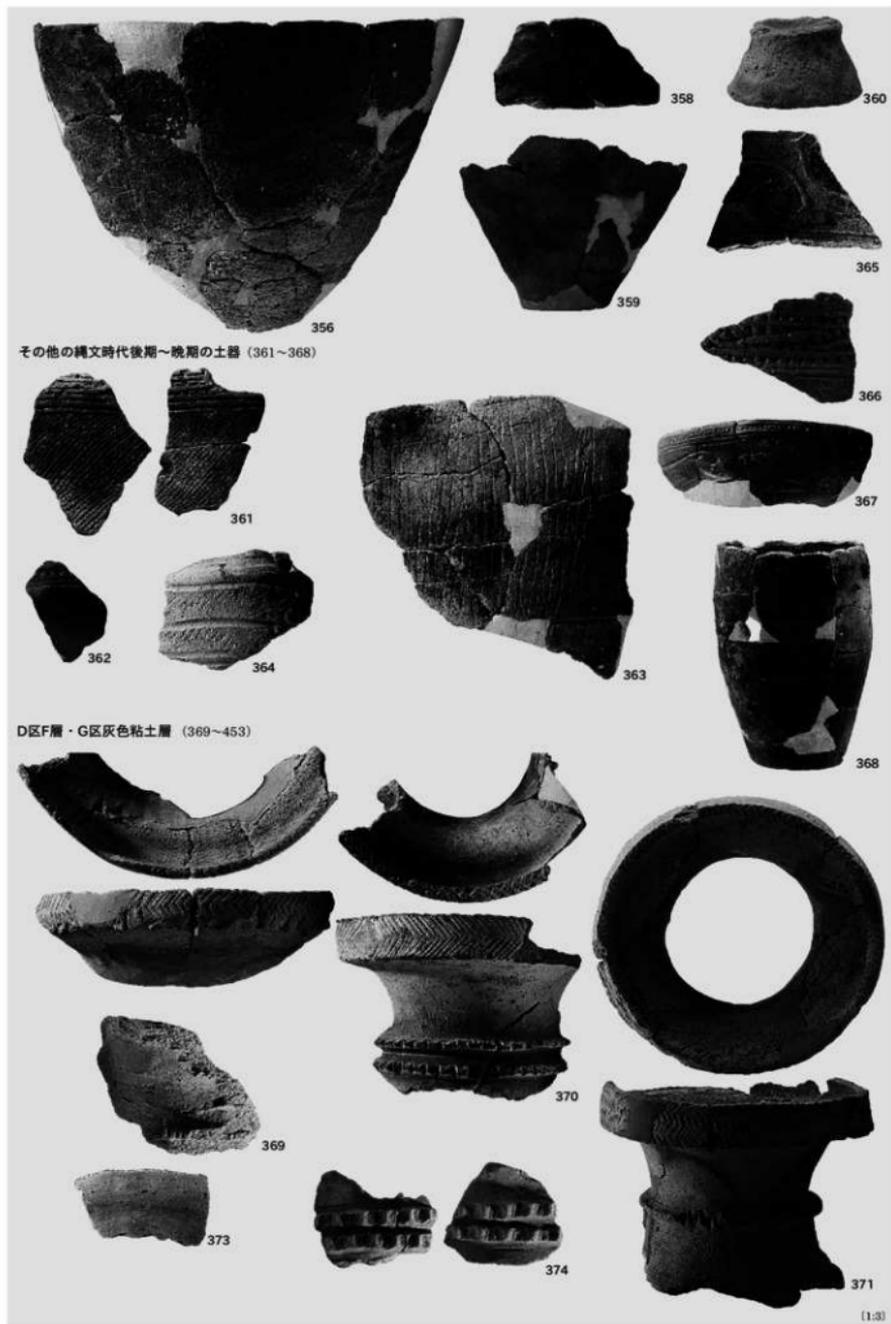
XIIIe層 (294～305)

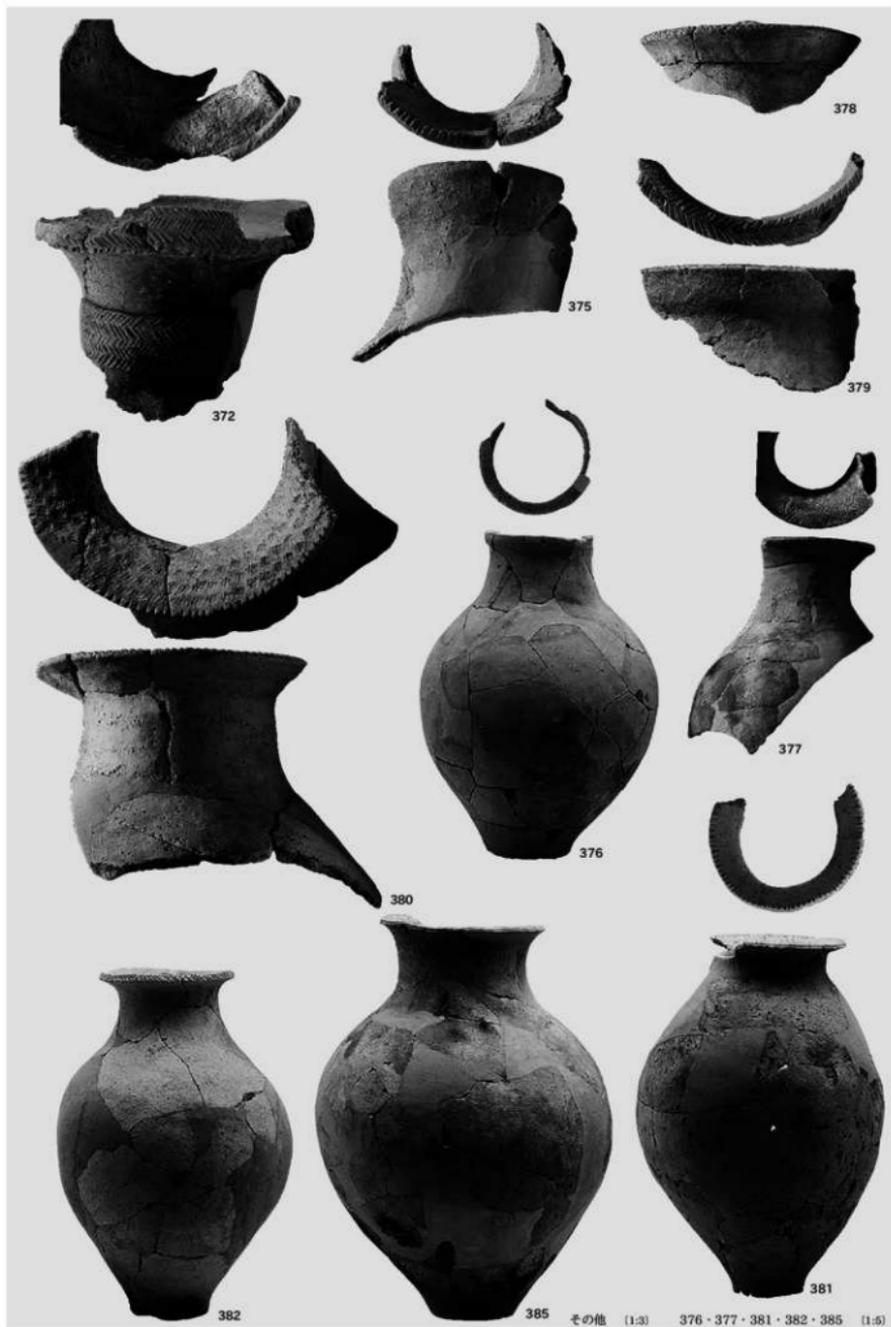




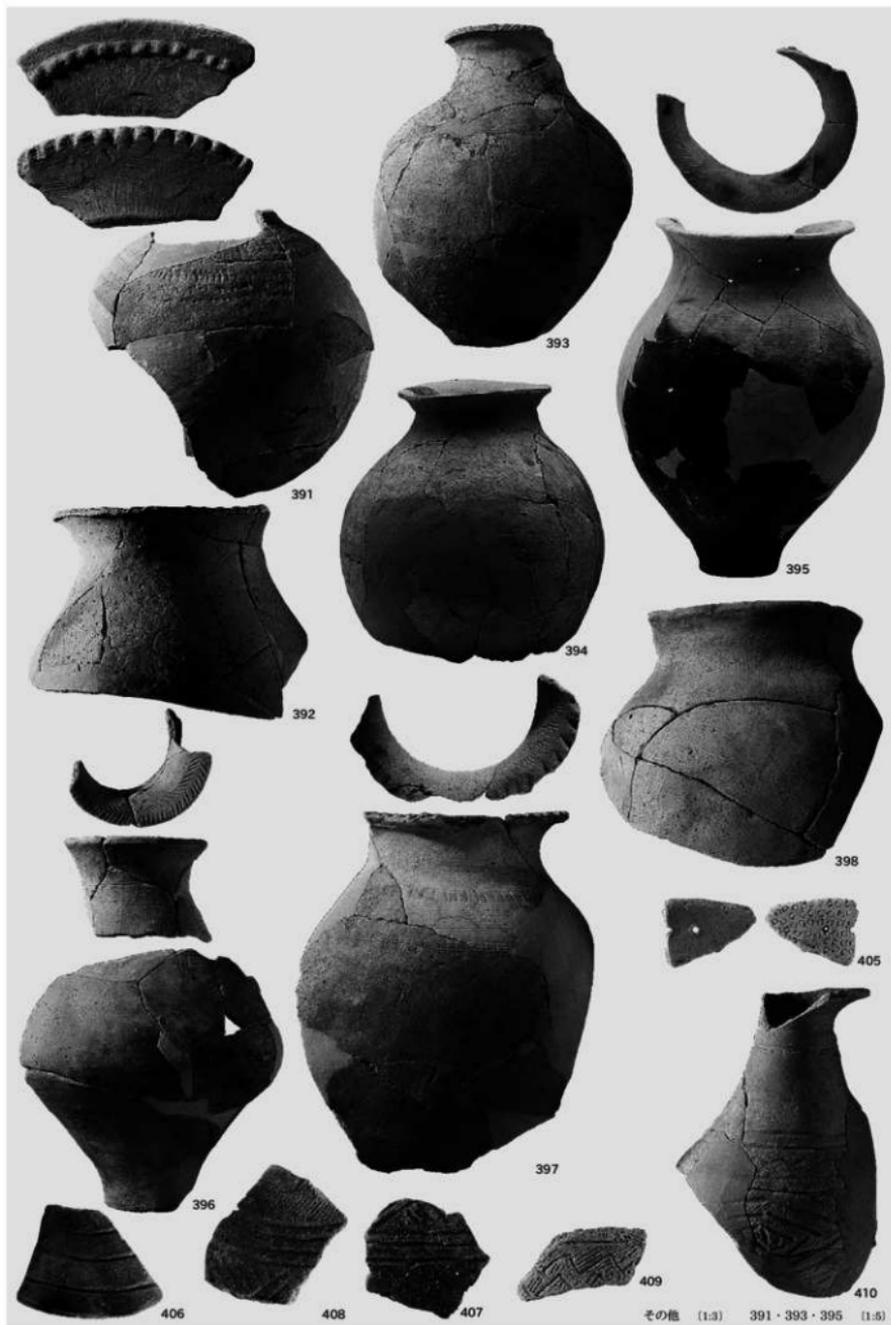


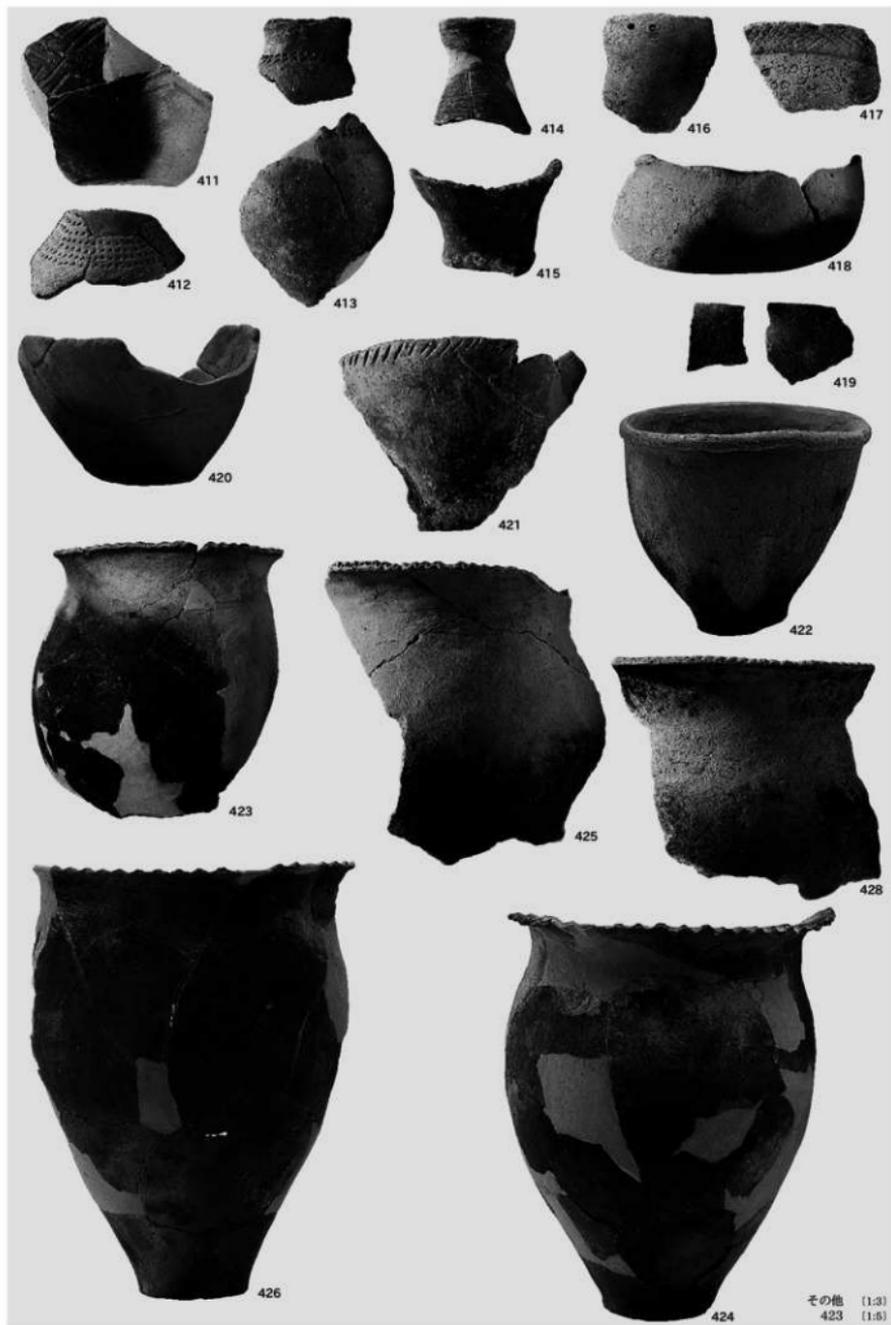


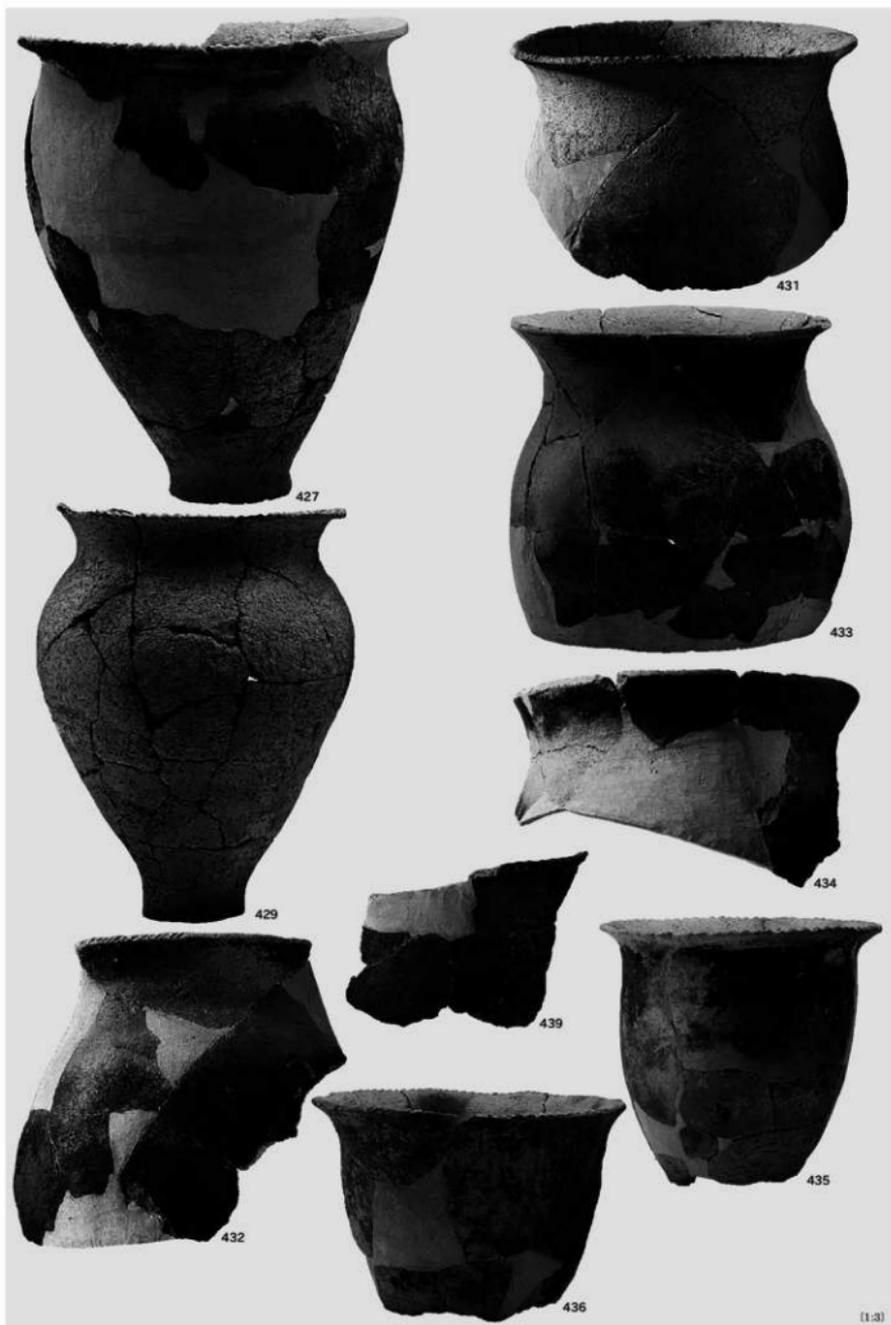


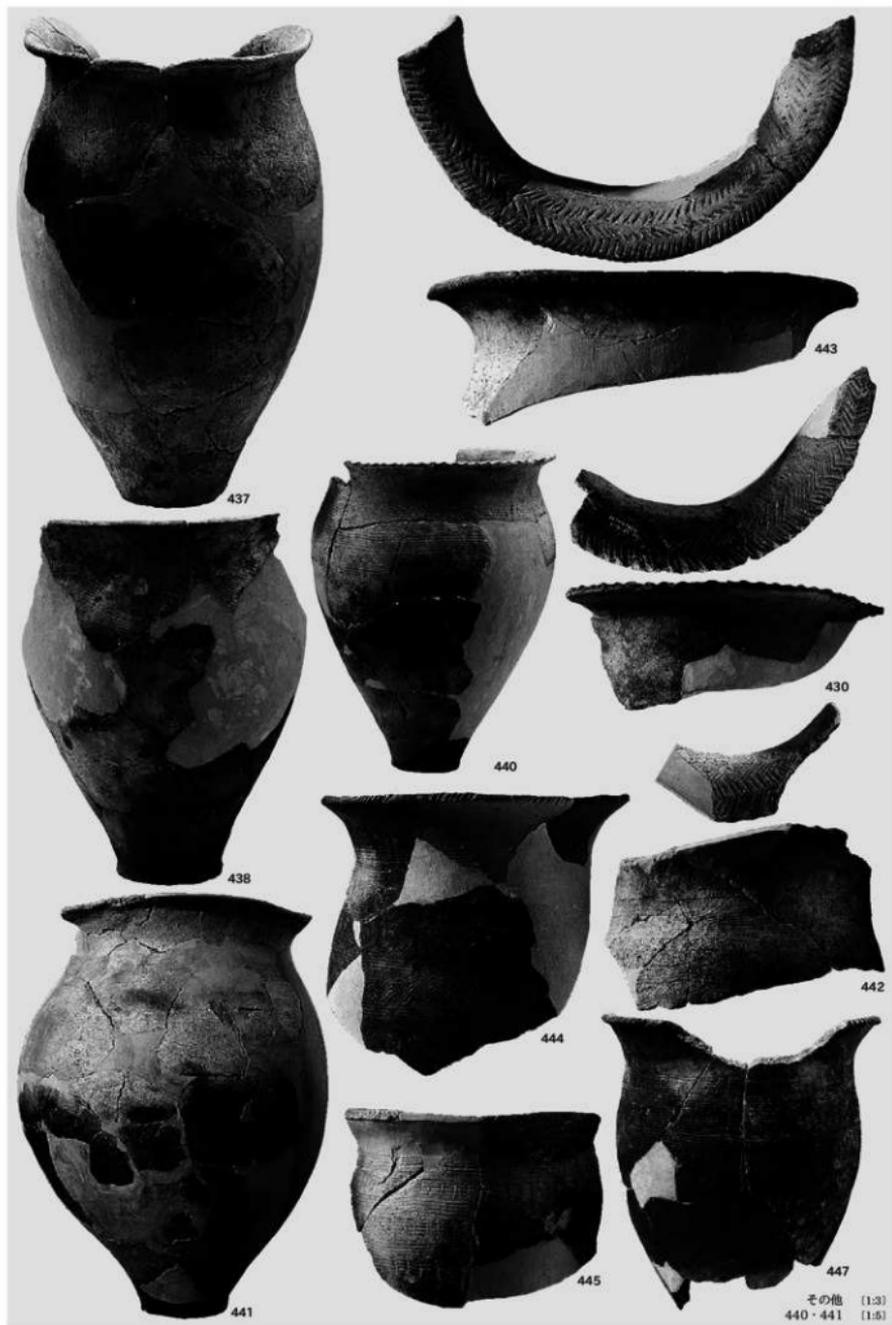


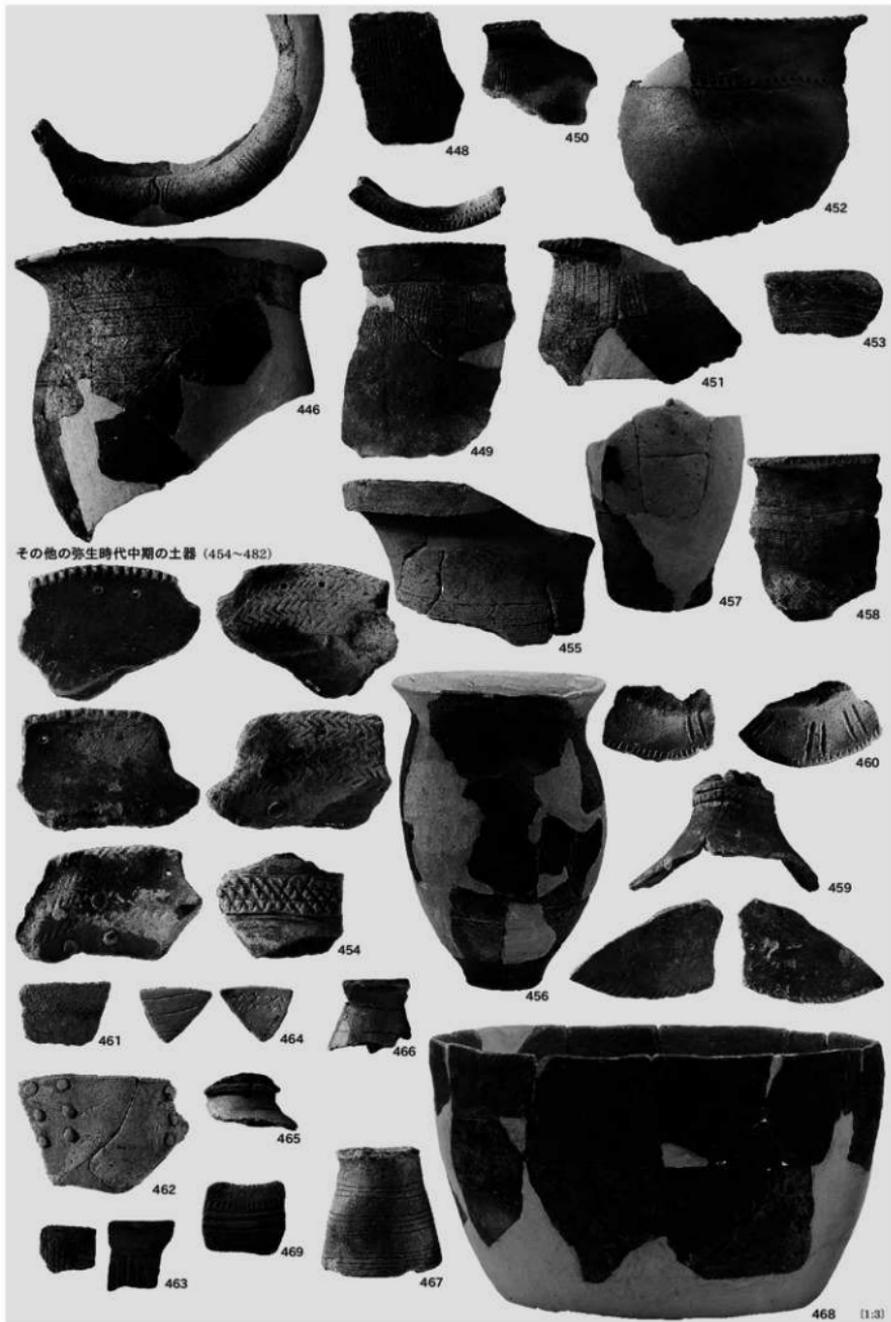


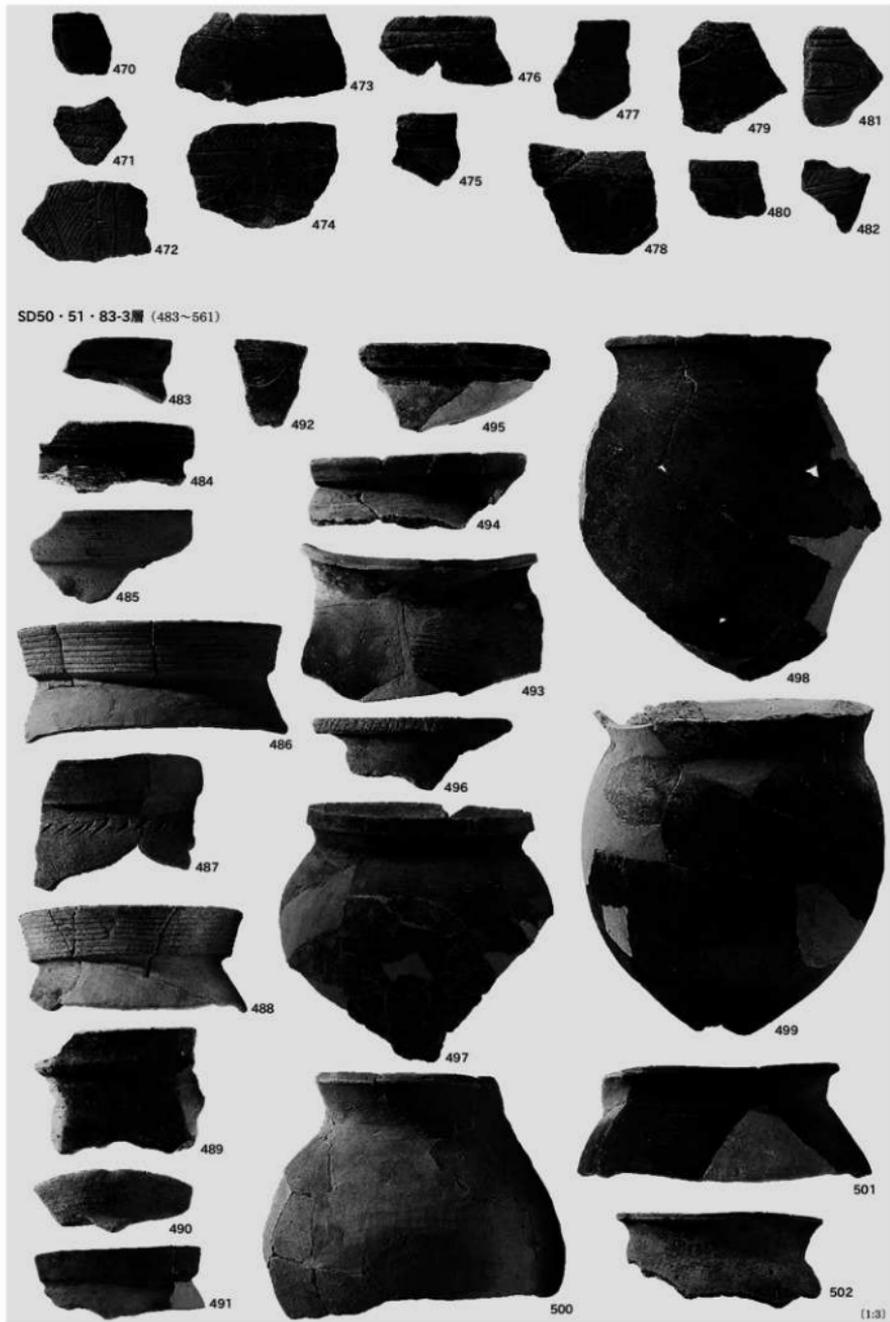






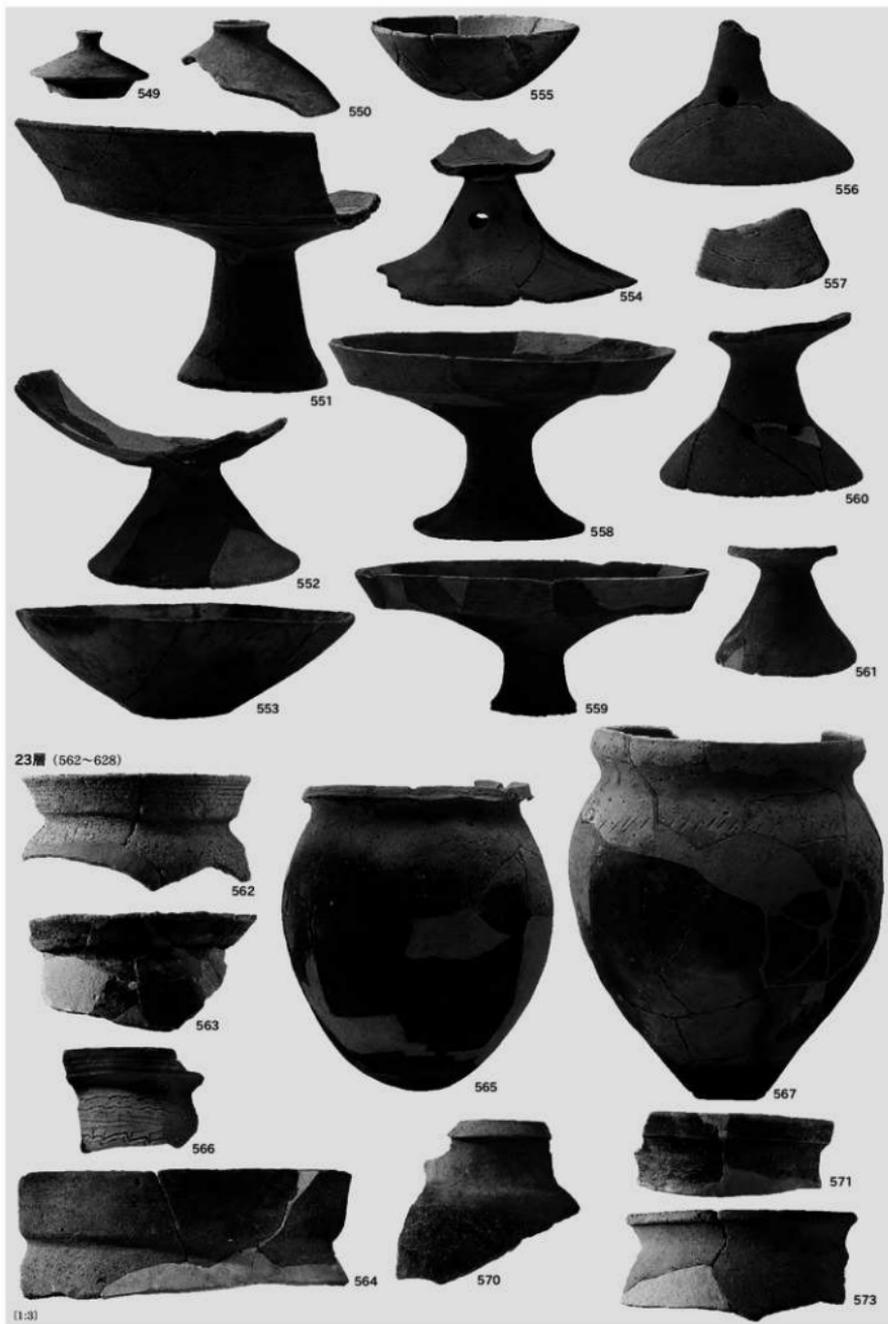


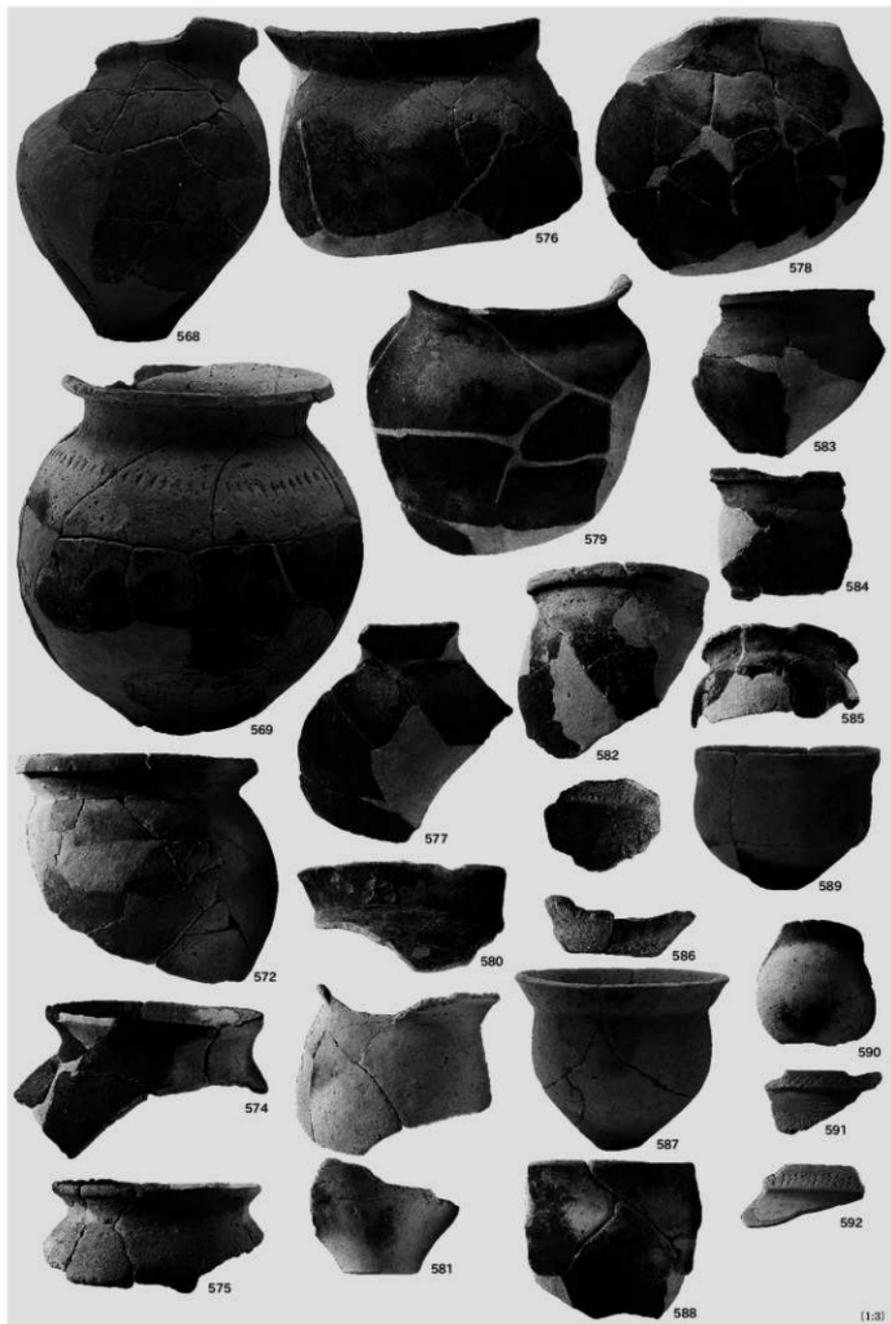




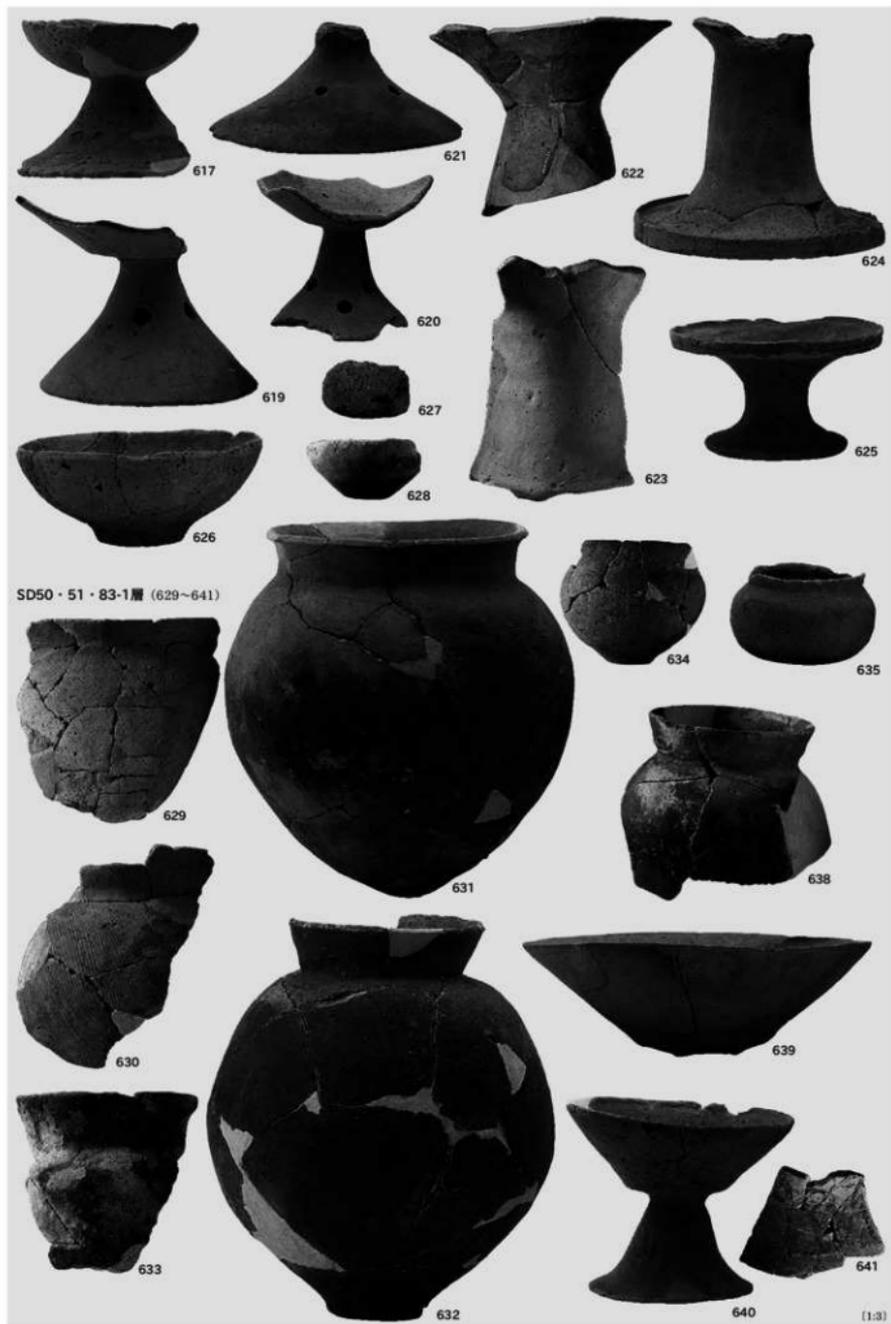


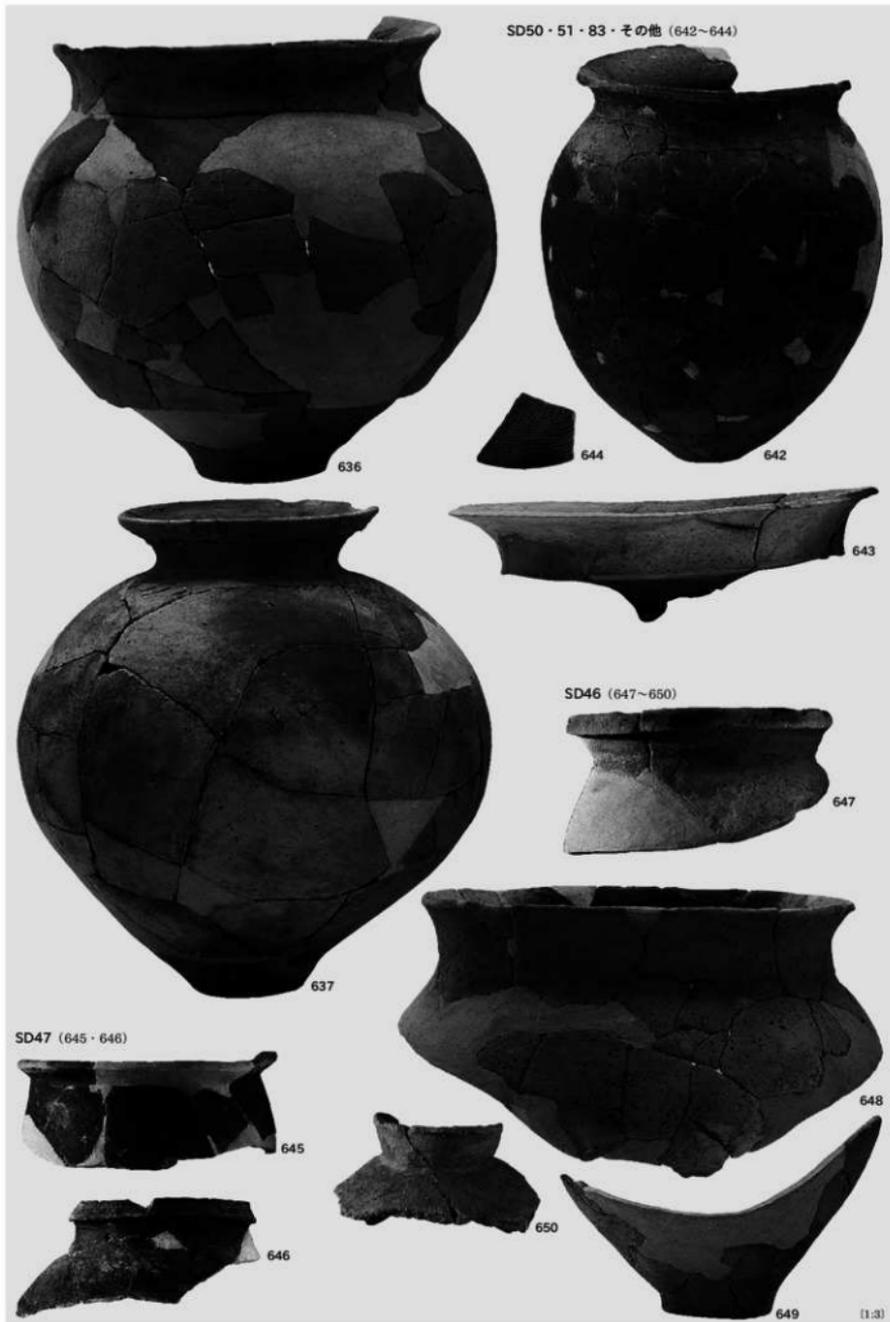


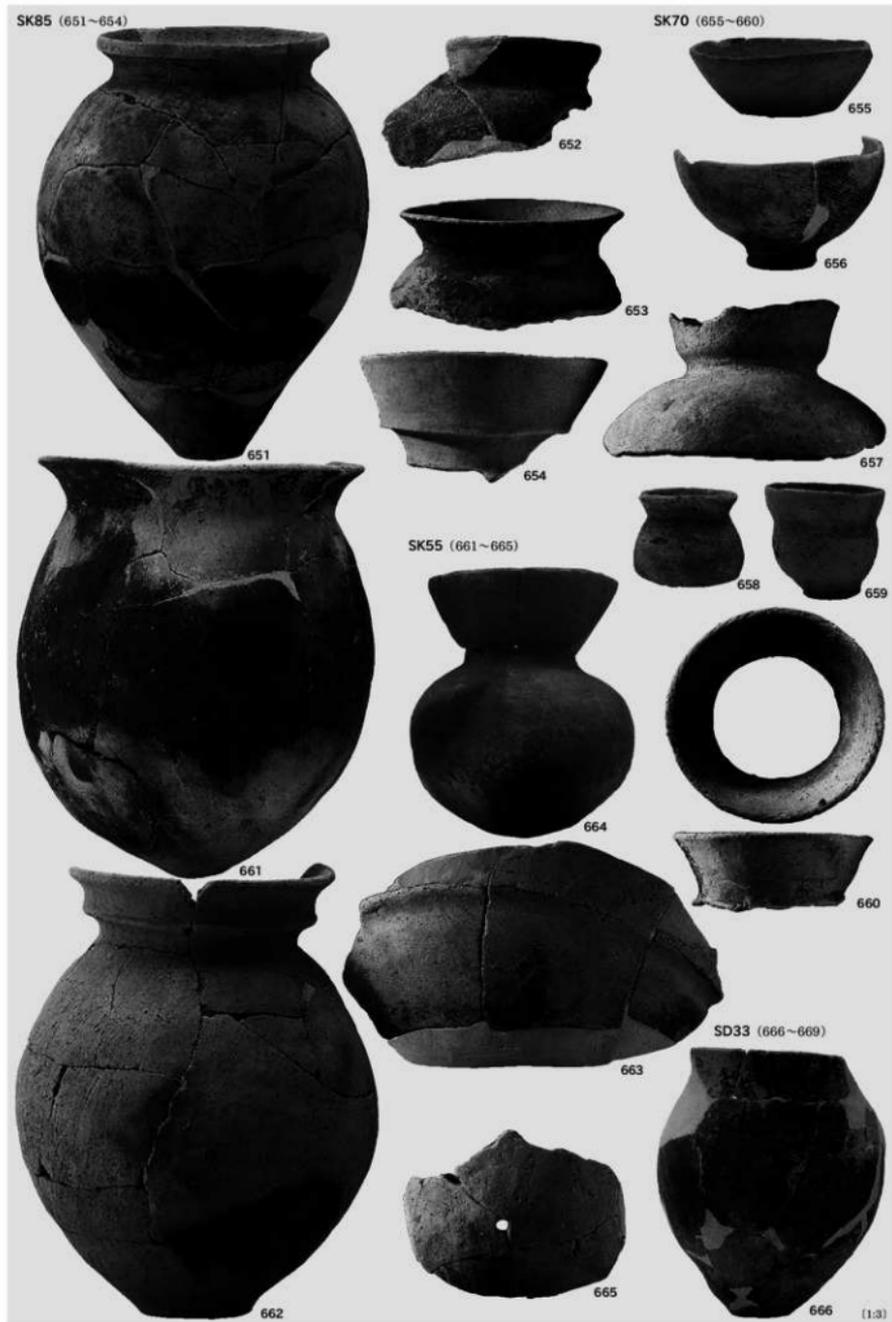


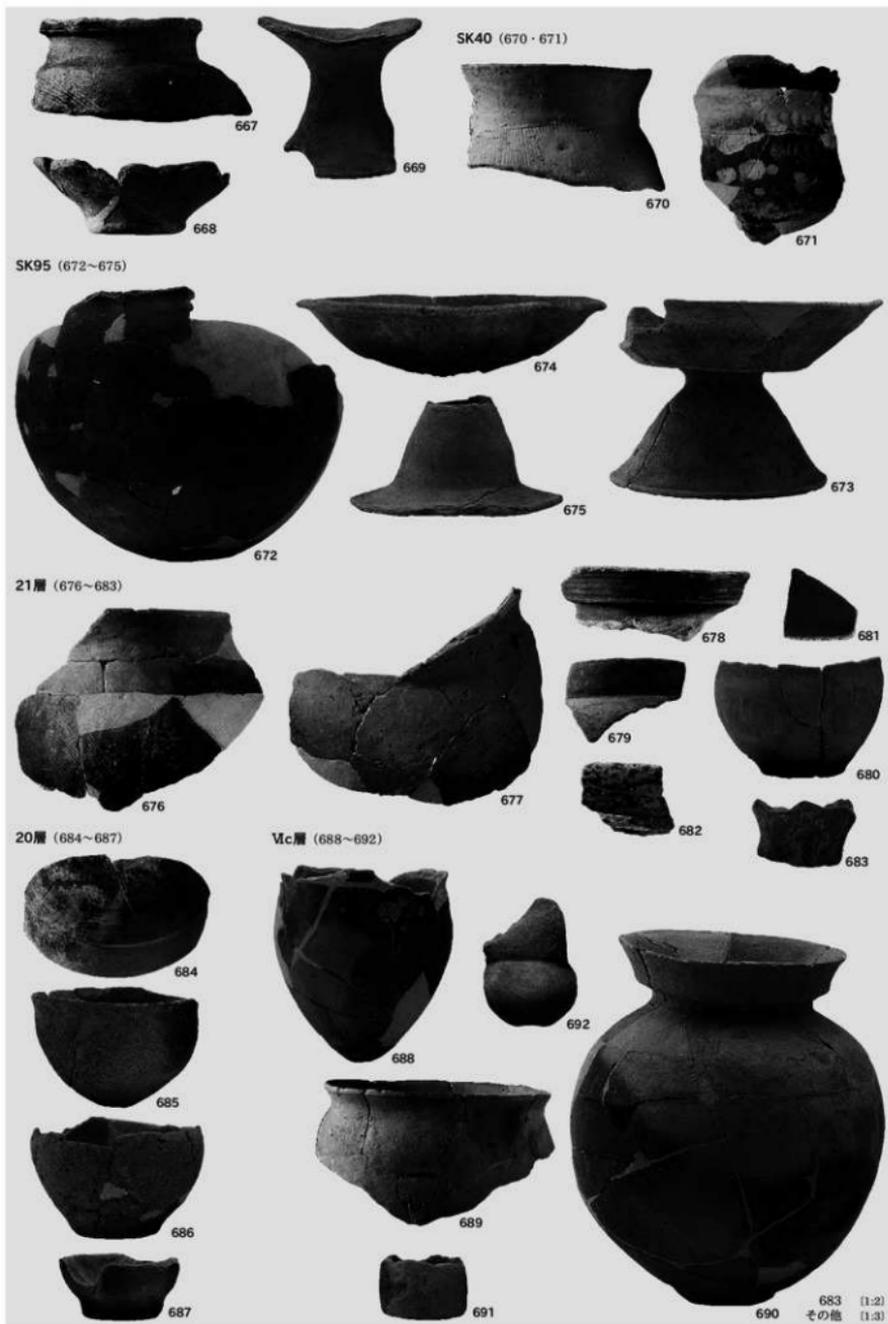




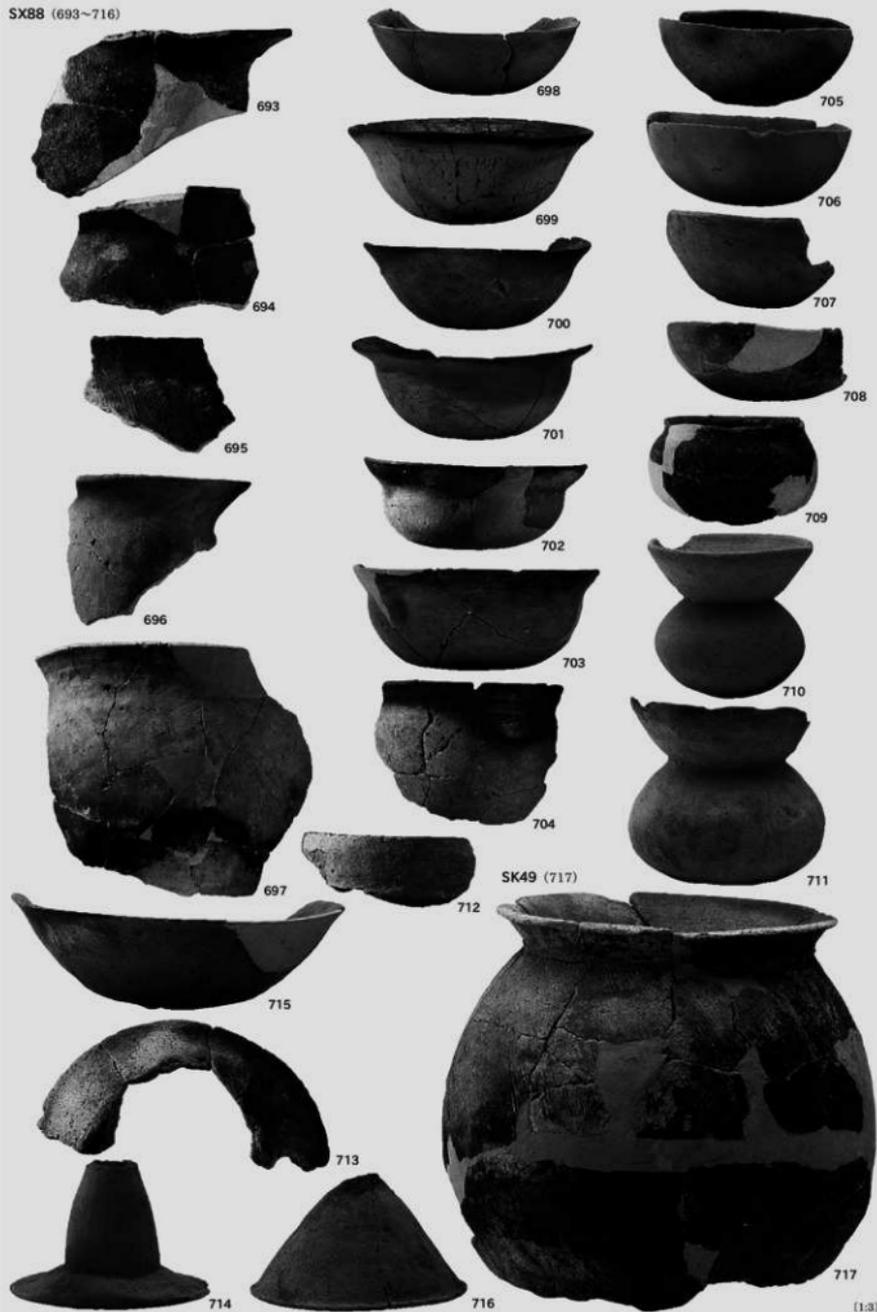


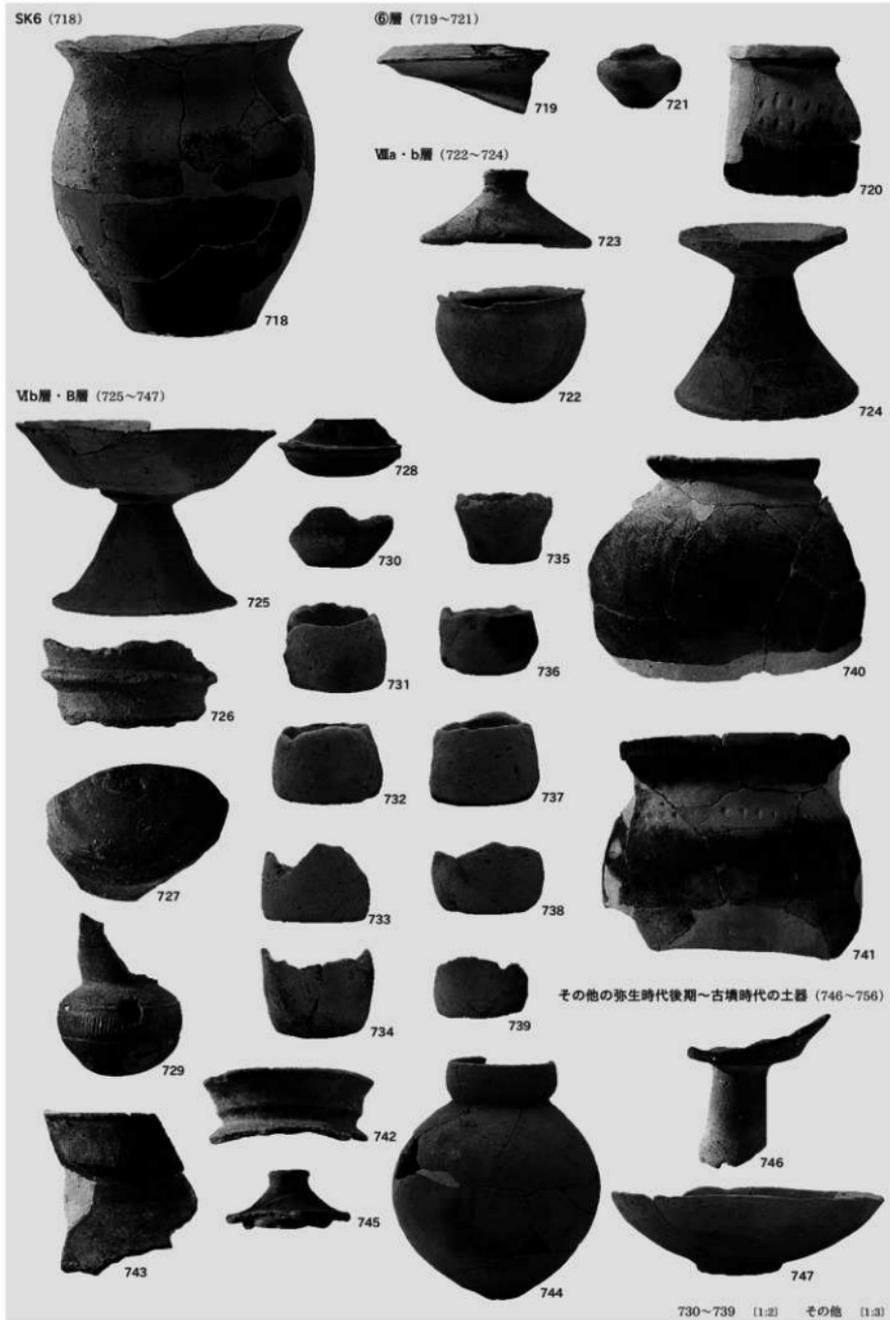


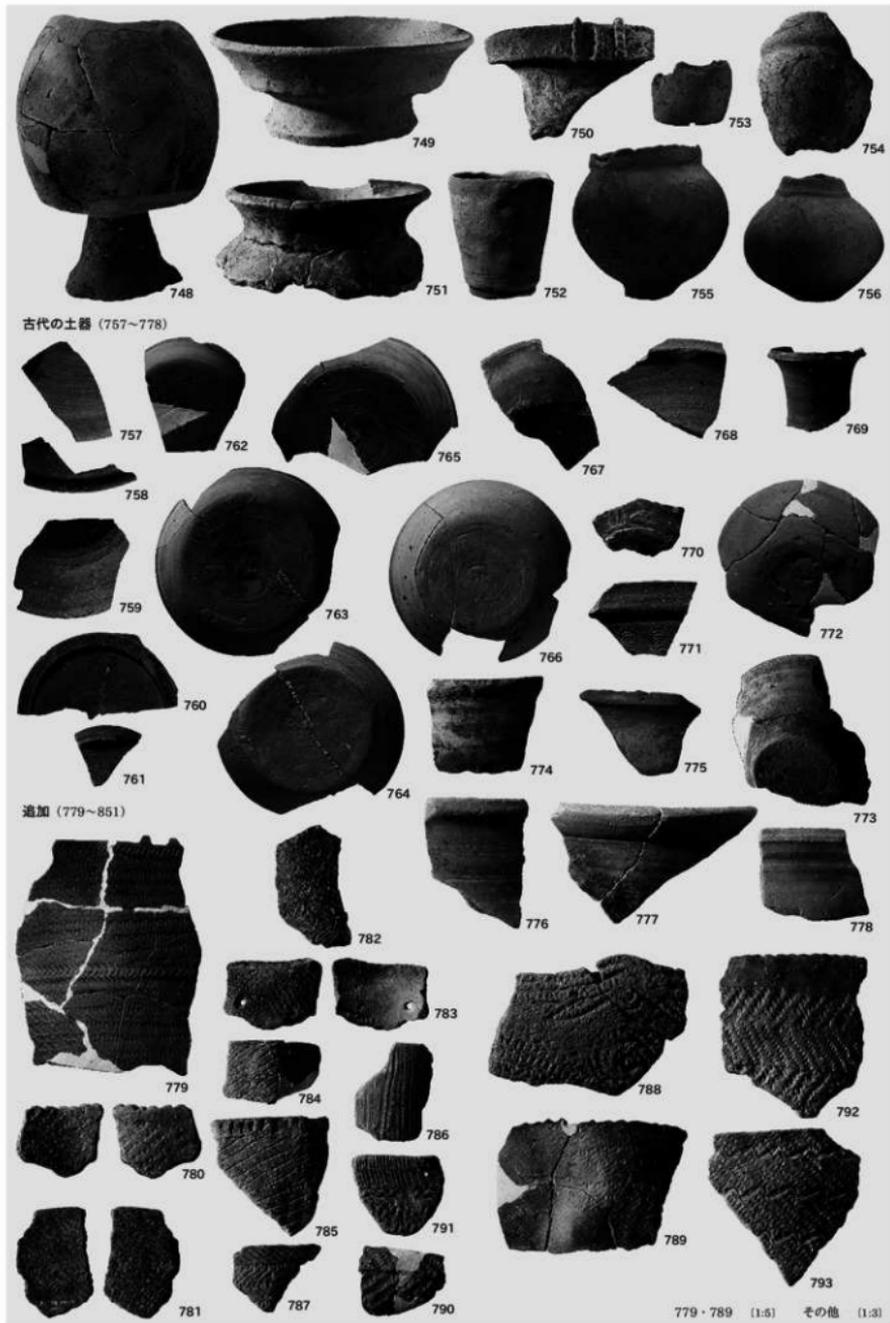


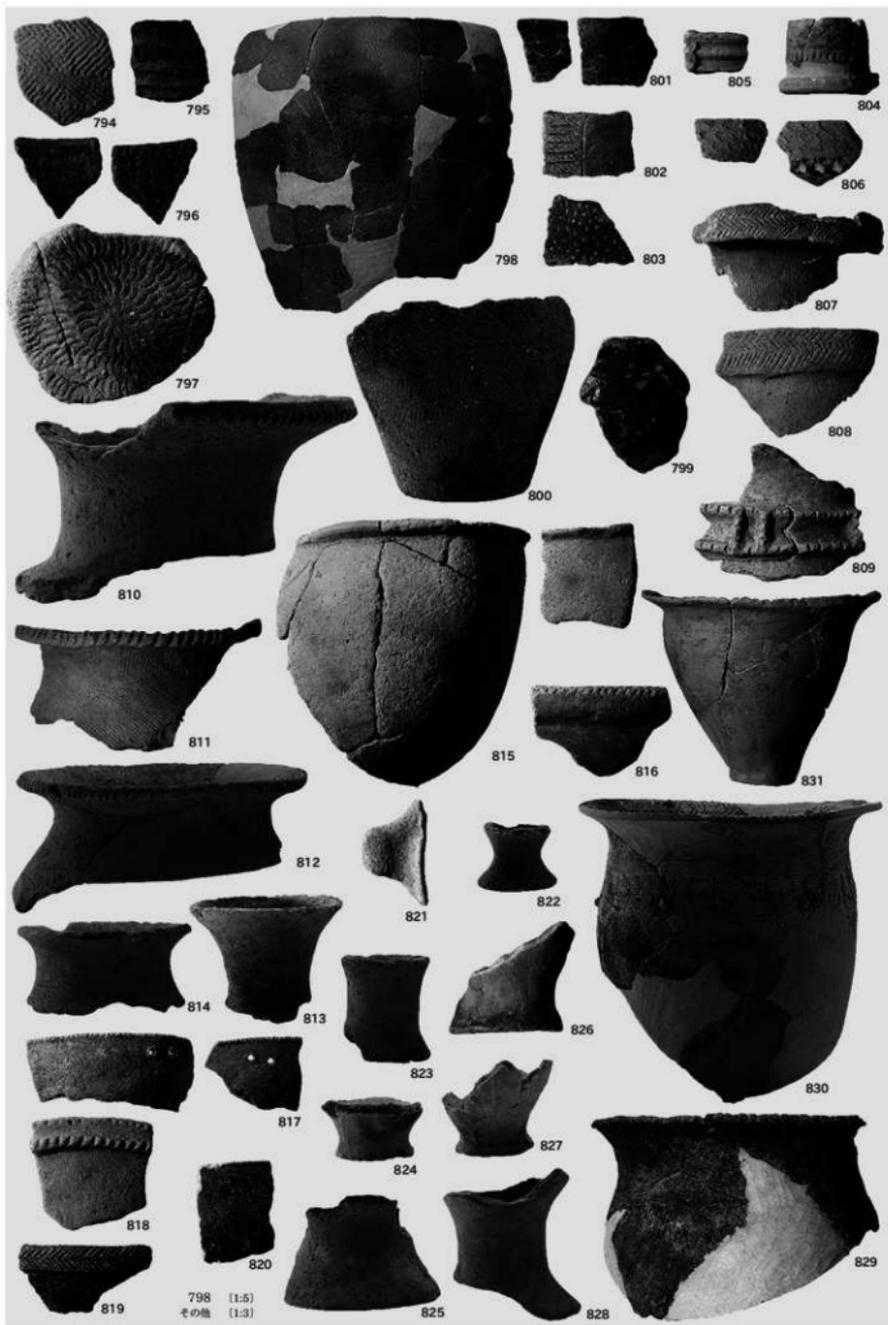


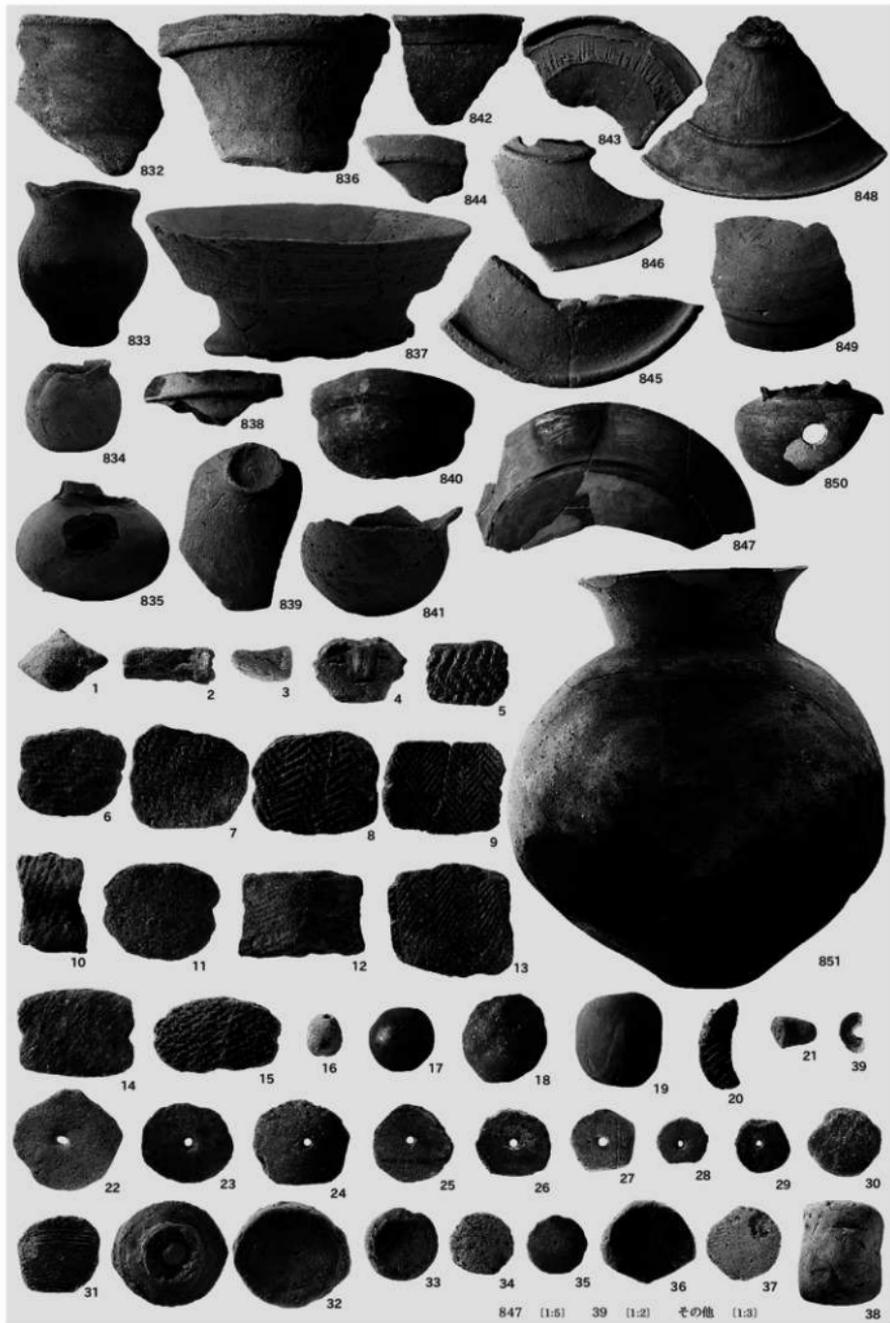
SX88 (693~716)



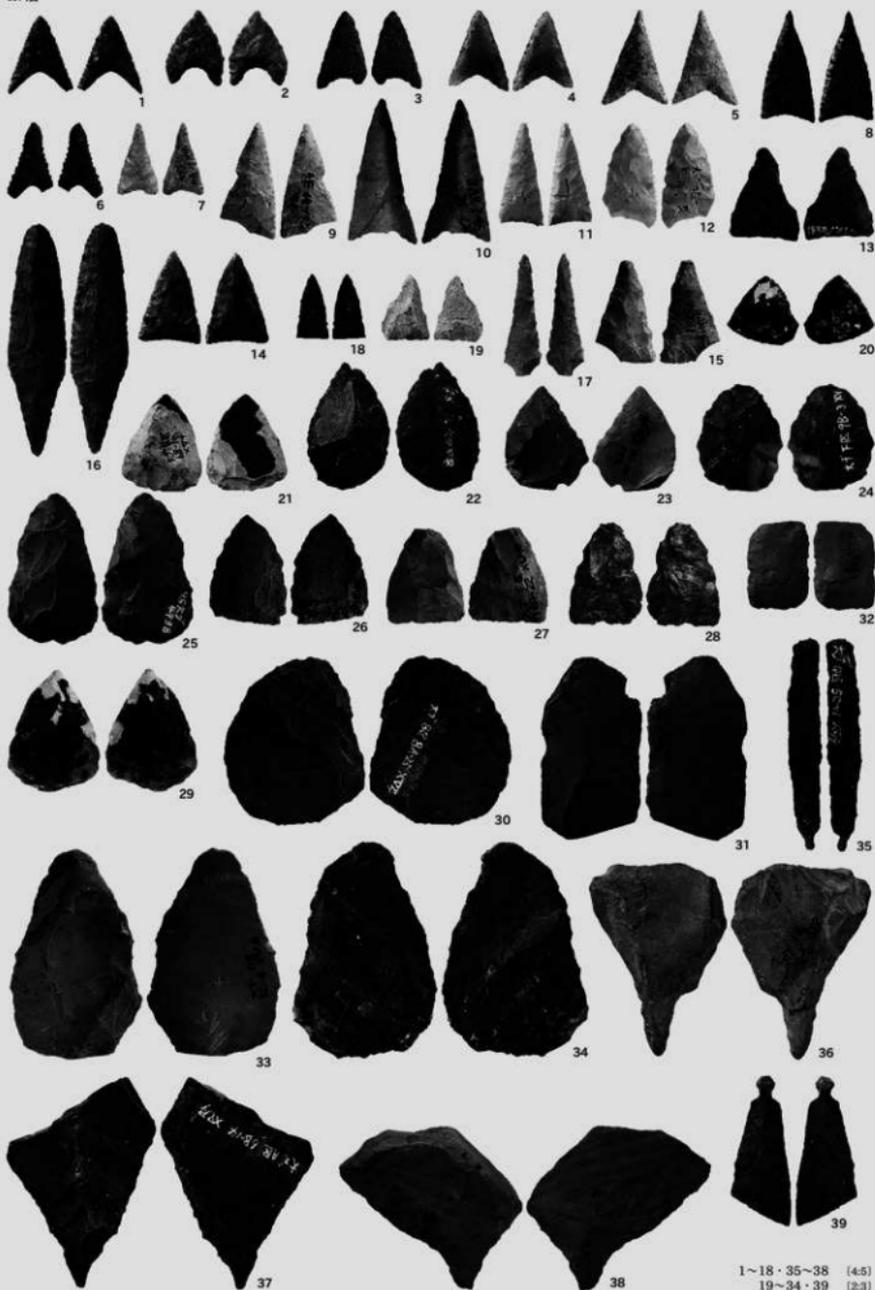




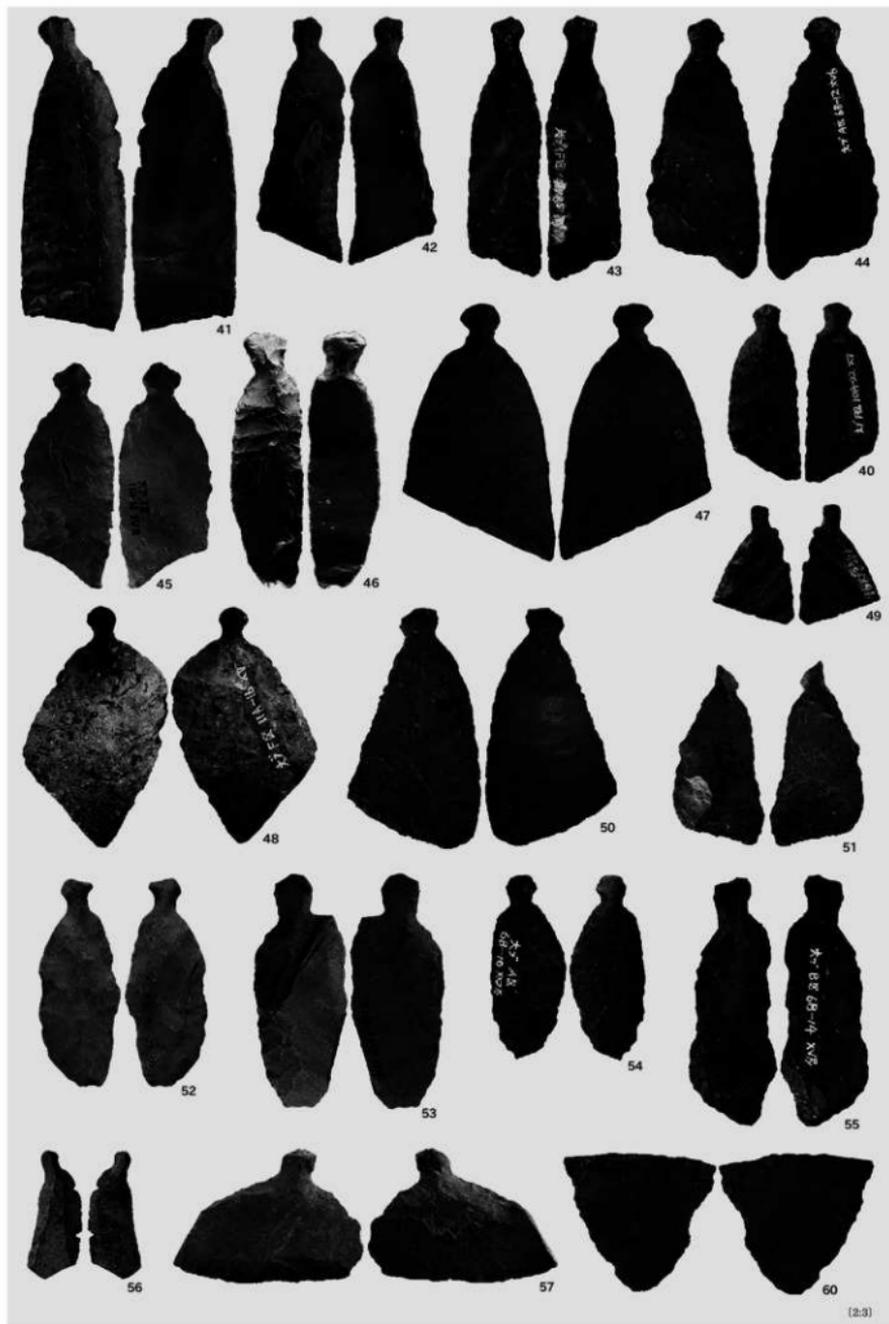


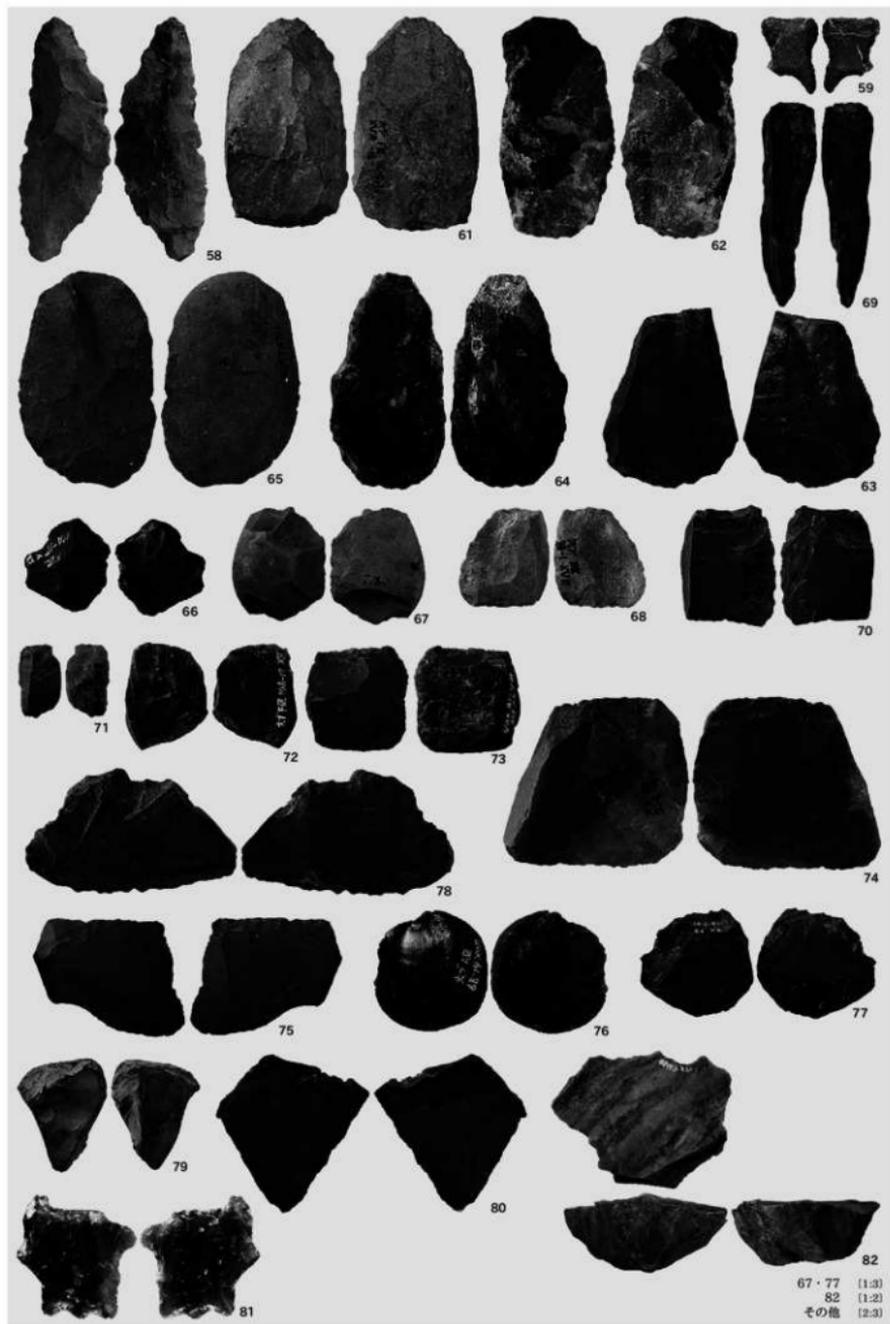


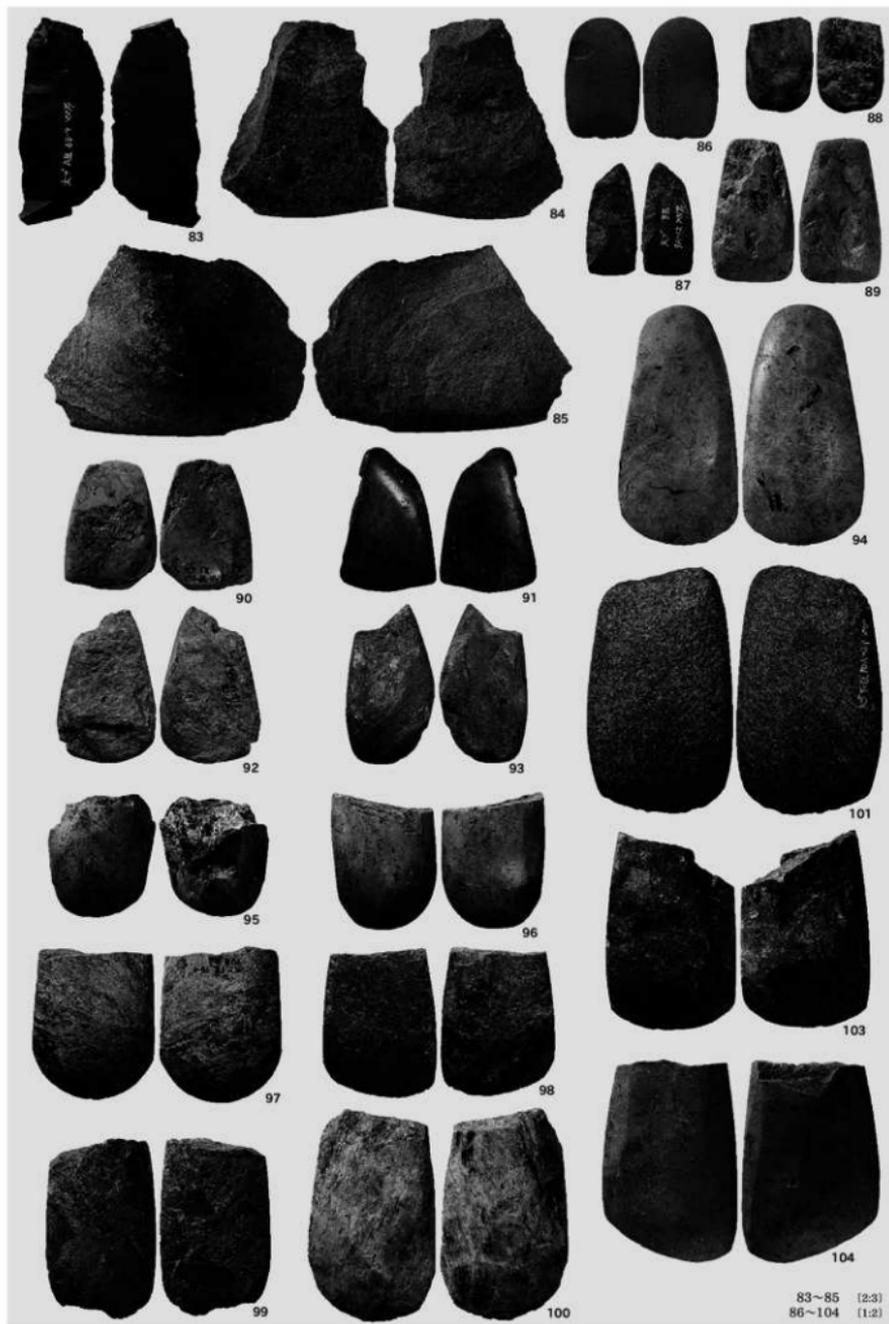
XV層



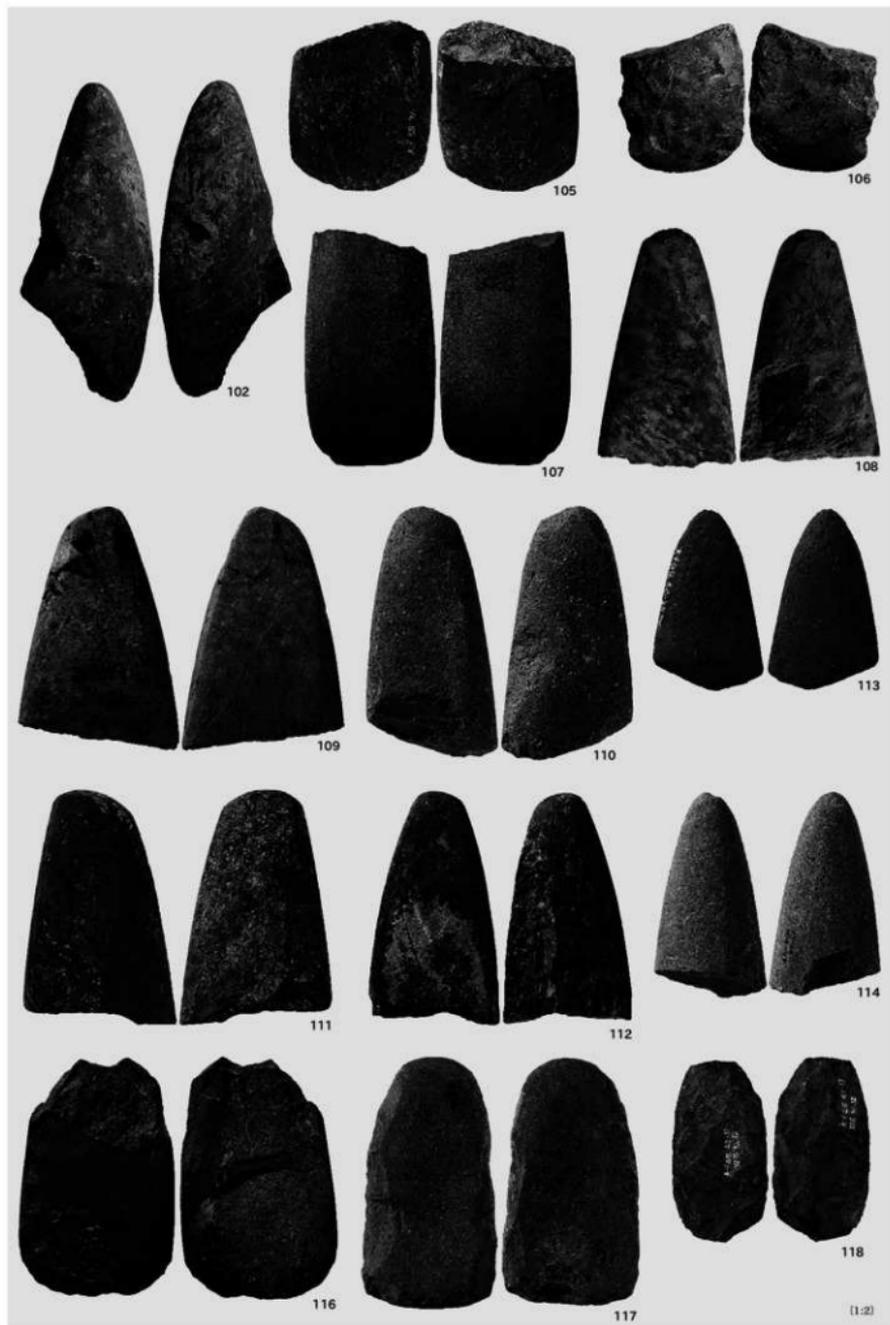
1~18・35~38 (4:5)
19~34・39 (2:3)







83~85 [2:3]
86~104 [1:2]

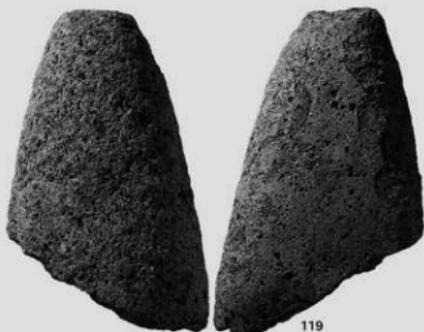




115



121



119



120



122



123

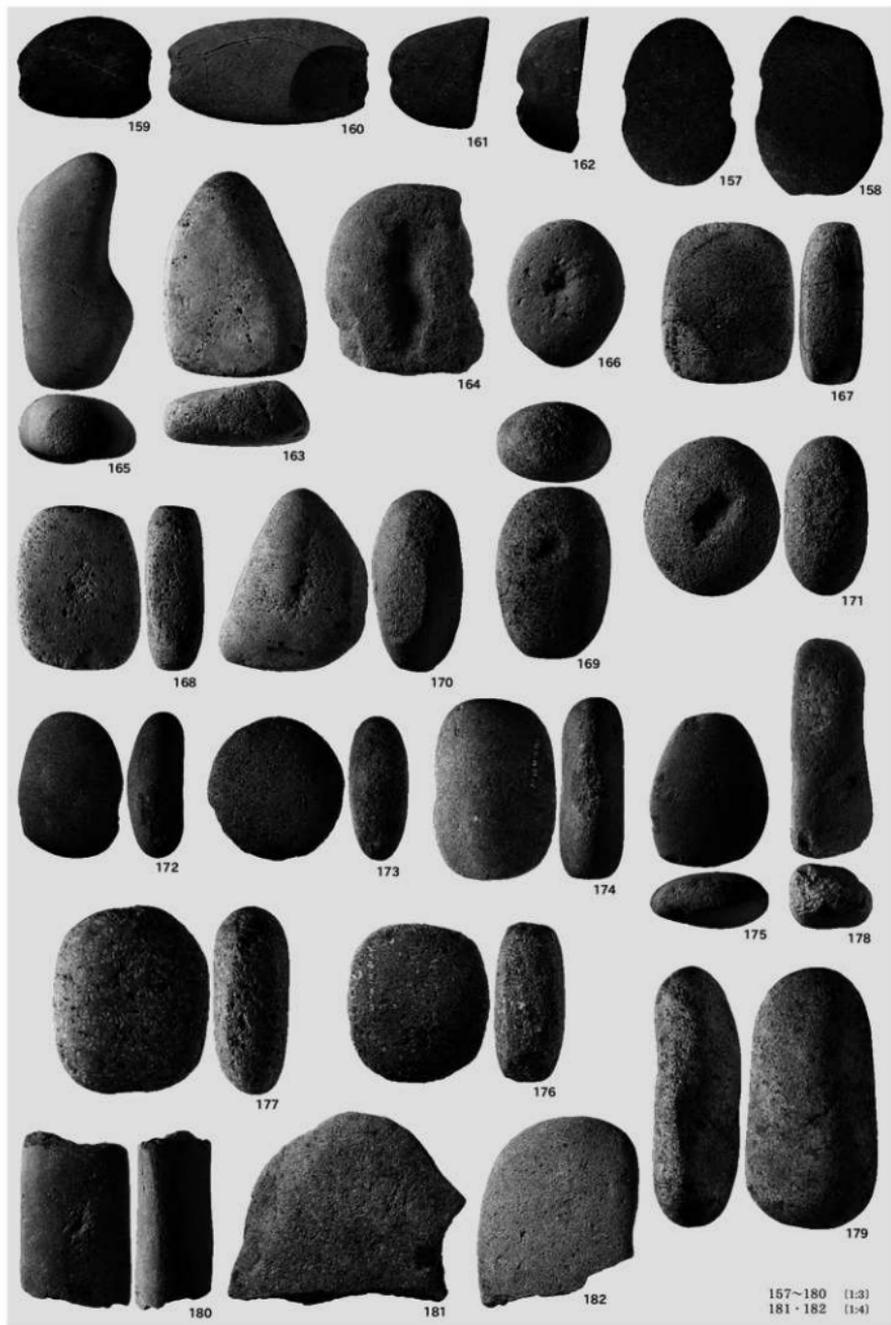


124

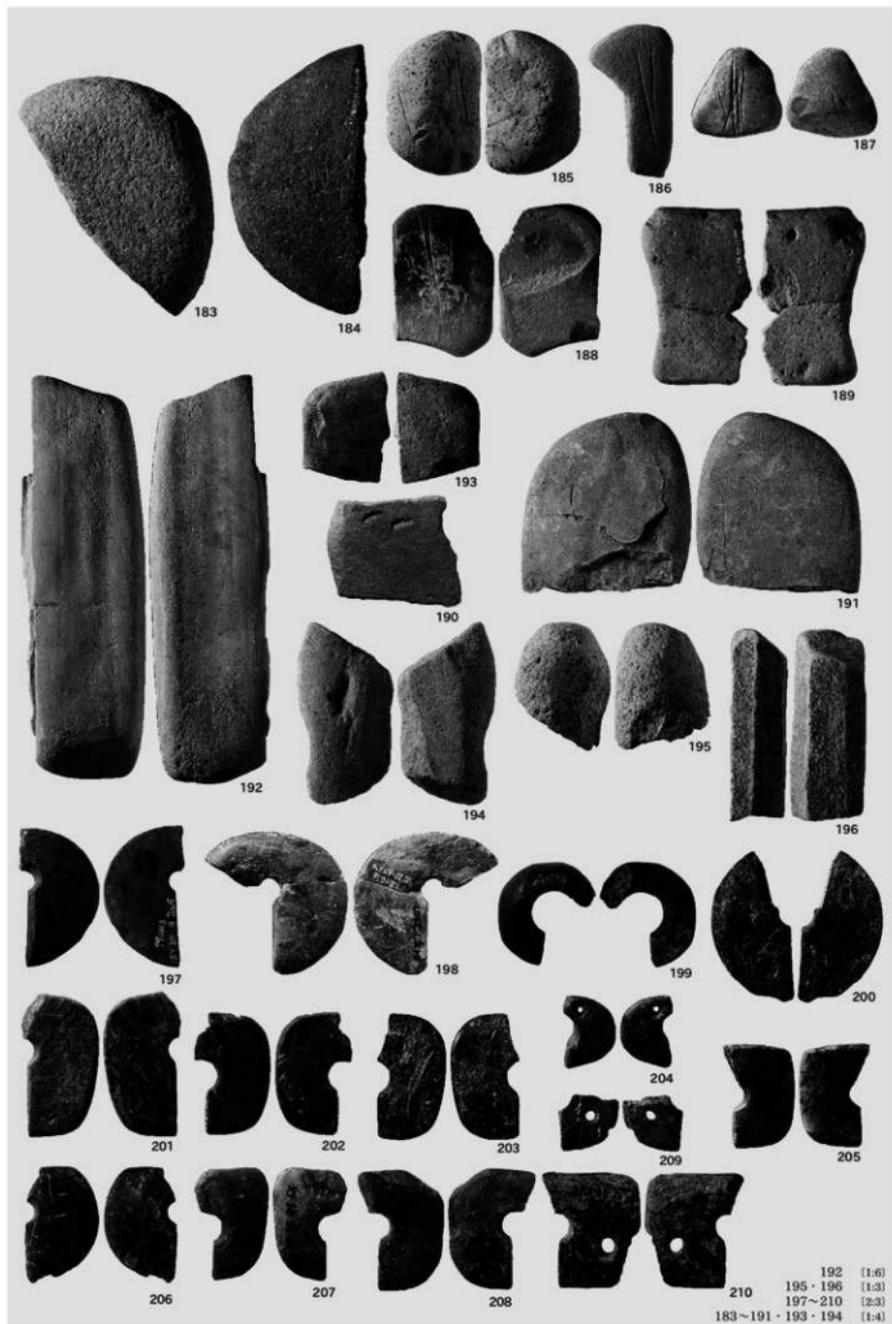


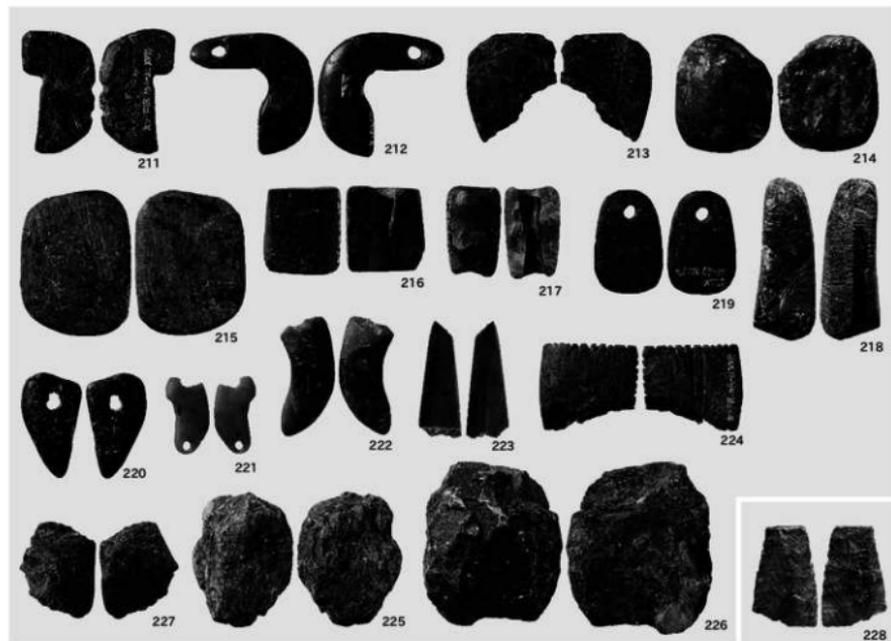
125



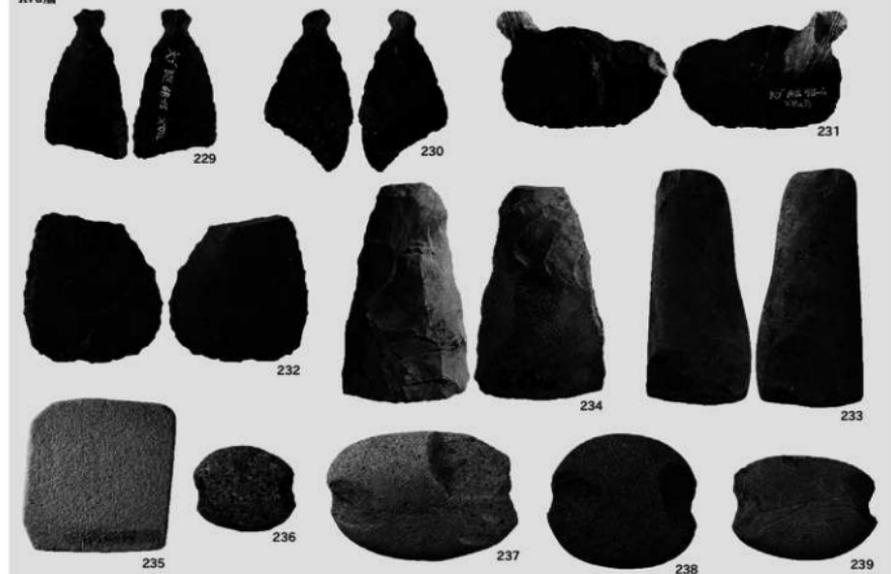


157~180 (1:3)
181・182 (1:4)



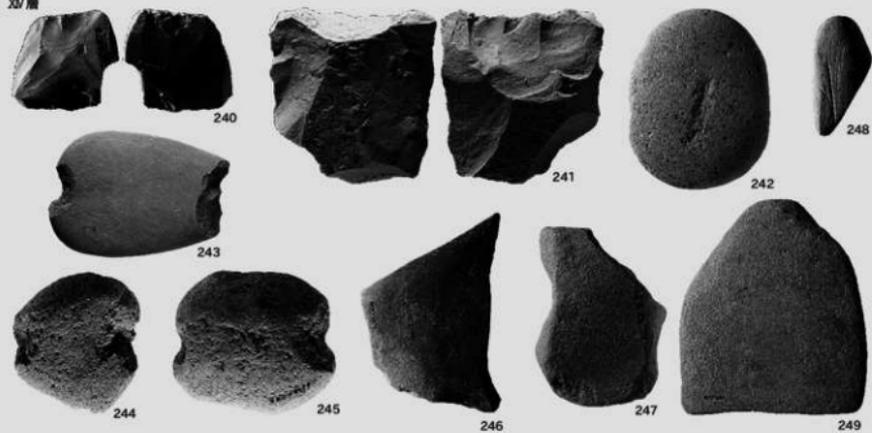


XVa層

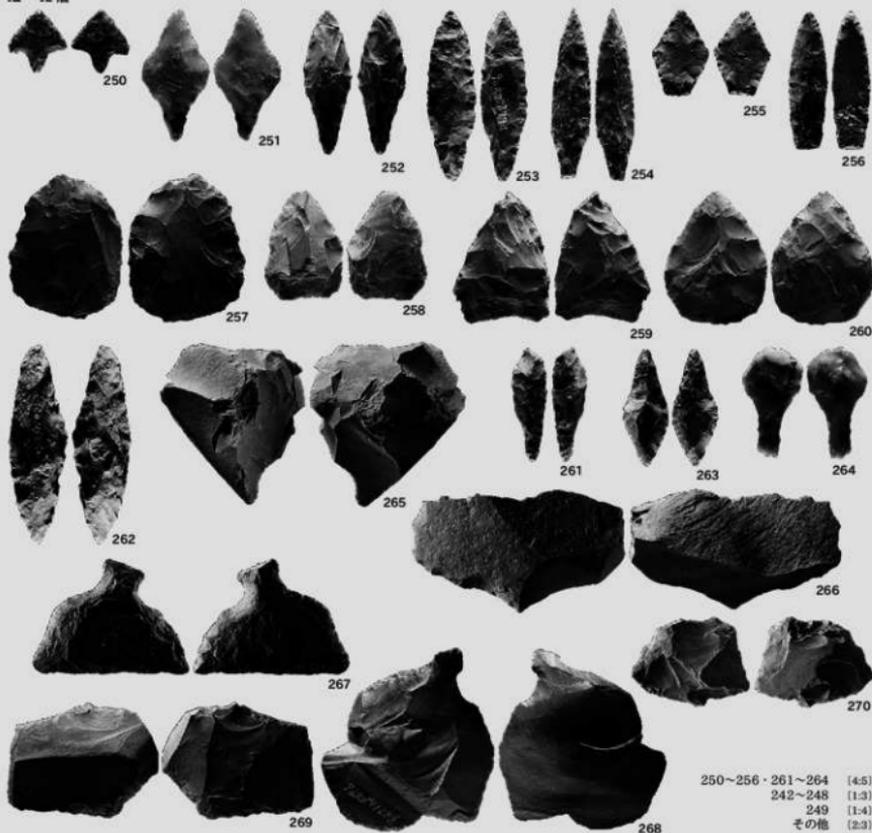


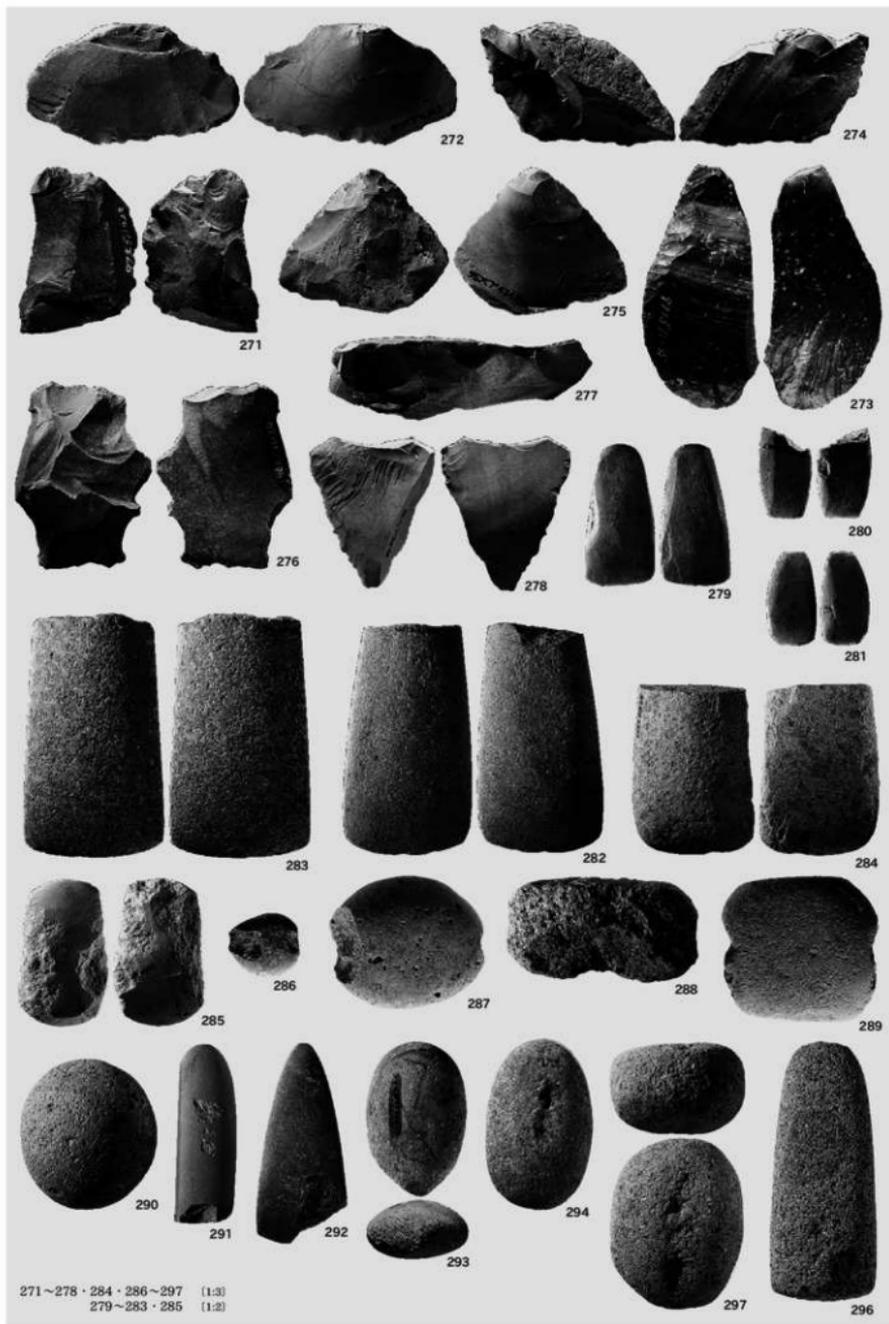
212・216・217・219~222・228 (4:5)
 233・236~239 (1:3)
 235 (1:4)
 その他 (2:3)

XIV層

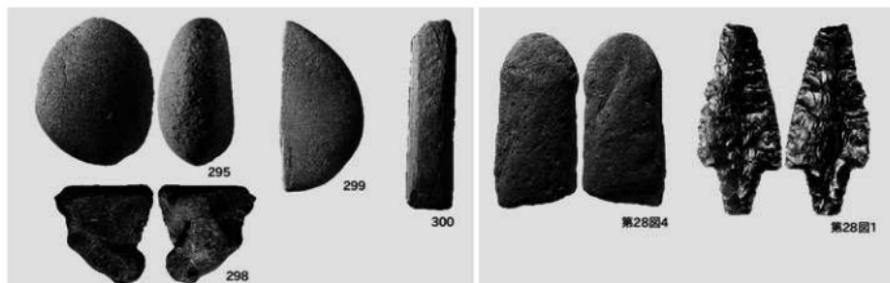


XIII～XI層

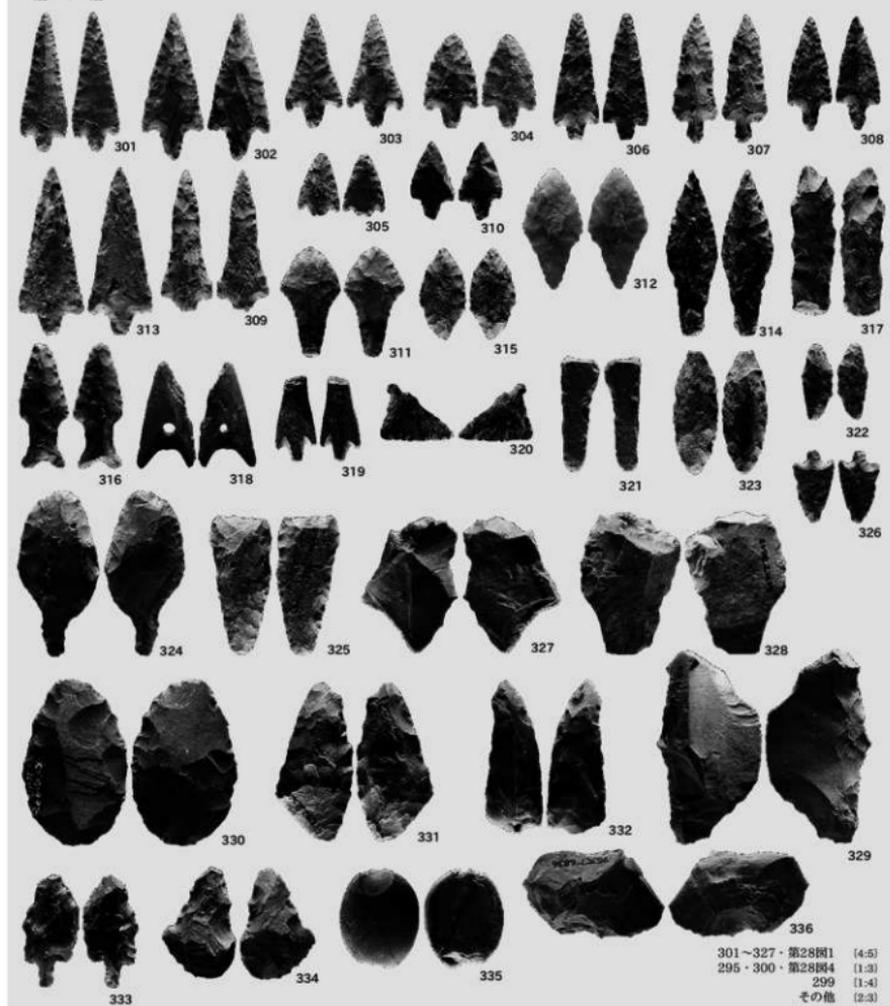


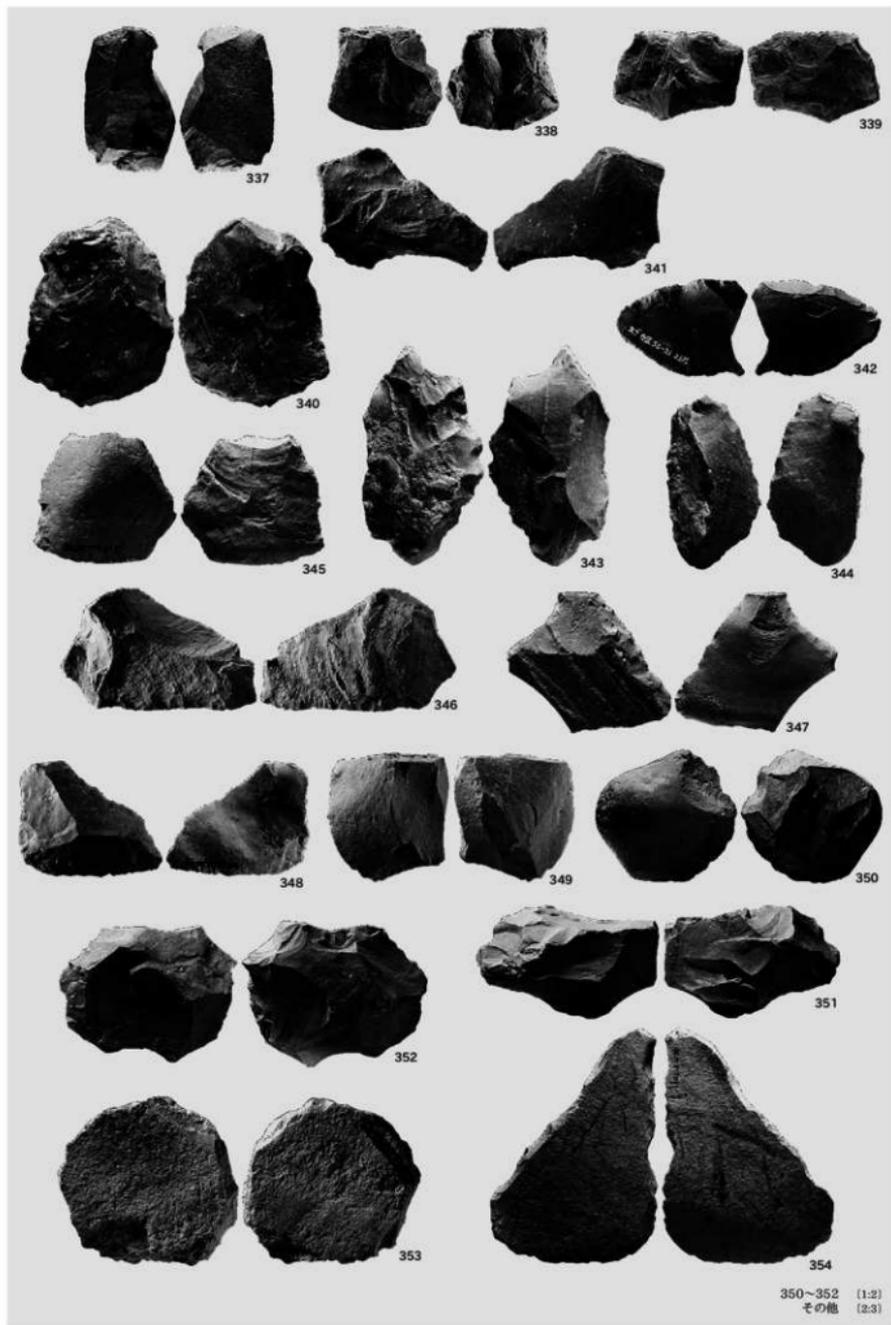


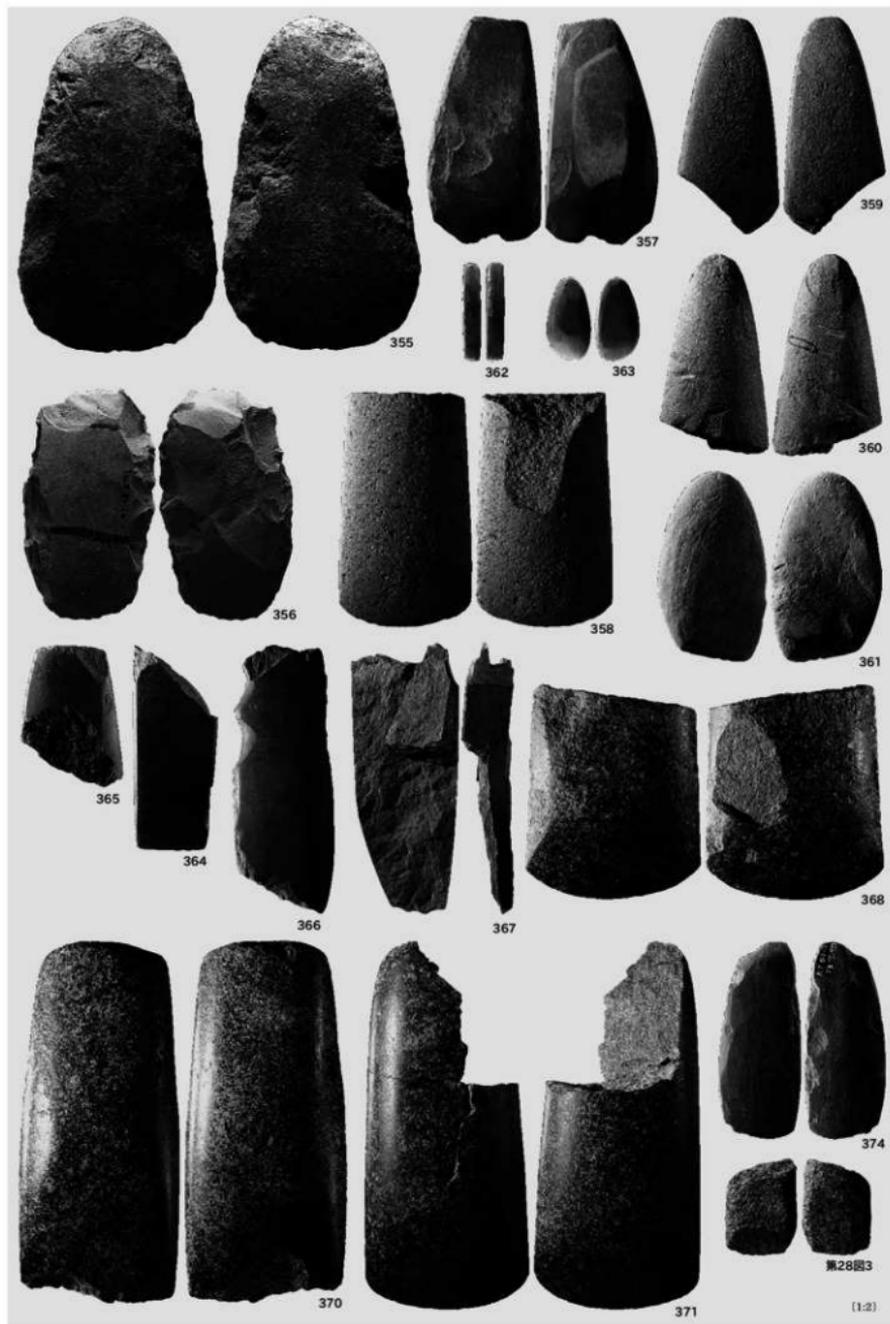
271~278・284・286~297 (1:3)
279~283・285 (1:2)

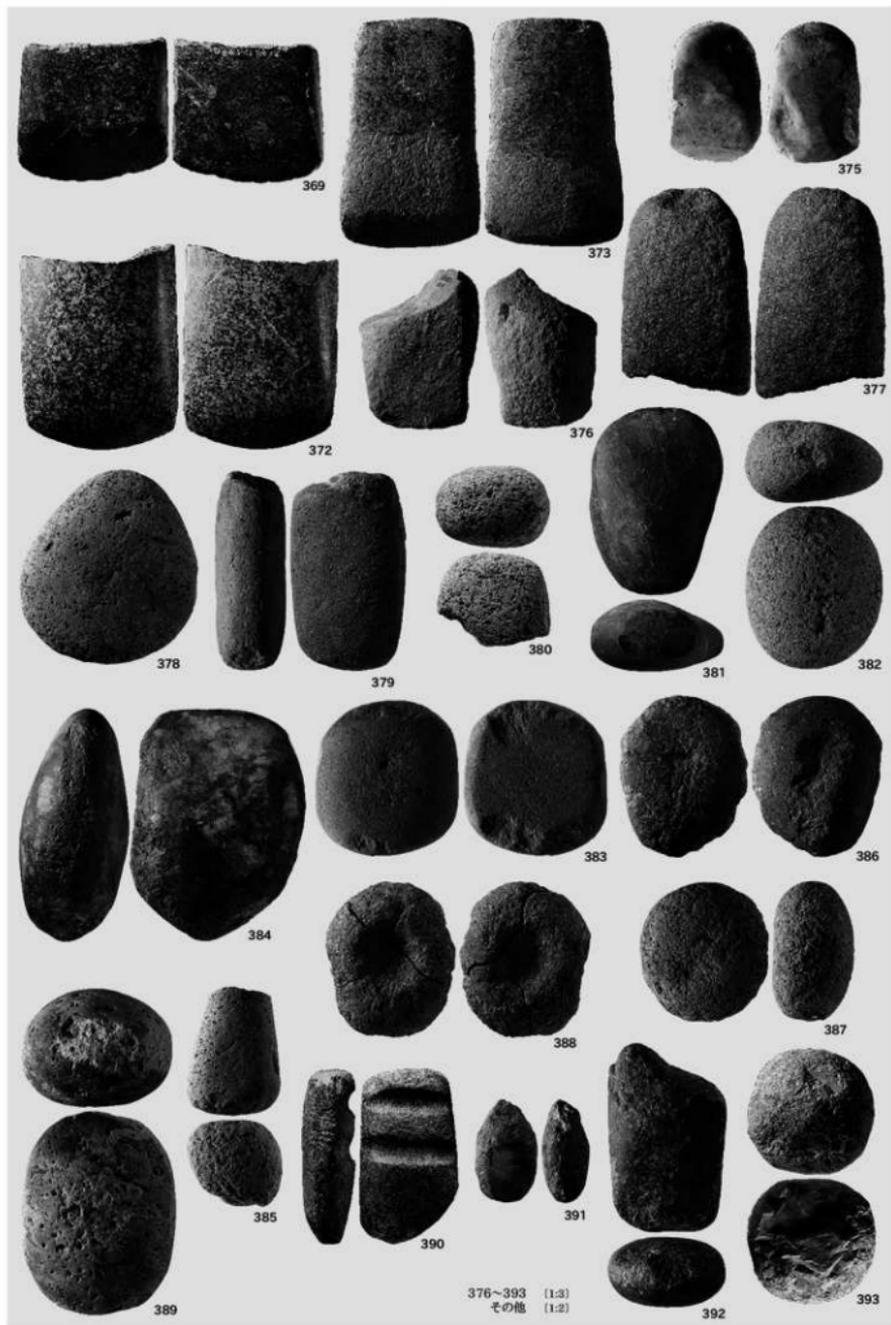


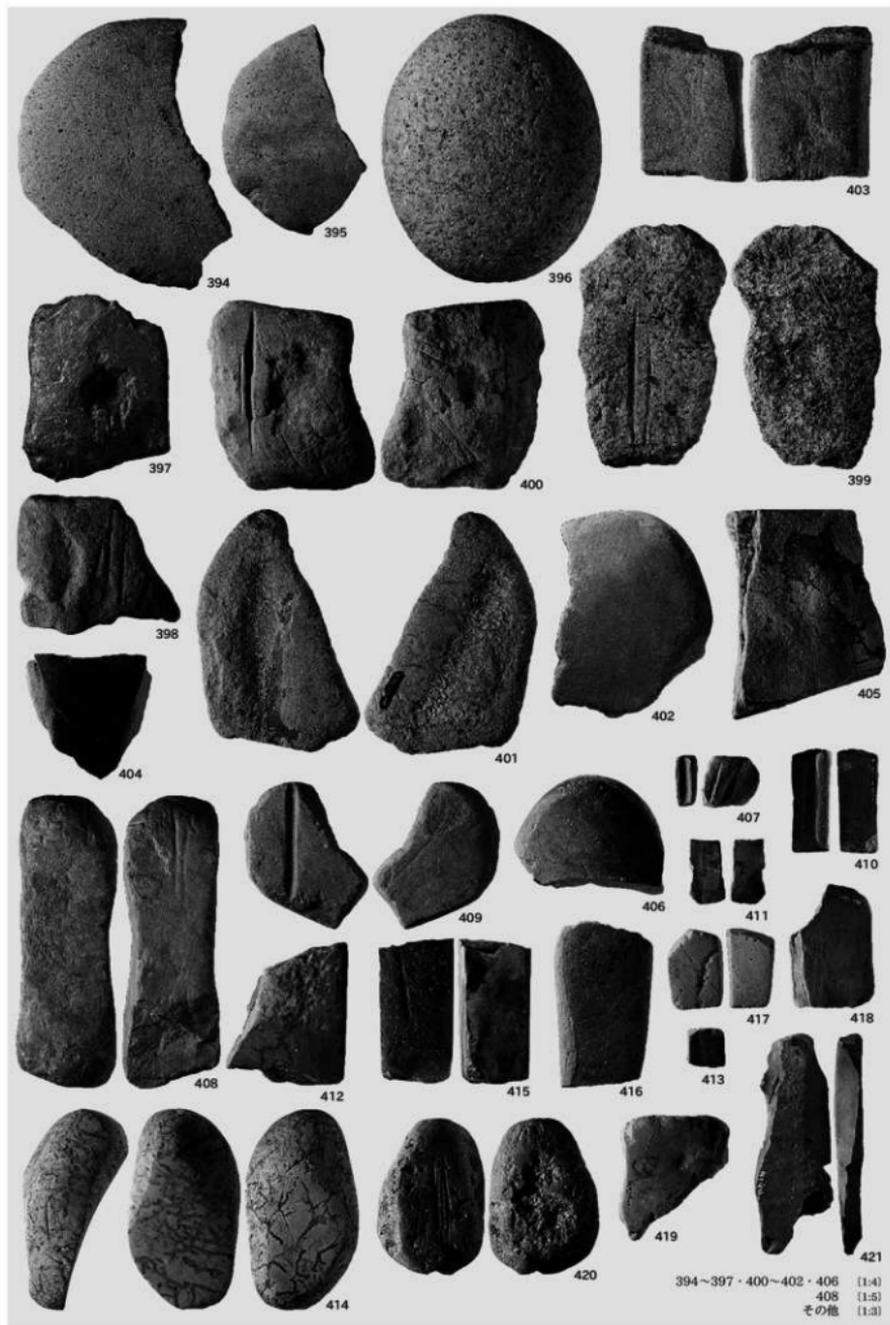
IX層より上層



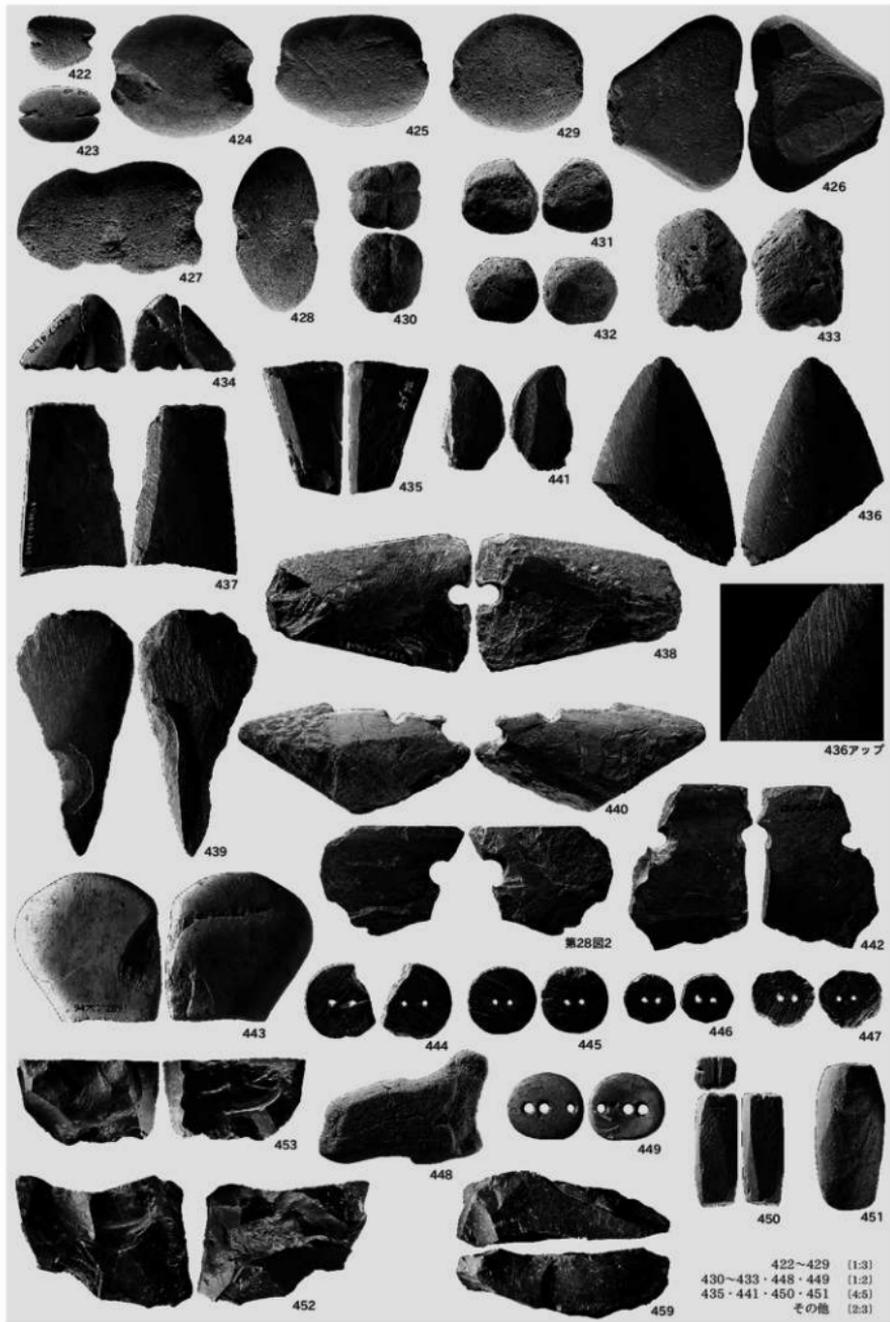


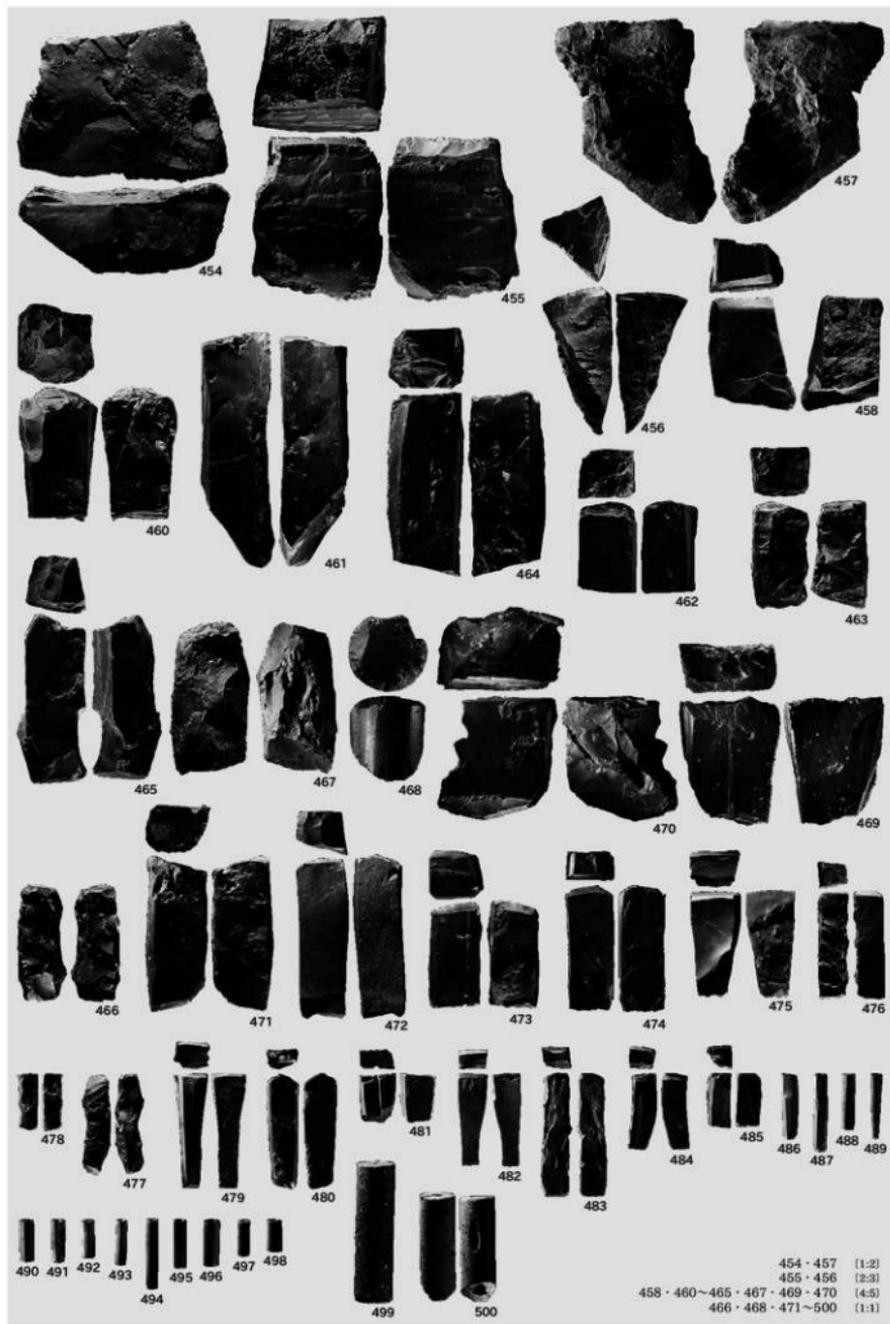


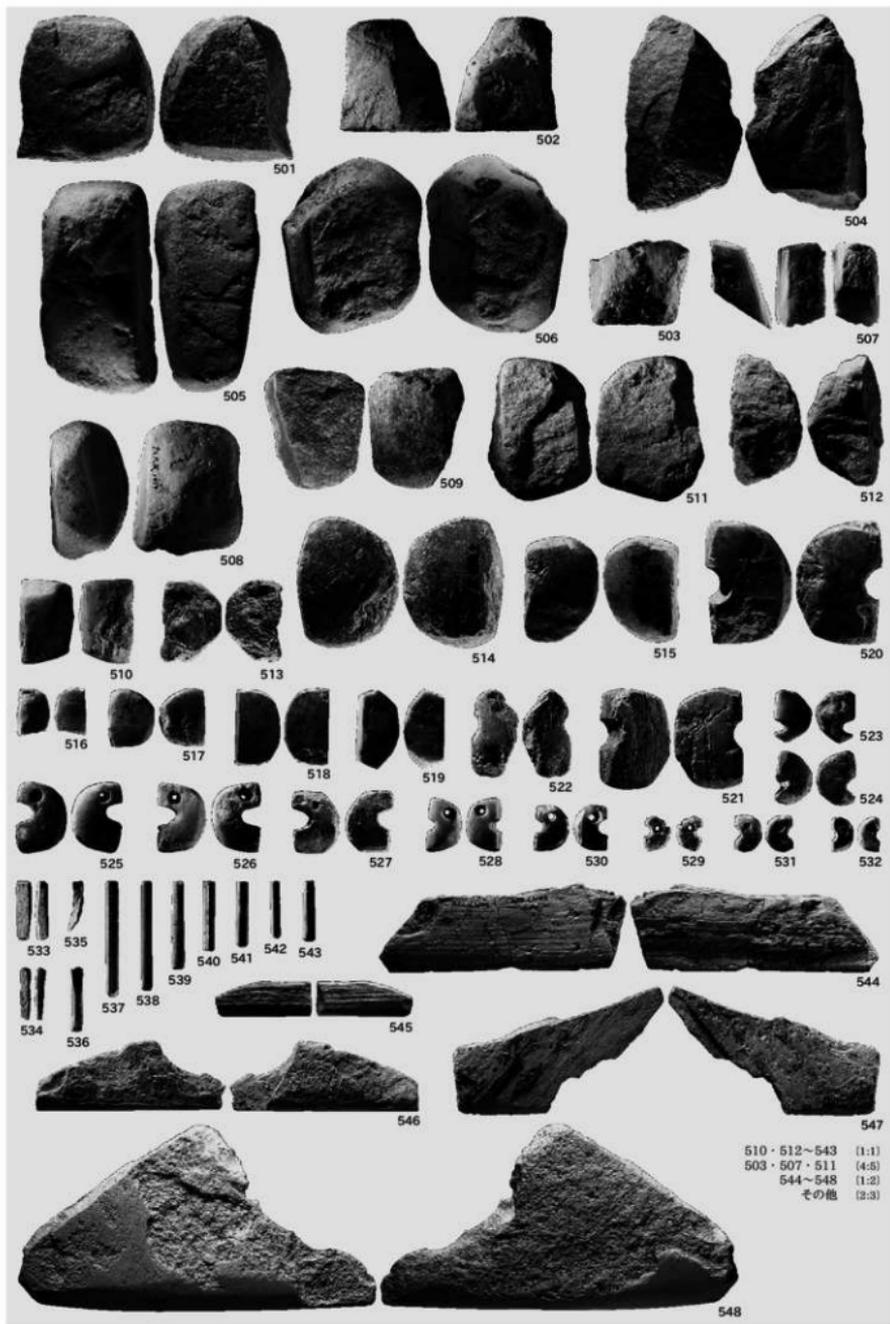




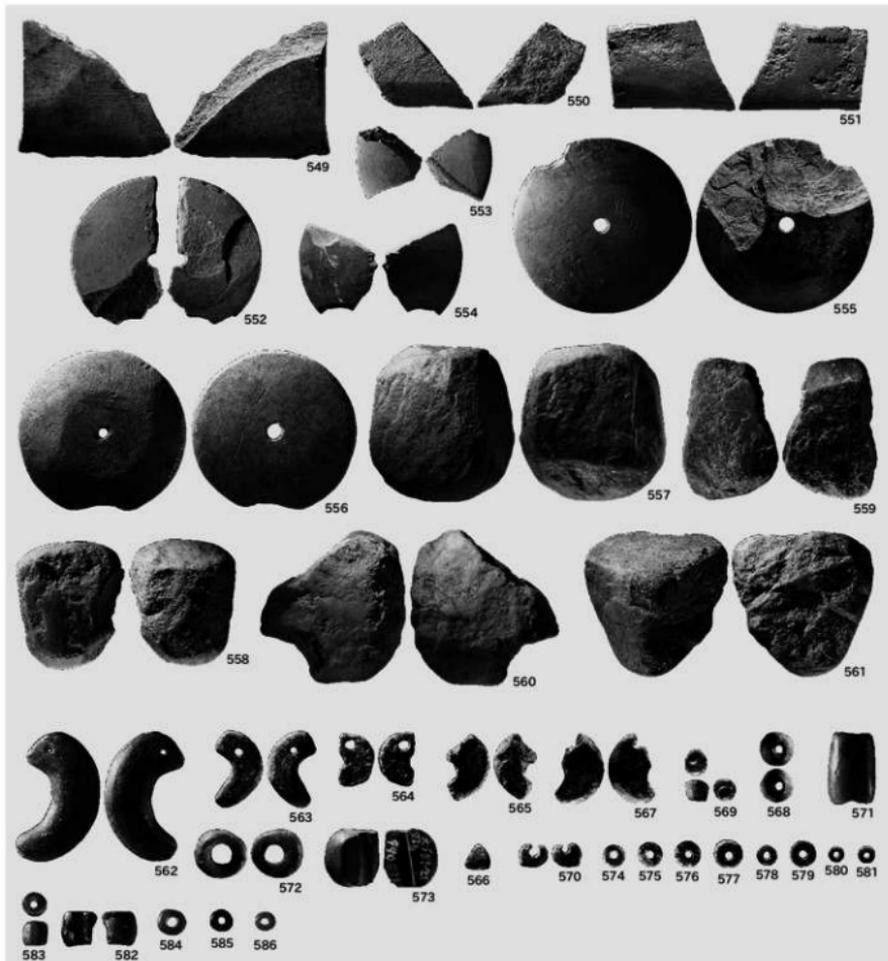
394~397・400~402・406 [1:4]
 408 [1:5]
 その他 [1:3]



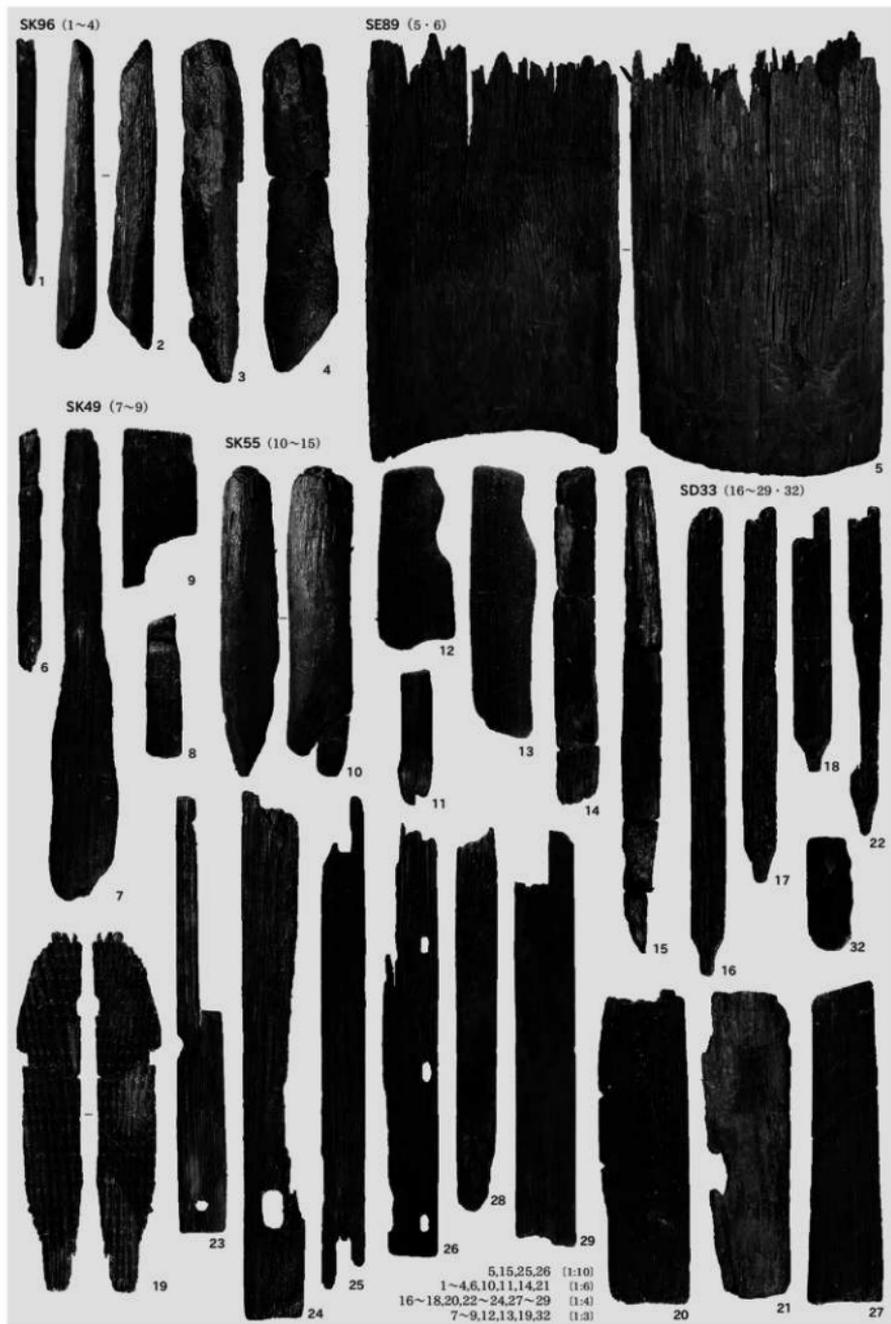


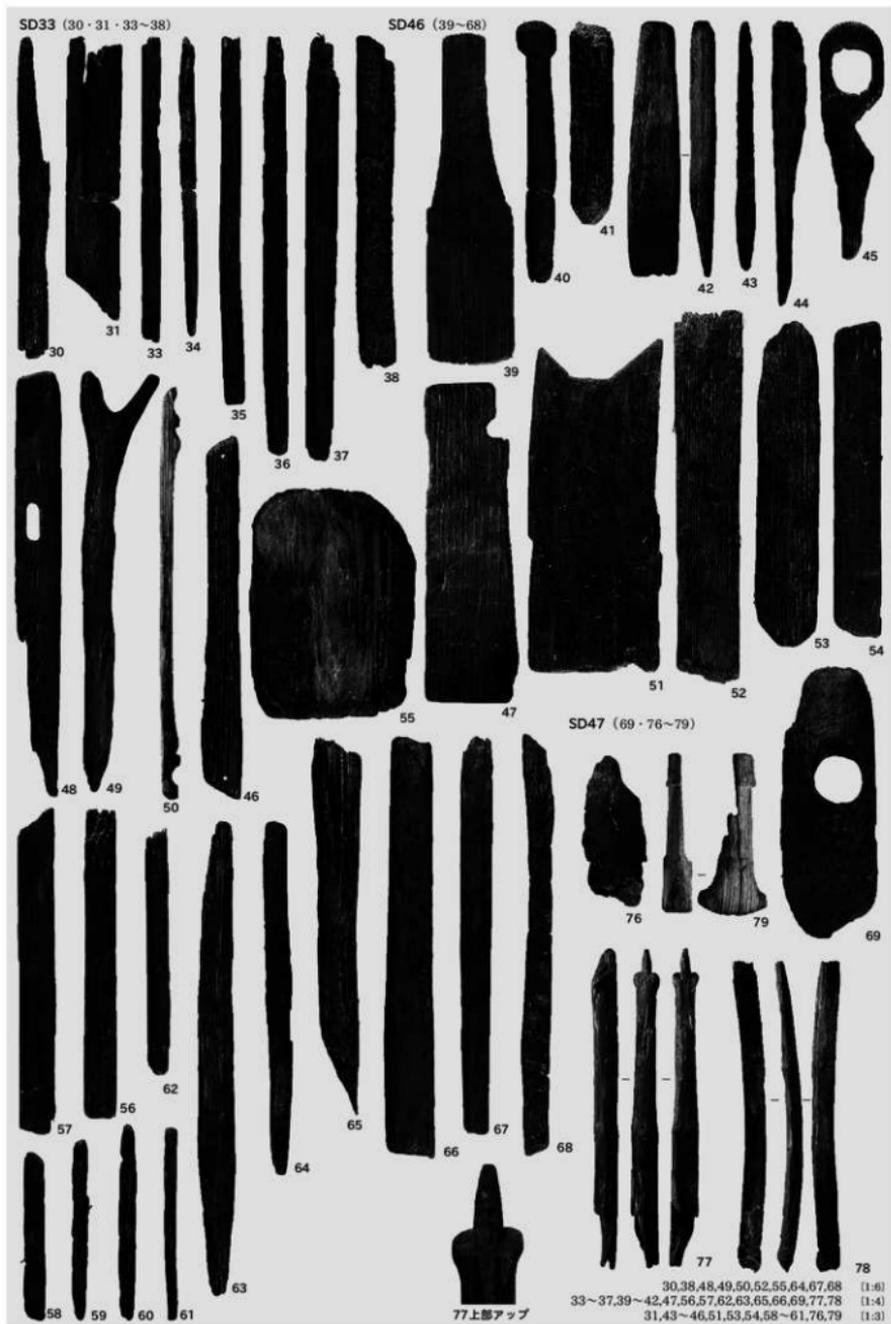


510・512～543 (1:1)
 503・507・511 (4:5)
 544～548 (1:2)
 その他 (2:3)

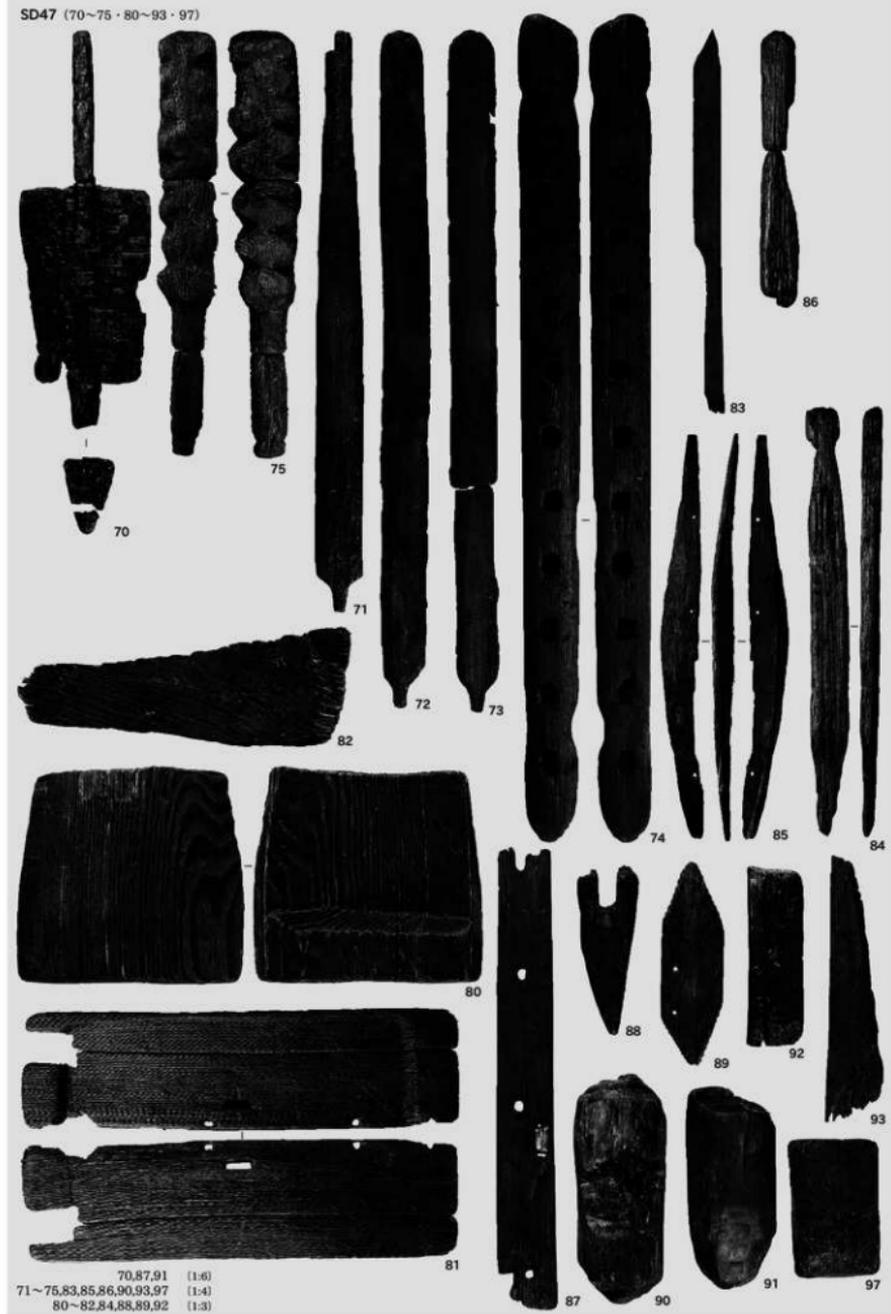


549~551 (1:2)
 552~556 (1:3)
 562・563 (2:3)
 564~586 (1:1)





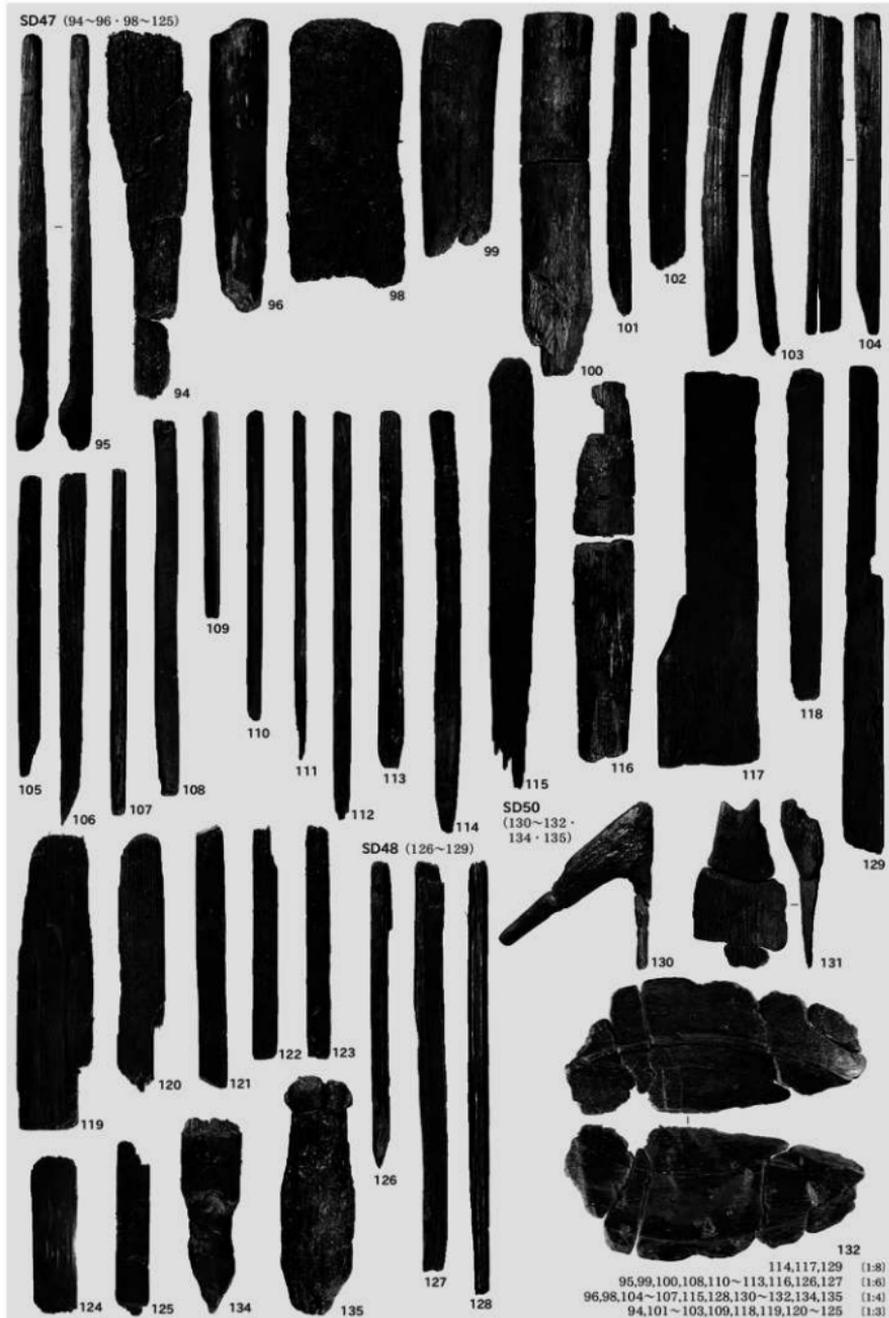
SD47 (70~75・80~93・97)



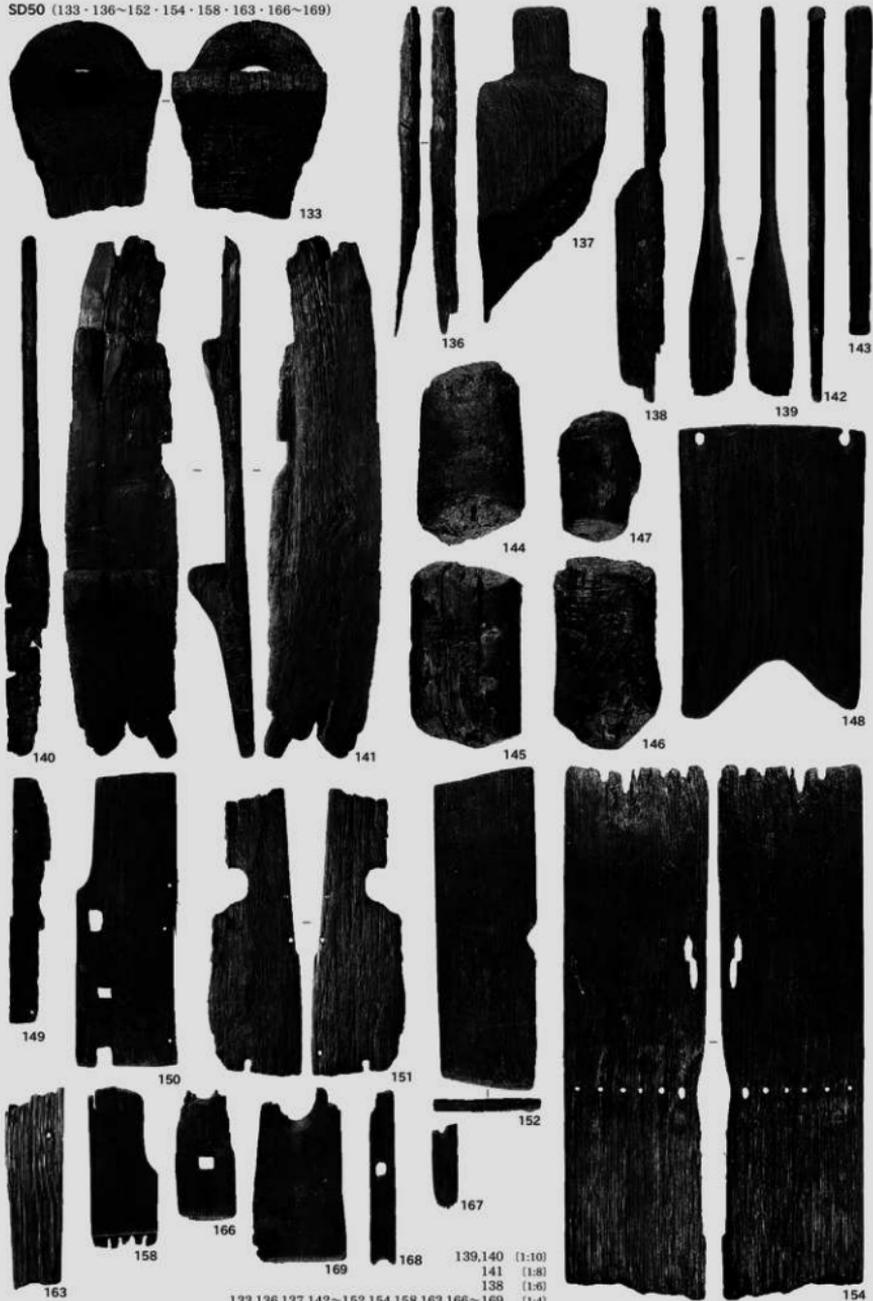
70,87,91 (1:6)

71~75,83,85,86,90,93,97 (1:4)

80~82,84,88,89,92 (1:3)



SD50 (133・136~162・154・158・163・166~169)



133,136,137,142~162,154,158,163,166~169 (1:4)

139,140 (1:10)

141 (1:8)

138 (1:6)

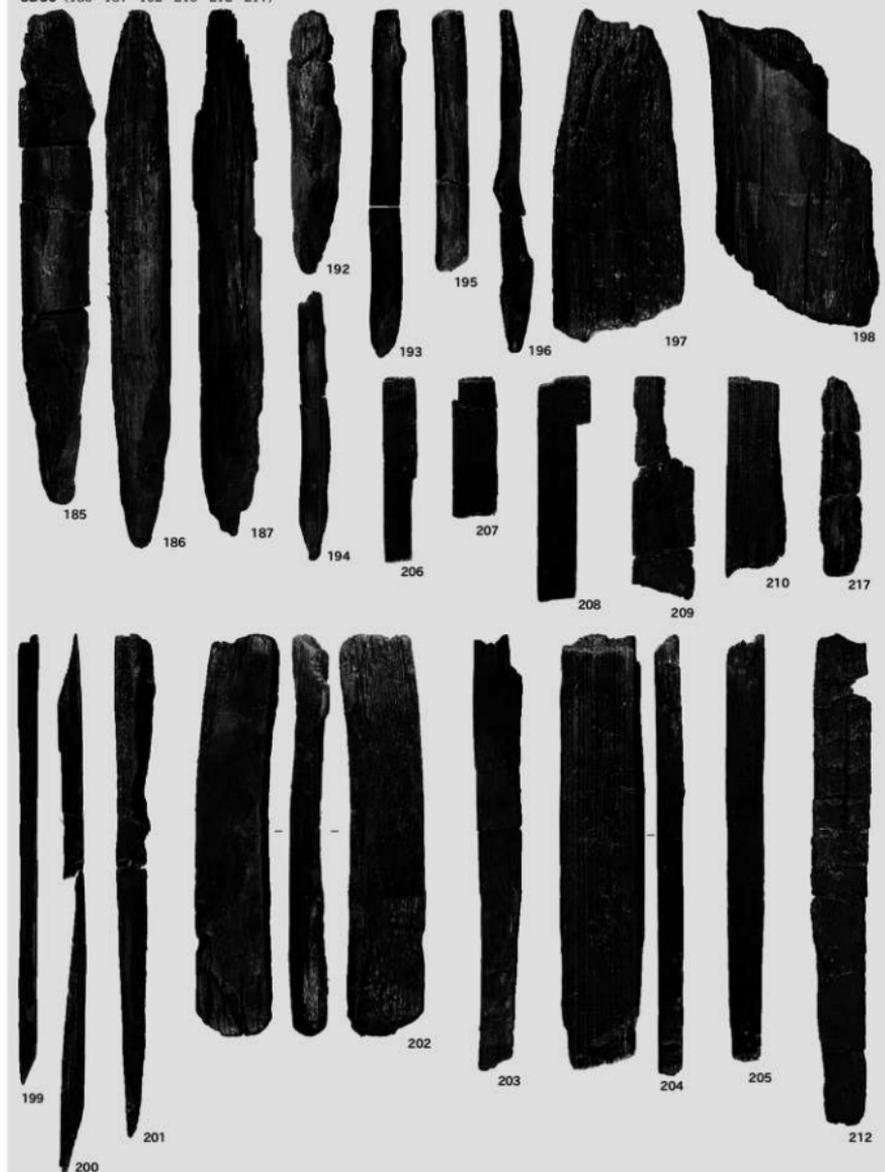
152 (1:10)

154

SD50 (153・155~157・159~162・164・165・170~184・188~191)



SD50 (185~187・192~210・212・217)



193,196 (1:10)
 199,203,212 (1:8)
 185~187,192,194,197,198,202 (1:6)
 195,200,201,204~210,217 (1:4)

SD50 (211・213~216・218~251・262・263)



247 (1:10)

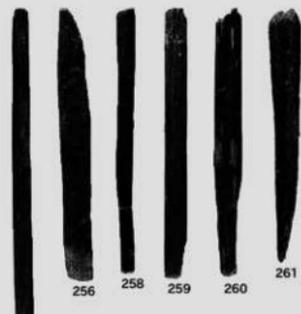
213 (1:8)

228,233~237,245,246,248~251 (1:6)

211,214~216,218~227,229~232,238,243,244 (1:4)

239~242,262,263 (1:3)

SD50 (252~261)



SD51 (264~272)



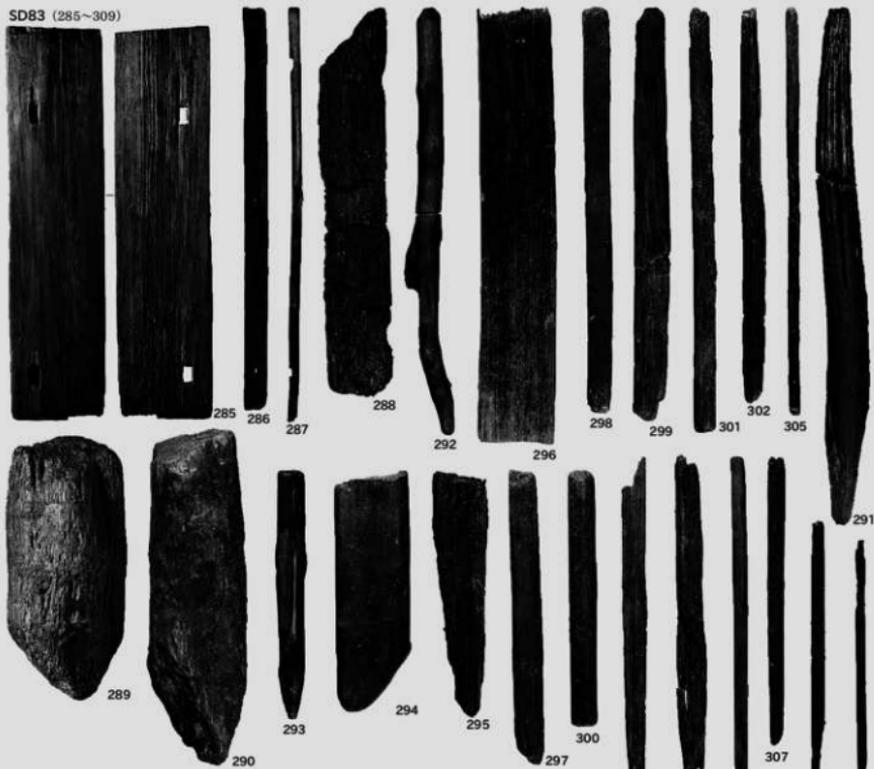
SD83 (273~284)



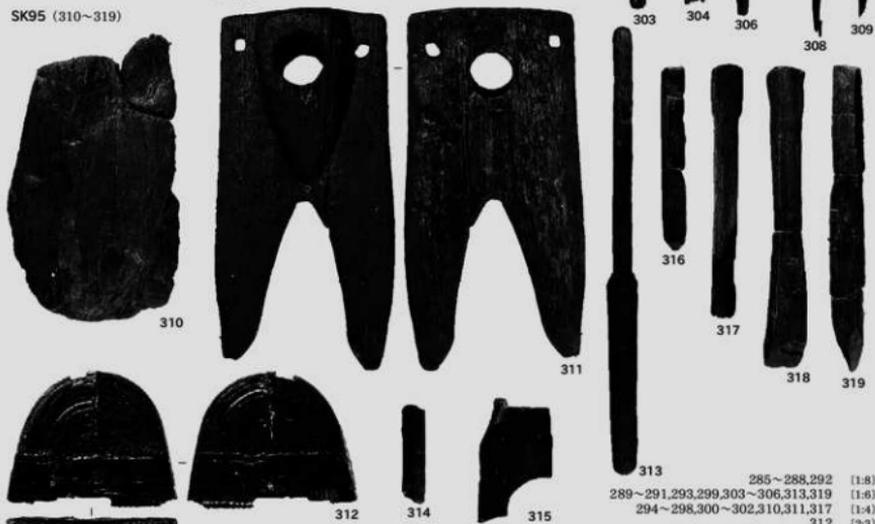
- 252 (1:10)
- 272,282 (1:8)
- 253,257,267~271,273,283,284 (1:5)
- 277 (2:3)
- 259,260 (1:3)
- その他 (1:4)

- 278
- 276
- 279
- 281
- 280
- 282

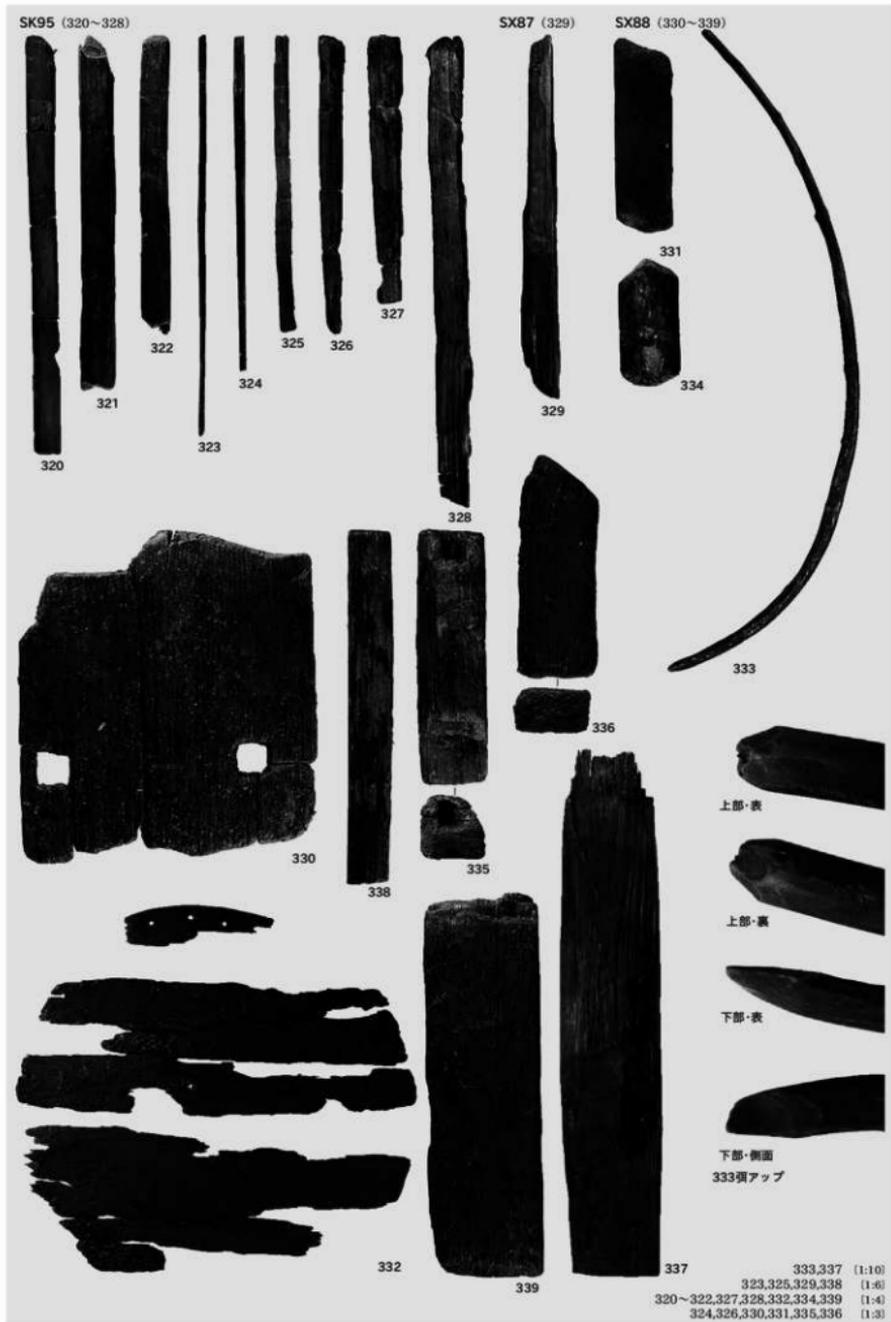
SD83 (285~309)



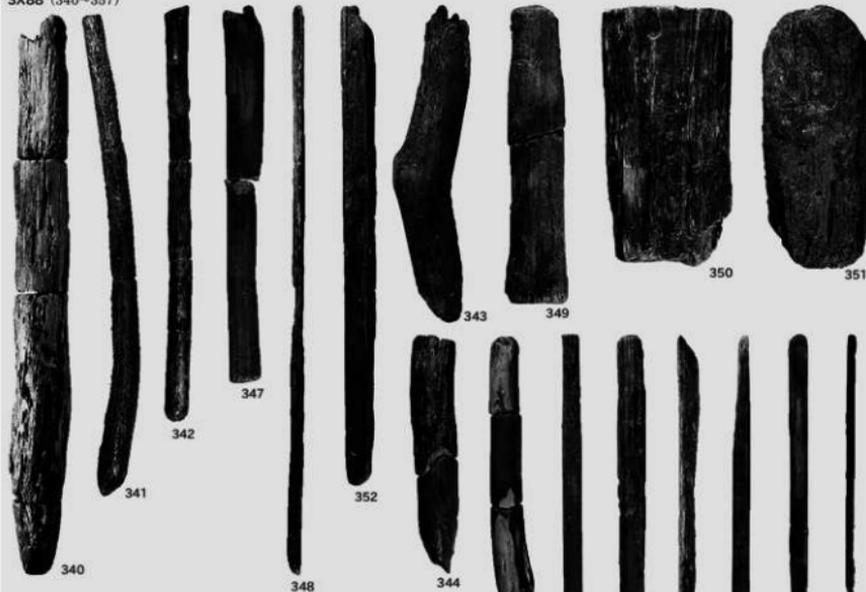
SK95 (310~319)



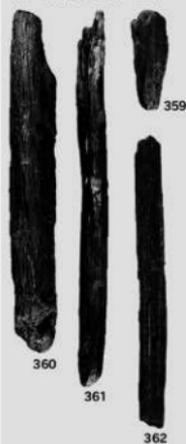
285~288,292 (1:8)
 289~291,293,299,303~306,313,319 (1:6)
 294~298,300~302,310,311,317 (1:4)
 312 (2:3)
 307~309,314~316,318 (1:3)



SX88 (340~357)



XV・XVd層 (359~362)



XI・XIb層 (363~365)



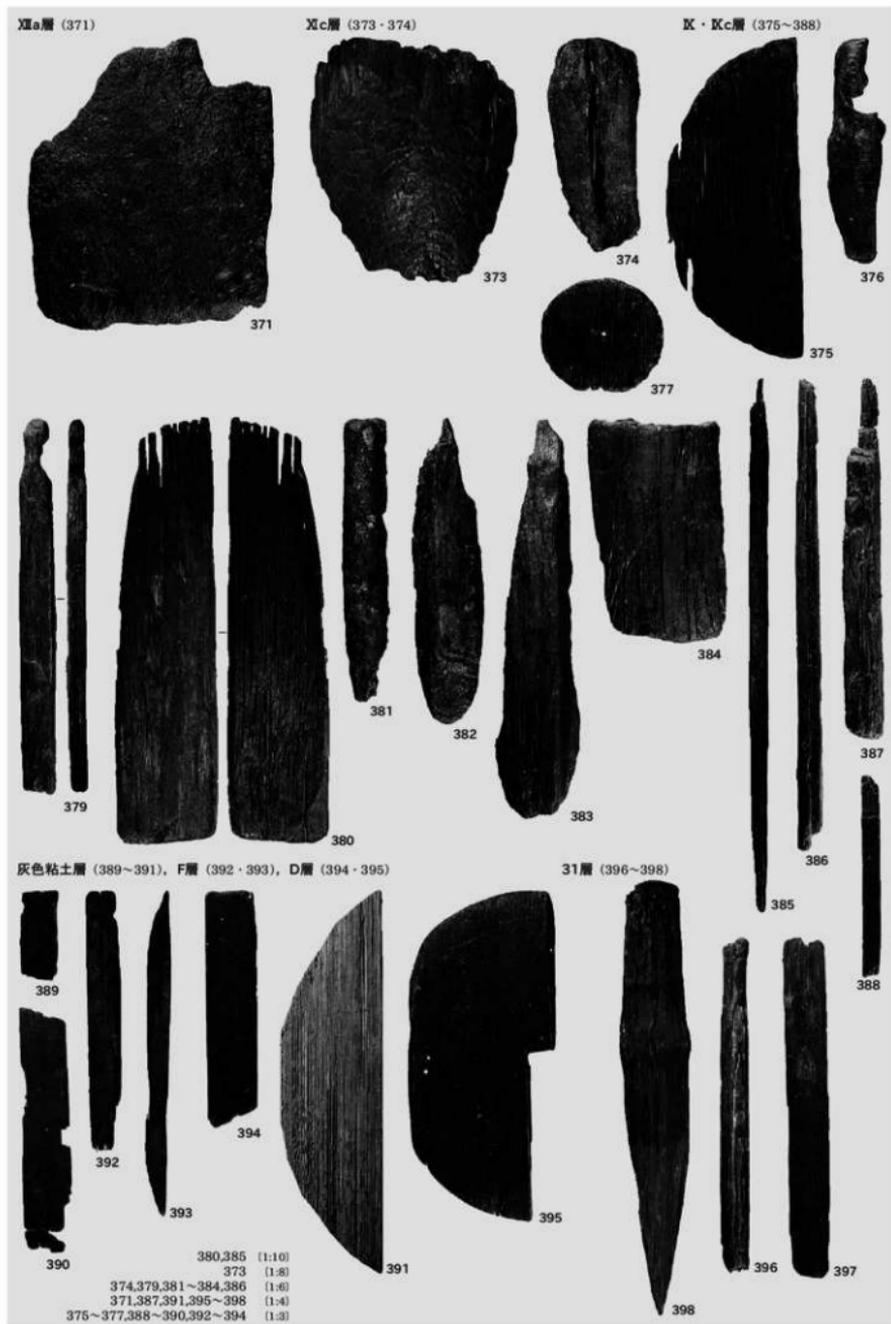
XIc層 (369・370)

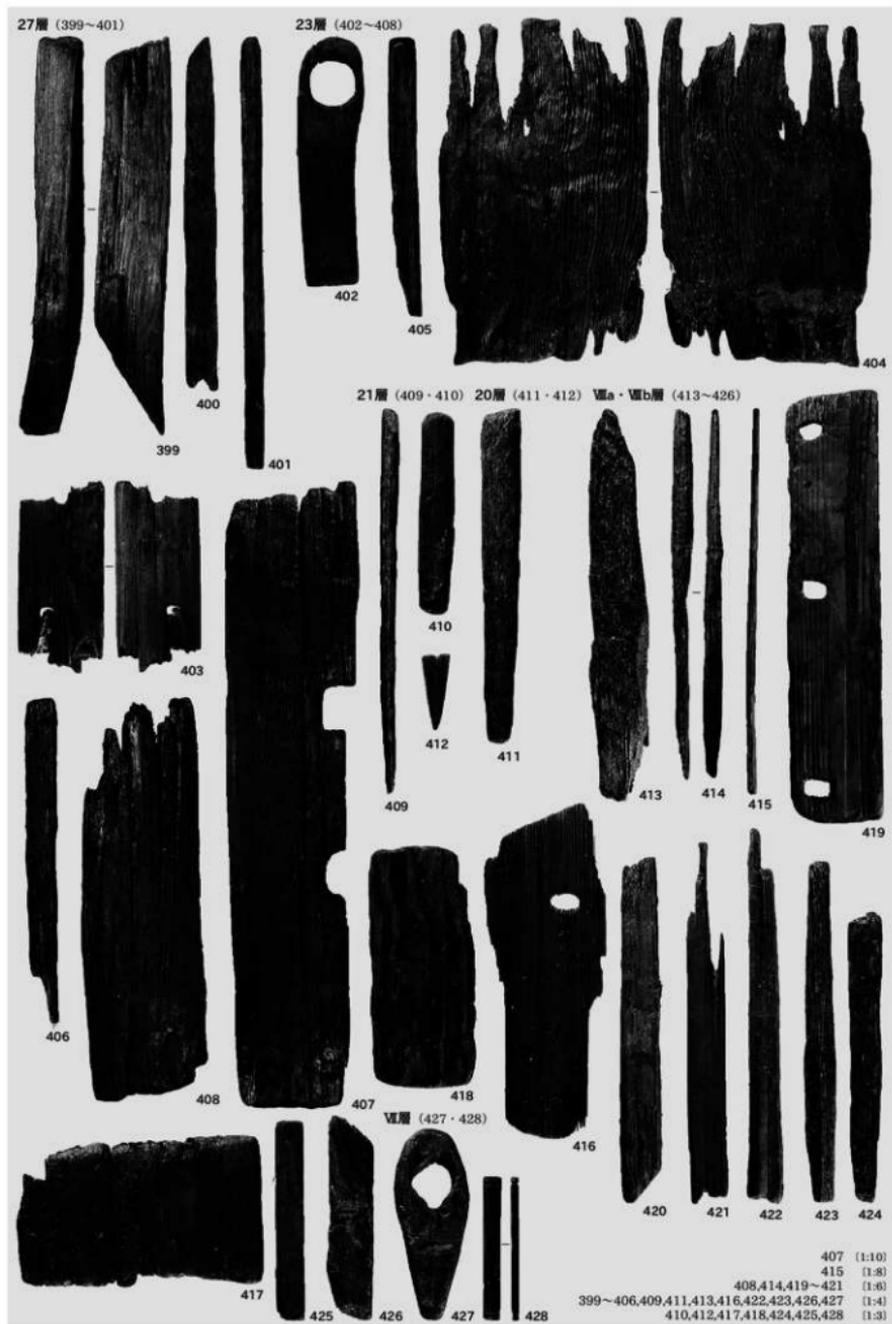


XI・XIc層・XI砂層 (366~368)

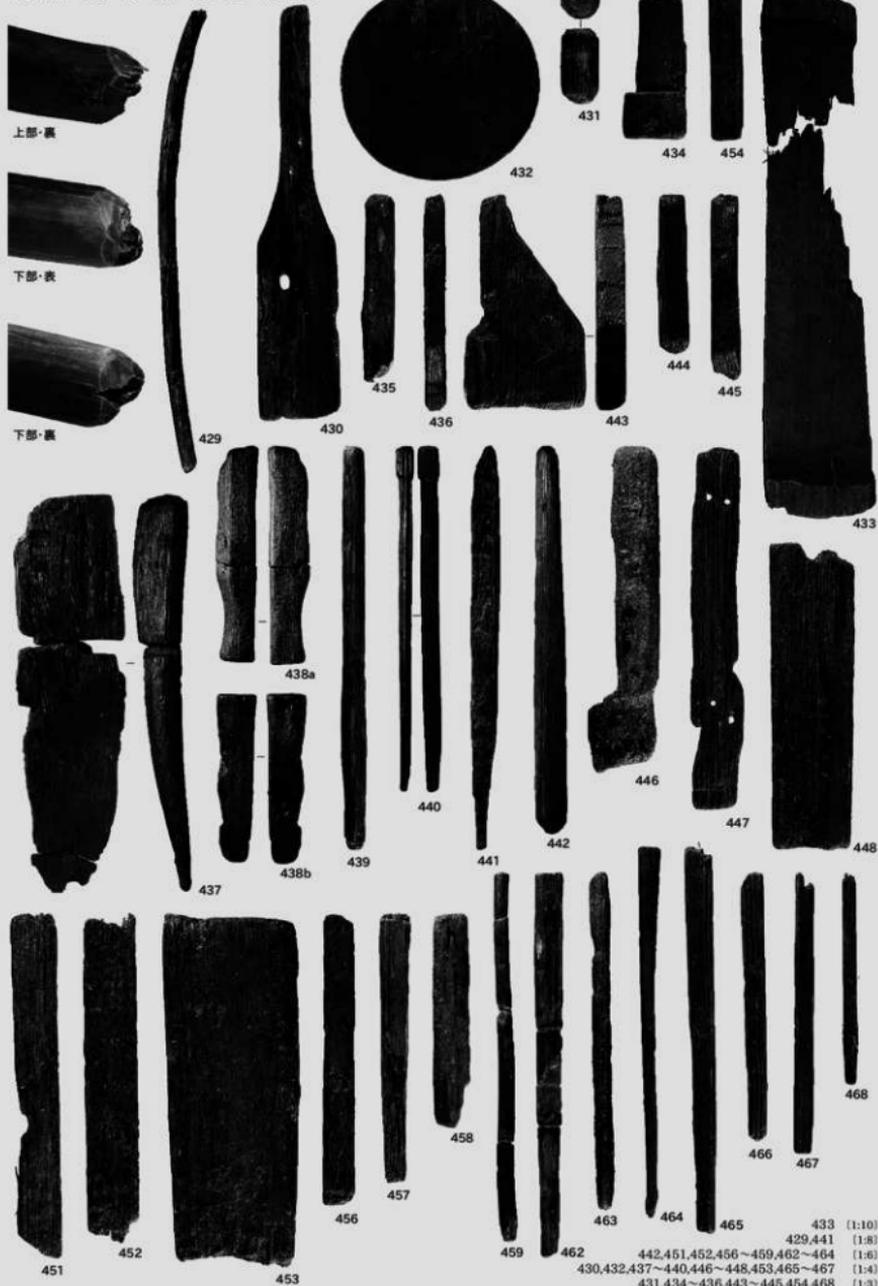


341 (1:12)
 342,343,348 (1:10)
 355,361 (1:8)
 340,344,345,350,351,353,359,360 (1:6)
 347,349,352,354,356,368~370 (1:4)
 346,357,362,363~367 (1:3)

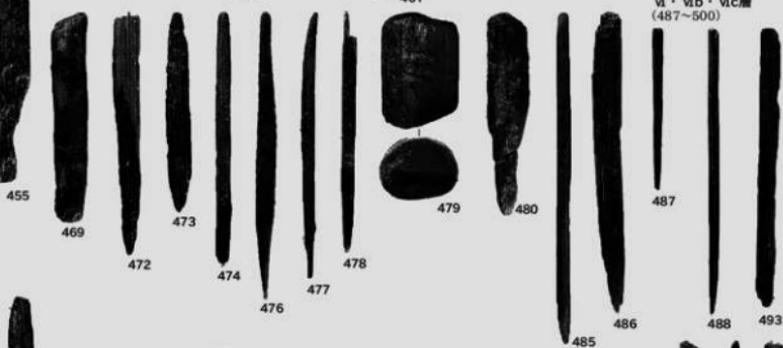
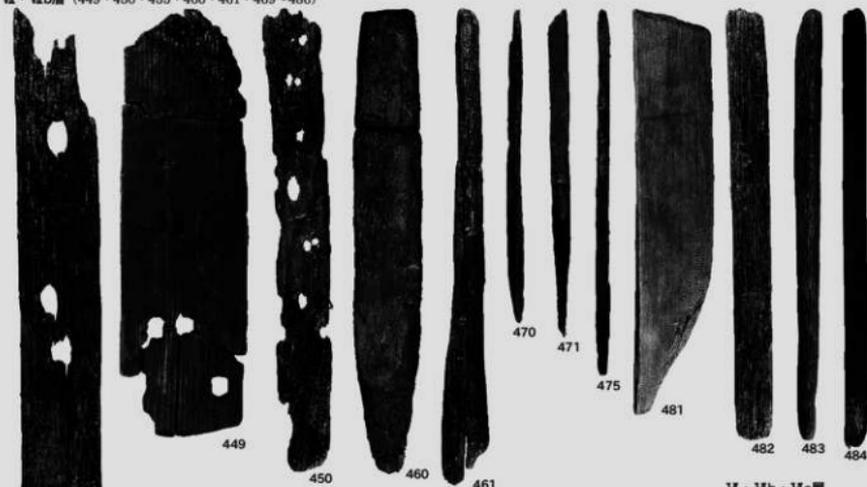




Ⅶ層 (429~448・451~454・456~459・462~468)



VII・VIIb層 (449・450・455・460・461・469~486)

VII・VIIb・VIIc層
(487~500)

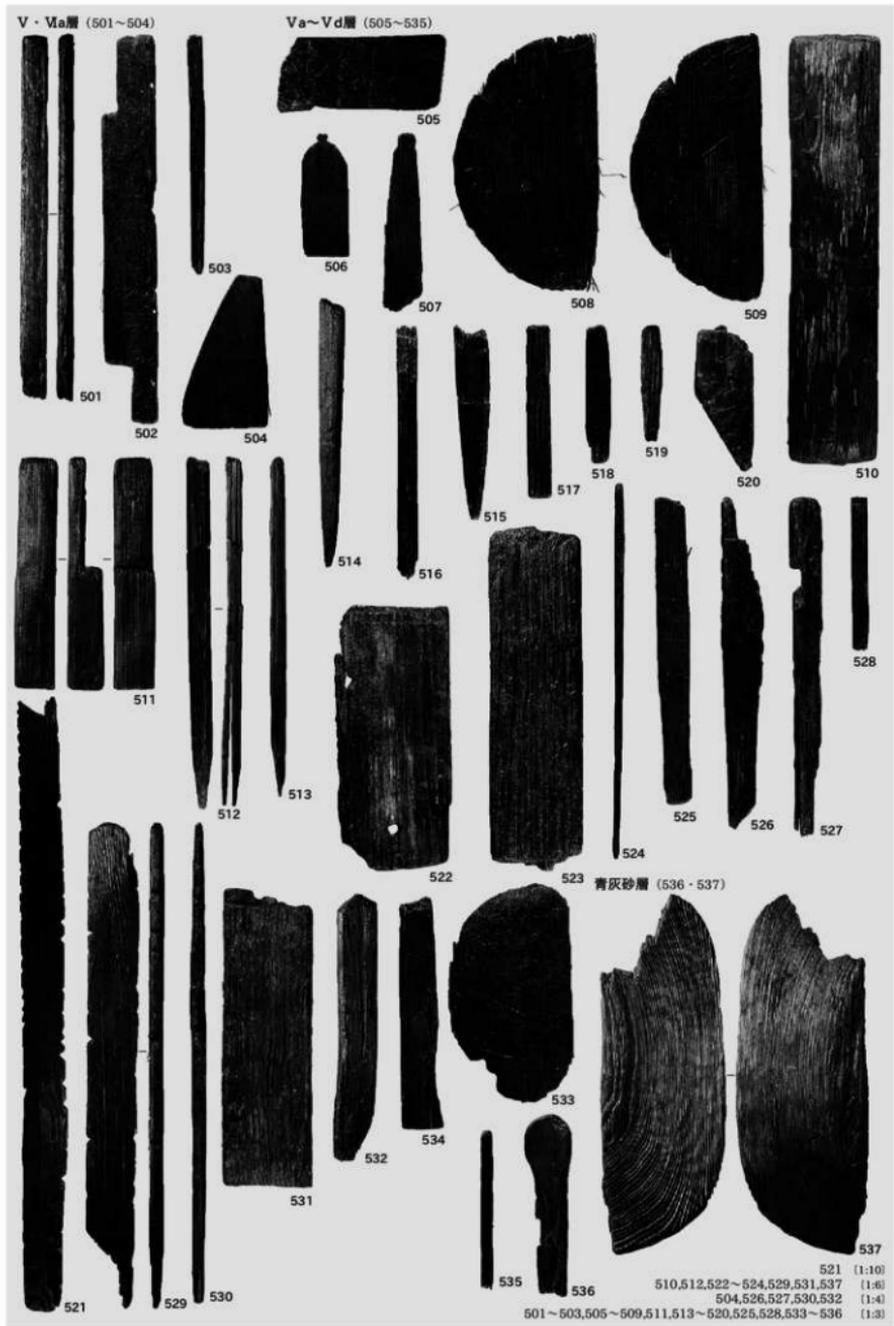
484 [1:10]

497 [1:8]

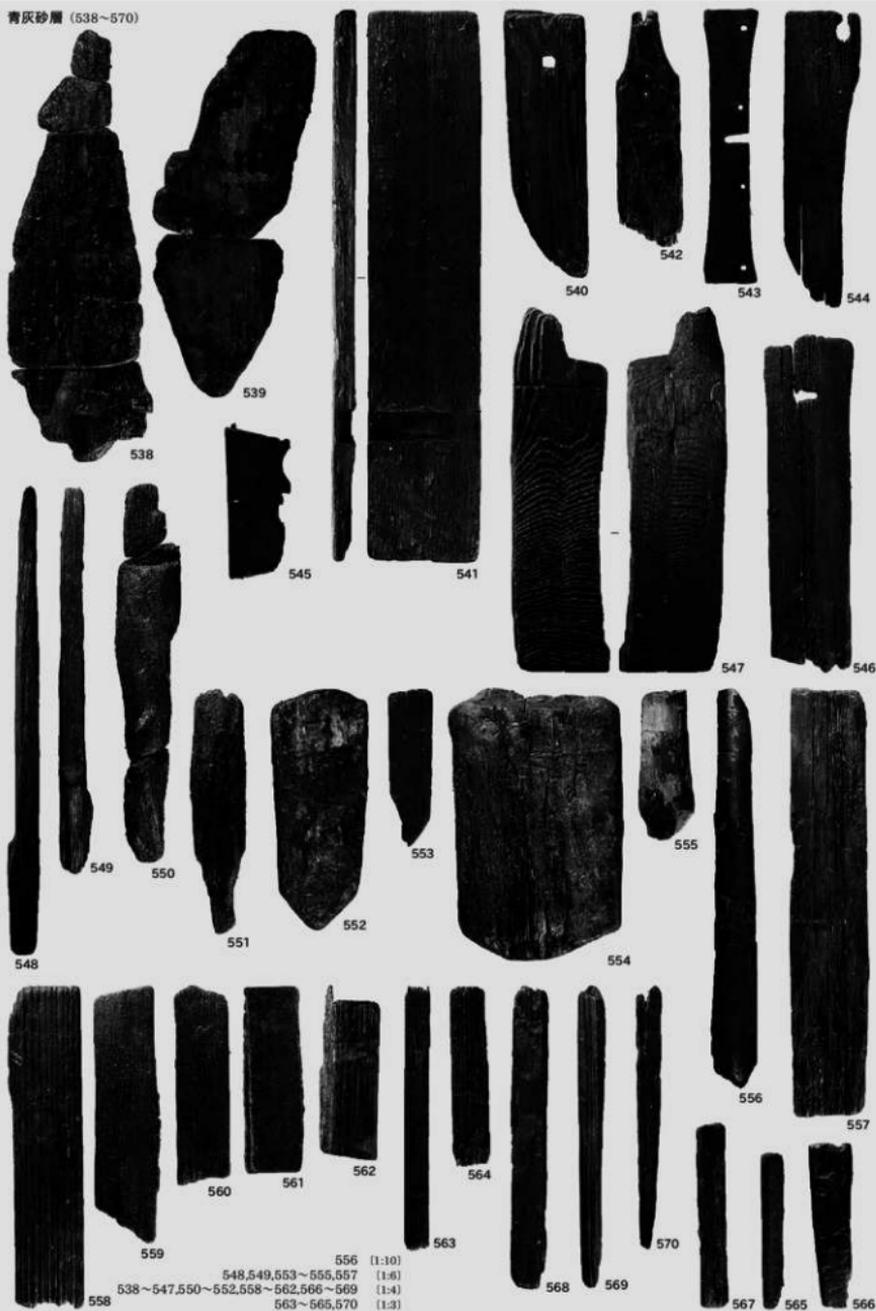
449,460,461,480,481,485,498 [1:6]

450,455,469,476,479,482,483,486,490~493,496,499 [1:4]

470~475,477,478,487~489,494,495,500 [1:3]



青灰砂層 (538~570)

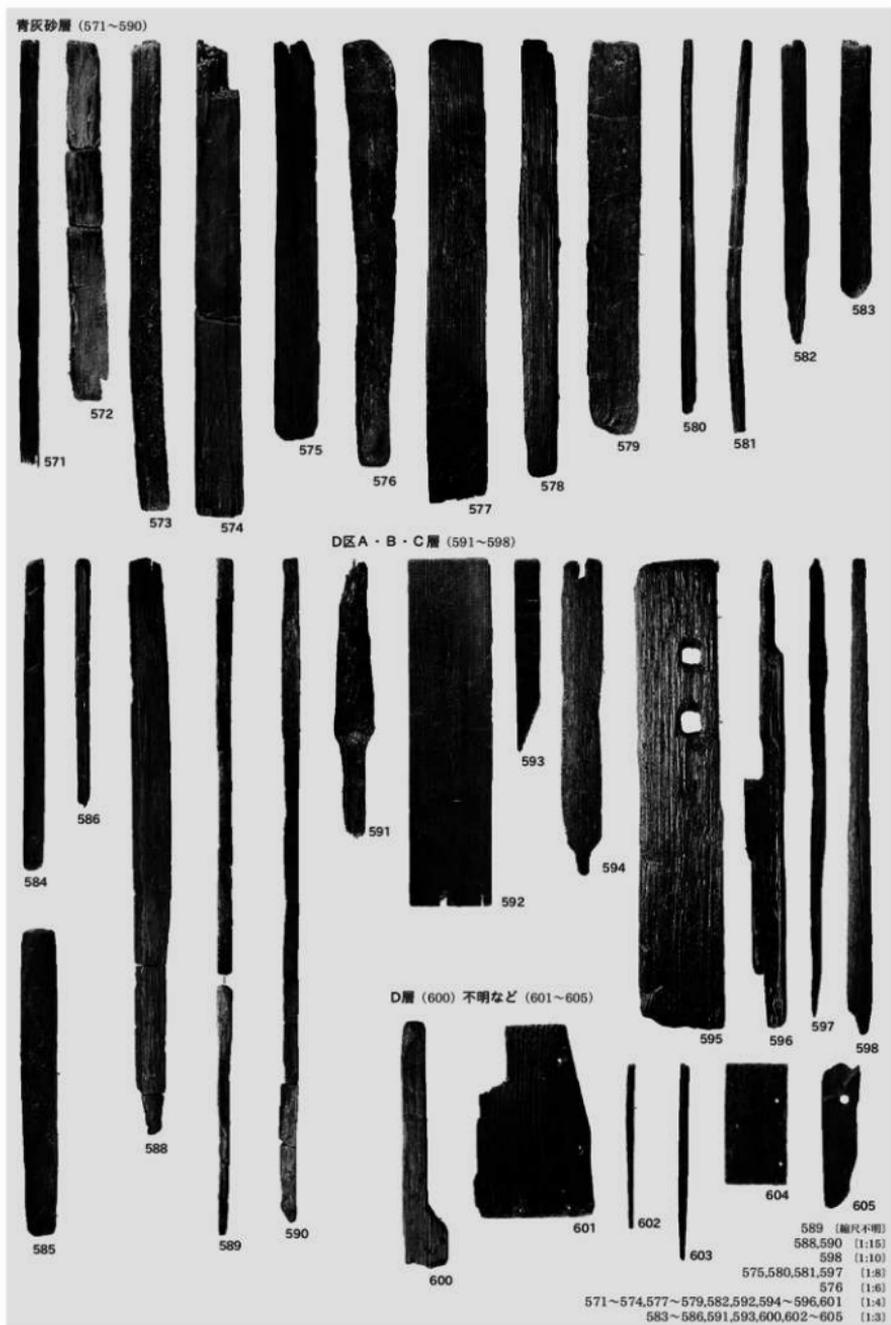


556 (1:10)

548, 549, 553 ~ 555, 557 (1:6)

538 ~ 547, 550 ~ 552, 558 ~ 562, 566 ~ 569 (1:4)

563 ~ 565, 570 (1:3)



不明など (599・606~613・615~625)



報告書抄録

ふりがな	だいふいせき に こだいからじょうもんじだいへん							
書名	大武遺跡Ⅱ (古代～縄文時代編)							
副書名	一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅳ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第249集							
編者名	春日貞実・加藤 学・坂上有紀 (財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団)、金原正子 (株式会社古墳地境研究所)、竹原広展、藤根 久・米田恭子 (株式会社パレオ・ラボ)、植田直見 (財団法人元興寺文化財研究所)、坂本 稔 (国立歴史民俗博物館)、水嶋正春・今村肇雄 (国立歴史民俗博物館 (当時))							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL. 0250 (25) 3981							
発行年月日	2014 (平成26) 年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	調査面積	調査原因	
大武遺跡	新潟県長岡市 島崎字大武1910 ほか	15202	1004	37° 35' 36"	138° 46' 21"	19940413～19941216 19950410～19951208 19960415～19961126 19970414～19971128	6,800 17,983 14,270 9,730 合計 48,783	一般国道116号 和島バイパス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
大武遺跡	遺物包含地	縄文時代前期 前葉	土坑2	土器 (布目式・新谷式)、土鈴、漆焼付土器、石器 (石鏃・石錐・石匙、磨製石斧・磨製石斧未成品、石錐・磨石類・石皿・台石・砥石・块状耳飾・滑石製玉類)、漆紐			土鈴・漆紐・滑石製玉類・磨製石斧製作資料 (縄文時代前期前葉)、琥珀原石・腕輪・斧柄・脚付盤、藍胎漆器 (縄文時代後期中葉～晩期中葉)、緑色凝灰岩製管玉製作資料・ヒスイ製勾玉製作資料・大陸磨製石器類 (弥生時代中期)、劍把・盾・弓・木製容器類・木製農具・斧柄・櫛・梯子 (古墳時代前期) などの出土遺物が注目される。	
	遺物包含地	縄文時代中期	土坑2	土器 (新保式・新崎式・大木9a式)				
	遺物包含地	縄文時代後期 中葉～縄文時代晩期前葉		土器 (加曾利B式・瘤付土器・大洞B式・大洞BC式・大洞C1式)、石器 (石鏃・石錐・石匙・磨製石斧・石錐・磨石類・石皿・台石・砥石・琥珀原石)、腕輪・斧柄・藍胎漆器				
	遺物包含地	弥生時代中期		土器 (南御山Ⅱ式・小松式・新諏訪Ⅲ式・栗林Ⅰ式・同Ⅱ式・川原町Ⅰ式)、石器 (石鏃・石錐・打製石斧・大型鋸方石斧・扁平方石斧・柱状方石斧・挿入柱状方石斧・石剣・緑色凝灰岩製管玉製作資料・ヒスイ製勾玉製作資料・石針・磨切具・彈車)				
	生産域	弥生時代後期 ～古墳時代後期	井戸1、土坑12、溝、水田跡、河道	土師器・須恵器・滑石製模造品・ガラス玉・木製品 (劍把・盾・武器型木製品・弓・高杯・櫛・櫓・櫓・浮子・楾・動・整件・田下駄・斧柄・梯子)				
	遺物包蔵地	古代 (8～9世紀)	木製品集中地点	土師器・須恵器・木製品 (曲物・円形板・下駄・浮子)				
要 約	縄文時代前期前葉から16世紀にかけて断続的に営まれた遺跡。埋没谷から当期の土器・石器・木製品などが断片的に出土した。特に縄文時代前期前葉・弥生時代中期・弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が多く出土している。建物跡は検出していないが、土坑・井戸・溝・水田跡を検出した。集落本体は調査区南西に位置する。「大武畑」と呼ばれていた微高地上に存在し、西側に接する奈良崎遺跡と関連しながら展開した可能性が高い。							

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第249集
一般国道116号和島バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

大武遺跡Ⅱ

2014 (平成26) 年3月28日印刷
2014 (平成26) 年3月31日発行

編集・発行

新潟県教育委員会

〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1

電話 025 (285) 5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1

電話 0250 (25) 3981

FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本

株式会社ハイングラフ

〒950-2022 新潟市西区小針1丁目11番8号

電話 025 (233) 0321

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第249集『大武遺跡Ⅱ』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	弥生時代 遺物	方刃石斧	片刃石斧
抄録	弥生時代 遺物	磨切具	撤切具